泡鳴全集

第二卷

目次

踏切番

一

夫婦は、その仲に初めて出來た――而も出來そこなつた――氣違ひの赤ん坊をそでない仕方で死なしてから、その在住地にゐたたまらなくなつた。

所天は、裁判書記の事務を取り扱つてゐる間にも、死んだ子の恨み聲を聽いたし、妻はまた所天と休んでゐる夢の中にも、その兒の遠く聽える泣き聲を離れることが出來なかつた。

初めは、それが世間に知れなかつたのに安心したが、その安心はまだ表面のことで――心の暗い底からは、死んだ子が復讐でもする樣に、『お前達の罪惡を發表してやるぞ』と叫ぶのである。

それが、自分達の迷ひであるのか、それとも、世間の人々がわが兒の亡靈にさうけしをかけるのか、どちらとも判斷がつかなくなつた。

思ひ出の多い土地に在住するからであると思つて、大阪を抜け出る樣にして立ち退き、當てもなく東京へ來たのはまだ夏のことである。

手輕く生活して行ける時候だから、所天は慣れもしない人力車を挽き、妻はボール箱を張るぐらゐのことで、僅かに裏店住ひは出來てゐた。

然し所天の毎日のかせぎ高は實に僅かなものだ。

『旦那、行きまひよか』と云ふ樣な、なまぬるい口調で向ふのだから、なか〳〵客がつかない。朝早くから辻々や廣い通りをから車を挽いてまはり、時々客にめぐり合つて、二三十錢を儲けて歸るには、夜遲くまでかかる。

そして歸れば、疲れ切つたからだを、殆ど全く何にも知らず、ぐツすり寢込んでしまう。

暗い心の底からの復讐を絕えず感ずるのは妻ばかりで、所天がかせぎに出た留守の間は、頻りにボール紙を張つて箱の形をこしらへながらも、その箱の中に卷煙草が這入るのだらうと思ふと、

『いや、さうやおまへん、お母さん』と、亡き兒の恨み聲が聽える樣な氣がする。そればかりなら、まだしも辛抱出來るが、その聲を聽きつけて、今にも、追ッ手のものが來るかの樣に思はれる。

何事をするにもあたりが憚かられて、そとなどへは滅多に出たことがない——呼吸するのが漸くのことで。

『もしいよ〳〵拘引されるとしても、自分ばかりでは心細い』と思ひ込むと、狹い露路に人の足おとがするのを、さア、探偵ではないかと、胸がわく〳〵することも度々だ。

そんな心配や恐れで、毎晩、獨りでは寢られない。所天が遲くなつて歸るのを、飛び立つ樣に出で迎へて、僅かにその恐れの半分を受け取つて貰ふ樣な氣になる。

　ふたりで枕についてから、妻がひそやかに、

『けふも始終赤兒の聲がしてました』と云ふと、所天はまたも聽きたくないと云ふ樣な顏つきをして、

『そないなことがあるもんか』

と、うち消してしまう。

　ただ氣休めに云ふのだとは知つてゐても、それが矢ッ張り多少の氣休めにはなつて、たツた四疊半一間の暗やみが、夫婦の唯一の隱れ家になつてゐるが、その隱れ家からも、妻は夢におびえ出すことがある。

『八重子！どうしたんや』

と、空しく寢床を探つた所天は、床から離れたところの上の方から妻の顫へる聲を聽いた。

『あんた、早うあかりをつけておくれやす――どこやらにあか兒が來てます。』

『しツ！』と、所天は制して見たが、それと同時に、大阪でのあのおそろしい夜の全景がやみに目の前に浮ぶ。

所天(きつと)もゾッと冷水をあびた樣に神經が引き立つて、急いでマッチを摺り、枕もとにある三分心のランプに火を點ずると、妻が顫へてつッ立つてゐるのが見える。眞ッ蒼な顏にも、あの夜の樣に、目がきよろ〳〵動いてゐる。

『どうしたんや』と、また云つては見たが、東京へ來てから、もう、二三度もあつたことで、妻のおびえた心持ちはよく分つてゐるので、ただやわらかにかき抱いて、もとの通り、おなじ寢床(ねどこ)へ入れてやる。そして火を吹き消さうとすると、

『まア、待つておくれやす、何となうこわうおまッさかい』と云ふ。

然し、所天(きつと)に取つては、ランプの光――その中でこッそり兇行をしたの――が却つて自分達の罪惡を思ひ起させる緒口(いとぐち)になるのである。

『暗い方が心配無いやないか？』

『あんたは何ともおもてやはらんさかい、なア』と、直ぐ恨み言だ。

『わしやとて』と、蒲團から出てゐる妻の肩を押へて、『あの時のことを思ふとこわいさかい、なア、明い寢部屋(ねべや)が厭なんや。』

『あんたも本眞(ほんま)にさうだッか』

と、念を押したが、不斷(ふだん)の樣子が女にばかり罪を着せて、男はその共犯(きようはん)を忘れてゐるかの樣に、亡き

見のことを云ひ出すのを避けてゐるので、何とたくたよりない樣な氣がする。
『お前やとて、さうだツしやろ』と云はれて、
『そりやさうやけど、なア、暗い夢の中も苦しゆおまッさかいなア――あんたは、いつも、死んだ樣に休みやはるけれど。』
『わしがよう眠るのは、仕事に疲れて來るからや――こないなことしてたら、一生浮ぶ瀨がないやろ、なア。』
『本眞にさうやーあんたの友達は皆段々ようなりまツしやろに、なア。』
『わしも考へてるのや、巡査にでもなりやア、まだ車挽きよりはええ。』
『けれど、なア、あんた』と、肩に當つてゐる所天の手を固く握つて、『こないなやくたいな仕事はやめにして、今度はいつも一緒に居れることをしておくれやす――毎日、毎日、あんたに離れてます間に、ひよツとわたしばかりが探偵にでも取られる氣がしてなりまへん。』
『何でそないなことが』と、所天は枕のままでわざと心強い樣に冷笑する。

二

然し妻の手足が段々痩せて來ると共に、その神經がますます高ぶつて行くのを、所天は感じないで

はゐられなくなつた。

妻の落つきのなくなつた目つきに接すると、罪惡の告白を迫る樣で、それがいやで、いやでたまらない。

いツそのこと、今一度、今度は、どこか妻のゐないところへ自分ばかりで逃亡しようかとも、男には考へられる。それには、どうせ、車挽なんかしてゐたツて、行く末何の役にも立たないと云ふ考へもつき添つてゐる。

然し、また、いざと云ふ決心はなか／＼出來かねる。表面はそでないふりをして、ただやわらかに妻の心をなだめながら、その日を送つてゐる。

かの女も亦所天のさう云ふけぶりを見たので、共犯罪に對する恨みがましいことは口に出さない樣にする。それが元で、とう／＼病みついてしまつた。別にどこが惡いと云ふわけでもないのに、ただからだが弱つて行くのである。

所天が枕もとに坐つて、妻の手を取つて見ると、元の樣な固ぶとりの肉はなくなつて、骨ばかりの樣な氣がする。

『しツかりしてくれよ』と云ふと、

『あんたさへ始終そばにおつておくれやしたら、こわいことはないさかい、なア』と答へる。

『身持ちになつたのか知らん、實際に』と、ひそかに考へて見ると、どうやらさうらしい點もある。然し所天は再び兒といふことを考へて見るさへおそろしいので、それについては進んで何も云はない。妻も亦一度だけ月の物が見えないと不審がつた切り、遠慮して、それ以上を云はない。

その心根を思ひやると、また可愛さうにもなるので、所天は仕事に出ないで、毎日介抱してゐると、然し、仕事の急しいので思ひ出すことがすくなかつたことが一時にむら／＼と思ひ出される。

そしてたま／＼、すや／＼眠つてゐる妻の瘠せ顔を見てゐると、その横あひからして、亡き兒のあざ笑ふ様な姿がぬッと生れて來るのを見た。

『あッ』と驚いた聲を耳にして、目をさましたものの顔には、飛び出た様な目がうろついて、まだ白狀しないのかと責める様だ。たまりかねて、

『わしは仕事に出る方がえゝやが、なア』と相談しかける。

『出んでもよろしい』と、固く手を握つて放さない。そしてきよと／＼した目には涙も出てゐる。

『然し、喰へん様になるやないか？』

『喰へん様なら、一緒に死んでしまひます。』

『阿呆云ふなよ――わしはまだ世の中に望みがある。巡査からでもえゝさかい、段々出世の道に登らにやならん。』

『わたしばかりに苦しい思ひをさせて、あんたが出世しやはツたかて、おもしろおまツか？』
『わしがよければ、お前もええやないか？』
『けれど、あんたは交番なり、何なりやに這入つて、自分を黒い外套に隱してたら、それで安心だツしやろけれど、なァ、わたしはいつ取られるか知れへん。』
『そないに心配するなよ。』
『するな云ふても、あきまへん——そばにをつておくれやす。』
かう云ふ話ばかりで、妻はなか〳〵所天を放さない。然し所天には、暗い壓迫のほかに、なほ生活の責任もある。それを思ふと、どうしていいのか、途方に暮れてしまう。
『どうせ、燒けや』となると、自分の憂さを臨時に忘れさせた酒が每日の樣になり、每日の酒の臭ひがまた朝も晩も絕えなくなる。
夫婦は、あの兇行をした翌日の樣に、晝間も戸を明けないでただ暗い中にただ抱き合つて寢てゐる樣になつた。
渠等の住ひは、新宿電車終點の車庫の横丁に當る長屋の一つであるが、人力車の持ち主からは俥を取りあげられるし、ボール箱問屋との緣も切れてしまう。その上、段々寒さには向いて來る。
『それでは困るだらうから』

と、長屋の人が八重子の枕もとに來て、八重子の所天に親切にも周旋しようと云ふのは、千駄ケ谷の或踏切の踏切番である。

「そりやええ、なア、いつでも一緒に居れるさかい」

と、妻は所天に久し振りの笑顏を見せる。

『何て、まア、亭主煩惱の人だらう』と、渠等の秘密を知らないものは思つたが、踏切番には餘り手數もかからないでなれる樣になる。妻もそれで多少の元氣が出た。

千駄ケ谷の細長い疎林に添ふて、甲武線の第何番かの踏切がある。そこに、また、巡査の交番ほどな番小屋がある。それに『勤務時間、午前五時より午後十二時。藤田義行』と書いた看板が出てからは、『仲のいい夫婦の踏切番』と云ふ評判がその界隈に高くなつた。

義行と八重子との間は實際に仲がよかつた。そして所天の仕事が仕事だけに、年中同じところを放れられないので、いつも一緒にゐられて、妻も亦その前よりは安心が出來、高ぶつた神經も段々落ちつく樣になり、からだと精神とにもとの勇氣も出て來たのである。

結婚してからまだ僅かに三年だが、それをもう十年も經つたかの樣に苦しかつた渠等は、再び新婚當時の如く若返つた。そして所天が食事をしたりする間ばかりに限らず、妻が代つて、通行どめのあけ下げをあやつりながら、ふたりで樂しげに相語つてゐることもあるので、通行人のうちには、それ

を羨ましげにじッと見てゐるのもある。

ところが、そんな時には、夫婦の心は同時に申し合せた様にどきつくのである。

『あッ！追ッ手がまはつて來たんやないやろか』と。

三

番小屋のそばに、またちひさな住ひが立つてゐる。それがまた火の見番の交替場を見た様で、その人道に向つた方には、晝間は、あぶら障子がはまつてゐる。

その障子を寒さうに出たり、這入つたりする妻の腹部が、人目にも、大きく見える様になつた。然しそれを見て、見ないふりをするのは却つてその所天である。

また、兒――氣違ひ――壓殺――こんな聯想に堪へられないので、間接には、高いところへ手を延ばすなとか、重い物を持つなとか云つて聽かせながらも、直接に胎兒のことに就ては、まだ一言も語つたことがない。

妻も亦所天のそぶりを當り前のことの樣に思ひ、おもてに出しては何の相談もしかけない。自分獨りで出産の時をおもんぱかり、ぼろ切れをおしめにつぎ合はせたり、ちひさい蒲團の用意をしたりなどしてゐる。

そのうちに、段々臨月に近づいて來たが、日が近づくに從つて、『今度生れる兒を可愛がれば、さきの兒に濟まんさかい』と云ふ樣な新らしい心配がきざして來た。

然し、或夕がた、がうッと云つて汽車のやつて來る樣な潮がさしたかと思ふと、苦しさに目も暗んで、女の身は二つになる。殆ど夢中ではあつたが、その汽車の音が亡き兒の怒りであつたかの樣な印象が、かの女の心には殘つた。で、

『ぎやア』と云ふ聲を初めて聽いた時、妻はその聲の主を見ないうちに、どこかへ逃げて行きたい樣な氣がした。

所天は、また、番小屋を夜の十二時にしまつて來た時、寢かされてゐる新兒を見て、

『男や、なア』と云つたばかりで、この兒に就いては他に何の言葉も發しない。そして妻をかへり見て、『あんたのからだを大事にしなはれ』と云ふ。

どうも、妻の樣子がをかしい。

その夜は勿論、翌日になつてからも、生れた兒を抱いて見ようともしないばかりでなく、その泣き聲をいやがる樣だ。そして電車や汽車ががうッと云つて通過するたんびに、身をぶる／＼顫はして、おそろしがり、

『富子が、富子が』と叫ぶ。

『そないにまで祟るのか、氣違ひであつた癖に』と、所天は新兒とその母との爲めに、さきの兒を憎まないではゐられなくなる。そして渠には亦電車と富子とが聯想のうちに一つになつて來て、鐵道の上にがうツと云ふ響きが近づくと、その本體は富子の亡靈である樣に見える。

夫婦とも人には云はれない恐怖病にかかつて、現在のあかん坊をどうしていいのか分らなくなる。お互ひに心のうちでは可愛いに相違ないとは思つてゐるが、もしそれを口に出して云ひ合つたら、直ぐ聽きつけて、殺された兒の靈が一しほあばれ出して、ついにはふたりの舊惡露顯に及ぶかも知れない。それがまた最もおそろしいのである。

『おぎやア、おぎやア』と泣いてゐる兒に頰ずりするのも、互ひに夫婦の一方が見えない時ばかりで、ふたり揃つた時は、

『困る、なア――困る、なア』とばかり。ただ申しわけに抱きあげてやつたり、おしめを取り替へてやつたりする。

可哀さうなのは、出ない乳を無理に吞ましてゐることで、たま〳〵牛乳などを買つてやつても、充分にと云へる暮し向きではない。

生れ立ての兒がそのまま母の樣に痩せて行くのを見て、氣の毒に思ひ、呉れるなら貰つてやらうと云ふ物好きた、かみさんがあつたので、夫婦は相談の上、喜んでその人に委すことにした。

四

然し、それからと云ふもの、それまでは通行人に最も多くの便利を與へ、最も忠實な注意を與へてゐた踏切番が、通行人に對して大變冷酷な樣になつて、汽車か電車の響きがすると、まだその影も見えないのに、握つたあげさげをおろす。

餘りのん氣過ぎ、餘り不便利なやり方をすると思ふ人が、からかひ半分に、おろされた棒をくゞつて行くと、

『急いで、急いで！』と叱りつけ、既に車臺に引かれでもしたかの樣に、『あぶないやないか』と、鐵道を向ふに横切つて行く後ろ姿に向つて、燃える樣なまなこを放つ。

それから、自分は、その附近の疎林を冥想のうちに浮べでもする樣に、じツと目をつぶつてしまうが、さて、響いて來る電車なり、汽車なりがいよ〳〵通過する時は、眞ッ青な顏の額に、太い靑すぢを二つ立てて、目をつぶつたまゝ、からだをぶるぶる顫はせるのである。

――（明治四十三年十一月）――

斷橋

この作は『放浪』と同時に（明治四十三年）書き上げられたものである。そしてその翌年一月每日電報（後に合併した、東京日日新聞に掲載された。これが單本は、大正八年『泡鳴五部作』の一として再刊されたものによる。從つて、原形からは可なり改作されて、原形『放浪』の終りの方がこの『斷橋』の初まりに入れられ、後者原形の終りの方が、また『憑き物』の初めになつてゐることを斷わつておく。

編者識す

一

今夜も必らず來るからと、今度はよく念を押して置いた。然し、餘り自分ばかりで行くのもかの女並びにその家へきまりが惡い樣だから、義雄は今一文なしで困つてゐる氷峰をつれて行つてやらうといふ氣になり、薄野からの歸り足をまた渠の下宿へ向けた。

いつもの通り、案内なしであがつて行き、氷峰の二階の室のふすまを明けると、渠とお鈴とがびツくりして、ひらき直つた。お鈴はまた裁縫に行く時間をごまかし、氷峰のもとへ押しかけて來て、何かあまへてゐたところであつたらしい。

『こりやア失敬した、ね』と云つて、義雄が這入つて行き、早速飯を云ひつける樣に賴んだ。

『また、ゆふべも御出馬か』と、氷峰が冷かす。

『今夜は一緒に行かう。』

『よからう。』氷峰も義雄と同じ樣にねむさうな樣子だ。お鈴は、今まで赤らめてゐたその顏へ急に不

平らしい色を加へて、渠をちらと見た。
『お鈴さん、さう燒かなくツてもいいぢやアないか、ね？』
『わたしやそんなこと知らない、わ。』かの女は耻かしさうに笑ひながら云ふ。
『それでも、君』と、氷峰はにこつきながら『とう〳〵結婚することだけは僕も承諾したよ。』
『あら、そんなこと云はないでも――』
『云つたツてかまはないぢやアないか？』義雄はからかひ半分に『僕があなたの邪魔をするぢやアなし、さ。お鈴さん、とう〳〵成功した、ね。』
　お鈴は再び顏を赤くした。そして、坐に堪へられなくなつたかの樣に、あわただしく歸つてしまつた、
『きのふ、實は承諾を與へたのぢやが、あいつ、おほ喜び、さ。』かう云つて、氷峰は、きのふ、お鈴の兄龜一郎が泣き附くやうに頻りに懇願したので決つたこと。その兄弟等は妹の棄て場を得て、喜んでゐるだらうと云ふこと。然し自分の樣なづぼらのものには、器量や學問より、經濟向きの天才あるものを妻とする必要があること。その點はかの女の兄弟も確かに誇りとして保證してゐること。その話の進行の爲め、あす、山に行つて、自分の兄と相談して來るつもりであること。などを、語つた。
且、この長い間解決のつかなかつた問題が解決した喜びに、お鈴の兄の龜一郎が不斷の謹直にも似ず、

當だといふことを承知してゐた。で、普通の建築材並びに板などとして出すのに、樺太の方の事情は、この返事に自分の實際の見聞と調査とを加へて大抵の標準が附いた。

それに、運賃の多くかからない法も考へてあるし、北海道のこの種の木材の事情は、お鈴の弟、原口鶴次郎から調べて貰つてある。鶴次郎は年が若いにも拘はらず某木材會社の手腕家であつたが、餘り放蕩をするので、近頃、剩員淘汰と共にやめられた男だ。實業雜誌の初號にも北海道木材のことを書いたくらゐで、その方の智識は先づ信用出來ると、義雄は思つてゐるのだ。

義雄には、また、古くからの知人、寧ろ先輩で、石炭に關係してゐるものが一人東京にある。渠は、その人とは、曾て西貢米輸入――失敗であつたが――を計畫した時にもあひ棒であつた。そこから資本を調達させて、木材屋をやらうといふのである。

それへ詳しく書いた計畫を送つたが、その手紙の意味は勇夫婦に何とも話さなかつた。と云ふのは、渠等に對して義雄が隔意を持つて來たばかりではない。云つて置いて、また駄目であつたら、渠等の笑ひの種を增してやるばかりであるからだ。

かう思つて、義雄は長くゐればゐるほど冷やかになつて行く自分と勇との友情のたよりないのをおぼえた。氷峰、その他は近頃になつて知り合つた人々だから、若し冷淡になつても、當り前だとも思はれる。然し二十年來、たとへ淡くあつたとは云へ、同窓であり、同信仰であり、同背信者であり、

同僚であり、離れてゐても、音信を絶やさなかつた友人同志が、却つて實際に接近した爲めにその友情の冷やかになつて行くのは、自分に關係が薄いからである。
そして、自分に關係の薄いものは、義雄の主張する哲理上、やがて自分の宇宙その物からも消えてしまうのだと思ふ。

然し冷やかになつて行くのは、この友情ばかりではない。
札幌に着いた當座は、羽織を脫いでも暑くツて仕やうがなかつた盛夏が、早や、いつのまにか過ぎ去つて、秋の風らしいのが吹き出してゐる。
義雄は放浪の爲めに心を奪はれ、また、この數日間は、女に熱くなつてゐるので、そんなことには無頓着であつたが、けふ、初めて單物では如何にも寒いのに氣がついた。
そして、義雄が銘仙の單へを袷せにすることを頼みに、近處の仕立物をする婆アさんの家へ行く時、お綱が門そとで百姓馬子から青物を買つてゐるのに注意すると、馬の脊の荷には、もう、茄子、胡瓜などは全くなくなつて、おびただしかつた甜瓜、唐もろこし、林檎なども――高くなつたのであらう――甚だ少い。その代り、北海道の栗とも云ふべき胡桃やココア(ココのなまりだ)が這入つてゐる。
『ココア、ココア』と、細い優しい聲をして、一人の婆アさんがココの實を籠に入れて賣りに來たの

で、札幌の秋にはいい聯想だと思つて、義雄はそれを買つて見た。

栗がまだ故鄕にゐた時、姉や友達につれられて、山へ椎の實を拾ひに行つたことが度々あるが、その椎の實の味を思ひ出す樣な味がする。そして、有馬の子供にも與へたのを、栗等がちいさい手でその皮を彈じき取り、その中身をうまさうに喰つてゐる樣子を見て、義雄も自分の子供であつた無邪氣の時代のことを思ひ浮べた。

その時代と今とは丸で考へが違つてゐる。考へが違ふばかりでなく、人間その物も丸で違つてゐる。かう思ふと、その間に出沒現滅した種々複雜な事件と經驗とが一時に目の前に集つて來る樣だ。

椎とココア——故鄕と札幌——秋と云ふ引き締つた感じが一刹那に強烈になつて來ると、然し、自分は、どうしても、生々複雜な自然界、東京といふ酒色と奮闘との都に育つた人間であつて、吞氣な、消極的天然の廣がる世界にぐづ／＼放浪してゐるべきではないと思はれる。そして、かのストリンドベルヒが考へてゐる『成り行きが運命』といふ樣な消極的、死滅的放浪の程度では滿足出來ない自分であるを感ずる。

『冷やか味を感じて來たのは、これが第一の原因だらう。』かう思ふと、種々苦心して考へ出す大小の計畫もまことに空疎なものになつて、自分で自分をあざむいてゐる樣な氣がする。そして、あの敷島と一緒にゐる時だけが、まだしも、自分の最も活氣がある時だと考へられる。

『早くかの女に行くに限る！』心でかう叫んで、家を出ようとすると、
『また行くのだらうが――』勇は心配さうにして、『さう使つてしまつては、あとで困りはしないか？』
『そのかわせだけは』と、お綱さんも口を出し、『わたしが預つて置きましよう。』
『その方が君の爲めにいいよ』と、勇がすすめるにまかせ、
『ぢやア、これは』と、義雄は原稿料のかわせをお綱に渡し、『どうせ、あなたの方にも食料を出さなければならないのだから、そツくりあげることにして置きます。』
かう云つて、義雄は渠等に對する肩みが多少廣くなつたのをおぼえた。渠は渠等に世話になるのを氣の毒といふことは知つてゐながら、來た金を先づ渠等に拂ふ義務があるのを忘れてゐたのだ。

二

夜が近づいたので、義雄が氷峰を誘ひに行くと、原口鶴次郎と共に晩酌をやつてゐた。
『お鈴さんもいよ／＼』と、渠は鶴次郎に向つて云ふ、『決つたさうです、ね。』
『あれも實は厄介拂ひをしたのです。』鶴次郎は義雄に猪口をさしながら、『さう云ふと、島田君に氣まづい様に聽えますが、島田君にも正直に話した通り、こちらの厄介物が島田君の爲めに少しは取り柄があるのだから、まア、おほ目に見て、五分五分に考へて貰ふの、さ。』

氷峰は酒で赤くなつた顏をただにこ〳〵させてゐる。そして、
『この原口君もつれて行からうぢやないか』と云ふ。
『よからう』と云つて、義雄は鶴次郎に豬口を返す。
『僕は酒もその方も好きだから』と、鶴次郎は年に似合はず、他の年うへな二人よりも酒の行けるのが自慢であつた。
渠の額には、燒けどうの大きな跡が赤く殘つてゐる。それを氣にしてか、奇麗に分けた髮の端をその上にかぶせて、その半ばを隱してある。それが却つて初めて見る人の目に立つた。
義雄は鶴次郎に樺太から來た返事を見せ、渠から、木材をいよ〳〵切り出すとなつた時の用意などをその返事に照らして種々注意せられた後、氷峰と鶴次郎とを案內して、井桁樓へ行つた。そして、通氣取りで裏門から這入り、奥二階へあがると、番頭は階段ぎはの西洋間へ三人を入れた。疊の上に住卓一つしかない殺風景な室だ。義雄の考へでは、けさ、あれだけ云つて置いたから、直ぐ敷島の部屋へ這入れるものと思つてゐた。氷峰等も亦そのつもりであつた。
むツと忿怒の氣が義雄のあたまにのぼつた。そして、やツぱり女郎は女郎だと思ふと、わざと思ひ切つて、高砂樓かその他へ行きたくなつた。
『僕ア今夜に限りまわし部屋はいやだぞ。』義雄はのぼせた樣な顏いろを無頓着な態度にまぎらしなが

ら、番頭につぶやく。

『どうも、生憎ふさがつてをりますので』と、番頭はもみ手をする。

『けさから、さう云つて置いたぢやアないか？』

『それならさうと承知してをりますと、番頭の方ではお待ち申す手筈に致して置きますが——敷島さんが何ともお話がなかつたので——』

　さう聽いて、義雄は一しほ女の不都合なのを感じた。氷峰等もこちらの鼻息が餘り荒いのを悟つたらしく、

『それでは、出よう』と、立ちあがる。

『歸らう！』義雄も帽子をかぶる。

『まア、ちよツとお待ち下さい。』番頭が立ち去る跡を、三人はぞろ〳〵出る。然し義雄はまだ未練があるので、一番あとに出たのだ。

　すると、番頭の注意を受けた敷島が急いでやつて來て、階段の手摺りに添ふた廊下で義雄をくひ止め、

『來たの？』無邪氣さうに、紅の這入つてゐない友禪縮緬に包まれたからだをひツたり義雄に添はせ

た。そして、左りの手を手招りに當てて、醉つてゐる體をささへる。

　女の息は非常に酒臭い。

『來たのぢアない、歸るのだ！』

『どうして？』

『………』こちらをえぐるやうにあまへた樣子だが、とぼけてゐるのだらうと見たので『どうしてもない、さ、おさしつかへだ。』

『あなたが餘り遲いからだ、わ――もう、來ないと思つて――』

『無論、もう、來やアしない』と、今夜に限らず、永久にといふ決心の籠つた強い調子だ。

『ぢやア、歸るの？』かう云つた言葉は輕く出た樣であつたが、その聲は顫へてゐた。こちらはかの女のふるへ聲を感じただけ、反對に一層恨みがましい不平を以つて猛烈に見つめたので、女は目ではそれを見返しつつからだをかはした。そして、

『ああ！』と歎息して、ちよツと兩手を目に當てたが、あとは手もち無沙汰のやうに無言で義雄の跡に從いて來る。

『………』男も無言で而もあとを向かない。

　下廊下をとほつて、裏玄關のおり口まで來た時、

『では、さよなら』と、女は土間へは降りないで挨拶する。

『…………』義雄はそれをふり向きもしないでがらす戸を明け、氷峰等のあとを追つて行きかけたが、かうして出て行くのを女がそのままに何ともしないなら、それまでのことだと思ふ。

然し友人等に對して餘り面目ない樣な氣がすると同時に、女もけさまでの樣子とはうつて變つて、餘り冷淡だといふ不平が伴つて來る。その不面目と不平とが、自分の身づから警戒しながらも知らず識らず落ち入つた實際の戀らしいのを呪ふのだ。然し、『遊女に自分の戀を受ける資格はない。』から考へて自分で自分を慰めながら、裏門を出た。そして、どこへ行かうか、かしこへ行かうかと、取りとめのつかない相談をしてゐると、

『あなた――あなた、ちよツと。』敷島が門外へ來て義雄を呼ぶのだ。

『それだ』と、渠は心では飛びつく樣に喜びながらも、無言で、澁々らしく振り向く。

風にそよぐ柳の枝葉に月の光が映じて、その下にしよんぼり優しい影を投げて、友禪縮緬の顏へてゐさうに立つてゐる女の顏も、色電氣を浴びた如く青白い樣に見える。敷島は義雄を門内に呼び入れ、

『遊んで行つたらいいぢやありませんか？――折角、お友達も來てゐるのに』と、訴へる樣に云ふ。

『然し』と、義雄は冷淡をよそほひ、『お前が人を馬鹿にしてゐるから、ねえ。』

『生憎で、それは仕かたがないとして、さ。』

『實際、仕かたがなかつたのぢやアない――承知してゐながら、部屋を塞げたんだ。』

『さう？――では、どうしても歸るの？』女は身を跡へ引く。それがこちらには熱心の不足からと見えたので、

『知れたこツた』と、何だか云はなければならない樣に思つた。

『ぢやア、花子さんのところへ行くのでしよう。』女の聲は恨めしさうにも聽えた。花子とは高砂樓にゐる義雄のなじみだ。渠は、敷島をからかふ度每に、その子の方がずツと自分に乘り氣だといふ樣なことを語つた。そして、敷島は、每日暇さへあれば行く裁縫の師匠のもとで、花子にも會ふからよく話をするが、かう〳〵云ふ顏かたちの女だらうと、義雄に說明して聽かせたこともある。

『さう、さ。』斯う義雄の今の語勢が云はせたが、渠は決して實際に花子のところへは行きたくない。花子ばかりではない、敷島を知つてからは、他の知不知のどこへでも行きたくないのだ。

氷峰等は、義雄のぐづ〳〵してゐるのを見て、再び門を這入つて來て、自分等は別にどこといふ目的があるわけでないのだから、君さへよければ、ここに決めよう。一度這入つて、出たのは氣の毒でもあるから、と云ひ出す。

『どうぞ、さうして下さいよ。さうでないと、わたしも朋輩に顏が合はしにくいから。』

『ぢやア、もとへだ』と、義雄も景氣づいて答へる。
『もとへ、もとへ』と、氷峰と鶴次郎とは女と共に聲を揚げながらあがつて行つた。然し義雄には、それが自分に對する侮蔑の口眞似とも受け取れた。

氷峰が義雄を初めてここへ連れて來た時買つた女のちいさい部屋へ、皆が先づ通された。そこで鶴次郎の相方も決まり、男三名、女三名、都合六名の酒盛りとなつた。

氷峰は黄いろい聲でしやべる。鶴次郎は太い聲で浪花節をうなる。そのそれ〴〵の女も上手に相手をしてゐる。然し義雄は敷島に對して普通よりも深くなつてゐるだけ、どことなく、却つて今のいさかひの隔てが出來た様に感じられる。

猪口のやり取りは、ほかの女らに對する面目もあるから、親しさうにやつてゐたが、話をすると、どこか角が立つのだ、それを融和するつもりでもあらう、氷峰は敷島の顔を見つめてゐたあげく、
『なるほど、君はよく見ると美人の方ぢや、わい』と云ふ。
『はい〳〵、美人ですとも、札幌一の』と、敷島は初めてにこついた。
『わたしは、それで、日本一よ』と、氷峰のが茶化す。
『それはさうと、敷島さんは』と、鶴次郎のが云ふ、『今晩、どうかしてるよ。』
『飲み過ぎ、さ』と、氷峰のも云ひ添へる。『晝間からつづいてるのだもの。』

『どうせ、燒け酒、さ。』敷島はほうり投げた樣に云つて、義雄を見たが、直ぐ目をそらし、『歸つて呉れいて賴むお客は、いくら賴んでも飮んでゐるし、さ、とまれと云ふ人はとまらないで歸りかけるし、さ。』

『でも、それだけ全盛なら、えいぢやないか？』これは鶴次郎の相手の言葉だ。

『かうなると、繁盛ばかりが面白いわけではないと思ふよ。』かう云つた敷島は澄まし込んでゐる。

『たまには、色男さんにも來て貰ひたいと、さ。』これは氷峰の女のだ。

『田村君も』と、氷峰が口を出し、『もう、色男になりましたのか、なア、樺太からの舞ひ戻りの癖に。』

『そして、もう、悋氣喧嘩をやり出した』と、鶴次郎が云ひ添へる。

『そんなことを云ふのア却つて野暮だ、よし給へ。』義雄は一向浮かないが、こんなところで本氣に不愉快がつてゐる心の中を見透かされるのも厭さに、敷島を促して、『おい、この婆アさん、唄でも歌へや。』

『そんな重寶なわたしでは御座りませんよ』と、かの女は笑つて見せる。

　義雄は申しわけに鶴次郎と一緒にへたの端唄や都々逸を歌つたが、實際の氣分は重苦しいので、それを醉ひにまぎらし、

『ああ、醉つた』と、横になり、兩足を敷島の膝にのせ、じッと女を見つめたがら、
『馬鹿だ、なア、おまへは』と云ふ。
『どうせ、馬鹿ですよ。』女も渠を見返す。
『醉つたのなら、君等はどこへでも行き給へ。』氷峰は義雄等を立たせて、『僕はこの部屋が地獄の落ちつきどころぢや。』
『緣喜でもないことを云ふの、ね。』
氷峰の相方の聲を跡に聽き殘して、義雄は敷島の手に引かれて廊下へ出た。そして、初めて自分等二人だけになつたので、女を廊下の電燈のもとに睨みつけて、
『馬鹿野郎！』一と聲、強く浴びせかけたつもりだが、さう強くは出なかつた。女はつらさうに見えるほどじッと見つめたが、ただ默つて行かうとする。
　すると、横あひの誰れかの部屋から、
『何だと、畜生！』かう叫んで、大の男が飛び出して來た。
　二人は驚いたが、男の跡からまた女が出て來た。
『あんたのことぢやアないよ』と云つて、再び抱き込んでしまつた。男の足はよろよろしてゐた。
『全體・どうしたんだ』と、義雄が初めて尋常な問ひを發した。

『あなたが』と、敷島は笑ひながら、『馬鹿野郎と云つたから、さ。』
『さうか？』渠も吹き出して、『馬鹿女郎と云へばよかつたんだ。』
『何も、そんなことは云はんでもよろしい――直きに人を馬鹿とか、意久地なしとか、畜生とか云ふけれど、わたしだツて』と、女は義雄の手をしかと握り詰め、『氣が氣でないよ。』
『そりやア、おれの方から云ふ言葉だらう。』渠は女と目を見合はす。
『では、云つて御覽』と、手を離す。
『僕でも矢ツ張り恥かしいぢやないか』と、今度は義雄の方から女の肩に手をかける。
そして、さツきちよツと這入つて出た西洋間の、食卓を片寄せて、電燈の眞下に床を延べてある室へ這入つた。

三

『向ふはいつから來てゐるんだ』と、これは茶を飲みながらの話だ。
『晝間からよ。』
『晝間から？ぢやア、お前がさツき云つたのとは違ふ。』
『どうして、さ？』

『どうしてもあるもんか、お前はおれを待つてゐても來ないから、他の客を入れたと云つたぢやアないか？』かう云つて、義雄は今、氷峰の女の部屋で、女どもが向ふの飲み客の話をしたのを思ひ合せ、この女がその場のがれのうそを語つたのを、女の爲めに、非常の不信用の樣に考へた。そして、女が、

『それはさうであつたけれど、本當は、あなたの來る頃までと云つて置いたのに、誰れかいい人を待つてるからだらうと、矢鱈にお酒を飲んで動かないの』と辯解する。

『それもまたうそなのだらう。』そして、女の本部屋で、三味太皷の音や唄の聲が賑やかにしてゐるのが、癪にさわつて仕やうがない。

『そんなことはどうでも、さ、來て呉れたら本望ぢやないか』と、女が云ふのも信じないで、

『お前に取つちやア、客が一人でも殖ゑさへすりやア本望だらう——僕はそんなことを云ふんぢやアない。』

『わたしが濟まんことをしたのが惡かつたの、ね、許して頂戴。——直き來るから、おとなしくして——』

『おい、待てよ。』義雄は女のそツけなく立ちあがつたのを引きとめた。然し、今少し詰責してやらうと思ひかまへてゐる鼻さきを、このそツけ無さにうち折られたので、がツかり力ぬけがした。そして、

醉ひにまかせて、火鉢のそばに倒れ、自分の肱まくらをしながら、女の顏をわざと細目にした目で見つめて、『そんなに向ふの男が可愛いのか？』

『可愛いのは、ね』と、女は義雄の胸のそばに來て坐わり込み、『あなたばかりよ。』渠の胸を片手で押さへて、渠の顏のそばへ自分の顏を持つて來た。

『よせ』と、然し、渠はそれを押しのけた。女の仕ぐさをも冷やかに見て、眞實だとは受け取らなかつたからである。

女の目には一二滴、涙が出て、夜露の樣に電燈の光にきらめいたのがこちらに見えたが、かの女が指をそろへて立てた兩手をそこへ當てたかと思ふと、直ぐその露は見えなくなつた。

『どうせ、もう、今晩切り來ないつもりだらう――』と云ひながら、女がまた立ちかけるのを押さへて、義雄は、

『おい、どんな人なんだ、向ふのお客は？』

女は正直に語つた――山から來た客で、停車場から直ぐ手荷物まで持ち込んであること。ここを宿にして、用足しをしてゐること。晝間から飲んでゐて、もう、二三十本平らげたこと。自分がつきッ切りは面倒だから、藝者を呼ばしてあること。そんな仕拂ひは、すべて自分も割り前が取れるから、いい客だといふこと。このゆふ方には歸つて貰ふつもりであつたが、義雄に對する意氣張りで、わざ

と飲みつづけてゐること。などを、うち明けた。
『そりや面白い、おれもこれから一つその向ふを張らうか？』義雄は自分で自分のからだを引き起したが、言葉だけの意氣込みは實際にはなかつたのだ。
『無駄だから、およしなさい。』かの女は向ふで不時の割り前を澤山取れるから、あなたにはさう使はせたくないと云つたが、それが却つて、義雄には、氣に入らないのだ。自分を邪魔にして早く寢かせて置かうとするのだと取つた。それに、また、
『ゆふべからとまつてゐるのだらう』と、口に出してしまうと、どうしても、さうだと白狀させたくなつて來る。女は段々問ひつめられても、
『いいえ、違ひます』の一天張りだ。
『ぢやア、もう、どちらでもいい――うるさい！』
『うるさいのはあなたの方でしよう――？』
『だから、もう』と、燒けッ腹になつて、『行け、行け！』低い而も強い調子で命令してから、にらみ付けて『馬鹿！』
『さう憎けりやア行きます、わ』と、立ちあがつたが、そのままには行きかねたやうに、こちらに寢

卷きを着かへさせて呉れてから、

『ちやア、待つてて、ね。』念を押して、女は出て行つた。その時、また、指を揃へた兩手を目に當てたが、義雄はそれをかの女の辭と見て、必らずしも泣きをまぎらせる爲めではあるまいと思ふ。

　そのあとへ鶴次郎の女が來て、障子を明けたところで、辭をかけたので、義雄は仰向けに寢てゐた首をあげると、その女が云ふには、

『どうかしましたか？』

『何を？』

『先刻はほかのお客と喧嘩らしかつたので――』

『ああ、あれか？――何でもなかつた。』

『では、安心ですけれど』と云つて、それは立ち去つた。

　義雄が首を下して獨り考へて見ると、向ふの客は自分に對して、見ず知らずの辭に、大分確執を持つてゐるらしい。それが敷島の朋輩どもにも分つてゐるから、先刻の樣な醉ッ拂ひに喧嘩を吹きかけられたのをも、かげでは、その客が飛び出して來たのかと心配したのかも知れないと思ふ。

『馬鹿々々しい！』自分で自分に云つては見たが、敷島の部屋では、まだ三味や太皷の音がしてゐる。客は自分で太皷を打ちながら歌つてゐるらしい。藝者の笑ひらしいのも聽える。時々、敷島の意氣な

歌聲もする。そして、客が何か云ふと、かの女と藝者とのどッと笑ふもろ聲もする。
『淺薄な奴等は仕やうがない。』心で耳を塞ぐ樣に努めてゐても、參禪の座でまだ悟りといふ一種の催眠狀態に向はない心に世の有象無象が現はれて來る樣に、三味線の撥、太鼓の棒、客の顏、藝者の口つき、おいらんの膝などが氣になつて眠られない。
心は渠等と一緒に敷島の部屋にゐて、渠等と一緒に浮れ出してゐたのだらう。渠等の太鼓入りの唄ごゑにつれて、自分も浮れた唄を歌つてゐる。そして、自分が樺太で騷いだ時、度々親みのあつた唄などが出ると、床の中にだらけたまま、別々に投げ出された手や足までが、一樣に生氣づいて來て、『あ、こりや／＼』と、踊り出しさうだ。
それが、義雄には、如何にも悲痛で、悲痛で溜らない。必らずしも自分の失敗や、不如意や、本氣の戀の成就しないことやが、直接の原因ではないと思ふ。渠は現實の內容を最も充實的に握ると云はれる刹那主義の現在主義、生々主義である。
渠の考へでは、自己と刹那とを離れたものはすべて無能力の過去――空だ。そして自分の失敗は、もう過ぎ去つてゐるから、空だ。今の戀も亦、過ぎ去りかけてゐるから、もう、半ば空だ。
然し、さういふ樣に空々になる經驗を背景として、その當り、刹那の生氣を全身に感じて來ると、智、情、意の區別ある取り扱ひが行はれなくなつてしまつて、無區別な瞑想場裏に、手足の神經と腹

の神經とあたまの神經とが、一致して、兎角空理に安んじ易い思索を具體化し、自己といふ物を育勵現實力の幻影にする。

　その幻影が義雄の生命だ。それさへ握つてゐれば、渠は決して、人の所謂世界に對して、頓悟、漸覺、理想だの、無理想だのと云はない。人の所謂社會に對して道德だの、不道德だのと云はない。その代り、渠は孤獨の自己として自己の悲痛を食はざるを得ないのだ。

　その糧が、今は、乃ち、敷島に對して殘つてゐる戀だ。三味、太鼓の音だ。身づから踊り出したい樣な空氣だ。かういふものがすべて自己といふ蛸の手足で、それを義雄は喰ふよりほかに道がない。面白い樣な而も悲痛慘憺の自己を手足のさきまで感じて、渠は涙にむせびかけた。

　そして、三味や太鼓の音が絕えて、今度は女のひそ〳〵話の聲が聽えると、何を語つてゐるのかと、渠は身を起して耳を澄ます。そして、それに男の太い聲がまじると、がツかりした樣にまた身を仰向けに横たへる。

　渠はこんなに鋭敏に全身の努力を出したことは稀れなのだ。

　そして、人の聲もぱツたりやむと、どこかの部屋から時計のねむたさうな音が聽えたばかりで、一樓中は全く、疲れてしまつたかの樣に、しんと靜まつた。

　この疲勞の靜肅の間にも、然し、義雄の心には三味や太鼓、手や足の合奏が聽える。敷島部屋の賑

ひがそツくり自分の部屋へ移つて來たやうに――

『とん、とん〳〵。』

『ちやん、ちやん〳〵ちやん。』

『は、どん〳〵。』

『こりや〳〵。』

そして、その歌までが繰り返される。

渠の神經は非常に興奮してゐるのだ。三味線の撥、太鼓の棒までが醉ツ拂つて踊り出す。すると、その撥が自分の手となり、その棒が自分の足となり、その手足がまた自分の體をゆり起して、藝者やおいらんの居眠りをしてゐるうへへ自分をつツ立たしめる。

渠は、自己の靈が拔け出したのだらうと、身づからそれに見入つてゐると それが山から來た客の姿らしくも見える。

『畜生！』から叫んで見たが、その瞬間に、渠ばかりではない、自分も亦畜生の本能を發揮するに於いて、何の憚るところもない人間だと氣がつく。自分が考へてる刹那主義の最も具體的な悲痛哲理に據らなければならないのだが、それに據つた無飾の本能を人間が獨りおほびらに押し通すところに、眞の努力、勇氣、奮鬪、誠實、戀と生命とがあるのだと思ふ。

この時、廊下に、草履の音がばた〳〵して來た。

『敷島ではないか』と、耳をそば立てたが、その音は通り過ぎて、おもて二階の方へ遠く、死に行くものの如く消えてしまつた。

また草履の音が二度も聽えたが、いづれも自分には關係がない。

敷島の部屋からは、また女同志らしいひそ〳〵話が起る。然し男の聲はしない。

『もう、醉ひつぶれてゐるのだらう』と思ふ。

やがて、そこの障子が明いて、廊下へ出た女が敷島と藝者とらしかつたが、疲れ切つてるらしい低い投げ出す樣な聲が聽えただけで、ばた〳〵とどこへか分れてしまつた。

時計も疲れた音で二時を打つかと思ふと、また、別なのが跡もどりした樣に一時を打つ。また、やがて、三つの音が數へられる樣になる。

實際何時だか分らない。義雄が自分の時計を出して見ると、卷くのを忘れてゐたので、それはとまつてゐる。何となく、むしやくしやするところであつたから、それをつかんで、

『この寢ぼけ野郎！』と叫んで、よこに投げつけた。

手水場へ行つて、その行き來に、階段のおり口の手すりぎはから、敷島の部屋を注意すると、あの

屛風が立てまわされてゐるのだらう、その影らしいのが障子に映つてゐて、あかるいところは上の方少しばかりだ。ささやき聲がしてゐるか、どうか、それまで聽き取れるところへは近づかなかつた。

また、仰向けに床へ這入る。

あたまは重く、目は落ち窪んだ樣な氣がするが、冴えた神經が自分を眠らせて吳れない。あちらの部屋や、ゆふべの部屋にある樣な簞笥もなく、茶簞笥もなく、また屛風もない。たださへだだッ廣い室が、人待ち遠しい心には、なほ更ら徒らにだだッ廣い樣に見える。そして、廊下のばた〳〵が聽えて來るたんびに、それかとばかり氣がじれて、ます〳〵神經の過敏を來たす。

からだは空しく疲れるばかりで、自分のたわいのないむづがゆい樣な氣持ちが、橫になつても、下伏しになつても、何だかがらんとして、つかまへどころがない。

うは目ぶたと下目ぶたとがくッつきかけるほど、睡魔は自分の中に押し寄せてゐるのだが、どうしても、一つ、足りないものがあるのを思ひ浮べると、脚下に大きなほら穴が明いてゐる。そして、その底知れずの穴の上に、空にかかつた輪の如く、自分は浮んでゐる。

あたままでがふら〳〵して、その置きどころもない。ただあッたかく包まれた中に、また仰向いて、からだをだらりと延ばすと、酒か酒的思想かに爛熟したと思はれる筋肉の骨ぶしのゆるみから、何だか金色の花が咲き出す。然しその花々には、いづれも、かをりと生氣とが乏しい。

まだ不足なものが滿たされないからであらう――から考へて、電燈の光に目をつぶると、暗い身をしぼる必然の力ばかりが勃興して來る。

然し一向に敷島のやつて來るけはひがない。

そのうち、時計は三時を打つのもあれば、四時を打つのもある。そして、こツそりやつて來た客らしいのは、一人、二人づつ、もう、歸つて行くのだ。廊下が再びばたつき出した。

ふと目を開らくと、西洋窓のがらす戸から、そらの白んでゐるのが見える。

『馬鹿にしてゐやアがる、なア』と、自分に叫んで、自分にはほろ〳〵と自分の世界に於ける寂しさをしぼる涙がこぼれた。そして女のことなどは寧ろ忘れられた。

『氷峰等を呼び起して、酒を飲み直さうか』と考へたが、いツそのこと、歸つてしまはうと思ふ。必らずしも女が戀しいのではない、然し再び女を思ひ出すと、そんな薄情な、無感覺な女風情を戀したのが殘念なのだ。

蒲團蹴立てて起きあがり、それでも細帶を締め直してから、唐戸を排して氷峰の部屋へ行かうとすると、階段の手すりのところで、敷島の青い顏に出くわした。

『どこへ行くのよ。』女はこちらの氣が立つた顏を見て、おこる樣に云ふ。

『もう、歸る！』から云つた切り、女を見ないで行きかけるのを、女は引きとめ、

『そんな野暮はするものぢやないよ』と、男を引ッ張つて室に引き入れる。そして蹴飛ばしてある夜着が海豚の腹わたの様に赤い裏を出してゐる床の上に坐わらせる。

『…………』こちらは女のするままになつてゐながらも、默つてゐた。

『だだッ兒だ、ねえ、あなたは。』かの女はこちらが苦しさうな息づかひの無言で目をうるませてゐるのを見て、男の膝につッ伏した。そしてまた直ぐ氣を取り直したかして、『もう、泣くのはよしましよう、ね』と云ふ。

渠は、まだ何とも云はず、兎に角、怒りは直つたといふしるしに横になると、女はその上へ夜着をかける。そして、なほ、そのそばに坐わつたまま、如何にも疲れて、たわいがないといふ様なあくびだ。

『…………』こちらもそれにつられて大きなあくびをして、『もう夜が明けたんだ。』獨り言の様に云ひ、あの氷峰のこんなところでばかりの早起きが呼び起しに來るだらう。さうすれば、いつもの様にさきへ歸らせず、自分も渠と一緒に歸つてしまはうと思ふ。

『夜が明けたツて』と、またあくびをして、『ゆツくりしてもいいだらうぢやないか？』

『いや、けふは直ぐ島田と一緒に歸る。』

『さう急がんでも——ちやア、これツ切りだと云ふの？』
『或はさうかも知れない。』
『ああ！』から低い嘆聲を發して、女は例の兩手を目に當てたが、『こんな商賣はいやだ、いやだ！
親と主人に氣の毒でさへなければ、勝手に自廢して、好きな人に就く！』
　それから、ゆふべからの話になつた——向ふの客を義雄が來る時刻までに歸してしまはうと思つたが、歸らないのが癪だから、酒に醉ひつぶしてしまはうと思つたが、なか／＼つぶれないうちに、女の方が危うくなつて來たこと。やがて客が床の間の床板を枕に寢入つてから、暫らく藝者（それを敵島は自分の一番親しい色男だと笑つて說明した）と互ひにつらい身の上ばなしをしたこと。藝者が歸つてから、客をほうつて置いて、左近の部屋へ行き、左近と二人で今まで眠つてゐたこと。それは酒の相手を長くした爲め、疲れ切つてゐたので、一睡しなければ、何の勤めも出來ないと思つたからと云ふこと。などを、語つた。
『では、なぜおれのところへ來て、一睡しないのだ？』
『からだに毒だから』との答へだ。
　こちらは、それでも氣まづく思つたが、女として尤もらしい、また、事實らしく思はれる點もあるので、それ以上をなじることはしなかつた。そしてただ目をつぶつてゐると、女は安心した樣な聲で

云つた、
『今夜は酔つて、酔つて、酔ひつぶれて、さん〴〵あなたを困らしてやらうと思つてたのに、當てがはづれてしまつた。――然し、まア九時までがいのち、ね。』

四

義雄は、北海實業雑誌に奉公する小説として、『金』といふ、横濱の貧乏車夫がマニラの富くじに當つて狂死する實話を書いた切りである。今一と口の方のかわせも來たので、その金を資本にして、毎晩の様に井桁樓に行くのだ。女が一度期に散財せず、毎晩の様に來てくれろと云ふので、初めてそこへあがつてからと云ふもの、一と晩も缺かしたことがない。

『第二の伊藤さん』と云ふ評判が直ぐ義雄の知人間、またその知人の知人間に廣まつた。まだ、伊藤公爵來道の餘波が世間に殘つてゐたからの類推であらう。渠等は義雄をどんな女にでも、また、幾人の女にでも關係をつける男だと思つてゐる。それがこの評判を生じた所以である。然し義雄自身に取つては、今やただ數島ひとりしかゐないのである。またその他の女を思ふ餘地が存してゐないのである。

渠は女に妻子のあることを話した。めかけ見た様なものがあることも話した。然しそんなものは一

切忘れて、敷島を愛してゐるのである。

女も亦その一身に關することはすべてうち明けてしまつた。函館の妓樓に勤めてゐる姉と二人で故鄕の病身な親を世話してゐることも、借金とては僅か百圓ばかり殘つてゐることも、みな分つてしまつた。

こちらは北海道を巡歷して歸つて來たら、きツと何か一つの事業を握れるだらうと思つてゐるから、その頃になつて、身受けをしてやり、都合によれば、來年は一緒に樺太へ行かうと受け合つた。女はまた、さうなれば、自分の持つてゐる簞笥も、衣物も、すべて人の妻としての役に立つ樣になるからと喜んだ。

朝別れると女は手紙をよこし、手紙を見ると男は行きたくなるのだ。そして、義雄は晝間だけは氷峰もしくは勇のところで眠るか、若しくは、札幌區立病院へ行つた。小樽の森本春雄が兼ての鼻茸を治療して貰ふ爲め入院してゐるからである。

春雄は齒ぐきの上から頰肉の裏がはを切り開かれ、鼻のあたりの骨が削られたのだ。意外の大手術を麻藥なしにやられたので、一度は氣絶したさうだ。顏のたて横に厚い繃帶を卷かれて、三等室に這入つてゐる。

「二等室には明きがなかつたから」と、渠は義雄に申しわけをしてゐたが、義雄はその入院料の安いの

を知つて、お鳥を東京で醫師のもとに通はせるよりも、こんなところへ入れた方がよかつたと、あとの祭りだが、思ひ附いた。

義雄は、一日のうちに、必らず一度づつは、青臭い妓樓と藥臭い病院とのにほひを嗅ぐわけだ。そして、その別々なにほひを別々に嗅ぎ分けることが出來る間は、まだ自分の本性(ほんしやう)があると思つた。

五

東京の石炭商なる知人に照會した木材事業に關する一件は、返事が來たが、『とても見込みがないから、よせ』と云ふのである。かさねがさねの不成功を義雄は非常に心苦(こゝろぐる)しく思つた。

自分は詩歌小說の創作や、思索的發見や、戀愛など云ふ、比較的に精神的、內部的な事業の實行ばかりで、かの俗衆の所謂事業をその最も表面的、外形的な方面まで成功する見込みがないのだらうか?

不成功は必らずしも論ずるに及ばない。また返り見るに足りない。內部的に見れば大成功者の豐太閤も、外部から見れば結局(けつきよく)の失敗者だ。精神的に自己の滿足を得たナポレオンも表面から云へば大失敗だ。最近に於いて、伊藤公爵の如きは、外表に對する成功の爲めに、却つて內部的發展を妨げられてる氣味がないではない。だから、成功は必らずしも問ふところではない、と。

然し、その境に踏み込んだ以上は、せめてそこを一度は充分に蹂躙して見たいものだと、義雄は憤慨するのだ。世界に向つて大貿易を開らくのも、一國をまとめてその手中に操縦するのも、自己一身に立て籠つて本能の無飾的な發展を全くするのも、事業並びに實行としては、決してその大小と高下とはない。

『ただ、然し、思ふままに、外面的な實行にも、もッと自己を發展して見たい。』これが義雄の野心を切實に刺戟する動機である。

渠は、かういふ苦肉策を考へる時には、いつも、幼時敎へられた東西歷史の交渉研究に必要なジンギス汗、タメルラン、アチラなどの事蹟を思ひ浮べるのである。渠等は歐洲人の領地をただ蹂躙しただけで、渠等が去ると同時に、何等の偉蹟をも建設しなかつたと云はれる。且、また、渠等の如き東洋的英雄豪傑は、破壞でなければ、酒色のことしか知らなかつたと云はれる。歐洲人がさう云ふのはまだしもだが、東洋の日本人までがさう云ふのだ。

然し、これは、歐洲の歷史家が歐洲の歷史を辯護する爲めの俗習的見解である。然らざれば、歐洲の智識ばかりに心醉してゐるわが國のハイカラ學者等が、歐洲人の口吻を眞似てゐるに過ぎない。然らざれば、また、世の俗習家がジンギス汗等に向つて渠等、の公明正大な、男性的な、東洋的な、本能上の行動を、自分の俗習見に照らして、けち臭く解釋してゐるのだ。

ジンギス汗等が後世の爲めに何等の建設もなかつたのは、渠等の自己發展、自己滿足のほかに、何等のけちな俗習見もなかつた證據である。『子孫の爲めに美田を買はず』といふ言葉も、俗習家には、ただ自己を空しくして、他の爲めに誠意を盡す意味に解せられてゐるが、それは單に公明正大を僞はる手段に過ぎない。

義雄の考へは反對だ。自己を少しでも空しくすれば、却つて自己の誠意を缺く樣になるのみならず、自己の存在をも危くすることになるのだ。世人の所謂美田を買はないのは、國家民衆の爲めばかりでなく、子孫の爲めにも、空しく盡す樣な餘裕がないほどに、自己を充實させて置く必要があるからである。

そして、ジンギス汗等は、豐太閤と等しく、義雄の主張する自己充實に於いて殆ど遺憾がなかつた。この自己充實說は刹那主義に於いて最も充分に發揮せられるものであるから、自己の刹那に關係がない過去もしくは未來に於いて、何等の建設もしないのは、乃ち、却つて美田を買はない所以であつて、最も僞りのない公明正大だと、義雄は思ふ。渠の自我中心說は世界に對して日本中心說となつてゐる。そして、渠はそれを刹那主義で發揮するのを歐米の僞文明國に對しても憚らないのである。

然し、義雄に取りては、木材事業の計劃が駄目になつたと同時に、樺太の弟からまたハガキが來て

――なぜ封書でよこさないのだと、義雄は心で怒つた――從兄弟の製造主任が謀反心があつて、自分の不始末から起つた困難にも拘らず、その困難と負財增加とに堪へかね、それを免れる爲めに、早く義雄等の協同から、喧嘩づくにでも、脫してしまひたい樣な態度を見せて來たから、義雄に早く來て吳れろと云ふのである。さうでないと、一大事件が初まると附け加へてある。

弟から見れば、その事業の總括者たる兄の義雄から、渠の出發後は代理となつてああしろかうしろと命令されてゐるので、この兄弟に信用を失つてゐる從兄弟の怪しい行爲は充分注意して、さうさせない樣にしなければならない。

然し、無學で惡ずれのした從兄弟は、また、年上であるから、自分よりもずツと年下の代理主權者の遠慮勝ちな注意と命令とに默つて從つてゐる筈がない。兩者の反目は、義雄が出發の際あやぶまなかつたのでもない通り、テイヤとホロドマリとに於ける義雄の兩製造所の對立となつたのだ。

ホロドマリには、義雄の弟が東京から仕込んで行つた釜、その他の機械を据ゑて、東京からつれて行つた人々と共に住んでゐる。テイヤには、從兄弟が鰊釜を代用して、かの惡辣な世話人に抱き込まれてゐる。初のうちは、テイヤで蟹が多く取れた時は、人夫を雇つてホロドマリへ運搬し、そこでの不足を補つてゐたらしいが、原料が高い上にそんな手間賃まで高く出すのだから、とても、引き合ふものではない。

渠等の生活さへ僅かにでも出來てゐるのか、どうか、疑はしいほどである。

義雄は、弟の所謂『一大事件』とは、樺太で抵當に這入つてゐる所有物件を取られてしまうことであるのを、知つてゐないではない。が、然し今、自分が相當の金を持たないで行つたとて、何の効能もないばかりでなく、自分までが物件と共にさし押へられてしまうに過ぎないのだ。その上、また、行つて歸るだけの用意もない。

『どうせ、過半は斷念したこの事業であるから、早く切りあげてしまへ。萬一、樺太に於ける所有物件だけが來年まで安全になる相談が附けばよし、附かなければ、それは從兄弟と共に放棄してもいいから、あとのものはそちらを引きあげて歸つて來い。自分は二三日のうちに北海メールの補助のもとに北海道巡遊に出る。それが濟んでも、歸京するか、當地になほ滯在するか、どちらとも分らない。――

『兎に角、この鑵詰事業の失敗の爲めに、自分等の家も今どうなつてしまつたか分らない狀態にあるのだから、自分は別に何かの事業を見つけるまで二三年は放浪の身になるだらう。お前もその覺悟で一先づ東京へ歸れ。――

『どうせ、お前は不勉強の、學問ぎらひで、父の在世中から學校をやめたかつたのである。自分はその意を汲んで、お前を直ぐ自分の事業にたづさはらせ、熟練の結果によれば、學校の保證など入らずに獨立もさせようと思つたのだが、失敗の爲めにそれも出來ない。――

『然し今更歸京して再びあの大學部の殘りをやれないのを恨むにも及ぶまい。徴兵猶豫がなくなるのなどは、決して苦にする場合ではない。お前は、來年の試驗期には、どうしても徴兵に應じて見なければならないのだ。然しそれはそれとして、お前一個の方針はお前一個で考へろ。東京に於いて抵當に這入つてゐる家のことも、自分にただ形式的な愛を迫る妻子のことも、すべて考へる餘裕のない自分は、なほ更らお前のことなど考へてゐられない。——

『特にことわつて置くが、自分は清水お鳥とは手が切れたつもりだ。その點は、もう、心配するに及ばない。』

以上の文句を書き入れた封書に、添へ書きとして『以後の報告は矢ッ張り有馬氏當てでよこすがいい。然し返事が行くとは思ふな。但し、その報告は封書に限る』と加へ、但し書きには圏點を打つて、弟に送つた。

六

札幌に來てから早や一ケ月と十日あまりになつた。義雄の放浪的諸計劃も今や殘つてゐるのはただ北海道巡歷といふ問題で、それもその依頼者なる北海メール社の意向がまだ實際には分つてゐない。元氣の沮喪した義雄には、薄野遊廓の井桁樓の靑くさい一室で、自分も好きだし向ふもさうだと思は

れる敷島と、毎日相會ふのが唯一の生命であるかの様になつてゐる。
　ところへ九月二十七日、メール主筆巖本天聲から使ひをよこし、ゆふかたから自宅へ飯を喰ひに來て呉れろとあつたので、義雄は行つて見ると、天聲は、
『いよ〱頼むから、出かけて貰ひたい』と云ふ。然し約束したパスはまだ旭川の支社から返つてこないので、兎に角、社からそのつもりで預つてゐる二十圓だけを渡すから、その金と紹介狀とを以つて、同社の支局並びに天聲の友人等を渡つてゐて呉れろ。旅行中の記事が段々メールに出るうちには、
『また、どうともするから』とのことである。
『それぢやア、君、何のことはない、君の友人を喰ひつぶしに歩くわけで、少しも僕の勞力に對する尊敬も謝禮もあつたものぢやアない！』かう云つて、義雄は多少忿懣の氣味で、自分が樺太の通信を東京の或新聞に引き受けた時でも、その三倍もしくは四倍分を受け取つたことを語る。
『まアさう云はんで』と、天聲はおだやかに構へて、『それだけ受け取つて呉れ給へ。あとで、また、僕も考へがないではないのぢや。』
『君の考へは當てにならないから、ね。然し北海メール社がおれを馬鹿にしてゐるんだ。』いツそのこと、斷然ことわつてしまはうかと、義雄は思つた。
　この問題は、初めは義雄から申込んで、天聲に周旋させたのである。然し社の待遇がこんなことで

終るのなら、天聲の周旋と奔走とを無にしてしまつてもかまはないと、義雄は思ふ。然し、また、考へて見ると、この相談がもツと都合よく行くものと信じてゐたから、東京へ歸る旅費に拵らへた金を毎晩の井桁樓通ひに使ひ果してしまつたところだ。暫らく自分を外へでも向けなければ、札幌の友人等に對しても、おめ〳〵とぶらついてゐることは出來ない。

　あとでまたどうともするといふ言質（げんしつ）もあるのだから、天聲の親切もしくは申し譯に免じて、兎に角出かけてやらう。社が貧乏（びんばふ）な上に、事務の方には無勢力な天聲の言質ではあるが、相當に原稿を書かせて置いて、人をおツ放す様なことはすまい。

　よしんば、おツ放す内心で原稿を踏み倒されたにしても、義雄自身望んでゐた旅行が出來ると同時に、その旅行記に於いて滿身の鬱憤（うつぷん）を漏すことも出來る。

『この場合、それよりほかに道がない』と思ひ直し、渠は天聲が暫時の別れを送る用意の酒を受けた。

『樺太の方は全く駄目（だめ）ですか？』

『うん、先づ駄目と斷念（だんねん）してゐるから、何か一つ北海道でやりたいのだ。』

『君のいつか話した牧草培養でもやり給へ――僕の名義で出願した百萬坪が許可されたら、その半分は僕が貰ふつもりだから、君にも分けてやらう。』

『そりやアいい、ね』と、義雄は聽き流すと、

『實際だぞ』と、天聲は二三杯の酒に赤くなつた顔をつき出す。そして『では、よろしく頼む』などいふ話があつた。旅行には明日出發と定め、天聲の家を出てから、その足で義雄は敷島の爲めに別れの一夜を明しに行つた。

七

九月二十八日、義雄が札幌を出發したのは午後の汽車である。

車中で、ふと氣がつくと、あたまを繃帶した子供を連れた女客が三組乘り合してゐる。それが子のあたまを緣として話し合ふのを聽くと、いづれも、札幌の病院へ行つた歸りで、

『あなたのもですか？』

『わたくしの子供も』といふ様な挨拶だ。どうせ、その母なる人々もしくはその亭主等の舊惡露顯の一端であらうと義雄には思はれた。

煉瓦石の製造場があるに因んで、煉瓦餅といふのを賣つてゐる停車場で、その子供が一人減り、そのまた次ぎで一人減り、みんなゐなくなつた頃、義雄の汽車は岩見澤に着した。直ぐ北海メール支社の主任を訪ふと、札幌へ行つて留守だ。止むを得ず、或宿屋へ行つた。出早々との不自由では、とても、駄目だと思ふ。

然し義雄と同宿になつた婆アさんがあつて、隣室から手紙を讀んで吳れろと云つて來たので、その話を聽いて見ると、岩見澤に陶器の原料を産する場所がある。そして、そこへ工場を設けて、西京から職人を呼び寄せる準備をしてゐるとのことである。この婆アさんが酒の氣をぷん／＼にほはせて語るところに據ると、室蘭線の停車場苫小牧で料理店をやつてゐるかみさんだが、その稼業では儲けが少いので、人のやらない事業をと思つて、そこに考へがついたのださうだ。京都あたりで十五錢、二十錢する陶器が、運賃と割れとを見込んでだらうが、北海道では實際五十錢から六十錢する。それを運賃入らず、割れも尠く製造出來るものとすれば、五十錢が四十錢、三十錢に賣れても利益は充分に望まれる、と。

事業熱にかかつてゐるに等しい義雄には、樺太へ空しくつぎ込んだ自分の資本――而も東京の家宅を抵當にして拵らへた資本――のことが殘念に思ひ出されて、こんな婆アさんに對しても、遺憾！自分は一個の敗北者であるといふ感じを抱かざるを得ない。と同時に、氷峰を見込んで密會を申し込んだ若杉貞子の目的も、亦、この岩見澤に於いて陶器製造をやる力になつて貰ふことであつたと云ふことを思ひ出すと、利益の勘定しかたまでが矢ツ張り同じやうであつた。あの女はその後どうしてゐるか知らないが、兎に角、この婆アさんに先んじられてしまつたのだ、な、と義雄は考へる。そして、人は誰れでもぐづ／＼してゐるうちに、他の人に追ひ越されてしまうものだといふことを痛切に

感じた。

その翌日、支社の主任と近傍を巡回し、本道にまだ一つしかない甲種農學校、空知教育會附屬圖書館(には、活動圖書館の設けがあつて、管内各村に巡回させてゐる)、所々の田園、果樹園、牧場、または、かの腐爛病に罹つた林檎畑の恐るべき荒廢の跡をも見た。

また、ところどころ、唐もろこしの實を澤山軒に釣した農家があるのは、樺太で云へば、漁師の戸外におほ蟹を繩で結はへて釣るす型を、北海道的百姓で行つたのだと考へたし。また、途中で葬式の行列に出會つては、自己を捨てて行く馬鹿者を送るその馬鹿者共もあると思つたが、皆が餘りしほらしい様子をして行くので、横切るわけにも行かず、停立脫帽してその列を通した。

然しそんなこと〳〵よりも、義雄が最も多くの注意を引いたのは、岩見澤牧畜生産販賣組合(この種の組織はまだわが國に例が少い)と、その北海道バタ製造所とである。若し牛を飼ふとすれば、種を目的とするか、然らざれば、バタや乾酪、罐詰などを製するまで行かなければうそだと考へた。

そして、義雄の手帳には、次ぎの如く書き下されてある――牛乳五六升で、バタ一斤。牛、一匹一日の產、五升より一斗二升。年、五六ケ月間。一年、平均十二三石(七八石のもあり)。バタ一斤、七十錢。十二石に付き二百斤、百四十圓也。牛一匹の飼料一ケ月平均三圓、一ケ年三十六圓也(舍飼、放牧等をこめて)。バタ製造機械のうち、セパレータ、二百圓。タル(チヤン、搾返機)三十圓。壓搾

機(オーカ)、六十圓。驗脂機八十圓等を込めて、五百圓入用。

岩見澤は石狩原野にあつて、鐵道四通の中心でありながら、市中は餘り活動してゐる樣にも思はれない。家々の建築具合を見ても、假建築が永久的な住ひになつた樣なのが多く、發展の最中に不景氣の爲めにあたまを押へられてしまつたといふあり樣が見える。多分、都會の發達に必要な『近在』なるものが少く、且、汽車の客は通り過ぎてしまうのが多い爲めだらう。假建築のまゝに燻ぶつてゐる店などがすくなくはない。

義雄はこの町の他日の發達を致すべき財源地、萬字炭山へも行つて見たかつた。同炭山は幌向川の上流にあり、水準點以上に三百七十萬噸、水準下のを合すれば一千萬噸以上の炭量を有すると云はれ、露頭は累々として沿岸に連なつてゐるさうだ。然し渠は、ゆふかた、一先づ支社へ引ッ返すと、本社から電話がかかつてゐて、直ぐちよッと歸れ、都合のいいことが出來たといふことである。

最終列車で義雄は札幌へ向つたが、車窓からながめると、舊暦十五夜の月は廣漠たる石狩の大原野を照し、秋の夜氣が渠の寂しい周圍に迫つて來る。

考へる、と六月から家を出て、樺太並びに北海道に一と夏を送つたのである。都がなつかしい氣がして來て、札幌へ向ふのが東京へ歸る樣だ。

きのふの晝間見た大原野の一部なる幌向原野は、不毛な泥炭地で、見渡す限り茅ばかりの、一面にじめ〳〵したところだと思つた。然し、今、汽車がその一端を走つてゐると、人家のともし火が一つ二つ見える。そして多くの人々の返り見ない、こんな泥炭の大濕地にも、小開墾者が寂しく住んでゐるのかと思ふと、そのともし火は義雄自身の様な一文なしの寂しみを表してゐる。

如何に北海道といふ自由な天地に來ても、金がなければ、何等の計劃も成立しないと等しく、かの火をともす家人が、一個人として、如何にその一小地積を開墾し得たとても、殆どその效力はなからう。この原野全體が濕地であるのだから、その全體を乾燥させる爲めの大排水工事をしない以上は、渠が動かす鍬さきから、不毛の濕りが、義雄の所謂刹那の生氣を離れ行く劣敗者の周圍に集る虛無の死の如く、渠の周圍に攻め返して來る。

かういふことを考へながら、義雄は札幌驛に着したが、その足で直ぐ車を天聲の宅へ飛ばすと、もう、戸が締つてゐた。それを叩き起して、二人はうちと外での對應だ。

『全體、どう云ふ話なんだ？』

『なアに、今度道會議員の遠藤長之助君が、土木勸業調査員として、膽振、日高、天鹽、後志、渡島などを巡廻するので、丁度場合がいいから、うちの社長が遠藤君に說き勸めて、君に隨行を頼むことにしたんだ。君も、不服はなからう――費用は、すべて、遠藤君が道廳から受け取る分から出るんだ。』

『そりやア、好都合になつた、ね。』

『然し、北海道を回るには、馬でなければ行かんので、君が馬に乘れるか、どうだらうツて心配して居つたぞ。』

『馬と云つて、どうせ驛遞馬だらうから大した心配にやア及ばない、さ。』

『乘れるか？』

『乘つて見せる、さ。僕も子供の時乘つた切りだが、樺太にまた行くとすりやア、どうしても馬の稽古をして置かなけりやアならないと思つてゐるところだから――』

『ぢやア、あす、遠藤君に會つて見給へ――それに、和服では馬の上が寒いから、洋服をどうか都合すると云うてをつたから。』

『では、あす、會はう――ところで、今夜、とめて貰へないか？』

『そりやちよツと困る、なア』と、天聲は言葉の調子が折れた。『もツと時間が早ければ、蒲團を借ることも出來るけれど、もう、遲いから、なア。』

『よし、それぢやア失敬する。』義雄はあすを誓つてそこを離れた。そして月下を獨りまた薄野に行き、敷島の不意を驚かせた。

道會議員遠藤長之助は、北見のおほ百姓で、多くの小作人を使つて農業を經營するかたはら、牧馬業にも手を出してゐるし、某木材會社にも關係がある。また砂金の出る山川を持つてゐる。

もとは、ちいさい居酒屋を見た樣なことをして金を儲けたのだ。北海道へ流れ込んだ、殆ど無職業の、勞働者等を客とし、自分が兵隊のあがりであるを誇りに、亂暴や無錢飮食をやるものをおどしつけるつもりで、渠は店の出口に鐵砲を持つて控へてゐたので、一時、鐵砲酒屋の名を得てゐた。

それが長之助一代で立派なおほ身代になつたのだが、道會議員として道會にあらはれると、その落ちついた達辯の爲めに、初演說のそも〱から、こんな見識家が北見の田舍にもゐたのかと、世人に驚かれたさうだ。他日は必らず代議士の候補者になるだらうとは、人も期しわれも望んでゐるところだ。

その渠は、さきに義雄を歡迎したうちの松本雄次郎（矢張り、道會議員）と共にメールの社長を中心として、もしくはそれを利用して、自己勢力の擴張に努めてゐるのが、今回、義雄との關係を結ばせることになつたのである。

遠藤の札幌に於ける住宅は、南二條の七丁目にある。鐵柵をめぐらしたおほきな構へで、誰れが住むにも廣過ぎる家だ。そしてそれを借りたもので失敗しないものはないと云ふ忌はしい評判まで立つてゐる家だ。然し遠藤はそれを割合に安く借り受けて、事業の關係上、渠を音づれる東京、その他からの客に對して、見識張つてゐるのである。

義雄は薄野からの歸りに、近處まで行き、その家を一人の婆アさんに尋ねると、

『あの大盡さんのところでしよう』と、わざ〳〵そのそばまでついて來て敎へて吳れた。

玄關のがらす戶を明けて這入り、案內を乞ふと、番頭らしい四十格恰の男が出て來て受けついで吳れる。それに導かれて、長い廊下に添ふて奧の客間へ通ると、既に二三人の客がゐた。

初對面の挨拶を濟ましてから、先客の用談が濟むのを待つてゐる間に、床の間の唐紙一と幅に寫したどこかの石碑の銘や大きな鐵製の鶴の置き物や、三角棚の書物や庭の大きな籠に入れてある多くの鳩や、などをながめながら、義雄は主人の話し振りや人物に注意した。强ひて落ちついてはゐるが、兩の眉の上で筋肉が動く樣子が、多少、過激な精神を持つてゐる人と見えた。

先客が歸つてから、再び丁寧な挨拶を改め、それから今回の調査旅行の目的、順序やら、義雄の隨行承諾に對する感謝やら、道廳からも別に案內者として技手が一人行くことを語つた。そして、主人は、

『一緖に行つて下さることになると、あなたの評判な自然主義のお說をも道々伺ひたいのですが、馬はどうでしよう』と問ふ。

『それは、なアに』と、義雄は心配させない樣に答へて、『下手ですが、大丈夫です、子供の時に落ちた經驗も二三度ついてゐますから。』

『それなら、結構です。』主人は微笑しながら、『馬はどうしても落ちて見にやアなりません。』
『然し子供の時のことですから、今度またやり直します。』
『はッ、は！』主人は笑つて、『まア、成るべく車や馬車の利くところはそれにすることに致しませうから――』
かういふ話があつた後、義雄はちよッとからだの寸法を取られ、いづれ出發の時までに、間に合せだが、洋服一式を屆けるからといふ言葉を與へられて、いとまを告げた。
義雄は、天聲の注意に從ひ、自分の人生觀並びに藝術觀の批評なる田村義雄論の出てゐる中央公論を一部主人の手に殘したが、主人遠藤に對しては、營養分に富んだ、血色のいい、これからまだ何か仕事をしさうな、四十四五の地方紳士といふ印象しか受け取らなかつた。

八

義雄は、かの未見の敵であつた山の客がした如く、敷島の部屋を宿見た樣にして、晝間は氷峰や、勇や、入院中の森本などをまわり歩いた。
九月末日の晝頃、北海道實業雜誌社に行つて見た。社長川崎の怒鳴つてゐる聲が玄關まで聞えるので、前から期待されてゐた社長と氷峰との衝突が果して初まつた、な、と思ひながら、這入つて行く。

川崎と氷峰とは碁を打つたらしい、盤をその間にして、激烈な對談になつてゐた。川崎は眞ッ赤になつて形を正してゐると、氷峰は青くなつて、勝手にしろといふ風に、兩手を膝に置いて肩をいからし、あたまを少し下げて横を向いてゐる。

『ぢやア、お前はどうしてもやめると云ふのか？』川崎は氷峰を睨みつけると、

『は、やめます。』氷峰は社長を見返へして、『ほかのものでもやれると社長は云ふとるさうぢやから、やれる人を入れたらよからう――僕は雇ひ人ぢや。』氷峰が兼てから不平に思つてゐたことで、社長は渠の實力をあり振れたものの樣に考へてゐるが、氷峰自身には、自分でなければ、現今、この雜誌をやれるものはないと自信してゐるのは、義雄もよく承知してゐる。

このいや味を含めた確答に接し、

『この野郎！』川崎い重い碁盤をはねのけ、氷峰の膝に迫り行き、『お前はけちた雇ひ人根性でをるのか？』

『…………』

『おれに二千五百圓足らずもつぎ込ませて置いて、まだ雇い人根性でをるのか？』

『…………』

『返事せい、氷峰！　おれはお前の兄から頼まれて、お前の爲めに出してやつたのぢや。』

『然し雇ひ人扱ひをすれば、雇ひ人ぢや。』
『さうひねくれるものぢやないぞ。誰れがこんな事業に澤山な金を無條件で出すものがある？　お前の爲めなればこそぢや。』
『そんなら、その樣にやらせて呉れりやよからうぢやないか？　僕を信じないで、會計を置いたのはまだしも惡いことはない。然しその會計がかういふ仕事に不慣れな爲め出て來る疑ひを、直ぐ僕が不都合でもしとる樣に思ひ取るのは、社長として、間違ひぢやと思はれる。』
『おれは何も知らないのぢやから、會計にもよく分る樣にお前が云ふて聽かすがえい。』
『いくら云ふても分らなければ仕かたがない、さ――今の樣なことを云ふて、僕につッかかつて來るのは失敬ぢや。少くとも、僕は社長に次いで、主幹といふ名義になつてをるのぢや。』
『そりや會計も、主幹の云ふことが分らんのにも直ぐおれのところへ苦情を持ち込むのは惡い。』
『島田さん』と、これも青くなつてゐる會計がやッと再び氷峰に向つて口を切つて、『わたしが惡かつたのですから、改めてあなたにあやまります。これからは、十分あなたに敎へて貰つて、あなたの云ふ樣に致しますから――』
『無論、さうして貰はねば困る。新聞や雜誌の事業は山の鑛夫を使ふ樣には行かんものぢや。然し、社長、ここ、少くとも百圓の手金を打たねば、印刷屋が原稿を組み出さんぢやないか？』

『だから、おれがそれだけは工面してやると云ふとるぢやないか？』

『では、社長からさう云ふて貰はう。』から氷峰は多少氣拔けがしたやうに云つた。と云ふのは、いッそのこと、きのふ社長が斷言した樣に、金はもう一文も出來ないとけふも斷言して貰ひたかつたと、あとで義雄に語つた。渠は、さうして貰つて、雜誌を全く自分の物にして新たに經營し直さうと思つてゐた。それが却つて、『おれがそれだけは工面してやると云ふとる』など、實は云ひもしないが容易氣をつけるのは、どうも當てには出來ない。『多分、またあの動きのつけなくされる禿安の手にかかるのだらう。』と推察されたが、それでも、手金だけ出來さへすれば、當座の運びはつくからと、氷峰は社長の言葉を捕へたのだ。

『澤山を呼べ、澤山を』と、川崎が印刷屋の主人のことを云ふので、氷峰は社員を電話かけに使はす。

これで衝突の一段落がついたので、義雄は川崎に改めて挨拶すると、

『旅行はどうなりました』と、川崎が尋ねる。

『改めて、遠藤さんと一緒に出ることになりました。』

『それは結構ぢや――さア、一つ。』川崎は自分と義雄との間に碁盤を引き寄せた。氷峰も、會計も、表面は打ち解けた樣になつて、二人の打ち方を見ながら、いろんな口嘴を入れる。

そのうち、澤山がやつて來た。川崎は碁盤に向つて、局面の不利なのを訴へる樣に、
『おい、大將、しツかりして呉れんと困るぢやないか？』
『わたくしの方でも』と、澤山、受けて、『實際、困つてをるのです。ほかの仕事をことわつても、あなたの方の仕事は間に合はす樣にしてをりますから、世間では全く實業雜誌の印刷所になつた樣に思はれてをりますので――』
『思はれてもえい、さ。』川崎はなほ死に物ぐるひの石を打ち込みながら、『もう、大分お前の方へ入れてあるから。』
『それは無論結構ですが――月末の給料を渡さないと、職工が働きませんので――』
『だから、おれが今云ふのぢや。』川崎は少し威猛高になつて、『手金はおれが工面するから、もう二日待て、その代り、第二號をずんずん組んで貰はう。』
『ぢやア、さう願ひます』と、澤山も承知する。
『印刷屋の方はうまく行つたが、』川崎は義雄と氷峰とを見て、『碁は負けぢや、たア。』から云つて、石を投げてしまう。そして、氷峰が餘りおれのあたまを亂させるので負けたのだといふ笑ひ聲を殘して、川崎は歸つてしまう。
その後で、氷峰は義雄や澤山に向ひ、

『社長はいつも喧嘩(けんくわ)さへ吹きかけると、僕の手に乘つてしまう。きのふまで一文も出來んと云ふてをつたのが、おこつたあげく、百圓だけは出すと云うてをつたなどと、勝手(かつて)な熱を吹くのぢや。然し、結局、出しさへすれば、こちらはえいのぢやから――』

『わたくしの方でも』と、澤山は氷峰に向ひ、『かう每月ぐれる樣では、それが爲めに雇うて置く職工が動きませんで困ります。』

『こりや實際ぢや。』氷峰が受けて、『いツそ、僕が全くこの仕事をやる樣になれば決してこんなことにはならしやせんが、なア。』

『かう貧乏な身代(しんだい)では、會計が一番困ります』と、會計も口を出す。

『今月も社員の給料は取れないのぢや。僕の下宿料は何とかして延ばして置くにしても、ほかの社員等で女房や子供もあるものは、實におほ困りだらう――僕が先月の樣に少しは立て換へてやりたいにも、もう、質屋(しちや)に持つて行く物もないし、なア。』氷峰は義雄の方を見て、『また、誰れか金のある女を見つけようか、なア。』

『例のはどうしたか知らないが』と、義雄は貞子に先んじて婆アさんがやりかける陶器事業のことを思ひ出す。『あの岩見澤の陶器(たうき)に適する土と云ふのは、ほかの人で掘り出すものがあるぞ。』かう云つて、渠が實際に聽いて來た通りを氷峰に話す。

『それぢやから、新らしい事業はうかうかしてをられん――直ぐ他人が嗅ぎつけてしまうから。』
『本當だ、ねえ。』
『あれも、然し、おれが相手にせなんだので、困つてをるだらう。』
『そりやア、どうだか分らない。』
こんな話をしてゐるうちに、澤山は歸つて行つた。そして、氷峰も停車場へ行かなければならないので、義雄も一緒にその社を出た。
實は、山に歸つてゐたお君さんがけふ母と共に札幌を通過して、相州鎌倉の親戚の方へ向ふのである。これは、氷峰の兄夫婦がお君に氷峰を思ひ切らせる爲め、いよいよ氷峰の建策を實行する樣になつたのだ。
氷峰は自分の妻にするつもりのお鈴をつれて姉と姪との迎へに行き、一晩は札幌にとまらせようとして、それを勸めたが、
『いツそ、おりないで行つた方がよからう』と姉は承知しなかつた。そしてお君はこわい顔をして氷峰を一目見た切りで、渠にも、お鈴にも、口を聽かなかつた。
『實は、姙娠したんぢや』と、氷峰はあとで云つた。

九

遠藤自身が俥に乘つて持つて來て呉れた洋服、ホワイトシャツ、裏毛つきメリヤスのシャツ、ズボン下、並びに附屬品を、義雄は有馬の家で受け取つた。すべてで、それでも、二十五圓か三十圓はかかつたらしいと、勇は勘定して見た。そして、ズボン釣りと編みあげ靴とを義雄は自分で買つた。

勇とお綱さんとは、義雄がそれを着て見るのを手傳つたのだ。義雄は七八年來、學校、宴會、旅行などにも、洋服といふものを嫌つて、一切着なかつたのだが、樺太にゐるとすれば、どうしても、馬と洋服とは避けられないと思つたこともあるので、今回も、その嫌ひを撤回したわけだ。

勇夫婦はカウスボタンをつけて呉れたり、折り襟をはめて呉れたり、チョッキを着せて呉れたり、上衣の袖を入れて呉れたりした。大抵は義雄のからだに相應してゐるが胴のところが少しゆるいので、チョッキの下に、勇の厚い綿入れ胴衣をつけた。

義雄が鏡に向つて見ると、自分の瘦せぎすの姿が洋服を着てふくれたので、からだに比例して、少しちいさ過ぎるあたまが急に目に立つ樣になり、その顏の中でまた比較的にちいさい目がまた目に立つ樣になつた。

「おほ、ほ、ほ！」お綱さんはそれを見て、思はず吹き出す。

『どうしました?』義雄はわざと何氣なく、そのちいさい目を圓くして見せた。
『おほ、ほ、ほ!』今度は腹をかかへて苦しさうに笑ふ。
『どうしたと云ふんだ、馬鹿な奴だ!』勇はまじめ腐つてその妻をたしなめる。
『ただ田村さんの洋服すがたは初めてで、何だかをかしかつたものですから』と、お綱さんは僅かに笑ひををさめる。

　義雄自身にも、着ごころがいいわけではなかつたが、無頓着な渠には、洋服地の粗末なのや、不體裁なのは左ほど氣にもならなかつた。そして、却つて、新らしい物をつけたといふことは、樺太で銘仙の衣物が出來た時と同じ樣に、ちよツと氣持ちがよかつた。

　義雄はこの洋服に着かへてしまつて、何となくにこ〳〵してゐるのを見て、
『それでお行きになれば、今晩はいつもより持てましよう』と、お綱さんは冷かす。
『さうだ、ね』と、勇も云つて、その心での冷笑が見えた。
『どうせ、假りの貰ひ物だから』と、義雄は渠等の言葉を追窮はしないで、『これで今夜は暫らくのお別れだから、毛唐人の眞似でもして、女どもを笑はせる、さ。』
『君は衣服の點に於いては非常な保守主義であつたらしい、ね。』
『なアに、思想に於いても、一面には保守主義だぞ。』義雄は眞面目になり、『僕の「國家人生論」に於

いては、外國の浮ついた思想などは決して採用しないし、僕が「表象主義」を論ずるには、わが神代の人間、乃ち、神々の生活を引證してあるのを見給へ。神道の根源は僕の所謂強烈生活にあるのだが、古來並びに現代の神道家等が無學で、俗習に囚はれてゐるから、僕等の云ふことなどが分らないのだ。渠等にして、若し活眼を開らく時があつたら、僕の肉靈合致說の如きは、わが國の神代に既に行はれてゐたことを知るだらうよ。』

『それで思ひ出したが』と、勇は一冊の木版本を持ち出して來て、『君の云ふ樣な說に似たのがこの本にも少しあるよ。』

さし出したのを見ると、明治十八年版で、新居守村といふ少敎正の「氣象考」だ。赤裸々に男女陰陽の關係を歌であらはしたり、說明したりして、その間に天地萬物の生々的威力は陰根の氣に基ゐするといふ思想が一貫してゐるらしい。

『これはどこにあつたのだ?』

『夜店で買つたのだ。』

『おもしろさうだから、旅行から歸つたら、貸して貰ふよ。』

『それもいいが、君がそんな考へだとは氣がつかなかつたから、一つ僕等の組織してある神主等の會で演說して貰ひたい、ね。君も知つてる通り、僕は國學院出の學校敎師だけに、今でも神主には交際

がある。』

『それはやめ給へ、演說をやるのはいいが、僕の思想には激烈な點もあるから、君の迷惑を引き起しても氣の毒だから。』

こんな話をして、義雄はゆふ方そこを出た。そして氷峰の下宿に向つた。この日から、然し、義雄は北海道の古本屋に氣をつける樣になつた。

氷峰が南二條西一丁目の下宿屋鈴木に移つた當座は、そこの浮氣なかみさん――と云つても、婆アさんだ――にも持てて、餘り飮まない酒を飮ませられてかの女の寢床に引ツ張り込まれかけたこともあつた。が、若いお鈴が每日の樣にやつて來るので、ねたみの眼を持つて見られる樣になつた上、移つた當時、多少の前金をやつた切り、少しも拂ひが出來ないので、渠は餘りいいお客さんとは思はれなくなつてゐる。

義雄はそれを知つてゐるのみではなく、自分がまた氷峰には、有馬の家と同樣に、もしくはそれ以上に、厄介をかけたので、この下宿屋の敷居をまたぐことが何となく氣の引ける樣になつてゐる。

然しさういふ氣が出れば出るだけ、義雄はわざとさうした氣ぶりを見せないで勢ひよく二階の梯子段をあがつて行き、

『氷峰、ゐるか』と、から紙を引き明ける。

『やア、出來た、な』と、氷峰はこちらの洋服すがたを見てゐる。

『どうだ、似合ふか？』

『さうだ、なア、まア、二十圓の判任官ぢや。』

『馬鹿云ふな。』義雄は薬に向つておぐらをかいた。それから、あす、先づ膽振、日高の方面へ出發することを語り、朝は早く起きなければならないので、今夜は一緒に遊廓へ行つて呉れないかと云ふことを頼む。

『僕は君の目ざまし時計になるのはいや、さ。』氷峰は實はこれからお鈴がやつて來て、一緒に雲右衞門を聽きに行く約束があることを打ち明ける。

雲右衞門の人氣は川上の來た時よりも盛んである。札幌でも、小樽でも、函館でも、これまでは、浪花節と云へば奈良丸より知らなかつたのであるが、前者が大黑座でたツた一週間打つたのに、それだけで札幌は後者を忘れてしまつたかの樣に賑はつた。メール社の社長の如きは、その徒を引きつれて、一桝を初めから買ひ切りにしてゐたくらゐで、義雄が今回の旅行に關してメール社長に會ひに行つた時も、晩はいつもゐなかつた。そして、會つた時には、頻りに雲右衞門のことを賞讃したので、義雄は社長を餘ほど趣味の低い人だと思つた。

『あんなものはやめ給へ』と、義雄は氷峰に云つたが、その興行は今夜がおしまひなので、實際に引きとめることは出來なかつた。然し氷峰は外套がなければ寒からうからと、自分の冬のインバネスを義雄に貸した。

獨りで本屋をひやかした後、義雄は井桁樓へあがり、敷島の部屋へ這入ると、義雄がまだ坐わらないうちに、

『あら、洋服が出來たの』と、女が云ふ。

『ペラ〱ペラー！』渠は火鉢のそばに立つたままだ。

『何のことだ、ねえ？』

『パン、ペン、ペンシル、ポンピキ、ペラ〱ペラー！』

『丸で毛唐人の樣だ。』

『プラボー、ペラボー、ぶんぶく茶釜。』

『およしよ、はんか臭い！』

『ぶる〱ぶる』と云つて、義雄は金ぶちの目がねの中の兩眼を見開らいたまま、顫える眞似をして竦む樣に坐わつた。そして、とぼけた顏つきをして、女を見つめる。

『……』女は澄ました顏で微笑してゐる。

『何をしてゐるんだ、ねえ』と、朋輩の左近が飛び出して來た。
『毛唐人が來たのよ。』
『まア、お這入り』と、義雄は云つてぺろりと舌を出したが、それはそとの者には分らないので、左近はにこ〳〵して這入つて來た。そして、
『洋服になつたの、ねえ』と云ふ。
『ああ、僕はけふから道聽のヘツぽこ官吏になつたよ。』
『本當』と、左近が聽く、
『うそ、さ、ね』敷島は横目で疑はしさうに義雄を見る。かの女は自分の男がそんな者ではないとの考へが勝つてるらしい。鑵詰業の殆ど全く駄目になつたのはまだ話されてゐないし、から毎晩やつて來て、たとへ餘分の金を使はないにしても、まだ一度も格子外に立つ様なけちなことはないから、義雄の言葉通りうまく行けば、遲くとも、本年の末までには引かせて貰へるといふ心頼みを持つてゐたのだらう。

義雄はまた、女の精神の最も緊縮してゐる時間こそ、元の通り可愛くて溜らないのだが、その他の時間の様にゆるんでゐる時は、もう、さう熱心になれないので、ずツと初めの眞面目でない人、女の所謂『面白い人』にも歸つて見ることがある。そして、この頃は、本部屋でも、假部屋でも、どこにで

も平氣で寢るほどになつてゐる。

　それが却つて、女には、野暮氣が拔けたとか、粹になつたとか、本當の色男になつて來たとか見えるのであらう。が、義雄には、それが如何にも馬鹿々々しいやうな氣がして、そんなことを好む淺薄な女に心が引かれる自分を、自分で否定することもある。その否定が一方には、自分の最も眞摯な涙の自覺に觸れて、女をその浮薄膚淺な空氣から救ひ出してやりたくなり、また一方には、その否定が涙もつまる極端な痛罵冷笑の變態となつて、『べら〳〵』、『ぶんぶく茶釜』の樣な滑稽を演ぜしめた。

　女が恐らくそのどちらをも本當に解釋してはゐないのを義雄は寂しく感じながら、

『實は、ね、僕』と、然し眞面目な態度になり、『あす、また出發するから、お別れに來たんだ。』

『あなたの出發〳〵は當てになりませんよ。』女は半信半疑のやうすだ。『こないだも旅行するから、暫らく會はれないと云ふたのに、直ぐまた顏を見せたぢやないか？』

『そりやア急に呼び返されたからだ。』

『何とでも云へます、わ——そんなことばかり云ふて、わたしにたんと氣をもませなさいよ。』少しすねて見せた。

『おれはそんな下らないことアしないよ。本當のことを云つてるんだ。』

『わたしがこの曲輪ばかりに押し籠められて、世間へ出られないのをいいことにして、何とでもうそは云へる、さ。』

『お前はよッぽど疑ぐりッぽい女だ。それでなけりやア、よッぽどうぬ惚れ屋だ。おれは、まだ、そんなことでお前を喜ばせるほど、浮氣な修業はしてゐない。』

『それでも、また、一と晩ぐらゐ、高砂樓の花ちやんところへでも行つて、歸つて來るんだらう？』

『馬鹿云ふな――こないだだッて、實際、岩見澤まで行つて來たんだ。』

『では、繪ハガキでもよこしやアえいのに――』

『そんな暇がなかつたぢやアないか――一と晩とまつて、その明くる日の晩にやア、ここへ來たではないか？』

『だから、をかしいと云ふの、さ、長く行つてる樣なことを云ふて、直ぐまた來るんだもの。』

『來たら、惡いのか？』

『惡いのではない、さ――うそ云ふて、ちよッとほかへ氣を抜きに行くのだらう、さ。』

『女郎ぢやアあるまいし、ね。』

『どうせ、わたしは女郎、さ――あなたの奥さんではない、さ。』また微笑に返る。

『夫婦喧嘩などおよしよ、見ッともない。』左近はそばから冷かして、『ほんとに、こないだ、行つて來

たの？』

『行つて來たとも――けふから多分メールにその旅行記が旅中印象雜記として出てゐるだらうから分ることだ。これからも、それが續いて出るのだ。』

『店へ來るから、見ます、わ』と、敷島。

『今度はどこへ行くの？』と、左近。

『今度は膽振から日高の方面だから、それだけで一と先づ歸るのだが、半月ぐらゐはかかる。』

『ぢやア、本當に行くの』と、敷島は多少まじめさうに聽く。

『さう、さ。そして、汽車の利くところでないから、馬乘りばかまの代りにこの洋服が出來たのだ。』

『わたし、寂しいよ。』

『しほらしさうなことは云ふな――お茶を引くぞ。』

『繪ハガキ送つて頂戴、ね』と、左近。

『わたし、待つてるから、早く歸つて、ね』と、敷島。

『早くも遲くも、用があつて行くのだから、それが濟み次第だ。』

『ぢやア、ハガキでも、手紙でも、よこしなさいよ。』

『うん――そして、左近さんにも、お前にも、繪ハガキがあつたら送つてやる、さ。』

朝、七時二十分の汽車に間に合ふ樣、義雄は薄野を出て、車を走らせる途中、旅かばんを取りに、ちよツと有馬の家へ寄り、靴を脫ぐのが面倒臭いから、障子が明いてゐるのを幸ひ、靴脫ぎのそばに立つて、

『有馬君』と、聲をかけた。勇がまだ學校へ出かけはしなからうと思つたからである。然し、

『もう、出かけました。』お綱さんが臺どころから來て、あがり口に膝をつき、片手を障子のふちに當てながら、『ゆふべから心配してをりましたですよ。お鳥さんから今行くから靑森まで迎へに來いといふ電報が來ましたので――』

『え、電報が！』義雄は棒立ちになつた。と云ふのは、殆ど忘れてゐたお鳥の羽根ある鳩の如く飛んで來る姿が見える樣で、その戀しさがふと一時に電流の如く身を打つたからである。

『お留守にあけて見たのはいけませんでしたか知れませんが――』お綱さんは電報の本紙を取つて來て、坐わつて義雄に渡し、『急用ででもあつたら、あなたにお知らせしないのは却つて惡いからと申して、うちのが明けて見たので御座います。』

『いや、それはかまはないですが――』義雄が默讀して見ると、

『イマタツアヲモリマテムカヘニコイ。』

義雄は困つたといふ様子をして、お綱さんを見ると、お綱は、
『ゆふべ、うちのが早くお知らせするがいいと申し、井桁樓とかへ電話をかけに行きましたが、そんな人は來てをらんと云ふたさうです。』
『行つてたことは行つてたのですが、僕の名を本當におぼえてゐなかつたのでしよう。』
『それで、島田さんや巖本さんのところをたづね回つたさうです。』
『そりやア、氣の毒でした、ねえ。――然し困つた、なア』と、義雄は手をあたまへあげて、少し滑稽じませてお綱さんの顏を見る。
『戀しいので』と、お綱は冷笑しながら、『あなたを追ひかけて來るのです、わ。』かう云つて、義雄の顏を見返した時は、お綱はちよツと頰を赤らめてゐた。
『なアに』と、義雄はそれを見なかつたふりで云つた、『他の男にまた棄てられたので止むを得ずやつて來るのかも知れません。』
『何にしてもお出でになるのでしよう――?』
『然し迎へには行けないから、獨りで來いといふ電報を途中の驛まで打ちましよう。』
『それで屆きますか?』
『列車が分りさへすれば、本名を云つて屆くでしよう。』

『けれど、その列車が――？』

『そりやア時間表に照り合すと分らないことはないだらう。』義雄はこの電報が上野でお鳥から受け取られた時間を汽車の時間表に合はせて、どの列車にかの女が乘つたかといふことを調べようとしたが氣がせいてなか／＼分らない。『兎に角、汽車に乘つてからにしよう』と、行きかける。

すると、お綱さんはあわてた樣な、また心配さうな顏をして、膝をついたままからだを延ばし、

『あなたのお留守にお出でになると、どう致しましよう？』

『濟まないが、僕の歸るまであなたのうちへ頼みます――蒲團は借りさせて。』

『蒲團などのことはかまひませんが――』から、何だかいやさうな樣子が見えたのだが、義雄には今のところ、別に處分の仕かたがないので、

『まア、さう有馬君に頼んで下さい――行つて來ますから。』薬は待たせて置いた車に飛び乘つた。

義雄が停車場へかけ附けると、まだ遠藤も誰れも來てゐない。

先づ北海メールを買つて、自分の原稿が出初めたか、どうか調べて見たが、まだ、その第一回が出てない。そして、けふは十月三日だ。

こないだのはたツた二回分だが、これから毎日の雜記を一回もしくは二回に書くとして、その掲載

された新聞は自分の記事中に出る國々、村々へ、同新聞紙販賣擴張の爲め、無代價で二三百枚づつ配布されるのである。

それが若し何等の反響もなかつたとすれば、その責任は自分にあることになる。それを思ふと、ちよッと戰慄せざるを得ない。が、『樺太通信』を東京の新聞に受け合つた經驗もあり、また、こないだで、多少北海道的な筆ならしをしてあるので、左ほど心配とも思はない。

『どうせ、けちな地方新聞のことだ』と、けさの記事に目を通しながら、輕蔑の念も出る。然し、自分も進んで受け合つたり、下等なのでも、洋服を拵らへさせたりした上は、遠藤に面して、さうおろそかに出來ない。義雄がお鳥の來るのをほうつて置くのは半ばは一たびしたこちらの約束を重んずる爲め、また半ばはかの女に對する愛がさう熱心でなくなつてゐる爲めだ。

然しかの女はどの列車で上野を出たらうと調べて見ると、電報を出したと同時に乘れば、米澤、山形まはりのである。まさか、それには乘るまい、夜中の海岸線であらう。然しまた、晝頃から夜なかまで、上野の休息所か宿屋かにゐるだけの甲斐性がかの女にはあるまいと思ひ直すと、あわて過ぎて、山形まわりのに乘つたかも知れないと考へられる。そして、義雄はそれと決めてしまう。

然し渠は睡眠不足の爲め眠くッて仕やうがない。そのせいか、まだ人けの少い空氣の冷やかさをおぼえて、ストーヴでも欲しいくらゐだ。氷峰からインバネスを借りて來たのが最も好都合であつたと

思ふ。

二等待合室のふツくりしたどす赤の天鵞絨ベンチに腦天からふらつくからだの腰をおろし、外套の袖に引ツくるまつて目をつぶる。すると、自分はがらんとした様な内部の疲勞に添ふあツたかみを敷島の部屋から引いてゐる。

綺麗に整つた部屋に、綺麗にふき清めた長火鉢――それをそとにした屏風のかこひの薄暗がり――二枚がさねのやはらかい夜着、蒲團――女のこまやかな情愛。それが全身にぬくみを與へて呉れるが、そのあツたかみのありがを無形の手で探つて見ると、まだ朝飯を喰はない空腹に思ひ當つたばかりで、どこだか一向に分らない。

その空腹で分らないのが矢ツ張り冷やかみを感じさせるのである。その冷やかみが落ちつかうとする自分の心を十分に落ちつけさせて呉れない。自分の後ろの明いた窓から這入つて來る朝風を浴びて、自分は兩顎の根からがくがくして來る。そして、鐵道構内の線路を往復する空機關車の汽笛の、鋭い而も熱のない響きが、自分のはき慣れない靴をはいてゐる足もとから、山の清水か何かの様にゾツとしみ込んで來る。

自分はこの冷氣と空腹とねむ氣とからのがれようとする様に兩眼を再び明けた。

いきなり見えたのはお島を思ひ出させる年頃のハイカラ女であるが、それはパン、罐詰、飲料品、

並びに西洋料理の店の番人だ。
その店は義雄のベンチと相向つた側にある。渠はそこへ歩み寄つて、乘つてから喰ふパンを買つた。
サンドヰチを買はうとしたのだが、まだ出來て來ないと番人が答へたからである。
『けさは可なり冷えます、なア。』かの女がしツかりした口調で愛相を云ふので、
『さうだ、ねえ』とばかりで、もとの場所へ戻つたが、さうして見ると、寒いのはあながち自分の疲勞してゐる爲めばかりではない。と、かう義雄は考へた。そして、番人の女があれだけしツかり物であるらしいのを見ると、それと同じ年格恰のお鳥もその獨り旅の汽車の上をさう心配してやるにも及ぶまい。自分が心配するのは、お鳥を矢ツ張り可愛がり過ぎてゐるからだらうと思ふ。
そこへ二人、三人と、旅客が這入つて來たが、そのうちに古ぼけたインバネス、半ズボン、わらじ掛けの官吏らしい人がゐる。義雄はこれが案内者の技手だらうといふ見當をつけた。
もう、あと五分間といふ時、遠藤長之助は洋服の上へ黑羅紗のマントをかけてやつて來た。この出で立ちで、若し劍をさげエリザベス時代の帽子をかぶれば、さし當り、陰欝拔きのハムレトの役割りが出來よう。このマントが馬上の用意には最もよからうと、義雄は思つた。
遠藤は人々の横合ひから出て來た自分の番頭に切符を買ふ命令を與へてから、義雄と半ズボンとを引き合せ、

『このお方が道廳の技手、長濱滿吉君です――お名前はお存知でしようが、田村義雄君です』と、兩者の話し合ふ橋渡しが濟む。

　それから、直ぐ渠等は汽車に乘つた。技手の長濱は兎角遠慮勝ちにこそ〳〵と三等車へ行つたので、遠藤はボーイをして同室へ連れて來させた。

『さア、もう占めたものだ。』遠藤は汽車が出かけると安心した樣に身を窓ぎわへもたせかけて云ふ。

『これからはわれ〳〵の旅です、ぜ。紅葉も色づきかけると早いから、旅行中にいいところを見ることが出來ましよう。』

『さうですか、ね――然し僕はまだ朝飯前ですから、失敬します。』義雄は無遠慮ながらポケトからパンを出して、それを少しづつ口に入れた。汽車のがたがたがひもじい腹に響いて困るからだ。然し話は絶やさない。

『ゆふべ、實は、東京から電報が來て、こちらへ出向くから青森まで迎へに來いとあつたのです。然しこの場合、獨りで札幌まで來させるより仕方がないので、さう電報を打つつもりです。』

『岩見澤で乘り換へですから、あすこで打つのがいいでしよう。――さうより仕かたが御座いません、たア、今、あなたに抜けられちやア困りますから――』

『本當です。』義雄は素直に答へたが、相手の口調に多少の勿體がついてゐなかつたか知らんと考へ

て、如何に筆の上の權威があるにしても、洋服を拵らへて貰つたり旅費を出させたりする不體裁を返り見ないではゐられなかつた。

然し義雄は腹が段々出來るに從つて勢ひがつき、汽車の動搖にもしツかり堪へられる樣になつたので、窓外をも眺めると、汽車は幌向川が石狩川に合するそばをとほつてゐるのが分る。それから、例の泥炭地の間になる。

遠藤は義雄に向ひ、鐵道に添ふた場合、場合に關するいろんな說明をした。煉瓦製造のなか〳〵成功してゐること。石狩川は底が深いので、內地の治水家等はそれを理由に水害の恐れなどはない筈だといふが、北海道の川はすべて事情を異にしてゐて、如何に深くても、沖積土の崩れ易い地盤の廣野を甚しく右曲左折、婉退曲進するのであるから、一夜水勢が增加すると、用意のない堤防をずん〳〵突き破つて、新らしい川筋を拵らへてしまうのであること。幌向原野の泥炭地は一望千里の如く空しく廣がつてゐるが、早く大排水工事をやつて、地盤を乾したら、國家の爲めに多大の開墾地が出來ること。これは、他にも美唄原野、雨龍原野なども同じ事情だから、來年の議會に提出する拓殖案には、こんな炭泥地排水工事費も含んでゐること、などだ。

岩見澤での乘り換へに二時間の休息があつた。その間に、義雄はお鳥に送る電報、『リヨカウチウユヘヒトリデコイ』といふのを、山形まわりの青森線に當る弘前停車場へ宛て、受信

人を上野十二月二日正午發列車中の淸水お烏として打電した。

一〇

長濱技手は、一番多く旅なれてゐるからでもあらう、最も輕い出で立をしてゐる。そして手に持つ物などは一つも持つてゐない。次ぎに、遠藤議員のだが、可なり大きな風呂敷包みがあつた。渠は、それを、邪魔になるだらうからと云つて、茶屋にあづけた。そして、義雄に向ひ、

『あなたの革鞄も、とても、持つて行けますまいから、おあづけになつたら――？』

『さうでしよう、ね』と、義雄は受けて、中の物をより分けにかかる。

『馬といふ奴は厄介な物で』と、遠藤は云ふ、『人を乘せて呉れるばかりで、荷物などア持たしません。』

『また、持つ必要もないでしよう――僕はこの原稿紙と手帳があれば、僕の役目は濟ませることが出來るのですから、それに、地圖です、ね。』義雄がそれを出しかけると、

『北海道の地圖なら』と、遠藤は押へて、『わたくしが詳しいのを持つてゐます。』

『それは結構です。』義雄はかう應じたが、自分はまた自分だけのしるし付けを要すると思つたから、矢張り自分のを原稿紙や手帳と共にちいさな風呂敷に包んで、首に結はへつけて見た。

再び汽車に乘つて、稻穗のよく實る水田が廣がつてゐる栗山や由仁を通過する時、義雄は一種のお

そろしみを感じた。ほかでもない、この邊にお鳥の實兄が刑事探偵をしてゐるのである。かの女がやつて來て、義雄の待遇の具合によつては、或は、燒けを起して、恥ぢも何もかまわず、すべてを兄にぶちまけてしまふかも知れない。かの女の苦しんでゐるいやな病氣は、元は、義雄から移つた。それが知れたら、兄はかの女を怒ると同時に、どんな復讐を義雄にするか分らない。向ふの人物が分らないから、一層それが義雄には思ひやられるのである。

『然しその時はまたその時だ』と、義雄は心であきらめをつけた。

夕張炭山線の分岐點なる追分を過ぎ、安平、早來、遠淺など云ふ驛を經て、膽振の沼の端に至つて、一行は汽車を降りた。

『馬車があればよう御座いますが、なア』と、遠藤は義雄のことを思つて吳れてゐたが、がたくり馬車があつた。義雄等はそれに乘つて、樽前山をずツと後ろにして、一面の火山灰地なるイリシカペツ原野を殆ど一直線につけてある長い道路に添ひ、勇拂をとほつて鵡川に進み、そこにその日の宿を取つた。

平野にいじけくねつた槲の木、海濱に赤い實を結んだ濱なす、どこまでも一直線に氣持ちいい道路、木材流送の爲めに每年汎濫して沖積土の堤防をずぶ〳〵解き崩す鵡川などが義雄の心に最も深い印象を與へた。

十月四日、鵡川に初霜があつた。薄雪の樣に白い道を進んで日高に入ると、さすが馬產國だけに、

親馬が通ると、そのあとへ必らず小馬がてく／＼ついて行くのに出會ふことが多い。そして、沙流川にかかつた九十五間のおほ橋の欄間には、驅け馬を切り拔いてある。また、アイノ人の本場平取村が近いだけに、髯武者のアイノや口のあたりに入れ墨したメノコを見ることが多く、その一セカチ（男兒）の如きは、義雄等の馬車について一二丁も走つた。

門別から荷馬車に乘り換へたが、その村を拔ける時、後ろを返り見ると、遙か西方に膽振の樽前山の噴火が見えた。眞ツ直ぐに白い煙りが立つてゐるかと思へば、直ぐまたその柱が倒れて、雪と見分けが附かなくなつた。

義雄はそれを見て考へた、あれほど活氣ある火力を根としながらも、空天につッ立つた煙りは周圍の壓迫に負けて倒れるのであるから、地腹に隱れた火力は、丁度、義雄自身が發展の出來ない鬱憤であらうと。

がうツと、一と聲物凄い響きが渠のあたまの中でしたかと思ふと、その火山の大爆發當時のありさまが瞑目のうちに浮んだ。その時、西風が吹いてゐるのであらう、日高の方面へ向つて、その噴出した熔岩の灰が雲と發散して、御空も暗くなるほどに廣がつた。

その結果が、今、義雄の目を開らいて見る火山灰地である。數百年もしくは數千年以前に出來たその地層がまざ／＼と殘つてゐて、膽振から日高の一半に渡つて地下六七寸乃至一尺のところに、五寸

乃至一尺の火山灰層となつて、その白い線が土地の高低を切り開らいた道路の左右に郵便列車の中腹の如く、くツきりととほつてゐる。

厚別から、いよ〳〵乘馬でなければならなくなつたが、義雄は腰がふらつきながらも心配したほどでなかつた。右には出張つた小山のつゞきを、左りには洋々たる大平洋の海面を見おろし、落馬しても怪我はない砂濱を驅けらせる時など、尻の痛いのも忘れて、渠の心は延び〳〵した。そして、下下方まで五里の道を、もツとも他の乘り手に從つてだが、午後二時から四時までの二時間に乘つて來ることが出來た。

日高附近は至るところ、耕地よりも牧場、牛よりも馬を主としてゐて、國柄と事業方針との明らかによく一致してゐるところを見ると、義雄は自分の事業心に思ひ合せてなか〳〵懷かしくなつた。その上、染退川の奥には、大理石があるさうだし、松前侯が掘りかけた金鑛もあるさうだし。また、鐵鑛があるのだらう、磁石がとまつたことがある。などいふことを聽くと、もう、さういふ石や金屬のにほひが鼻さきにちらついて來る。

下下方の宿に着いてから、

『トリキタカヘン』といふ電報を勇に當てて打つた。それと行き違ひに勇から轉送して來た電報には、

『ダイジオコルスグコイ』とあつた。樺太の弟からで、その大事とは製造事業に關する弟と從兄弟との衝突で――弟は義雄の代理として金錢上の締めくくりをしなければならないが、製造かたの從兄弟が動かなければ全く融通が利かないのである。それが爲めに、あちらで抵當に這入つてゐる所有物件を債權者から沒收されることになるといふのだらう。然し、もう、如何に製造かたが働らいても、蟹のあがる時期でないから、どうせ駄目とあきらめてゐる義雄には、それが左ほど大事でもなかつた。その上、弟なり、從兄弟なりをはたから見れば、義雄等すべての上に關する金錢もしくは勞力を用ひながら、見す／＼分り切つた失敗をやつた馬鹿もの共だといふ輕侮の念も加はつて來て、その實、泣きたい樣な心持ちが却つて非常に極端な不眞面目の返電となつた。乃ち、

『ドウセダメカツテニカヘレ』と、これだ。

そして、お鳥に關する勇の返電を待ちながら、義雄は遠藤と共に碁を打つたり、村長並びに地方有志の陳狀を聽いたりしてゐたが、一向その返事は來ない。それが氣になつて溜らないのである。

褥へ這入つてからも、疲れてはゐながら、ゆふべの樣に眠りつけない。お鳥が到着しさへすれば、勇が出さないでも、かの女から直接に返電しさうなものだ。それが來ないのを見ると、まだ途中にまごついてゐるのか知らん？ひよツとすれば、途中であの病氣が惡くなり、困つてゐるのではないだらうか？或は、また汽車か宿屋で違つた男に出會ひ、急に變心して、方向を轉じたのではなからうか？

どうせ、不信用な女だから、自分と離れてゐれば、どんなことがあるか分らない。よしんば、やつて來たとて、自分の重い責任が出來るだけだから、いツそ、變心して呉れた方が面倒臭くないのかも知れない。どうせ、女の病氣の爲め同　も出來ない。いや、同　するのを自分は恐れてゐる。自分は青年時代の樣な戀愛神聖論者ではない。內容の空しいのを知らない樣な理想家ではない。肉靈の合致しない戀などで、自分はどうせ滿足出來ない。

さうかと云つて、また、お島が初めてその心身を投げ出した時のこまやかな情交を義雄が記憶してゐるばかりに、自分並びにかの女の病氣中數ケ月間、渠はただ手足の　　ばかりによつて滿足してゐたこともあるのを思ひ出される。

あの皮膚の美しさ、やわらかさ！敷島などの、とても、及ぶところでない。そして、敷島との關係も、やがて、絕えるのだらう。どうせ、自分の全部を見て呉れた上の戀ではないからと思ふ。

『あ、こりや〱』といふ聲に目を開らくと、義雄と褥を並べて寢てゐる遠藤の寢言であつた。直ぐまたぐう〱いびきをかいてゐる。

『ああ呑氣にはなれない。』敷島が渠自身に期待するのも、矢ツ張り、かの山の客や遠藤の樣な男であつて、決して渠自身ではないと考へられる。

渠の考へは、かうして、お島と敷島と樺太とを幾遍となく巡回するので、ますます睡魔の入り込む

透きがない。

渠は苦しまぎれに起き出でて、ランプの光と冴える神經に筆を持たせて、けふの『印象雜記』を書いた。

その翌朝、雨を冒して馬上、新冠の御料牧場を見に行く途中で、染退川荒廢の跡を調べ、中下方に於ける淡路團體の農村を見た。この村を見ては、義雄は自分の故鄕淡路に關する記憶を呼び起さずにはゐられなかつた。

王政維新の頃、淡路に於いて稻田騷動なるものがあつた。阿波藩の淡路城代稻田氏が藩から獨立しようとする逆心があると誤解し、阿波直參の士族どもが、城代並びにその家來（阿波藩から見れば、『また家來』）を洲本の城に包圍した。そして、義雄の江戶から引きあげて來た父並びにすべての親戚は包圍軍の方に加はる關係であつた。

それが爲めに、稻田がたの士族の子弟（全くの田舍者だ）が勢力ある小學校に於いては、義雄は『江ッ子の穢多』として、いつも排斥され、迫害されてゐた。同國の穢多が『ねッから、ね』と云ふからである。義雄の孤立的な陰鬱性と傲慢な獨立心とはこの間に養はれたものだと、義雄自身もさう考へてゐるのだ。

ところが、稻田がたで淡路にゐ殘つた士族どもは殆どすべて意久地なしばかりで、その他はみな明

治四年(まだ、義雄の生れない時)、明治十八年(義雄が小學校を出た頃)の兩度に、その城主に從つて北海道へ移住した。そして、渠等には淡路をなつかしい故郷と思ふ樣な氣がなかつたと云ふのは、かの騷動の時、渠等のうちには、その妻女は直參派の爲めに强姦されたり、姙婦はその局部を竹槍で刺し通されたといふ樣な目に會つてゐるものがあるからである。

この鬱憤並びに主君と同住するといふことが渠等の北海道開拓に對する熱心の一大原因であつたらうと、義雄は考へた。第一回の移住者等が國を船出する時は三百戸ばかりあつたが、紀州の熊野沖で難船し、百五十戸分の溺死者を生じた爲め、半數だけ(それが、現今では、僅かに三十戸)が北海道開拓の祖である。それが中下方にあるが、第二回の五十戸は、今、同じ川添ひの碧蘂村にある。兩村は實に北海道の模範村になつてゐる。

一見して、耕耘に熱心なことや永久的設備をしてかかつたことなどが分る。石狩原野の如きは、札幌でも、岩見澤でも、矢鱈に無考へで樹木を切り倒したり、燒き棄てたりして、市街地や田園などに風致がなくなつたばかりでなく、風防林までも切り無くして、平原の風を吹くがままにしたところがある。然し淡路人の村には、大樹をところどころ切り殘して風致を保つてゐる上に、家屋も他の方面で見る樣な假小屋的でなく、永久的な建築をしてある。

遠藤も、この中下方に這入つてからは、道すがら馬をとどめて、あたりを頻りにながめてゐたが、

後れて進む義雄を返り見て、
『どうです、この邊の田園的風致は！わたくしの理想は、北海道中至るところにかういふ村を拵らへさせたいのです。』
『いいです、ね。』義雄も渠のそばに近よつて馬をとどめる。
無理想の刹那的充實を主張する義雄に取つては、理想の、何のと云ふことは下等に聽えるのであるが、地方紳士の言としては、別に反對するほどのこともないから、進んで簡單に淡路國來道當時の事情を語つて聽かせた。
『は、はアー！』遠藤は感心して、『さういふ悲慘なことが原因になつて、かう云ふ美しい村落が出來たのです、なア。』
『面白い理由があるでしよう』と、義雄は得意になつた。そして自分もまた、この村の黨與の子弟からいぢめられたのが元で、今でも故郷に對しては恨みこそあれ、何等のなつかしみもないことを遠藤等に語る。然しこの村の一農家の生垣をめぐらした庭内に憩ひ、子供の時に聽いた淡路なまりの言葉に接した時は、何となくなつかしい氣がした。そして、染退川が年々五十町も百町歩も葉等の沖積土質の良田を缺壞して行く爲め、その度每に村人の戸數が減じて行くことを說明された時は、自分の身がその沖積土の如く喰ひへらされて行く思ひがした。

馬に多少の興味が出て來たのと牧畜に考へがあるのとで、義雄は御料牧場に行つても遠藤と共に注意して同場長の説明などを聽いた。

全數、千七百餘頭――そのおもな種類はトロター、ハクニー、サラブレド、クリブランドベー、トラケーネンなどだが、競馬用にはサラブレドが最もよく、この種の第二スプーネー號と云ふのが園田實德の一萬五千圓で買つた馬の父であつた。そのうちを馬屋から引き出して歩かせて見せたが、それぞれ特色があつた。背の高いのや毛艶のいいのや、姿勢の正しいのや、足の運びの面白いのや――そして、アラビア種のすべて目が鋭く涼しいのが、最も深い印象を義雄の心に殘した。

周圍二十里、面積三萬三千二百十町歩、放牧區域七十二區、各區をめぐる牧柵の延長七十里に達する大牧場――高臺の放牧地は、天然のままだが、造つた樣に出來てゐて、恰も間伐したかの如く、樹木がいい加減に合ひを置いて生えてゐる地上には、牧草が青々と育つて、實に氣持ちのいい景色だ。義雄等は、行きには、その間を驛遞の瘦せ馬に乘つて得意げに走つたが、立派な馬を澤山見た歸りには、渠等は一種の恥辱を感じた如く、逃げる樣にして驅け出した。

市父並びに遠佛のヌッカにアイノの家が十餘戸ある。義雄等はその一つを訪問して見たが、耕地を持つてゐて、不完全（雜草を充分に拔き取つてない）ながら、農業をやつてゐるだけに、生活狀態が

樺太に於ける一般土人よりも多少進歩してゐる。家には立派な床板も張つてあり、子供は小學校で習つた字を綺麗に障子に書いてあつた。

ゆふかた、昨夜のと同じ宿に引ツ返し、馬上八里の疲れを湯に這入つてくつろげてから、

『あれをみな買はうと思ひますが、なア』と、遠藤は物思はしげに云ふ。

『そりやアいいです、ね。』義雄は牧場で見て來たうちの、七八頭の拂ひ下げ馬のことだと思ふ。有名な第二スプーネー號の種を孕んでゐるのも這入つてゐる。然し渠がさう云ふのに物思はしげなのは、拂ひ下げ代金三千餘圓の工面を考へてゐるらしかつた。

遠藤は北見に一大牧馬場を持つてゐる。それが、昨年不時の大雪の爲めに、放牧の馬と共に、一夜のうちに一丈ばかりも下に埋められた。そのまま凍死した馬が多かつたが、少數は積雪の中から首だけ出してゐたので、辛うじて掘り出すことが出來た。その埋め合せに、一層いい種類の馬を買ひたいので、渠は御料牧場を一つにはおもな目的にして來たのだと語つた。

『人間なら、とても、そんな馬鹿らしい眞似はしてをりますまいが』と、渠は矢ツ張り凍死した馬どもを思ひやる樣子をして、『然しそこがまた馬の可愛いところです。いつも人間を信じて、人間の云ひなり放題になつてをるところへ持つて來て、いきなり、ひどい雪に會ふたのだから、溜らない。強い奴こそあせつて、首だけでも出してをつたから助かつたものの、弱い奴は丸でもがき死をした樣なものだ。』

面白いので、義雄はいろ／＼馬の話を聽いてゐたが、今夜も亦返電は勇からも、お鳥からも來なかつた。

夜に入つて大風雨があり、慣れない海岸の旅亭で、物凄い浪の音が不安な枕に響いて來ては、いツそのこと、おほ津浪でもやつて來て、自分と共にお鳥、敷島、事業の念などもすツかり消えてしまうがいいと云ふ樣な空想も起つた。そして、その空想が實際津浪が寄せて來はしないかと思はれるほどな浪の音に合體して、義雄は夜ぢう安らかな夢に入ることが出來なかつた。

春立村の如きは、シヤモ（和人）とアイノとの見すぼらしい雜居部落で、板どりやその他の草をさかさまに編み並べて、家の壁板に換へてある。そして、板もしくは草の家根には、それが暴風に飛ばされない爲め、澤山の石ころをのせてある。海岸には昨夜の名殘りおほ浪がうち寄せてる。その浪もとに立つて、みるめの樣な襤褸をまとつたシヤモやアイノが、長い紐のさきに石を結びつけたのを浪間へ投げ込んでは、昆布を拾ひあげてゐる。それが高い崖の上を驅ける義雄等によく見えた。

火山灰がなくなるに從つて、日高の道は平原から山路になる。そして、膽振の鵡川まで三間幅であつた縣道が、そこから二間半に狹まり、また二間しかなくなつた上に排水用意が足りないので、いつもじめ／＼して乾かない。

もと浦河支廳長をしてゐた某の如きは、韓太子來遊の際、他の馬車と衝突して、自分の馬車が顚覆した爲め、大怪我をして、いまだに療養中だと聽く。

また、義雄等の聽かされたのに據ると、三石村の村長は、崖崩れの爲めにその乘り馬車が直下數十丈の荒磯へころげ落ちかかつた。幸ひ、馬の前足が道路のふちにとまつたばかりに、僅かに引きあげられて、生命に異狀がなくツてすんだ。足の強い馬であつたからでもあらうが、その時馬の努力と云つたら、今思つても凄いほどで、その眼からは光が出る樣、全身はぴツしより熱汗を發したさうだ。

『馬はそれで可愛がられるのです』と、遠藤が云つた。

『さうでしよう、ね——然し』と、義雄は話に力を入れて、『馬ばかりがさうではないでしよう。人間もさうした努力がいのちです。熱心が目の玉から火を發するほどの刹那をねらはなければ、とても、自己の立ち場を確かめることは出來ません。』

『御尤もです、なア。』

『僕はいつも考へてゐますが、現代では、大きな實業家と云はれる人々に最も多くさういふ境界を經驗してゐるものがあります。』から云つて、渠は政治家などでもまだまだ今のところ不眞面目があり過ぎること。文藝界の人々はまたその上を越して馬鹿呑氣であること。然し渠の主張する樣な緊張した熱心と眞面目とが、物質的な實業界から政治界に及び、外部的な政治界から內部的な文藝界に充實す

るに至ると、わが日本が世界の一强國どころではなく、世界唯一の優强國になること、などを語る。
『は、はアー!』遠藤は分る様な、また分らない様な顔つきをして、『自然主義とは、つまり、さう云ふことになるのですか?』
『いや』と、義雄はいろんな說もあることを說明しようと思つたが、相手が、どうせ、大した智識のある人でないのだから、ただ結論だけを持つて答へ、『僕の自然主義がさうなんです。人生に對する態度は今の話の馬の如く、刹那の全人的努力、間、髮を入れない場合にばかり現ずるのですから、そこに萬事が歸着するのです。』
こんな話をしながら、三石川、鳧舞原野を過ぎ、浦河に着した日の夜、遠藤を主として一行の爲めに歡迎會が開らかれた。その席で、遠藤は、一場の演說をしたが、その紳士的態度に義雄も少からず感服して、それに花を持たせる爲め、義雄自身には有志から望まれた演說をも斷わつた。これは、一つには、北海メール記者とばかり思ひ誤たれるのを好まなかつたにも依るのである。そして、渠は自分の通る跡跡へ自分の旅行記が載つたメール新聞が到着する每に、どんな結果が生ずるのだらうかと、ひそかに心配した。
その日、義雄は自分のゐどころを勇に電報で知らせたが、矢ツ張り、何の返事も來なかつた。
『餘り失敬ぢやアないか』と云つてやりたかつたが、それよりも、いツそ、そんなことは忘れて、白

分自身の旅行――これしか、今の義雄には、活動の生命が殘つてゐないも同樣だ――を眞面目にやらうと決心した。

一〇

遠藤は臨時道會が召集される爲め一旦歸札する必要が出來たので、長濱技手は勿論、義雄も共に歸路につかなければならないのだが、ここから歸るのも、十勝へまはつて帶廣停車場へ出るのも、時日に於いてさう大した違ひがないので、義雄は遠藤に相談の上自分だけは前進することにした。

西舍の國有種馬牧場を見てから、遠藤並びに長濱技手に別れ、義雄は浦河支廳の一技手を從へて幌別川を渡つた。二百町步の耕地を流したこの川には橋がないので、渠等は馬を泳がせたのである。樣似を進んで、冬島を過ぎ、あざ山中のオホナイといふあたりに來ると、高い露骨な岩山が切迫してゐて、僅かに殘つた海岸よりほかに道がない。おほ岩を穿つたトンネルが多く、荷車、荷馬車などはとても通れない。人は僅かに岩と浪との間を行くのであつて、まごついてゐると、寄せ來る浪の爲めに馬の腹までも潮に濡れてしまう。

或高い岩鼻をまはる時など、仰ぎ見ると、西日に當つて七色を映ずる虹の錦の樣なおほ瀧だ。その裾を、瀧に打たれながら、駈け拔けなければならなかつた。その次ぎのおほ瀧は高さ五十尺、幅七八

尺、俗に白瀧といふ。そのもとに、ぽつねんと立つてゐる南部人の一軒家がある。夫婦子供四人の家族だ。板や雜草で組み立てた、そして家根には石ころをつみ重ねた家だ。

　近年殆ど漁がなく、毎年、昆布百四五十圓から二百圓、フノリ並びにギンナン草二三十圓、ナマコ三四十圓ぐらゐの收入を以つて、僅かにその生活を維持してゐる。もう、やがて雪がやつて來るが、それにとぢ籠められては、山へのぼつて、焚き木でも切るより仕かたがなくなるさうだ。

　さう聽いて、義雄が頭上を仰ぐと、その山は直立した崖で、殆ど道もついてゐない。山に迫られ、やがてまた冬に迫られるこの家族の寂しみを思ひやると、義雄の現在もそれと同じ窮迫の狀態である。が、然し、天然と境遇と生活とに徹底して、自己の內容を把握する鋭敏な神經を有しない人々に對しては、義雄は木石に向ふと同樣大した同情も起らなかつたのである。却つて、そのあたりの潮が吹きかかる岩の間、岩の間から、澤山のミソバへ並びに岩レンゲ――いづれも、熱帶產の植物の樣に、葉が厚いので、義雄の求めてゐるあツたかい感じを與へる――を一株づつ摘み取り、それを瀧と一軒家と自分等の馬に水を飲ましたとのなつかしい記念にした。

　幌萬川の橋ぎはで、小製材會社を見て、日暮近くになつたに拘らず、また三四里を進んで幌泉についた。そして、けさ、浦河の宿で貰つた繪ハガキ(宿を撮影した物、その他にはどんなのもない)を、約束であつたから、敷島と左近とに出した。そして、札幌で薄野を殆ど一口もかかさなかつた習慣は、

義雄をしてこの村の昔から有名な遊廓――と云つても、今は三軒しかない――を見舞はしめずには置かなかつた。

ここにはアイノ人がゐないと云ふ。その理由は、あつても、雜種ばかりだからである。日高は東になるに從つて火山灰がなくなり、火山灰がなくなるに從つて土地がよく、土人が消えて行く。アイノはいつもいい土地を發見する先導者であるが、それをよく開墾する努力をしないので、生存競爭上、いつも和人の爲めに追ツ拂はれて、そのあとを占領されてしまつた。

このあたり、牧場に牧柵がなく、耕地に却つて柵をめぐらしてある。年中雪が降らないので、最も自由な放牧を爲し、いつ馬の子が生れたかも知らず、また馬が山のおやぢ（熊）にさらはれたのも知らずにゐることがあるさうだ。義雄等は朝立ちの用意をしてゐるのに、一向馬が來ないのを怒つたが、僻遠の人が三里も四里も山奧まで馬をつれに行つてゐるからだと聽いて見ると、まんさら無理はないと思つた。

太平洋に突出する北海道の東南端、襟裳岬は、幌泉の宿から僅かに三里だ。そして東海岸に出るには、同道三難道の一なる猿留山道を踏まなければならない。

追分坂を歌別から庶野に越え、在田牧場の前をとほつて行くと、谷々の樹木は半ば紅葉して、その

間から、東海のあを波が見え隱れする。そして段々高いところ、高いところへ登つて行くのである。よくおやぢの出るところださうだが、生き物のにほひがするのは、義雄と、技手と、馬子の愛奴セカチと、それらが乘る馬と、ついて來た小馬と、しかなかつた。

如何にも寂しいからであらう、氣がせかれ、自然に馬をぼツ立てるので、馬子のセカチは義雄等に注意して、さう馬の尻を打つなと云ふ。早くつかれさせては、途中で倒れてしまうおそれがあるからである。

いよ〳〵猿留の難道に來たり、それを降つて見ると、俗に七曲りと云ふのは、その實、十三曲りも十四曲りもあつて、それがおの〳〵十間または二十間づつに曲り、何百丈の谷底へ落ちて行くのである。馬上から見あげ、見おろすと、ぞツとして、目も暗んでしまう。親の乳を追つて義雄等について來た小馬（三ケ月の）は、或曲り角で石ころに乘つて倒れ、すんでのこと谷底へころげ込むところであつた。

そんなにしてまでも、ポニイと云ふものは、てく〳〵と、どこまでも、親馬について來るのである。義雄は、これによつて、かの米國の文豪アヰングの書いたうちにあるリプヷンキンクルの子が、ぎやアぎやア泣きながら、リプの嬶アにつきまとふ形容に小馬を持ち出してあるのを思ひ出した。

猿留村に着したのは午後二時頃であつたが、驛遞ではつぎ馬がない、且、あすも十一時頃でなけれ

ば用意出來ないと云ふので、そこにとまるのも胸くそ惡くなり、勇を鼓して、もう一と驛さきまで徒歩することにした。然し二里半だと聽いたのが、實際四里あつたには閉口した。

一里ばかり海岸を行き、それから山道に這入ると、日高の國境を越えて、十勝になる。二人とも足は勞れて來るし、日暮れには近くなるし、薄暗い低林の間の葉は半ば赤く、紫色の花は既にしぼんだブシ（とりかぶと）の立ち並んだ道路を進み、屢屢小川を渡る度毎に、おやぢが出はしまいかと心配した。

義雄は、樺太の奥山に入る時、熊よけに、汽船から借りて來た汽笛代用の喇叭を吹いたが、さういふ用意がないので、下手な調子で銅鑼聲を張りあげ、清元やら、長唄やら、常盤津やら、新内やら、都々一やらのお淩ひをして歩いた。その功德によつてか、幸ひ、おやぢの黑い影も白い影も現はれなかつた。

然し猿留の七曲りに似たつづらをりを登る時などは、唄も盡き、聲もよわり、足も亦疲れ切つた。これを越えれば、もう直ぐだらうといふのを力にして、やツとのことで山の背まで達し、それから勾配のゆるい下り坂になつたが、今度はまた非常に喉が渴きからだ中びしよ濡れの汗が氣になる樣になつた。義雄は、勇から借りて來た厚い綿入れの胴着を通して、上着のおもてまで汗がしみ出した。

然し道に澤山生えてゐる小萩が、葉毎葉毎に露を帶びてゐるのは、それを見るだけでも實に氣持ち

がいい。それで思ひ出したのだが、義雄等が國境を越える時ちよッと雨に會つたのが、こちらでは非常なおほ降りであつたらしい。その名殘りで道もじぶじぶしてゐるし、萩の葉毎には滿れてこぼれる白露が置いてゐる。

その露を踏み分けて進むと、そのこぼれが靴を通して熱した足にひイやりと浸み込む。それが、義雄には、コップで冷水をがぶつくよりもうまい味であつた。

直ぐだらうと思つた晉調津がなか／＼來ない。薄暗くなつては來るし、道路にはまた雨後の溢れ水が一杯だ。水をよけて通るだけの勇氣も出ず、ただ一直線にびしやり／＼歩いて行くと、靴の中に水が這入つて、一しほ足が重い。畑らしいものはあるが人家は一つも見えない。

『もう、野宿なり、何なりしよう』とまで疲勞して、どろ水の中をもかまはずぶッ倒れてしまひたくなつた。

あかりが一つ見えたが、それも直ぐ隱れてしまつた。またその次ぎの驛へ進んでゐるのではないかといふ疑惑が起つたので、義雄は立ちどまつて、あと戻りしようかとも考へた。

義雄よりも一層疲れてゐるらしい技手はそれでも、土木技手だけに、流水の中にも開鑿道路をさぐり行き、草むらの間にも正當な新道をたどり行くので、初めは苦しまぎれにずん／＼先きに立つてゐ

た義雄は、ついに渠に從つて暗夜を僅かに進んで行つた。

漸く驛遞の家に着したので、あすの馬をあつらへ、そこから四五丁さきの宿屋へ案内されるまでがまた一里も歩く樣に氣が急かれた。

翌日、苔調津から廣尾に來て、そこで技手と別れ、義雄獨りの旅になつた。種馬試驗の爲めに巡回してゐる馬政官の一行も同じ方へ出發の爲め、驛遞の馬はすべてその方に約束濟みなので、義雄はアイノの家から競馬用のを借りて次ぎ馬とした。それが荒い馬で、頻りに驅けたがつた。

そこからは段々海岸を遠ざかるのであるが、殆ど何物にも會はない寂しい原野の、樹木と茅がやとの間に開らけた細い、しめツぽい道を風と水の響きとに急がせられて行く時、或小橋を渡る手前で、馬が急に戰慄して跡ずさりする。その一刹那に、馬上の人も戰慄した。そして義雄は自分と馬とが一身同體で、同一の神經が同一にかよつてゐるのだといふことを感じた。

「さア、おやぢだ」と覺悟すると、どこにゐるか見えないので、あとへも先きへも出られない。然し早く前進するに如かずと決心して、馬を蹴立てても、鞭撻しても動かない。馬が後ろへ曲げようとする首を手綱によつて引ツ返し、その手綱を兩手でぐツと引き締め、兩足で馬の腹を蹴ると同時に、

「行け！」一と聲高く命令した。馬は思ひ切つたかの如く前方へ驅け出したが、渠自身の怪しいと思つたところをよける樣にして驅けた。義雄がそこへ目を注ぐと、異樣な木の切り株が熊のうづくまつ

た形になつてゐた。

　それから、平坦な道路へ出た時は、その左右に槲の木が植えつけたかの様に生え、それが紅葉してゐて、ところどころ、雑草を切り開らいて、燕麥を刈り取つた跡がある野塚原野で、――この風景は丸で大きな造り庭と云つてもいい。冬になれば、然し、積雪が五尺に及ぶと云ふ。ひげ武者のアイノに道を聴いて後、義雄がこの紅葉した濶葉樹密接林の間を驅ける時、目をつぶると、その葉毎〳〵に當る風の音が急雨のやつて來るかと驚かれた。まして目を開らくと、遠くの山々にはあま雲が迫つてゐて、今にも降つて來さうな暗影を渠の頭上に投げる。

　一種のおごそかな寂びと戰慄とに追はれて驅け行き、豐似川を渡つたところの物品販賣所に一服した。この店は、山手の農家と、原野に澁を取る目的で槲の皮を剝ぐのを仕事にするもの等とを相手にしてゐる。ここで、かの馬政官の一行に追ひつかれたから、義雄はそのあとについて行かうと思つた。

　然し馬政官の一行は次ぎの宿まで行けばいいので、進みが如何にものろい。義雄はその乗り馬がまだ弱つてゐない上、けふ中に次ぎの、次ぎの宿まで行くつもりだから、無言で一行を乗り越した。すると、あとの方で、

『驅け足！』といふ聲が聽え、やがて一行はずんずん義雄を拔いてしまつた。渠は止むを得ず渠等のあとについて同じく驅け足をした。十餘丁ばかり驅けて、今度は、理由を述べて失敬し、渠等よりも

ずツと早く大樹に着したが、次ぎ馬の都合が悪いので義も亦そこにとまることになつた。音調津で注文してもなかつたビールがここにはあつたので、何よりもさきにそれを飲んで、元氣をつけ、怠つてゐた雜記三日分を手帳に控へた材料から一時に書き出した。そして、樺太以來、見聞と取り調べとを控へて來た手帳が段々餘地のなくなつて來たのをおぼえた。そして、勇にまた電報を打つても相變らず返事がない。

十月十日の朝、大樹に初霜が濃く置いてゐた。凍死馬追悼標といふのが立つてゐるのを見て、義雄は自分について來た馬子が兩足とも膝までしかないのを思ひ合はせた。この馬子はもと郵便脚夫で、大樹から以平まで四里半ばかり、その間に人家が一軒もないところを往來してゐたが、不意の大雪に會つて凍傷を起し、兩足を切斷されたのである。

不成功に終つた牧場の牧柵が朽ちツ放しになつてゐるのを左右に見て進むと、茅の中にはきり／＼すがうら寂しく鳴いてゐるし、カケスが澤山飛びまわつてゐる。山葡萄の黑い小粒な實が多い原野は矢ツ張り、槲の密接林だ。幅の廣い道路がついてゐるが、日に人が一人通るか、二人通るか分らない道であるから、雜草が跋扈してゐて僅かに一筋か二筋の細い路になつてゐる。

以平で馬を換へた時、ついて來る馬子もなくなつた。そして、三里半、また人家もない槲とすすきとの高原を進まなければならない。義雄は非常に倦きが來た。自分の神經までが單調子になつた。然

しそれが却つてよく單調子の天然に親しんで來て、見渡す限りの原野が孤寂な自分の自覺内に這入つて來た。すすきの野を出でて槲の林に入り、槲林を出でてまた薄の野に入る。それが馬上の渠にはどこまでも自分の神經範圍を進んでゐる。ただ乘り馬が荒馬なので、道を左右にそれて、なかなかすすきの間を出ない。通りがかつたアイノに手傳はせて、本筋へ引き出だし、うんといぢめてやつたので、やツと乘り手の自由になる樣になつた。

道が一直線に渡つてゐるので、倦んだ自分は獨り手に前進してゐる。思ひはうつら〳〵都の友人のことや、長くまたは近く會はない愛婦どもの上に馳せてゐると、馬も亦半ば眠つてゐたのだらう、つまづいて倒れかけた。氣がついて、義雄が手綱を引き締め、馬の重い首をあげさせると、また驅け出す。この時、渠は遠藤の云つた通り、馬は如何にも正直で、可愛いものだと云ふことが分つた。馬の戰慄は直ぐ乘り手に響き、乘り手の惰眠は直ぐ馬にうつるのである。

ふと見渡せば、義雄は青、黄、または紅色であや取つた大風景の中を進んでゐる。種々な色の競進會をとほつてゐる。晴れ渡つた天空の藍のもとに、馬上の人は黒く地に投影し、すすきのぼツとした穗は近く遠くかさなり合つて、うす綿を敷きつらねた樣な原野に、木々の枝葉は青に、淺黄に、黄に、赤に、また紅。山は遠く薄墨の遠近と高低とを以つてうねり行き、その後ろから幸震岳がかしらを現はし、眞ツ白に雪が積んでゐるのが見える。そして海上らしい方面には、地平線と相つらなつて、灰

色の雲が平らかに日光に輝いてゐる。

行く手の槲林をのぞんで急ぐといつまで行つても、すすきの野だ。そして、目の前に遠く、矢ツ張り、同じ樣な林が見える。いつそれに這入つて、いつそれを拔けるのか分らないほど、近よつて見れば、まばらな紅葉林だ。北海道の特色なる十勝原野のそのまた特色は、曾て氷峰が云つた通り、この以平高原だと、義雄は初めて感づいて見れば、なほ更ら名殘りが惜まれた。そして、暫らく馬をとどめると、馬の一と聲いなないたのが如何にも山野の靈氣を呼び寄せる樣で、自分ながら自分の孤獨の立たずまひに堪へられなかつた。

前驛もさうであつたが、幸震（ここも驛遞の一軒家しかない）でも、朝は、もう、ストーブを焚いてゐた。ここから二里ばかり來ると、人家や大豆小豆の耕地が多くなり、十月十日の午後、いよ〳〵帶廣に着することになつた。そして、廣尾からこちら（は十勝の郵便範圍だ）の雜記原稿を一まとめにして郵送した。

義雄は小百里の道を馬に乘つたので、僅か七八日のうちに可なり立派な乘馬術をおのづから實習したわけだ。然しそれ以外には、旅行といふ、義雄には、何と云つても止むを得さる一種の全人努力的な生活をして、その日その日を送つて來ただけで——さて、これから、汽車で歸札するとして、遠藤

た臨時道會の終りを待つて再び旅行に出かけるまでは、ぼんやりしてゐなければならない。

『お鳥のことなどは、もう、どうでもいい』と思つて、旅行その物の生命に親しむと、どうせ、臨時道會の終りまでにはまだ一週間もある。その間に、ガス深い釧路まで行つて見たくなつた。その旅費を送れといふ手紙をメール社の天聲へ出し、二日ばかり伏古、音更兩村に行つて、そこのアイノ部落とアイノ傳說等を研究した。そして、その結果が、出來ることなら、そこにこの冬を通して立て籠り、アイノ語を習得し、將に滅亡せんとするアイノ人種の古來有してゐた文學を收集したくなつた。

如何に考へても、東京へは暫らく歸りたくないし、その上お鳥が來てゐるに相違ないのであるから、さうする基礎をつくりたかつたのであるが、天聲から電報があつて、『スグカヘレ』と云ふのであつた。

十四日、帶廣を大雨の中に出發し、ヘケレベツ（アイノ語、清い水）をとほつて、新得から、十勝國境ののぼりになり、義雄等の列車に汽關車が前後についた。このあたり、ナラ、カシハが多く、その葉が赤くまた黃ばんでゐる間を、たまに榛の木の葉のどす青いのがまじつてゐた。見渡せば、右も左りも黃葉紅葉の賑ひで、その中に、蝦夷松または椴松の霜にめげない青針り葉の姿が、ここかしこ、枝をかさねて、段々にとがり立つてゐる。

このいい景色の大谿谷を義雄等の汽車は、大小六曲りも七曲りもして、雪よけトンネルをくぐりな

たゞさはらず、建てた家に住むことが出來ないのは、渠自身が實業をやらうとしても動きがつかず、殆ど住むところがない狀態になつてゐるのと、大した違ひはない。アイノ文學のやがて滅亡に歸しかけてゐるのを、またその文學が耶蘇敎的外人の偏見で硏究されてゐるのを、一つ、自分が正當に收集してやらうと云ふのも、つまり、自分も亦おのづからそんな劣敗者であるからのけちな思ひ附きではないか知らんと反省する。

『たとへさうだとしても、今のところ、止むを得ない』と、渠はまた考へ直す。そして、伏古並びに音更兩部落に於ける樣な好都合の案內者もなく、また笠もなく、じめ〳〵と冷える小雨の中を、相變らず見すぼらしい部落のあちらこちらを徘徊しながら、アイノ古謠『蟲のくどき』を低い聲で口ずさむ。

『アルクラン、モコラン、アクス、パイカラ、アン。』

乃ち、『一と晩寢た。さうしたら、春が來た』と。然し渠には、どうしたらいいか分らない冬が來かかつてゐるのである。

『クコロアペウチ（わが家の火神）、――ソイワアン、カモイ（そとにゐます神達。）』

と叫びたくなつた。が、然し、渠には、多神も一神も主義上、禁物である。

氣を轉じて、再び鐵道馬車に乘り、今度は、東京の砲兵工廠を除いては、わが國唯一のアルコール製造所なる神谷酒造合資會社旭川釀造場を見に行つた。資本金三十萬圓、一ケ年の釀造高六千石、賣

上高ほぼ八十萬圓。一石につき、賣價百三十五圓、そのうちに九十四圓の税を含む。原料は殆ど全く唐きびだが、馬鈴薯の時期一ケ月だけはそれを以つてする。用途はおもに火藥、セルロイド、模造皮などの工業向きだ。と、かう、義雄の手帳に控へられた。

三丈ばかり高さがある獨逸製の大酒精機を備へて、四時間に三石のアルコールが取れるさうだが、三階でそのしぼられたアルコールを受けるところを見ると、針のさきほどながらす管からただ滴々と垂れてゐるばかりだ。そして、フーゼリンを全く抜き取つたアルコールをナラのおほ樽に入れて置くと、樽の木地と和合して、純粹のヰスキが出來る。この過程は實にわが刹那主義のランビキにかかつた努力のそれと同じ様だと、義雄は觀じたのである。

そのさわやかなヰスキに醉つた勢ひで、渠は再び汽車に投じ、紅葉に有名な神居古潭まで來た。山と山とが迫つて來て、石狩川がその間を流れる。その一方の岸に添つて汽車が走るのであるが、この邊、槲はなく、ナラ林が四方に紅葉してゐた。

石狩川はそこに狹く深く流れて、その重くるしさうな水にくれなゐを浸すかと思へば、多少の傾斜を見せて、幾すぢも長い龍紋をゑがく。道を塞ぐ岩石の上にあふれて白絲の瀧を流すところもあれば、また、そびえる巖をめぐつて、飛ぶが如く行くところもある。また、川はばが廣がつて、水中に砂利

の洲を現じたり。その洲がデルタ型に高まつて、そこに紅葉樹が生えてゐたり。そして、川が大きくまはつて、萬面、紅葉の丸山をいだくところなど、赤い間にところどころ黑ずんだ椴松二三本の異を點じ、流れはふつ〳〵と白く泡立つてゐる。雄大ではないが、實にいいながめだ。

温泉宿を向ふに見て十町ほど來ると、停車場がある。それからは、高い絶壁の上を鐵道が通つてゐる。絶壁の下をのぞくと、川の水勢と精神とが清い油となつてうどみかかり、おほきな潭となつて幾重にも渦を卷いてゐる。このところ深さを量り得たものがないと云ふ。つまり、おもりで絲を垂れて見ても、底には岩石がでこぼこつツ立つてゐるので、六尺でとまるところもあれば、五十尺、百尺もさがるところがある。その上をとほつて、汽車が短いトンネルを拔けると、眼は潭を渡つて、ずツと上流を見通すことが出來る。兎に角、伊納から古潭の下流に至る七八哩の間が絶景だ。

この古潭の脇に、停車場から向ふ岸に渡る爲めの釣り橋が足場高くかかつてゐる。兩岸の岩に結んだ針がねに釣られてある有名な橋だ。然し針がねと云つても、電線の八番線が橋の上部に十六本、下部に十二本、都合二十八本通つてゐるのである。

『五人以上同時に渡るべからず』と書き附けた掲示が出てゐるのを讀んで見て、義雄はこの釣り橋のたもとで橋を渡るに躊躇しないではゐられなかつた。この制限を越えると切れる恐れがあるに思ひ及んだからである。それにまた、かかる制限が初めから附いてたものとすれば、もう、これまで何年か

の間に渡つた重みがその重みだけ今の針がねを弱めてゐるに相違なかつたからである。
たとへば、百ポンドの重みに堪へるだけの綱に百ポンド以上をかければ、その場にぷツつりと切れてしまうのは明らかに分つてるが、その百ポンド以下をでもたび／＼かけてゐれば、しまひにはその綱は矢ッ張り切れるものだ。そしてその最後の切れ時には、たツた一ポンドだけを以つても結着がついてしまうだらう。斯う思つて、渠は自分の今わたらうとする橋の針がねの緊張力がまだどこまで確かで、もう、どれだけゆるんでゐるのかと云ふことが、自分の人生その物に對する緊張不緊張の反省となつてゐた。そして自分の脚下にうづ巻く底も知れない深淵に臨んでると云ふ意識が、この反省と一緒になつて、自分を――まだ渡らぬさきから――ぐら／＼させた。

尤も、向ふから渡つて來る一人の人夫のゆらぎがこちらがはの銅線全體につたはつてもゐたので、それがこちらへ渡り切るのを待つて、

『あぶなくはないでしようか』と聽いて見た。そしてこの言葉を口に出してしまつてから、自分ながら下らぬことを聽いたものだと思へた。現に、渡つて來たものがあるではないか？

『…………』あざけるやうにこちらを見た人夫は、その脊に何本かのまくら木をしよつてゐたが、『わたしのやうなものが四五名一緒に渡つても大丈夫ですよ』と云つた。

『…………』不斷にもさう最初の制限以上に弱らせてあるのなら、こちらには一層危險だと見えた。

かの十勝高原を馬の脊で眠りながら驅けたほど大膽な自分が、こんな絶景とは云へ小さな景色の中にふるえをののくのをちよツと不思議に思へるが、それには、自分の内部生活に於ける立派な理由があつた。自分はあす歸れる札幌を放浪者の故鄕の如く、そして到着してゐるに相違ないお鳥やすすき野の女を家族の如く思ひ出してゐたので、この思ひ出に伴ふ自分の戀や事業や放浪その物がすべて自分の生活をその場に實現する虹であつたことが分る。ところで、ここにかかつてる羅曼的な釣り橋はその附近の山々の盛んな紅葉の光りに照りはえて、矢張り朱や靑に色取られたかけ橋である。それを自分が今や實際に空中高く踏みしめて渡りながら、また中絶え乃ち斷絶しやしないかと恐れるのは、寧ろ自分の失敗や弱みをそのまま又自分の悲痛な緊張に轉じさせる力ではないか？

　斯う考へて來ると、自分の足場が深い淵の上にぐら／＼しながら、ちよツと瞑目のうちに、この絶壁や周圍の山々までが根底から崩れる音も上流の水おとと共に聽えて、すべてが自分の内部生活なる幻影上の風景となつてしまう。そして自分の再び明けた目の中には、かの札幌郊外の豐平川に渡した鐵橋が昨年の洪水によつて中央の土臺を掘り起され、そこから傾斜中斷してゐるのが見える。そしてその斷橋がやがてまた自分の鐵の如く堅固な姿であつた。

　義雄の一本立ちのをののきはそのまま斯う自分の内部の覺悟となり、緊張となつて釣り橋を渡れたが、その橋を渡つて後ろを振り向くと、景色はまた全く新らしくなる。汽車道の山腹、絶壁の上のナ

ラ林。谷底に渦卷く深淵を隔てて、前方もくれなゐ、後方もくれなゐ。孤立の義雄は、雨中にも拘らず、姿の見えないゆふ日に照らされてゐた。そして、向ふ岸に立つてゐる一と本太いアカダモの高木を、自分の札幌以來外部的にもます〳〵育ちあがつた姿と仰いで見た。

溫泉宿は生憎割りの惡いところにあつて、家の前後はいい風景を支配してゐないが、前面の流水は兩岸の岩にぶつかつて白い布を見える限り流してゐる。室内にこもつて近く雨の音を聽き、遠く川の流れに耳をそば立てると、今しがた見てとほつた兩岸の紅葉が、あたら惜しくも、谷の下へ下へと流れ去る樣な氣がした。

その翌朝、目を覺ますと、きのふの淸さに打つて變つて、流れは丸で濁つてゐた。

兎に角、北海道の紅葉は槲でなければ、ナラだ。赤いよりは、黄ばみである。

『その紅葉の盛りが、もはや二三日過ぎた』と、宿のおやぢが云つて、やがて雪が五六尺この邊に積むとつけ加へた。義雄はこれを聽くと同時に、北海道の秋は短い、そして冬の來るのが早いと云はれてゐることを、最も適切に感じ出した。

渠自身の現在にも、もう、ぐづついてゐる餘裕はない。札幌までの切符を除いてはたツた十錢銀貨と二十錢銀貨とが二三枚自分のポケトに殘つてゐるばかりだ。名殘り惜しいが、止むを得なかつた。渠が再び釣り橋を渡り、神居古潭の停車場から汽車に乘り、札幌へついたのは十月十六日の夜だ。

二

『有馬君』と云つて、義雄ががらす戸を明けるが早いか、

『おう、待つてゐたよ。』勇も立つて障子を明け、『あの、お鳥さんが來てゐるよ。』

『さうか？』義雄は何げなささうに答へ、實は嬉しい樣な、賑やかになつた樣な心持ちを押し隱し、手早く靴を脱いでから、『あア、疲れた、疲れた』と云ひながら、のツそり立つて、二三歩這入つたところで、お鳥の方にちよツと目をやる。見おぼえの東郷お召の袷せにまがひ大島の紡績がすりの羽織をつけてゐる。

『………』お鳥は、お綱とさし向つてゐる爐ばたの隅から目をあげてかれを瞥見したが、直ぐ横を向いた。胸一杯の恨みがさきに立つて、いざと云はば、覺悟の柔術の手を出しもしかねなささうだ。

義雄はかの女がその鋭鋒を隱してゐる樣子を看破したので、わざと平氣で、勇とお鳥との間に坐わり込み、ポケトから卷煙草を一本探り出し、それに火をつけて、二三度うまさうに吹かす。その實、渠は吹かすばかりだから、煙草の味を實際に味はつたことは少いのである。

『どうだツた、れ？』勇が先づ言葉を出したのに答へて、

『苦しい目もしたが、愉快でもあつたよ。』

『それはよう御坐いました、ねえ。』お綱さんが愛相を云ふあとについて、お鳥はにが〳〵しさうに、
『愉快など、しなくてもえい、さ。』
『どうせ、僕の愉快は』と、義雄はお鳥の方へは向かないで、『苦しみ、さ。孤獨の自覺が宇宙を神經的に自己としてしまふその活動をやつてゐればよかつたのだ。』
『そして、それが出來たと云ふのか、ね？』勇のこの問ひには少なからぬ冷笑が含まれてゐると義雄は見たが、惡びれずに、
『無論、出來たと云つても、僕の刹那的燃燒が全人的に行つた時よりほかに、現實の眞理はないのだ。』
『まア、さう云ふ六ケしい議論は措いて、お鳥さんに挨拶でもし給へ。――それに手紙が來てゐた』と云つて、勇が一通を持つて來たのが、大野梅吉とあつて、敷島の本名梅代の手であるので、直ぐ義雄はふところへ入れた。今一つ、義雄の弟から勇に當てたハガキを見せたが、それには、もう、雪が降り出しましたとある。『樺太ぢやア、もう、雪が降り出したのだ、ね』と、義雄は云つて、『電報が來ないので、心配したよ。』
『いや、出したんだ、浦河へ――然し屆かなかつたと見え、君からまた問ひ合せが來たが、どうせ屆かないのなら、電報料だけが無駄だと思つて――それに、一緒に行つたといふ技手が君の革鞄を持つ

て來て、君は帶廣の方へまはつたが、もう、直き歸るだらうと云つたので――』
『それなら、分つたが、君がよこさなければ、これが』と、お鳥の方を見て、『よこす筈だと思つてゐたのだ。』
『僕の方はぬかりはなかつたのだ。そして、お鳥さんは兄さんのところへ行つてゐて今しがたまた來られたのだ。』
『それなら、それで止むを得なかつたのだらう。』義雄はお鳥の兄のゐる由仁を汽車でとほつたことを思ひ出した。
『樺太からのは』と、お綱が注意する。
『あア、あれはどうだ？』
『あいつは受け取つたよ。兎に角、君等に手數をかけて失敬した。――どうだ』と、初めて義雄は嘲弄の態度を以つて、お鳥を目がね越しに見つめ、『また男に棄てられて來たのか？』
『………』どう出るかと、息を殺して待ち受けてゐたらしいお鳥は、何、くそツと云つたやうにこちらを睨み、顏が赤くなるどころではない。血の氣が下つて兩手を膝の上で力ぶるひさせ、こちらを見つめる三角眼には青い底びかりがしてゐる。暫らくかの女の呼吸を計つてから、『そんなことはどうでもよろしい、早く病氣を直せ！病氣さへ直れば、もう、お前の世話などにならん。』

『まだ直らないのか?』義雄は止むを得ず笑ひにまぎらして、自分の方は疾くに直つたのを氣の毒にも思はれる。

『ふん』と、例の通り冷やかさうに鼻で受けて、『醫者にも行けなければ、直る筈はない、あんなに何度も手紙で云うてやるのに、手紙の意味が分らない人でもなからう?』

『そりやア、少くとも、お前よりは讀めるよ。』勇夫婦は思はずらしく吹き出した。

『讀めるなら』と、躍起になつて、『なぜ、その通り療治代を送つて呉れん?』

『送るにも、金がなかつたのだ。』

『それは、不自由なこともあつただらうが、賤業婦などに入れあげる金はあつても、わたしの方の約束は履行しないのですか?』

『ふん』と、こちらも鼻で受け、『有馬君から聞いたのだらうが、おれが女を買つたのは、米の飯と同樣、生活上の必要だ。おれは飯を喰はないで生きてはゐられない。』

『助平だから』と、お鳥は云つたが、あまり云ひ過ぎたと思つたやうに不自然にほほえむと、勇夫婦も亦きまり惡さうに笑つた。

『そして、加集は御無事か?』

『あんな奴ア見るのもいやだ!』

『ぢやア、それッ切り會はないのか』と云つて、義雄はその實際が疑はれた。あの後も一時は許してゐて、再び追ッ放されたのではないか知らんと思ふ。

『會ふもんか』と、お鳥は横を向いた。が、その樣子が義雄にはそらぞらしく見えた。

暫らく話は絕えた。すると、お綱さんが、

『さう喧嘩にばかりなつては、御相談も出來ますまいから、仲直りをなさつたら、どうです？』

『さう』と、勇も下向きにつき出してゐた首を引き、『どちらもおとなしく話し合つたらどうだ？』

『お鳥さんも男には負けてゐる方がよろしう御座いますよ。』

『…………』お鳥は、ふくれて、無言だ。

『いくらおとなしく話さうたッて』と、義雄はお鳥を見て『あの苦蟲を嚙みつぶした樣な面をされては——』

お鳥は勇夫婦と共に自分も吹き出した。が、然しまた負けない氣になり、意地惡さうに義雄を睨みながら、

『苦蟲でも何でも、病氣を直して吳れたらよろしい——病院に入れて貰ふ！入院さして貰ふ！』

『…………』義雄は優しくかの女の日を迎へ、この勢ひある言葉が女のからだのびくつきと共に跳つた樣なのを、もッともな云ひぶんであると受け取つた。どうせ、兄には恥ぢだから云はなかつたらうし、

ほかに世話してやる男もないとすれば、――そしてここまで追ツかけて來たのだから、さし當り、世話してやるほど親切な男はないのだらう――病氣の元が義雄自身なのが分つてゐるので、その罪ほろぼしとしてだけでも構はない、助けてやらうといふ氣になる。

東京からよこしてゐたかの女の手紙で見ても、或時はその痛みを火のつく樣に訴へたり、或時は丸で忘れた樣に一言もそれに云ひ及んでゐなかつたりしたのは、病氣がよくなつたり、惡くなつたりした證據だ。いツそ惡くてつづくのなら、覺悟の仕樣もあらうが、よくなつた樣でまた惡くなると、實にもどかしいもので、それが度々になればなるほど、病院がよひに飽きが來て、生きながら地獄に落ちた方がいいと思ふほど、身も世もあられぬ情けなさになる。

この不愉快と不自由とを義雄は、お鳥と一緒になる前に、經驗した。お鳥は一緒になつてから經驗して來た。そして、お鳥に就いて、義雄はまた、人の感覺の尋常な感應範圍を逸して、多少の滿足を得てゐた時代の方が長い。

現在と雖も、お鳥が病氣を訴へなくなるまでは、これまでの習慣によつても分る通り、矢ツ張り、その時代に屬することは、義雄の承知してゐるところである。そして、お鳥の東京出發までに、加集その他の男が再び出來てゐたものとすれば、その男が義雄と、同樣にこの承知をしてゐることが出來ない爲め、かの女を棄てたのだと思はれる。

さう思ふと、お鳥を如何に多情な女としても、身體の必要上、かの女には義雄が深く疑つてゐた樣な事件は、先づ、なかつたと推斷すれば推斷することも出來よう。渠は加集とお鳥との間にあつた關係でさへ、その後、寛大にも不問に附した。それまでに至らない關係なら、なほ更ら、再びお鳥が自分の胸中に飛び込んで來た以上は、敢て問ふにも及ばない。

加集の時は、義雄が自分から進んで行つて、お鳥との縒りをもどした。今回は、反對に、お鳥から來たのだ。と思ふと、兎に角、義雄が人に與へてしまふのを惜しがつてゐたものを、渠は失はなかつたのを嬉しくも思ふのである。

『兎に角、それでは、入院させる樣に金を拵らへて見ようが、さう、つん／＼してゐられちやアいやになる、ね。』

『つん／＼もする樣になつたのは、みなあなたの仕かたが惡いからです』と、お鳥は少しはやはらかになつて來る。

『遠藤議員に賴んで見るより仕かたがない』と、義雄は勇の方へふり向く。

『その位のことはして呉れさうなものだ、ね。』

『まア、早く病氣を直してあげて』と、お綱さんはお鳥と合圖するかの如く目を見合せてから、『何とか、どちらにも御都合のよくなる樣にきめておしまひなさるのがよろしいでしよう――？』

『さうしましよう』と、義雄もおとなしく受けたが、自分の留守に何かお鳥に入れ智慧をしたものと感づかないでゐられなかつた。『奥さん、もう遲いから休みましよう――僕等は一緒でいいです。』

『蒲團はありますよ』と、お綱が變な笑ひ方をして云ふのを聽き、義雄はその笑ひに就いてではないが、いつか、勇の叔母が來るから蒲團が不足すると云つて、ここを夜追ツ拂はれたことがあるのを思ひ出し、いやな氣がした爲め、何とも返事をしなかつた。

『では、休みましようか』と、お綱は所天の方を見た。そして、また言葉をつづけ、『初めてお目にかかつた時は、大變顏の青いお方だと思ひましたが、氣が落ちつきなさつたのか、けふなどは、色のお白い、美しいお顏をしてをられます、わ。』

お鳥は愛相笑ひをして、得意の樣子だ。お綱さんは寢床を敷きに立つた。義雄は洋服を脫ぎ初める。勇はしばらくお鳥と共に爐ばたを動かなかつた。

勇夫婦と別々な室に別れてから、義雄はお鳥を自分のそばへ引き寄せ、茶の間で相對した時とは全く別な心持ちになつた。

『第一、旅費はどうしたのだ?』

『兄の友達が來てゐたので、その人に借りて來たの――それは、直ぐ兄から返して貰つたから。心配

は入らない。』

『兄にはどう云つて置いた？』

『どうも云やせん――自分の親の家へ自分が歸るのだもの、當り前のことだ。それを姉は、他人だから、何とか、かとかけちな厭みを云ふので、兄はかげで、あんなことを云はれても、さう心配しないでをれと云ふて呉れた。あの東京で質に這入つてゐる衣物がないので、どうしたと聽くから、預けて來たと云ふて置いた。母のかたみだから、大事にせいツて――それから、下駄を買ふて呉れた。』

『實際のことが知れたら、なか／＼そんなあまいことぢやアないぞ。』

『その時は、お前もそのままにはして置きやせん、さ。』

『兄がおれを殺せるか？』

『妹の爲めだもの、殺す氣なら、どうしてでも殺す、さ。』

『ぢやア、やつて見ろ。』義雄はわざと一方の腕を出す。お鳥はそれへひどく嚙みついた。

『あ、痛い！』

『やかましい！』かの女は低い聲で、『聽えるぢやないか？』

『さう憎いのか？』

『憎いとも――病氣を直さないと、殺してしまうぞ。』

『然しおれが死んだら、お前の藥り代が出まい？』
『どうせ、こちらが死んでしまうお伴にするのだ。』
『よして呉れよ、そんなお伴は――さうして、今までどこにゐた？』
『いろんなことをしたのよ、お前が金を送つて呉れないから、道具などは賣つてしもたし、――喰ふにも困つて、電話交換局なら口があると云ふて呉れた人もあつたが、それでは寫眞が習へんし、――人仕事をして見たり、下女をして見たり――』
『どこの下女よ？』
『先生のところの。』
『寫眞學校のか？』
『うん。』
『くどかなかつたか？』
『くどかれた、さ。』自慢さうに笑つて、『然し矢ツ張り妻子のある人だもの。』
『それでもいいぢやないか？』
『お前で凝りたから、ね。』
『凝りたら、なぜ來た？』

『ぢやア、病氣には誰れがした？』

『初めはおれだらうが、あとは知らない、さ。』

『そんなことはない！』から云つて、からだをゆすり、顏をくしや〳〵としがめる。これは、かの女があまへたり、ことを胡麻化したりする時の表情であるのは、義雄のよく知つてゐるところだ。

『お前こそ大きな聲だ。――生徒の方にもあつたらう？』

『あゝ。』

『それと浮れ歩いてゐたのだらう？』

『そんなことはない、寫生の時は先生も一緒に行くから。』

『行かないで、生徒が勝手な寫生の時もあらア。』

『本當は』と、微笑しながら、『みな嘘よ。脚氣でもあつたし、ふき掃除などが出來ないから、やめて來たの。』

『遊んで、寢て、喰つてゐるにやア、病院が一番樂だらうよ』と、義雄は冷かす。

『ここの人もあなたをよく云うてをらんから、早く出る方がえいよ。』

『そのくらゐのことア、おれも感づいてゐらア、ね――然し、病氣はどんなだ』と、仰向けにだらけさせてゐたからだを横に寢返りする。

『年中、悪い、わ。』お島は顔を義雄に向けて『入院料の工面が本富につくの？』

一三

臨時道會が始まつてゐるので、活動家の遠藤長之助は朝から晩まで忙しいのにきまつてゐる。義雄は先づ第一に渠を訪問する爲め、朝早く出かけた。

遠藤は食事中であつたから、暫らく義雄を待たせたが、

『やア』と、出て來てさし向ひになるや否や、『どうでした？』

義雄は西舍の牧場で遠藤と西、東に別れてからの視察を、遠藤の仕事に必要なことだけ、簡單に語つた。浦河から樣似に至る山道は、西舍に至るそれと同樣、排水用意がしてないので非常に崩れてゐるところがあつたこと。冬島村字中山、オホナイあたりには殆ど道といふ道がついてゐないこと。また、とてもつけられないこと。各村役場に於いて、農、牧、漁業の狀態を取り調べたこと。襟裳岬附近では、雪が降らない爲め、最も自由な放牧をやつてゐること。猿留山道のこと。などは、すべて、遠藤が義雄に託した調査事項であつた。

遠藤は注意して聽き終つたあとで、

『それぢやア、どうしても、浦河からさきは本道路はつきません、な――よし、つけたところで、幌

泉までの狹い道でよいのでしよう。日高から十勝の聯絡は、あの猿留の難道が厄介物だから、矢ツ張り、浦河支廳の計畫線通り、あれをよけて通すより仕かたがない。』

『そりやアさうでしやう——あすこをまはる必要はないでしようから。』

『無論です、な——時に、十勝原野の紅葉はどうでした？』

『全盛でした——もう、神居古潭に來た時は遲過ぎたです。』

『さうでしやう、北海道の秋は短いものだ。』

『そして、次の旅行はどうなりました？』

『道會は一週間で終るのだが、それが濟むと、或會社の依賴で北見、天鹽の國境にある山林を見に行きます——さう、かうしてゐると、もう、雪が降り出しますから、なア——』

から聽くと、義雄はこれで關係がなくなるわけだ。

『なるほど』と受けては見たが、何かの關係で渠との間をつづけてゐなければ、北海道にゐる以上は、心細いものだと思ふ。渠は北海道の山川、原野をその短い秋に追はれて歸り來たり、而もまたこの室で、最後の秋に出會つた樣な氣がした。そして、もうこればかりが賴みだと云ふ樣に、『あの明き家買ひ占めの問題はどうでした』と問ふ。

實は、義雄が樺太にゐる頃から考へてゐたことで、空想の樣だが實行すれば出來ないことはない計

畫である。

樺太の明治三十九年、四十年度に於ける過度の發達は驚くべきものであつた。内地や北海道の資本家が、一攫千金の見込みで、おの〳〵數千、數萬金を投じ、數百人、數千人の人を使つて、漁業をやつた。その間に立ちまじつては、運送屋の小さい小僧でもちよツと手荷物ぐらゐを二三丁運ぶと、十圓札一枚は貰へた。金錢上の單位は十圓札で、それ以下は勘定しないと云ふあり樣であつた。

然し全體としてはさう方外の儲けにもならなかつたので、大資本家からして段段引き締まる樣になり、人委せではなく、自分身づから直接に建て網の監理をする樣になつた。そして、そのあがり高はすべて海上から直ぐお暇してしまうので、樺太に落ちる金と云つては、ただ小資本家なる雜漁者の手から落ちるだけになつた。その沈滯と同時に、大泊やマオカに於いて、非常に多數の新築明き家を殘した。大泊の如きは、政廳が豐原に移つたからでもあらう、全市の半數以上が無住になつてしまつた。マオカでも、三分の一はそれで、而も新築してまだ壁土も塗らないうちに放棄されたのも多い。そして、たとへば、四五千圓もかけて造つた女郎屋が、僅か二三百圓のはした金で賣り物に出てゐても、誰れも買ひ手がないほどのみじめな狀態にある。

あう云ふのを買ひ占め、そのまま取り崩し、運賃の安い和船か何かに積み込み、北海道なり、内地なりの港灣地へ持つて行つて賣つたら、必らず儲かるにきまつてゐると說明し、今回の旅行中に、遠

藤に賴んで、誰れか金主を見つけて吳れろと云つてあつたのである。

『あれは隨分突飛な計畫だから、突飛なことを好むものでなければ、話して見ても駄目ですから、なア』と遠藤は答へて、一人さういふ人物があるから話して置いたこと。それが義雄に會ひたいと云つてゐるから、會へといふことなどを語つた。

『直ぐにも會ひましよう』と云つて、その人の宿所などを聽き取つた上、義雄は云ひにくかつたが、いつか話した通り、東京から關係者が一人來てゐて、それを病院に入れなければならないからとうち明け、少しまとまつた金を借りたいことを述べる。

『どなたです？。』

『なアに』と、少し云ひよどんだが、『一人の婦人です。』

『それはお困りです、なア』と輕く應じて、遠藤は別に深く追窮することもなく直ぐ心よく懷中を開らいて見て、十圓札三枚を出し、『只今、これだけしか御座いませんが、御用に立つなら、どうぞ。』

『濟みませんが、それでは、出來ますまで――』

『なアに、御心配には及びませんせん。』

さう心よく出られただけ、義雄は、自分も亦單に北海道の新聞記者並みに取り扱はれてゐるのでは

ないかと、多少、不面目を感じないではなかつた。

『時に、あの』と、遠藤は一層ゆるやかに出て、『日高、膽振に關する話は、どうか早く願ひます、一度わたくしが目を通しますから。』

『あれは、けふにも書きあげてしまひます。』義雄は今回の調査結果に據り、遠藤の日高、膽振觀——浦河で演說したのも、その一部だ——を書き綴り、遠藤の勢力範圍に觸れてゐる北海道メールに掲載する責任があるのである。それでも丁寧に書いてやらなければ、今回の旅行に義雄がついて行つたことが、遠藤の爲めには、殆ど全く無意味な費用を投じたことにならう。渠には東京の文學者を隨行させて行つたことが既に一つの名譽となつてゐるのだらうが、北海メールの前後三十回餘に渡るべき義雄の『雜記』には、ただ遠藤の名を二三ヶ所に出してあるだけなのだ。

『それで、調査旅行は中止なさるとしても、北見天鹽の山林との御話で思ひ出したのですが』と、義雄はこれも一つのつなぎだと思つて、さきに物集北劍の手から出た書類で、かの小樽の漁業家松田に照會して駄目であつた土地の件を持ち出し、『わたくしの知つてゐるところに、成功調査に危うくなつてゐる土地がありますが、どうです？』

『どこです？』

『矢張り、天鹽で、何とかナイといふ川添ひの未墾地です。』

『何坪ばかり?』

『二百三十萬坪ほど。』

『ざッと七百七十町步――面白いでしよう、それに關する書類があるでしようから、見せて貰ひたいものです。』

『それは、あなたも御存知でしよう、物集北劍君、あの人の手にありますから、けふにも取り寄せましよう。』

『物集君は今どこにゐます?』

『大通り七丁目の角です――』

『ああ、まだあすこにをりますか?何をしてをります?』

『今では、遊び半分に、自分の本籍地の村落の合併問題に運動してやつてゐた筈です。それに、元の北辰新報の殘務整理がある樣です。ゆふべ歸つてから、まだ會ひません。』

『お會ひになつたら、よろしく』と、遠藤が云つたのに答へて、

『かしこまりました』とは云つたが、現在、社會の表面に活動してゐる遠藤と、失敗殆ど地にまみれて浪人してゐる北劍と、たとへ仕事は違つてゐたにしろ、曾ては丸でその名聲が轉倒してゐたと云ふ時代もあることを思へば、義雄は北劍の爲めにそのいつまでもぐづ〳〵して、止むを得ないからでも

あらうが、朝顔をいじくツてゐたり、酒ばかり食らつたりしてゐるのを氣の毒に思ふのである。

自分はまだ北劍の程度まで落ちてはゐないが、自分の父の遺産をつぎ込んだ樺太の事業が失敗になつた上、その協同相談も駄目になり、木材屋の計畫もうまく行かず、鐵道官吏の加藤から話のあつた牧草地も見込みなく、多く消極的だが、兎に角、努力した旅行も馬術の練達と馬に親しみが出來たばかり、これで中止になるとして見る。

また、その上、今回の明き家買ひ占め問題や天鹽未墾地のことが矢ツ張り駄目となれば、もう、いよいよ北海道の秋に追はれて來た通り、また金の不足に追はれて一たび決心した歸京をいよ〳〵斷行しなければならない。

『折角、お鳥も來たから、一緒に越年すれば出來るのに！』かう思ふと、『今一つお頼みがあるのです』と、義雄はせめて一年なりとも北海道にとどまつて、アイノ並びにその文學を研究するだけの補助を見付けて呉れないかと云ふ提議を遠藤に持ち出す。

これは十勝アイノの部落を調査してゐた時、ふと義雄のあたまに浮んだ考へで、その調査中に、宣教師バチエラの研究には、偏見と不徹底とがあるのを發見したこと。日本人として、アイノ研究を十分にやり通した、またやり通すつもりでゐる學者がないこと。東京の帝國大學には、アイノ語學者を

以つて任ずる人もあるが、すべてがバチエラの糟粕を嘗めてゐるものばかりで、それも半可通に滿足してゐること。土人教育など云つて道廳などが尤もらしく國費を無駄に使つてゐるが、アイノ人が敎育されて半可通のシヤモカラになつたとて、何の効能もないこと。日本の戸籍に敗殘人種の雜種が出來るのは大してありがたいことでないこと。どうせ、敗殘劣等の人種だから、義雄の生存競爭を是認する生々主義から云つても、保護したり、敎育したりする必要がないこと。その代り、一時それがわが國の本土の三分の二までも占領してゐた時に出來たその文學（傳說並びに歌謠）を、渠等の永久な生命と見爲して、原語のまま丁寧に收集してやるべきこと。渠等の史詩もしくは戰詩なるシヤコロペやユーカリを非專門的には粗雜に譯したのはあるが、まだ本當によく詩的、文學的頭腦を以つて原語通り寫し取つたものも譯したものもないこと。そして、それを義雄がやつて見たいことを語り、手帳に控へてあるアイノ歌謠のうちから、『ヤイシヤマネ』を取り出し、その原文を下手ながら歌ふ。

『ヤイシヤマネーナー
ヤイシヤマネーナー
クコロ　ポン　カンピ、
ヤイシヤマネーナー
ヤタ　アララ？』

『かう云ふ風なものもあります』と、義雄はその意味を說明する。ヤイシヤマネーナとは『悲しやな』、クコロポンカンピとは『わが年若い帳場』、ナタアララとは『どこへ行つた』と云ふことで、若いメノコが漁場の帳場さんなる和人を愛してゐたが、その和人が內地へ歸つたのを戀ひ慕つて歌つたものである。アイノの哀歌の始めと稱せられ、餘りそれが流行したので、のちには、ヤイシヤマネといふことが直ちに流行唄の意味に使はれるやうになつたことまで附言する。

『それも面白いことでしようが』と、遠藤は受けて『さういふことに金を出す特志家は今日ではないから、道廳にでもかけ合つて見ましようし、またほかに仕事もあるか知れませんから、いづれメールの社長が歸つたら相談して見ます。』

メールの社長は衆議院議員として、今、陸軍の演習に參加してゐるので、今月の末でなければ歸らない。餘り勢力ある人でもないから、その相談は當てにならないと思つたが、

『兎に角、それではよろしく』と云つて、義雄がそこを辭する時、遠藤は、明晩西の宮支店と云ふ料理屋で、北見から構習の爲めに出て來た小學敎員どもを招待するから、その席へ巖本天聲と共に來て呉れろと賴んだ。

その足で、義雄はそこから最も近い北劍の家へ行つた。午前九時頃であつたが、北劍は酒に醉ツ拂

つてゐた。

當地では花が後れて咲く朝顏も、もう過ぎてしまつたので、敗殘者たる渠の樂しみは酒のほかに何もないのは、義雄も推察してやらないわけではない。然し、如何に渠自身の所謂浪人はしてゐるにせよ、細君がもとの勤めをしてゐた時代の青臭い部屋ではなし、朝から酒に醉ツ拂つてゐる北劍の狀態を氣の毒に思はざるを得ない。

『だ、だ、だ、だ、誰れぢや』と、北劍はどもりと醉ひとの爲めに呂律がまはらない。細君のお豐さんの招ずるままに茶の間へあがつてゐた義雄の方を見て、渠は客間で寢ころんでた肥大のからだを半ばもちあげた。天鵞絨の襟のついてゐるメリンス友禪の夜着が渠の胸から下にかかつてゐる。

『田村さんが旅からお歸りになつたのです』と、お豐さんはやわらかい物腰で所天の問ひに答へる。

『そ、そ、さうか』と、またぐツたりなる。

『…………』渠があれだけになるには、二三升を越えた、な、と義雄は思ひながら、『朝からえらいですね。』

『本當に困つてしまひます——時間構はずですから、なア。好きなものを好きに戴くのですによつて、構ひませんけれど、度々人さまに失禮致しまして——』

『なアに、酒ですもの、お互ひです』と、義雄はかの女と暫らく旅の話をする。そして義雄が帶廣に於いて、メール社支局の記者や、旭川新聞並びに釧路新聞の出張員等と一緒に料理屋へ行つた時、そ

この藝者が義雄を誰れか當てて見よとその地の記者等に云はれ、島田さん（氷峰のこと）か、さなくば物集さん（北劍のこと）かと答へた事實を語つた。すると、お豐さんは嬉しい樣な口つきをして、

『島田さんも、うちのも、一時はあすこまで幅が利いてをりましたから、有名な記者だと思うて、あなたをさう推じたのでしよう――然し、もう、新聞社はいやです、なア』と、いつもの繰り言が出る。かの女は、勤めてゐた時から、自分の金をいくら新聞社につぎ込んだか分らないと云ふ回想を、いつも忘れられないのらしい。

『それもうまく行けばいいですが』と、義雄は云つて、筆戰上の敗北が北劍をしてかういふ狀態の浪人にさせたと同時に、もとは苦勞人だけの垢拔けがしてゐるお豐をもこのヒステリ的な痩せぎすにしたのだと考へる。

氷峰がたまに山くじらや兎の肉を山から貰ふと、第一に北劍の細君に喰はせたいと云つて持つて行くのを義雄が思ひ起すと、さうするのは、必らずしも、北辰新報時代に女郎買ひまでの金をお豐に世話になつたと云ふ爲めばかりでなく、實に、現在かの女が病身になつてゐるのを可哀さうに思つてであらう。そして、義雄も亦感心してゐるのだが、如何に今の所天にばかりうち込んで――かの女はどんなお客をでも振つてしまうので有名であつたさうだが――一緒になつた女だとは云へ、今日の樣な榮えない狀態をよく辛抱してゐる、と。

貰ひ娘は小學校へ行つて、今、ゐない。客間からは、北劍の雷の如きいびきが聽える。そのいびき聲を聽いて、義雄は、四十づらの朴訥漢北劍が、また今日も、その苦心と全盛との時代に今の細君に可愛がられたことを思ひ起し、氷峰が曾て義雄に語つてきかせた通り、その盃を持つたまま、無言沈默のあひだに、悲痛淋漓の感に打たれて、ただ一と聲、お箱の『ああ、醉うた』を詠んだ、な、と思ひやる。

『お父さん、ちよツと起きたらどうです？――お父さん――お父さん』と、お豐さんがそばへ行つて呼び起す。

『う、うーん』と、北劍は寢たまま延びをする。

『ちよツと起きたらどうです？』

『……』渠は無言で目をぱツちりと明けて、お豐の顏を見る。肥大な男に似合はず、目は大きくツて、なか〱に可愛いところがある。

『田村さんが何かお話があるとおツしやつて待つてをられます。』

『さうか』と、北劍は身を起した。そして、『失敬した。失敬した。』

『なに、そのままでもいいんだよ。』義雄は爐ばたから云ふ。

『まア、こツちへ來給へ。』北劍は夜着をわきへかい遣り、床の間のそばへあぐらをかく。

『折角寢てゐるところをすまない、ね。』義雄は客間へ入り、渠と向ひ合つて、洋服のあぐらだ。お豐は所天のはねのけた夜着を方づけてゐる。

『いつ歸つた？』

『ゆふべだ。』

それから、どうであつた、からであつた、誰れに會つたか、彼れと話したかといふ樣なことの問答の末、義雄は、

『實は、いつかの書類、ね――天鹽の土地に關する。あれを遠藤君が見せて貰ひたいと云ふのだが――』

『あれか？　あれは駄目ぢや。僕の方にも見たいと云ふものがあつたので、一旦返したのを、こないだ、取りにやつたら、とても話しにならん。』北劍が語るところに據ると、あの土地には二三名の關係者があつて、それが互ひに喧嘩をしてゐるので、なか〳〵まとまりさうもない。そして、そんなものに手を出すと、却つて面倒になるばかりだから、向ふから世話を頼んで來た事件だが、今では、取り合はないのである。

義雄は歸來早々また一つの考へが出來なかつた。歸らうとすると、

『まア、一杯やつて行き給へ』と引きとめられ、止むを得ず暫らく腰を落ちつけた。

然しそこを出てから、途々考へると、北劍はどうしても敗殘者だ。一方には、遠藤を初め新進の人人がずん〳〵出て來た北海道に於いて、渠等の不得意な筆戰場裏に再び立つのなら知らず、直接に政治界へ乘り出す如きことは、とても出來さうに思はれない。

そして、義雄も亦自分がそれに類して行くのではないか知らんと思ふと、生存競爭、自然淘汰、優勝劣敗、適者生存、更らに進んで渠自身の所謂適者獨存などいふ言葉と共に、樺太の山林が目の前に浮ぶ。

樺太全島の山にして、火事に會はなかつた個所は殆どない。多きは、二三度から四五度も燒かれたところがある。そして一たび山火事があると、その跡に先づ白樺が生える。それが育つと、その蔭に椴松や蝦夷松の芽ばえが出る。そして、それらの松の大きくなるところには、樺はその繁殖を停止してしまう。その松林が燒けると、パラやイチゴや羊齒類の坊主山になるが、そこに少しでも熊笹の根があると、すべてがこの笹の繁殖の爲めに征服されてしまう。

すると、また考へが人種問題ともつれ合つて來て、樺太のギリヤク人種やアイノ人種は白樺のたぐひで、同島に權力を振つてゐた露西亞人は松の種族だ。それが日露戰爭といふ山火事に遇つて、パラやイチゴや羊齒に當る日本の軍人、漁師、土方などが入り代り、それらがまた熊笹に當る着實な日本人に統轄されかかつてゐる。

草木は草木で競爭し、人種と階級は人種と階級で競爭し、人間はまた獸類と競爭する。北海道には、狼がゐなくなつた。それは一時道廳が懸賞を以つて退治したにも由るが、その最もおもな原因はアイノが狼の食とする鹿を取り盡したことだ。そして、そのアイノを今や和人が窮追して、敗殘劣等の人種にしてしまつた。

義雄は北劒の落ち入つてしまひさうな運命に思ひ合はせて、自分も渠と共に第二のアイノ人の部類に這入つた樣な幻影を浮べたが、その慘憺たる幻影の中にも自分はまだ最後の努力をしてゐるのを心丈夫に感じつつ、大通りに添ふて東に進み、北一條に曲り、東二丁目に、遠藤の指定した人を訪問する。

一四

遠藤の指定した畑中新藏の家も、遠藤のと同じくなか〳〵門戸を張り、部屋部屋もその體裁を飾つてあるが、遠藤の樣な實力がないかして、どことなく、義雄に空虛を感じさせた。床の間にかけた抱一も本物らしく受け取れない。

おほきな瀬戸の圓火鉢を挿んで、主人の新藏は義雄と相對したが、肥大なからだに肥大な聲、挨拶振りが如何にも横柄なので、この田舍者め、おれをまだ知らない、な、と義雄は第一に輕蔑の念が生じた。そして、

『實は、遠藤さんからのお話があつたので來たのですが、どうです、あの件は見込みをつけて、やつて吳れられますか？』

『見込みがあるから、お目にもかかりたいと云うて置いた。』

『なアに、僕もお宅へあがるのはわけのないことですが、これまでにいろんな計畫がすべてぐれたので、今回のも、どうせ、當てにならなければ、初めから御相談するまでもないのです。君に方針がついてゐれば、一つ、やつて見たいと思ふだけです。先づそれから伺ひたい』と、義雄の態度が普通に相談を持ちかけて行く人々の樣でなかつた。

『そりやア、君』と、畑中は少し狼狽して禿げたあたまを一つさげて見せて、『いよいよやり出せば、大事業と云はねばなるまい？さう性急に云はないで、ゆツくり話して見ようぢやないか？』

『無論、御方針のつくことなら、御相談したいのです。』

『實は、わたくしもいろんなことをやつて見て、失敗つゞきなのぢやから、さういふ突飛なことで一儲け恢復をしたいと思うてをるので――』

『では、申しますが、それも遠藤さんに話して置きましたから、大體御承知でしよう。注意してやりさへすれば決して損のない事業です。』義雄は先づその大泊から明き屋を買ひ初め、それをそのままにつぶして船につみ込み、小樽なり、函館なり、青森、酒田、新潟なりへ運ぶ順序と手段とを說明する。

そして、マオカなどは自分が實際に行つてよく知つてゐるから、種々の便利があることを語つた。
『何回にも切つてやれることぢやから、先づ、買ひ占めに一萬圓と見て、あとは船ぢや――汽船は金がかかるし、まア、うまく相談がつけば、帆前ぢやが――』
『無論、帆前船ならいいでしよう――然しそれも費用がかかり過ぎると云ふなら、少し大きな和船で間に合ひます。』
『そりや、それでもえい、なア――船の方には、關係がないことはないから、一つ、當つて見ましよう――兎に角、よく考へて見ねば事業と云ふ奴は兎角越中ふんどし的だから、なア。』聲高く『は、は、は、は!』と笑ふ。
『何がをかしいんだ!』義雄は心で矢ッ張り輕蔑をつづけ、わざと、圓い目をして主人を見守つたが、また、ほんの、おつき合ひに口だけゆるめて、微笑をする。そして『では、どうか、御熟考を』と、そこに力を入れて、『願ひたいものです。』
『承知しました――よく考へて見ましよう。』新藏はこれで用談は濟んだと思つたのか話頭を轉じて、その態度をうちくつろがせ、『わたくしも日露戰爭の時には儲けそこねました。』或筋から内命が下だつて、露領の沿海洲まで、日本ではまだ本當にやつてゐない遠洋漁業の組織で密漁船を出す計畫を、自分が仲間に這入つてやりかけたこと。密漁と云つても、軍艦が保護して呉れると同時に、その獲物は

直ぐ軍艦の食糧に買ひあげられる筈になつてゐたこと。安全に利益を占め得られるのだから、汽船持ちを說きつけて、いよ〳〵出發するまぎはになつて、平和談判に終つてしまつたこと。などを語つた。

然し義雄は新藏が現在何をしてゐる男であるか分らずに引き取つた。

義雄はそこを出て北海メール社へ行き、自分の歸札を報告がてら天聲に會つた。そして、

『僅かの旅費を送つて吳れたら、釧路まで行つて來られたのに。』義雄が責める樣に云ふと、天聲は、

『なアに、僕は心配したのだ。遠藤君にも會つて聽いて見ると、帶廣までに君の爲めばかりに小百圓もかかつたから、またさう使はれたら困ると云うて、社が早く呼び返せと云ふので、あの電報を打つたの、さ。』

『社としては、初めの二十圓しかまだ出してゐないぢやないか？それに、僕はただ一回幌泉で遊んだ切り、何も無駄な使ひ方はしなかつたぞ。』

『それはさうだらうけれど――』

『無論、君のせいぢやアないが、餘りメール社がけちだ、人のふところを目あてばかりにして、さ。――然しさう分れば、それでいいが、實を云ふと、君が帶廣へ二日間も返電をよこさないので、癪にさわつたから、原稿を中止しようとも思つたのだ。』

『まア、さう云はずに、僕の心配も思つて吳れ給へ。それに、社長が歸れば、また何とか考へもあら

うから――』

『然し、そりやア當てにならないよ。ここの社長が歸つて來れば、僕も會つて置くことは置くが、餘り勢力もなく、またけちだから、社が却つて持てないのだと云うではないか？』

『そりや、事務の方がけちなのだ。考へても見給へ、二三年間に二度も燒けて、兎に角、これだけの新築が出來たのではないか？月々の發行部數で云へば、優に毎月儲けてをるのだが、負債を返してをるのだ。』

『そんなことアどうでもいい、さ――然し、僕は僕自身の旅行中にやつて來たことだけを、君にしろ、社にしろ、正當に認めて呉れたら、それだけで先づ滿足だ――東京の一文士――僕は文士と云ふ名詞を嫌ひだが――それが、社や道廳や人の金で、諸方を喰ひつぶしてまはつたと思はれるのは御免だから、ねえ――』

『そんなことはない――君の行つた跡、行つた跡へ新聞を無代配布もしたし、世間でも評判がえい樣だ。留守中の社長代理も面白いと讃めてをつたぞ。』

『讃められるのが僕の目的ぢやアない――僕は、貧乏な社が僕に盡しただけの金錢と勞力に相當した働らきをしたと、認められればいいのだ。』

から云ふ話をして義雄の心が多少落ちついてから、暫らく旅行中の話に移り、帶廣で天聲の名がち

よツと役に立つた切り、ほかでは、決してそれを出さないで濟んだこと。旭川でも、メール支局の主任は既に陸軍演習の地に向つた留守で、却つて、反對の新聞社に紹介して貰つて、アルコール醸造場を見たこと。十勝原野や神居古潭の紅葉がよかつたこと。北海道の智識は天聲よりも廣くなつただらうといふこと、などがあつた。

『それから、思ひ出したが、浦河に歡迎會があつた時、頻りに君のことを聽いてゐた藝者があつたよ』と、義雄は天聲の顏を見る。

『誰れだらう？』天聲は得意げに首をひねる。

『月寒にゐたらしい――』

『分らない、なア――』

『おい。』義雄は應接室の椅子を立つと同時に、天聲の肩を不意に輕く叩き、『唐變木の木強漢も、なかなか油斷がならないぞ。』喜ばせ半分にからう云ふと、

『さう、さ』と、天聲もわざと反り身になつて、武骨な澄ましかたをする。

それから、渠は北海實業雜誌社へ行つた。氷峰は空知支廳へ出頭して留守だ。用向きを聽くと、昨日、公布された同支廳管内の山林拂ひ下げの一部を受けようとする運動だ。渠も亦いよ〳〵窮して來て一かばちかの勝負を仕出した、な、と義雄は微笑した。

雜誌の第二號も、社長の川崎がまた禿安の手を經て苦しい苦面の末、漸く昨日印刷屋の手を離れると同時に、發送濟みとなつたさうだ。會計の話によると、地方の廣告料並びに雜誌代を收集すれば、樂に第二號も行く筈であつたが、氷峰が初號からさうけちな催促をしてゐては、社の體面と信用とに關するからと云つてほうつて置くさうだ。

それを會計が、頻りに川崎から小言を喰ふと云つて、こぼした。義雄も初めから氷峰のやり方を緩漫とは見てゐたが、會計をなだめるつもりで、

『まア、氷峰君の考へもあるだらうから、やらして置き給へ』と云つた。そして、自分の短篇小說『金』といふものが載つてゐる雜誌を二三部取つて、有馬の家へ歸つた。

勇は學校から歸つてゐたので、渠を捕らへて義雄はお鳥に語るべきことを間接に渠に語り、遠藤が相當な金を出して吳れたことが分ると、お鳥は直ぐこれから兄のところへ行き荷物を取つて來るから、あすからでも病院に入れて吳れいと云ふ。

『それがいい、ね。』勇はお鳥に云ふともなく云つて、どことなく、もぢ〳〵して義雄の顏いろを伺つてゐたが、『それで、こないだ中から話したかつたのだが』と、急に固くるしい口調になり、然し下を向きながら、『僕も君が暫らくだと思つてとめてゐたが、ね――』

『……』いよ〳〵出たと、義雄は目をきよろつかせたが、わざと平氣で聽く風をしてゐると、お鳥の方が渠に代つて顏を眞ッ赤にして、額にしはを寄せる。

『長くもなるし、またお鳥さんが入院したら、その近處にゐる必要もあるだらうし、だ』と、勇は背を延ばして義雄の顏を見た。然し、云ひにくさうにまた橫を向き、煙草にまぎらせながら、『僕の方も君が知つてる通り餘裕のある暮しではないから——さう〳〵世話もしてゐられないし——云つて見れば、まア、斷わりたいのだ。』

『よし、分つた。』義雄もはツきり答へて、『これから直ぐ僕は下宿屋を決めて來る！然し君に斷わりを云つて置かなければならないが、君の家にも隨分世話になつたから旅行前に渡したかはせだけで間に合はないかも知れないが——』

『いや、あれは出來次第返すよ。』

『返せと云ふのではない、僕の札幌滯在が長くなつたのは長くなつたが、氷峰君のところにゐた方が多いので、それでなければ、遊廓で——その多い方にもまだ禮はしてないくらゐだから、君の方も待つて貰ひたいのだ。』暗にあれだけやれば十分ではないかと云ふ意をほのめかした。

『さう惡く思はれると、困るが、ねえ——』

『惡く思ふのではない、さ、はツきりした區別は立てて置く必要がある。無論、友人としての間から

は金で勘定は出來ないが、僕に對する有形的な關係は、僕も都合がよくなり次第埋め合せをつけるつもりであつたから。』

この話がある間、お綱さんは用にかこつけてか、裏の方ばかりにゐて、出ては來なかつた。

お鳥も、一つには、義雄の出て行つた留守を獨りでここにはゐづらくなつたのだらう、直ぐ出る汽車のあるのを幸ひ、――あす、でなくば、あさつて歸る約束で、――兄の方へ立つた。札幌區立病院に這入ることは、かの女がけさ行つて既に獨斷で決めて來た。そして、そこの三等室なら、森本春雄も這入つてゐて、義雄はよく知つてゐるので、贊成した。

義雄はその病院の前にある下宿屋の、四疊半に爐を切つてある部屋を約束した。そこへ荷物と云つても、づツくの革鞄だけだ――を運んでから、前の病院へ春雄を見舞つて見た。

『意外に經過の長いには困つたよ。』春雄はまだ寢臺の上に寢てゐて、話をする。然し鼻を中心にした顏中の繃帶は取れてゐた。『から長くなるなら、今年の精算をしてから這入るのであつた。鰊の方が十五萬圓、鮭鱒の方が五萬圓、それがどうしても四五萬の利益はあがつてをる筈だが、どうも、まだ精密な勘定が出來ない。

『然し、もう、よささうでないか？』

『もう、直き退院が出來るが、大將は遊んでばかりをつて、僕にまかせ切りで困る。今、釧路へ行つ

てるが、あすぐらゐここへ來る筈だ、——會ひ給へ。』

『會はう』と、義雄が答へたが、丁度その松田が來るのを幸ひ、森本から云はせて少し金を借りるつもりである。實は、お鳥が來て、かう〳〵いふ次第だとうち明け、遠藤から借りただけでは心細いし、そのうちには、何とか道がつくからと云ふ。

『兎に角、話して見よう。——然し、君のにも會へる、ね』と、春雄は笑つて云つた。

然し義雄はそれには餘り立ち入らず、旅行中に見た槲の皮剝ぎ並びに澁取りの新事業や、アルコール製造場のことや、牧場や未墾地の遊んでゐるのが多いことや、火山灰の利用方法などを話すと、年若い春雄の心は踊つて、

『早く獨立して、僕も何かやりたい』と云ふ。渠はおほきな漁場の帳場をあづかつてゐるだけに、僅かの給料で束縛されてゐるのが面白くないといふ心持がそのたださへ血の氣の少い病顏にも見えた。

そして、その無聊の感に湧き立つ若い血が、春雄の繃帶の取れた跡の青い顏にほとばしつたのを見て、義雄も亦、自分の深い胸の奥に於いては、溜らないほどの競爭心をふり起した。

一五

札幌區立病院は、——義雄が有馬の家から散歩がてら出ると直ぐ横手に當るので、這入つて時々瞑

想に耽つたことがある農科大學附屬博物館の、はびこつた牧草や、背の高いアカダモや、ドロや、柳やの多い、その廣い構內の東南端に接して、——北一條七丁目の一郭の、廣く長く、まばらな鐵柵をめぐらした中に立つてゐる。白塗りの大きな西洋造りである。

この嚴格な建て物の正門に向つた粗末な一下宿屋に、義雄は陣取りをきめたのである。渠の好きな錢湯も、その隣りに床屋つきで、直ぐそばにある。而も、それは渠が樺太から有馬の家に着して、初めて、久し振りに、東京に於けると同じ樣なくつろぎを以つてそのからだを洗つたところである。旅で隨分延びた髮を五分刈りに刈らせ、入浴して來てから、義雄は夕飯に初めて自分の下宿屋の食を喰つた。

『お鳥はまだ汽車の上だらう』と考へて、自分の獨りが寂しくなる。火がつくと、直ぐまた宿を飛び出し、その北一條通りを右へ一丁ばかり、巖本天聲の家を過ぎ、左りへ曲つて、道廳構內の白揚樹下を、今は、もう新らしい感じを起さないと考へながら通り拔け、それから北四條一丁目の氷峰の社へ行つて見た。渠は今、岩見澤から歸つたところで、編輯室に於いて、和服できんたま火鉢をしてあたつてゐる。

『さう寒いのか、ね？』義雄が不思議さうに聽くと、

『なアに』と、氷峰はにこつきながら、髮を分けてもないのが芥子坊主の樣に見えるあたまをくろり

と一つまわして、ぬツと義雄の方へ顏を向け、『北海道人はこれがただ習慣の樣になつてをるのぢや。』かう云つて、まだその腰を動かさない。

『どうだ』と、義雄はそのそばにあぐらをかき、『山林拂ひ下げはうまく行きさうか？』

『土曜日であつたから、後れて駄目よ――空知支廳長の宅へも行つたが、來客が多いので、ゆツくり話も出來なかつた。』

『支廳長は忙しいものだ』と、そばにゐた一社員が云ふ。

『なアに、あいつらは新聞雜誌記者にはあたまがあがらない、さ――わざと安く拂ひ下げなどして、自分等がその間で口錢取りの樣なことをやるのぢや。少しおどしつけて、えい土地を取つてやらうと思ふが、あの勢ひでは駄目ぢや。松本雄次郎も行つてをつたし、遠藤長之助も渡りをつけてをるらしいし、その他にも道會議員を初め、山師連が押しかけてゐるらしい。ほんの、形式ばかりの公布など出た時は、もう、遲い。あいつ等は丸で乞食も同樣ぢや。祝ひごとがあると、さア、この時ぢやとぬかさんばかりに、われ勝ちで集つて行くのぢや。』

『それくらゐに運動しなければ、北海道の樣な新開地では、生存競爭が烈しいから』と、また別な社員が云ふ。

『獨り北海道ばかりぢやアない。』義雄はそれに附け加へて、『人生はすべて新開地だ。』

『直ぐまたお說法か?』氷峰は火鉢を下り、坐わつて、卷煙草に火をつけながら、『時に、いつ歸つた』と云ふことから、自分の知つてゐる人々や場所などの新聞を義雄から聽き取り、『雜誌の評判はどうか、な?』

『惡いことはないが、兎に角、あやぶまれてゐる、ねえ。日高でも、帶廣でも、十分肩を持つて置いたが――第二號も出來た、ね。』

『出來たのは出來たが、金の寄らないので困る。』氷峰は顏をまたくるりとまはして、眞面目になり、『然し勢力が出て來たには相違ない。うちの雜誌の影響に違ひない、週刊や旬刊の雜誌體の新聞は、北星でも、北海新聞でも、みなつぶれてしまつたから――』

『ぢやア、北星の呑牛君はどうしてゐる?』

『あれは表面は休刊ぢやが、呑牛は道會の議長つき書記に早變りして、羽織袴でこつ〳〵かよつてるよ。――それに、北海新聞の廢刊が面白いではないか?あの雪影がやつて來て、廢刊の辭をみなに書いて吳れと云ふから、呑牛と僕とで「廢刊を祝す」と書いてやつた。それをそツくり載せる奴ぢやから、人に馬鹿者にされるの、さ。』

『寛大なのだらう。』

『なアに、あいつは孀アを女郎に賣り飛ばして、お多福の樣なハイカラ記者にくツついてをつたらえ

いのぢや。』

『可哀さうに――』

『會ふて見れば背が高い上に、ちよツと立派な風采をしてをるから、人が胡魔化され易いが、北星で婦ア事件を素ツ破抜いたら、呑牛のところへ談判に來て、呑牛の前で泣き出したさうぢや。』

社員どもはそれを聽いて笑つた。義雄も、自分の歡迎會が西の宮支店であつた時、菅野雪影なる人物に會つて知つてゐるから、雪影があのの ツぽなからだでと思ふと、ふき出さざるを得なかつた。

『君の歡迎會の時も』と、氷峰はなほ調子に乘り『あの社だけは入れないといふ動議もあつたのぢやが、人數が少いと困るから入れて置いたら、席順が低いといふて、おこつて歸つたのぢや。』

こんな無駄話を氷峰がやつてゐると、休刊北星の主筆高見呑牛が氷峰の言葉通り羽織、袴でやつて來た。

『今頃、どうしたのぢや』と、氷峰が聽く。

『この頃、道會が內輪に妙な喧嘩があるので』と、呑牛はランプがまぼしい樣に目をぱちくりさせながら、『うるさくツて困る。相談や、寄り合や、仲裁でけふも今までかれこれしてをつた。』

『何ぢや？』

『なに、はんか臭いこと、さ――僕が今でも新聞を持つてをつたら、いい種だが、なア。』
『君ア早變りしたと、ねえ』と、義雄は口を出す。
『おお、まア、かういふありさま、さ。』呑牛は兩手を擴げて、自分を見まわす。そして、『遠藤はどうであつた、ね？』
『感心に奮發してゐたよ、宿屋などでもなかなか持ててゐた。』
『あれは、兎に角、今度の地盤を固めて置く必要があるから、どこへ行つても、ぬかりのない人物だ。』
『おれも一つ』と、氷峰は煙草の灰を拂ひながら、『あれを賛助員にでもして、少し金を出させたいのぢやが――』
『今、ないらしいよ――數日前に、勸銀から三千ばかり借りたさうだ。』
『いや、それで思ひ出すが』と、義雄は云つた。『その金で多分馬を買つたのだらう。新冠の御料牧場で、丁度、その金目ぐらゐの拂ひ下げ馬七八匹を約束してゐたらしかつたから。』
『あれほど、また、馬の好きな奴も少いから、なア』と、呑牛は相變らず目をぱちくりさせてゐる。
『馬の話でも』と、義雄は氷峰に、『先づ記事の材料取りに行つてやり給へ。』
『それも考へてをるが、もう、ないか知らん。』
『誰れも現金をさう長く持つてゐない、さ』と、呑牛、『松本雄次郎だツて、持つてをる時行くと、き

ツと出す奴だが、ねえ、ないと來たら、あれほどまた貧乏な議員もない。』

『それはさう』と、義雄は呑牛に向ひ、『畑中新藏といふ人を知つてるか、ね？』

『ありやア名うてのおほ山師だ』と、呑牛は直ぐ答へた。『あいつは全體何をしてをるのか、誰れも知らん。』

『實は、遠藤の紹介でけふ會ひに行つたのだ。』

『そりやア、あいつより見れば、遠藤はずツと眞面目だ。』

『僕もさう見て取つたが、多少山師でなければ乘つて來ない話で』と、義雄は渠に相談した事件を說明する。

『君も』と、氷峰が義雄に、『そんな山を計畫する樣になつただけ、話せる、なア。』

『然しあいつは』と、呑牛、『あぶないぜ――今、訴へられてをるから、なア、詐欺取財で。』

『そりやア困る、ねえ』と、義雄は云つて、明き屋買ひ占め事業も亦駄目かと失望する。

呑牛は新藏のこれ（と鼻を指さきではたいて）が殆ど本職の樣で、自分もそれにかけては負け勝ちだから、五錢白銅をころがし、おもてか裏かの當て合ひで、こないだ、小拾圓も卷きあげてやつたことを白狀した。そして、あいつ等はまだ知らないが、白銅は字のある方が重いので、それさへ知つてゐれば、誰れでもやつて見給へ、十回に九回までは裏が當るものだといふことを說明した。

『さうか、なア』と、氷峰はひまにまかせて白銅を出して試めして見る。それをころ〳〵ッと投げ出すと、それが右か左りの方へころげて行つて、ぱツたり倒れて裏が出る。また、ころがすと裏が出る。すると、義雄や社員も亦面白がつて、われがちにそれを眞似した。

一六

義雄は、學校時代を、東京では父の家からかよつたし、仙臺では多く自炊して送つたので、下宿屋生活を却つてこの四十近くになつて初めて經驗するのである。

ゆふべ一と晩は、兎に角、書生に返つた樣な氣がしてしほらしく過した。けふは晝頃に目を覺ましそれから遠藤の『日高膽振觀』を書き出したが、筆を運ぶ間に、一つには、雨降りで、何となく寒い爲めでもあらう、氣がゆるむと同時に、由仁へ行つたお鳥のことが思ひ出されて、なか〳〵段落が進まない。

病院に入れるは入れるとしても、あの一年ばかりも慢性になつた病氣がさう早くきまりのつくものではない。或は全く永久の慢性になつたのかも知れない。さう云ふ不具な女と一緒になつてゐたところで、義雄自身の機能はさういつまでも空しく滿足してゐることは出來ない。

寧ろ會はないうちは、渠は、旅行中で、再び自分の胸に飛び込んで來ようとするのを早く見たくて、

見たくて溜らなかつたが、いよ／＼再會して見ると、ただ厄介物に取りつかれた樣な氣にもなる。
然し數週間入院するだけの分は與へてあるのだから、今、かの女が兄のところへ行つて留守なのを幸ひ、逃げてしまはうかとも考へられる。

今度逃げ隱れをすれば二回目だ。第一回のは加集のところで自分が見附かつた。そして、そこをもふり切つて出たのが、かの女と加集と關係する初めであつた。今度ふり切れば、關係者は誰れだらう？

勇にはその勇氣があるまいし、氷峰も亦そこまで行つてはゐないし。つまり、かの女がまだそんなことに進むまでの親しみを持つてゐるものは、札幌にはゐない。きツと、止むを得ず、兄のもとへ歸るにきまつてゐる。

『兄に歸れ、兄に歸れ』と、もう、さう決心したかの如く心で叫ぶと、おも荷をおろした樣に身が輕くなつた氣がする代り、自分と女なる物との間に、非常に大きな罅隙が出來た。

その罅隙は、義雄自身には、暗い死の影におほはれてゐる三途の川の樣だ。深さも知れない底の底で、闇から闇へ通り過ぎる記憶といふ水が、がう／＼と流れてゐる。その音を越えた向ふ岸には、美しい女が熱もたく光りもなく立つてゐるが、そこへ渡る掛け橋が絕えてゐる。

然しそれは不思議でないと思ふ。橋とは自分の熱心であつたのだ。自分には今熱心といふ物がない。

お島に對しては勿論、敷島に對してもさうだ。義雄は敷島に約束通り繪ハガキを一度送つた切りだし、かの女も亦義雄の留守に手紙を一度よこしてあつた切りだ。

義雄は敷島の手紙を、お島に見られない爲め、きのふの朝、厠へ這入つて讀んだが、それは渠を引きつけるだけの力がなかつた。ゆふべも、行きたいのをやめたのは、必らずしも遠藤から借りた金をそツくりお島に手渡ししたからばかりではない。女は旅行するといふのを半ば信じてゐないのだ、最後に別れた日の翌々日出した手紙の文句も冷淡で、ただ申しわけに、

『もう、旅からお歸りで御座いますか、ちと遊びに來て下さい、待つて居ります』と云ふのであつた。

『ああ、女はいやだ』と云ふ樣な氣で、然しまた思ひ出したりしながら、膽振日高觀の原稿を書きあげたのは午後六時であつた。遠藤の招待時間に一時間後れたわけだ。

西の宮支店と云ふのは、義雄の歡迎會があつた中島遊園の料理屋で、その札幌の市中のはづれへ、南十數丁の道を、渠はしよぼ〳〵雨を冒して、徒步で行つた。日高や十勝を馬上で巡回して來た渠は、今や、その馬も同樣なみじめだ。

見おぼえのある女中も二三名はゐるが、名も知らない十名ばかりの小學敎員どもは、もう醉ふだけ醉ひ、喰ふだけ喰つたらしい形勢で、主人役の遠藤を捕へて、鹿爪らしく返禮の盃を献ずるものもあ

れば、意表外に道化て一座を笑はせるものもある。
『まことに結構な御馳走にあづかりまして、わたくし共は滿足に存じます』と、瘦ぎすな、立派な頰ひげ、あご鬚の、年長らしいのが云ふそばから、
『なアに、君、さう眞面目腐らんでも、遠藤さんは粹なお方だよ』と、太つた禿げあたまの男がまぜかへし、『ねいさん、まア、さうぢや御座いませんか？』そばにゐる藝者に向つて、變挺な手つきをして見せ、愛嬌に酒をついで貰ふ。
義雄は、遠藤によつて一座の人々に紹介されてから、渠に『道會議員遠藤長之助氏の』と割註した『膽振日高觀』を渡し、猪口を手にし出す。すると、鹿爪らしいのが先づ挨拶にやつて來て、
『われ〳〵は北見の田舍者ですから、かういふところへまゐりますと、多少面喰らふ方で』など云ふ。
『まア、君』と、また禿げあたまがやつて來て、『どうせ、廣告はせんでも、田舍者には決つてをるのぢや。どうか、田舍者でも惡からず――さア、うは髯の先生、五分刈りの旦那、一杯どうです』と、義雄に猪口をさす。
義雄は、敎師の經驗を持つてゐるが、不斷に先生と呼ばれるのが大嫌ひの性分だ。その上に、『うは髯の先生』とか、『五分刈りの旦那』と來ては、なほ更ら苦笑せざるを得ない。然し醉ひがまはつてゐるのだと思へば、遠藤の態度と同じくそれを許して、心よくその猪口を受けた。

教員どもが皆歸つてから、巖本天聲がやつて來た。他にも招待があつたとかで、珍らしく醉つてゐる勢ひで、遠藤が若い藝者どもをからかふのにつれて、鞠子といふ一人を捕へ、

『鞠ちやんばかりは僕の理想の藝者です』と、遠藤や義雄に改まつて紹介する。義雄は天聲がまたへまなことを云ふ、わい、と思つたら、果してほかの藝者どもが互ひに顔を見合はせて、冷笑の樣子を見せた。

天聲は幅を利かせれば利かせることが出來る北海メールの主筆でありながら、さう野心のない男なのだらう。遠藤の樣な多少知られてゐる、而もメールを利用しようといふ考へが十分にある人を、これまで直接に知らなかつた。義雄の旅行事件からして、天聲は、今夜、初めて遠藤に會つたのである。

義雄は、天聲に、遠藤の調査の結果は書きあげて今渡して置いたが、新聞紙上には、筆者の名は出さず、また出されたくもないので、メール社の訪問記事とした方がよからうなど云ふ注意を與へ、別別に車に乘つて歸路についた。

雨がどしや降りになつた夜だ。

『この毎日の樣に降る雨が、直ぐ、もう、雪に代るのです』と、遠藤が云つたのを思ひ出して、義雄は自分なる物が段々冷淡になつて來たのをおぼえると同時に、北海道の天地も段々冷えて行くのをいよいよ切實に感じて來た。

今夜の禿げあたま教員の態度も面白くない。天聲の野暮な言葉も面白くない。自分の止むを得ず生眞面目であつたのも面白くない。さりとて、また、これから下宿屋に歸つて——多分、お鳥はまだ來てゐまい——獨りで寢るのも面白くない。然し、

『一つ、最後と思つて、敷島を見舞はう』と思ひつくと、車が薄野の仲通りへ來た時は、どうしても、それを中央の四角から一つさきの角を左りへまがらせずにはゐられなかつた。

井桁樓を思ひ出の多い柳の裏門からあがると、番頭は義雄をおもて二階の廣間へつれて行つた。

『また、まわし部屋に寢かされるのだ、な』と豫想すれば、いツそ歸つてしまはうかとも思はれる。實は格子さきに立つて、金がないからと、かの女を試して見ようかとも思つた。然し、それは、いつか、かの女に云つて聽かせられた手であるから、かの女の方が却つてよく承知してゐることで、即座に

『その手は喰はぬ』と云はれては馬鹿を見るばかりだと、思ひとまつたのである。

『…………』

ぱたり〳〵と、けだるさうな草履の音をさせて廣間のそとへ來て、するりと唐紙を細目にあけ、敷島は中をのぞいた。そして、義雄がインバネスを頭からかぶり寒さうにしてゐる顏を正面に見たので、

『おや、あなたであつたの。』つかつか這入つて來て、例の大きな長食卓を挿んで、相對する所に坐わり、微笑しながら、『いらツしやいまし。』丁寧なお辭儀をする。そして女が顔をあげて、じツとこちらを見てゐるところで義雄はただ無言で、にこ〱しながら考へた――今夜切りで、この後は來られるか、どうか分らない。が、女がこれまでに見せた通り、實際に自分を思つてゐるか、どうか、最後の試しをしてやらうと。

『とまつて行くの、これから』と、女が云ふのをしほに、

『さア、どうしようかと考へてるのだ。』

『折角、來たのに』と、かほ色がかはる。その變つた顔を見つめながら、

『相變らず、お前の左りの耳の下には引ツつりだこがある、ね。』

『大きにお世話です――これは梅毒からではない、ニキビのかたまりだと云つてあるのに！あなた、本當に歸るの？』

『うん』と、煮え切らない返事をして、暫らくまた無言で、女と顔を見合はせてゐたが、『實は、金がないのだ。』

『うそ、うそ。十分飲んでゐる癖に』と笑ひながら、『ぢやア、またまわし部屋だと思つて、よそへ行く氣だらう？――今夜のお客さんは早く歸ると云ふてたから、あとで明きます、わ。』

『おれは、もう、まわされても、何でもそんなことには構はない、さ。』
『それだけ、あなたの心が冷えたのでしよう？』
『なアに』と、云ひ當てられたのを胡魔化すつもりで、『氣候が寒くなれば、それだけ、普通の人間なら、冷える。』
『へい、不思議です、ね。』
『……』こちらはまた言葉のつぎ端を失ふ。
『本當にないの？』
『ないから、ないと云ふの、さ』と、眞面目腐つて答へる。
『では、わたしに何とか工面せいと云ふの？』
『まア、さうでもして貰はなければ、歸るより仕かたがない。』から云つて、女の心を見るのはここだとばかり、女の細い目の中を見つめる。
『この不景氣に、女郎が金など持つてるものか、ね？』
『現金はないとしても、さ』と、女の所謂不景氣は實際で、東京の去年あたりからの不景氣が、北海道では、やツとこの頃その絕頂に達してゐるのを思ひ合はせたが、
『お前が責任を負へば、何でもないぢやアないか？』

『責任を負ふと云へば、わたしの衣物を質屋へでも持つて行かせるより仕やうがない——それにしても、もう、遲いから駄目ですもの。』

『行かして見ればいい、さ。』

『もう、十一時を過ぎました。質屋は十一時までしか明いてをりません。』

『ぢやア、今夜に限らない、とまつてゐるのだから、夜が明けてからでいい。』

『そんなことが出來ますか、わたしとして？何ぼ好きな男の爲めとしても、朋輩から笑はれます。』

『笑はれたツていいぢやアないか！』

『あなたはいいか知れませんが、わたしの稼業の爲めにはなりません。』

『だから、歸る、さ』と、強く叫ぶ。

『本當にないの？うそでしよう？』

『うそなら、見るがいい、さ』と、お鳥が編んで呉れた毛糸の巾着を出す。

『敷島さん、お膳はどうします？』番頭がかげから催促してゐる。

『まア、ちよつと待つて下さい。』女は大きな聲を出したが、義雄のそばへまわつて來た。そして、

『うそでしよう』と云ひながら、財布をあらためたが、五錢白銅と十錢銀貨としかないので、失望の

樣子だ。その樣子をこちらは見て取り、この商賈女めと思つたから、
『さア、歸る』と、立ちあがる。
『どうしても、歸るの？』女も立ちあがる。
二人は立ち向つて、互ひに無言で目と目とを讀み合つた。渠は女の目にもツとうるみが出さうなものだと考へた。
『どうせ、生き別れだ。』女は曾てこちらの云つた言葉を思ひ出してか、斯う繰り返す。
『さきへ冷えたものがさきへ死ぬんだ。』から、こちらもまたいつか云つたことを再び云つた。
『ちやア、もう、來ないと云ふの？』
『緣――と云つても、金だらう――があつたら、また來らア。』
『では、また通り一遍のお客として、ね？』
『その方がお前を苦しめないでよからう。』
『あなたの爲めに隨分苦勞したのに――』
『うまく云つてらア、この馬鹿！』
『また！――馬鹿はおよしなさいよ。』
『馬鹿だから、馬鹿だ。』

『どうせ、女郎などしてゐるものは馬鹿、さ。』

女も名殘り惜しいと見え、男の言葉をかう云ふ風にあしらつてゐたが、例の見えか辨かを出して兩手をちよツと兩眼に當てた。そして思ひ切つたやうに、

『仕やうがないから、番頭さんに相談して見ます』と行きかける。

『おい、ちよツと待て！』こちらは女の心が分つたかの樣にして女を呼びとめ、『實は、持つてゐるよ』と、また火鉢のそばへ坐り込む。

『それ、御覽なさい！』女もそのそばへ來て、『人を馬鹿にしてる、ねえ——見せて御覽。』

『そりや。』義雄はチョツキの隱しから五圓札を出した。これは、渠の留守中にお鳥が來たら小使ひにも困るだらうと思つて、旅行さきから天聲に賴んで置いた物だが、それがぐづ〳〵後れて、やツと今夜渠に會つた時に受け取れたのだ。『實は』と、女の肩に手をかけて『お前がどれだけおれを思つてゐるか、試して見たの、さ。』

『そして、その結果は？』

『その結果は、矢ツ張り、お前が女郎で、おれが通り一遍のお客、さ。』

『あきれてしまう、ねえ、この人は！』女は斜めにそり返つて、男を睨む樣に見ながら、『わたし、あなたを見そこなつてゐた。』

『おれもお前を見そこなつてゐたのだ。』から云つて、インバネスをあたまから肩におろす。

『あなたはお客?』

『お前は女郎、さ。』

『では、もと〳〵ぢやありませんか?』と笑ふ。

『さう、さ、もと〳〵だ。』こちらもおつき合ひに笑ふ。

『苦勞しただけ損であつた。』

『然し損の仕直しは、もう、仕ない方がよからう――?』

『兎に角、あなたがさきへ冷えたのだから、あなたのお言葉に據れば、あなたがさきへ死んだの、ね。』

『おれには、お前がさきへ死んだのだ。』

『うそです、わ。』

『なアに、うそはお前の本職、さ。』

『この通り』と、腕をまくつて見せ、『血がかよふてをるのに?』

『さう、さ、おれに對する愛情のない血は、おれには死人の水だ。』

『情があつても、あなたが受けなければ仕やうがない、さ。』

『受けられる樣に仕ないぢやアないか?』

『どうせ、女郎ですから、ね。』
『そして、おれはお客だから。』
番頭がまた催促に來たのをしほに、二人は立つて、まはし部屋の方へ行き、そこで酒を酌みかはした。
義雄は初めから醉つてゐたが、敷島はいくら飲んでも醉はないと云つて、自分が正宗の二合瓶を二三本どこからか工面して來て、おほきなコップでぐい〳〵あふつた。
女はそれでもまだ醉はない、醉はないと負け惜しみを云ひながら、ぐでん〳〵になつて褥に這入つた。

* * * *

『敷島さん、お客さんが歸ると。』から、朋輩から呼び起され、女は、
『さア、しまつた』と云つて、飛び起きて行つた。
もう、午前九時近くだ。ゆふべの天氣とは打つてかはつて、立派な日が部屋部屋を照らしてゐる。
女が持つて來た新らしい楊枝としやぼんと手拭ひと――これには香水をつけてあつた――を持つて、獨りで、下廊下のいつもの洗面場に行く。廊下を内庭から仕切るがらす戸を通して、庭の池の金魚や緋鯉を見ながら、楊枝をつかふのもけふ限りだらうと思ふ。

洗面場から玄關にとほつた廊下には、がらす戸に添ふて、新らしく大根を――これが多くの女郎どもの食ひ物になるのだらう――重し漬けにした大樽がいくつも並んでゐる。それに日がよく當つて、膿臭い氣を發してゐるが、日の光りは東京に於ける多の日の樣に弱々しいので、急にからだに冷氣が增すをおぼえて、義雄は東京の歲の暮が來た樣に心細くなり、同時にまた氣が急にいら〳〵して來た。

『から浮か〳〵してはゐられない。』渠は顏を拭きながら、手拭ひについた香水のにほひを嗅いだ時にから考へた。

敷島は男を自分の本部屋へ改めて通した。蒲團を方づけ、障子を明け放つてよく風を入れ、火鉢の火と鐵瓶の湯とを持つて來てあつた。そしてさし向ひになると、女は、

『もう、これツ切り來ないつもり、ね』と、少し考へ込んだやうに云ふ。

『…………』義雄は曾てここでだだを捏ねた時、仰向けに寢そべつて兩足をかけたことがあるのを思ひ出される黑塗りの簞笥が、相變らずよくてか〳〵と光つてることを考へてゐた。

『あなたのやうに正直な人に會つたことがない。』女はなほ男を見つめてゐた。

『さうか、ね』と、こちらも向ふを見つめて寂しい微笑をする。思ひ起すと、二人が床に這入つてから、洗ひ淩ひ云つてしまつたのである。東京から妾が來て、けふ、あすのうちに入院する。その妾は置き去りにするかも分らない。然し樺太の事業が全く失敗だから、どうしても一と先づ東京へ引きあ

けるよりほかに道がない。都合によると、北海道にとどまることが出來るかも知れないが、それにしても、妾を手を切るのは勿論・お前を受け出してやると云つた約束も、この場合、取り消しだ、と。

『さうか。』はツきりと、おなかを立ち割つた樣に云ふて呉れる人もないものだ――その心をわたし――』

『へい』と、渠は皆まで云はせずに茶化した顔つきを見せたが、あの時、かの女に對する一種の熱い同情が自分の目か顔かに現はれようとするのを隱したのであつた。

『然よ。』女も暫らく無言でゐるので、

『もう』と、渠の方から愛想を云ふのだが、聲が二つに割れて而もおも〳〵しい『あの角の湯屋へも一緒に行くことが出來ない、ね。』

『さうでしようか？』女が素直に、まだ未練が殘つてゐるらしい樣子に見えるに附けても、思ひ出はそれからそれへと渡つて、こちらの胸には一杯に溢れて來るものがある。然し、過ぎ去つた夏や秋の如く、もう、取り返しが出來ない。再び女の心のあんなあツたかみに接する時は金輪際なからう。たとへ、自分なる物を見そこなつて、徒らに愉快な、もしくは徒らに快濶な、つまり樂天的な男とし、女の絶えない苦勞を忘れようとするばかりに、一時惚れ込まれたのであつたにせよ、こちらの自己のうちに二時でも強く複雜な孤獨生活を高調させて呉れたのはありがたかつた。

然しそんなことを云つて、別れの辭にしたとて、かの女に分らう筈がないと思へば、ただ自分が自

分でこの感じを味はふよりほかはない。お島に對しても、亦、さうだ。自分が愛した女が自分の愛に十分に信じられなくなつた以上は、早くそれと自分の所謂『死に別れ』をして、自己その物の中に出來た分泌物——愛がなくなつた女は分泌物だ——を排除しよう。それが自己の强烈生活を保つ所以である、と。

女は無言で入れた茶をこちらも無言で飲んだ。

『さア、歸る』と、義雄は俄かに立ちあがる。

『もう、歸るの』と、敷島も亦電氣に觸れた樣につッ立つ。

二人は手を固く握り合つた。

『緣があつたら、また寄つて頂戴。』

『然しお前は、もう、死んだのだ。』

『その代り、生れ變つてをるか知れません。』

『…………』何と云ふ頓智だらう？女のさう云ふ悧發な點はなか〳〵こちらも思ひ切れなかつたのだが、ここでは、もう、あと戻りする場合ではなかつた。一層思ひ切つて、『その時ア、また、おれがお前を認めることが出來まいよ。』

それッ切り、二人は共に二階をおり、裏玄關へ來た。

義雄は下を向いて靴の紐を結んでゐながら、自分の後ろまでふところ手をして送つて來た女の耳たぶの下に在るニキビのかたまりが、いつも自分が氣にしていぢくつて見ると、やわらかであつたことを考へてゐた。

一七

森本春雄は、まだ病院を退ける場合でないが、東京にゐる父が卒中で死んだといふ電報を受け取つたので、急に退院の手つづきを濟せ上京することになつた。

それを知らせがてら、渠は義雄の下宿を音づれた。そして、

『うちの大將にも困つてしまう。人が父を失つて心配してゐるにも拘らず、自分は勝手に飲みつぶれてゐて、一向、ことを運ばして呉れないのだ。』

『どこにゐるのだ？』

『幾代で流連してゐるらしい。そして、釧路までもつれて行つた妾は、別に宿屋へ置いてあるらしい。無駄なことにはぱツぱと金を使ひながら、僕の大事件を少しも思つて呉れない。實に困るよ。』

『いつ立つ、ね？』

『實は、けふにも立ちたいが、頼んだ金があすの朝でなければ出來ない。それに、大將が、あす、或

事業の相談で登別温泉まで行くので、そこまでまわつて呉れと云ふし。室蘭線へまわつて、そんなことをしてゐれば、靑森を出るのが、どうしても、あさつての晩になる。』
『そりやア、困るだらうが、主人のことだから、仕やうがなからう。』
『今夜も、飲みがてらやつて來いと云つて來たが、僕はいやだ――父が死んだと云ふのに、酒など飲んでゐられるかい？』
『それもさうだ』と答へて、義雄は春雄のわさ〳〵した樣子が少し落ちつくのを見計らひ、自分も歸京したいこと。女は置いて行くが、自分の歸京費さへないこと。春雄に工面を頼みたいのだが、さう云ふ場合だから、どうしても、松田に話して呉れろといふこと。などを語つた。
その翌日、春雄は松田に幾代へ呼ばれ、そこから一緒に停車場へ行つた。
午後二時の列車だから、義雄は見送りに行くと、春雄は止むを得ず飲ませられたと云つて、大分顏が赤くなつてゐる。そして、
『かういふ次第で、君の頼みを話す樣な眞面目な時がなかつたから、汽車に乘つてから話すよ。』
『ぢやア、ぬかりなく頼む――僕も小樽の宅の方へ手紙をやつて置くから。』
そこへ、松田が熟しの樣な顏をして、よろ〳〵とやつて來て、
『やア、失敬』と、天鵞絨ベンチの上へどッかり腰をおろす、八月十五日に樺太から一緒に小樽に着

し、また一緒に汽車に乘り、この停車場前で別れた切り、二人はけふが久しぶりだ。
『暫らくでした』と、義雄もそのそばへ腰をかける。『釧路からまた登別ですと、ね。』
『まア、溫泉へでも這入つて來る、さ——時に、あの鑵詰事業の協同問題は失敬した、な。』
『なに、どう致しまして』と、義雄は輕く答へたが、この人さへ事情を酌んで、その樺太漁場につぎ込んでゐる資本の百分の一でも千分の一でも出してくれたら、何のことはなかつたのにと思ふ。そして、氣を轉じて、『いつ小樽へお歸りです？』
『二三日で。そしたら、少しやつて來給へ。』
『いづれ伺ひます——僕も、もう、歸京したくなつてるのですから。』
『然し、君』と云つて、松田は小指を出し、『これが來たて、ね。』酒臭い息を吐く。
『は、は、は』と、義雄は受け流した。然し手紙を出す都合もあると思つたから、お鳥が入院の件を直接に話した。
松田は妾らしいのが、同じ二等待合室の向ふの方に獨りで腰かけてゐるのを見たので、義雄は見送りをわざと改札口で失敬する。
松田がプラトフオームをよろめきながら橋ののぼり口の方へ進むあとについて、女はまたちよこちよこ歩いて行く。かの女は今一度義雄の顏を見て置かうと思つてか、ちよツとふり返つた。

その時まで、春雄は柵を隔てて、義雄と別れを惜しんでゐた。然しそれも、

『ぢやア、失敬』と云つて、離れて行つた。

義雄は、それを見送りながら、春雄と云ひ、敷島と云ひ、自分の範圍が段々狹まる樣な心細さをおぼえた。そして松田と關聯して藝者お仙のことを思ひ出された。自分等と同船で樺太を逃げて來たり、自分等と小樽のはと場で別れてから、あの女放浪者はどこへ行つたらう？あの時、義雄自身も亦一種の放浪者にならうとは思はなかつたのである。ところが、今やこの自分の姿は放浪をとほり越して斷橋の行き惱みになつてゐる！

——（明治四十三年）——

お島の苦み

清水お鳥は子供の時から、父が移住してゐたので、北海道に於いて育つたし、また父の存生中、東京との間を二三度往復した經驗もあるので、人に心配されてたほどの困難も感ぜず、海岸線で無事に札幌へ着した。

その着した日は夜に入つたので、先づ停車場附近に宿を取り、それから、知らない道を夜だから、車をやとつて、有馬の家を訪問した。かの女の考へでは、義雄との消息が暫らく絶えてゐたし、且また上野から打つた電報に從ひ、青森まで迎へに來ることもなかつたから、渠が實際にそこにゐるか、どうだか、不審であつたのである。

『もしまた義雄がゐるにしても、自分を心よく迎へて呉れるか、どうか？』から思ふと、何だか全く他人を問ふ爲め他人の家へ行く樣な氣がする。一たびは自分にばかり熱心であつた人が、その熱心をひよツとするとほかの女に向けてゐるか分らない。それが東京にゐる時からの想像であつたが、今やその想像の當つてゐたか、ゐなかつたかが分るのだと考へると、當つてゐる方が本當らしくなり、胸一

杯のねたましさが先きに立つ。

その癖、自分は必ずしも渠に全心を向けてゐるのではない。渠にうつされた病氣――それがまだ直らない――を直して呉れさへすれば、男ならやうやく徴兵に取られる年頃だもの、どこへでもお嫁に行くことが出來る。現在、自分が承知しさへすれば、あの寫眞學校の先生も氣があるし、男生徒のうちにも、直ぐ貰つて呉れるものがある。

この病氣――これが、いつにても、與へたい承諾の邪魔物だ！自分の戀しい人もある。自分が貰つて貰ひたい男もある。然しこの病氣を隱してゐたい爲めばかりに自分から近づいても、却つて向ふから恨みを云はれる。

誰れがいつまでも女房、子供のある者にくッついてゐよう？誰れが貧乏文士などにいつまでもへばりついてゐよう？誰れがいつまでもあんな穢らしい二階借りをして默つてゐよう？せめていい男の若いのならまだしも、四十づらをさげたあの貧乏おやぢめ！人を傷物にしやアがつた！

『畜生！病氣を早く直せ！』かう云ふ風に激して來ては、かの女は車の上で慣れない夜街を進みながら、自分で自分の肉づきのいいからだをいだいて、性　の忿懣に堪へられない。いくら走つてゐる車でも、なほ走りが遲い樣な氣がする。それと同時に、またいつものところが痛み出すのをおぼえて來る。

『畜生！畜生！』心で義雄を罵りながら、着てゐるセルの衣物に夏帶を――一つには、もう、北海道の時候に後れて見ッともないといふ氣から――解きほどいて――うッちやりたくなる。

と云ふのは、セルも帶も義雄が買つて吳れたもので、而もそれらはお鳥を棄てて一度渠が逃げたその申し譯に、心で逃げると先づきめてゐた時、渠がわざ〳〵お鳥を白木屋へ連れて行つて、好みのままに買はせたのだとは、再びもとの仲になつてからの渠の白狀である。

めづらしく衣物、帶、並びにその附屬品を揃へて買つて貰つた時は嬉しかつたが、それが無言での別れの申し譯であつたのだから、今、着てゐたところで、決して渠の恩を着せられるわけではないと思ふが、衣物などは脫げば脫げる。然し渠に着せられた病氣は、重くなつたり、輕くなつたりするばかりで、決して直らない。

『もう、一度直らないのかも知れない』と考へると、おのればかり直つたのをいい氣になつて、人のを冷淡にうッちやつて置く義雄を見附け次第、飛びかかつて引ッぱたいてやりたい。

お鳥の忿懣は、張り詰めた性　と協同して、ところかまはず、いつもの精神錯亂を引き起し、さして來た家の門前にありながら、ただぼんやりとしてゐる。

『有馬さんと云ふのはこなたでしようか？』

『はい、さうですよ。』
かういふ聲が耳遠く聽えるのにお鳥が氣づくと、自分は既に有――の門前に來てゐるのであつて、車屋が自分を乘せた車のかぢ棒をまだあげたまま、ここの奥さんらしい人とうちそとの應對をしてゐる。
『はッ』と驚いて、急に胸がどぎまぎする。義雄がゐるなら、出て來るだらう。出て來れは、どんな顏をするだらう？ここの主人とだけで交渉が出來るものなら、渠の顏などは見たくない樣な氣がする。然しまたあれだけ可愛がつて呉れてゐたことを思ひ浮べると、會ひたい樣な氣もする。また、自分はいくら會ひたくツても、向ふが會はないと云へばどうしよう？會つて、うらみを云はれるだらうか、それともまたはねつけられるだらうか？
一ときに浮んで來るそんな、こんなの考へをいだきあげて、お鳥は車夫がかぢ棒をおろした車の上につツ立ち、よろめきさうな足を踏みしめてから、車を下りる。そして、がらす戸の中に、あがり口の障子を明けて、奥さんらしい婦人が立つてゐるのをじろりと見やつただけで、通りの方を向いて衣物の裾を整へる。それから、無言で玄關のがらす戸を明け、靜かにそれを締め、靴ぬぎの方へ進み寄つて、
『田村はをりましようか』と、少し角のある調子で、出迎へてる奥さんに初めての言葉を發する。
『田村さんは只今旅行中でをられませんが――』

さう聽いて、お鳥は多年つけねらつてゐたかたきでも逸した樣にがツかりした。そして、暫らく何にも云はないで、ぼんやりしてゐる。

『あの、淸水さんでいらツしやいますか？』

『はア』と、ちよツとにツこりする。然し、これが田村のめかけだと馬鹿にされるのをおそれた。

『それでは、まア、おあがりなさいませ。』

『はア』と、まだ考へ込んでゐたが、少しあひを置いて、『あの、いつ歸りましよう？』

『十日ほどで一と先づ歸ると云うて行かれましたが、昨日出られたのですから、まだなか〳〵で御座いましよう。』

『…………』

『まア、おあがりなさいませ――田村さんも云ひ置いて行かれたことも御座いますから。』

『おあがりなさい』と、主人らしいのも爐ばたに坐わつたまま、兩手を後ろへついてそり返り、こちらを向いた『いろ〳〵あなたにも話したいことがありますから。』

『では、失禮いたします。』お鳥は遠慮の氣味で、しとやかにあがつて行つた、こんなところで恥ち曝しをするのかと、情けない樣な氣がして。

初對面の挨拶も濟み、女の獨り旅に對する同情的な話などを聽かせられると、段段心もうち解けて

來て、お鳥はただ『はア、はア』と受け答へをするばかりでなく、自分からも突つて言葉を發する樣になつた。

然し何もかも自分のことに就いては義雄がしやべつてある樣子だから、自分としての反對な申し譯もして見たくなる。

『田村は私のことをどう云うてゐました』と、お鳥が切り出す。

『どう云ふツて』と、主人は躊躇しながら、『まだあなたを思つてるのは事實らしいが――』

『然し、わたしは人に目かけなどと思はれてるのはいやです。』お鳥はかう云つて、自分が恥辱と思つてゐることを渠等に先んじて辯解する。

『そりやア、もツともです。』

『あなた、田村さんなどおよしなさいよ。』奧さんも出し拔けに、然し初めからさう思つてゐたかのやうに忠告して呉れた。

『あなたがさういふ氣なら』と、主人はかたちを改めて、『今、家内も云ふ通りに、實は、綺麗に別れる方がいいと思ふが、ね。』

『わたしもそのつもりです』と答へたが、お鳥は夫婦とも餘り人を馬鹿にしてかかつてゐると思ふ。

『うん、それがいい、さ。』

『その方が』と、奥さんも亦『あなたの爲めにも、田村さんの爲めにもよろしう御座います、わ。』
『無論、あなたの爲めばかりぢやアない、田村君の爲めにもなる。』
『そのつもりです』と、また繰り返したが、それは自分の爲めばかりで、田村などはどうでもいいのだと云ひたかつた。
『實際、田村は當てにならん男だ——よしんば、あなたが末長く一緒にゐようと思つてゐたにしろ、だ、僕等は無理にでもあなたを別れさせたいのだ。』
『一緒にゐようなどと思ひません。』
『それだから、云ふが』と、前置きして、主人は、義雄の思ひやりがないこと。獨りでえらがつてゐるが、人から見れば一向にえらくないこと。自然主義など唱へて、却つて世間から排斥されてゐるのを知らないこと。あんな不信用な態度で、とても、事業など出來ないこと。札幌でも、多數の人は相手にしないのを、僅かに道會議員にすがつて旅行に出たこと。毎晩毎晩女郎買ひに行つて、東京から來た原稿料などもみんな使つてしまつたから、今度歸つて來ても、直ぐ困るに相違ないこと。などを語つて、
『僕のうちだツて、貧乏は分つてるのだから、さう〳〵田村の世話ばかりしてゐることは出來ないのだ。』

『田村さんは餘り無頓着で』と、奥さんも所天について、『こちらが默つて何も云はないと、いつまでも平氣でをられます。』

『いや、平氣でもかまはない、さ』と、主人は辯解がましく、『然しこッちの貧乏をも少しは助けて吳れるくらゐの考へは出なけりやア、これだけ僕も世話をしながら、友人甲斐がないわけだ。』

『ほんとに、さうですよ』と、奥さんはこちらの顏を見る。

『馬鹿だから、仕方がないのです。』お鳥自身も思ひ當らないことでもなかつたので、ひとり手に怒らないではゐられなかつた。原稿料――は、すべて自分に渡すと云つたのに――が取れたなら、こんなに困つてゐる自分に送つて來べきものを、卑しい女などに入れあげてしまつて、――きッと、さうだらうとは思つたが――餘りと云へば、實に薄情なおやぢだ！われ知らず下くちびるを嚙むと、自分の坐わつてゐるからだが顫へ出した。そして、自分の青い顏が一しほ青くなつたやうに思はれた。

『お宿はどこになさいました？』

『停車場のそばです』と、奥さんに向つて角立つた答へをしたが、お鳥は自分ながら義雄その人に向つて直接に返事をするかの樣であつたのに氣がつき、あとから、ちよッと、夫婦に對する愛想のつもりで微笑して見せる。――そして、自分に痛みをおぼえるのと、義雄のゐない家は全く他人のところだといふ考へが起つて來たとで、坐にゐたたまらなくなつて、もぢ／＼し出す。一方には、また、こ

この主人が碌でもない面にうどんだ樣な目玉を飛び出してゐながら、男ならまだしもましな義雄のわる口を云ふのが癪になる。

且、主人がさう〳〵世話は出來ないと云つたり、細君が宿はどこだと聽いたりするのは、暗に自分をとめることが出來ないといふ意味ではないか知らんと氣をまはして見ると、『貴樣の家になど賴んでもとまるものか』と云つてやりたい樣な氣にもなる。

『ぢやア』と、主人はこちらに向つて、『五番館の前だらう?』

『さうでしよう、何でも角でした』と答へたが、お鳥は主人の横柄な云ひ振りを、この場合、特に癪にさわつた。自分のひたへに、こんな場合よく出ると義雄から云はれる太い横じわがまた出たかと思はれたやうに、うは目づかひをしてじろりと渠の顏をにらんだ。然しひどい近眼の主人には、眼鏡をかけてゐても、それがよく分らなかつたらしい。

兎に角、魔がさした樣に、三人の氣合ひが何だか合はない樣になつて、暫らく、六疊敷の茶の間は、ただ、締めた窓のもとで人々が圍んでゐる四角爐の上で、自在鍵でつるした鐵瓶がくた〳〵云つてゐるばかりだ。

お鳥は、義雄から聽いてゐる通り、ここの主人が女學校の先生だと信じてゐるから、『このヘッぽこ

教師め、こんなきたならしい家に住みながら』と、わざと一まわり室内を見まわし、『人を馬鹿にするな』と心で罵つた。自分も曾て小學校の教師をしたことがあり、また小學校教師と家を持つたことがあるのを考へてのことだ。そして、ここから見ると、また、義雄の仕事の方がまだしもましだと、不斷は貧乏してゐても、原稿料の取れた時は、義雄と共に芝居や、音樂會や、三越や、白木屋へ行つたことを思ひ浮べる。その樂しかつた思ひ出に自分は知らず〳〵耽つてゐると、突然、

『あの宿屋なら、可なりよからう。』

『…………』ここで一つ意張つてやれと云ふ氣になり、つんとした口調で、『いいえ、よくもありません、商人やら、田舍者やら、下等なものばかりゐる樣で――』

『田村さんは』と、この時奥さんが云つた、『あなたがお出でになつたら、うちへとめて置いて呉れいと申されましたが、お宿がきまつてをればあなたも御不自由はないでしようし、うちでも子供がをりますものですから、ごた〳〵いたしますですので――。』

『さういふ御心配には及びません。』

『それに、田村さんも近頃はうちでとまることは全くありません――毎晩の樣にお女郎屋へ行かれましたから。』

『わたしは、もう、田村には何もかまひません。』

『して、病氣はいいのか、ね』と主人につツ込まれ、こちらはこのことまでも義雄は主人に話した、な、と思ふと、恥かしくもなると同時に、早く渠を捕へてぎゆう／＼云はしてやりたくなる。もう、破れかぶれだとなると、

『その病氣を直して貰ひたい爲めばかりに、わたしは田村を追うて來たのです』と、かの女は自分から泣き出したくもなつて、顏の筋肉が引き釣つて來る。『あなたがたにまだあの人を思うてゐると思はれるのはつらいですが、わたしは、もう、少しも思うてなどをりません。病氣を直させるばかりです。』

『どう云ふ風にして、さ？』

『こちらで病院に入れて貰ひます。』

『そんな金アありやしない、ぜ。』

『そりやどうにかさせます』と云つたが、その金が出來なかつたら？さうだ、自分は二人に對して氣まりが惡くなつた。そして、そのまぎらかしに微笑して見せる。

『田村さんのことですから』と、奥さんも眞顏に少し冷笑を浮べて、『何とか出來ないことはありますまいが、あなたは御病氣が直つたら、早くおよしなさいませよ。』

『はア』と進まない樣な返事をしたが、こちらの心では、お前等に云はれるまでもないことだとあざ

笑つた。

『實に僕の方も困つてゐるんだ。』主人はいつも下向き加減になつて刻み煙草を呑んでゐる。それがこちらには脊蟲の人でもあると見えたので、一層渠に對する尊敬の念が薄らぎ、その何だか物思はしげなのをからかつてやる氣になり、

『田村がお金でも盗みましたか』と、吹き出しさうになつた口を無理にかたく結ぶ。

『いや、あの男は』と、主人は眞面目にうち消して、『そんなことは決してしないが――』

『では――』とお鳥は口まで出て來たのを押さへて、心でばかり、『友人のことだから少しは世話もしてやつてよからうに。』

子供が目ざめたらしいので、奥さんは隣りの室へ行つた。それをしほにこちらは歸る挨拶をしかけると、

『まだ聽きたいことがある』と、主人は云ひとどめて、『その宿で田村の歸るまで待つてるつもりか、ね? 不意に田村が歸つて來でもして、あなたのゐどころが分らないなどいふ始末では、うちでも田村に申しわけがないから――實は、けふ、電報が二つ來た、樺太から一つ、田村から一つ。樺太からのは轉送してしまつたが、兎に角、札幌へ來てから一文も這入らなかつた事業の方がいよ〳〵見込がない意味らしかつた。その後、弟さんから僕に當てて來たハガキで、なほ更らそのわけが明かになつ

た。』

『では、駄目なのでしようか』と云つて、お鳥は旅行などの費用がどこから出たのだらうと、不審がる。原稿料などはさう大したものでないのを知つてゐるから別として、難局、難局といふことは幾度も手紙で聽かせられてゐたが、それは自分に仕送りをしない爲めの口實であつて、實際は、多少に拘らず、樺太から取つて使つてゐるのだらうと考へてゐた。

『駄目なことは田村も知つてゐるのだらう、この頃ぢやア、さう樺太のことを云はなくなつたから——人から見りやア、なほ更らだ。初めから、失敗は分つてゐた、さ。』

『では』と、お鳥は云ひかけて、主人が義雄をあんまり馬鹿にしてゐるので、如何に憎い人のことでも辯解してやりたくなり、暫らく言葉を押へてゐたが、云ひかけた手前もあることだから、そのあとをついで、『旅行の費用はどうしたのです？』

『それが、さ、今云ふ道會議員の遠藤に泣きついて、一緒に出かけたの、さ。』

『十日ばかりしたら、歸るにきまつてをるのですか？』

『兎に角、一と先づ歸ると云つてゐたが——今、一つの電報はあなたが來たかと尋ねて來たのだ。分らないから、握りつぶしてゐるが、ね。』

『もう、返事を出すには遲いでしよう、ね？』

『十時を過ぎたから、もう、普通電報は出せない、ね。特別あつかひにして貰つて、七十錢も出すのは無駄だらうし。』

『あす出しましようか？』

『然しまたあすになれば、その宿を立ち去つてしまうから、屆くまい――何しろ、さきへ〳〵と進んで行くのだから。』

『それでも』と、隣室から奥さんが乳を飲ましてゐた胸をかき合せながら出て來て、『また次ぎの宿から電報が來るでしようから、その時お打ちになつたらいいでしよう。』

『それより仕かたが御座いません。』

『さうとしてだが、あなたはどうする、ね？』

『わたしは、由仁に兄がをりますから、その方へ行つてをります。』

由仁にゐる兄が刑事をしてゐると云ふのを力頼みに、お鳥はよく義雄をおどしつけたものだ。決して虐待ではないが、お鳥が自分の云ひ分の通せない時は、兄に云つたら、決して妹の侮辱されてゐるのを默つてゐる性質ではないぞといふことを、いつも、自分は義雄に引き合ひに出した。

その癖、義雄との關係は誰れにも云ひたくはないのである。止むを得ず、兄のところへ行つたとて、

そこに籍があるのだから、早く方づけと云はれるばかりだらう。方づくにしても、病氣が直るまでは自分が承知出來ず、それかと云つて、この病氣は人にさへ語れないのであるから、兄などにはなほ更ら聽かせられない。

ただそこへ歸る必要があると云ふのは、かの女が今回の旅費を兄の知人から直ぐ返すと云つて借りて來たのであるから、當てにならない義雄などは當てにせず、兄から返して貰はなければならない。ただそれだけだ。

お鳥は、自分の現狀が兄にさへうち明けられないのを殘念になると、さうさせた義雄が今更ら憎くツて仕樣がない。然し、病氣の直るまでは渠に手賴らなければならないと思ふと、旅行に出てゐるといふ義雄がまた戀しくツて、戀しくツて堪らなくなる。

『いツそ、直ぐ歸れと云つてやりましようか』と、こちらが云ふのに答へて主人は、

『そりやア出來ない、さ。議員に隨行する約束で洋服も拵らへたし、旅費も出させたりしたのだから、――その義務が濟むまでは。』

『…………』お鳥は義雄が珍らしく嫌ひな洋服を着て行つたと聽いて、どういふ服なのだらうと、その姿を想像し、獨りでちよツと微笑した。そして、何か云つて、その微笑をごまかさうとしたのが、また強い口調で、

『矢ツ張り、わたしは兄のところへ行きます。』
『兄さんがあるさうだ、ね――ぢやア、その方へ行つてる方がよからう。』
『はア。』
『それがよう御座いましよう』と、奥さんも云ひ添へた。『田村さんがお歸りになつたら、直ぐお知らせしますから。』
『いゝえ』と、お鳥は知らせて貰つて、却つて兄に何か感づかれたら困ると思ひ、『そのうち、わたしが出て來ます。』
『さうですか』と、奥さんが妙な顔をしたのはこちらには尤もであつた。『では、歸られさうな時にまたいらツしやつたらいいでしよう。』
『さうする、さ。して、田村に會つたらよくきまりをつけて貰ふがいい。』
『また入らざらんお世話だ』と思つたが、お鳥はさうも云へず、『いづれ、また』と挨拶して、そこを出た。

お鳥は自分の待たせて置いた車に乘つた。往つた時は夢中であつたので、どこをどうとほつたか分らなかつたが、復りに注意して宿へついて見ると、僅かに二三丁しかない。而もただ眞ツ直ぐに來れ

ばいいのだ。馬鹿〳〵しい、あるいたッて、何でもなかつたのだと後悔する。
それに、尋ねて行つた人はゐないで、あんな變挺な近眼おやぢや細長い顏の婦アどもに恥ぢをかかせられて來たも同前だ。人を馬鹿にして、めかけ扱ひにしやアがつた。これでも、敎師をしたことがある自分だ。女學校だッて、小學校だッて、資格は違ふにせよ、敎師は敎師だ。あんまり人を馬鹿にする！もう、二度と行くまい！

田村も田村だ――云はないでもいいことまでしやべつてしまひ、おのれはそれでもいいか知れないが、人のつらいことを考へて見るがいい！馬鹿な奴だ！取り喰らつてやるぞ！畜生！早く歸つて來い、早く歸つて來い！馬鹿！畜生！うそつきおやぢ！助平ちぢイ！

敷いてある褥のそばに坐わつたまま、かう云ふことをくり返してゐたが、さて、それなら、喜んで兄のところへ行きたいかと問はれると、どうも、成るべくは行きたくない。事情をうち明けて泣きつけば、一度は怒るにきまつてゐるにせよ、まんざら、ほうつて置かれない義理であらうが、あたまを下げたうへに、しかられるなどとは氣が利かない。いやだ。如何にもいやだ。

まだ兄だけならいいが、あの他人の兄嫁がいやだ。欲張りで、輕薄で、お上手ばかり云つて――父が自分に殘して置いてくれた物までみんなおのれの物にしてゐる！簞笥もあつた筈だ。衣物もあつた筈だ。それを何かんと云つて、ごまかしてゐる。あなたの方づく時にはあげますと、いい加減なよろ

こばせばかり云つてゐる。ああ、行くのもいやだ！

父さへゐて呉れれば、こんなことにはならなかつた。父が北海道を引きあげて再び紀州の和歌山へ歸つたので、自分も一緒につれられて行つた。そこで、小學校の裁縫教師をしてゐるうちに、同校の教師に云ひ寄られ、一たびは夫婦になり、自分はその人によく愛されてゐた。ぶたれたり、投ぐられたりしたが、それはただ焼き餅からであつた。自分はそれで滿足してゐたらよかつたのに――

然し和歌山の兄は始めから不服であつた。父が亡くなつてから、自分の所天がどす、御ん坊の血統だといふ評判があるを理由として、自分等を引き分けてしまつた。その時も、自分がもツと強情を張り通せば、所天についてゐられたのに――

然し自分もあんまりぶたれたりするのがいやであつたところへ持つて來て、虚榮心があつた。もツと勉強して、もツといいところへ方づきたかつた。それが爲めに、所天へは附かず、最後には兄の方へついて、今思へば、實に氣の毒な別れをした。今一度思ひ返してくれろと、一と晩中泣いてゐた。然し一たび決心した自分は、その時、氣の毒と思ふことが薄かつた。

然し兄にも面白くないので、何とも云はず再び東京へ出た。さきに矢板裁縫學校へかよつた時世話になつた關係から、田村の家を當てて來たところ、田村のお父さんも亡くなつたあとへ、あの義雄が這入つてゐた。暫らくそこに世話になつてゐるうち、何か獨りの暮しが付く様な仕事を求めた。然し

都合のいいことがなかつた。

度々桂庵へも行つたが、下女にはよ過ぎるし、小間使ひには年が多いし、いツそ、どうでしよう、かう／＼云ふ給料の澤山取れるところがあるなど云つて、暗にめかけ奉公を勸められたこともある。

然しそんな下等なことをする氣はないので、辛抱しながら、下女やお針の見習ひに二三軒は行つて見た。然しそんなことをしてゐては肝心の勉強は出來ないと思ひ、いづれも二三日で歸つて來た。

そのうち、あの嘘つきの義雄にうまくだまされて、二年ばかり學校へやつて呉れる間の約束で一緒に住むことになつた。そして、赤坂の家、麻布の二階、あツち、こツちと引きまはされ、あの寫眞學校へ這入ると自分がきめるまでに、

『裁縫學校はつまらない』と云つては琴の師匠にやられ、

『いツそ女優になつて呉れ』と云つては、女優學校へ志願してはねつけられの恥ぢを曝らさせ、どれもこれも駄目になつた上に、あげくの果がこの病氣の苦しみだ。

『どうせ、女房にするから』と云ふので、早くさうせいと迫ると、あの氣違ひの樣な婢ァにどなられて、離縁の手つづきも出來ない。そして、こちらが――約束だから――一層嚴しく催促すると、逃げ隱れてしまひ、自分を加集の樣なものにまかせた。

自分が加集に許したのは、一時の止むを得ない窮策で、自分が悪いよりも、自分を弄ばうとした義雄が悪いのだ』然し申しわけがないので、和歌山を出る時、いつ自殺するかも知れないと思つて、今一人の兄――醫者だ――から盗んで來て置いたアヒサンまで飲んだ。それくらゐ、こちらは思つてゐたのに――再び義雄はもとの通りになつて呉れたが、矢ツ張り、薄情だから、自分ばかり樺太へ行つてしまつて、人の困つてゐるのも返り見ない。その留守の間に自分がどんな目に會つてゐたか知れない。直接には會はないが、あの氣違ひ婆々アには蔭で自分がめかけだと云ひふらされ、女郎に賣つてしまふ方がいいと馬鹿にされた。その上、加集は加集で、勝手次第な熱を吹いてまはつたらしい。

『然し考へて見ると、みな自分が惡い――人が淺墓だといふ虚榮心に驅られたのがもとだ』と思ふと自分がちやんと滿足して和歌山に落ちついてゐた方がよかつたのだと、もとの所天が戀しくなつて來る。

母はゐない、父もゐない。もとの所天は、もう、誰れかほかのを貰つてゐるだらう。兄や姉には、實際、會はす顏がない。

みんな自分が惡いのだ！みんな自分の馬鹿から來たのだ！から思ひつめると、かの女は顏をしがめて、いつのまにか、兩手を胸に組んで入れ違ひに兩方の肩をつかんで、からだをゆすぶつてゐる。

また例の痛みがして來て、自分を眞ツ直ぐに坐わらせて置かないので、ぱツたり身を投げ出して、

『わツ』と、悔し泣きに泣いた。然し隣りの客に聽えてはと思ひ、直ぐ齒を喰ひしばつてせき來る聲を殺すと、からだが顫へて、痙攣を引き起した。また、いつもの癪だと思ふから、氣が遠くなるにさき立つて、ところも構はず叫んだ、

『誰れか來て下さい！』

お鳥が氣のついた時は、自分を後ろから抱いて自分の胸を番頭さんがしツかり押へてゐた。そして、客らしい人が自分の兩足を延び切らない樣に曲げてゐた。そのそばには、宿のかみさんと下女とがびツくりした樣子で立つてゐた。

きまり惡くなつたので、自分から起き直り、

『ありがたう御座います、もう直りましたから――』

『ゆツくりお休みなさる方がよろしう御座いますよ』と、かみさんが下女と共に手傳つて呉れて、お鳥に寢卷きを着かへさせて呉れる。

客と番頭とは、變な目つきをして振り返りながら出て行くのが、こちらもちよツと追ひかけた目の中に映つた。

お鳥は褥に這入つてから、獨りで今のことを考へて見ると、自分の內狀を知らない宿のものらに對しては、恥辱を感ずると云ふよりも、寧ろ一種の誇りを感ずる。

自分は病氣で病を起した、そして客が病を起したのだから、宿のものが來てそれを介抱するのは當り前だ。それがとまり客に對する義務だ。その義務をつとめさせたのが如何にも愉快だ。下女ばかりを使つてやつたのではない、かみさんも來た。その上、番頭やほかの客も來て手傳つた。

『面白い、なア。』ひそかにほほゑんで、初めて耻かしい氣を出して夜着の襟へ顏を押し當てる。東京に於いて、義雄と二階借りをしてゐる時、あの人よりさきに褥へ這入り、あの人が机に向つて原稿を書いてゐる顏を見てゐると、あの人もこちらをふり向いてにこつく。それを嬉しい樣な、耻かしい樣な氣持ちになつて、夜着を引きかぶつたことがある。丁度、その時の樣なあツたかみの愉快だ。

あの客は自分の足を痛いほど押へて曲げてゐた。然しあれよりは番頭さんの方がいい男だ。

『ああ、嬉しい！』自分で自分に叫んで首を竦める。そして、首を竦めると同時に、ぺろりと舌を出す。自分に氣があるのだらう、出て行く時にも、客と一緒にじろじろこちらを見てゐた。ちよッと引ッ張つてやらうか？

『おお、いやなこツた、いやなこツた！』

目を明けると、下女が壁の衣紋竹にかけて呉れたセルの單衣が、電燈の光に輝いてゐる。あれを買つて呉れた人が失敗さへしなければ、もツと〳〵立派な物を買はせてやるのに――

當地へ來て見ると、もう、セルのでも單衣物を着てゐる人はない樣だ。あの人が早く歸ればいい。

直ぐ糸織りか何かの袷せを買はしてやらう。いくら困つているからツて、あれでも東京では知られてゐた文士だ。文士も金の這入る時は隨分這入る。

目が飛び出ておそろしい秋山さん、聲までが肥つてゐる須藤さん、かういふ人達は家が金持ちだから結構だが——あの小男の山田など毎月田村などよりも澤山の收入があつた。田村は初めあの人にこちらをまかせようとしたのだが、途中で惜しくなつて自分が占領したと云つた。いツそのこと、あの人について居る方が、獨りものでもあるし、よかつたかも知れない。

それはさうと、あの高野はどうしてゐるだらう？助平ツたらしい顏をしてゐるが、なか〳〵親切ですみれの花束などを芝の二階へ持つて來て吳れたツけ。

田村だツて、今でも、旅行に出られるくらゐだから、あの有馬のちぢイめが惡口を云ふ樣な貧乏ばかりでもあるまい。たとへ、また、貧乏はしてゐても、ちよツと筆を取つて原稿を書けば、自分の小使ひぐらゐは直ぐ間に合はしてくれる筈だ。まして、今の自分の爲めに少しは一生懸命になつて吳れてもいい。

『第一、どこかの病院に入れて貰はねばならん——もう、外來患者になつてゐるのはいやだ。』から思ふと、入院すれば丁寧に取り扱つて貰へることが想像され、病院生活が東京の二階借りよりはずツとなつかしい樣な氣がする。そこで寢臺の上に寢起きさへしてゐれば看護婦が來て、何でも世話して吳

れるだらう。
『こちらの病院の醫者には、どんな人がゐるだらう？』成らうことなら、上手で若くツて、親切なのが欲しい。義雄の樣なおぢイさんでなく、年の若い先生で、上手なのに手を握られるのは氣持ちのいいものだ」。

それにしても、今のままでは、澤山の入院患者の中に這入つて肩みが狹い。どうしても衣物が入る。衣物だ、衣物だと思ふと、この廣い世間に、矢ツ張り、義雄よりほかに、今のところ、手頼るものはないのである。

恨んでは見るものの、おこつては見るものの、あの人は自分の爲めに隨分苦勞した。病院に通ふ費用の爲めに、自分はどれだけ渠に骨を折らせたか知れない。

この病氣さへなかつたら、もツと樂が出來てゐたし、寫眞學校の方も早く方づいてゐたに相違ない。學校や仕事の問題がぐらついてゐたのも、その實、あの人の氣が變り易いばかりではなく、自分の病氣の爲めの金を儲けるのに急がしかつたにも由らう。

寫眞學校の方も、もう直き出來あがるところであつた。あれさへ出來あがれば仕事も見付かるわけだから、あの人にさう苦勞をかけないでも濟む。今のところ、氣の毒と云へば氣の毒だが、どうして

も、もたれかかるよりほかに仕方がない。

そして、遠方へ旅行してゐるので、直ぐは會へないと云ふだけに、會つたら直ぐかぶりついてやりたいほど憎かつた人が身にしみて戀しくもなる。

『今頃は、日高のどこの宿に寢てゐるだらう?』から思ふと、自分もこの宿で獨り寢の寂しいのに思ひ合はせて、さぞ、向ふでも寂しい思ひをしてゐるのだらうと想像される。

『義雄さん、義雄さん』と、呼んで見たくなつた時、隣室の方からおほきないびきがしてゐるのに氣がつく。男には違ひないと、急にぞツとして、旅の宿で女の獨り寢のおそろしさを感ずる。

耳を澄ますと、そのいびきのほかに何にも聽えるものがない。汽車も眠つたのだらう。風も、街も眠つたのだらう。家の人々も眠つたのだらう。覺めてゐるのは自分ばかりかと思ふと、お鳥はいよいよ眠られない。

自分のからだ全體がおほきな寫眞レンズの樣に廣がつて、今考へてゐたことがすべて一ときにそれに映る。そして紀州、東京、北海道の青葉、紅葉、岩石、山水のさまざまな景色がごちやごちやと暗い中にあきらかに現じ、その間を自分の父母や姉妹が、もとの所天、義雄、加集、寫眞學校の細君がある先生、年若い生徒、義雄の妻、有馬夫婦、宿の番頭などに入り交つてとほつてゐる。

範圍をどこかその一角に限らうと思つても、レンズがその全體に詰つてゐる樣で動かない。しぼり

をかけやうにも、またその機械がない。寫生に出かけて、疲れた夕景の風に當る樣な、うすら寒い感じがして來たのだ。

『北海道は矢ッ張り冷える』と思ひながら、急いで最後のレンズを開らく爲めの黒い切れのつもりで夜着を引ッかぶつても、餘りうるさくなつた思ひ出の光線が既に一面に這入つてゐて、映つたものはすべてそのままだ。

片ッ端からむしり取つてしまひたいが、手を以つて行けば、その手にも思ひ出があり、足を以つて行かうとすれば、その足にも亦記憶が存じてゐる。ただぼんやりと苦み疲れて行くのをおぼえるほどに、自分なるものが引き締らない。

その間はまだしもよかつたが、またしても隣室のいびきが聽えて來ると、その客ではなく、義雄と斯うかけ隔つてゐるのがもどかしくなつて、手足のさきまで熱をおぼえると同時に、急にまた病氣を移した本人が憎くなる。

『畜生！早く病氣を直せ！』から叫んで、あふ向いたからだをそのまま飛びあがる樣にはねらせたが、痛みが烈しいので、『ああ、痛い、痛い』と、低い泣き聲を發して、寢返りをする。

翌朝、遲く朝飯をすませてから、お鳥は宿屋の二階で獨り思ひに惱んだ。と云ふのは、多少衣物など

の這入つてゐる行李――それがかの女の唯一の身上だ――を置いて行からうか、それとも、兄のところへ持つて行からうか、どちらとも決しかねたのである。

こちらの宿なり、有馬かたなりへ置いて置いて、若し義雄が自分を相手にしない樣なことでもあつたら、この行李もどうされるか分らない。まだ東京で渠の所謂兵站部を奔走してゐた時分、第二回の空鑵を樺太へ送らなければならないのに、義雄はその工面が出來なかつた。見かねたから、自分は自分の衣物と亡き母の形見まで渡して、それを質屋へ持つて行かせた。それくらゐに盡してやつたのに、いくら催促しても、いまだにそれを出してくれないほど薄情な男である。今度また之を置いとけば、どんなことにしてしまうか分らない。

さりとて、また、兄の方へ持つて行つたら、また歸つて來る時に、こツそり持ち出すわけには行かないし――若しまた自分の不始末が分りでもすると、怒りまぎれに、これを取りあげられてしまはないとも限らない。

置いて行かうか、持つて行かうか――どちらに考へても、納まりがつかない。それをまた考へ込むほど、氣がめいつて來て、かの女は、麻の細引きでしばつたたツた一つの柳行李のそばに坐わつた切り、ただそれを見つめて、顏をしがめてゐる。

どうも、兄のところへは、義雄との決着がつくまで歸りたくない。

意張つて歸れるなら——もう、決して兄には世話にならないでもいいと安心出來るのだから——それに越したことはない。然しまた充分あたまを下げて行かなければならない次第となつたら、その時はその時で、充分あたまを下げる代りに、義雄に對する復讐をやつて貰う。

今のところ、どちらとも分らない。然し義雄は別れてしまへば他人だと云ふことに思ひ及ぶと、持ち物は先づ兄の手もとへあづける方がいい。いよ〳〵入院出來る樣になれば、何とか兄をあざむいて、持ち出してもかまはない。

『どうせ、自分の物は自分の勝手だから』と、やうやく、さう決心した。そして、みやげに林檎を買ひ、それを持つて再び有馬の家へ行き、玄關から——もう、あがるのはいやだから——今度義雄から電報が來たら、自分が來たことと成るべく早く歸れといふことを云つてやる樣に賴んだ。

それから、宿屋の勘定をすませて、そこを出た。出る時に、帳場に坐つてゐた例の番頭さんが丁寧に自分に挨拶する前を、ゆふべのことを思ひ出すと共に、じろりと見てやつたが、自分の顏が赤くなつた樣に思はれたので、

『いやなこツた、いやなこツた』と、まじなひの樣に、ひそかにそれを又繰り返した。

——(明治四十三年)——

お鈴の家

『おれは』と、父が三人の子供をそばに据ゑて不平らしく云ふ、『新聞記者とか、雜誌記者とか、そんな評判の惡い職業のものに、娘をやるのは好かんけれど、あの色氣違ひめが』と、顎でお鈴を指し、『やかましく云ふし、それにお前達もあいつをおだてる樣に口添へするし、それで島田にとう〳〵貰つて貰ふ樣になつたのではないか？』

『だから、それでいいぢやありませんか』と、にイさんの鶴一郎が四角張つて坐わりながら當らず觸らずのやうに答へる。

『それだけで濟まして置けばいいだらうが、島田をつれて、遊廓などへ行くとはどうした？』

『お父さん』と、弟は足を投げ出したまま卷煙草を吸ひながら、『たまに遊びに行くのだから、かまはないぢやないか？』

『かまはぬことはありません』と、母はそばから弟に、云ひ聽かしてやる樣に、『お前の樣な勝手の者もない。會社へ勤めてをつた時は、兄よりも澤山給料を取りながら、交際とか何とか云ふにかこつけ

て、みんな遊びに使つてしまひ、やめられた今日では小使ひもおほかたないほどで、兄の世話ばかりになつてをるぢやないか？』

『遊びばかりに使つたのぢやない。』

『そりやお前の洋服とか、外套とか、靴とか』と、父がそのあとを受けて、『そんな物にはかけた様だが、一文も兄の手助けはしてやらぬではないか？』

『龜一郎だツて』と、母がまた、『それでは苦しからう。』

『無論、さうだらう』と、父も云つた。『然しその苦しい中で、龜がまた女郎買ひに人をつれて行くとは不都合だ。』

『お父さんはまだ』と、にイさんも少し躍起となつて、『人、人ツて、他人らしく云ふけれど、自分の娘の婿になるものぢやないか？』

『それだから、なほ更ら、そんな惡いところへつれて行くのはよくない。』

『お父さん』と、また弟は冷かす様に、『兄さんの様な野暮天がつれて行かないでも、島田君は獨りで行くよ。』

『さういふ人に』と、母は眞顔になつて、『お鈴をやるのは、それぢやから、いやであつたのぢや。』

『今どきの人に誰れが自分の女房ばかりにかじり附いてゐるものがあらう』と、弟はさう云つてから、

こちらの方を見て、『まして、あんな御面相の女ぢやないか？』

『いいことよ！』お鈴は肥えた顏が一しほふくれッ面になつてるだらうと思ひながらも、みなぎつて來た怒りを抑さへ切れないで、『あなたのお世話にはなりませんから――』

『なま意氣なことは云ふな』と、弟も怒つて、『お前のおほ熱々が可哀さうだから、おれ達が島田に賴んで、貰つて貰ふ樣にしてやつたのぢやないか？――そんなに意張りやアがると、ぶち毀わしてしまうぞ――この色氣違ひめ！』

『氣違ひぢやありません！』

『氣違ひだい！』

『違ひます！』

『違はない！』

『馬鹿！』これはお鈴が自分で思はず出した云ひ過ぎだ。

『なんだ！』弟はかの女の頰へ一つ鐵拳を喰らはした。

『わッ』と、かの女はその場に倒れ、聲をすすりながら、父からして自分を氣違ひなど云ふから、兄弟までが自分をいい氣になつていじめるのだといふことを泣き訴へる。

『馬鹿！』父もお鈴を一喝して、『お前は引ッ込んどれ！』
『向ふへ行つてお出で』と、母はさすがに優しく云つて呉れて、疵でもつきはしないかとお鈴の頬を調べた上、次ぎの室へ行かせた。が、こちらが聽いてゐると、母は弟に向つて、『お前はいつも氣が荒いから行けぬ。投つたりせんでもえいぢやないか？』
『氣の荒いのアおれのせいぢやない、生れつきだ。』
『生れつきでも、自分で直す樣にすれば直る。』
『それよりは、そんなら、親がおれを生む時に、優しい人間に拵らへとけばよかつたのだ。』
『馬鹿を云ふな、鶴』と、父はどなつた『貴樣の樣な親不孝なことをぬかすやつア天下にないぞ。』
『現在、僕があります。』
『なんぢや！』
『おい、鶴次郎』と、にイさんが弟を制して、『お前の言葉は餘りよくない。』
『よくないもあるもあつたものかい、今の問題はお前が女郎買ひに行つたことぢやないか？』
『おればかりぢやない、お前も行つた。』
『僕はいつものことだ。』
『そのいつもがよくない――まア、考へて見い。僕だツて、まだ獨り者だから、行きたくないことは

ない、さ。然し兩親もあれば、おとゝやいもとがあつて、その世話をする責任がある身だ。こないだ行つたのなどは、ただ、お鈴のことが解決した嬉しさにふツと氣が變つて行つたばかりで——二度と再び行くつもりぢやない。』

『それが本當です』と、母は賛成する樣に云ふ。『然しお鈴ぢやて、まだいよ〳〵きまつたと云ふのぢやない。島田さんの兄さんがまだちやんと承知せぬぢやないか？』

『お母さん』と、にイさんは、『それは心配に及びません。當分わけがあるので、島田君が呑み込んでをりますから。』

『それはさうとして置いてぢや、云はば龜の方は』と、父もそのあとについておとうとに對して云ふ、『滅多に行かないのだから、まだしも許すべきところがある。親達を世話する上に、まだお鈴といふ厄介物をひかへてをるので、お前の樣に油斷はしてをらぬ。』

『實際、僕の樣な薄給者のところへ』と、にイさんも皆に不平を云ふならこんな時だと云はぬばかりで、然し餘り角の立たない樣に、誰れにともなく、然し、まア、弟にだらう、『お鈴のゐる間は、妻に來手がある筈はないではないか！銀行では、思つた樣に金は呉れんし、住ひから云ふても、さ、二間や三間のところに、ふた親もをれば、お鈴もお前もをる。この上、をりどころがない。』

『もツともぢや！』これは母の涙を呑んだやうな聲である。

『まア、鶴の方はよいとしても』と、父もにイさんの言葉には同情して、『鶴次郎も少しこれから氣をつけい。』
『なアるほど！』弟の返事が如何にも憎い。
『なるほどとは何のことだ』と、にイさんが怒つた。『親やおれの云ふことが分らないのか？』
『分つてるからをかしいんだい。もツと高い給料が取れないのか？』
『人を馬鹿にするな、鶴？そりやア、お前はおれよりも高い給料を取つてをつたらうが、今はおれの居候ぢやないか？』
『なにをぬかす、この野郎！』弟はいつも自分より力も弱いと見てゐる兄に飛び附いた樣子だ。

兩親が引き分けようとしても、手に合はぬらしい――
『この野郎！』
『畜生！』と、どたん、ばたんやつてゐるので、お鈴はこツそり自分で氣を利かして隣りの雜誌社へ來てゐる自分の好きな氷峰さんを呼んで來た。
渠は二人を引き分け、この家族の人々から、すべてその行きがかりの說明やら、不平やら、訴へやら、小言やらを聽いて吳れた。それから、

『僕が全く惡かつたんです』と、先づこちらの兩親へじやうずな詫びを云ふと、
『いや、それは僕の方だ。』にイさんがまた氷峰さんにあやまりを云ふ。
『僕も失敬した』と、弟も挨拶する。
皆がこちらの顏に氣がついた時、左りの頬ツぺたが脹れあがつてゐることが自分にも分つた。手を當てて見ると、ただださへ肥えてゐるのが、その脹れあがつたので、左りだけまた特別に飛び出してゐる。
『片ゑくぼでは無うて、片お多福ぢや』と、弟がまた俄師の口調で惡口を云ふ。然しこれには氷峰さんまでが皆と共に吹き出した。こちらはただじツと恨めしさうにして惡口屋の顏をねめつける。
『これから亂暴なことはするのぢやありません。』笑ひながらも母がいましめると、
『ほんとにさうだ、鶴の亂暴にも困る』と、父がつぶやく。
それから、氷峰さんは雜誌の第二號原稿の取りまとめが忙がしいことを語り、金主の川崎との折り合ひがどうも面白くないこと。さりとて、今の雇ひ人同樣な地位で、いつやめられるか分らないのに、自分として自分の同情者等から寄附金を募集するのはあとで若し自分が一個でやり出さなければならない樣な時の爲めによくないこと。社員全體が約束だけの給料を取れないので困つてゐること。それでも原稿の方は豐富な見込みがあり、田村さんも『金』といふ短篇小説を書いて呉れたから、義一郎

と鶴次郎にも銀行や木材のことを早く書いて呉れろと云ふことと。などを語り頼んで、歸つて行つた。
氷峰さんが歸つたあとでは、矢ツ張り、兄弟三人の間の心が解けてゐない。そんなことで、晩の御はんがおそくなつたが、お互ひに氣まづくそれを濟ませた。
『一體、誰れが親にそんな入らざらんことを告げたのだ？』
『お鈴に決つてらア、ね』と、にイさんが弟に答へる。
『よくない事だから』と、こちらもまけない氣になつて、『お母さんに注意したのです。』
『そんな心配を親にかけないでもえいぢやないか』と、にイさんのお叱りだ。『おれは田村さんの樣にうつつを拔かす男ではない。』
『それでもうちの爲めにならぬから――』
『けちな女郎だ！』弟も、もう手は出さなかつたが、『家の經濟々々と云つてるばかりが女の職分ぢやない――交際と云ふことがあらア。どこまでも厄介な女だ。』
『あなたはまた交際々々と云つて、その實、無駄使ひをするんです。』
『それはお鈴の云ふ通りです』と、母も弟に反對する。
弟は少ししよげたやうにして、そのまぎらしに浪花節の一句を語りながら、自分の室へ獨りランプを持つて引ッ込んで行つた。そして、障子をばたりと強く締めてから、

『島田のおばさん』と云つて、ぺろり長い舌を出した影の障子に映るのがこちらへも見えた。

『………』お鈴は自分でそれを見て、水を打たれた樣にひやりと恥かしみを感じ、それと同時に、また自分の住み慣れた家がも早や自分の家でない樣に思はれた。

——（四十三年）——

氷峰の斷片

氷峰は自分の結婚問題を解決する爲め、その兄（お君の父）を夕張炭山に音づれた。

この兄の全盛時代には、氷峰もそこに厄介になり、中學をやつてゐたので、ちいさいお君と共に大盡の家族として人々からなか／＼尊敬されたものだ。兄夫婦には、この少女と少年とを初めから夫婦にしようといふ氣があつたのだらう。氷峰を弟としてでなく、殆んどわが子も同樣に養つてゐたのだ。そして、氷峰に、學費のほかの小使ひ錢を與へるにしても、渠が學生に不相應な立派な洋服の隱くしから學友にばらばらと銀貨を、重いから邪魔だと云つて、ふり撒いてやつたほど、充分に與へてあつた。

その時代に、氷峰が北海道に於ける中流以上の令孃、令夫人などの暗黑面を知り得たのは、渠がそんな時代の少年にあり勝な小間癪れた不身持ちなどからではなく、却つて年の割に情を解しなかつたからである。渠が

『無情漢！』『唐變木！』『石部金吉！』

などと、からかはれて怒り出すのを面白がり、若い夫人連や年頃の跳ね過ぎた令孃どもが、わざと

渠の前で閨門のことや浮れ話などを爲し、渠のまだ起らない情を起してやらうとした。甚だしいのは、夜中、渠の室に忍び込み、渠をおもちやにするつもりで、女の方が重大な失敗を演じたこともある。

さういふ婦人連は、今では、渠の兄の失敗とは反對に、いづれも歴々の家に方づいてゐて、地方の愛國婦人會の役員やら、眞面目腐つた奥さんになつて澄ましてゐる。が、氷峰に會へば、あたまがあがらないばかりではない。渠は、渠等の澄ましてゐるのを見聞きする度毎に、社會の暗黑面を呪ふことがあるのだ。

渠の兄、島田多助と云ふのは非常に豪放な男で、金を貯へて置くといふ樣なけちな考へがなかつたので、儲かれば儲かるだけ使つてしまつた。或時などは、わざ〳〵札幌へ出て來て、札幌中の遊女をすべて一と晩中買ひ切り、山の人々並びにその關係者等を勝手に遊ばせたこともある。然し、今では、ただ小い炭鑛に顧問として雇はれ、僅かに一家を維持してゐる。

その兄に氷峰が相談を持ちかけると、兄は不斷にも似ず嚴肅な態度で、

『どれを貰ひたいと云ふのぢや』と聽く。

『どれと云ふて、きまつてをるから』と、こちらは云ひよどむ。

『おれの方では皆分つてをるぞ。』どこからは斯う云つて來てゐる、かしこからはああ云つてよこしたと、氷峰自身もまだ知らなかつたことまで話す。

その數々の中には、二三年來待つてゐるといふ十勝の女のもある。臨月の女のもある。若杉貞子の問ひ合せもある。また、仲人氣取りで申し込んで來てゐるのも二三口ある。

『色男ア仕やうがない、なア』と、兄から半ば詰責らしく云はれ、

『は、はッ！』こちらは笑つて、兩手をあたまへ持つて行かざるを得なかつた。

『然し、姉さんが知つてをる筈ぢやが、この最近のが一番適當だと思ふから』と、氷峰は原口お鈴のことを一層詳しく說明する。

『ふん、ふん』と云ひながら、兄もおとなしく聽いてはゐたが、こちらの言葉が切れると、『然し、まア、もッと考へて見たらよからう。』

兄が一向乘り氣にならないので、氷峰も實は閉口してしまつた。そして、それ以上に反抗的な決心も見せかねた。といふのは、兄のこれまでの世話をありがたく思つてのことよりも、兄の承諾を得なければ、今のところ、結婚費が出ないのだ。

一大雜誌――而も今賣り込み立てのだ――の主筆としては、犬猫を貰ふ樣にこそこそとその式をしてしまうことは出來ない。そして、また、兄がいよ〳〵承諾すればとても、札幌中――大きく云へば、北海道中――の注意を引くだけのことはしなければ承知出來まい。

自分は豐平館か、伊藤公のとまつた幾代亭で、園遊會ぐらゐはしようと思ふ。然らざれば、大黒座かどこかで、一つ突飛な計劃をして、結婚披露の大演說會でもやらうと考へてゐる。

何にしても、さきに立つ物は金だ。そして、今の場合、自分の名義になつてゐる山の家を賣り飛ばすよりほかに道がない。然しそれも兄の承諾がなければ駄目なことだ。

『まア、もつと時機を待つて實行しよう』と、氷峰は心で斯う云つた。そして、お鈴のことはそのまま口をつぐむ。

『にイさん』と、そこへお君が出て來かかつたのを、兄は、

『今、お前の來るところぢやない』と叱りつけて、立ち去らしめた。そして、

『あのお君はどうするつもりぢや?』

『さア、妹ぢやから――』氷峰は幼少の頃から呼んでるこの言葉を楯にして兄のかほ色を窺ふ。

氷峰は兄がさう云ふつもりで自分をよく世話して吳れたのだといふことを知つてゐる。叔父と姪との間がらでも、昔の歷史にはあることだ。また女郎や藝者を買ふとしたら、いつ、どこで、近親のものに接するかも知れないと云はれたこともおぼえてゐる。然し實際の姪――而も兄妹として親んで來たもの――を自分のいよいよの問題にはしたくない。孕んでるらしいお君の切ない心のうちも、これまでのことに面して、思ひやらないのではないが、どうしても、それだけは實行出來ない。

お君の方にしてもだ、離れてゐればこそ、毎日の樣に色文らしいものをよこすが、一緒にゐる間はどちらもわがまま勝手に別々なことを云つて、殆ど全く男に對する女の情らしい物は見えない。夕張にゐた時もさうだ。十勝にゐた時もさうだ。最近、札幌にゐた時もさうだ。

それに、近親結婚は不具者や無能力者を產する恐れがあるといふ生理上の結果などを考へると、薄氣味も惡い。兩親とても、今では、それくらゐのことは分つてゐるに相違ない。ただ、子の愛に引かされて、もとの通りの思ひつきをまがりなりにも押し通さうとしてゐるのだ。

かう思ふと、早くお君を鎌倉かどこかの親戚へ遠ざけて、よその男に氣を換へる樣にしなければならない樣だ。

『先づこの問題を實行さす樣にしよう』と思ひつく。その日は、然し、何も云はず『考へて見やう』とばかり答へた。

『まア、一と晩とまつて行け』とすすめられたが、然し、けふとまつては、それこそのツ引きならぬ羽目に落ち入るかも知れないと思つたから、雜誌の用がいそがしいにかこつけ、氷峰はゆふ方の汽車で札幌へ歸つて來た。

――(明治四十三年)――

勇の家庭

『田村と云ふ奴はああいふ性質だから、氣にしないでもいいよ』と、勇は自分の妻をなだめるやうに云ふ。渠はぼんやりと茶の間のはづれの敷居の上に立つてゐる。

『でも、わたしは何だか好かない。』お綱は流しもとの上で何かを切りながら立ち話だ。『あなたの古いお友達で、手紙の上では長く知つてをりますから、何も惡く取り扱ふつもりでは御座いませんが、とても無遠慮な人です、ね。』

『無遠慮だけに、正直な男、さ。』

『正直は正直でよう御座いますが、あんなにつけ〱云はれると、いやになつてしまいます、わ――こないだの時は、さうにも思はなかつたけれど。』

『そりやァ、せんは、きやつに取つて大希望と大野心とがあつたからまだしもだが、失敗して來たとすりやア、多少氣が氣でならないところもあらう。破れかぶれになつてる點も見える。』

『氣の毒は氣の毒です、ね。』

『ああ呑氣にかまへてゐる樣だが、心では隨分つらいことがあらうよ。細君を嫌ふのは、自分よりも年寄りであるからだが、それは今何ともしやうがない。よく慰めて、東京へ歸してやるがいい、さ。』
『いつまでうちにゐる氣でしよう？』
『まア、暫らくは默つて、勝手にさして置く、さ。まだよく聽いて見なけりやア分らないが、どうせ失敗の取り返しはつくまいから、歸るより仕かたがなからう。』
『小樽の鰊取りなど當てにしてゐる樣では、田村さんもまだ事業には慣れてません、ね。』
『さうお前の云ふ樣でもないか知れん――ぽツかりと、うまくぶつからないとも限らない。』
『さう、うまいことがありますものか？』
『もツとも、事業に就いては』と、渠は自分の妻の里が木材で失敗したことを思ひ出して、『お前の方が確かによく知つてるだらうが――まア、「窮鳥ふところに入る」だ、よくもて爲して置く、さ。』
から寬大に表面では云つたものの、これは妻をして古い友人に粗相させまいと思ふからで、勇も自分自身では一と方ならず心配が出來たのである。そして、一人ぐらゐの飛び込み客がある爲め、自分の家の生活問題を心配しなければならない樣な境遇が情けなくなる。
『田村君の云ふ通り、教師ほどつまらないものはない』と考へる。以前の樣に、獨り者で、二三年每

に方々の學校へ飛び歩いてゐた時は、まだしもかはつた風景や人情風俗に接するだけ樂しみもあつたが、こゝで家を持つてからは、七年も八年も同じ學校で同じ教科書や作文を教へ、俸給も亦殆ど同じ程度にとゞまつてゐる。

もと自分に教はつた生徒が大學生になり、學士になり、高等官になつて、たま〳〵自慢さうにこの自分のところへやつて來て、『先生、先生』と云ふのを聽くと、何だか自分が意久地なし、無能力者とあざけられる樣な氣がする。――自分はまだ自分の教へた生徒が自分よりもえらくなるのを喜んで見てゐるほど、耄碌はしてゐないと思ふからである。

教へた生徒でさへさうだもの、自分の友人や同窓にして、他の職業に就いたものは、少くとも、軍人なら大佐、官吏なら事務官、會社なら取り締り、商人なら拾萬以上の身代になつてゐるものがある。その上、渠等には、自分の樣な親なし、親類なしとは違つて、いろんなあと押しや手づるもついてゐる。獨りで意張つてゐるものがあつても、親の財産や家柄を相續してゐるものだ。

渠等のうち、自分が田村と共有してゐる友人もあるが、田村も自分も、今から如何に奮發して見たところで、渠等と同じ地位にはのぼれまい。田村がそんな方面とは違つた自由な文學で名を出したのは、渠に取つては止むを得ない明策だし、また渠等に對する反抗として、最も面白いと勇は考へたこともある。

田村が世人の所謂お調子に乘り、家庭のことを閑却して、女を拵らへたり、また突飛な事業に手を出すことを初めて聽いた時は、その人物の變はつたのを驚いたが、自分の無變化にして、單調な生活をやつてゐるのに比べて見ると、餘ほど渠の方が自由で、愉快だらうと、勇はまた考へ加へた。

三ケ月以前に、田村に自分のつまらない境遇を語り、田村義雄なるものが勇の心に新たに刻み込まれてからは、勇は義雄をうらやましくて溜らなかつたのだ。

自分も義雄のあとについて何か一つやつて見たい。樺太へ行つて、いやな教師でも出來るものならそれをしながら、何かいい仕事に移つて行きたい。と、から打ち明けた時、希望に滿ち滿ちてゐた義雄は、

『今少し辛抱してゐ給へ、僕にも考へがあるから』と云つて、先づ蟹の鑵詰に成功してから、樺太にはころがつてゐても人が採らないと云ふ海栗の製造やら、荒蕪地の開墾やら、牧畜業やらをもやるつもりだといふことを語つた。まだ空想には違ひなかつたが、こちらにはそれが樂しいまた頼母しい空想として受け取れたのであつた。

義雄が樺太からたよりをよこさない——實は、渠は手紙を一度出したのであるが、途中で紛失したのか、こちらへ屆かなかつた——間も、渠の言葉がうまく實行されつつあるか、どうかと、毎日學校を勤めて歸つて來る毎に、この爐ばたに坐わつて考へたのだ。

時々、それを夢にまで見た。

この樂しい夢は、義雄の歸來と共に覺めてしまつた。そして、自分は矢張り、十年一日の如く、この爐ばたにこびり附いた人間だといふことを發見した。

そして、義雄の失敗は大きいだけまだ變化があるだらうが、勇自身のたださへ寂しい生活は、たまたまともつた火が直ぐ消えてしまつた樣に、一しほ寂しい氣がした。

そして、渠は義雄の事業の一部分を引き受けてゐたかの樣に、世の中のことは思ふままにならないものだと、今更らの如く厭世的な悲觀を感じてゐる。

そこへ、がた〳〵と、そとから二人の子供が歸つて來た。ふと氣がつくと、自分はいつもの通り、窓に向つて、爐ばたに坐わり、がん首のまがつてしまつた短い煙管で煙草を吹かしてゐる。

『煙管を買ひ換へようとしても、それだけのことにさへこの頃は手がまはらない。』こんなことを考へながらも、忙しい事務の間に段々喫ひおぼえた煙草の味だけは忘れられないのだ。

『有馬君の近眼と煙草とは何か關係がありさうだぜ。』曾て同僚にひやかされたことを思ひ出す。渠には、近眼的な擧動と煙草好きなことが非常に人の目に立つのである。

『有馬君の目に近眼のやにがくツついてゐるとすれば、喉には煙草のニコチンがこびりついてゐるだ

らう』などと。これは自分を何か冷評する言葉であるとは思へたが、勇自身に取つては、——近視眼の方は、それが爲めに教室全部を見渡すことが出來ず、自然下向き勝ちになり、うしろの席にゐる生徒がわざと踊つたり、跳ねたり、拳を打つたりするのを知らなかつた故を以つて、教師として不行屆きだと、校長に叱責せられたことがあるが、——人並みはづれて刻み煙草を呑むことが、一つの贅澤として、唯一の自慢と誇りとになつてゐる。

けふに限つて、子供が左右から取りつくのを左ほど可愛いとも思はない。

『お父ちやん』と云つて、房子が後ろから兩手で目かくしをしようとするのを拂ひのけた。

『こら、馬鹿野郎』と云つて、一太郎が手を引ッ張つて、横へ引き倒さうとするのをふり放した。

『うるさい、うるさい』と、やわらかにだが叱りつけ、煙草を喫ひながら、勇は何だか義雄の歸りを待たれる樣な氣がしてならないのだ。『田村はどうしたんだらう？』渠は今用をしまつて爐の火を直しに來たお綱に聽くと、

『今に歸られましよう』と、かの女もそこに落ちついて、うちわを使ふ。そして、樺太の冬を思ひ浮べたかして、『冬になれば、あちらは北海道よりも寒いでしよう、ね。』

かの女には、冬といふことが、この夏の暑い時に思ひ出されても、いやで〳〵溜らないやうだ。そして、また、勇は、その妻に冬のことを云はれると、この僻地からかの女の望み通りかの女を脫しさ

せることが出來ない境遇をいつも思ひ出し、自分の不甲斐なさを心で感ぜずにはゐられないのだ。

『人間が住んでゐられるのだから、寒いたツて知れてらア、ね』と、勇はまぎらかしに答へ、『若し田村君が成功して、おれもその方へ行くことになつたとすりやア、お前はどうするつもりであつた？』

『おかねだけ送つて貰つて』と、お綱はこちらを見て微笑しながら、『わたしは子供と一緒に東京の兄さんのところへ行きます、わ。』

『勝手なことをいやアがる。』勇も笑つて、『別におれが女を拵らへたらどうする？』

『かまひませんとも――子供を育てるだけのおかねさへあれば。』かうお綱は云つて、主人が東京へ轉任出來ない日頃の鬱憤を多少漏らし得たと云ふやうな樣子をする。

『それだから、田村の婦人論が初まるやうになるのだ。そんな考へで以つて、眞實に亭主を愛してゐるとア云へまい。』

『田村さんのお株を取つたのですか？』

『は、は』と、勇も自分の妻の笑ひにつり込まれた。

――（明治四十三年）――

馬鹿と女

一

『おかみさん、大變だア』と、或ゆふかた寢ぼけた聲で、馬鹿の太吉が牛舍の方からやつて來て、庭の緣さきから、主人の細君お末の寢間に向いて、つッ立つたまま云ふ。『あれが七人前喰つてしまつた。』

『あれとは何、さ?』お末は慳貪な聲で障子越に云ふ。

『松丸がよ。』

『松丸がどうしたと云ふんだ?』

『松丸が七人前の飯を喰つてしまつた。』

『えツ』と、お末は飛びあがる樣に身を半ば起して、『どうして、また、そんなことをさせたのだ、お前が附いてた癖に?』

『おれは庭の掃除してイて知らねいんだけれど――』聲が顫へてゐるのは、寒いからである。

『では、誰れが爲だ、誰れが——ひどいことをさせたもんだ——不經濟も亦不經濟な』などとわめきながら、かの女は手早く博多の細巻きを締め直し、襟つきの瀧縞銘仙の、ところどころに陵布の當つてゐる寢卷で、庭下駄をつツかけて、ゆるんだ丸髷をがく〱させながら、牛舍の方に驅け出す。

松丸とはこの數日來懲戒處分に會つて、自分の檻にばかり押し込められてゐた牝牛で、而も有名な女嫌ひである。女を見ると。目を怒らし、角を水平に揃へて飛びかかるのが常だ。懲戒の原因は、お末が鳥渡油斷して居る間に、かの女に飛びかかつたからだ。渠は女主人の横ツ腹をいやと云ふほど突き、かの女が仰向けにをかしく倒れた上を、餘勢で、踏み越えた。そこを雇ひ人の一人が助けたので、いのちには別條なかつたからいいものの、かの女は目が舞ふほど痛かつたのと、雇ひ人どもが自分の倒れたのを眞正面から見て、いい氣味だと云はないばかりに、さん〲に囃し立てたのとに業腹を立て、どいつも、こいつも主思ひではないとぷり〱怒りながら、この數日を床の中に暮して居た。

歩くと、まだ、かの女の帶の下が痛む。

『あの畜生!重ね〲仕やうがないことをしやアがる』と叫びながらも、突かれてからは薄氣味惡くなつた板圍ひの牛舍の中へは、獨りでは這入れない。

太吉をさきに立てて、こわごわのぞいて見ると、その大きな赤牛が、おのれのと決つてゐるとツつきの、第一號の檻を出て、八つ目の檻まで進んで行つてゐる。如何にもと思つて、這入つて行き、ぶ

んと物の蒸せたにほひのする中を各號づつ嚴丈な板で仕切つてある檻の前通りを進んで見ると、牛は第八號檻の前にある飼ひ葉桶の飼ひ葉を半ば喰つて、跡は喰ひ切れなくなつたのだらう、首をその桶にかけたまま、うつ伏しになつて、うん〳〵云つてゐる。

腹は張り切れさうに大きい。

『なる程、大變だ。』お末もかう考へたが、雇ひ人どもをすべて憎いと思ふ心の矢さきがこの牛ばかりに向いて居る場合であるから、『ざまア見やがれ、この畜生』と、牛の後に立つて、にく〳〵しさうに云ふ。

『くす〳〵』と笑つたものがあるので、振り向くと、いつのまにか、小舍番の小僧がお末の後ろに來て、寒さうに身をちぢめてゐる。實は、この小僧のいたづらで出來たことだ。渠も亦、他の雇ひ人等と共に、おかみさんを馬鹿にしてゐるところから、太吉が各號の檻の前に飼ひ葉入りの桶を一つ一つ置いて行つた跡で、まだ牧場の牛どもが歸つて來ないのを幸ひと、こツそり、松丸の檻の横木をはづして置いた。その結果が渠の思つた通りになつたので、面白くツて溜らないのである。

『何がをかしい、留吉！』寢卷き姿でこれも身を縮こませたお末になじられても、それには答へないで、

『ざまア見やがれ、こん畜生』と、かの女の口眞似をして笑ふ。

『ふ、ふッ』と、かの女は吹き出したが、また眞面目になつて、『笑ひごとぢやアない――ほかの牛が這入つて來ても、飼ひ葉が足りないぢやないか？』

『また太吉に煑させればいい、さ。』

『利いた風なことをお云ひでない』と、留吉を睨みつけ、松丸の前方へまわる。

牛は呻きつづけてゐるが、お末が正面に來たのを見て、訴へるやうに、その大きな目を見張る。この寒いのに、その目ばかりではない、からだ中に汗がにじみ出てゐる。

『本當に苦しさうだ――留吉、早くうちのを呼んで來てお呉れ、また木村さんで碁を打つてるのだらうから――あの人も、碁ばかり夢中になつてるから、こんなことが起る！』

『四の、五の云つたツて、もう、駄目、さ。』留吉は獨り言のやうに云つて、それから、小踊りしながら出かけた。

『馬鹿にしてイる、ね！』お末は留吉の後ろ姿をじろりと見て、何だかまた氣がいら／＼して來た。ぼんやり立ち竦んでゐる太吉に、叱りつけるやうに、飼ひ葉の煑増しを命じ、『わたしは、もう、何も知らない、知らない！この上に、風でも引いたら、なほ更ら詰らない』と云ひながら、住ひの方に急いで行つた。

二

野口牧場の主人、健作は、留吉の注進が餘り無造作なので、大したことが起つたとも思はず、口頭から飄輕な小僧をからかひながら、四斗樽のやうなからだをぶらぶらわが家の方に向ひ、自分の牧場を取り圍む櫟の並み木の枝がからツ風に動いてゐるのを仰ぎ見て、

『もう、すツかり、手前のあたまのやうに、坊主になつてしまつた、なア』と云ふ。

『おれのア五分刈りだア。』

『五分刈りだツて、手前のア坊主も同様だ。』

『ぢやア、旦那もあの櫟と同じかい？』

『この野郎！』微笑して、小僧のあたまを一つ輕く喰らはす。

『う、うーん』と云ふ聲が聽える。

『ありやア松丸か！』

『さうです。』

『全體、どんなにしてイるんだい、畜生』と、初めて足を速める。

牧場からは、ゆふ餉を催促する牛どもの聲が、頻りに、『もう、もう』と聽えてゐる。

『野口牛乳搾取所』といふ看板がかかつてゐる門を這入ると、ふすまや、芋糟や、あづき糟や、牛その物やの入りまじつたにほひが鼻を突く。そのにほひを嗅ぐと、健作は自分の作りつつある身代を最

も明了に思ひ浮べるのである。
兎に角、その身代の四百何十圓を占領する牛に關したことであるから、急に足が先づ牛舍に運ばれて、やや薄暗くなつてさし入る光線の中に、赤い毛色を見とめると、
『こら、松丸！』と、聲をかけてそのそばにつか〳〵と近づいた。
『う、うーん！』
『苦しいか？』
『う、うーん！』
『丸で、產をする時のやうだ、なア』と、留吉と入れ代つて、第一號の檻まで跡戻りする。飼ひ葉桶はからになつてゐる上に、横木がはづれて下に落ちてゐる。第二號の桶もからである。第三號のも、第四號のも、さうである。第五號、六號、七號と行つて、第八號目が僅かにその半分を殘してゐる。
『これぢやア溜ら無いや――こら、松丸、苦しいか？』と、牛の前の方にまわつて行つて、不自由さうに、また無作法にしやがむ。じツと主人を見つめる大きな目と目との間あたりから鼻すぢを撫でおろしてやりながら、『可愛さうに、なア――しツかりしてイろ、しツかり――ええ、大丈夫だから、しツかりしてイろ！今、醫者を呼んでやらアね。』
『う、うーん――う、うーん――』

このまゝにして置いては、他の牝牛どもの入舍の邪魔になるからと、健作は留吉に手傳はせて、烏渡でも動くのさへ苦しむおほきな動物を引ツ張つて、もとの檻に入れる。

首の方から無理に引き入れられた松丸は、主人が檻のそとへ引ツ返すのを引とめるかの樣に、おもい前足を敷いた濡れ藁に引ツかけながら、今度は、自分で自分のからだを向きかへ、ばツたり、またうつ伏しになり、置かれた横木の下から首だけを出し、主人の顏を見つめながら、同じ呻きをつづける。

『可愛さうに、なア』と、健作も直ぐには立ち去りかねて、再びしやがんでその鼻筋を撫でてやりながら、『野郎』と大きな聲で力づけ、『しツかりしてイろ！しツかりしろよ！心配することア無いぞ！今、直き、醫者を呼んでやらア。――留吉、早く獸醫を呼んで來い――可愛さうに――どいつが惡いんだ？』

『おらア知らん。』留吉は主人の顏を避けて驅け出したが、聽えよがしに『あの馬鹿に決つてる、さ。』

『太吉かい？あの馬鹿野郎！』から、健作は呪つて立ちあがつた。

三

『馬鹿アゐるか――あの馬鹿め！』から、おめきながら住宅の玄關の廣土間へ這入つた健作の血相は變つてゐた。

『太吉よりは、あなたの方が馬鹿げてゐます』と云ふ角立つた聲が、土間をあがつた直ぐの室から聽える。
『また始まつた、よせよ。』急にやわらかな聲に改めて、その室の障子を開ける。
『あなたが碁などに』と、お末はわざと枕についたまま、色の白い面長の顏を正面に向けて、『夢中になつて、遊んでばかりゐるから、うちでは不吉なことが絶えやしない！』
『まア、さう云ふなよ。』健作は肥つた圓い顏をにこ〳〵させて、お末の枕もとにどしりと座る。
『碁に夢中になると、一週間でも、十日でも、うちを明けてゐる！』
『そんなことは滅多にない、さ。』
『滅多にはないと云つても、あつた時に、現在、お職のゲリンジが肥桶に落ちて、おほ騷ぎをなどしたぢやア御座いませんか？』
『……』
『ゲリンジの騷ぎが濟むと、取り次ぎの長谷川が不拂ひで、六十圓の訴へになる。』
『……』
『それがまだ方づきもしないのに、また松丸がわたしの横ツ腹などを突くし――』
『……』

『この頃のやうに、不吉がつゞくことはない。』
『それは皆お前の心がけが惡いからよ。』
『わたしがどう惡いのです』と、目を据える。
　健作は冷かしの笑がほをつづけて、
『第一、ゲリンジの時でも、あのでけい生き物が一生懸命にもがいてるのを、肥桶から引きあげて呉れた骨折りは大抵なこツちや無い——鼻持ちがならなかつただけでも、ちツとア、助けに來て呉れた若い衆を思ひやつてもいいんだ。伊丹一樽も拔いていいところを、お前は德利一本も出さねいで、たつた砂糖二斤で濟ましやアがつた。』
『あなたのやうにおほきな腹でゐても、身代は出來ませんから、ね。』
『長谷川の一件でもさうだ——默つてほうツときやア、六十圓が四十圓でも向ふからおとなしく持つて來らア。それをお前が餘りせつくから、おこつてしまつたんだ。訴訟に勝つたツて。費用を引けア、おれ達の手に這入るのア何ほどもありやしねい。』
『あんないけ好かない奴は、訴へて。牢に入れてやる方がいい。』
『女と云ふ奴アすべてけちなもんだ。あの松丸が女嫌ひなのア尤も、さ。』
　赤牛の呻き聲がしてゐる。

『あんな馬鹿牛は早くくたばつてしまうがいい!うん、うん云つて、呻つてやアがる!いい氣味だ!』

『馬鹿云ふな、あれが死んだら五百圓足らずの損だ。』

『五百圓が六百圓でも、わたしはよう御座います――寒いから、その障子を締めて行つて下さい!』

から云つて、お末は枕の上の顔を反對の方に向けてしまう。その横がほを見て、健作はもツと太つて呉れればいいのにと思ふ。

渠は腰の煙草入れをはづし、椰子の實から煙草を一つまみ、太い銀煙管につぎかけるところであつたが、妻の命令通り、立つて障子を締める。それから、また、もとの座に返る。そして、暫く無言で煙を吐いてゐる。

『あなたは』と、お末はそツ方を向いたままで、『牛や碁の方が大切なので、わたしのことなどちツとも思つて呉れないんでしようよ――御厄介なら里へ引取ります。』

『はツは』と、健作は正直な笑ひ聲を出して、『また、里はよして貰ひてい――』

お末は、自分の里が醫者であるのを、さう立派な醫者でもないのに、鼻にかけてゐる。雇ひ人等はそれを聽くたんびに、心であざ笑ひ、さう立派なお里なら、もツといいところへ嫁に行けただらうにと、いつも蔭言を云つてゐる。『高が牛屋ぢやアねいか』、『それがへツぽこ醫者よりやアましだア、ね』などと、雇ひ人どもが云つてゐるところを、健作も通り聽きしたことがあるが、渠はそれを男だけに

大して氣にもかけない。

『お前の里とは、商賣が違ふが、それにも負けねいやうに牛舍を建て增したり、今度はこの住宅の改築をしようと思つてるぢやアねいか？こんな藁葺き小屋ぢやア、實際、おれも　勢がねいから、なア。それに、お前の知慧通りに、おれの兄が請負師であるのを幸ひ、材木はおほかた無代で、兄の普請場から寄せ集めてゐるぢやアねいか？兄と申し合せて、丸で泥棒をして來るんだ。』

『およしなさい、人聽きが惡い』と、お末はこちらを向く。

『これも皆お前の爲めだ――おれの身代は、つまり、お前の身代だから、なア――ただ子供がねいのが困る。――おい、お末、早く子供をひとり產めよ、子供を――ゲリンジの產んだ小櫻よりやアいい子供を產めよ。』

お末は氣が直つて、所天に微笑の目を向けてゐたが、『わたし、牝牛ぢやアない、わ。』

『だから』と、健作も笑ひながら、『牝牛よりやアいい子供を產めと云ふんだ。』

健作は松丸の呻き聲に耳を傾けてゐる。

『あれも仕やうがないことをした、わ、ね――ばちが當つたんだ。』

『今、醫者がやつて來る、心配するまでもねいや――太吉のせいだと云ふぢやアねいか？』

『…………』

『太吉の？』
『………』
『ええ？』
『………』
お末は、いい考へを得たと、心で喜んだ。と云ふのは、今年五十五才の太吉が、二三年前まで、まだ牛乳配達の出來た時、渠は毎月儲ける金を、使ひ道がないので、主人に預けてゐた。そして馬鹿の上に一層のから馬鹿になつて牛乳の配達を間違ひだらけにするばかりでなく、家の用事も碌に出來なくなつてからも、これまで長く働いてゐたのに而じて、庭掃除や牛舍の下働きを許され、多少の給金を貰つて、矢張り、それを主人に預けてゐた。渠と共に同家に勤めて、炊事がかりを受け持つてゐた渠の母が――昨年お末が八百屋の帳面づらを胡麻化したのを指摘した爲め――お末と衝突して暇を貰つた時も、健作の取り爲しで、太吉だけは、どうせ、どこへ行つても碌な役に立つまいから、これまで通りここで世話して貰ふことになつた。その儲けと給金とがつもり積つて、――たまには、その母が他の息子や孫の病氣に使つたが――今は、かれこれ三十五六圓になる。お末は、それを本人に遣らないで、何とかして、自分のものにしたいと思つてゐたところだ。
『さうに違ひない、わ』と、お末は半身を褥の上に起し、所天の顏を見ながら、兩手で寢卷きの襟を

正す。

『あんな馬鹿は』と、健作は初めの權幕に返つて、『またどんなことを仕出かすか心配だ、直ぐ追ひ出すより仕かたが無い！』

『それにしても』と、お末は案の定なのにいそ〳〵して、『あの預つた分だけは渡してやらにやア、ねえ――』

『忌々しい、なア――』と云ひながらも、牛の呻きに氣が取られる。

『けれど、人情だ、わ――早く三十六圓出して下さい。太吉の方はわたしが引き受けます。』

四

獸醫が來たので、健作はそれをつれて牛舍へ行つた跡で、お末は留吉をして太吉を呼んで來させた。太吉は先刻から、女主人の命令通り、松丸の喰つてしまつた分だけの飼ひ葉の責增しを三石六斗入りの釜でして、改めて第二號から第八號の桶を滿たし、留吉と共に、牧柵內の牛をすべてそれ〴〵の檻に追ひ込んだところであつた。

『おかみさん、何だア』と、牛追ひ棒のよごれたのを持つて土間へやつて來ると、お末は左の手に渠に渡す金を持ち、障子の中から出て、黑光りのする椽がはの端まで來て、立て膝をしながら、

『氣の毒だが、ねえ、お前はけふ限り旦那からお暇が出たよ。』
『さうか』と、渠も意外に思つて、女主人の顔を見たが、別に何の爲めだと云ふことを問ひ糺す氣もない。ただぼんやりつツ立つたまま『わしお暇貰つたのか?』
『さうです、氣の毒だが、旦那からお暇が出たのだ、わ。』
『ぢやア、仕かたがねい、なア?』
『氣の毒だが、ねえ——まア、晩の御飯でも喰べてから、婆やの方へお歸り。』
『ぢやア、さうすべい——お母も人のうちに奉公してイるのだが、なア。』
『それで、これはお前に渡す分だから、落さないやうに持つてお行きよ』と、手にした札と銀貨とを數へないでそツくり手渡しにしようとしかける。太吉は直ぐ手を出しかけたが、棒を持つてゐたので、先づそれを横の方に打ツちやり、兩手を上向きに廣げて見て、初めてそのよごれに氣付いた。そして、その手のひらを自分の、繩を帯にして結はへた法被の腹のあたりにこすり付けた。それから、腰を曲げて手を出しかけたが、また引ツ込めて、右と左の手の甲で、かたみに手早く水ツ洟を拂つた。
お末はじれツたさうに、太吉の見すぼらしい姿と玄關の家根うらのすすけたのとを見比べてゐたが、水ツ洟を拂つたのをよく〳〵きたならしいと見てその顔をしがめた。で、少し延ばしてゐた手を引ツ込めた。と同時に自分の勘定が合つてゐるか、ゐないかを今一度調べて見る氣になり、立て膝のまま、

横向きになり、立てた右の膝の上で、紙幣を一圓、二圓、三圓、十錢銀貨を十錢二十錢、三十錢と數へて見た。
『一ケ月の給金、三圓三十錢――これだけやれば充分だ。』自分で自分に惜しさうに云つて向き直り、
『さア、お受け取りよ』と、板の間に投げ出すやうに置く。
『ありがたう』と云つて、數へもしないで、太吉は嬉しさうにそれをつかみあげ、二三年來用ゐもしない腹がけのどんぶりへ押し込む。
『忘れ物はないか』と、お末は云つて見たい氣がしたが、默つて見送つてゐる。
太吉は、いそ〳〵土間を出て、けふが最後の晩飯を充分喰はせて貰はうと考へながら、假り建ての飼ひ葉煮出し場の片隅――自分の寢間兼物置――へ向ふ。その股引きに、おほ丸の野口じるしの絆纏着で、よぼ〳〵して行く後ろ姿を見てゐると、お末には、けふに限り、渠が特別に拔けてゐるところがある樣に思はれた。
『あすは三越へ行つて、三十五六圓の帶を買はう』と思ふと、横ツ腹の痛みなどはどこへか行つてしまつたやうだ。
牛舍で獸醫やうちのものが騷いでゐるらしいのも構はず、あの衣物にどんな帶が似合ふか知らと、それを簞笥から出して見たくなり、薄暗い臺どころで働いてゐる下女に聲をかけて、

『これ、お松、ランプを早くつけてお呉れ。』

五

『默つて追ひ出された太吉も馬鹿なら、喰ひ過ぎた松丸も馬鹿だ、なア』と、留吉が主人の食事をしてゐるそばで云ふのを聽いて、
『この野郎。』あぐらをかいた健作は、猪口を口に持つて行つたのをとめて、わざとらしく釣りランプの光に瞰みつけ、その顏には笑ひを蔽ひ切れないで、『手前も糞詰りになつて見ろ！松丸どころぢやあるめい？』
『まさか、太吉ぢやアありませんし――』
『太吉と云やア』と、お末は所天が四角な食卓の上に置いた猪口に酌をしながら、『あいつは、何と思つたのか、晩の御飯を大相喰べて行つたさうですよ。』
『あいつア不斷からおほ喰ひだ』と、健作は輕くあしらふ。
『そのおほ喰ひが、また』と、お末は引き締めた笑ひを湛へて、『お松がびツくらしたほどおほ喰ひであつたのですよ。』
『おれぐらゐは、それでも喰へめいが――』

『あなたはいつも松丸のやうです、わ。』
『馬鹿ア云へ』と、健作は妻の笑ひに引き入れられる。
『おらア旦那や松丸のやうにやア喰へねえや』と、留吉は小頸を傾げたが、心では、女主人に大食家の一人に數へられるのを避ける申しわけをしたのである。
『そりやア當り前よ。』健作は一口飲んで、笑ひながら、小僧の窮屈さうにちんまりと、臺どころに界する敷居の上に坐わつたからだを、あたまから膝ッこまでも見あげ、見おろし、『梅干のやうな手前等とア體格が違つてらア。』
『へ、へ、へ』と、兩の膝に手を突いて、留吉が笑ふのを、お末はじろりと見て、
『何がをかしいのよ』と澄した顏で、この小僧が太吉の出て行く時に何か智慧でも付けてやりはしなかつたか知らと考へて見る。
『おい、糞詰り、病人がどうして居るか見て來い。』
から主人に云はれて、留吉はおほ喰ひでもないのにと顏を脹らし、
『おらア糞詰りぢやアねい。』
『ふ、ふん！』主人夫婦は顏を見合はせて笑つた。
『さうか』と、健作は然し小僧にあやまるやうな口振りで、『まア、見て來て呉れ。』

留吉は命令に從ひ、いやさうにそこを立つて行く。牛舍の方からは、相變らず松丸の呻めきが聽える。と同時にお松が天井のない臺どころで何か働いてゐるのが見える。

『いくら飲んでも醉はねいや。』

『ぢやア、御飯？』お末は首をかしげる。返事がないので、勝手に所天の茶椀に飯を盛る。健作はまた默つてそれを喰ひ始める。

がた／＼と、留吉は飛び込んで來て、土間からかけあがつた。

『どうかしたか、留吉』と、大きな聲で云つて健作は箸を置いて、心配さうな樣子をする。

『なアに』と、小僧は腰を曲げてもとの敷居の上に平氣で首を出し、『うん／＼云つてらア。』

『何だ、馬鹿！』食卓の上を握り拳で叩いた。そして、『何ごとか松丸におッ初まつたかと思つた、わい』と、また箸を持つ。『あわて者め！』

お末は吹き出した。それに次いで、臺どころでも、吹き出す聲がした。留吉はこそ／＼引きさがつて行く。

大きな茶椀で四杯まで更へたが、健作はどうも不斷通りには飯も喰へない。

『もう行けねい』と、四杯目を半分ほど殘して箸を棄てた。

『けふはどうしたんでしよう』と、お末は不思議さうに、お盆を持つたまま、『いつもの半分ぢやア御

坐いませんか――それに、御飯時が大分後れてるのに？』

『何だか、喰ふ氣にならねい。』

『それぢやア、勇氣がないの、ね、牝牛のお腹のやうに太ツ腹な癖に』と云つて、もツと喰へと勸める。食事が進まないと、翌日、直ぐ痩せたのが分るからである。

『………』健作は默つて、首を振る。

『では、なほ更ら子供が出來ませんよ』と、お末は目にまでも微笑を浮べて、訴へるやうな聲で勸める。

『馬鹿』と、健作は目じりを下げて笑つたが、然しまた沈んだ聲で、『あの苦しさうな呻き聲を聽くと、おれも糞詰りになりさうだ。

六

健作は大きないびきをかいて、ぐう〱眠る質だが、その夜に限つて、どうしても、充分に寢つかれない。夜中に二三度も起き出て、牛舍に行つて見た。そして、松丸の顏を撫でてやりながら、

『しツかりしてイろ――しツかりしてイろ！あの太吉の野郎は惡い奴だ、然し馬鹿だから、仕やうがねい。お前の不仕合せだとあきらめろ、ええ、あきらめろよ、――ええ、松丸、本當にしツかりして

イろ。注射も利いたに相違ねい。鹽をんじやくは氣持ちがよからう?こら、松丸!しツかりせいよ!しツかりせいよ!夜が明けたら、また注射をして貰つてやらう。しツかりしてイろ、よ、しツかり——え、松丸、しツかりしてイろ!』

『う、うーん——う、うーん!』

と、薄暗いカンテラのもとで呻きながらも、牝牛は主人が來てゐる間は心丈夫なやうであつたが、渠が行つてしまつたあとで、明けがたまでに、檻中をころげまわつた跡を殘した。

主人の思ふやうに、注射も利いた樣子はないし、鹽をんじやくも何等効能が見えなかつた。

『大分落ちついたやうだ、なア』と、健作は翌日の晝頃になつて一安心したが、その落つきがゆふかたになつて、また醫者の見舞ひに來た時は、もう駄目なしるしだと分つた。

いよ〳〵駄目だと分ると、健作の身代としては、少なからぬおほ損であるから、殘念で、殘念で、溜らなくなつた。そして、まだ死にもしないうちから、今まで人一倍に可愛がつて、あはれがつてゐた松丸を、敵の間者であつたか、何かのやうに憎くなつて來た。

健作の昨日から比べて見れば少し痩せた顔には、怒りの餘勢がぽツと赤く見えてゐる。

『こん畜生、勝手にしやアがれ』と、松丸を瞰みつけ、牝牛が大きな目で主人を見送つてゐるのにも頓着せず、牛舍を立ち去つて、住宅の玄關から急いであがり、家根裏からしてすけてゐる臺どころ

の板の間に坐わり込み、
『さア、酒だ、酒だ』と怒鳴る。
『お酒だとよ』と、お末は自分の部屋から飛び出して來る。こんな時に反對でもしようものなら、必らずおほ喧嘩になつて、自分が大きな拳骨を二つなり、三つなり喰らはせられるのを知つてゐるからである。それに、また、けふは三越行きを遠慮してやめたが、あすは行かうと考へてゐるのを、さし止められるやうなことがないやうにして置く必要もあつた。
食堂室の食卓の上には、酒の一杯這入つた一升德利がランプに照らされてゐる。それをそこで燗しながら飮ませられると、健作はほかに大した肴の好みをしないのが常だ。
『きのふから心配してやつたのも無駄だ――業腹だ』と云つて、がぶ〳〵酒をあふり、いい加減になると、ぷツとそこに立ち、よごれたおほ柄黄縞銘仙のどてらに、これもよごれた白縮緬の兵兒帶を締めたまま、ふところ手で、のそり〳〵と土間に下りた。
『あなた』と、お末は送つて來て、『また碁を打ちに行くのはよう御座いますが、今晩はとまつて來ちやア困ります――あすはあなたに留守をして貰つて、わたし　出なければなりませんから。』
『さう度々とまつて來るもんか』と、跡を見ないで、健作が出て行く後ろから、
『そんな奇麗なこと云つても』と、お末はいま〳〵しさうに見つめながら、『夜出ると、きツと二日も

三日も歸らないことがあります。』

七

三日目には、松丸の呻き聲が段々低くなつて、健作が午前から妻の留守居をしてゐても、それが住居までは聽えない。

健作の松丸に關する心配は、然し、それよりも早く、ゆふべの燒け酒でなくなつてしまつたのである。

晝から留吉や乳搾りを話相手に酒を飲んでゐるのは、妻の歸りを待ちあぐんだからで――醉ひがまわつて來ると、また碁を打ちに行きたくなつたので、自分で簞笥から出した魚子の黑紋付を不斷着の上にあふり、留吉等に留守をまかせて、外出する。

その跡へ、老婆が一人やつて來た。脊が高く、骨格の逞しいので、一見して太吉の母と分る。留吉は、それを見ると、氣がとがめるので、隱れてしまつた。

老婆は八十に最早や一つ二つのところだが、馬鹿の子よりもまだしツかりしてゐる。動物好きで、ここにゐる時も、ゲリンジや松丸を可愛がつてゐた。で、門を這入つた時から、低い呻き聲に氣がついてゐて、緣がはに腰かけてから、

『あれは何だ?』

『松丸が死にかかつてゐるのだ』と、乳搾りの若い者が云ふ。

『あの松丸がかい』と反問して、かの女はそのわけを聴かせられた。

　行つて見ると、牝牛は如何にも弱わつてしまつて、いきをするのさへ大儀らしい。老婆が近づくと、誰れでも人が來て呉れるのを待つてゐたと云ふやうに、嬉しい目つきをする。

『おう〱、可愛さうに、なア』と、かの女はその心持ちを推察して、横木のそばにしやがみ、下から出してゐる鼻の上を撫でてやりながら、『この婆やをおぼえてるかい?忘れたかい?ええ、松丸――可愛さうに、なア――死にかかつた病人のお前を置いて、皆留守だよ。誰れもいたわつて呉れないのか?ええ、松丸、しツかりして、早くよくなれよ。お前はいい牛だ。――可愛さうに、なア。』

　そこへ、お末が澄まし込んで歸つて來た。消し炭色の縮緬の同じ色の縫ひ紋の羽織りに、おなんどの横縞お召を着てゐる。手には、反物が一つ這入つてゐる風呂敷包みを持つてゐる。太吉の母が牛舍の方から出て來たのを見て、然し、顏色を變へた。

『何で來た』と云つてやりたいやうな心を押へて、老婆が松丸の見舞ひなど云ふのを冷淡にあしらひ、玄關のところまで一緒に來たが、わざと玄關へは這入らないで、緣がはからあがり、手早く持ち物を自分の室にほうり込み、明けた障子の敷居の上にしやがんで、

『ああ草臥れた、草臥れた』と、獨り言のやうに云ふ。
『いつもの呉服屋ですか』と、老婆は話しかける。心では、然しこのかみさんはこれまでにも度々、出入り商人の拂ひなどをちよろまかし、それを手がら顏に雇ひ人どもに吹聽したことがあるのを思ひ出し、あの反物もひよッとすると太吉の受け取る分を融通したのではないか知らんと感づいた。
『ああ』とは答へたが、お末はこれまでのやうに愛想よくあがれとは云はない。老婆も果して樣子が違ふ、な、と思つたが、考へがあつて來たのだから、遠慮なく椽がはに腰かける。
暫く、持つて來た話の糸ぐちを得ようと待つてゐたが、かみさんが默つてゐるので、老婆は自分から切り出し、
『實は、けふあがつたのはほかでも御座いませんが』と、太吉は一ケ月分の給金だけで、年來預けた分を持つて來なかつたことを語る。
『わたしの方では』と、お末はつんとして、然しいろ／＼とよそを見ながら、『あげましたよ——太吉が落してもしたのでしよう。』
『いくらあれが馬鹿でも』と、老婆はむッとして、『そんなことをする筈が御座いません。』
『落したら、落したのぢやアないか？』
『では』と、どうせ喧嘩づくより仕かたがないと見て取り、『おかみさんは落したのを見ましたか？』

『見たら、拾つてやる、さ。』

『それ、御覽なさい——太吉はあなた樣から受け取つたのを直ぐ腹がけのどんぶりへ押し込んだまま來たと申します。』

『馬鹿の云ふことなど當てにやアならないよ。』

『おかみさんは』と、片手をたよりに、胸を前に出し、兩口びるがまくれ込んだ口を早めて、『それほどまでに、わたし共を馬鹿になさりますか？』

『馬鹿らしいことを云やア、馬鹿、さ。』

『手前こそ馬鹿な胡麻化しをやりやアがつたんだ』と、老婆は喉まで出したが、この心の叫びをじツと抑へて、かみさんの横顏を瞰みながら、からだを引く。

そこへ、健作のお箱の『潮來出島』が遠く聽えて來た。碁の相手が生憎どこにも待つてゐなかつたのである。

二人は話を中止して、別々な心持ちで門の方を見た。

八

健作が千鳥足で門に這入るとたん、白と赤とのまだら小牛が牧場の方から留吉に追ひかけられて來

て、牧柵を飛び越え、健作の前に立つ。
『おお、小櫻か？さア負ぶされ、負ぶされ！』渠が脊中を向けてしやがむと、小牛は前足を揃へてその上に乘せる。
『負ぶされ、負ぶされ』と、柵を小牛の跡から越えた留吉も亦しやがんで背中を向けると、小牛はまたその方に飛びかかる。
『さア負ぶされ、負ぶされ』と、健作がしやがんだままあとずさりして行くと、またその兩肩に兩の前足をかける。
『羽織が臺なしぢやアありませんか！』お末が顏色を變へて飛んで來た時は、健作と留吉との競爭で、負ぶされ、負ぶされをやつてゐた。
『およしなさい、面白くもない』と、お末は苦笑ひして健作の手を引ツ張る。
『でも、なア』と、妻の顏をだらしなく見ながら引ツ張られて、立ちあがると直ぐよろめきながら、
『可愛いぢやアないか？』
『負ぶされ、負ぶされ』と、まだ留吉は誘つてゐるが、小牛はもう勞れて、みんなの方に尻を向けて立つてゐる。
『全體』と、お末は留吉をねめ付けて、『お前がそんなことを敎へたから惡い！』

『へ、へ、へ』と、留吉は立ちあがつて笑ふ。

『ぢやア手、手前も』と、呂律までがあぶなツかしい健作は、右手を後ろに廣げ、

『あ、あんな――可愛いのを――産んで――呉れよ、なア。』から云つて、妻の方に倒れかかる。

『あぶない』と、お末は兩手で所天の大きな圖體を受けとめる。『どこでまた飲んで來たんですよ、留守居もしないで?』

『手前の歸りがおそいからよ。』

『子供ぢやアあるまいし――さア、お這入んなさい、お這入んなさい』と、ぐんぐん引ツ張つて行く。

健作は妻の引ツ張る力を感じてゐる間は、目をつぶつてよろ〳〵足を運ぶが、妻の力がゆるむと、目を明いて、おもい尻からさきに跡ずさりをしようとする。

渠は目を明いてはつぶり、つぶつてまた明き、前の方へよろ〳〵と進んではあとずさりし、あとずさりしてはまた進む。

『うるさい、ねえ』と、お末が不意に手をふり切ると、渠の腰がぐら〳〵と砕けかけて、僅かに踏みこたへたとたん、渠の目に、太吉の母が愛相笑ひをして椽がはを離れて來るのが映る。

『やア、婆やか――よく來た、なア。』

『御無沙汰してをりました』と、老婆はお辭儀をしかける。

『さア！』お末はそれには構はせないで、また所天の手を執り、『あがつておしまひなさい』と、ずんずん玄關の方へ引ッ張つて行く。

『まアゆツくり飯でも喰つて行けよ』と、主人には云はれたが、老婆は手持ち無沙汰に立つたまま、渠が玄關に這入り、戸ぶくろの蔭に見えなくなつたのを見送つたが、渠は椽がはをあがると、妻の引ッ張るのをも構はず、庭の椽がはの方に來たり、ふところ手でお末の部屋の角柱にもたれるかと思ふと、ずる／＼と、膝を碎いて腰を板の上におろす。

『大相いい御機嫌で御坐ります、なア』と、老婆は話の機會を得ようとする。

『ああ、醉つた、醉つた。』健作は顏をくるりとまわして、かの女の方をとろんこの目で見て、『まア、あがれよ、久し振りで一杯婆やのお酌をして貰はう。』

『どう致しまして、旦那、この婆々アなんぞに』と云ひかけると、お末は立つたまま所天のそばから顏を出して、

『もう、お歸り！うちでは用がないから』と叱りつける。

『どうせ、もう、御用のない婆々アで御坐りますが、旦那』と、また椽さきに腰を据ゑて、『けふは鳥渡わたしが伺ひたいことがあつてまゐつたので御坐ります。』

『何を伺ひていいんだ』と、健作は垂れてゐた首をあげる。

『實は、太吉が――』

『そんなこと聽くに及びません』と、お末はとめる。

『太吉がどうしたんでい?』

『あれが』と、老婆は預け金を渡して貰はなかつたことを話す。

『そりやア、嘘だ!』健作は組んでゐた足の右を戸ぶくろの方に投げ出し、『おれは確かに三十六圓渡した。』

『それ、御覽』と、お末は所天の言葉に力得て、勝ち誇りげだ。

『おかみさんでしよう?』

『おれのかみさんが太吉に渡したのは、つ、つまり、おれが太吉に渡したことになる』と、またあたまを垂れる。

『けれども、それを太吉は受け取つて來ません。』

『それが云ひがかりと云ふものですよ!』お末は腰にまで念を入れて、顏を突き出すと同時に片足を踏み鳴らし、最後の『よ』と共に相手をつッ放すやうに體を引く。

『さうだ、云ひがかりだ』と、健作は下を向いたまま、わけもなく妻の言葉に應ずる。

『わたしは人さまに云ひがかりなど申したことは御坐りません』と、老婆は口惜しさうに口をしよぼ

つかす。
『いいや、云ひがかりだ』と、今度は左の足をかの女の方に投げ出す。その足が物を云つたかのやうに、慳貪な調子で、お末は所天の頭上を超えて云ひ放つた、
『お歸りと云ふに！』
『それでは、あなたがたは太吉とこの婆々アとをあんまり』と、首を振り、『馬鹿になさるではありませんか？』
『馬鹿だから、馬鹿の子が出來るんだ』と、健作も妻の加勢をする。
『いくら旦那がお醉ひになつても、あんまり無茶です！』
『さうだ、無茶苦茶、茶々滅茶だア――おい、婆アさん』と、ふところの兩手を出して、ちやんと向股の上に肱を曲げて張り、目をまた老婆の方に向けて、『お前よりやアさきにあの松丸は死ぬんだぞ。』
『さうらしう御坐ります、なア。』老婆は主人の心持ちが何だか分らなくなつた。
『それも』と、お末は早口に、『太吉のせいです。』
『あれのせいとは？』
『それでお拂ひ箱にしたんだよ！』
『へい――』と云つた切り、老婆はその場に思ひ出した、この女主人が自分のここに奉公してゐた

時にも云ひがかりを云つて、一人の下女を追ひ出したことがあるのを。

何にせよ、醉ツ拂ひの旦那に嘘つきのかみさんと來てゐるから、この場では結着が附くまい。出るところへ出たら分ることだと、自分の孫が巡査をしてゐるのを心賴みに、老婆はさう決心をつけてここで云ひ爭ふことをやめた。

『おれは裸踊りをして見せる――まア、あがつて見ろよ』と、健作は起きあがつて、のめりさうな風で老婆の小ざツぱりした木綿着の袖を捕へる。

『破れます、破れます』と、云ひながら、かの女はそれを手早くふり拂ひ、椽がはを離れる。

『まア、いいぢやねいか』と、健作は狐ツ付きのやうな手つきで招くのだ。『おれに對抗する體格を持つてるのア、お前獨りぢやアねいか？』

『ありがたう、もう、何度も旦那の踊りは拜見致しました。――いづれ出直しますから』と、老婆は笑つて樂に會釋してから、お末を目でおぼえてゐろと睨みつける。

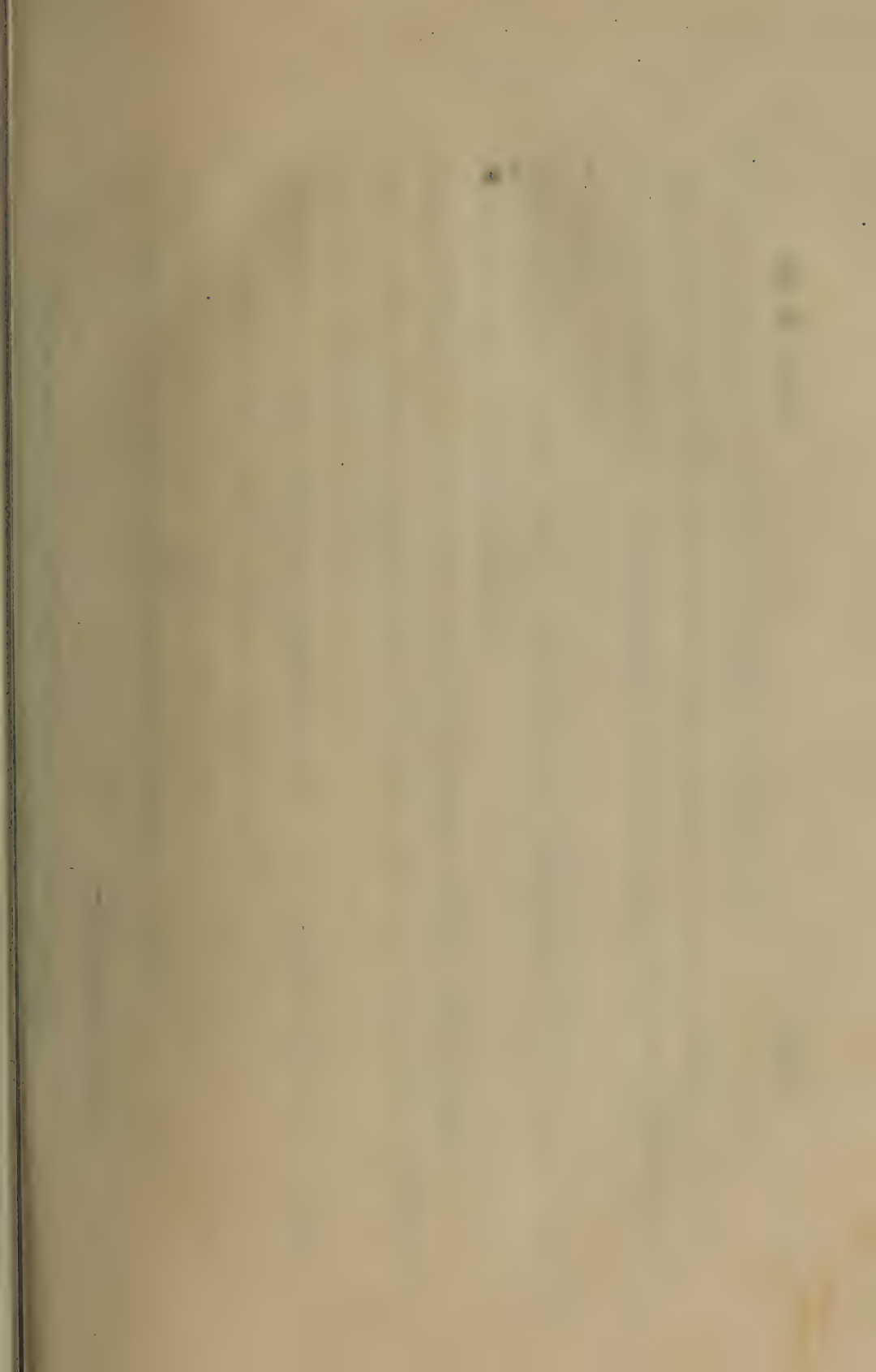
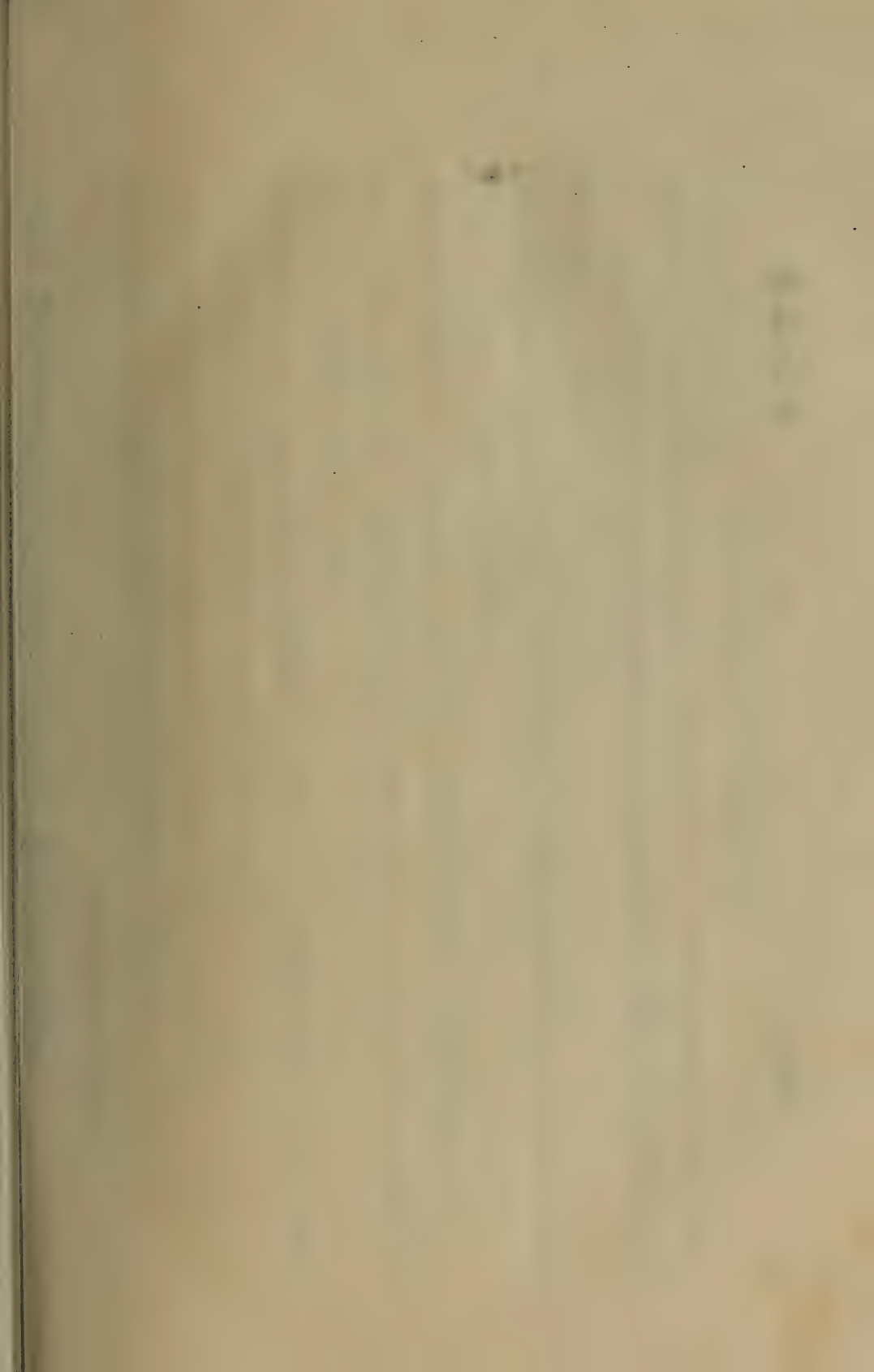
お末が老婆の口を避けて臺どころの方に引ツ込んで行くと、

『さア、裸踊りだ』と、健作は例の縮緬の兵見帶を解きながらついて行つた。

その夜、松丸の大きなからだは、誰れも知らないうちに、冷たくなつてゐた

――(明治四十四年一月)――

僞名者

僞名者

………世界は今靄に包まれてゐる。その靄はぼうつとして………然し能狂言にある土蜘蛛が繰り出して投げる絲のやうに細い筋を幾筋にも立てて、くる〳〵、くる〳〵と渦卷きをしてゐる。

それが………ぱツと晴れたかと思ふと、人の邸宅が見えて來た。門のない玄關の格子戸、その左りに續いた高窓の締つた障子、そのまた次ぎの勝手口………その勝手口から家の左り角までは、槇の生垣を以つて圍はれてゐるのであつた。………井戸………垣根の前、三間ばかりを離れて、自分逹がよく母に賴まれて水を汲みに行つた井戸がある。

井戸に添つて、その家の正面に廣がてゐる畑………甚平さんのだ。自分の隣りの村山の甚平さんも、同じ士族仲間で、同じ屋敷内にゐた。九軒ばかりの士族仲間が、慣れない商賣や面白がつてすさんだ酒色の爲め失敗して、三四軒を殘した他のもの等の邸宅は段々賣り拂はれ、立ち退かされて、その跡がすべて畑になつたのは自分も知つてゐる。甚平さんはその一部を買つて持つてゐるので、裁判所の小使をしてゐる暇々に、それを耕してゐたのも知つてゐる。

あの人が今まで畑の大根の根を掘り起してゐたが………自分は今突然自分の漢學の先生の玄關を拔け出した。(見えた家とは、その先生の家であつた。)何の爲めに先生の家にゐたのか、何の爲めにまたそこを飛び出したのか………一向に………ぼうつとして、また、戸外に似合はずあたたかいやうで、わけが分らない。

………時は夜かと思ふと、明るくつて、甚平さんの畑が見える。晝間かと思へば、どうも、暗やみの中のやうでもある………自分は何か非常にびく〲して、あたりに人がゐはしないかと見まはした。

………先生や先生のおッ母さんが自分の跡から追つかけて來て、

『こら、本野、本野！どうした』と聲をかけるかのやうな氣がする。………自分に氣が付くと、自家傳來の銘刀、正宗の長い拔き身を引つ提げて、逃げ道を失つた狐のやうに、玄關と畑との間にまごついてゐる。

全身は全く血の氣が拔けたやう………總毛立つて、眞ッ青な顏を見てゐると、目は見る〱見据わつて來て、何か決心の色を示めした。

すると、赤い實が針葉に交つてなつてゐる槇の生垣を這入つて、家の横手を一目散に走つた………どうやら、長い廓下の下のやうで、而も、芝居の花道に添ふた下裏の通路のやうに外から一切圍はれてゐる。………

八幡さまのお社へ來た。ある筈の大楠の木………丑滿時に、髮を亂したあたまに三本の蠟燭を點火し、おのれの影を踏み消しながら、人をのろひに來ると云ふ女が、その高い枝の蔭に、藁人形を釘打ちにしたのが度々發見されたおほ楠の木………それが見えない代りに、高い〳〵五重の塔が聳えてゐる。自分はそれをかけ登つた、本能的に何か心をさうさせるものがあつたやうに。

………一階目には、天邊から釣り下つてゐる中心柱を背にして、金佛が祭つてあつた。その前からさす蠟燭の光に、持つてゐる拔き身がきら〳〵光つた。………參詣人が一人來たので、急いで二階へあがつてしまつた。

二階には建築の內部と上に導くはしごが見える外、何もなかつた。三階、四階にも亦何もなかつた。一番上の五階には、年取つた男と年取つた婦人とが（夫婦だらう、むつまじさうであつた）肩を相接して南の欄干に寄り、下の方をながめてゐた。

『こいつだ、な。』自分はかう思つたので、はしごをあがり切るが早いか、先づ男を後ろから袈裟斬りにした。………どうしたのか、少しも血が出ないで平氣にしてゐる。で、婦人をも亦後ろから斬り付けた。………今一度と思つて刀をあげると、もう他にはゐないと思つてゐた人（若い婦人であつた）が刀の下へ來て斬られてしまつた。………

『御用だ！』そこへ巡査のサーベル姿が見えたので、自分は持つた物を投げ出して、頂上の周圍を西

の方へ隠れた。

　………晝間か夜か矢つ張り分らないやうだが、兎に角、自分は煙の抜けるやうにすうつと隠れて、西から北、北から東へまはり、巡査が斬られた人々と何か話をしてゐるそばをそつとすべり下りて、やつとのことで塔を逃れ出た。

『あなた、あなた。』から云つてゆり起すものがある。目が覺めると、渠は全身にぐつすり冷汗をかいてゐるのをおぼえる。

『どうかなさいましたか?』妻は渠の傍らに半身を起して、右の手を所天の胸の上に置いたまま、『また夢を見たんでしよう?大變な動悸ですよ。』

『夢を見たんだ、夢を。』この返事にはわざと平氣をよそほつたところがあると、直ぐ自ら考へられた。

『どんな夢なの?』と、あまへた調子で、につこり笑ふ。

『夢は夢、さ。』渠は枕の上から妻の顔を見あげ、同じ優しみを以つて報いようとしたが、それが苦笑に落ちると同時に、聲が顫へた。

『もう、いい』と云はないばかりに、妻は右の手を引つ込め、束髪を解いてあるあたまを再びその枕に落し、からだを向ふにそむけた。『あなたは、いつも、人がどんな夢と聽いても、魘された時に限つて、云つて下さらないの、ね。』

『云つても』と、仰向いたまま、『夢なんぞ詰らんではないか？』
『でも、あたし』と、また向き直つて、『いい夢を見たの――それは〱いい夢よ。』
『……』
『云つてあげましようか？』
『ああ。』
『いい夢よ――あなたが、ねえ――あなたが天子さまに招かれて』と語り出したが、急にその微笑の圓い目もとを鋭くし、やわらかい口もとを引き締めて、『聽いてるの？』
『聽いてるよ。』返事だけで、そつちを見なかつたが、ほほゑみの聲とは取れた。
『さうして、ね、特別に、どうか、しつかりこの道の爲めに盡せよと云ふ御依賴を受けたの――』
『……』
『若しそんなことが實際にあつたら、あなたの爲めにも名譽だし、耶蘇敎の爲めにも體面がよくなるわ、ね。』
『そんな詰らん空想に耽らんで――お寢よ。』
『あたし、寢ていたんですが』と、訴へるやうに出たが、中途から怒つたやうな、改まつた聲になつて、『あなたの魘された聲で起されたんです。』

『……』

渠は、枕を並べてゐる若い妻が、あたたかい體溫を傳へつつ、いつものやうに時間もかまはず、夢物語りなどをしやべり出さうとするのを、今夜に限り、うるさいと思ふ。で、動悸の鎭まりかけた自分の胸を兩手で押へて、それつ切り、無言で目をつぶつてゐた。

然し全身を投げ出したやうな勢ひで、わざと烈しく向ふへ寢返りした妻が、亂した髮のかをりを自然に送つて來るのを感じて、呼吸がまた俄かに躍つた。

『わけを知らないから、また拗るのだらうが、實は』と渠が云ひ出しかけたことは、これまでにも幾度あつたか知れないが、遂に、いつそ、云はないと云ふことに決めてゐるのである。

一生の同棲者にだけでもうち明けて、自分の過去半生に關する苦惱を半分背負つて貰ひたいのは山山だが、考へて見ると何も、知らないで自分と相愛の結果になつた無垢の婦人にそんな苦惱を半分でも負はせるのは可哀さうだ。だから、世間の人々に對すると同樣、妻にも隱してゐるのだが……自分は人殺しをした脫走者だ。小菅悌一郎と云ふ姓名も、實は、僞稱だ。………若し本名を名乘つて出れば、明日にも警察官の繩目にかかる身である。………

今日まで無事に通つて來たのは、日本人としては、特別な、云ひ換れば、多數には閑却された狀態にある社會を渡つてゐるからのことで………時代後れの思想に據つて正義、博愛、純潔、誠實、人道

などを説く耶蘇教のやうな物を誰れが眞面目に信じてゐられよう？自分の舊惡を胡麻化せる隱れ家なればこそだ………

してゐることがどうせ手段と僞善であるのは分り切つてゐる………解り切つてゐるが、然しそれを改める氣にもならない。と云ふのは、それを改めるよりも前に、一層大事なことを改めなければならないが、いまだにそれも改められない………

人に懺悔を強いる度に、肝心な自分の懺悔を怠つてゐるのが氣にかかる。然しそれもだ、………どうせ、神も造物主もない世界に、自分の說教や教理などを（これも、多くの人の前で何かしやべつてゐれば、その日が愉快に暮せる爲めの物好きが手傳つてゐるのだに）感心して、信仰を起すやうな馬鹿者には、さうさせて置くのもいいだらうが………自分には必要のないことで………

懺悔をすべきものなら、自分は先づ警察へ飛び込んで行つて、社會に懺悔をする………日本の法網は、然し、まだ／＼粗にして漏らさずと云ふところに行かない。こんな者には、相應な職業を與へて置いても呉れるし、好きな演說壇上のおしやべりを許して置いても呉れる………若し神があつて、それに感謝すべきものなら、自分は寧ろこれを感謝する………

『ごと／＼』と、戸に當る物音がした。渠がかう云ふことを考へてゐるあたまには、俄かに追つ手や巡査の姿が横切つた。然し臺所で鼠が何かかじる音をさせてゐる外、うちも外もしんとしてゐる。渡

邊橋筋の電車の響きも聽えなければ、堀向ふの機械屋の機械の音もしない。

廣い天地は靜肅その物であるやうで……その中に人間は自分と妻とのたつた二人が、……安樂に寢てゐるのだとも思はれた。

そつと夜着の中から手を出して、枕もとの時計を取つて見ようとする。

『寒いぢやありませんか？』眠つてゐると思つた妻が白烈たさうに夜着の襟（びろうどが付いてゐる）をそつちへ引つ張つた。

『まだ眠らんのか！』聲は鳥渡またびく付いたやうに。

『眠らうと思つても』と、慳貪を口早なのに現はして、『あなたがびく／＼動くので眠られないんです！』

『さうか？――もう、二時過ぎだ』と、こちらは寢苦しさう。

『さうでしようとも――眠るなら、早くお眠りなさい！』

『ところが、眠られんのだ。』

これまでにも、かうした不眠症的な夜に出會ふことがあつた。そんな時に限つて、とろ／＼と眠つたかと思ふと、直ぐ必らず怖ろしい夢を見て呼びさまされる。

妻はよく自分で見た他愛もない夢を面白さうに食事の時の話や寢物語りの種にするが、自分はいろ

んな夢を見ても、覺めた跡までおぼえてゐるのは少い。――また、自分がたまにおぼえてゐもし、且、魘された證據を妻に握られてゐもする夢は、實際におそろしくつて、妻にさへ語りたくない。………

夢に見たことを語らないのが、自分の冷淡もしくは薄情な爲めのやうにかの女には思へるのである。『どうせ眠られないのなら、話でもすればいいのに――人が話し出すと、返事も碌にして呉れない！』向ふを向いたまま、かう云ひ切つて、無理に押し鎭めてゐる呼吸の內攻を直接に感じながら、自分は考へざるを得ない――どうしても、妻との間に、自分には分つてるが、かの女にはそれと正體の分らない障壁がある。………

最も不幸の種だ………然し、どうも仕方がない………

疲れた眼瞼はおのづから十六燭電球の光をさへぎるやうにしてゐるが、惡い夢に刺戟された神經はますます自分の過去の罪惡に目覺めて行く。

今の夢に見えた先生の家の勝手口と筋かひに相對して自分の父の家の勝手口はあつた。………どうして、先生の家がこの惡夢の中に這入つたか分らないが………王陽明や大鹽中齋の書を敎はり出してから、社會に謀叛氣を起し、隨分亂暴な行爲をやつた。『そんな向ふ見ずのことをやつては行かん』と、先生にたしなめられたことがあるのは然し、事實だ。………

自分の親は然し士族かた氣の頑固であつた。東京へやつて呉れろと賴んでも、許さなかつた。では、

英語研究の必要上、神戸へなりとも出して吳れろと云つても聽かないで、今迄通り、國に來てゐる教師や、たまにやつて來る外國宣教師などに習つてゐればいいと命令した。そんな姑息手段をやりながら、父の生活の補助をする爲め角袖巡査の見習ひなどしてゐたところで、とても、滿足することが出來なかつたのも事實だ……

それが爲めに意外の惡心を生じ、それが爲めに無謀な凶事を決行したのだが………場所は自分のうぶすな神に當る八幡神社であつた。町はづれの山の麓に建つた、古い森の中の社だが………その本殿と社務所とを聯絡する爲めの高い廊下があつた。(夢に見た芝居の奈落か拔け道のやうな廊下とは、他に何かの聯想が混じて出たのだらう。)

兎に角………實際はその陸橋のやうな高い廊下の下で、自宅からこつそり擇り出して來た刀を持つたまま、そこらをまごついたことが一度ある………

社務所に續いて、神主の住宅があつて、神主とその細君とお道さんと云ふ二十四五の獨り娘とがゐた。さかりの附いた雄犬が雌犬の跡を追つかけるやうな心持ちで、その家へしつこく遊びに行く獨り者がすくなくなかつたうちで、自分もその一人であつたのも事實だ………

神主は金をためてゐると云ふ評判であつた。然し極昔流のしわん坊で、金を銀行へ預けるのさへ、人に取られてしまうかのやうに思つて、ただ、どこか自分の手近へしまつてゐた………

『あのおやぢ、金をどこへしまつて置くのだらう？』
『多分、自分の寢る疊の下か、穴倉へでも入れとるんだらう。』
『そんな金なら、大鹽平八郎の兵法（それを自分等はどんな物だか知らなかつたが、金持ちの金を奪つて貧乏人に與へたといふ暴動事件を聽いてゐるだけであつた）に從つて、僕等の仲間の宴會費にでも徵收しようか？』

こんなことも話し合つたこともあるが、それが動機となつて、自分はとう〱一人で徵收に出かけた………

勝手を知つてゐる家で………先づ神主夫婦を斬り倒した。すると、
『本野さん、何をするんです』と、お道が飛び出して來た。わが名（實は、自分の姓は本野だ）を呼ばれたので、これも生かして置くことが出來なかつた………

三百七十二圓（今でもよくおぼえてゐる）の現金を懷中して、自分はそこから社の正面の大濱へ（四五町のところを）急いだ。そこから、また、つないであつた漁船に飛び乘り、夢中で、茅渟の海の海中へ乘り出すと、生憎浪風が荒くなつて來たが、心は少し落ちついてゐるのをおぼえた。

………さて、方向をどちらへ定めよう………あつち、こつち、思案の末、船を眞ツ直ぐに大阪の方へ漕いで行くことにした………

夢中であつた……船を乘り棄ててから、二三日、大阪市中を見物する間に、天王寺の塔へも登つて見た。（そこが夢では凶行の現場になつてゐた。）

……天邊から國の方を眺めて遠く薄墨を眞ツ直ぐに引いたやうな海岸線が見えた時には、如何にも風景がいい松原や白い砂濱などを思ひ浮べたが、實際、二度と再び歸ることは出來ない、また歸りたくもないと思つた……兩親はもう死んだだらうか？然し……そんなことは考へて見たくもない。よしんば、生きてゐても、自分の顏つきや風采が、米國へ渡つてから、丸で變つてゐるので、（實にさうだ。自分を鏡に寫して見る度每に、われながら鏡までが瘦せて行くやうに思ふ、）今會つても、おのれの子を見分けることは出來まい……

國の警察では、神主殺しが如何に問題になつたとしても、それを自分と認定するまでには至らなかつただらう。兇行を實見したものの口はすべてつぐめてあるし、兇行の刀は深い海中にほうり込んである。且、家を出る時、わざと、親の金を旅銀に出來るだけ盜んで來た……

目的地は東京であつたが……親が必らず搜索の手をまはすだらうと思つたから、鳥渡英語が分るやうになつてゐたのを幸ひスキデン國の帆船に乘り組み、水夫となつて、橫濱から北海道へ航行した。その船が再び出發地へ復航すると、直ぐ米國へ向ふことになつたので、そのまま乘り組んで行つて、サンフランシスコでその船を脫走した……

それからそれへと都合のいいことが見つかるものだ。(それを見ても、世に兇行者以外に兇行者を監視もしくは懲罰するものはない。)桑港で偶々浮浪日本人が一名病死、寧ろ餓死、のたれ死にをしたので、こつそりそれを土中に埋めてやり、その姓名と旅行券とを自分の物にして、東部はニユーヨークの方へ高飛びした。………

ニユーヨークで初めて安心して勉强することが出來るやうになつたが………最初、再び日本へ歸つてからする職業を豫め選定するに困つた。歸朝の後も、僞名をしてゐなければならないのだから、とても、軍人や官吏を目的には出來ない。辯護士や學校の教師でも、矢つ張り、戸籍上の曖昧は遂に看破される恐れがないとは云へまい………

耶蘇教の傳道師………自分を晦まして生活するには、傳道師ほど都合のいい者はない………

職業と云ふものは、どんな職業にせよ、さう、いつも〱氣乘りのしてゐるものではない………國の漢學先生が毎日のやうに、同じ鹿爪らしい調子で、四書五經の講義をしてゐるのも、心から面白くはないことがあるだらうと思つた。自分も、刑事探偵は鳥渡しただけだが、それが毎日の仕事だと思ふと、いやな物であつた。

………說教をするには下らないことも澤山あるが、傳道師を職業としてやれないことはないと決心した。それに、國にゐた頃から耶蘇教を聽きかじつてゐた耳には、日本語では曾て云はれたこともな

いことが多くあるから、わが國人の前でそれをしやべるのは名譽でもあるし、また面白くもあらうと思つた――人類の先祖とか、造物主の攝理とか、同胞の愛とか、罪の許しとか。漢學ばかり勉强してゐた自分には、却々斬新な說であつた。

………自分の考へは幼稚であつた。歸朝してから實際に當つて見ると、わが國人の頭腦は精神上の問題に於て外國人一般の如く遲鈍でない………田舍にゐて、鳥渡東京へ出ただけで、それから七八年も米國に住んで、米國人流に育てられた自分には、わが國の特色や進歩は想像にも及ばなかつた………

小學校の同窓者で、陸軍少佐になつてゐるのもあれば、工學博士として立派な鐵工場を所有してゐるのもある。僅か十年餘りのうちに、數百萬圓の財產が出來た商人もある………自分は同じ强盜をするなら、いつそのこと、少くとも萬以上の金を目あてにすればよかつた………いや………自分は物質上の考へを浮べてゐた、な………せめて、罪ほろぼしに、自分で自分に誓つたことは忘れまい。自分の向ふ世界はただ精神的のだ………然しその精神的が、耶蘇敎の敎理では發達したわが國人に應用しかねる點が多い………

職業をも改めたい。(然しそれさへ妻に云ひ兼るのである。)婦人――殊に耶蘇敎で育つた婦人――などには分らないわが國人の頭腦は、外國人のそれよりも銳利だ、たとへば、磨ぎ澄ました、燒い刄の………ああ、もう考へまい、自分はもと人を正宗の刀で三人までも斬つたのである。

電光が明るいせいで神經がちらつき、こんなことを取り止めもなく思ひ浮べるのだらうと思つて、渠はそれをねぢ消さうとして起きあがる。
『どこへ行くんです？』妻は大きな目を開けて、こちらへ首だけを寢返りさせた。
『なに、ね』と、渠は今ソケツトの方へさし出した手を引つ込めて、情を含めたつもりのほほ笑みが矢つ張り苦笑になつた。『今、ね、いい考へが浮んだから、說教の種に控へて置からかと思つて――』
敎へに熱心な妻の機嫌を取り直さうと云ふ當座の思ひ付きであつたが、
『さう』と賴りなささうな返事はまた向ふへ向いてしまつた。
『末子、許して吳れ』と、かの女の上に身を投げ出したいばかりになつたが、さうもすることが出來ず、僞りの仕ぐさだとは知りつつも、西洋寢卷の上に壁の釘から外した外套を羽負つて、しほ〳〵と二階のあがり口をさして出て行つた。
渠は再び夢の塔を登つて行くのである。然し夢の時のやうな狂熱もなく、また輕快もない。はしご段を一段每に踏みしめる足音には磐石を曳いてゐる。
遠く淡路の國の一線が暗やみの中の目さきにちらつく二階のデスクの前に腰をおろし、妻が自分にさし向ける愛情の切なるを思ふと、自分のこの恐怖と苦悶とをうち明けられないだけ、それだけまだ濟まないと云うやうな物足りないと云ふやうな氣がしてならない。

こんな瘦つこけて血の氣のないやうなからだを、どこがよくつて愛してゐるのだらう？妻の抱擁が切なれば切なるだけ、自分のからだの力の弱いのを氣の毒にも思へる。（それも然し原因は過去の犯罪の苦しみにある）國にゐた時は、血色もよく、身體も肥えてゐて、刑事には實際持つて來いと云ふ體格だと云はれた。………如何に產の親でも、今名乘つて出たからとて、二度や三度の說明では、おのが子とは信じられまい………

人を殺した罪惡の思ひ出が每日々々所天のからだを喰つてゐるのも知らず、妻は血色がよくなり、身體も強くなるやうにと、いつも肉食をさせて與れたり、生玉子の數をすすめて與れたりするが………それが大した効能のないことは、自分が在米中に旣に經驗して知つてゐる………

かの女はミツションスクールの出で、兎に角、正直な耶蘇教信者だ………自分に嫁し付いて來たのは、もと、自分の雄辯なのに引き寄せられたのだと云ふ………自分が今大阪の宗教界で多少重きを爲してゐるのも、その雄辯が看板になつてゐる………然しそれも自分自身の持ち前から來てゐるのではない。（それが精神的性質を帶びてゐるのは自分の誓ひを滿たす所以に叶ふやうだが、餘ほど時代に後れてゐることが自分には分つて來た。）

………自分の隱してゐる罪惡がさうした辯舌を現はすのだ………自分に時代的傾向が分つて來たと同時に、過去の罪惡までが神經過敏になつて、自分の口から、懺悔の代りに、熱心な張り詰めた言葉

を吐かせるのだ。自分の物質的罪惡を胸の奥に押し隱さうとすればするほど、精神は反對に、人を罪の子とし、懺悔をする必要を人に強いるのが熱心になる………

小菅悌一郎………この僞名が、今のところ、自分の重い神經を多少でも輕くして吳れるばかりだ。この名で米國の教會に這入り込み、この名で牧師や信徒の信用を得、この名で神學校を卒業し、この名で再びわが國の土を踏んだ。歸朝の當時は、それでも、死んだ本名者の家と衝突が起る時があるかも知れないと心配したが………死人の家は岩手縣石の卷在だと聽いてゐたから、そこへ行つて、それとなくその家を取り調べて見ると、老母が一人生き殘つてゐた。それがやがて老死する樣子であつた。その死を待つて、再び石の卷に行き、一時斷絕した家を自分がうまく受け取つて、漸くわが國に於ける自分の僞籍を落ちつけることが出來た………

夢………殺人………塔………僞名………かう云ふことを繰り返して見ながら、渠がだらしなく氣をゆるめてゐると、隣りのぼん／＼時計が三時を打ち出した。

『はツ』と、渠は椅子の上に自分を引きまとめた。と云ふのは、日曜日の教會堂に於て、說教壇上の後方で、說教臺の横手に据ゑ付けてある椅子に腰かけ、聖書を手にして午前九時（これが說教を始める時間）の鐘が鳴るのを聽いた時の氣持になつたからである。

然し時計が鳴りやむと、鳴る前よりもずつと違つた氣分になつた。自分獨りの寂しさがあかりの附

いてない室内にはつきりと見えて來て、冬の夜更けの寒さがぞくぞくと身に沁み込んで來る。

『煖爐に火が欲しい』と、あたまもからだも浮き腰になつて來たが、今頃から石炭を入れて、外國新聞の反古を丸めて燃やす氣にもなれない。

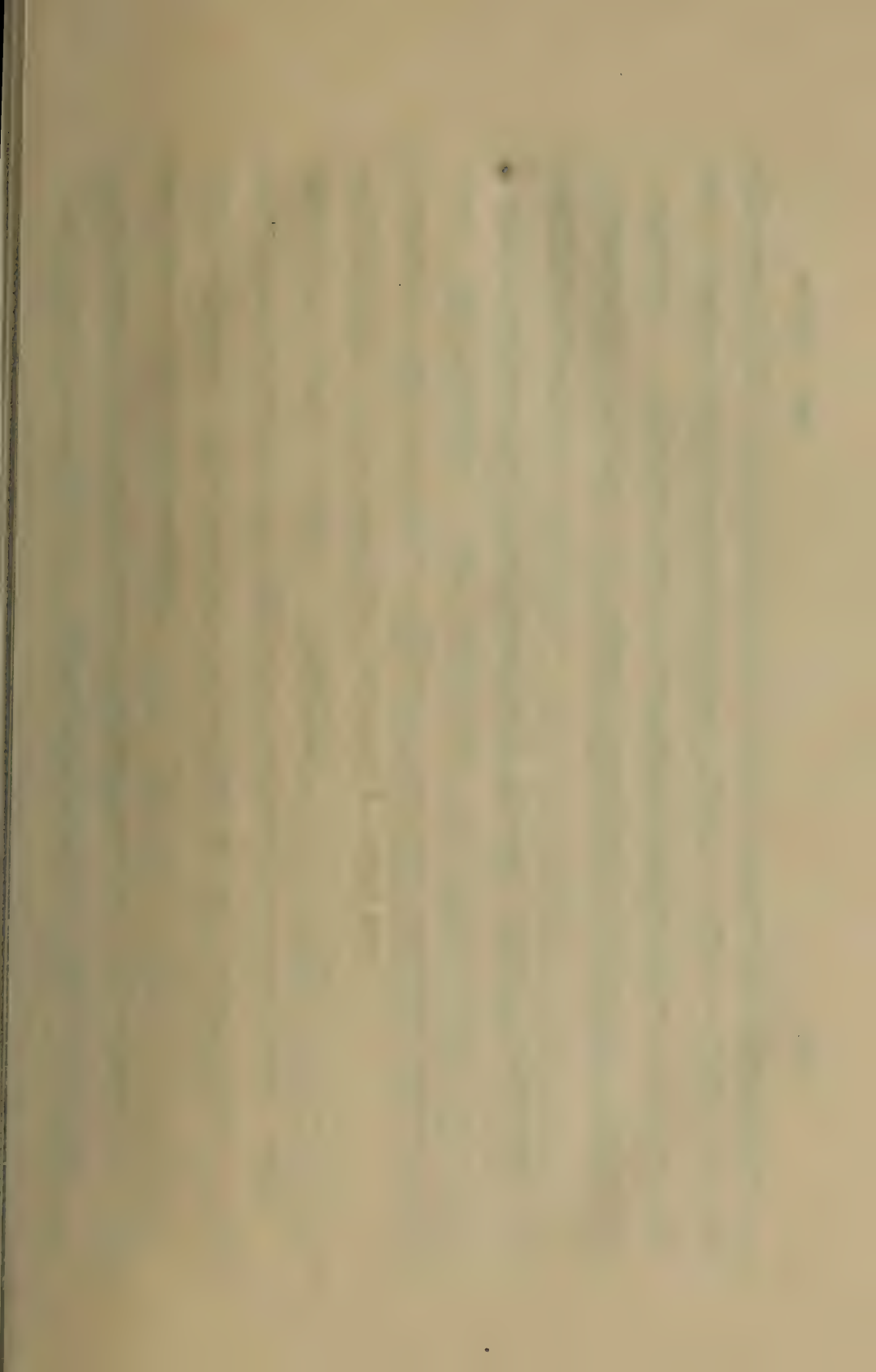
煙草でも呑まうと、シガレツトを一本デスクの上の箱から探り出し、それを口に喰はへてマツチを摺つた。ぱツと室内が明るくなつた一瞬時の光に、洋書棚に飾つてある多くの神學書、宗教書……壁にかかつてゐるキリストの石膏像……聖書說明用のパレスタイン地圖……デスクの上にある書きかけの說教原稿……こんなものが噴火した別世界のやうに現はれた。

渠は思はず目を反らしたが、目の向ふところはすべて自分の僞善と罪惡隱蔽の道具ばかりであつた。

『僞名――僞善――時代後れ――ああ、職業を改めたい！』かういふあせり氣が、マチの火の消えるのと同時に土堤を破つた洪水の如く渠の胸を突いたが、踏みこたへたのは矢つ張り强い覺悟だ。『然し一生懺悔はしない！』

闇に殘る卷煙草の小さい火が、今や、渠の寂しい存在に僅かに力と光明とを與へてゐるばかりだ。

ふと氣が付くと、下の座敷から手を叩いてゐる。渠は俄かに妻のそばが戀しくなつて、今まで持餘してゐた重苦しい夢や實想をうち忘れたかのやうに、喰はへてゐた煙草をも揉み棄て、急いではしご段を下りて行つた。

――（明治四十四年十一月）――

發展

この作は明治四十五年に大阪新報に連載し、同年七月一たび單行本となつたのだが、直ぐ發賣禁止の厄にあつた。その後、また、在米邦人へ供給する秘密叢書の一つとして、横濱あたりから出版されたのがあるさうだが、それは僞版で作者自身も見たことがないのだ。從つて五部作の一として刊行するに當つては十分注意して原版を訂正し、都合上、原版の終りの方は、これを刪いて、後の『毒藥女』の方へ繰り下げてあることを斷わつて置く。

一

麻布の我善坊にある田村と云ふ下宿屋で、二十年來物堅いので近所の信用を得てゐた主人が近頃病死して、その息子義雄の代になつた。

義雄は繼母の爲めに眞の父とも折合が惡いので、元から別に一家を構へてゐた。且、實行刹那主義の哲理を主張して段々文學界に名を知られて來たのであるから、面倒臭い下宿屋などの主人になるのはいやであつた。

が、渠が嫌つてゐるのは、父の家ばかりではない。自分の妻子――殆ど十六年間に六人の子を産ませた妻と生き殘つてゐる三人の子――をも嫌つてゐた。その妻子と繼母との處分を付ける爲め、渠は喜んで父の稼業を繼續することに決めたのである。然し妻にそれを專らやらせて置けば、さう後顧の憂ひはないから、自分は肩が輕くなつた氣がして、これから充分勝手次第なことが出來ると思つた。

『あの家は息子さんでは持つて行けますまいよ』と云ふ風評を耳にした妻は、ますます躍起となつて、

所天の名譽を恥かしめまいといふ働きをやつてゐた。が、義雄は別にそれをあり難いとも思ふのではなく、ただ自分自身の新らしい發展が自由に出來るのを幸ひにした。

繼母は勿論、妻子をも眼中に置かない渠が第一に着手しかけたのは一女優の養成である。琴の師匠をしてゐる友人から、その弟子のうちに一名の美人があつて、それが女優になりたいと云つてるが、どうかして呉れないかと云ふ相談を持ち込んで來た。

渠は既に女優志願者で失敗した經驗を一度嘗めてゐるが、兼て脚本を作つたらそれをしッかりやつて呉れるものが欲しいと考へてゐるところだから、わけも無く承諾した。

で、自分の家から芝公園を通り拔けたところにあつた音樂倶樂部の演劇研究部に、自分も會員であるの故を以つて申し込み、志願者をそこの講習生に取りあげて貰ふ相談が成り立つた。そして、いよいよ志願者を渠の家に呼び寄せた――と云ふのは、自分の家から毎日通はせるつもりであつたのである。

家族の反對はいろ〳〵あつたのはあつたが、渠はそんなことには少しも頓着しなかつた。

『來たものを少しでも冷遇すれば、おれのやる事業を邪魔するも同前だぞ!』

女が赤いメリンスの風呂敷に不斷着の單衣か何かの用意をしてやつて來た時は、その姿や顔付きのいいので、下女までも目をそば立てた。

『いい女だらう』と云はないばかりにして、義雄はそれを引き連れ、その夜、倶樂部へ引き合はせに行つた。が、その最初の引き合せに、氣の變はり易い本人は女優を斷念してしまつた。

紹介者としては、倶樂部の諸會員に對して不面目を感じたよりも、自分の家族が女を連れて歸らない自分を見て冷笑する顏の方が、寧ろ自分に取つて殘念のやうに思はれた。

渠は自分の書齋兼寢室に殘して行つた女の赤い包みを見ながら、その夜も、次ぎの夜も、にがい寂しい顏をしてゐた。

その少し以前のことであるが、義雄の繼母に當てて紀州からハガキが來た。

『おばさん、お變りはありませんか。わたし、また賑やかな都へ出て、勉强したいと思ひます。いづれ御厄介になりますから、よろしく。』

繼母はそれを義雄の妻に見せたのだ。

『お千代さん、どうしましよう、ね、こんなハガキが來ましたよ。』

『下手な字、ね。どんな女？』

『わたしはあんまり好かないの。』

『いくつ位？』

『前にうちにゐた時が十七八だから、もう、二十一二でしようよ。』

『どこへ行つてたの？』

『矢板學校へ裁縫を習ひに。』

『まア、いいぢやアありませんか、來させたツて？』

『お千代さんがさう受け合へば構はないやうなものの――でも、ねえ、お父アんの代が變つてゐるし、わたしがそんなことに口を出して、もしどんなことがあるまいものでもないから――。』

『おツ母さんはお父アんが亡くなられてから急に心配家になつたの、ね、何も商賣だから、かまはないぢやアありませんか？』

『でも、ね――片づいたものがまた出て來るのは、どうせいいことではないだらうし、若し義雄さんにでも引ツかかりができたら――』

『まさか、そんなことが――』

二人は笑ひに破れてしまつたが、一方はつつましやかに取り澄ました聲であるに反し、一方はまた甲高な神經質に聽こえた。

義雄の家族がこの家へもどつて來てから、臺どころの方は千代子の母が下女どもを監督して働らくことになつたので、隱居同樣な繼母の居間は、離れの二た間のうち、手前の一と間に定まつた。その

奥の一間には義雄の弟がゐる。隣りの寺の庭に面した方にかけて、緣がはが取りまはしてあつて、軒した一間ばかりを隔てたところに板壁があり、そこには、父の手を入れた盆栽の棚が出來てゐる。蘭、おもと、松、棕櫚、こんな物へ弟の馨は亡き人を忍ぶつもりで每日水をやつてゐる。

離れとおも屋の長い裏廊下の一部との間に、背の高い手洗鉢の根元まで廣がつた小さいたたき造りの池があつて、金魚が泳いでゐる。その水を取り更へる人も他にないから、弟がその役を引き受け、同時に、裏廊下に添ふた庭のまはりにある草木へ夕がたになると涼しく水を撒くのである。

二人の談笑があつたのはその水が撒かれて、馨が奥の間へ引ツ込んだ時のことで、その時、丁度、義雄は小用に行つてゐたので、二人の話が聽こえた。便所と池との間に離れへ渡る廊下が付いてゐる。そこから手洗鉢の手杓を取り、手を洗ひながら、半ば冗談に、

『何を云つてやがるんだい、馬鹿！』

『おほ、ほ、ほ』と、妻は笑つて、『聽いてたのですか？――あなたの信用はどこへ行つてもありません。』

『何だ！』から急に聲が變つて、腦天から出たやうな叫びをあげながら、廊下を渡つて行つて、まだ水も切れない手で妻の横ツつらを平手打ちにした。

『………』不意を喰らつた妻は、片手を疊に突いて、倒れるのをささへた。

『何です、ね、義雄さん。』母もびツくりした顏を向けて、『可哀さうぢやアありませんか？』
『可哀さうも何も』と、つツ立つたまゝ、わざと脣を嚙んで見せ、『あつたものか？所天に對して教訓的なことを云ふのア無禮の極だ！』
『いいえ、教訓は必要です――子供に對しても、必要です！』
『まだ分らないか？』手をふりあげたのを、繼母に抑さへられて、『いつも云ふ通り、おれは子供ぢやアない！』
妻は、その少し出ツ張つてゐる前齒の齒ぐきに所天の最初の手が當つて、そこから血が出たのをふいてゐる。
『まア、靜かにお坐わりなさいよ。』繼母は義雄の兩手を抑さへて、無理にそこへ腰をおろさせた。『お客さんが見てゐるぢやアありませんか？』
『………』客どもは、また始まつたと云はないばかりに、二階のあちらこちらから顏を出してゐる。その方にはすだれが下りてゐるので直接には見えなかつた。繼母はそれを氣にして、
『見ツともないから、大きな聲を出すのはおよしなさいよ。』
『構ふものか？』あぐらをかいて、わざと二階へ聽こえるやうに、『おれは何も下宿屋に關係はない。』

『でも、主人だから、主人のやうに、ね――』
『それは違つてゐます――わたしはこの家の戸主には成つたが、下宿屋はこの表面上の妻たる千代の仕事です。わたしは矢ッ張り元の通り詩人、小說家、評論家で、また○○商業學校の英語教師です。』
『教師なら、教師らしくおしなさい』と、妻はびくつきながらも悔しさうに。
『また敎訓か？』
『お前さんは、まア』と、繼母は千代子に、『默つておいでなさいよ――義雄さんの云ふのも尤もだとしても、主人がうちにゐつかないやうでは、家の大黑ばしらが動いてるも同樣で、うちの者がたよりがないぢやアありませんか？』
『ゐ付く値うちがないのです、こんな家には。』
『お父アんの家でも――？』
『さう、さ――お父アんの跡を繼いだのは、わたし自身のからだと精神であつて――こんな家や妻子は、自分にそぐはなければ、棄ててもいいんだ。』
『棄てられるなら』と、妻は少し身をすさつて、『棄てて御覽なさい！』
『ふん、棄てるとも――もう、おれは精神的には棄ててるんだ。』
『何とでもお云ひなさい――人を表面上の妻だなんて！』

『お前の命令などア受けないと云つてるだらう――おれの心に反感をいだかせる
遠ざかつて行くのだ。愛のないところにやア、おれの家もない。』

『ぢやア、どうしたら』と、訴へるやうな微笑になつて、『あなたの愛に叶ふのです？教へて下さいと、何度も云つてるぢやアありませんか？』

『手套が投げられたのだ』と、嚴格に、『もう、遲い。お前には、もう情熱がない。よしんば、あるとしても、子供を通して向ける情熱であつて、直接におれに向けるやうな若々しい、活き〳〵した、極あツたかい熱ではない。』

『そりやア、歳が歳ですもの――それに、六人も子を産ませられて、三人を育てあげた女ですもの――子に苦勞してゐるだけ子が可愛いのは當り前でしよう。』

『お前は子の爲めに夫を忘れてゐるのだ。』

『いいえ、忘れてはゐません。』

『おぼえてゐるのは、おれの昔だ。』

『さうですとも、昔はあなたも』と優しくなつて、『なか〳〵親切な人でした、わ。』

『今は』と、相ひ手の態度には引き込まれず、『もツと親切な人間になつたのだが、その親切をおれよりも年うへのお前に與へるのは惜しくなつたのだ。』

『年うへなのは初めから承知して連れて來たのぢやアありませんか？』

『そりやア、承知の上であつた、さ。』義雄は妻に言葉を嚙みしめさせるやうな口調になり、『然しよく考へて見ろ。二十前後の青年で、あんなにませてゐた者が――おれは實際ませてゐた――おれより年したのうわ〳〵した娘の上ツつらな情愛に滿足してゐられようか？あの時には、お前のやうな年增が――年增と云つても、たツた三つ上ぐらゐのが――丁度、おれの熱心に適合したのだ。然し考へて見ろ。人間は段々年を取つて行く。それは當り前のことだが、當り前と考へては困ることがある。それをお前はわきまへてゐない。』

『ぢやア、よく云つて聽かせて下さい、な。』

『いくら聽かせても、お前には分らないのだが、――敎育がないからと云ふのではない。お前は相當の敎育は受けたのだが、その道學者的敎育の性質が却つて邪魔をするのだ――。』

『いゝえ、わたしは』と、言葉に力を込めて、『武士の家に生れたのです。』

『そんなことは』と、冷やかに、『現代に何の名譽にも、藥にもならない――おれも武士の子だが、わざわざおやぢなどの考へや命令には從はなかつた。』

『それが惡かつたのです。』

『また敎訓か』と目の色を變へかけたが、同じ調子で、『分らない奴だ、ねえ――。お前などア時代の

變遷と云ふことが實際に分らない。政治上や文學上のことは別としても、教育界に於てだ、お前の教育を受けたり、お前が學校を教へたりしてゐた時代は女子はむかし通り消極的に教へられて滿足してゐた。然し、現代の若い女は積極的な教育を受けようとしてゐる。優しい女學校ででも教師、生徒間に衝突が起るのは、古い頭腦の教師連がこの心を解しないからだ。戀の問題に於ても、ただ男から愛せられて喜んでゐたのが、自分からも愛することができなければ滿足しなくなつた。』

『わたしだツて、自分から愛してゐます、わ。』

『ところが、その問題だ――段々年を取るに從つて男女の情愛は表面に見えなくなるとしても、愛してゐると云ふ言葉だけで、實際はそんな氣色もないのでは困る。男は世故に長けて來ると共に段々情愛を深めて行くものだが、今の四十以上の女は皆當り前のやうに男に對する心を全く子供に向けてしまう。』

『でも、子供は所天の物でしようが――』

『いや、子供は子供で、所天その物ではない――そんな古臭い傾向の家庭では、男は、平凡な人間でない限り』と、そこに語調を强めて、『深い〳〵情愛を空しく葬つてゐなければならない。――』

『何だ、詰らない』といふやうな振りをして、馨はその座敷の前を通り、食事をせがみに行つた。

二階の方からも、空腹を訴へる手が鳴つてゐる。

『少くとも、おれはそんな寂しい墓場に同棲してゐられないのだ――』

『墓場だツて、家のことを。』繼母はあきれた樣子。

『お墓、さ、どうせ――おれは今一度若々しい愛を受けて見なければならない。』

『ぢやア、勝手におしなさいよ。』妻は立ちあがつて、獨り言のやうに、『濱町とか何とかへ入りびたりになるなり、好きな女を引ツ張つて來るなり――こツちは離緣々々と云はれさへしなけりや、子供を育てて暮しますから。』

『その子供々々が聽き飽きたんだい。』義雄は墓どころの方へ行く千代子の後ろ姿に向つて侮辱の目を投げながら、『子供と敎訓とが手めへの墓の裝飾だ！』

二

田村のお母屋の裏廊下と云ふのは、一直線に五六間ばかりあつて、便所のあるところとは反對の端から、また曲つて四五間ばかりの緣がはが付いてゐる。その鍵の手に當る四疊半が――家の代が變つた時までそこにゐた客を二階へ追ひやつて――義雄の占領するところとなつた。

かどから直ぐ手前が半間の壁で、それから二枚障子がはまるやうになつてゐる。曲つた奥のがは、乃ち、東向きの方は二面に明いて四枚障子となつてゐる。あかりを取るには不足がない筈だが、取り

まはしてある庭がたツた二間幅しかないところへ持つて來て、北隣りの寺の池が見える方の境が密接した生け垣になつてゐて、その向ふ側には五六本の杉の木と一本の大きな櫻とが目隱しに並んでゐるし、こちらにも亦二階の家根に達するほどの梅の木が二本ある。

東の方は、義雄の室と相對する低い隣家の軒が隱れるだけの高さにそぎ竹の垣根になつてゐる。その垣根を越えて、同じ隣り家の庭から芭蕉の青いひろ葉が二三葉見えてゐる外、目ざはりはないので、朝の日光もよく這入る。が、そこにもあんずの木が立つてゐて、實が赤みがかつて來る時は、二階の客がこツそり家根へ出て、杖や棹を以つてよくそれを盜み取つた。その度每にとたん張りの家根はばりばりと音がする。それを聽きつけると、亡父が庭へ飛び出し、うへを仰ぎ見て長い銀色の白ひげを撫でながら、

『そんなことをしては困りますよ』と、おだやかに客を制したツけ。梅もあんずも父が緣日で買つて來た植ゑ木の成長した物で、梅の實は一年中の食用になるほどの梅干を供してゐるし、あんずも近處の水菓子屋を呼んで父が賣り附けると、二三圓が物は擧げてゐる。然し、今年の時期は父が病中にゐたので、その實は孰れも人の喰らふまま、また蟲ばんで落ちるままになつてしまつた。

義雄の書齋が薄暗いのは、仙石屋敷の高臺から續く傾斜地――そこは泰養寺の山と云はれてゐる――の檜の木の大木や、枝のはびこつた松や、大きな椿や、江戸自慢といふ太い櫻やの影が追ひかぶ

さつてゐる上に、十數年を經た樹木がまた室近く繁り込んでゐる爲めばかりではない。

二階のとたん家根を雀が歩いても、そのぼと／＼といふ音から、渠の胸には父の思ひ出が押し迫つて來るのである。たま／＼用があつてこの家へやつて來た時、父が割り合におだやかな言葉だが、赤い大きな鼻をあふ向けて、家根の客を叱つて居るのを實見したこともある。が、それと同じ口調で渠も身の上を幾度叱られたか分らない。時には餘り命令に從はないので、

『貴樣のやうに親不孝な奴は世間にやアゐないぞ』とまであたまからぎろりとした目を以つて睨み付けられたこともある。が、そんな時でも、渠はいつもの通り强情に、

『わたしは一切、親の世話にはなりません――その代り、また親の時勢に後れた御注意には全く從ふことはできません』といひ切つてしまつた。

渠は若い時から文學に熱中し出したのが最初の原因で父と衝突した。今の妻を迎へたので再び衝突した。繼母が來たので三たび衝突して、遂に自立することになつた。その上、妻子が意にそぐは無くなつてからは、いろんな女に關係してその度毎に父に呼び付けられたり、押し寄せられたりした。最近に吉彌といふ日光の藝者に關係し、女優にしようとした失敗から、面目もないし、また面白くもないので、小半年ばかり父と行き來を絕つてゐた。

その間に父は瀕死の病人になつたのである。

父は病氣の初めから、今度こそは、もう、駄目だと思つたのだらう、珍らしくも氣を折つて、『早く義雄を呼べ、義雄はまだ來ないか』と云つてたさうだが、繼母が父の口から直接に田村家を弟の馨に嗣がせると云ふ宣言を聽くまではと思つて、通知を發しなかつたのだ。

最後に義雄が知らせを受けて行つた時は、もう、出入りのへぼ醫者には見限られてゐた。病室に這入つたその時から既に感附かれたことだが、父の息が小便臭く、また氣は確かだが、目が見えなかつた。曾て友人の病氣の場合に實驗した智識に據つて、渠は直ぐ父のも腎臓病だと分つた。

『もう手後れだ！』わざと大きく叫んで、『なぜ又もツと早く知らせなかつたのだ』と、俄かにみなぎる不平を漏らしたが、そばに顔いろを變へて横を向いたものがあつたので、義雄はまた直ぐにその場の意味を了解した。『父はそれほど、繼母を愛してゐたのか』と思ふと、ほどばしつて來た親子の情愛も矢ツ張り引ツ込んでしまうやうな氣もする。が、何と云つても父に盡すのはこれが最初で最後だと思ふと、看護のひまにしツかり原稿でも書いて、診察料の埋め合せをすればいいと決心し、有名な專門醫を招いたが、二十日と立たないうちに他界の人となつた。

父が世界のどこかに生きてゐると思へば、まだそれでも何となくたよりにしてゐたのだが、いよ〳〵ゐないとなると、義雄は全く孤立で、孤獨なのを感じられる。

孤立孤獨は義雄の趣味でもあり、また主張でもある。それが爲めに落ち付いて古今の書も讀破できた。然しこの頃のやうに滅入つてゐることも少い。〇〇商業學校——そこへ、六年前に、滋賀縣の中學教師をよして、轉ずる爲め上京して來たのも、死んだ父から云ふと、百日間虎の門の琴平様へお願ひした結果ださうだが——そこへ英語を教へに行く時間に外出するだけで、あとは、自分の書齋に引ッ込んでばかりゐる。家のものとは話しも碌にしない。そしてたまに口を開らけば、おほ聲の小言だ。

子供などはぴり〳〵恐れてゐて、父がそとから歸つたのを見ると、直ぐ母の蔭へ隱れてしまう。

『餘り叱るから、かうなんです』と、千代子は訴へた。

『なァに母の仕つけが惡いのだ』と、義雄は一喝してしまう。

そして渠は食事を妻子と共にせず、朝飯でも晩飯でも獨り自分の書齋で濟ませるのである。

渠は、一度自分が目を通した書物へは、赤鉛筆やむらさき鉛筆で所々へ線を引くのである。そしてそれが記憶を呼び起すしるしになるので、なか〳〵手離すことをしない。

『おれの妻子は書物と原稿だ。』渠はいつもかう云つてゐるが、通讀もしくは熟讀した書物は積り積つて何百冊かになつてゐる。千代子が轉居の問題の起る毎に億劫がるのは、本の爲めに引ッ越し費の過半を取られるからである。

然し行くところとして、家主から子供のいたづらがひどいからと云つては斷わられたり、家賃が餘

りとどこほるからと云つては追ひ出されたりすると、その度毎に運び行かれる荷物は、古い箪笥一つとこざ〳〵した切れを入れた行李三つと臺どころのがらくた道具との外は、すべて書物の包みだ。

『おウ、重い』と、どんな巖丈な人夫でも、それを持ち上げて驚かないものはなかつた。

義雄はその重い書物の荷が行くところだから、蟲の好かない妻子がゐても、兎に角、落ち付くことが出來るのである。

一間幅の押し入れの中にも、それを入れた行李や箱が幾つも這入つてゐるが、隣室の四疊半には、遞信省の官吏がゐる。そのまた次ぎのどん詰りの三疊には電信學校の生徒がゐて、時々發信機の練習をがちや〳〵やつてゐる。その隣室との間を仕切る壁には、大きい洋書棚が二つ並んでゐて、外國詩文の書は勿論、哲學書、宗教書、科學書、和漢、英、獨、佛等の字引きなどが、その背皮に金文字、銀文字の光りを放つてゐる。

『ここはおれの城だぞ。』かう云つて、無暗には人を入れず、渠は一閑張りの禿げかかつた机に倚つて、好きな思索に耽るのである。

暑いので障子を兩方とも明け放ち、時には、椽がはの柱と柱とにハンモックを結び付けて、その上にからだをぶら付かせることもある。

奥にゐる客は、二人とも通行の度毎に氣苦しく感ずるので、申し合はせたやうに轉室を申し込んだが、二階に適當な明き間がないので僅かに辛抱してゐる。が、渠はそんなことには頓着なしで、『ハンモク』と云ふ可なり世間の注意を引いた散文詩を作つた。

『熱くて　堪らない　日が
嚙んだ　氷の　やうに　しみ込む　頃だ、
眞夏　の　空に、
蟬　の　聲が　じい〳〵
僕の　あたまを　煑えくり返す。
廊下　の　柱と　柱とに　ゆはへて
低く　釣るした　ハンモク　の　中で、
僕は　たわいもない　からだ　を
たわいもなく　横たへた。

自分の　からだの　か、何だか　分らない　重みが、
左右に　搖れて、

ありも　しない　凪を　待つてゐる。
と思つたら　突然　自分は　百萬年　以前　高い　木の　枝に　睡る　猿で　あつた　といふ　考へが　浮んだ。
きのふは　既に　前世界だ——
ゆうべ　高い　ところ　から　落ちる　夢を　見た　のは、
夢　では　なく　實際　おほ昔、
生繁つた　深林　の
枝　から　枝へ　渡る　時に　あやまつて
すべり落ちた　記憶で　あらう。

今　落ちない　の　は　不思議だ　と、
仰向いて　空を　見た。
淺い　ひさし　と　それに　かぶさつて　ゐる
庭の　松の木　の　間　から、
熱した　おほ空　の　廣がり　が　迫つて　來て、

僕の　呼吸が　苦しく　なつた。
前世界　から　生活に　疲れて　來た　からだが、
ハンモク　の　中で　搖られて　ゐる　樣だ。
自分の　身が　おもた過ぎて、
何にも　する　勇氣が　ない。

このまま　死ぬる　なら　死んでも　いいが、
さりとて、又未練の　ある　この人生。
いつまでも　眠つて　ゐられる　もの　なら、
死んで終うの　とは　違つて　安心　だらうが、さう〳〵　永遠　まで
賴みの　綱は　朽ちないで　ゐなからう。
と　どこ　からか　羽根が　生えた　やうに、
僕の　考へは　百萬年　以前　から
百萬年　以後へ　飛んだ。

くだらない　空想だ　と　思つた　が、
何だか　醒めて　ゐて、　襲はれる　氣持ちだ。
夏の　蒸し熱い　呼吸　は、
乃ち、僕の　呼吸　で　あつた。

ああ　金が　欲しい！
女が　戀しい！
大事業が　したい！
いい　句を　得たい！
さま〳〵の　考へが　一時に　浮んで　來て、
蟬の　聲に　不安の　和聲を　添へた。

ハンモクは　實に　不安な　住まひだ、
ぶら〳〵　動く　たんびに、
僕の　胸は　息詰る　思ひ！』

或晩のこと、義雄の室にも電燈が付いてから間もなく、
『御免を被ります』と、千代子がお客帳と支出簿と十露盤とを提げて、にやくく笑ひながら這入つて來た。渠は妻の冷笑的態度を一見して、もう、胸がむかくくして來たが、それを自分で私かに制して、書見を續けてゐる。
『また叱られるのでしようが、一つ、讀み合はせを願ひます。』かの女はから云つて所天を少し離れて坐わり込み、帳面を机の方へつき付けた。
義雄はそれをうるさいと思ふのだが、收支の帳面づらのよく合はないのがいつものことであるので、客から取る金と自分が學校や雜誌から取つて注ぎ込む金とがどう云ふ風に支出されてゐるのか、充分調べて見なければ置かないのである。
『お千代さんはいつ離緣されてもいいやうに臍繰り金を拵へてゐるに相違ない。さうでなければ、義雄さんが隨分儲けて來るのに、暮しが足りない筈がない』とは、義雄がはの親類同志の噂さで、渠もさう注意されたこともある。然し、渠は自分で浪費するのも割り合に多いと思つたから、よしんば、妻の臍繰りがあつても、大したものではないと高をくくつてゐる。
義雄が妻を意地々々させるのは、そんなことではなかつた。かの女のあたまが不正確な爲め、つけ落しやつけ加へがあつたりして、毎度計算が合はない。度々のことであるから、渠はそれを反省させ

る爲め一厘、一錢の差までもその行くへを追究しなければ止まない。
　すると、千代子はその位のことは當り前だと云ふ態度で意地を張り出し、
『わたしが何も一錢や二錢を着服するわけは御座いません』などと不平らしいことを云ふ。それが動機になつて、いつも、大きな云ひ爭ひになり、
『手めへの頭腦が鈍いからだ』と、所天は妻の束髮あたまへ拳骨を一つ喰らはせることもある。それが爲めに、隣りの客をやかましいと怒らせたり、隣家の惡口者にいい噂さの種を與へたりする。千代子はまた内心おづ／＼してゐるに違ひないのだが、それを微笑にまぎらせて坐わつたのである。
　義雄は讀んでゐたページを或節の終りまで濟ませてから默つて帳面を手に取つて見た。
『どうせ、家族が多いのですから』と、千代子は甲ん高い聲を無理に低め、『お客さんから受け取るだけでは足りないのは、この一二ケ月でも分りましたから――』
『そんなことア知れ切つてらア。』
　義雄はやがて帳面を二つとも妻の方へ投げやり、自分はそろばんを取つた。
一錢なり、二錢なり、十錢なり、一圓なり、九圓五十錢なり、十二圓三十錢なりなどが暫らく續いたが、結局、今夜は珍らしく無事に通つた。
『こんなことは初めてだから、何かおごりませうか？』

『ふん』と、義雄は橫に向き、『喰ひたけりやア、よそへ行つて喰つて來らア――どうせ、おれは、おれの出す金さへ出してゐりやアいいのだ。』
『それが――でも――滿足に拂へたことがないぢやアありませんか？』
『そりやア、然しお前の帳面が矢ツ張り合つてゐないよりやア、まだしもましだ。』
皮肉を云はれながらも、所天がいつに無く多少のうち解けを見せるのが、千代子には嬉しかつたらしい、で、長ツ尻をしてゐたので、
『おツ母さん。』姉娘の富美子が弟を從へて緣がはをばた〳〵驅けて來て、『諭鶴さんが何かお吳れッて。』
『いけません、いけません！』母は持ち前の甲聲を出して、『今御膳を喰べたのぢやアありませんか？』
『おツ母さん、何か』と、諭鶴はあまへた鼻聲を出しながら、一番手前の障子の隅を少し明けた。
『いけませんてば、あツちへお行き！』
弟の覗いてゐるあたまの上から、脊の高い姉の顏も見えてゐた。
『むツ』と、母に睨み付けられ、富美子の方は機敏に引ツ込んでしまつたが、諭鶴は兩手で柱と少し明けた障子の端とにつかまつて、目をただ右の方に反らしたのが、直ぐそのそばにある半間の淺い床の間の掛け軸、達摩の怖い顏と出くわした。

この子はこの軸面を大嫌ひで――まだまだ小さかつた時のこと、父の書齋へ誰もゐないのでよちよち這入つて來て、二枚重なつて掛かつてゐる軸物の上の一つ――支那人の書いた杜甫の句であつた――を上げて見た。すると、下のに異形な物が現はれて大きな目を剝いてゐたので、腰を拔かして泣き出した。法橋探水齋と云ふ落款がある畫で、達摩が小舟に乘つて支那へ渡つて來たのを表する蘆葉達摩だが、子供ながらその時のことをおぼえてゐて、今では、その顏を父の顏に聯想するやうになつてゐた。

びツくりして、また左りの方へ顏を避けた時、この子はあたまを障子の端にぶつけて、母に泣き顏を見せた。

『いい氣味だ』と、母はかたきの失敗でも見たやうに躍起となつた。

『毛だ物のやうに子供を溺愛する』といつも所天に云はれるので、さうでない證據に、こんな時、自分の嚴しい育て方を實見して貰はうとするのであるらしかつた。

『な、ん、か』と、また下の知春(これと姉との名は、死んだおぢイさんが命名したのである)がいつのまにかやつて來て兄を押し退けて、小さい首を出した。

義雄はこれがすべて自分等の間にできた子かと思ふと、可愛いと云ふよりも、寧ろうるさい物だと云ふ氣が先きに立つので、

『畜生の子供らが』と、さも憎々しい顏を向けて、『ぞろ〳〵と何匹出て來やアがるのだ？』
『可哀さうに、ねえ』と、千代子は頰のこけた顏の筋肉をぴく〳〵動かし、目を下に伏せて、暫らくたより無さゝうに考へ込んでゐたが、やがてその伏せた目をその方に擧げて、寂しく笑ひながら、『もう、これツ切ですとお云ひ。』
富美子は何も分らない二人の弟の上へ首を出してゐて、母に似た出ツ齒を見せて笑つてゐる。おまけに、どいつもこいつも田舍ツ兒のやうな地味な瀧縞木綿の單衣を着てゐる。義雄はそれを一見しても興ざめてしまうのである。
『うるさいから、あツちへ行け！』父の一言は皆の子を障子から離れさせた。
『おツ母さんも』と、千代子はおだやかになり、『今直ぐに行くから、ね、そツちで待つてお出で——ぐづ〳〵してゐると、達摩さんが飛び出しますよ。』
『………』それは何氣なく千代子の口にのぼつた子供に對するおどし文句であつたらうが、義雄は自分にも當てれば當たる言葉だと思つて、心では吹き出したくなつた。眞面目に考へても亦さうだ、子供に對しては怖い點に於て——また、思索家として長年孤獨の情味を味はつて來たのは、面壁九年の心持ちに似てゐる點に於て。

『達摩さんだ、達摩さんだ』と、さうざうしく、ばた〳〵と別々におほ股、小股の足音が遠ざかつて行くのを、義雄は不調和な燥音だと考へたに反し、千代子はそれに聽き惚れてゐるかのやうに暫らく耳を澄ましてゐたが、やがて所天の方に向き直つた。

『論鶴も、あんな總領息子ぢやア仕方がありません、ね――あなたと同樣、わが儘一方で。』

『おれは親不孝であつたから、自分の子供から孝行をして貰はうとは飽くまで思はないのだ。』

『あなたは』と、千代子は所天を横目に見て、その方に向つて右の手の平で空を下に拂ひ、『それでいいかも知れませんが、わたしが困ります。』

『お前の困るのアお前の心掛けが惡いからだ。』

『またそんなことを!』千代子は斯う調子に乘つたやうに答へてから自分の育兒の苦心に對して所天がおもてへ出して同情したことが少しもないこと。この末ともまだ長い子供の教育時期を、自分ばかりの手では、本統にどうすることもできないこと。所天のそばにゐられるだけ、まだしも子供と自分は末の望みがあるやうだが、若し皆が一緒に棄てられるやうなことがあると、三人の子に老母をかかへて、どうなつて行くだらうと云ふこと。たとへ、この家だけは子供の爲めに預かつて、この商賣をつづけて行くとしても、さうしたら、田村の方の繼母や弟までの身の上も引き受けなければならないこと。所天の取つて來る金を注ぎ込んでも、たださへ不足勝ちのところへ持つて來て、それが若し出

なくなるとすれば、とてもやり切れるものではないこと。何と云ふ因果な身になつたのだらう、今さら、この年になつて、よし棄てられても、よそへ片付くやうなこともできないこと。などを語つた。そしてその顏を所天から反むけ、兩手を繩のやうになつた黑繻子と更紗の晝夜帶の間に挾み、頻りに考へ込んでゐた。が、こちらが餘りに何とも云つてやらなかつたので、立ちあがつて、左りの手に帳面とそろばんとを持ち、右の手で藍地の浴衣の前を直しながら、

『まア、行つてやりましよう、子供が待つてるだらうから。』

『…………』かの女の引ツ詰つた束髮や、色氣のない衣物が神經質の段々高まつて行く顏を剝き出しにして見せるので、義雄は少しあふ向いて最も侮辱の睨みを與へた。

『その婆々アじみたつらを見ろ！』

『あなたに』と、千代子は恨めしさうにして、口のあたりをぴり付かせて、早口に、

『かうされたんですよ。』少しゆツくりして、『あなたのせいですから、こんな』と、顏を突き出し、『お婆アさんでも――』可愛がつて下さいと云ひかけるらしかつた。

『鬼子母神のつらだ！』義雄の叫びが頓狂であつたので、千代子は色を變へてからだを引いた。そして物やはらかになり、

『鬼子母神でも、何でも、わたしは子供には女王のやうなものですから、ね。』

『そんな下らない興味に釣り込まれて』と、義雄は兩肱を机に突いて、見向きもせず扇子を動かしながら、『遂に婆々アになつてしまうのを知らないのだ。』
『あなたも段々ぢぢイじみて來た癖に。』
『そりやア上ツつらのことで――精神は反對に若々しくなつて來た、さ。』
『七つさがりの雨は止まないと云ふのがそのことなら、ねえ――』
『………』そんな警句をどこから覺えて來たと云はないばかりに、義雄は妻の方をふり向くと、千代子は立つたままにやりと笑つて、例の通り、出た齒の上齒ぐきの肉までも見せてゐる。』その表情の卑しさを見ろ！』渠はまたから叫んで、目を反らした。『もう行け、行け！』
『行きますとも――然し、ねえ、あなた』と、千代子は眞面目に返つて、また立ち去りかね、その場にしやがんで持つてゐる物を膝の上に置いた。『あの子もさすがあなたの子で、利口はなか〱利口ですよ、今の驚き方と云つたら、可笑しくもありましたが、また、昔、上の掛け軸をめくつて、下のにびツくりしたことを忘れないでゐるのですよ。』
『そんなことア聽く必要がない。』
『でも』と、話しを引ツ張るつもりでか、『この達摩さんも忠義です、ねえ――うちの貧乏暮しを永年

の間一緒にして來たのですから。』

『ほかに掛ける物もないぢやアないか！』義雄は思はずまた妻にふり向いて、『掛け物一つ買へないほど貧乏してきた、さ、然しまた面白いこともあつた、さ。』

『それはあなたばかりで——うちの者はちツとも面白いことなどさせられた覺えはありやアしない、わ。』

『無い？』わざと怪訝な顏をして、『望みの竹生島も見せてやつたし、京都、大阪、須磨や奈良へも連れてツてやつたぢやないか？』

『わたしだツて』と、千代子は不平さうに、『そんな上ツつらなことを云ふのぢやアありません。うちの者は皆——あなたと直接の關係のないわたしの母まで——あなたの貧乏と不機嫌とにいぢめ拔かれて來たんです。』

『貧乏はおれの持ち前だ。然し、おれの不機嫌は女房の口やかましいところから來たのだ。』

『やかましく云はなけりやア』と、目をきよろつかせて口をとんがらかせ、『遊んでばかりゐるぢやありませんか？あなたの坊ちやんじみてゐた時から、この十何ケ年と云ふもの、わたしがやかましく云ふので持つて來たのですよ。』

『馬鹿を云ふな！おれはおれでやつて來たので、非常に遊んだあとは』と、得意な顏をして、『きツと、

また非常な仕事をしてゐらア。』
『それもさうでしようけれど、わたしの爲つゞけた苦勞が分つたら、この達摩もわたしの味かたになるでしようよ――主人が教師になつて行くのに、滋賀縣までも一緒に附いて行つたし、また東京へ歸つてからも、芝から下谷、本郷から麴町、麻布から赤坂と、何度引ッ越したか分りやアしない。そのたんび何か物は無くなるし――おしまひには吉彌でしよう。』
『母さん。おッ母さん。』子供がまた呼にやつてくる樣子だ。
『あいよ、あいよ』と、千代子はその方へ浮き腰になつた。
『うるさいから、行け』義雄はかう云ひ切つて、妻が立ちあがるのを尻目に見た。『おれの放浪生活は、もう、やめる。その代り、お前とは離緣だ。』

三

義雄の英語教師は時間給で出るのだから、その受け持ち時間だけ行つたらいい。それも毎日ではなく、日曜日と月曜日とは續いて休みで、跡は隔日になつてゐる。
渠は昔から勉强家だが、朝寢坊ときては九時や十時でなければ、また時によると午砲を聽いてからでなければ、とこを出ない。父が我善坊からせか／＼と歩いて、麻布の谷町を拔け、氷川神社のそば

をとほつて、赤坂の臺町へたま／＼やつてきた時、息子がやうやく起き出でて楊枝を使つて居るのを見て、

『そんなことで一人前の人間に成れるものか』と怒つたこともある。

『でも、夜が遲いものですから』と、千代子は所天に代つて辯護をした。

父は息子の朝寢を始終氣にして死んだが、それを却つて義雄は父の家を占領してからも、一つの懷かしい思ひ出として、目を覺してゐながらも、とこのうちで考へ續ける朝もある。

『年中仲たがひをしてゐながらも、自分が何となくたよりにしてゐたものが亡くなつてしまつた。』かう考へると、自分も何どき死んでしまうか分らない。これからますます自分の事業に發展しようとする前途も、まだ／＼なか／＼長い。親などは子に對してはあまいもので、子の十年一日の如き思索的努力がその僅かに一部を世間に認められるやうになつて、多少それが彼れ是れ云はれてきたのを知つて、内心では非常に喜んでゐた。

父の意志に從つて見せたり、物質的報酬を以つて父に報いたりすることができなかつた渠には、切めて精神事業の一端をでも見せて、父を喜ばせたのが所謂孝行の一つであつたのかも知れないと思ふ。

苟しくも生きてゐる間は思索と執筆とが自分の生命だとして、晝間も薄暗い室に立て籠ると、やがて夜になつてしまう。また、電燈が付いたかと思ふと、いつの間にかふけて行つて、夜明けの庭鳥の

聲や、朝がらすが寺の山の高い檜の木に群がり啼くのを聽く。それが殆ど毎夜のことだ。たまく、夕飯を濟ませてから人を尋ね、一緒に玉突き屋へでも行くと、日頃の憂鬱が調子を變へ、負ければ負けるに從ひ、勝てば勝つに連れ、知らず識らず勝負の回數を夢中で重ねて行き、『もう、あかりを消しますから』と、ボーイに斷わられ、初めて不興に覺めて歸宅することもある。が、直ぐ寢に就くのではなく、きッと机に向つて書き殘しの原稿を續けるのである。

渠は家にあつてはストア學派の禁慾主義者以上の嚴格を保つてゐるので、朝寢だけには例外のづぼらがあつても、そッと構はないで置かれるのが常だ。

押し入れ並びに床の間の後ろが二階からうら緣がはへ下りるはしご段になつてゐてその次ぎの八疊がこのはしご段と玄關から裏へ一直線にとほつた廊下とに挾まれて、千代子と子供との寢室になつてゐる。

この八疊と四疊半とは、生活上、金錢的關係があるのを除いては、殆ど全く無關係の世界と世界とである。四疊半の主人のまだ寢てゐるのを、八疊の主人が起しに來て、締まつた障子の外から、『もう、時間ですよ』といふすげ無い言葉を一と言かけて去るのは、午前の八時もしくは九時から學校の時間がある時に限つてゐる。それを聽き流しにしてゐると、あね娘かその弟かが、母の使者として、『お父アん、お起きなさいツて』と云ひ布れて來る。

『お――起き――父ちゃん――お起――きツて、ね』と、また、末の子が障子を明けて這入つて來て、ひよろつく腰をかがめて、父の顔をのぞき込むこともある。

『あア、起きるよ。』さすが無邪氣の子には強く當ることもできず、優しい返事をするが、すると稚い子が嬉しさうに向ふへ駈けて行つて母にその返事をいひ付けてゐるやうな樣子が聽こえる。それがまた反感を響かせて來ないではゐないのである。

『あいつ等の爲めばかりに詰らない教師などをしてゐるのだ』と考へると、顔を洗ふにも食事を濟ませるにも氣が進まず、出勤の時間が後れかける程ぐづ〱してゐて、わざと車を呼んで、たツた三四丁のところを驅けらせることもある。

學校では、然し義雄の教授振りに家で押さへてゐる活氣が溢れ出し、ひどく叱りつけることもある代りに、また全級を愉快に笑はせたりする。

六年前、初めてここの教師になつた時は、生徒に親しみがなく、且、怒るのが目に立つので、最も不出來の生徒が一人、短劍を持つて渠を暗夜の途に要したのが評判になつた。渠はそんなことは恐れないで、相變らず冷酷、熱酷な怒罵をつづけた。

『貴樣のやうな出來そこなひは、兩親へ行つて產み直して貰へ。』

『手前のやうな鈍物は、舌でも喰ひ切つて死んでしまへ。』

生徒は遂に往生して、こんなことを云はれるのを最も恥辱だとして、渠の時間の學科はよく下調べをして來て、じやうずな説明を聽きつつ、明確な理解を得るのを樂みにするやうになつた。『田村先生の時間！』この言葉は一部の生徒の恐怖を引き起す符牒であると同時に、一般生徒には最も受けられる樂しみであることは、義雄も自分で知つてゐた。

渠は同じ學校の夜學にも出たことがあるが、それは失敗に終つた。出勤前に友人と酒を飲んだのが、教壇で例の通りの快辯を振つてゐる時に發して來て、いつの間にか椅子に腰かけて、心よくテイブルの上に眠つてしまつた。ふと目を覺すと、七八十名のものがすべて手を束ねて、ぼんやりとこちらを見てゐた。

丁度その當時、渠は『デカダン論』といふ著を公けにし、現今の宗教、政治、教育等の俗習見に反對したのが、學校の幹部の問題になつてゐた。その上、或晩のこと、醉ッ拂つて藝者と共に電車に乘つてゐたのを生徒の一人に見つけられた。

それやこれやの中を取る同僚があつて、渠は夜學の時間を斷わつてしまつたが、晝間の生徒に向つては、自分に對する心得を發表した。

『學校の門を這入つた以上は、おれも教師として神聖な者だから、飽くまでもその職權と熱心とを忘れないが、門を一歩でも出たら、もう、お前等とおれとは見ず知らずの他人も同樣だぞ――從つて、

外でお前らと出會つても、おれは相手にしない、お前らも亦おれを先生などと云ふに及ばないし、お辭儀などは無論しなくてもいい。』

すると、生徒のうちから、

『煙草を飲んでゐても叱りませんか？』

『酒に醉ッ拂つてゐてもいいんですか？』

『藝者を連れてゐてもかまひませんか？』

などと冷かし初めた。渠は笑つてこんなことを云はせて置き、やがて、響き渡るほどのどら聲で、

『默れ！』一喝して、『ここは神聖な教場だ。』

から云ふことがあつてから、一層、渠は生徒間におそろしいが又懷かしい教師となつた。

或日の午後、渠が學校から疲れて歸つて來ると、見慣れない牡丹色の鼻緒の駒下駄が玄關の格子に脫いであつて、正面のはしご段のわきには大きな行李が一つころがり、八疊の間に若いおほひさし髮の女が來てゐた。

『紀州からやつて來た女に相違ない。』から思ひながら、義雄は八疊の間をまはつて自分の室へ這入つた。

胸には、何だか異様な動悸をおぼえて、むらさき包みの書をほうり出したまま机にもたれて、向ふの話し聲に注意が向いて行くのである。

『東京へ來ると、』なか〳〵ませたやうな聲で、『田邊などは、もう、お話しにならんです、な。』

『どこから行くの？』これは千代子の聲だ。

『大阪から行きます。午後の十時頃に大阪を出發しますと、加太、和歌山などは夜のうちに通つて明くる日のお晝頃着きます。』

『何かあるとこ？』

『溫泉（をんせん）があります。』

『ぢやア、いいとこでしよう？』

『その邊では、まづ、よろしい都會ぢやと云ふても、大したところではないのです。』

『でも、溫泉があるなら』と、笑ひ聲になり、『そんなとこで宿屋（やどや）でもすりやア儲かりましよう。』

『さア、どうですか？神戸や大阪からは隨分來るやうですが――』

『ふむ、隨分來るの――ふむ、さう？』

千代子が例によつて口を結び、首を二三度固く動（うご）かして、人を子供あつかひにした口つきが義雄には見えるやうだ。

『いやな女だ――あの癖を亭主のおれにまでむけるのだ』と、渠は獨りで顏をしかめた。

『どうきまりましたの』と、繼母が出て來た樣子。

『二階の西の三疊が明いてますから、ね』と、千代子は既に自分が決めさせたと云ふ調子で、『少し暑いけれど、あすこにして、成るだけお金の出ないやうにしてあげたらと思ひますの。』

『そりやア、安い方があなたもいいでしようから、ねえ――』低い笑ひ聲を出し、『ずツと安く負けてお貰ひなさいよ。』

『あの猫婆々アめ、いつもの猫撫で聲を出しやアがる』と、義雄は繼母の不斷を思ひ浮べた。

『これよりやア、もう負かりませんよ』と、これも笑ひ聲だが、險に響いた。

『ふ、ふ、ふ』と、をんな客の當りさはりのないやうにした笑ひも、繼母の聲と共に何だか底意地ありさうに聽こえたが、義雄は險ある聲を最もいやに感じた。

『あなたも、正直なところをいつて、大したお金持ぢやアないでしよう――』と、繼母の聲。

『はア』と、をんな客はまごついた返事だ。

『奉公口を見付けるまでといつても、あなたのはただの下女やお針では行けないのだし、晝間だけどこかの學校へやつて貰へるやうなところは、なか〱見付かりさうもないから、ねえ――』

『金を持たずに出て來たのだ、な。』義雄は直ぐそんな奴はめかけでもするより仕樣がなからうと考へ

た。
『まア、明日からでも探して見ましよう――神田にも國の人が來てをりますので。』
『國の人が來てゐるのなら、大丈夫ですよ。』
『成る程、おッ母さんの考へは年寄りだけに行き屆いてるのねえ。』千代子はその向ふ意氣の强い調子が變つたやうになつて、『あなたは、全體、二三ケ月の下宿料は持つて來たの？――こんなことを聽くのも』と、調子ッ外れに笑ひながら、『をかしいやうだが――』
『はア、それは――』
『若し奉公の口がない、うちの勘定も拂へないといふやうなことがあると――』
『つけ〲と遠慮會釋もない女だ、なア』と、義雄は蔭でひや〲した。
『そんな、御心配までは掛けんつもりです。』客は如何にもむッとしたと云ふ口調だ。
『つもりでしようが――』
『まア、いいぢやアありませんか、そんなことは？』相變らずの猫撫で聲が中を取るやうに、『どうでしよう、ね、お千代さん、義雄さんにも相談しなけりやアならないでしようが――？』
『義雄などに相談もあつたものですか？』

『でも、ねえ、あるじはあるじですもの。』

『あんな人に――あるじらしくもない――相談も何も入りますものか？』

『馬鹿にしてゐやアがる』と、義雄は蔭で怒る氣にもなれない程だ。

『では、お千代さんがさう受け合へばいいとして置いて――どうでしよう、ねえ――どうせ、わたしの座敷は明いてるも同然だから、一緒に置いてあげることにしちやア？』

『むむ、それがいいです、ね！』乘り氣の甲高になつたが、直ぐまた遠慮といふことに思ひ付いたかのやうに聲を平調に返して、『おツ母さんさへ御承知なら、ねえ。』

『わたしは構やアしない、わ――隱居の身に話し相ひ手もできるのだから。――あなたも』と、客に向つてらしく、『さうおしなさいよ、間代だけでも省けたら、ようござんしよう。成るべく無駄なお金の出ないやうに、ねえ。』

『ぢやア、さうしたら、どう？』

『では、さう願ひましよう。』今まで何だか氣が置けてゐたらしい客の聲だが、初めてその場の意味が分つたかして、さえ〴〵した聲を出した。

『それがいいの、ね』と、矢ツ張り甲高な笑ひ聲で、『どうしても年寄りがゐないと、いい考への出ないもの、ね――おツ母さんでなけりやア――おツ母さん大明神だ。』

『何を云つてやアがる、馬鹿が』と、義雄はまた心で叫んだ。
繼母も千代子の頓狂な言葉をただ笑つて受けて、客の方をあしらつてるらしく、
『あなたも、船や汽車でゆられて來て、疲れてゐるでしようから、早くわたしの部屋へ行つて、横にでもおなりなさい。』
『さう疲れてもをりません。』
『だツて、どうせあなたのゐるところときまつたのですから――』
『左樣ですか？では――』
『馨！ちよいとお出でよ。』
母に呼ばれて、義雄の弟は離れの奥から緣がはをまはつて出て來て、
『何』と云ふのがきこえた。そして久り振りの客を見て『いらツしやい』と云つてる。もとから知つてる筈だから。
『大きくなつたでしよう、馨は？』
『はア、さうです、な。』
『兄さんよりも、大きいのですよ――からだばかり立派になつて。』
『結構です。』

『勉強をしないで困るのですよ――兄さんの方は、それでも、し出すと、夜ぢうでもしてゐるやうですが――』
『僕だつて、する時アしてゐる、さ。』
『だツて、今から色氣づいたりして、ね。』
『お君さんでしよう?』客はためらはないで、かう突ツ込んでる。
『ええ、約束がしてあるのださうです。』
『兄さんの』と、千代子の笑ひ聲だ、『弟だから、ね。』
『あの、清水さんの行李が、ね』と、繼母は渠に優しい命令をした、『はしご段の下にあるから、あれをわたしの部屋へ持つてツておあげ。』
『あれだ、ね?』
『わたし、持つて行きます。』客と馨と二人で行李を奥の離れへ運んで行くやうすだ。
『重たさうだ、ね』と、繼母もそのあとから云つてた。
千代子は緣がはをばた／＼と上草履の音をさせて、こちらの室へ駈けて來て、障子の敷居のうへへ片足をかけたまま首を机の方へ突き出し、聲を低めて、

『やつて來ましたよ――紀州の女が。』
『…………』洋書棚のそばで東向きの緣がはに向いた机のうへにイプセンの脚本を開いたままやうすを聽いてゐた義雄だが、見向きもしなかつた。千代子は左の手を壁の柱にして、からだの腰を少しかがめながら、
『いやな女よ――それは意地の惡さうな目付きをして――おほでこ〳〵のひさし髮で――』
『それでも』と、義雄は劍突くめいた聲で妻を返り見た、『お前の引ツ釣髮の束髮よりやア多少の飾りはあらう。』
『髮なんかに飾りがあつたツて――あなたはいつも內部的、精神的でなければ行けないといつてる癖に、直ぐその口で女のうはべを賞めるのですか？』
『外形にまでも』と、顎でしやくいながら、『精神の若々しさが現はれてゐりやアいいのだ。』
『なんぼ若いツたツても、あんな意地の惡さうな、のツそりした女ぢやア――』
『ぢやア、手めへは何だ――鬼子母神のお化け見たやうなざまをしやアがつて――おれの女房なら、女房らしくなれ！』
『あなたも亭主らしくおなりなさいよ。』
『馬鹿をいふな――貴樣のやうなとげ〳〵しい婆々アに、もう誰れが構つてゐよう？　どんな見難い

女でも、まだしもしとやかで、若けりやアいい。』
『だから、好きなのをお貰ひなさいと云つてるぢやアありませんか？』
『何んだ！それで濟むと思ふか？苟くもおれが貴樣達を補助してゐる以上は、おれは貴樣達の主人だ。主人が學校から歸つて來ても――』
『へえ、學校でしたの？わたしは、また、もう試驗も濟んだんだから、どこかほかへ――』
『特別な用があつたらどうする――氣の毒だから點數調べの手傳ひをしてやつたのだから仕方がないのだ！學校ばかまなど穿いて、誰れがほかへ行く？』
『そりやア、氣が付きませんでした。』
『何、ぢやア、貴樣達アおれが學校から歸つた時でなきやア、茶を一つ持つて來ないのか？』
『そんな因業なわけぢやアありません、わ――欲しけりやア御遠慮なく手を叩いて下すつたらいいぢやアありませんか？』
『手を叩くのア家のものが知らない時だ――歸つたのを知つてゐながら、お歸んなさいとも、何とも云はず――』
『それは惡うございましたが――』
『惡かつたでは、もう遲いのだ――茶を持つて來い、茶を！』

『母アちやん』と云ひながら、知春は怖ろしさうに母の横手から母の足に抱き付いた。
『何もこはいことではないのだよ。』千代子は子を兩手でぐツと抱きあげ、『直ぐ持つて來させますから』と云ひ殘して、そこを立ち去つた。が、緣がはを行きながら、繼母の室へ聽こえるやうに、『お茶が出なかつたから、お叱りですよ』といつた。
『持つて來るなら、自分で持つて來い!』から叫びかけたが、聲には出さず、義雄のむしやくしやした心は袴をつけたまま坐わつてゐるからだ中にみなぎつた。

『今お茶を入れてますよ』と云ふ千代子の言葉を臺どころわきの食事室の方へ聽き流しにして、義雄はわざとがたぴしと玄關の土間にある下駄箱の蓋を明け閉て、自分の兩刳り下駄を出して足に突ッかけ、逃げ出すやうに家を出た。
玄關と向ふの醫者の裏板塀との細い露地を通り、自分の家の臺どころの角から曲つて、また細い露地を三四間出ると、我善坊の通りだ。ここは仙石屋敷と八幡山との間に挾まれ、細長い而かも鬱陶いし谷のやうなところだ。が、麻布の仲の町や鳥居坂への近道であるので、隨分いい人々の車も通るし、近頃は、下の八幡町の山に添ふた墓地が泰養寺の手を離れて總て取り拂はれ、その跡へ新らしい借家が建ち續いたから、可なり奇麗な通りになつた。

義雄は、自家の後ろの山のおほ檜の木や、八幡山の樹木やに反映する午後の暑い日光をスコッチの鳥打ち帽の上から浴びて、自分の室の涼しいがまた薄暗いところに坐わつてゐるのよりも、却つてすがすがしい氣持ちになつた。

『けふは、思ふ存分玉突きでもして遊んでやれ！』渠はかう決心して、八幡町を芝の西の久保通りに出で、巴町の方へ、われながら亡父の歩き振りが思ひ出されるせかせか歩きで、どこへ行かうかと考へた。

山王下の赤坂亭には好きな女もゐるが、玉代や飲食費が大分溜つてゐて、行くたんびにそれを催促されるのがこころ苦しい。あたらし橋の養精軒は、女ボーイが居眠りしながらゲームを取り、敵の點數へこちらの取り分を入れたのが原因で、そこの主人と喧嘩をしてから、まだそのほとぼりが覺めてゐない。その他で知つてゐるのは餘り感じのいい玉屋ではない。

さうかと言つて、近頃は大きな料理屋へ行つたり、濱町や蠣殼町のこツそりした家へとまつたりする勇氣も餘裕もない。

ふところの素寒貧を覺えながらも、夏のほこり風にあふられて、蚊がすりの單衣の背とからだの脊中とがひツ付くほど汗のうるみを生じて、脇腹を垂れる汗のしづくが親ゆづりの博多帶――山の這入つた茶と紺との合せ帶だ――の下にとまるのが、如何にも暑苦しい。

『人並みに今年は避暑旅行もできず――』と心では訴へながら、行く先きをどこにしようか、ここにし

ようかと考へて行くうち、足はいつもの通り渠を佐久間町の友人の家へ運んで行つた。『辯護士村松十衛』と書いた大きな横表札が懸つてゐるその格子戸を明けて這入ると書生が二階へ通知して來てから、義雄を上へあがらせた。

二階の奥座敷では、主人が二人の客と鼎座して、眞劍に花を引いてゐた。渠もここの主人とこの座敷でこの遊びに徹夜したこともある。が、それは酒にも飽き、玉突きにも疲れた跡で、ほんのから勝負をして自分の家へ歸りたくない夜の時間つぶしに過ぎなかつた。

今、目前に眞劍の勝負を見て、渠は今更らの如くそらおそろしい氣もするし、又、それをやつてゐるもの等の卑劣な熱心にさもしい根性が見え透くやうにも思はれる。然し、どうせ友人を玉屋へ誘ひ出すことができないなら、自分もここで、一緒にやつて見たいと考へたが、一年毎に取りやりする現金が懐中にあつても少いので、皆に勸められながら、ただ見てゐるだけで、別に何等の話もなく三時間も四時間もそこで過ごしてゐた。

『梅ぢや』、『牡丹だ』、『菅原ぢや』、『四光だ』などと、ぱちり／＼とやつてゐるのを、義雄も自然に釣り込まれて面白さうに見てゐるうち、最も勝つた客は、もう、晩餐時だから歸ると云ひ出したが、最も負けた人主がどうしても歸さないと止めた。が、その客はここらが切り上げ時だと見たのだらう、振

り切つて二階を降りてしまつた。

で、主人は今一人の客と同じことを續けたが、矢ツ張恢り復はできなかつた。客は先刻から立て換へて置いた分と今勝つた分とを渡せと云ひ、主人は渡すことはできないといふ。それがもとで投ぐり合が始まり、客はその喧嘩に負けて散々の惡口をつきながら、はしご段を降りて行つた。

『ごろ付きめ！　こねいだ立て換へてやつた分はどうするんでい！』甲州生れの氣の荒い村松は、目に角をたてて、かう浴びせかけてから、義雄の方に向き直り、少しきまりの惡さうな顏をして、『やア、失敬した、なア。』

『なに、面白かつたよ――僕も金を持つてゐさへすりやアやつて見たのに。』

『けふのやうに負けたことは滅多にねいよ』と笑ひながら、村松は金がは時計を白縮緬の兵兒帶から出して見た。『もふ七時だ、なア――また肉でも喰ひに行かうか？』

『さア、行つてもいい、ね。』

『夏中は相變らず不景氣で金が這入らねいで閉口だ。』

『僕などアおやぢの病死以來ぴイ〱してゐるのだ。』

『まア、飯を喰つてから玉突でもやる、さ。』

『村松はまだ獨身者で、臺どころは下女に一切まかせてある。既に夕飯は客の分もできてゐたのだが、

渠はそれを入らないと云つて、義雄と共に靴脱ぎへ降りた。

二人はそこから櫻田本郷町の通りへ出で、とある牛肉屋へあがつて一杯を傾けたが、飯を濟ませると、直ぐまたそこを出た。

『どこへ行かう？』

『さア――』

『君ア養精軒はまだいやだらうし――』

『行つたところで構やアしないが、久し振りで永夢軒へ行つて見ようか？』

『それもよからう。』

から話がきまつて、二人は新橋の方へ向いて高架鐵道の下をぬけ、烏森の意氣な圓い大提灯が出てゐたり、三味線の音締めが聽こえたりする横町々々を縫つて行つた。

永夢軒では、一方の臺にプールの客が集まつてゐるし、また一方の臺では藝者が客と四つ玉を突いてゐる。プールはいつも物を掛ける習慣になつてゐるので、義雄は全く好まない。村松はそれを知つてゐるし、また若い女のゐる方がいいので、その方の椅子に二人並んで腰をおろし、女がしろ玉のつもりで赤たまを突きかけたり、突いた玉が飛ツ拍子もないところへ走つたりするのを見て、笑つてゐる。

そのうち、女はその客を引ッ張つて疊つづきの奧へ這入つた。そツちは藝者屋で內輪は一つになつてゐるのである。

『きやつ、花を引かされるのだぞ。』義雄が村松を返り見てささやくと、村松は首をすくめて、これも低い聲で、

『負けたら、それだけ現金でぼツたくられるし、勝つたところで女と例の妥協で――一睡の夢か？』

『何を笑つてるのです？』知り合ひの女ボーイがゲーム取りにやつて來て、からからかつた。

『笑つたら、惡いのけい？』村松はわざとおこつたやうに右の肩を怒らして見せたが、肩を下ると同時に客の置いたキユウを手に取つた。『早ゲームを取れ！』

『へい〳〵。』ゲーム取りは、村松の國なまりを返事に受けもじりながら、大きなそろばんの懸つてゐる下の椅子に行つた。

『お常さん』と、義雄もキユウを取つて臺に向ひ、自分の白い持ち玉と赤い一とをキユウの先きで引き寄せながら、『永夢軒とはよく附けた名だと云ふこと、さ。』

『妥協ばかりやらしやアがづてのう』と、村松も二つの玉を――白いのは自分の方に赤いのをその先きへ――並べて、義雄の玉と臺の眞ン中の縱の一線に眞ツ直ぐに置かれたか、どうかを調べて見た。

『さア、來給へ』と、義雄に促されて、村松は白玉を右のコシンに添ふて赤の横線に並ぶまで出し、向ふの白の半面へねらひを定めて突きひねつたが、見事に當らなかつた。
『ほ、ほ』と、ゲーム取りは笑つて『いくらでしたか、ね？』
『君に半分でいい』と、義雄も笑つてゐる。
『なアに、七十だ。』村松は自分の白を拾つてもとの處へ置き直し、二度目のねらひを定めてゐる。
『君には』と、義雄はそれに向つて、『まだ僕の半分しか突けないぞ。』
『どうだ、見ろ！』村松の同じやうに突いた玉が義雄の白へは當つたが、向うのコシンへ行つてはね返る時に赤の左りの二三寸さきを反れてしまつて、村松の方のコシンのそばへ來てとまつた。
そして、義雄の白は一旦渠の前のコシンに行つて、また渠に近い右のに行き、そこを少し出たところで坐わつた。
『その腕だから、ね』と、義雄が今度は突きはじめた。近い赤から向ふのコシンへ這入つたのが、白へ行つての二點と、それから三點とまた二點との三キユウで、四キユウ目には失敗した。
それから互ひに突き合つた結果が村松の勝に歸したが、二回目には義雄が勝ちを得た。
三回、四回と試みてゐるうちに、プールの組は歸つてしまつて、そのあとへ義雄の仙臺遊學時代の後輩だが、渠よりはずつと先きに冒險小説で世間に名を賣つた男と、歌詠みから株屋の番頭に轉職し

た最も若い男とがやつて來た。

向ふも醉つてゐれば、こちらも丁度醉ひが出てゐるところで、互ひに知り合ひの仲とて、入りまじつて、兩方の臺を占領することになつた。

義雄はかう云ふ時には非常にはしやぎ出す方で、皆を傍若無人に揶揄しながら賑やかに誰れでもの相ひ手をした。そこの主人もボーイ連中も注意は全く渠一人の面白味に釣り込まれて來た。

然し株屋の番頭の二百點に對する義雄の百點は後者の方に少し負擔が多過ぎるので二三回負け越しになつた。その形勢を挽回しようとして、義雄が躍起になり、熱汗のでるのをうち忘れて奮鬪したのが、力の平均をます〳〵失はせたばかりでなく、

『この野郎』とか、『畜生』とか云つて突き出すキュウを、どうしたはずみか上へ振りあげたのが、電燈の一つに當つて電球がこな微塵になつた。

『電球は白かい、赤かい』と冷かされて、

『どッちでもねいや』と、義雄は興ざめた返事をし、與へた損害は店へ拂ふことにして、村松と二人でそこを出た。

もう十二時近くで、さすがの場所も段々森閑として來た。例の美人娘がある琴平町の蕎麥屋へ行つて、二人でまた失つた醉ひを取もどし、そこで義雄は友人と別れて、家へ歩いて歸つた。が、戸が締

つてゐるので無言で力強く二三度續けざまに叩くと、
『どなたです。』千代子の險ある聲が土間でした。
『おれだい！』
這入つてからも、千代子が洗ひざらしの模樣も禿げた浴衣の寢卷姿で恨めしさうにじいッとこちらを見た。その目が飛び出たのかと思はれるほどやせてゐる顏を義雄は見ない振りでつか〳〵と靴脫ぎをあがつた。さツさと自分の室にとほつて、押し入れから蒲團を出して敷いたが、直ぐ寢る氣にもなれない。
水を飲む風をして、臺どころへ行き、食事室の柱に懸つてゐるお客帳をこツそり廣げて見ると、紀州田邊の女は『淸水鳥』——二十一歲——勉强の爲め止宿と書き付けてあつた。

四

お鳥は、到着の當日、もとゐた時に知り合ひになつた駄菓子屋の娘で、今は電話交換局へ通勤してゐるものや、炭屋の娘で陸軍省の雇ひと結婚してゐるものを訪問し、何か都合のいゝ口を探して呉れと賴んださうだ。又その翌日、神田の同國人夫婦のところへ行き、身の上話しやら何かで、一日一晩を過ごし、やうやく最終電車に間に合つたと云つて歸つて來た。

それから二三日と云ふものは何をするでもなく、ぐづ〳〵に日を送つた。近所の友達のもとへ遊びに行つたり、時々は義雄の總領むすめ富美子を連れ、雨に大きな笹の模樣を出した白地の縮みにメリンス友禪の帶を締め、藍地の絹張り蝙蝠傘をさし翳して、芝公園の中へ散歩に行き、氷水や氷汁粉をやつて來たりした。

家にゐては義雄の弟の馨の部屋へ行き、足を投げ出していつ迄も話し込んだり、自分の室では、また、義雄の繼母がまだその記憶に新らしい位牌を床の間に据ゑて蠟燭をあげたり、線香を立てたり、子供の衣物を縫つたりしてゐるそばで、からだを長く橫たへて、沈み勝ちにうちはを使つてゐたりした。

茶呑み茶碗が足もとにころがつてゐても、それを直さうともしないので、それが田村家のもの等の噂の種にのぼつた。

最初にそれを氣が着いたのは千代子で、お鳥がどこかへ出た留守に、その部室へ來て繼母に向ひ、

『なんて無精な女でしよう、ね、あんなだから嫁に行つても追ひ出されたのでしようよ。』

『まさか、追ひ出されたのでもないやうですよ。』繼母は縫ひ物を續けてゐたらしい。

『それにやアいろ〳〵込み入つたわけもあると云ふことだから――』

『あんな者のいふことが信用できますか？』

『さう一概にも、ねえ——まだ若いから氣の付かないこともあり勝ちでしようが。』
『おッ母さんも、義雄の味方になつて、ただ若いのがいい方なのですか？』
『ほ、ほ、』と、それには逆らはないやうに、『そんなわけぢやアないけれど、ねえ——』
『もう、二十一にもなつて、茶碗のころげたのを一つ直せないやうぢやア、末がおそろしいでしようよ。』
『まア、でも、今の女の子は橫着になつてゐるから——』
『うちの富美などは、あんな者にさせたくないものです。』
『そりやア、お前さんの育て方一つで、ねえ——』
『また子供のことか？』そんな話はよせといふ勢ひで義雄は二人の坐わつてゐる前の緣がはへ行つた。今までそれとなく聽いてた女の話をもツと聽きたかつた。心のきまり惡さを隱すやうにして突ツ立つて、雨戸の鴨居に兩手をかけて、繼母の方をむき、自分の腹を探られては困るがといふ風をしながら、
『おッ母さん、あの淸水とかいふ女は全體どうすると云ふのです？』
『どうするツて』と、繼母の返事は直ぐ出かねたが、あまツたるい舌で、『まア、どこかいい奉公ぐちを探してゐるのです、わ。』
『めかけ奉公の口か？』

『いいえ』と、微笑を吹き出しながら、『そんなことアないのでしよう。』

『然し』と、小言でもいふ口付きのむツつりした口調で、『めかけにでも行かなけりやア、金も持たずに勉强ができるものか？』

『まア、さういやアさうです、わ。』口を少し明けて笑ひを見せ、『あの子の注文が六ケしいのだから。』

『どうです、ね、あなたが一つ』と、千代子は冷笑しながらこちらを見あげて、『あの子を引き受けてやつたら？』

『馬鹿云へ！』聲では大きな一喝を喰らはせたが、義雄は自分の顏に心の弱みが少し赤く染め出されたと思へた。

お鳥は神田から二三度夜遲く歸つて來ることがあつた。そのうちの二晩つゞいたのは、確かに電車賃を儉約して、暗い寂しい丸の內の電車道をとほつて、一里餘も步いて歸つた。

その最後の夜の如きは、餘り遲くなつたので、玄關の戶を明けて貰ふことをしなかつたのは勿論、再び年寄りの隱居に厄介をかけるのをも遠慮して、直ぐ馨の部屋の窓――そのそばに、泰養寺の山をしみ出る淸水の井戶がある――のもとに至り、渠を呼び起して裏口の木戶を明けて貰つた。馨が裏木戶を明けた時、かの女は釣瓶からぢかに水を飮んでゐたさうだ。

『どうせ用のないからだですから、電車などへ乘らんでも』と、かの女は翌朝、隱居に辯明らしいことを云つたが、宿賃は勤めさきがきまつたら拂ふことにして貰つて、取り敢ず來てゐよと云つたと云ふ同國人夫婦の方へその日から轉宿した。

　義雄が友人なる琴の師匠から頼まれて一美人を女優に仕立てあげようと、音樂倶樂部へ熱心な交渉をしたり、その本人を呼び寄せて決心を確めたりしたのは、この頃のことであつた。それが直ぐ失敗に終つたと同時に、渠の俄かに寂しく、暗くなつたやうな心に蔭ながら代りの花やかさを殘したをんな客も、神田の方へ行つてしまつたので、渠はます／＼陰鬱な日を送つてゐた。

　たまには、それでも麹町の詩人が來て新派小說家の創作を論じ合つたり、小石川の當時賣り出した小說家が來て、碁の勝負を爭つたり、辯護士の村松が來て、一緒に玉突きに出かけたりして、そんな時には、人一倍の元氣も出で、また快談もやつた。

『何とか世界から、あなたの寫眞を取りたいと云つて、來た人があります』と、千代子の通知に接して玄關へ出て見ると、某出版會社の編輯員（これは兼ての知り合ひだ）と寫眞師とであつた。

　一つは義雄を中心としての書齋、一つはその家族全體を撮影するといふのである。

『家族の方は僕が面白くもないからよさう』といふと、

『いろんな人のを二種づつ取るので――これは雜誌の都合上だから』と頼んで聽かなかつた。

『この部屋は餘ほど光線が取りにくい』と云ひながら、友の編輯員が縁がはの外から書齋に對して機械を据ゑる位置を暫らく探してゐる間に、家のものは衣物を着かへてゐたが、子供から先づ面白がつて飛び出して來た。

『書齋』は、義雄が白地の浴衣を着たまま机に右の片肱をかけ、横向きに洋書棚を背にして、その前の壁ぎはに、今一つの一閑張りのところどころ禿げたのを置いて、上に棕梠の盆栽をのせた場面のが寫つた。

『家族』は、縁がはのかどの柱に寄つて、義雄が雨滴れ落ちの一線に並んだ春蘭の内がはに立ち、千代子がその右の縁に腰かけて末の子を膝にし、義雄の左りに弟の磬、二人の子供、千代子の妹（これは二人の下女で足りないから手傳ひに來てゐる）、その後部の明き〱に繼母と千代子の母、などが立つてゐるのが寫つた。

家族の方は外だからまだしもよかつたが、書齋は義雄の左りの半面から上へかけて眞ッ黑になると聽いて、渠は死の色を聯想したと同時に、そこへ亡父の白髯の顏を楕圓形の輪廓で出して貰ふやうに賴んだ。と云ふのは、文界に子が多少でも名を知られて來たと云つて、父は非常に喜んだのを、義雄は今思ひ出したからである。

寫眞は二三日してできあがつて來た。そのできあがりを見ると、書齋の如何にも暗いのが義雄の現在の心持をそのまま現はしてゐるやうで——渠は自分の死と云ふ世界に餘り遠ざかつてゐないやうな心を返り見ながら、明け放つた部屋の外に目を放つと、庭前の梅やあんずの枝葉が如何にも繁り過ぎてゐるのに氣が附いた。

　緣へ出て、はしご段の突き當りにある戶ぶくろへ左りの手をかけ、そのそばに植わつてる山吹の上から、北の生け垣が鍵の手に反れて板壁に換はつてゐる向ふの離れへ聲をかけ、

『馨！　馨！　馨はゐないかい？』

『はい』と、一と聲進まない返事がして、弟は緣がはをまはつて來た。どこか外へ出るつもりであつたかして、慶應義塾の大學帽を被つてゐる。

『お前の座敷の橫手にあるはしごを持つて來ないか——如何にも鬱陶しくなつたからこんな木の枝葉を刈つて、一つ植木屋の代理をやらうぢやないか？』

『はい。』相變らず進まない聲で弟は離れの方へ行つた。

『それを刈るのアまだ早いのですよ』と、千代子は聽き付けて勝手の方から飛び出して來た。濡れた手を布巾見たやうな物で拭いてゐる。

『早くツても、何でもいい。』義雄は忽ち險突くを喰はせて、妻を瞰み付けた。

『………』千代子は所天の鋭い目を避けながら、『俄かに思ひ出したやうなことはしないでも――わたしが植木屋を呼んで、いい時に刈らせます、わ。』
『注意はこないだもしたが、刈らせないぢやアないか？』
『まだ時期が來ないんです。』千代子は飽くまで拒絶すると云ふ心をいらく／＼した態度に見せて、『變な時にしろとが手を入れて、痛んでしまひでもしたらどうします――あの梅でも大事にして置きやア、來年も亦四升や五升の梅干が出來るんです。』
『刈り込みをするのですツて？』繼母もおもて向きはにこく／＼した顏で出て來て、『義雄さんも隨分物好き、ねえ。』
『何でも刈り込めばいいのだ。』義雄は誰れに云ふともなく云つて、馨が下から持つて來たはしごを先づ自分の室の北がはに當る梅の木にかけさせた。
『刈り込むにしても』と、千代子はしつツこく、『あなたの五分刈りあたまのやうに坊主にして貰つちやア困ります。』
馨が唐ばさみを取りに行つてる間、義雄ははしごのそばの椽がはに腰かけて、枝葉の繁りを見てゐると、梅雨の重い雨に幾度か打たれて來た青葉は、黑ずんで、少しも冴えた光りがない。
目をつぶつて考へてゐるやうなこの枝葉の蔭で、父は每年粒立つた木實を仰ぎ見たのだ。義雄は若

い時もさうであつたし、近年も亦さうであつた——

義雄が諸方を放浪してゐる間に、父は病氣になつて、——亡くなつたと云ふのは實際なくなつたのではなく、子の記憶となつて拔け出ただけであらう——か？

最後の二十日間、朝に夕に看護してゐたのは、こちらの疲れた神經の一端に觸れたもぬけの土くれであつて——どうも、この薄ぐらい樹かげに、父は、見えないが、まだ立つてゐるらしい——

然し、また、それが乃ち死の影かも知れない——などと考へて、渠は思はず身の毛をそうげ立てた。

と云ふのは、義雄が多年生活に疲れ、奔走に疲れ、放浪に疲れ、生の苦しみ——それが生命であつた——を味はつて來た今、父の建てた家を讓り受けた氣持ちは、一と肩おろせただけに、いよ〳〵無責任なる死の方へ近づいたやうであると思へたからである。

庭の木を刈り込むなどと云ふことは、夢にも見なかつた初めての經驗で——

『不馴れだから、あぶないですよ』と注意する千代子の言葉には耳も傾けず、枝にかかつてぐら〳〵するはしごを半ば攀ぢ登つた時、渠はあたまがふら〳〵して目まひを感じた。

『元來、おれは机を家とする筆の人だ。』から考へると、渠はこんな植木屋の眞似をするやうになつたのは、不斷の本分を忘れて隨分氣がゆるんで來た證據だ、なと思はれる。

實に疲れた者、倦んじた者、刹那の間だけでもぐツすり一と安心して眠つて見たい――然し又死人の安住は得たくない――睡いやうでも、いつも覺めてゐる自分の神經の働らきが、地上を離れては、一層自分の目前にちらついて見える。

　渠のふら／＼してゐるやうなのを見て繼母は微笑しながら、

『慣れないと、目が舞ふでしよう？』

『まア、させてお置きなさいよ。』千代子も笑ひながら口を出し、『散切りなら、さぞ結構な虎刈りができるでしようよ。』

『………』渠はそれには答へず、弟が唐ばさみを持つて來たのを受け取つて、先づ二三ケ所の途方もなく突き出た青い枝を切つた。

　ふと、錆びづよいかな物の臭ひがして來た。渠には新らしいやうな而も古くさいやうな感じが、黑ずんだ青葉から傳はつて、自分の使ふはさみの音に聽えた。

『ちよきん、ちよきん！』また、『ちよきん、ちよきん！』

　それが、何だか、渠自身の身を切り縮めてゐるやうな氣がした。溜らなくなつて、俄かにはしごを降りた。そして、弟に、

『磐！　お前、一つやつて見ろ。』

『馨さんにできますか？』千代子はかう云つて、木を痛められるのが心配だと云ふ風だ。
『にイさんにできるなら』と、繼母は弟の方を辯護するやうに、然し言葉は和らかに『馨にだつてできましようよ。』
『お父アんのやつてるのを見てゐたことがあるから』と、馨は恥かしい責任を背負つたかのやうに赤い顔をして、鋏みを持つたが、これも多少は面白味に手傳はれてらしく、はしごを登つた。
『うむ、やつてる、やつてる！』
『うまい手つきだよ。』
こんなことを云つて千代子や繼母が冷かしてゐたが、少し堅い枝を切る時、渠は顎を明けて挾みの手ごたへを受け、しツかりと宙に齒をかみ合はせた。
『ああ』と、それを見た繼母は意外らしい聲を擧げて、『口つきまでがお父アんのするやうなことをしてゐるよ。』
『さうですか、ね』と、千代子は大した意味にも思はないやうであつた。
その木の手入れが濟んで、次ぎの、隅にある梅に移つた時、義雄は弟に代つてまた挾みを取つた。妻や繼母もまたそこに近いところまでついて來た。
かな物の臭ひと挾みの香とに父を思ひ出しながら、渠が今、椽ばなから仰ぎ見るものがある上で、

實に疲れた者、倦んじた者、刹那の間だけでもぐツすり一と安心して眠つて見たい――然し又死人の安住は得たくない――睡いやうでも、いつも覺めてゐる自分の神經の働らきが、地上を離れては、一層自分の目前にちらついて見える。

渠のふら／＼してゐるやうなのを見て繼母は微笑しながら、

『慣れないと、目が舞ふでしよう？』

『まア、させてお置きなさいよ。』千代子も笑ひながら口を出し、『散切りなら、さぞ結構な虎刈りができるでしようよ。』

『……』渠はそれには答へず、弟が唐ばさみを持つて來たのを受け取つて、先づ二三ケ所の途方もなく突き出た青い枝を切つた。

ふと、錆びづよいかな物の臭ひがして來た。渠には新らしいやうな而も古くさいやうな感じが、黒ずんだ青葉から傳はつて、自分の使ふはさみの音に聽えた。

『ちよきん、ちよきん！』また、『ちよきん、ちよきん！』

それが、何だか、渠自身の身を切り縮めてゐるやうな氣がした。溜らなくなつて、俄かにはしごを降りた。そして、弟に、

『馨！　お前、一つやつて見ろ。』

『馨さんにできますか？』千代子はかう云つて、木を痛められるのが心配だと云ふ風だ。
『にイさんにできるなら』と、繼母は弟の方を辯護するやうに、然し言葉は和らかに『馨にだつてできましようよ。』
『お父アんのやつてるのを見てゐたことがあるから』と、馨は恥かしい責任を背負つたかのやうに赤い顔をして、鋏みを持つたが、これも多少は面白味に手傳はれてらしく、はしごを登つた。
『うむ、やつてる、やつてる！』
『うまい手つきだよ。』
こんなことを云つて千代子や繼母が冷かしてゐたが、少し堅い枝を切る時、渠は顎を明けて挾みの手ごたへを受け、しツかりと宙に齒をかみ合はせた。
『ああ』と、それを見た繼母は意外らしい聲を擧げて、『口つきまでがお父アんのするやうなことをしてゐるよ。』
『さうですか、ね』と、千代子は大した意味にも思はないやうであつた。
その木の手入れが濟んで、次ぎの、隅にある梅に移つた時、義雄は弟に代つてまた挾みを取つた。
妻や繼母もまたそこに近いところまでついて來た。
かな物の臭ひと挾みの音とに父を思ひ出しながら、渠が今、椽ばなから仰ぎ見るものがある上で、

考へられないこともない。また、そのしろ目が少しそら色がかつてゐるのも義雄が見て餘りいい感じはしない。

見るのでもなく、馨から借りた義雄の詩集を隱居(えんきよ)の机の上に廣げて、かの女はじツと考へ込んでゐることもある。

『心配してゐるからだ』と、隱居の繼母は家のものにも語つて、一番多く同情(どうじやう)を示めしてゐる。

その部屋(へや)に寢ころんで、肱まくらをしながら、隱居や馨と無駄ばなしをしてゐる時義雄がさり氣なくのこ〱と出て行つて、敷居ぎはに突ツ立つと、

『このおやぢめが』と云はないばかりに馬鹿にして、片手を突いて半身を起しただけで、兩あしは重ねて投(な)げ出したままだ。

『どうです、仕事が見つかりましたか』と聽かれて、初めて足を引いて坐わり直し、下に向いて、

『はア、まだ――』

『東京のやうに生活(せいくわつ)の急がしいどころぢやア、女でも、餘ほど運動しなけりやア見つかりませんよ、仕事と云ふものは。』から男らしくは云つたが、這入りかねて敷居の上で明いた障子を背中(せなか)にしてしやがんだ。

『今』と、矢張り下を向いたまゝ、『神田の人に奔走(ほんそう)を賴んであります。』

『それもいいでしようが――』

『そこの』と、繼母は縫ひ物の針を持つたまま右の手を通りの方へ擧げて、『駄菓子屋の娘が、自分の行つてる電話の交換局へ世話をすると云つてるさうです。

『そんな間どろツこしいことぢやア、駄目ですよ。』

『お鳥は默つて目を擧げたが、直ぐまた下に伏せて、ゆかたの褄をいら〱しくいぢくつてゐるのが、義雄にはしほらしくもあつたし、またどうしたらよからうと云つてるやうにも見えた。

『義雄さんも、どこかいいところを探してあげて下さいな。』繼母はお鳥に代つて賴み出した。

『そりやア、探してもあげましようが――』渠は初めて疊の方へ這入つてあぐらをかき、『全體どうしようと云ふのだ？』

『もツと裁縫を稽古したいのです。』かの女は少し笑がほになつた。

『裁縫ツて、そりやア前にゐた時、その方の學校に行つてたさうぢやアないか？』

『まだあれだけぢやア足りないのださうです。』繼母が口を挿み、『袴や洋服などを別にまたしツかりをそはりたいので――』

『洋服なんか、洋服屋にならなけりやア入らないことだ。それよりやア、もツと何かいい事がありさ

うなものだ、ねえ。』
『何でもよろしいのですけれど』と、また目を擧げた時、かの女のひたへに大きなゆるい横じわが二三本出來たのに義雄は氣がついた。然しまたその皺は目が下に向くと同時に消えてしまつて、『まア、そんなことが出來ればゝえいと思ふてをります。』
よく考へて見てやれば、さう疑ふべき女でもなからうと云ふ考へが義雄に起らないでもなかつた。果してその通りなら、千代子の聽いて來た炭屋の主人との話しなどは當てにも何にもならないと。
『もし下女でいいなら――下女と云つても、無論、獨身者の家だから、さう忙しいことはないが――そんなところにゐて半日でも學校へ通はせて吳れるなら、今でも直ぐないことはないと思ふのだが――』これは義雄の胸に小石川の小說家を說いて見ようと思つてゐるのである。
『それがいいでしよう』と、繼母はお鳥に勸めた。
『さア』と、かの女はちよツと返事に困つたやうだが、『それもゝえいかも知れません。』
『兎に角、向ふを聽いて見なけりやア、しツかりしたことは分らないが――』
『早く聽いておあげなさいよ。淸水さんも、ねえ』と、繼母はお鳥の方へ和らかに念を押すやうな笑ひ方をして、『さう、いつまでも遊んで居ることは出來ないし――』
それで話しは暫らく絕えた。

默つてゐた馨は、床の間の位牌の前の蠟燭が燃え盡したのを見て、新らしいのに換へた。
『あかりの消えたのに氣がつかなかつたのかい？』繼母は人ごとのやうに云つて位牌の方へ目を向けた。
『消えるまでもなかつたのだが』と、馨はまた線香の火をも新らしくしながら、『あんまり短くなつたから』
『お父さんが』と、お鳥は下女の話を再び聽きたくないのかして、話題を他へ轉じて隱居に向ひ、『亡くなられてから、もう、何日目におなりです？』
『あ、それで思ひ出したが――』繼母は勝手に義雄に向ひ、『もう、四十九日も過ぎてゐるのだし、お位牌を向ふのお佛壇へ一緒にして貰はうと思ひますが、ねえ――』
『そりやア、もう、わたしに構はず――』
『でも、相談して見なけりやア――』
『なアに、相談なんぞア、あの婆々アに云はせる』と、千代子の聲がする方へ首を動かし、お鳥がきた日に妻が繼母に語つてゐたことを當て付け、『主人にする必要がないのです。』
『そんなことを云つたツて――』繼母はただ笑つた切りだ。
『さア、玉突きにでも行つてこようか』と立ちあがつて、義雄はしたくもない延びをしながらお鳥を

見た時、またそのひたへに皺のよつた顏と出くわした。

五

某新聞の文藝欄に出す原稿を賴みがてら、その新聞の社員になつてゐる小石川の小說家田島秋夢がやつてきた時、義雄は既にお島の話をしてあつた。

『どうせ、まごついてゐりやア、目かけか地獄になるのが落ちだらうが、本人はまだそこまでは自覺してゐないやうだ。』義雄は秋夢の樣子を窺ひながら、『うぶでないとしても、男とは普通の結婚であつたのだらうし——一つ、どうだ、高等下女を雇ふつもりなら、話が出來ないこともないだらうぜ。』

『ふむ』と、秋夢はむツつりした笑ひを見せただけで、その話は途切れてしまつたが、義雄は今一度女の爲めに話して見ようかとも考へてゐたのである。

渠が机に向つて、こないだ、梅の枝葉に關して起した感想を『庭木の刈り込み』と云ふ散文詩に引き纒めてゐるところへ、繼母が珍しくも這入つてきて、

『義雄さん。』わざとだとは思はれるが、にこ〳〵した顏をして、机の端に左りの手の指さきを二三本掛け、品やかにしやがみながら、『どこか世話をしてやつて下さいな、淸水さんを——いつまでゐたツて、お金はないやうだから、長くゐればゐるだけ、ねえ、うちの損にもなるだらうと思はれて——手

頼つてこられたわたしが、お千代さんになり、またお前さんになり、氣の毒な思ひをしなけりやアならないから。』

『別に口もないのか？』義雄は筆を持つたままで、むツちりした返事だ。

『えい――神田の方とかも、ただいいところがある、あると云ふだけで、そんなことを云つては向ふの男がただ女を面白半分に引き寄せてゐるばかりのやうだし――』

『それがあの女に分らないのか？』

『さア、そこまでは――』

『女の方が却つてそんな男からなにかおびき出さうとしてゐるのぢやアないか？』

『まさか――』繼母はにツと笑つて、『そんなことアどうでもいいぢやアありませんか？うちさへ早く出て呉れりやア――』

『だから』と、義雄は頬をふくらし、繼母に突ツかかるやうな口調で、『おれが下女にでも行けと云つたのに、乗り氣にならないぢやアないか？』

『下女ぢやア、氣が進まないらしいのです、わ――でも、お前さんに強く云はれたから、その日から自分で方々の口入れ屋を尋ねてまはつたさうだが――よささうだと思つて目見えに行つて見れば、朝鮮人のうちの小間使ひであつたり――十圓にもなるからと聴いて見れば、お目かけの口であつたり―

—若いものはまだ迷ふばかりです、わ。』

『なま意氣に、下女と云やア飯炊きばかりだと思つて、人の云ふことを氣に止めないから仕やうがない、さ。』

『下女でも、何んでもいいから』と、繼母はここ切りだがと云ふ風に聲をひそめ、『押しつけておしまひなさいよ、わたしが今本人をここへよこしますから。』

『そりやアよこしてもいいが——』義雄は言葉に冷淡をよそほつても、心には一種の恥かしみをおぼえて、繼母がいそ〳〵と出て行つたあとで紺がすりの襟を正したり、博多の帶の結びを眞ッ直ぐに直したりした。

そして、机の位置がこのままでは、女が遠く坐わるにきまつてゐると思ひ、成るべく奧の方へかの女を取り入れる爲め、机を床の間と相ひ對する緣がはの前で、半間の壁のそばへ据ゑ換へた。

午前のことだが、日は既に南の方へまはつてゐて、餘り暑苦しいやうなことはない。東の緣がはから見える八幡山の樹木から漏れる光りが、隣りの庭から突き出た二三葉の芭蕉のひろ葉に當つて、その葉の青い色が明るいやつを帶びてゐる。

義雄はそれが一番好きだ。如何に暑く乾燥した日でも、その葉だけは青々したしめり氣を帶びて、勢ひよくすら〳〵延びて行く。たとへ、雨風に破れよごれて切り取られてしまつても、直ぐまた跡へ

すら〱と延びて來るのである。
それを見て瞑想しながら、あツちへ行つたり、こツちへ行つたりすることもある緣がはだが、今はその方の障子を締め切つて、渠は左りの壁ぎはに移した机に向つてゐる。
『入らツしやいましたよ。』繼母はお鳥の先きへ立つてやつで來て、持つて來た蓙の座蒲團を床の間の前に置き、『さア、あなたもぢかによくお賴みなさいよ』と、お鳥を置いて去つてしまつた。
『さア、お這入んなさい。』義雄はどきつく胸をこと更らに押し鎭めて、原の座蒲團に坐わつたまゝ、机を脊にしてかしこまつた。
　お鳥も亦取り澄ました物々しい態度でまだ一言も云はず、下向き勝ちに、義雄の方へ明いた障子の敷居を越えたが、しやがんでその障子を人に見られまいと云ふ風で締めた。それから、目をじろりと擧げてこちらを見ると同時に、ちやんと坐わつてお辭儀をした。
『まア、もツとお進みなさい。』義雄は座蒲團を取つて洋書棚近くへあげると、
『はア――』お鳥はおとなしくその方へ少し膝をにじり寄せた。
『どうです、まだいい口は見附かりませんか？』
『はア、まだ――どこぞよろしいところを、どうぞ――』
『いいところツて、僕の心當りと云ふのは、こないだもちよツとお話した下女の口ですがね。』

『そこでもよろしう御座ります。』

『いいですか』と渠が念を押すと、女はまたたやすくいいと答へたので、これは物になるわいと思つた。獨り者のところへ若い女――それを平氣で承知するやうなら、渠自身にも占領することが出來ないものでもなからうと。

たとへ田舍じみてゐても、たとへ拙い顏でも、このふツくりと肥えた色の白い女をむざ〳〵と友人の秋夢に渡してしまうのが急に惜しくなつた。

『どうです、東京の方が紀州などよりやアいいでしよう、』などと云ふ問題外の話しを暫らくやつてゐると、いつのまにか渠は自分のからだを書棚の方へ横たへてゐた。

女は右の手を疊に突いて、少しにじり出した膝の當たりの褄を左りの手の指さきでむしり取るやうな眞似――これは此の間もしほらしいと見たことで、かの女の癖だと義雄は思つた――をして、多少締りがないと思はれる笑ひ方をしてゐた。

『それで然し本統にいいですか？』義雄はまた本問題に歸つて、今度は疊の上から白をまぶしさうに女の方に向けた。

『へい、かうなつては、もう、氣儘も云ふてをられません。』

『獨り者だから』と、云ひにくいのを、さりげなく見せながら、『口說くかも知れませんよ。』

『そんなことは構ひません。』女はまた眞面目な顏になつたが、決心の色は顏に顯はれた。

『實は、僕も』と、義雄は、もう大丈夫だと勘定したが、口をよどませながら一層低い聲になり、『今、誰れかひとり世話して吳れるものを探してゐるのです。――僕はあの妻子は大嫌ひで、――この家にゐてもゐないでもおんなじことなのだから、――どこか別に家を持たうと思つてるのです。』

『はア』と、お鳥はなほ眞面目だが、どちらでもいいと云ふ心は、相變らず褄をむしつてゐる樣子に見えた。

『いツそのこと、どうです』と、義雄は女の顏を矢張りさりげなく見つめながら、然し口はよどみながら、『僕の――方へ――來て――下さつたら？』

『それでも結構です。』女も外に氣を置きながら、目を橫に左りの締つた障子を見て低い聲だ。

『もう占めた』と、義雄は自分に云つてから、『矢ツ張り、口說くかも知れませんよ。』

『………』女は無言で、また左りの障子の方を氣にした。

『ぢやア、ね、かうしましよう――』義雄が別なことを云ひかけた時、千代子の草履の音がぱたぱたとして來て、

『あなた、諭鶴が行けませんから、叱つて下さい』とおめきながら、障子をばたりと明けた。お鳥の

ゐるのを見て俄かに荒々しい調子をやはらげて、『清水さんがゐたんですか？』

『おりやア子供のことなど知つたものか？やかましいからあツちイ行け――』義雄は横になつて左りの肱を突いてゐるまゝ、顏をあげただけだ。

『ぢやア、行きますとも――』千代子はかう云つてお鳥が疊から手を放して眞ツ直ぐにかしこまつたのをじろりと一瞥し、ぴたりと障子を烈しく締めると、障子はその勢ひで一二寸あともどりした。

『靜かに締めろ！』義雄は起きあがつて、そのあとを締め直し、また元の通り横になつて、『あれだから、駄目なのです。』

『ふむ』と、お鳥もかしこまつたまゝ鼻であざ笑つた。

『然し、僕のおツ母さんにでもしやべつたら行けませんよ。』

『こんなことが云へますものですか？』

『ぢやア、ね、かうしましよう――僕は直ぐ晝飯を濟ませて、新橋ステーションの二等待合室に行つてるから、あなたも成るべく早く入らツしやい。鎌倉へでも行つて、ゆツくりあとの相談は致しましよう。』

『では、さう致します。』

『間違つちやア困りますよ。』義雄は微笑して見せた。

『大丈夫です。』お鳥も笑ひを漏らしながら骨格のいい胸を延ばして、わざとらしい延びをしたが、義雄の燃えるやうに向けた目を見て、横を向いてそれを避けた。

勝手の方からは千代子がまた尖つた聲で子供を叱つてゐるのが聽えて來る。

『ああ、いやだ〳〵。』妻や子のことを思ふにつけても、義雄はまだ親しみのない女に、餘りだらしない風を見せたくないので、起きあがつて坐わり直し、きのふ丸善から買つて來た外國雜誌、ロンドンのザレヸウオヴレヸウズを机の上から取つて、その中の挿し畫をかの女に見せたりした。

『あれは何です』、『これは何』と、二三の質問が畫に關してあつた切り、話の種が切れてしまつた。

『では、ね』と、義雄は紙入れを取り、或雜誌社から受け取つて、千代子には隱してゐる原稿料のうちから、五十錢銀貨を出し、『これは車賃に渡して置きます。』

『……』お鳥は默つてそれを受取り、周圍に氣兼しながら急いでよれかかつたメリンス友禪の帶に挾んだ。そして膝に返したその手を、義雄は、

『約束のしるしに』と云つて握つたが、かの女もそれをこちらの握るがままに任せた。

六

新橋の二等待合室のシートに腰を落して、義雄が讀み殘してあつた中央公論の政治論を讀んでゐる

と、ひよツくりお鳥がやつて來て默つてその隣りに腰をかけた。

『丁度時間がよかつたよ。』渠は當りの人にそれと感づかれない爲め、夫婦でもあるかのやうに輕くあしらふつもりだ。

『さう』と、お鳥も案外さばけて出た。

が、それツ切り、どちらからも言葉の次ぎ端がなかつた。

女の衣物は相變らず雨に笹の白縮みだが、帶だけは換はつて、牡丹色の繻子と青みがかつた綿繻珍らしいものとの腹合はせになつて、帶あげは糯袢の袖と同じとき色のメリンスだ。餘り結構な身なりではないが、義雄の餘り構はない棒じま透綾の羽織りの袖口に汗じみがあるなどには、却つて釣り合ひが取れてゐると思へた。

出發前、渠は今思ひ出したやうにして女を近所の郵便局へ遣はし、或ところへ目見えに行くから、今夜は歸らないかも知れないと云ふハガキを、女の申し譯の爲めに我善坊へ出させた。

『もう、皆這入つてる』と云つて、女が急いで歸つて來た時は、義雄も待合室の外まで出てゐた。

誰れか知人に會ふだらうか？　會つてもかまはない。却つておほびらに見せびらかしてやれ、などと義雄は考へながら一緒に改札口を這入つて、三等客車へ乘つた。

實は、鎌倉よりも近いところで濟めば濟ませようとして、鶴見までの切符を買つた。そこへ降りて

見ると、思つたやうなところではない。海岸はさう近くないし、ちよツとした料理屋も見當らない。
『然し、ここに引ツ込んでゐる小學教師があるが、その父と云ふのが、麻布の谷町に家を構へてゐて間貸しをしたいと云つてるのを思ひ出したが』と、義雄はもう女が云ふ通りになると思つて、歩き乍らの話だ、『あすこを借りることにしようぢやアないか？』
『ほかにも借りてる人があるのですか？』
『なアに、まだ無いし、一ついい部屋があるから。』
『では、結構でしよう。』
氣が付くと、女は素足に新らしい空氣草履をはいてゐる。そしてその青い絹天の鼻緒にまでほこりがたかつてゐる。
『こんなに、ただ歩いてゐたツて仕やうがないから、どこか外へ行きましよう。』義雄はかう云つて、女を今度は電車に乘せ、神奈川でおろした。
汽船や軍艦の淀泊してゐるのが遠く見えるが、矢ツ張り、いい海岸はない。義雄は女を得た餘勢でまたいつもの趣味なる海と海の音とが戀しくなつてゐたのである。
二年前までは、いやな家族を相州の茅ケ崎へ家を借りて放ちやり、自分は東京での瞑想や仕事に疲れ切ると、そこへ逃げて行つて、松ばやしの中の軒下や白い砂の浪元に仰向けになつて、からだを延

ばすのを例にしてゐた。

家族のゐるところだから、よかつたのではない。海の音を遠くまた近く聽くと、沖の浪が絶えず湧き立つやうに、自分の疲れた神經も亦若々しく生き返つたからである。

義雄の第三詩集中の句、

『熱き　眞砂　の　上を　撫でて
われは　獨り　し　物を　思へば、
遠き　深み　の　浪は　打ちて、
手なる　下より　響き來たる。
おのが　小胸も　爲めに　振ひ、
千々の　亂れは　濱の　小砂利。』

渠は曾て自分が作つたから云ふ浪曼的詩の而もこまやかだと思ふ心持ちを若い女と共に回復して見たいのである。この二三年來、渠は人生の殆ど素ツ裸な現實にぶつかつてゐて、もとは何となく奥ゆかしさのあつた幻影など云ふものは全く消滅してしまつた。そんな生活をしてゐると考へると、やがて四十歳に近い新時代者の自分が哀れな樣にも思はれて、迫めては若い女の熱い血に觸れて、過ぎ去つ

た心の海の洋々たる響きを今一度取り返して見たいのである。

お鳥はそんなことは知らう筈なく、ただ小羊のやうにおとなしく、義雄が目を鋭くして海の方へとあせつて行くのに附いて來た。

が、人工的に切り開いた狹い長方形の入り江のやうなのがいくつもあるだけで、行つても、行つても、生きた浪ぎはへは出られさうもなかつた。と同時に、附いて來る者の迷惑さうな顏を返り見ると、渠は段々興ざめてしまつて、今まで追ツ驅けてゐたまぼろしのあと方もなくなつた。

『ぢやア、もうあと戻りをして、ステーションの近所にあつた丁字屋とか、香——何——園とか云つたやうなところへ這入らうか？』

『さうしましよう。』

然し、さういふ家々の門前へ立つて見ると、どうも樣子が分らないのであがる氣にならない。お負けにぐず〱してゐるうちに、義雄に禮をしてとほつた青年があるので、渠が暫らく考へて見ると自分の敎へる商業學校の生徒であつた。

『こんなところへ止まるくらゐなら、いツそ鎌倉まで行かう、さ。』

『そして繪ハガキでも買ひましよう。』

『もとの御亭にでも出すのか？』突然から云はれて、お鳥は、

『そんなことはしない』と、微笑して橫を向いた。が、別に赤い顏もしなかつた。
『なぜ別れたの？』
『見込みがありませんもの。』
『そりやア可哀さうぢやアないか、一旦一緒になつて置いて？』
『でも、兄が無理に別れさせましたものですから。』
『兄さんと云ふのは何をしてゐるの？』
『醫者です。』
『あ、それか、あなたが前に一緒にうちへ來てゐたのア？』
『………』
『あなたも隨分あばれ者であつたツて、ね？』
『………』女はただこちらを向いて笑つた。
『男とくツ付きやアしなかつたかい？』わざと子供を取り扱ふやうに見せて女の顏色を窺ふと、
『そんなこと――』といつただけで、橫を向いてしまつた。これは誰れも人影の見えない神奈川ステーションの待合で汽車を待つてゐた間の話だが、そこから鎌倉へ着した時はゆふ方であつた。
急いで八幡宮を見せたついでに、義雄はその近處に借家してゐると知つた友人の家をちよツと訪ね

て見ようとしたが、分らなかつた。
車を二臺雇つて大佛前の三橋へ走らせ、そこの式臺をあがる時、渠は女の女履のおもてが足の油とほこりとで眞ツ黑になつたのを見た。
『ひどくなつたものだ、ねえ』と、渠はお鳥を返り見たが、宿のものに導かれるままに、おもて二階へ案內された。
『くたぶれた、わ』と坐わつた切り、かの女は再び笑ひもせず義雄から話しかけられなければまた口も開らかない。
宿の女が茶を運んだり、菓子を持つて來たりするたんびに、じろ〳〵とお鳥を見るのを、かの女は憎々しさうに見ては顏をそむけた。
門內の庭の樹木がよく見えて、いい靜かな部屋である。

日ぐらしがじい〳〵と木にしみ付くやうに鳴いてゐるのも、却つて凉しく感じられる時刻だ。庭の噴水のさきが百尺竿頭一步を進めたと云ふ悟りのやうに、白く泡立つてまたもとへ返るのを見ても、義雄は早く汗と垢とを洗ひ落して、ゆツくりと、二人が間に何物をも置かずうち解けて見たい氣が切に迫つて來た。

『湯に這入らうか？』渠がかう云つて、わななく胸を押し鎭めながら、さきに立つて部屋を出ると、お鳥は無言で、而も眞面目腐つた顏をして素直に從つて來た。

義雄は自分の目が湯のけむりに曇つたので氣が付くと、いつもになく、鐵ぶちの近眼鏡をかけたままであつた。

『こりやア行かん』と、渠は目がねをはづしながらあともどりする時、女が入り口の戸を這入つて來たのに出會つた。

『ふ、ふん、』と、かの女は眞顏のまま吹き出した。それが渠にはまた

『このおやぢめ』と冷笑されたやうに思はれた。

湯をあがつて來ると、もう日が暮れてゐて、ふすま一と重の隣室には五六の客が集まつて酒をやつてゐる聲がする。

『あれぢやア、面白くない、ね。』

『はア――』

『別な部屋にして貰はうか？』

『どちらでも。』

女が親しみのない樣子をしてうちはを使つてゐるに加へて、渠自身も宿に向つて部屋を換へて吳れ

ろと云ひ出すのが何んだか自分の腹を探られるやうに思はれたので、どうしようかと考へるばかりで、二人の間に暫らく言葉がなかつた。

隣りへは早や藝者も二三名這入つた。そして、その浮ついた言葉やお客の急にはしやぎ出した調子をこちらから靜かに聽いてゐると、二人とも、今、大きな樫の木か何かの食卓に向つた間よりも、一層の隔絶を生じて來たのである。お鳥には自分も亦賤業婦風情のやつて來るこんなところへ來たのかと云ふ反省心が起つたやうだし、こちらも亦宿のものから處女をここへ誘拐して來たと思はれはしまいかと云ふ疑念が先きに立つた。自分としてはかの女を、もう處女とも普通の淑女とも思つてゐはしなかつたが――。

やがて女中がやつて來て、手の指さきを持つて隣をさし、

『お氣の毒ですが、直き歸られますので――ほんの、この土地の人の寄り合で、前からお約束があつたものですから――』

『なアに、構やアしません』と、義雄は笑ひながら、實はおほ眞面目な顏を見せて、ビールを注文したが、お鳥と共に隣りの賑ひの方へどうしても氣が取られてゐる。

『腹は減つたし、もう暗いし、大佛はあすの朝見ることにしましよう――』

『………』女は目をあげてちよツとこちらを見ただけだ。

『あすは、また圓覺寺を見がてら、その寺内の庵を借りてる友人を尋ねて見ましよう。』

『…………』

『それから、ね。あなたが谷町へ引き移るとしても、うちのものに知れては困るのだから、表面は―僕の友人で琴の師匠をしてゐるものがある――そこのをんな學僕になつて行くとして置きましよう――どうせ、あなたも琴は習つて置いてもよからうから――』

『はア――』お島は琴も習へるのかと嬉しいやうな口附きをして見せたが、直ぐまた眞顏になつて下を向いた。

『あの』と、かの女はじろりとした目を義雄に向け、『いつかの女の人はどうなりました？』

『あれですか？』渠もあの女優志願者であつた女を思ひ出した。琴の師匠から聯想して、この女があの女のことを云ふのは、きツと繼母からしやべられてゐたに相違ない。それにしても、自分が殆ど全く忘れてゐたものに對し、お島はもう競爭氣を起したのかと思ふと意外に吹き出したくもあつたし、また、若い女のあはれなこころ根も思ひやられた。と同時に、あの方は如何にも美人で、これとは丸でしろ物が違つてゐたと云ふ惜しみ氣も出た。が、何氣なく微笑しながら、『あれは何も心配するにやア及びません。氣の變り易い奴で、もう世話もしてゐませんし、また』と急に早口になつて、

『僕が關係したわけぢやアないですよ。』

『……』お鳥は顏に冷かすやうな笑ひを浮べた。

かの女は酒やビールは嫌ひだといつて義雄のさしたコップを一度も受け取らなかつたが、堅苦しく顫へる手附きでこちらの爲めにお酌はした。

『いつまでもやかましくツて、困る、ね』と、こちらが云ふと、

『……』女はただその顏を隣りの方へ向けた。電燈の光りに、突き出た髮のひさしが大きく義雄の向つてゐるふすまの裾の方に寫つた。

『隨分つン出たひさしだ、ね。』

『でも、あんな』と、女は顏を向け直したが、遠く義雄の妻に矢を放つて、『引ツ詰つたのもをかしい。』

『それも、實際、さうだが――』あとは言葉に出さなかつたが、田舍ものの癖にいい氣でハイカつてゐるのもをかしいよと、義雄は云つてやりたかつた。

渠は一方に詰らないものを脊負ひ込んだやうな氣もするが、どうせ妻子と別居するとすれば、他の下宿屋生活もいやだし、また、一方には、まだよく分らないこの女の素性を究めて見たくもあつた。

さり氣なくいろんな喜ばせを話しの途絶えかかつた時にさし挾みながら、二本のビールを飲み終つた時、渠は女と共にゆふ食に移り、それが濟んで間もなく、一つ蚊帳に這入つた。

『もう占めたものだ』と考へたから、渠はビールに興奮したあたまを枕に休め、向ふが口を開かないなら、こちらも默つてゐて見ようと云ふやうな意地を出し、暫らくただうちはを使つてゐた。

＊　＊　＊　＊

この夜、お鳥が自分から進んで口を開いたのは女優志願者のことを念押した外には、たツた斯う云ふ言葉だけだ、

『本統に學校へやつて呉れる？――本統？――うそぢやアないの？』

『ああ』、『ああ』と、義雄はただ眞面目腐つた微笑をして、それの返事をした。

七

『うぶだ、思つたよりもうぶだ。』かう義雄はお鳥のことを思ひ込んだが、また考へ直して見ると、どうも不審な點もあつた。

新橋の停車場へ來た時も案外平氣であつた。道寄りをしながら鎌倉の宿へ着いたまでの間にも、殆ど恥しさうな樣子は見せなかつた。大佛を見てから、圓覺寺の友人を尋ねたあとでも、平氣でその友人の顏つきや癖を批評してゐた。

『あの人の目はきよろ〳〵してをつて、をかしいやうだ』とか、『河童のやうに、何であんなに髮の毛

を延ばしてをるんだろ』とか云つたことは、かの女としてはまことに尤もであつた。その人はこちらと同様、世界の新思潮に觸れた神經過敏の詩人で、而も昔のミルトンやバイロンを忍びつつ、アメリカ歸りのハイカつた趣味を圓覺寺の森の中に發見するといふやうな變つた生活をしてゐるのだが、そんな消息の全く分らない女には、かかるうはツつらばかりの觀察が却つて無邪氣で適當な云ひ分だ。けれどもかの女が何事に當つても平氣なのは、どうしても、たツた一人の男を二三年守つてゐたばかりのものの態度とは受け取れない節もある。

藝者や濱町あたりの女を連れて遠出をしても、それが年の若いのであると、義雄ぐらゐの年輩者には隨分恥かしがつたものもある。義雄はそれが可愛かつた。お鳥もそれらと同じ若さでゐながら、さういふ可愛味を見せないのがこちらの疑問なのである。

どうせ、人のをつとでも構はず、かの女が暫時胡魔化してゐればいいと云ふ覺悟を持つてゐるなら――そして神田の同鄕人や炭屋の主人を胡魔化し損ねたのが事實であつたとすれば――賤業婦の心も同前で、こちらもさう正直にかの女を待遇する必要はないといふ迷ひが生じて來る。

『もう二三回おもちやにした後は、うちの下宿料をふいにしてやつて、追ツ拂つてしまはうか？』かうも渠は考へた。

が、探してゐたものが飛びこんで來たやうに、うまくわがふところに這入つた若い女を渠はさう

容易く棄てたくもない。まして鎌倉の夜の、他に人がゐなくなつた二階で、『本統に學校へやつて呉れる』と念を押した時のことを思ひ出すと、その優しい微笑をいつまでも續けてゐさせたいのである。

渠はかの女を信じて見たり、疑つて見たりしながらも、豫定通りの手續きを踏むことにして、先づ琴の師匠といふ小泉笛村を訪問し、女優志願者の件で迷惑を掛けさせられた詫び料として、渠に自分の今回の事情をすツかり承知させた。

義雄自身の家へは、すべてお鳥から事情を僞つて語らせた。ゆうべ目見えに行つたところは、口かけ口だからやめにしたが、義雄の世話で笛村の學僕になつて行くと。

『ぢやア、裁縫が琴に變つたんです、ね』と千代子は云つたさうだ。その言葉付きからして、聽く度毎に憎々しくまた毒々しく思はれて、お鳥はいつもなら自分の目をあげて睨むやうにするのだが、けふは、かの女もさうは出來ない弱みを感じて、

『はア』と、ただ下を向いたとのこと。

宿ぐるまではあとで分るから行けないと云ふ義雄の注意をおぼえてゐて、お鳥は通りがかりの車に自分と行李とを乘せて、麹町の永田町へと云つて我善坊を出たが、途中から方向を轉じさせて、義雄が先きへ行つて待つてゐる麻布の谷町へ來た。

通りに面した方が格子窓になつてゐる二階の六疊を借りて、お鳥にそこに落ち付くことになつたのである。
『蛇の穴を脱けて來たやうに氣がせいせいした、わ。』から云つて、まだころがしたままの行李にもたれ、かの女は義雄と相ひ對して坐わつた。
『僕もうちにゐるのは大嫌ひなのだから、これから、晩はここに止まることにするよ』と、こちらも亦氣が輕くなつた。
お鳥は渠のこの言葉を先づ不審がつた。別居すると云つたのだから、あの澤山の書物を持つてちやんと引ツ越すのかと樂んだのに、晩だけ來るとはどうしたつもりだと。
義雄はまたかの女に手輕く答へて、やがてはさうするが、向ふへ用事の手紙が來るし、突然諸方から執筆の依賴者もあるから、今のところ、毎日一度は行つてゐなければならないと云つて聽かせた。
その實、渠はまだ性質もよく分らない女と直ぐ家を構へるのも、物入りが多くなる上に不安心だし、よしんば、また家を持つても、神經の高ぶつてゐる千代子を納得させるまでは、いつ怒鳴り込んで來るか分らないと云ふ心配があつた。この心配のことも、渠はお鳥の氣をなだめる爲めに聽かせてやつた。

『ぢやア、あたい、詰らん。』かの女はすねて見せたが、義雄に促がされて、晩がたから一緒に煮焚きの道具を買ひにや、貸し蒲團を賴みに外へ出た。

　夕飯の代りに蕎麥屋へ行つていろんな物を喰つて歸つて來たが、義雄は酒臭い息を吹きながら紙入れをほうり出して、

『もう、金はそこにあるだけだ——それで今月中を賄なつて呉れないと困るよ。』

『いくらあるの』と云ひながら、お鳥は電燈の下に坐わつて中の物を讀んで見た。それからこちらを見て、たよりなげに、『十圓までないぢやないか？』

『そりやアさうだらう、さ——鎌倉行きで十五六圓も使つたから。』

『惜しいことをしたの、ね。』かの女は小首をかしげて、笑ひながら、『あれで衣物でも買ふたらよかつた。』

『また買つてやる、さ。』

『本統？』

『さう、さ。』

『でも』と、無邪氣な調子を改めて、『うちへも出すのだろし、あたいも學校へやつてもろたり、間代や米代も出してもろたり、そんなに出けるわけがないぢやないか？』

『そんな心配はするなよ。』卷煙草の煙りをかの女の顏へ吹きつけて、『おれはこれから一層奮發して何でも書く、さ。』

『書きさへすれば賣れるの?』

『さう、さ――それでも、お前』と云ひかけて、云ひ直し、『あなたを初めに紹介しようと思つた秋夢君のやうな賣れツ子ではないが――』

『ぢやア、あたい損したの?』

『損と云やア損だらう、さ。』

『換へてもらをか』と、お鳥も調子に乘つて來たので、こちらも微笑しながら、

『然し、もう、僕の物ぢやアないか?』

『ふ、ふん』と、かの女は顎をしやくつて目を細くし、わざとらしく横を向いた。

『どうして別れたのよ、云つて御覽。』

この夜、義雄はかう云ふ風にお鳥をすかして、どんな動機で小學教員と一緒になり、どんな理由で別れたのかを聽かうとした。が 鎌倉の途中でちよツと二三言、口をすべらしたと同じことばかりを繰り返して、詳しいことは決して語らなかつた。

『死んでもそんなことは云ひたくない。』かう云つて、かの女はしまひには不興な顏をした。

何か特別なわけがあるに違ひないと考へると、ます〳〵それぱかりが聽きたいので、翌日も午砲が鳴るまで一緒に寢てゐた上に、女をあまえるままにまかせて、午後の時間を二人で寢ころんで無駄ばなしで送つて、とう〳〵家へは歸らなかつた。

八

『今、君の細君が來て歸つたところぢや。』から云つて、笛村樂塾の主人に出迎へられ、義雄がお鳥を紹介しにその座敷にとほつたのは、もと大藏大臣某の屋敷の繁つた樹木から蟬の聲が涼しく聽える時刻であつた。

樂塾は三平坂の中腹に入口が附いてゐる。その坂から、山王の鳥居の方へかけて、可なり一直線に見通せるので、坂うへの學習院女子部も夏期休業である時節とて、人通りも少く、男が若い女を連れてとほるのが特に目に立ちはしなかつたかと義雄に思はれた。

『………』義雄の先づぎツくりしたのは、それで――自分達の連れ立つて來たのを千代子はどこかの蔭から見てゐて、直ぐ跡をつけて來はしないかと云ふ心配が自分の胸をどきつかせた。が、よく聽き糺して見ると、笛村が、

『今――歸つた』と云つたのは、實際は二時間も前、まだ日の暑いさいちうであつたのである。

『それぢやア、安心だが』と、義雄はそれとなく笛村のいつも事實を誇張する癖があるのをなじる調子であつたが、直ぐまた自分のことに歸り、『あいつも隨分執念深い奴だから、ね――』

『さうらしい、なア。』笛村は太つたからだの胸をあらはに突き出してあぐらをかきながら『まア、君に頼まれた通り云ふて置いたが――』

『それでいい、さ。』

『けれど、僕も困つたよ。』

『そりやア、然し』と、義雄は笛村にさうは云はせないつもりで、『女優問題で僕に迷惑をかけたのよりやア、まだましだらう。』

『ひやア、そいつを云はれたら！』あたまへ太いぶきツちよな手をあげた。それから、『けれど、なア』と、からだを一ゆすりして、左の手を右の膝にのせ、義雄の顏からお鳥の顏に目を移しながら、『見付けたら殺すと云ふてをつたぞ――もう感づいてをるやうぢや。』

『ふん、何もわたしが』と、お鳥は笛村から義雄の方に目を轉じ、『あんな者に殺されるおぼえはない。』

『そりやア、惡かつたら、ただおれのせいだらうが』と、義雄はまた目をお鳥から笛村の方に向け、『まア、當分は僕の云つた通りにして置いて吳れ給へ。僕もどこかに鬱忿を漏らすところがなければ

困るから、ねえ――

『さうだ、君もお父さんが亡くなつてから、大分人並みになつてゐたから、なア。』

『まだ丸二ケ月にもならんのに』と、お鳥ははたから口を出した。

『もう、大分奥さんらしいです、なア』と、笛村にからかはれて、

『ふ、ふん』と、かの女は鼻で笑つて、それでも恥かしさにう横を向いた。

『琴をおやりなさい。琴を。』

『へい――』

『そりやア、もう、そのつもりで來てゐるのだから、あすからちやんと敎へてやつて吳れ給へ。これは裁縫、裁縫と云つてるが、そんなことは田舍にゐての思ひ付きで、もし琴で一本立ちになれるなら、それでもいいぢやアないかと、僕も話してゐるのだ。』

『そりや、やれんことはない。』

『然し、これの天分があるか、ないか、調べて見なけりやア分らないから、そこは手ほどきを君にまかせたいのだ。』

『君の說に據れば、藝術には天分は入らん、努力ばかりぢやないか？』

『然しそこまで眞面目にはなれる女か、どうだか』と、義雄はお鳥と顏を見合せたが、さうかの女を

重んじてはゐないと云ふ目附を笛村に放ち、『僕はまだ分らないのだ。』

九

琴の爪を買つて貰つて、お鳥は毎日稽古に出かけるやうになつた。義雄も日に一度は自宅に歸つて、來狀や訪問者の様子を見るが、千代子と出くわしても、一言の口も聽かない。向ふも亦たじツと寂しく睨むやうな目を向けるばかりで、義雄が心配してゐたやうに突ツかかつて來る様子もない。が、それが何だか思ふまいとしても、かの『累』の恨み死ぬ顏までを思ひ出させる。

『まア、出來るだけそツとして置け。』かう渠は考へながら、こそ〳〵と家に歸り、こそ〳〵と家を出るのである。

然し笛村がしやべりまはつてゐるので、義雄の友人間では、もう、その噂さがぱツと廣まつてしまつた。

『お鳥さんはどうです』と、義雄は至るところで聽かれないことはない。

『ふん、ほんの一時のなぐさみ、さ。』渠も輕くは答へるが、兎に角、くろうとではないと信ずる若い女を左右してゐるのが、自慢の種ではないこともない。

『田村君は急に若返つたぞ』と注意したものもある。

村松と一緒に久し振りで赤坂亭へ行つて玉を突いた時、おごるから呼べと云はれ、義雄はボーイに手紙を持たせてやつてお鳥を呼び寄せたこともある。義雄の好きな女中は敵意を挾んでじろ〳〵かの女を見たし、ボーイやその家の家族はまたかの女の田舍じみたハイカラ風を冷評した。が、お鳥は二階の食堂に於いても、下の玉場に於いても、なか〳〵澄ましたものであつた。

『あんな大でこ〳〵のハイカラ女などよせよ』と、村松に蔭で注意された時も、義雄は心で、どんな美人でも、おのれの物にならないうちは、人と云ふものは冷笑するものだからと思つた。

最初に谷町へ尋ねて來たのは秋夢で――自分に周旋しようかとまで義雄が云つたのはどんな女だらうと云ふ好奇心からであらう。お鳥もそれと推察したばかりでなく、その人物が小柄過ぎるほどで、而かも身なりがちよツと見ては餘りよくないのを見て、勝ち誇つたやうな、また馬鹿にしたやうな態度を取つた。

主客が電氣のもとで、凉しい夜かぜを浴びながら、寢ころんでうち解けた話しをしてゐると、かの女も投げ出した足を時々ばた〳〵させて、聽いてゐた。

『友人には、誰れが來ても、餘り失敬なことをして呉れるなよ。』義雄は秋夢が歸つた跡でお鳥をたしなめると、かの女は頰をふくらして、だらりと横になり、

『あんな奴に何で遠慮してやるものか？人の顏をじろ〳〵見て、さ。』

『そりやア、初めてのことだから、さ。』
『初めてだツていけ好かない！』
『然し』と、義雄は坐つたままお鳥の腹をゑぐつて見るつもりで、『お前はそれでも行くつもりであつたぢやアないか？』
『そりや別な目的があつたから、さ。』かの女は案外感じの薄い笑ひを見せて、『學校へさへやつて呉れるなら、何もあいつやお前に限つたわけではない。』
『ぢやア、さうして置いて、さ』と、義雄もかの女を離れた方へからだを横たへ、肱まくらをして、向ふの顔を冷やかに見つめながら、『まだしもおれの方がよかつたのか？』わざと笑ふまいとしたのだが、渠はつい微笑を漏らしてしまつた。
『知らん、知らん！』お鳥も笑ひながらちよツとこちらの視線を避けたが、直ぐまたこちらを見て、『そんなおぢイさんなどいやなこツた――まだしも、あいつの方が氣が利いてる。』

『約束通り裁縫學校へやつて貰ふ――やつて貰ふ。』かう云つて、お鳥は琴の稽古に行くのを好まない。若しまた琴の稽古を續けるなら、いツそのこと、もツといい師匠に就けて呉れるやうにとせがんだ。もツといい師匠と云つても、そんな人に就けるだけの價うちがあるか、どうだかまだ分らない上に、

友人の笛村をさし置いての仕うちは餘り面白くないと義雄に考へられた。
『お前が全く琴に緣がないとしてしまつても』と、渠はかの女を慰めがてら、『どの學校でも、今は休暇中だらう。』
『夏期講習會が裁縫に關してもないことはない――やつて呉れ！やつて呉れ。』かの女は顏をしかめて、ひたへの上の方から橫じわを二三すぢ現はし、からだを義雄に摺りつけて、なかなか承知しない。
渠には、然し、どうせお鳥に金を掛けるなら、裁縫のやうな下らない物ではなく、渠自身の好きな藝術の道の一端にたづさはらせて置きたいと云ふ慾目もないではなかつた。
『そんな下らない學校よりも、習ふものはまだ外にあるだらうよ』と、渠はかの女をなだめつつ考へたことだが、何を習はせるにしても、先きに立つ物は金だ。琴を買ふとか、書物を用意するとか――身なりにしても、その儘では可哀さうだ――
ふと思ひ付いて、渠は溫泉へでも出かけたくなつた。と云ふのは、渠がいつも金に窮すると、旅行さきに於いて一か撥かの原稿を書き、それをあつかましいと思はれるほど無理强ひに友人のゐる雜誌社などへ賣り付けるのが常のやうになつてゐて、その友人等はこの手を
『田村がまた背水の陣を張つた』と言つて、渠のどんな原稿が誰れのところへ舞ひ込んで來るかと、ひやひやして待ち受けるのである。

渠はその手が餘り歡迎されないのを知らないのではないが、今回も、そんなことをして見なければ、どうも不斷通り一生懸命に執筆する氣になれないやうに感じて來た。それに、家の方を段々おろそかにするので、千代子が渠の隱れ場所を探り出して、いつぞ、その無言の恨みを破裂させに來るかも分らないと思ふと、暫らく遠方へ氣を拔いてゐる方がいいと云ふこともあつた。

　まだそればかりではない——渠は昨年の暮から今年の始めにかけて關西へ旅行した時、リーデルゴノサンを服用する必要のある病氣を受けて來た。その後、熱海へ行つたり、伊香保へ行つたりして、殆んど全く氣にしないほどになつたが、まだ全快したとは信じてゐないので、村松の勸めに從ひ、その故郷に近い鹽山へ一度入浴しに行きたいとばかり思つてゐたのである。

　で、渠はお鳥の機嫌がいい時を見計らひ、

『どうだ、まだ暑いのはなか／＼續くのだから、溫泉へでも行つて見ようか？』

『それも洒落てる、わ、ねえ。』かの女はにこ／＼して義雄の顏を見た。が、また少し考へ込んで、『でも、金があるの？』

『渡してあるのがあるぢやアないか？』

『これを使たら』と、またひたへに皺を出して、『あたいの喰べるお米が買へないだろ？』

『そんな心配にやア及ばないよ』と、ほほゑみながら、しツかりした決心を見せて、『向ふへ行つてか

ら仕事をどツさりしてやらア、ね。』

『では、行く！行く！』と叫んで、お鳥は飛び立つやうに喜んだ。

十

もう、暮れて行く甲州の山々――富士のいただきが先づ隠れる。その手前の一列が隠れる。そのまた手前の列が隠れる。

かう云ふ横に重なつた數列の連山がみんな見えなくなつて、目前に田とつづく眞ツ黒な森も無いほど、灰色の雨霧がかかつてしまつた。

鹽山といふ山は家の後ろで無論見える筈がないが、左りは笹子峠の山脈も薄らいで、宿の裏庭に近い笹藪ばかりが黒い。

右の後ろ手からは甲府の方へ走る山がぼうツとあたまが見えないおほ牛の脊のやうに横たはつて、その脊の骨ぐみだけは薄くしめツぽい輪廓が附いてゐる。

今しがたまで見えた廣い野――青い田――遠い正面の山ふところから掛けて、その麓まで昨年の水害の跡――赤禿げの山腹――白びかりの砂地――今年のまた出水――それをまだ湛へてゐて、朝日やゆふ日がきらめき映るのが、遠い地上の銀河のやうなおほ水の溜り――

から云ふものが目界から消えて、欄干に寄つて涼しい風を呼ぶ人の心にすべて引ツ込んでしまつた頃、義雄は明け放つた部屋の釣りランプのもとで、お鳥と一緒に晩餐を初めてゐた。海老屋と云ふ溫泉宿の裏二階で、甲州の一名物たるひどい濕つた風に時々ランプの光りを取られかけるのである。

今晩は珍らしく日本酒が一本膳にのぼつた。義雄は東京から佛蘭西の最も強い酒なるアブサントを仕込んで來て、そればかりをちびり〳〵やつてゐたのだが、ゆうべはどうした拍子か興に乘り、非常に飲み過ごした。その苦しまぎれにあばれ出し、お鳥だけでは手に餘つたので、宿の主人やおみかさんまでも手つだつて、みなから押し込められるやうにして無理に蚊屋の中へ入れられてしまつた。

『あすから病氣にでもなつて、書けなんだらどうする――やど賃も拂へやせんぢやないか？』から言つて、お鳥は不慣れな溫泉場に於ける旅の身ぞらを心配した。が、夜が明けると、義雄はけろりとして、ここへ來てからの定め通り午前六時には起きた。

それから、沸かした溫泉へ這入り、また溫泉の源水なる少しどろ〳〵した玉子の香ひがする冷の鑛泉をここへ來た目的の藥として飲み、室に歸つて朝飯を濟ませると、いつものやうに直ぐ机に向つた。

渠は原稿を書き出すと、そばにゐてルビを打つて呉れるお鳥のことも殆ど忘れたやうになつてしまう。女中が跡へ跡へと汲んで來る冷泉を思ひ出したやうに茶の代りに喫しながら、晩飯頃まで筆を積

ら仕事をどツさりしてやらア、ね。』

『では、行く！行く！』と叫んで、お鳥は飛び立つやうに喜んだ。

十

もう、暮れて行く甲州の山々――富士のいただきが先づ隱れる。その手前の一列が隱れる。そのまた手前の列が隱れる。

から云ふ橫に重なつた數列の連山がみんな見えなくなつて、目前に田とつづく眞ツ黑な森も無いほど、灰色の雨霧がかかつてしまつた。

鹽山といふ山は家の後ろで無論見える筈がないが、左りは笹子峠の山脈も薄らいで、宿の裏庭に近い笹藪ばかりが黑い。

右の後ろ手からは甲府の方へ走る山がぼうツとあたまが見えないおほ牛の脊のやにう橫たはつて、その脊の骨ぐみだけは薄くしめツぽい輪廓が附いてゐる。

今しがたまで見えた廣い野――靑い田――遠い正面の山ふところから掛けて、その麓まで昨年の水害の跡――赤禿げの山腹――白びかりの砂地――今年のまたの出水――それをまだ湛へてゐて、朝日やゆふ日がきらめき映るのが、遠い地上の銀河のやうなおほ水の溜り――

から云ふものが目界から消えて、欄干に寄つて涼しい風を呼ぶ人の心にすべて引ッ込んでしまつた頃、義雄は明け放つた部屋の釣りランプのもとで、お鳥と一緒に晩餐を初めてゐた。海老屋と云ふ溫泉宿の裏二階で、甲州の一名物たるひどい濕つた風に時々ランプの光りを取られかけるのである。

今晩は珍らしく日本酒が一本膳にのぼつた。義雄は東京から佛蘭西の最も強い酒なるアブサントを仕込んで來て、そればかりをちびり〳〵やつてゐたのだが、ゆうべはどうした拍子か興に乘り、非常に飲み過ごした。その苦しまぎれにあばれ出し、お鳥だけでは手に餘つたので、宿の主人やおみかさんまでも手つだつて、みなから押し込められるやうにして無理に蚊屋の中へ入れられてしまつた。

『あすから病氣にでもなつて、書けなんだらどうする――』やど賃も拂へやせんぢやないか?』から言つて、お鳥は不慣れな溫泉場に於ける旅の身ぞらを心配した。が、夜が明けると、義雄はけろりとして、ここへ來てからの定め通り午前六時には起きた。

それから、沸かした溫泉へ這入り、また溫泉の源水なる少しどろ〳〵した玉子の香ひがする冷の鑛泉をここへ來た目的の藥として飲み、室に歸つて朝飯を濟ませると、いつものやうに直ぐ机に向つた。渠は原稿を書き出すと、そばにゐてルビを打つて呉れるお鳥のことも殆ど忘れたやうになつてしまう。女中が跡へ跡へと汲んで來る冷泉を思ひ出したやうに茶の代りに喫しながら、晩飯頃まで筆を續

けた。

『けふは思つたより書けた、わ、ね』と、お鳥はにこ〳〵して出來た原稿の枚數を數へながら、一杯の慰勞がないのも氣の毒だと云つて、強いアブサントを隱した代りに正宗一本だけを注文したのである。

『けふはお前にも飲ませるぞ。』

『あたい、そんなからい物などいやだ。』

『からい物か——一度期にぐいと飲めばいいのだ。』

『でも、醉ふたらどうする？』

『ふむ、どをする！』義雄はお鳥のかみがた口調を眞似て見て、成るほどから佛蘭西風に發音すれば、同じ言葉でも東京の男子が英語風に用ゐる力點、乃ち、アクセントは變はつて、如何にも女らしい用語になるわいと合點した。同時に、かの女の眞似る東京振りはすべてそのアクセントがかみがた的なのを冷かすつもりで、『醉うたら、面白いぢやないか』と、優しい調子につれてわざと優しく首を振つた。かの女がいやな顔をしたのを見て、直ぐ元の聲になり、『ゆうべはおれが看護して貰つたから、今度はおれが看護してやる、さ。』

『いやアなこツた!』

こんな話でもするのが、一日のうち義雄が氣を休める時間である。晩餐が濟むと、また筆を執つて夜中の十二時まで、時によると、二時か三時までも續けなければ氣が濟まない。

渠には、お鳥が何んで酒をさう嫌ふのか分らない。第一、その臭ひをかぐのさへいやだと云ふ。見かけによらず、神經の强い女だと云ふことは、コツプに注いだ冷泉の臭ひがぷんと鼻へ來たので、それから決してそれを口にしようとしないのででも分つた。酒とは違つて、この鑛泉の水が果して人の信ずるやうな効能があるものなら、渠はかの女にも豫防的用意の爲めに飮ませて置きたいのだが、いくら勸めても飮まうとしない。

然し酒の方は、ただ嫌ひだといふばかりでなく、何かそれでかの女が懲りたことがあるのではないかといふ疑ひが、義雄の胸にはわだかまつてゐた。

『お前、前の人と一緒になつたのにやア』と、義雄は猪口を自分の口へ持つて行きながら、お鳥の顏を見て、『餘り好かない男であつたが、酒か何か飮ませられたあげく、無理强ひに納得させられたのぢやアないか?』

『そんな阿房らしいことはない。』お鳥は下らないことをと云ふやうな顏をして、自分の膳の前にちんとかしこまつてゐる。

『阿房らしいと云やア阿房らしいが、そんな場合がないとも限らない。男が惡いことをしようと思やア、女をおだてて酒に醉ツ拂はせるほどのことは何でもない、さ。』

『自分ぢやアあるまいし』と、かの女は義雄をうるささうに見詰めた。自分とはかの女がこちらをさして云ふので、お前とも呼びつけに出來ず、さうかと云つて、またあなたとは氣が引けていひにくいところから、さういひなして來たのだらう。『世の中にはそんな人ばかりゐやせん。』

『ぢやア、お前の亭主はよかつたか？』

『さう、さ。』わざと取り澄まして再びそのことでくど〳〵根問ひされるのを避けるらしかつた。

『ふ、ふん！』義雄も鼻であしらつた切り、そのことには觸れずに、『だが、ね、お前男が二人ゐれば、女を醉はせないでも、力づくで自由にしようと思やア、わけはないよ——ひとりとひとりでは六ケしいかも知れないが。』

『あたいは、さうは行かん、さ。』得意さうに微笑しながら、『柔術を知つてるから。』

『へい——どこで習つた？』

『お父さんと北海道に行つてた時、さ。——小學校の往き戻りに徒らする男の子があつたから、つかまへて一間ほどほうり投げてやつたら、あたまから雪の中へ突きささつて、をかしかつた。』

『えらい、ねえ——それに、免じても一杯お飲みよ』と、義雄は猪口をさす。

『いやア！』かの女は顏をしかめ、兩手を後ろに隱して、からだを振つた。その時女中が給事にやつて來たので、渠は調子に乘つて、なほ笑ひながら、
『お飲みといふに』と、立ちあがつて、猪口を持つて行つた。
『いやア、いやア』と、目をつぶつて、鼻にまで皺を集め、からだを一層振つてゐるところを、渠は女の首に左りの手をかけて、無理にその口へ酒を注ぎ込まうとした。
お鳥は怒つて、その酒をぷツと霧のやうに吹き散らした。

『僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたが、たづねて行つて見ると、いろ〳〵取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出來ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、しろうとの家に置いて貰ふことになつた。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人抱へてあるので、時々客があがつてゐる時は、隨分さう〴〵しかつた。然し僕は三味線の浮き〳〵した音色を嫌ひではないから、却つて面白いところだと氣に入つたのだ。』
かう云ふ書き出しで、義雄は一二年前國府津で避暑してゐた家の隣りの藝者吉彌と關係した實歴を、自叙傳的な小說にしてゐるのである。

日に十枚進む時もあれば、二十枚の時もある。さうかと思へば、いくらあせつてもたツた三四枚しか出來ないこともある。然し渠自身のやつたことを充分に靜觀してゐるつもりだから、思ひ切つてあつた通りを書いて行く。あつた通りと云つても、心內の現象を外形的に出た物にしたり、外形に出た感情を內心でばかり取り扱つたりする遣りくりは無論澤山あるのである。お鳥はそれを待ち遠しさうにして、そばに控へてゐて、出來る原稿を片ツ端から讀んでしまう。

そして、渠が吉彌に女優になつて呉れろと賴んだり、吉彌の母を東京から呼び寄せて、私かにあと始末の相談をしたり、あやふやな女よりも矢張り女房の方がいいと思ひ出したりするところを、かの女は現在の自分に利害關係があるかのやうに考へた。

そしてまた、あんなことをいつたの、こんなことを爲たのと一々念を押す時の目附きには、好奇心以外の或物も加はつてゐた。

『どうだ、うまいだらう』と、義雄が突き出した紙面に、吉彌が、娘を鈍い腕だとたしなめた母の前で、『あたいだツて、たましひはあらア、ね』と反抗しながら、主人公の膝へ來てその上に手まくらをして、『あたいの一番好きな人』と、渠の顏を仰向けに見あげるところがあるので、

『ふん』と、お鳥は鼻であしらつて、それを受け取らなかつた。

そして、また、

『僕は十四五年前に、現在の妻を貰つたのだ。僕よりも少し年上だけに不斷はしッかりしたところのある女だが、結婚の席へ出た時の妻を思へば、一二杯の祝盃に顏が赤くなつて、その場にゐたたまらなくなつた程の可愛らしい花嫁であつた。僕は今、目の前にその昔の妻のおもかげを見てゐた』と記されたのを見た時は、お鳥は自分に對しても男がこんな反逆心を出すことがあるにきまつてゐると考へ及んだのであらうか、

『………』物も云はず、顏色を變へて沈み込んでしまつた。

然し、また、

『寛恕して頂戴よ』と云つて、身を投げて來た吉彌を主人公が突き拂つて席を立ち、さん〴〵に愛相づかしを云ふところに至つて、お鳥は、

『氣味がえい、氣味がえい』と小踊りした。ところが、また、直ぐその跡へ、

『怒りはしたものの、僕は涙がこぼれた。これが少しは吉彌の心を動かすだらうと思つて、これ見よがしに、目を拭きながら座敷を出た。出てから、ちよッとふり返つて見たが、かの女は分つたのか、分らないのか、疊に肘をついたまま下を向いてゐた』と來た。

『………』お鳥は、執筆者が却つて無關心の狀態で微笑しながら向けた顏を、じッと睨みつけるやうに見詰め、頰には且忿怒と恥辱との色までも赤く染め出して、叫んだ、

『馬鹿おやぢ！意久地なし！泣き味噌！助平――そんな黴毒藝者などが矢張り可愛かつたんかい！』
義雄は筆の進まない時、どういふ風にしようかと考へ込みながら、耳かきで耳をほじくるのが癖になつた。
『そんなにほじくるとよくないよ』と、お鳥が心配するほど頻りになつたのだが、さうしてゐるうちに考への緒口も段々明いて來る氣がするので、度々思ひ出しては、筆の代りに耳かきを執つた。それが自分ばかりのをするのでなく、氣分によれば、お鳥の耳をもいやと云ふのを無理に掃除してやることもある。
それが爲めに耳の奥を痛めたにも由るさうだが、おもには過度に神經を疲勞させたのが原因で、一方の耳に熱を持ち、とう／＼米嚙みのあたりまで脹れた。汽車で甲府の病院まで行つて濕布をして貰つたが、醫者は細君があるなら、それを近づけるのを暫らく見合せ、何にでも神經を勞することはすべて行けないと命令した。然し義雄は筆だけは執つてゐなければならない必要を忘れられなかつた。外出と云つては、甲府へ行つたこと位で、殆んど全く自分の室に引ッ込み通しで來た。原稿の枚數はずん／＼重なつて行つて、その小說の表題もいよ／＼『耽溺』ときまつたほどに形を備へて來たが、お鳥のルビ附けはなか／＼はか取らない。

かの女は先づ義雄がどんな小説を書くのかといふ好奇心を失つてしまつた。次ぎにまた一枚に付き五錢づつ貰つて帶を買ふその足し前にしようと云つてたルビ附けにも飽きが來たのである。兎に角、一緒になつた男に、つい一年か一年半前こんな事實があつたのかと考へて、憎いやうな、妬ましいやうな、馬鹿らしいやうな、詰らないやうな、氣をその胸にかはるがはる起してゐたらしい。

それに、どんな立派な溫泉かと思つたら、穢い穢い湯槽にどろ〳〵した厭なにほひの冷泉を沸かせるのであつた。また、殆ど毎日のやうにおほ雨やらおほ神鳴りで、正面に見える富士が滅多に見えないほど欝陶しい日が續く。且、また、入浴客と云つたら、豫想の外で、殆ど田舍のおやぢや婆アさんばかりで――樂んで來た甲斐がかの女になかつたのだらう。

かの女の考へでは、宿には同じ年輩の立派な娘が多く來てゐて、それらと仲よく遊んだり、話し相ひ手になつたり、また自分のハイカラな姿をうらやませたりしたかつたのだらうが、下にも二階にも、裏にも、おもてにも、そんな相ひ手は一人もゐなかつた。

隣りの明いた室へ、たまに一晩どまりの客はあるが、工女に募集されて行く途中で、その募集者に自由にされる女であつたり。どこか近所の驛から作男と密會しに來た細君であつたりする。

たまにちよツと十人並みのが來たと思へば、どこかの裁判所出張所の書記といい仲になつてゐたのだが、向ふの親が許さないのを恨み歎いた女だ。それをその土地の坊さんが氣の毒がつて、女の故鄕

まで連れて行つてやるところだが、とまつた晩に、その二人は出來合つたやうであつた。

　また、田舍の物持ちの細君らしい四十五六の、顏の見ツともない婦人が來た。これも亦怪しいものだと義雄等が云つてゐるうちに、甲府の醫者に違ひないと云はれる男がやつて來た。

『あんなお婆アさんでも色けがあるんだ、なア』と、お鳥はその夕がた、義雄と横になつて、無駄話しをしてゐる時に大きな聲を出した。無論、隣りの客は湯へ行つて留守だと思つたからである。

『面白いぢやアないか、じツとしてゐて、いろんな種が拾へるのだから』と、義雄は答へた。

『何が面白いもんか、こんなとこ！雨や神鳴りばかりぢや。』

『さうか、ね、』と輕く受けて、渠はかの女が二三日前

『髮の自慢を仕合ふ相ひ手もない』と歎息したのを思ひ出した。そして天井を見詰めながら、

『まア、來たものは仕方がない、さ。』

『いやだ、いやだ！』かの女もうちはを持つた手までもあふ向けにだらり延ばして向ふを向き、『早う東京へ歸りたい――歸りたい！』

『君の書齋と家族の寫眞が雜誌に出たので、氣の毒にも、君の評判が女子大學で俄かに下落したぞ。あんな子福者であつたのかと云ふので、さ。君の詩などから推察してまだ二十四五までの色男だと思

はれてゐたらしい。呵々。』

かう云ふハガキが或匿名の友人から舞ひ込んで來た。如何に自分も、いやな物でも、ある物があるのは事實で、何と云はれても隱すことは出來ない、また隱す必要もない。と、義雄は思つたが、自分の評判がそれが爲めに落ちたと聽いては、餘りいい氣持ちでもなかつた。それに、この頃になるに從つて、渠は自分のやがて四十歲になると云ふことが、老耄その物が近づいたやうに考へられて、いやでいやで溜らないこともある。

『一體、誰れがハガキなどに書いて來たんぢや』と、お鳥が眞ツ赤になつて怒つた時は、ちよツとそののぼせ氣味に釣り込まれかけたが、かの女に別な理由があつた。『宿のものが、もう、見たにきまつてる！きまつてる！』

かう云つて、手にあつたハガキを義雄に投げつけ、泣き出しさうに顏をしかめ、疊に坐わつたまま、兩ひぢを脇に縮め、からだ全體を燒けにゆすつた。

『氣違ひ！見られたツて、いいぢアないか？』義雄はその理由を感づいてゐないではないが、今更ら見られたことを取り消すわけには行かないと覺悟して、わざと平氣で手摺りにもたれたまま、椽がはに足を投げ出してゐた。

『いいことはない！』かの女は恨めしさうにこちらを見詰めながら、息のはずむを抑へ〳〵、『あたい

が――目かけか――何ぞのやうに――思はれて――しまうぢやないか？』

『思ふものにやア思はせて置く、さ。』

『あたいが詰らん！』

『そりあア』と、落ち付いて、『お前がまだ世間に對する浮氣ごころがあるからで――世間のものが何て云つたツて構うものか、ね。お前を愛するおれにさへしツかり手頼つてゐりやアいい。』

『そんなうまいことばかり言ふても、口さきばかりだから、あかん。』

『何も』と、ほほ笑みながら、『口さきばかりで胡魔化したことはないよ。』

『ある！ある！妻子と別居すると言ふて、別居もしやせんし、あたいを學校にやつてやると云ふて、ちツともその手續きをして呉れせん。』

『そりやア、まだ夏期休暇中ぢやアないか！』

『休暇中から手をまはして置けばえい。』

『大丈夫――そんな心配はすな。』

『へん！』馬鹿にしたやうな、また納得したやうな聲を出して、お鳥はあごをしやくつた。

『いやな辯だ』と、義雄は心で卑しみながら、机を立つて來て、また机の前に坐わつた。

お鳥はそのまましツと考へ込んでゐたが、指さきに衣物の褄を巻きつけながら、少し低い聲で、

『ただざへ皆から旦那さんとは餘り年が違ひ過ぎると云はれてるのに、そんなハガキを見られては、あたいの顔が立たん。』

『いい顔だから、ね！』義雄が筆を持つたままその方へ首を向けると、

『馬鹿！』と叫んで、かの女はこちらの繃帶した耳のあたりをぴしやりと叩いた。

『よせ！』義雄は顔を引ツ込めて、痛い耳を押さへ、また原稿に向つたが、此間から少し氣になつてゐたことを思ひ出した。『おれとお前とが餘り年が違ふと云ふのも、下の黑ん坊におだてられたのだらう？』

『違ふ！』お鳥は燒けにからだをゆすつて否定した。

『でも、ねえ――』

『違ふ、違ふ！』

下の黑ん坊とは、義雄がお鳥をいやがらせる爲めにわざと誇張した譬へで、實は東京の下谷から保養に來てゐる或會社の職工がしらだとか云つてる人だ。義雄もちよツと會つて見た。色は黑いが、職工などには似合はずおだやかで、優しい言葉使ひをしてゐる。

所在なさに、雨の晴れ間をお鳥は裏庭へ出て、築山や樹木の間をよくぶらついた。背のすらりと高

いその姿を二階から見ると、顏の缺點などは見えないので、義雄もあの可愛い女が自分の物になつてゐるのかといふ風に、暫らく默つてながめてゐたこともある。

四五日前も、渠は高い欄干に倚つて下へ聲をかけ微笑しながら、

『どこのお孃さんでいらツしやいますか』と云つて見た。お鳥は氣づいたが、それには答へないで、おほ眞面目の氣取つた態度で、丁度こちらの立つてゐた下に當る室に向ひ、緣に添つて流れる小川を隔てて、

『へい、ありがたう』と云つた。まア、お這入りになればどうですとか何とか云ふ聲が流れの音にまじつて聽えたとは義雄も思つたので、初めて下に客があるのに氣が付いた。然しお鳥はその以前から言葉をまじへてゐたらしい。その後もかの聲が宿のもの等と一緒になつて、下の座敷で夜遲くまで話し合つたり、笑つたりする聲が聞える度に、義雄は氣が引けて執筆の邪魔になつた。

『あの男のことを云ふと、なぜ、さう躍起になるのだ？』

『下らないことを云ふから、さ――燒き餠など、人が聽いたら、見ツともない。』

『ぢやア矢ツ張り、おれのいふことは聽かないで、夜おそくまでも話し込んでゐるつもりか？』

『さう、さ！』ふくれツ面をして、『別に話し相ひ手がないから。なにも、あたい獨りこツそり行くのではないし、女中や小僧さんも一緒になつて話してるのだから――』

『いや、獨りの時もあるやうだぜ。』
『無いツたら、ない！』その無謀な叫びをこちらへ押し付けるやうに目をしツかりつぶつてまで見せた。
『さうか』と、わざと疑ひが晴れないやうな返事をしたが、これ以上かの女を怒らせるつもりもなかつた。かの女の白い肌につつまれた神經がこの頃非常にいら〳〵して來たのを知つてゐるからである。

その夜、褥に這入つてから、
『下の人はあさつて歸ると云ふてるけれど、自分も歸りたうないか』と、かの女は仰向いたままこちらに聽いた。
『さうか、歸るのか』と、こちらは云つたばかりではなく、原稿はもう直きに書き終はるが、それを東京に送つて、金が來るまでは歸れないと、渠は答へた。『然し折角知り合ひになつたのに』と、蚊帳を透して、天井を見つめながら、『もう歸るのでは、お名殘り惜いやうだ、ね。』義雄も原稿が終ひになつて來たと云ふ氣のゆるみが出たので、且、耳の張れが濕布をしてゐても一向に直らないので、早く歸京して、知り合ひの博士に見て貰ひたいやうな心にはなつてゐた。
『あたい、あの人に連れて歸つてもらをか？』

『それもよからうよ。』渠は冷淡にあしらつてゐると、
『元の人に似てる、あの人は。』お島は嬉しさうにねずみ泣きのやうな聲をして、こちらをじらし出した。
『どこが、さ？』渠は急にかの女の方へ向いた。
『どこが似てゐるの？』
『…………』
『云つて御覽、どこが、さ？』
『どこでもえい！』
『ねえ』と、すかすやうにして、然し冷かしの意味を含めて、『あの色の黒いところがかい？』
『そんなところなもんか？』かの女はからだを振つた。
『ぢやア、瘦ツこけたところがか？』
『そりや、少し瘦せてた、さ。』
『あのきよと〳〵した目玉もか？』
『違ふ！』
『ぢやア、あの高い鼻は？』

『知らん！』

『あのこけた頬は？』

『知らん！』

『それぢやア、分らねいや』と、とぼけた風で、『痩せてるのだけに惚れ込んだのかい？』

『何も、惚れてやせんぢやないか？』

『さうか？ぢやア、まア、似たところが嬉しかつたと云ふだけか？』

『へん、お前の知つたことかい？』

『なるほど、ね』義雄は冷かして受けながら、下の座敷の樣子が何か聽こえて來るかと耳を澄ますと、雨に水嵩の增した小流れの音がちよろ〳〵としてゐるばかりだ。その流れを隔てて、お鳥があの男に氣取つた應對振りをしてゐた時のことが浮んだ。また、あの時と今とは數日しか違はないが、その間に氣候が變化して、夜になると、もう、少し寒いやうな氣がするのに思ひ付いた。『少し寒くなつたやうぢやアないか？』

『さう、さ――ぐづ〳〵してたら、甲州では直ぐ秋だと皆が云ふてた、さ。』

やがて、どこかの庭鳥が鳴いた。すると、またほかの鳥もそれに應ずるのが、二三ヶ所から聽えた。

『もう、夜があけかける、ね。』

『それだから、いやになつちやう――おそくまでも、晝間中でも、勉强するのはえいが、あたいを喜ばせて吳れようとせんのぢやもの。』
『然し、可愛がつてゐるぢやアないか？』
『それが噓としか見えん。』
『そんなことはない、さ。』
『ほんとは、なア』と、かの女はほほ笑みながら、『目のきよろりとしたところはお前に似てるけれど――』
『へえ――』
『冷かすんなら、いや！』
『冷かしやアしないよ。お云ひ。』
『鼻と顏の樣子が誰れかにそツくり、さ。』
『なるほど――さう云ふ男をお前は好きなのか？』
『好きでも、何んでもない』と、恥かしさうにした。
『まア、お待ち――それで、なぜ別れたの？』
『燒き餠燒きで、人をぶツたり、蹴ツたりするから、さ。』

『そりやア、ひどい、ね。』
『それに、どすぢや云ふので、兄が籍を入れることを承知しなかつた。』
『どすツて？』
『らい病のことを紀州ではさう云ふてる。』
『ぢやア、矢ツ張り、くツ付いたのだ、ね。』こちらは急所が握れたと見た。
『あたいからくツ附いたんぢやない。』
『向ふからでも、つまり、おんなじこと、さ。』
『でも、あたいが兄のとこから學校へかよてた時、兄の友達だから時々遊びに來てた人ぢや。』
『然しお前と一つの學校を教へてゐたのだらう？』
『さう、さ――一度、ほかのものがみな留守の時に來て、寫眞帳など見せたら、あたいのを一枚拔いて持つて行つたことがある。』
『その時、出來てしまつたのだらう？』義雄のあたまには段々その男の樣子が浮んで來た。
『違ふ！』かの女は笑つて否定しながら、『まだ父が重病でも生きてたから、よく相談して見て呉れと云ふただけ、さ。』

『分るものか——然し、父は承知したのか？』
『父は承知したけれど、兄が許して呉れなんだ。』
『それで、とう〳〵待ち遠しくなつたのか？』
『でも』と、微笑して『兄は頑固な人だから。』
『兄は兄としても、第一、小學校でやかましかつただらう？』
『だから、あたいが辭職して、その人と家を持つた、さ。』
『どんなところに？』
『人の二階であつたけれど、町はづれの海の見えるとこで、なか〳〵景色がよかつた。』
『そこで乳くり合つてゐたのだ、な——それにしても、二年間も一緒にゐてどうして別れた？』
『兄が承知しないと云ふてるぢやないか？』
『どんなに戸主が頑固だツて、本人同志が好き合つてゐたらいいぢやアないか？』
『では、自分が田邊のやうなとこへ行つて御覽。小學教員などをして、あんなとこに一生暮す氣になるか？』
『そりやア、さうだらう、ね。』義雄はかの女の云ふことも尤もだと見たが、この位の低い程度の女として都を憧憬して來るのはそも〳〵むほん心があり過ぎると思つたので、『然し、その跡に殘つた教員

が可哀さうぢやアないか？』
『そりや、泣いてた、さ』と、得意さうであつた。『あたいが汽船で出發した日の朝まで、一と晩中おめおめと聲を出して泣いてた。下の人に聽かれても、見ツともなかつたぢやアないか？』
『それで、歸つて來いと云つては來ないか？』
『一度來た、さ。』
『いつ？』
『鎌倉から歸つて見たら――けれど、返事をやらなんだ。』から云つて、お鳥は、疑ひ深い而もその疑ひがきツと本當だと云つてるやうに語つた。その男は、もう靜子といふ女教員と一緒になつてゐるに相違ない。歸れといふ手紙は先づ靜子からよこさせてこちらの腹を探つて置いて、もう大丈夫と思つたから、男から申しわけに今一度思ひ返して呉れろといつて來たのだ、と。そしてますます神經が冴えて來たかして、『あのどすめ！人を馬鹿にしてるぢやないか――自分は元からその女の機嫌など取つてをりながら、あたいがちよツとでもほかの男と話しでもしてると、直ぐ燒き餅を燒いて、二階では下の人に聽えるから、あたいをそとへ連れ出して、何ぢや乎ぢや責めてた。』
『可愛かつたからだよ』と、義雄は自分もしさうなことだから、自分を辯護するやうに答へた。そしてここは山なかだがと考へながら、『そのそととは海べだ、ね。』

『でも、あの女は、もう一生、小學教員のおかみさん、さ――あたいはこれでもどんなえい人の夫人になるかも知れん。』

『おれの夫人なら、いいぢアないか?』

『へん!』あざ笑つて、『お前のやうな貧乏なおぢイさんには、あたいのこの顔に免じても、惜し過ぎる。』

義雄は、お鳥のにこついてゐるのを無邪氣のやうだが、うぬぼれにも、この顔を看板に何か出世が出來るとして、實際、再び東京へ出て來たのかと思ふと、いつかもさうしたこころもちになつたと同じやうに、吹き出してみたいほどをかしくなつた。

然し義雄は、お鳥の眞ツ白な肌のにほひに接してゐる間は、かの女の氣儘も缺點もいやなところも、すべて忘れることが出來るのである。

その夜は、どうしたものか二番鳥、三番鳥が鳴いても、二人とも寢つかれなかつた。義雄がかの女をすかして田邊の話しの殘りを云はせたり、此間からの雨でまた去年のやうな山津浪が來るかも知れないといふ評判を語つたりしてゐるうちに、夜が明けてしまつた。

便所へ行つて來てから、再び枕に就くと、義雄はお鳥の話しから、そのをつとであつた人の怒つた

り、泣いたりしたと云ふ人物や境遇を想像して見ながら、ぐッすり寢込んでしまつた。すると、夢に月夜の海濱でお鳥が一人の男と頻りに喧嘩をしてゐる。その男が教員だと思つてゐると、いつの間にか、仲直りをして職工に變つてしまつて、睦じさうに散歩する二人の影が砂の上にはッきりと曳かれた。

　こちらの二人が目のさめたのは晝過ぎであつた。その翌日はまたおほ雨で、ひどい稻光りと神鳴りとがまじつてゐたが、下座敷の職工がしらは出發した。去年のやうな事件があつてはと氣がせいたのだらう。

『あんな短い保養で、どんな病氣だツて直るものか、ね？』

『でも、いのちが惜しかつたら、どうする？』

『その時アその時、さ。』かう云つたが、義雄はこのやうに雨の多い土地のことや、現在もどん／＼降つてゐて、裏の小川があふれ出したことなど思ひ及ぶと、甲州一體に於ける去年の大洪水の新聞記事や、汽車の窓から實見することが出來ると云ふ悲慘の跡を、晝間でも戶を締めて引ッ込んでゐる室內で再び考へないではゐられないのである。

　鐵橋の破壞。田地、道路、家屋、人畜の流出。山麓のすべり出し。大岩石の移轉。川流沼澤の滅却、奇變——笹子トンネルの向ふへ越えたところには、その高さ十間ほどもあるおほ岩が、川でもないお

ほ川あとの眞ン中へ、或神社の流れ出たのともろ共に驚くほど無造作にころがつてゐるさうだが、それは二人とも夜とほつて來たので見ることは出來なかつた。

また、或郵便局長は、その山津浪だと聽いて、直ぐその妻子のからだにその氏名を縫ひつけかけたが、そのひまさへも無く、谷を破つて溢れて來た水は、猛烈な響きと共に、その家族ばかりではなく、すべての家も田地も村も川も、またたく間に、すべて卷込んでしまつたと云ふ。

この鹽山は無事であつたが、歸り道を斷たれた入浴客の食料までが不足になつてしまつたので、心配性の人々は汽車の不通なのにも拘らず、危險なトンネルをくぐり拔けて、途中まで歸つて見たさうだ。

『あたい早う歸りたいなア。』お鳥はおほ稻光りのひどい屈曲が雷の直鳴りと共に雨戸を漏れて這入つたのにおびえながら、『若し去年のやうになつて、歸ることがでけんし、金も來ないと云ふことになつたら、どうする？』

『さう心配するなよ。』

この間にも、義雄は原稿の最後の方を書いてゐた。

やがて空はけろりと機嫌が直つた。女中が來て戸を繰り明けるに從ひ、義雄はぱツと吸つた卷煙草の煙りのこもつたのも消えて行つて、お鳥の心配さうな顏も晴れて來た。

氣が付くと、お鳥は一枚の名刺をいぢくつてゐる。
『歸つた黑ん坊のだらうが』と、義雄は少しむかついて、奪ひ取りの手を出しかけた、
『そんな物アうッちやつてしまへ。』
『でも、お前をいやになつたら』と、かの女はその名刺をとられまいとするやうにかばひながら、然しほほ笑んで、『また尋ねてやるかも知れん。』
『そんなさもしい考へは、うそにも起すものぢやアありません。』渠は人を敎へるやうな眞面目な態度になつた。

十一

『名產の葡萄が、もう、充分喰へるやうになりましたぜ』と云つて、宿の主人が一と盆自慢さうに持つて來た日に、『耽溺』の原稿は郵便局へ渡された。
どうせ、長くなるとは豫期してゐたから、初めから雜誌を當てにせず、單行本にするつもりであつた。で、東京出發前にちよッとその意を通じて置いた出版屋へかけ合つて貰ふやうにと云ふことを手紙に書き添へて、或友人へ送つたのである。
若しこれの談判が作者のゐない爲め、また他の理由で、手間取つては困ることになると思つて、別

にあひまく〵に書いた雜誌向きの短篇も、既に東京へ郵送されてゐるが、ぐれ違ひのない爲め、なほ二三の小論文も書くつもりでゐる。でも、兎に角義雄は一つの大きなおも荷をおろしたやうな餘裕が出來た。

『少しはあたいを連れてどこか散歩して吳れたらえいぢやないか』と、お鳥に促されて渠は一緖に宿を出た。直ぐ田圃の方へ行かうとすると、かの女は微笑しながら、低いが決心した聲で、『人のをる方へゆこ。』

『………』その意味は義雄によく分つてゐた――かの女は東京にゐた時も同じだが、自身を人に見られて、ハイカラさんだとか、別嬪だとか、いい奧さんだとか、いろいろ賞められたり、冷かされたりして見たいのである。

かの女は澄まし込んで義雄のあとから付いて來て、骨つぎやの看板を讀んで見たり、細工やのくり拔きおもちやを見たりした。橋のところでは、此間まで川ぷちを崩してせツせと新らしい鑛泉を掘り拔いてゐたのが出水の爲めにさんく〵になつた跡を、立ちどまつて、暫らく見てゐた。

ちよツとした坂の、水で掘り崩れて大きな杉や檜の木の根が現はれてゐるのを登ると、氷屋がある。葛餅屋がある。宿屋、藥り屋、床屋、八百屋、時計屋などがある。葡萄ばかりの安賣り店もあるが、酸ツぱさうなのばかりで、まだうまいのはなかつた。

時計屋で水晶細工を並べたところがあつたので、そこへ立ち寄つて、いろんなのを見せて貰つた。鹽山の奥から掘り出して來るので、白水晶、黑水晶、むらさき水晶、草入り水晶などの置き物や印材がある。草入りのうちには、大抵、小さい薄の穗のやうなのが這入つてゐるのだが、

『これ買うてお呉れ』と、お鳥が義雄に出した印材には何百年か以前の水が包まれてゐて、位置を換へる毎に、その水があツちへころりこツちへころり、動くのである。それはなか／＼價が高いので買へなかつたが、むらさき水晶の小材にお鳥の姓情水を刻して貰ふことにして、そこを出た。腹具合が惡いと云つたお鳥は、一番大きさうな藥屋でヘルプを買つた。義雄はまた筆を買つた。

たツた一すぢの通りは直きに別な通りにつき當つた。それを左りへ行けば直ぐ鹽山ステーションで、片がはは桑畑、他の側の家並みは多く飲食店で、ところどころの二階からはあやしげな女が首を出してゐた。三味線の音も聽えた。

この通りをもと來た方へ出らないで、眞ツ直ぐに少し行くと、人家は盡きてしまう。

『どうだ、滿足したか？』義雄はお鳥を返り見た。

『みな、あたいを見てた、わ』と、かの女は喜んでゐた。

それから、稻の間を拔けて、鐵道線路にのぼると、靑い田を隔てて、向ふに自分らのゐる海老屋の裏二階が見えた。

『誰れかまたちごたお客が來たやうだ』と叫んで、お鳥のいい目はあの二階に立つてゐるのが小僧でもない、女中でもない、宿の主人やおかみさんでもないと嬉しがつた。

『そんなに他のものが戀しいのか』と云つてやりたかつたが、義雄はさし控へて線路を向ふへ降りた。そして、かの女と手を引き合ひながら、また稻の間のあぜ道を縫つて歩いたり、筆の軸の長さほどもない小幅の流れの小さい田螺を――お鳥の毎年起きる脚氣の藥りだと云ふので――拾つて見たりして、宿へ歸つて來た。鹽山から富士連山の麓まで、平野は一面の青田だ。そして、その稻穗草がどこまでも涼しい風に目ざましい綠りの色を浪打たせてゐるのが、お鳥と手を連ねた義雄の心に如何にも深く若々しい感じを湛へさせた。

それを海老屋の裏二階から見渡すと、宛で瑠璃色の海だ。そのおもてへ逆しまに、南の空にそびえて無言、沈默の輪廓を畫がく富士の峰は寂しく映るが、戀の最も手ごたへある姿はなぜ出ないのだらうと義雄は考へた。お鳥が自分にまだしんみりと親しんで來ないのが、どうも底の知れない不安のやうで、行けない。

『どうだ、お前はおれの胸に全く浸つてしまうほど可愛がられたくないのか？』かういふ風に渠はかの女の感情をさそつて見たこともある。

『やアだ』と、かの女はとぼけた顏をしたが、頬には薄べにの色を潮して見せた。
『……』渠はまたそのあどけない樣子を見ると、ただ、もう、可愛いやうな、嬉しいやうな氣になつて、自分の不安な戀を反省することもうち忘れ、新たに書き出した原稿の前にあぐらをかいたまゝ、手を延ばしてかの女を引き寄せ、そのやはらかい頬ツぺたへ接吻した。
餘り力強く押し附けたと見え、渠のをととひ剃つた濃い頬ひげの生えかけがかの女の肌をきつく刺した。
『痛い、痛い！』お鳥は思はず大きな聲を出して、渠の卷く手から免れたが、白い手を返して、『このおやぢ』と、無意氣にこちらの長く反り返つた口ひげを引ツ張つた。
『痛い！』義雄も身顫ひして大きく叫んだ。
互ひに離れて睨み合つた目には、兩人ともその場の突然な怒りが
『ひどいことはすな！』
『あたいだツて、痛かつた。』
『ふ、ふん』と、二人はまた笑ひ合つた。
が、その笑ひは二人の心を結び合はせたのではなく、互ひに輕蔑し合つたやうなものであつた。
渠もかの女も共にふくれツつらが直せない。で、暫らく互ひに顏を見ないで、默てつゐた。

すると、お鳥は突然嬉しさうな頓狂聲を出した。

『お客が附いた、お客が附いた!』

義雄がふり向くと、かの女はこちらの煙管の雁首に、いたづらに吸つてはたいた吸ひ殼の殘りが、まだ煙りを出して一二本のすぢでつるさがつてゐるのを示めしてゐる。

『何んだ、馬鹿な!』渠もにツこりして、『どこでそんなことを覺えたのだ?』

かう云ひながら、渠はかの女が北海道の或町で、金貸しの父と共に、藝者屋の間に育つたのであると云ふ話を思ひ出した。

お鳥は、毎日のことが單調なのと出水があるかも知れないと云ふおそろしい評判との爲めに、東京ばかりを戀しがつた。で、來さへすれば歸れるのだと思つて、原稿の金を頻りに待ち遠しがつた。

ところが、義雄の友人から中身の這入らない手紙が届いて、あの長篇小説は二三軒當つて見たが、どこでも受け付けない事情が分つた。出來ない前から本屋の評判になつてゐたのであつて、出せば必ず發賣禁止だらうとあやぶまれてゐる。方々の本屋へよく出て行く小泉笛村にも賴んであるから、なほ、いい首尾があつたら報告するが、當てにはすなと云ふことが書いてあつた。

『それ御覽!どうするつもり?』お鳥は泣き顏になつた。

『どうもしない、もツと書くの、さ。』かう云つて、義雄はおもてに元氣を見せたが、胸は氷の燒いば

を擬せられたやうに情けなくなつた。

宿の帳場からは、一週間毎にする勘定の催促も來てゐる。渠も亦最初に郵送した短篇の方の原稿料を電報で催促しないわけに行かなかつた。

或日のゆふ方、空はみツしりと曇つて、目に見えない雨が降つてるかと思はれるほど濕ツぽく鬱陶しかつた。

『もう、もう』と、田の中の牛小屋からは、相變らず厭な聲が押しつぶされつつ下這ひに響いて來る。

『青い田が海なら』と、かの女は不愉快さうに欄干にもたれながら、こちらが云つて聽かせた譬へを思ひ出したらしい。それを押し進めて行つて、『あの牛が水牛だろかい？』

『さうだ、ね。』義雄は筆をとどめて、目をそとに放つた。

今、立つてゐるかの女にはただいやで〳〵堪らないものとして響く聲だらうが、坐わつてゐるもの——而もかた〳〵の耳が殆ど全く用を爲さないほど痛んでゐるもの——の心には、深い水門の底に沈んでゐる釣り鐘のうなりが聽えるやうであつた。

『もう、もう』と、——さうだ！　蒸し暑く息づまつた空氣の底から、何かの恨みが不滿足を訴へる沈鐘の響きのやうに、お鳥のいはゆる『水牛』の聲が響いて來るのだ——云ひかへれば、義雄自身のまだこれまでは不滿足な戀の恨みがその息ぐるしさを訴へるやうに！けれども、その聲は一匹や二匹

のことでないから、朝も晝も、晩も夜中も、つづけざまだ。

その底なる牛小屋に遠くないところで、夜になると。必ず一つのあかりが付く。ランプの光りだらう。それがお島を離れた時の義雄の心に、一つの慰めを與へることもある。それが渠の寂しいやうな、薄暗いやうな、底の知れないやうな心に、たツた一つの味方となることもある。

濕つた夜氣にまたたいてゐるこのあかりは、ゐ据わつてるのだらうが、動くやうにも見える。見つめてゐると、また大きくなつたり、小さくなつたりするやうだ。

『恰も　消えない　露──日輪　の　光りを　晝間　から　一身に　吸ひ込み、
目くらの　夜を　澤市　の　妻　となる　氣　だらう。』

と、かう、義雄は自分の詩に歌ひ込んだ。

然しその光りの無言なのが一層寂しい。あれが若し優しい聲でも出して呉れたらと渠が思つた時、何か求めるやうな牛の聲がまたした。それを渠は今見詰めてゐた田の中のランプの出した濕つぽい聲のやうに聽き爲して、にツこりした。

ランプと聲、慰めと求めとが一つになつて、戀と不滿とが合體の氣分になつた時、渠はお島をそばに返り見て、自分の腹わたが煮えくり返るやうな熱情を取り抑さへながら云つた。

『僕が若し全くつんぼにでもなつたら、島ちやんは僕の耳になつて呉れるだらう？』

『大丈夫だ、わ。』かの女は義雄の書齋や家族などの寫眞が出てゐる雜誌をいじくりながら、ただ曖昧らしい返事をした。

歸りたいとばかりあせつてゐるお鳥は、最初の短篇に對する金が電報がはせで來ると直ぐ、獨りで歸京することになつた。

思ひやりのない女だと義雄は少しいや氣もさしてゐたからであるが、また若いもののことで、一圖に歸ると思ひ込むと、その方にばかり心が行つてしまうのだらうとも思ひ直した。で、自分は獨りで相變らず思索と筆硯とに親しんだが、氣になるのであとから出來た短い原稿二つに對しても、どうか早く送金をして呉れるやうにとまた催促の電報を出した。

水々した稻の田の面を、汽車が往復して、その度毎に白い煙りを殘しで行くのが、今更らの如く目に付くやうになつた。ぼんやりと手すりに倚りかかつたり、寢ころんだりして、その荷車や客車の通るのは何十分置き毎だらうと、勘定して見る氣になつたこともあつた。然しその回數を一イ、二ウ、三つとまで數へないうちに、渠はモルヒネでも嗅がされてゐたやうにかの女の戀しさで氣が遠くなるやうな氣持ちになつた。

かの女のゐる時は左ほどでもなかつた田の中の散歩を、一緒に今一度やつて見たいやうな氣になつて――思ひ出すのは渠ののぼせた耳もとへかの女の熱い息がかかつた時のことだ。お鳥は、或日暮れ

に、あぜ道を步いてゐて通りすがつた一人の田舍者を闇に　　して見せるかのやうに、義雄の横顏へ熱心な接吻を與へたことがある。

『浮氣ツぽい女だから』と思ふと、渠はまた、ふと今まで氣が付かなかつた疑ひに包まれた。『お鳥はあの足で下谷の職工がしらを尋ねて行きやアしなかつたか知らん？』

夏期休暇も殘りすくなになつた上、渠の敎へる學校の入學試驗を手傳ふ約束の日がこの五日に迫つてゐる。然しそんなことは、もう、どちらでもいいのだ――かの女が何をやつてゐるか分らない。たとへ自分は嫌はれてゐたとしても。あの白い肌が今では自分の物だと云ふ形になつてゐるからいいやうなものの、一度でも他の男の手に觸れたら――足に觸れたら――毀はれた人形も同樣、もはや自分の愛情をそれに傾注することが出來る望みは全くなくなるのである。

『あの人は誰れかに似てる』ツて、

『ああ、かうしてはゐられない』と、渠はいら〳〵し出した。が、その失はれた心の落ち付きを迫めて無理にも取り返すつもりで、今書きかけてゐる議論――それは藝術と實行とは合致すべき物だと云ふ證明――の筆を轉じて、かの女を慰める手紙を書いた。

『九月二日、鹽山發。鳥ちやん、白い鳥ちやん、また手紙を書きます。笑つては行けないよ。あなたのゐなくなつてからと云ふものは、ね、手紙でも書いてゐなければ、僕の急に寂しくなつた心が落ち

付かないのです。前便に、もう蚊帳を奪はれたと云つたでしよう、それがまたきのふから僕等の室に障子まではまつたのです。甲州の氣候と云ふ失敬な變人が、何だか、もう僕にも早く歸れと云ふやうな取り扱ひがするではないか？　歸れなど云はれなくても、僕は歸るにきまつてゐる。早く歸つて鳥ちやんの顏を見なければ、僕は心が落ち付かない。かはせが來次第、直ぐ歸るから待つてゐて下さいよ。その代り、僕を信じて僕の云つたことを守つてゐて下さい。他の浮氣女のやうに、獨りでたちの分らない男のところなどへ行くことは、決してなりません。分りましたか？「耽溺」出版の件に就いては、どうせ僕が歸京しなければ埒が明くまいが、なほ、鳥ちやんからも笹村君の方の樣子を聽いて見て貰ひたい。あなたの出發の時は宿の拂ひの爲めにみやげを買つて行く餘裕もなく氣の毒であつたから、僕の時はうまい葡萄を持つて行つて、下の人々にも分けてやりたいと思ふ。先づそれまでは心と心――鳥ちやんの、白鳥の樣に白い鳥ちやんの笑つてる顏が見えるやうだ。可愛い人へ、義雄。』

渠には、なほ別な疑ひ(うたが)が絶えなかつた。それは紀州(きしう)の男に就いてだ。お鳥がこちらから聽いた時は怒つて碌に答へをしなかつたことまでも、つい、寢物語りの調子に乘つて語つてしまつたのだとすれば、あの別れた時の事情が本統であるかも知れない。が、あれは小説家のそばにゐて、かの女(ぢよ)も亦自分の小説を作つてゐるのだと受け取られないでもない。

かの女を知つてからのことで考へても、誰れそれが自分にいやな目を使つたとか、あの人が自分を口說いたら、承知したやうな風をして見ようかとか、そんな空想を畫がいて嬉しがつてゐる女であることはこちらにも分つてゐる。

ひよツとすると、さきの男と內約でもあつて、いづれ男も出京するから、それまで何とかして生活してゐろと云はれて來たのではないか？

『手紙が一度來た、さ』とかの女も云つたのは、その手筈が出來かかつた知らせであつたのかも知れない。

男が時機を待ち切れなくツて、田邊を辭職してしまつたのではないか？お鳥があせつて歸つたのには、旣に打ち合せが出來てゐたのではないか？　兎に角、その男が、もう、出て來たやうなことであつたら、何うする？馬鹿を見るのは自分ばかりだ。

『さうだ、おれはどうしても早く歸らなければならない。歸つて、あの女の虛榮心が强いのに付け込んででも、暫らくは、おれの手にかの女を取り入れて置かなければならない。』からあせりながらも、ただ待たれるのはかはせだ。

例の雨や神鳴りは稀れになつて、この二三日來、田を渡つて來る風が急にひイやりして來た。降る雨も秋さめの調子を帶びたのは、こちらの寂しく見棄てられたやうな氣持ちから、さう感じられるば

かりではない。
『この頃のはどうです』と云つて、宿の主人が盆に持つて來る葡萄が實際にうまくなつた。
『おれは、然し、葡萄の熟するのを待つてゐるのではない。』渠はこんな警句見たやうな言葉を、不平の代りに、私かにこぼしても見た。
兼て聽いてゐた通りの氣候の急變――送金の待ち遠しさ――手放したお鳥に對する疑念――から云ふことが渠のからだ中の神經のどの末端にも觸れて、手のあげ下しも心配なら、足を投げ出すことも不安になつた。
きのふまでは親しみのあつた室が、何だか丸で初對面のやうで、柱のすがた見に映る自分の顏も、濕布の繃帶をしたまま、他人か何ぞのやうに痩せてゐる。
お鳥が去つたあとへ、秋の景色が自分の心にまでも舞ひ込んで來たのだ！から云ふ氣持ちになつた渠には、もう、障子がはまつた室内の闇に吊されてゐるランプが田の中の一つ火に見えて、牛の叫びまでが渠自身の腹わたから出て、
『本統に可愛いの』とお鳥が云ふやうに聽えて來る。
『この通りだ』と、胸に押し付けようとしても、自分の左右には何の手ごたへもない。また、愛する匂ひも、あツたかい氣はひもしない。

不必要になつた蚊屋は奪はれて、寢どこは度々したにも拘らず、渠はその不安なからだの置きどころがなく、眠らうとしても眠られない自分を持てあました。

明るい目のさきには、いま〳〵しくも、よそ〳〵しいお鳥の姿がちらついて、かの女に對する自分の忿怒やら鬱念やらがかはるがはる飛び出して來る。うるさいから、火を吹き消すと、また、自分は闇の床を拔け出て、軒から直ぐ下へ飛び降り、そこの流れに添ふて、思ひ出の多い田の中をまごついてゐる。

心の手を以つて妄念を拂へば拂ふほど、目ざとい疲勞がます〳〵目覺めて來るばかりだ。

闇の中を見入つてゐると、末も分らない今も分らない一條の黑い道を、黑い影、喪服を着て通る影、無言(渠は牛つんぼだ)、沈默(渠は物を云ひたくない)、悲痛、苦悶、死などの靈がうつ向いたまま、しく〳〵泣いてとぼつて行く。

義雄は考へた――よく〳〵寂しいと云ふことを覺えたのであらう、誰れも渠等を相ひ手にするものがない。渠等とても、その前世では世の人々の爲めに絕叫し、柘榴の明いた口の如くその意見も吐露し、最も武勇な戰士の如くその議論も戰はしたのだが、相ひ手が物が分らないので根氣負けをして、喪服を着けたのだらう、と。この心持ちは、先輩もない、後輩もない、身一つの渠自身にはよく分つ

た。

それがまた一人減り、二人減り、三人四人減り、黒い道の黒い影は、草葉の露が朝日に當つたやう、みんな無くなつてしまつた。

では、もとの通り目に見えない黒光りかと云ふと、さうでもない。死と云ふものが渠等をすべて呑み下し、一たび生れた兒をまた呑んでしまう鬼子母神の腹のやうに、祕んでゐた死の影が段々と大きく脹れて來て、渠の心の闇と合した。

『あ、その闇は僕自身だ』と渠が氣づくと、眞ッ暗な死は矢ッ張り戀だ。鳥ちやんの亡くなる時だと思はれて、それがあまいやうな味を渠のからだ中に傳へた。『僕はあれの死ぬまであれを愛してゐたいやうな氣がする。』

かう云ふ風で、夜が如何にアブサントを飲んでも却つて眠られず、晝間十二時までも一時、二時までも眠つた。宿のもの等は全く渠に對する信用を置かなくなつて、金が來ないので燒けを起してゐるのだと云ひ合つてゐるらしかつた。

こちらからお鳥に對して長い手紙を三つも出してから、やうやくかの女から『無事安着』の通知が來た。が、ただそれだけを書いたハガキであつた。

『畜生！どうしても早く歸らなければならない。』から、渠は力んで見ても、宿の爲めにおのづから

人質になつてゐる姿であつた。然し渠の心には、女に會ひたい情ばかりが燃えてゐた。

渠の日記帳には、

『何時　また　會はれよう――もう、二三日――
　千萬年　も　隔つて　ゐる　やうだ。』

こんな詩句も出たし、また、

『君が　ゐないと　歌は　いくら　でも　出來るが
　さて、僕は　いつ　までも　君と　離れて　ゐたく　ない。』

から云ふことも歌つて見た。お島やら、東京やら、著書の出版やら、待遠しい原稿料やら、かの女に對する疑念やら、宿屋の冷遇やら、こんなことがすべてごツちやになつて、渠のあたまをかき亂す時は、實際持ち前の執着癖を詩の世界にでも向ける外仕方がなかつた。

『今迄　晴れてゐた　空が　午後から　曇つて、
　富士の　方面　から　段々　の　大風雨、
　雨は　ちぎつて　投げる　やう――おほ神鳴り　も　聽える。
　急がしい　あま足は　四方の　山々を　閉す、
　宿の　女中　共は　まだ　時でも　ないのに　雨戸を　締める。

晝間を　殆ど　眞ッ暗な　闇、
之を　時々　破るのは　おほ稻妻　の　屈折——
ぴかり、ぴかり！
また、ぴかり　ぴかり！
その　明滅　の　間に　しか
萬物　と僕等　との　いのちは　なかつた。
然し　戀の　續く　如く　この　嵐も　續いて
本統の　夜に　なつた　時は、まこと　僕等の　世界だ——
嵐は　二人の　枕元に　響いて
物凄い、奈落　の　眠り（これが　戀の　心だ）を　實現した。
宇宙　萬物　を　無　にした　妖女は　鳥ちやん　だ。
影も　形も　ない　肉の　あツたか味、
之を　抱擁する　心　には　底が　ない。』

『素ツぽかしても氣の毒だが』と、義雄が思つてゐた約束の試驗手傳ひ口も遂に過ぎてしまつた。『あ

の鹿爪らしい校長や校長派の感情をまた損じたに違ひない。』

然し、もう、學校の講師などはどうでもいい。自分は自分の思ふ通りにやつて行つて、教育界からは勿論、文學社會からも見棄てられたところで、その時はそれまでのことだ――

學校の校長などと云ふものは、ただその地位を大事がつて、兎角、事勿れ主義をやつてゐるものだ。生徒の實力啓發など云ふことは、その實、第二、第三の問題にしてゐる。そんな內實を知らないで、世間體をばかりつくろつてゐる創立者や常任理事は鹿馬な奴だ。あの學校の理事は圓滿主義を以つて男爵になつた人だ。それも惡くはない。あの創立者は天秤棒のさかな屋からわが國有數の御用商人になつた。それもえらいと云へば云へる。そして、わが國や朝鮮に自分の名を冠した學校を二つも三つも建てて、それで男爵を贏ち得ようとする。それも貰へれば結構だ――

ところが、學校は男爵を貰ふ用意の看板だけで、教育その物は殆ど全くどちらでもいいに至つては、あの拾五萬や三拾萬や五拾萬の金をただその土地や建築物が代表してゐるに過ぎない――

『いや、そんなことはどうでもいいのであつた。』から義雄は思ひ返して、自分はただ自分の主義と主張と自己の存在とを確かめさへすればと、机の前にしよんぼりとかしこまつた。そして自分の一生懸命に努力した著作が斯く世間で持て餘されるのに憤慨した。

この最後の憤慨の爲めに、つい、お鳥のことなどは全く忘れてゐた日であつた、待ちに待つた二論

文の原稿料が揃つてやつて來た。
『旦那、二つもかはせがやつて來ましたぜ』と、宿の主人が嬉しさうにそれを持つて義雄の寢てゐるそばへ來た。

渠は數日來失つてゐた氣力を一時に回復して、直ぐ床を跳ね起きた。そしてまだ正午に少し前なのを見て、たツた十五分に迫つてゐる汽車で出發することにした。

『ぢやア、ね、早く車を一臺呼んで下さい。』

『へい、かしこまりました。』

主人は急いで二階を降りて行つたが、義雄も手早く革鞄に手荷物を纏めた。押し入れには、アブサントの舶來瓶の明いたのが二本ころがつたばかりになつた。渠はそれを二本ともわざ／＼横手の窓から下に投げたが、小川のふちの石垣に當つて、かちやんと毀われたのを見て、この甲州といふ冷淡なかたきに復讐をしてやつたかのやうに氣持ちよく感じた。

恥辱の旅――孤獨の宿――富士の高い峰が雲霧の間に見え隱れして、萬人の頭までも呑み下だす殘酷なおほ奥津城の如く臨見、壓迫する最も憂鬱な土地を、義雄はかう云ふ風にして逃げ出すことが出來た。

土産はただはち切れさうに熟した葡萄の一と籠――この粒立つた葡萄の實にお爲の張り詰めた血の

若々しさを偲びつつ、渠はやツと日ざした汽車に乘ることが出來た。
中央線のトンネルだらけは、夜汽車でやつて來た時も物凄くあつたが、義雄が今度鹽山の方から徒子トンネルを拔ける時、がツたん、がツたんと狹く籠つた大きな音に、自分のすかして眠らせて來た死が果して怒り出して、追ツ驅けて來たかのやうな怖ろしい壓迫を、七八分間も受けた。
八王子へ來て、武藏野の廣く開らけた野づらを見た時、渠は、もう、目的の女の微笑する顏が見えるやうに、初めて人間らしく生き返つた。

十二

義雄の名義で二階を借りた家の主人――原田清造と云ふ――は、義雄等の旅行中に鄕里の方から歸つてゐた。
この人は義雄と同じ學校の漢學講師であつたが、老朽の爲めにやめられた後、鄕里の田地を融通して、谷町に二三の借家を建てた。且、細君には逝かれ、若い家族は三番息子の潔の外皆その鄕里や鶴見へ行つてゐるので、親戚からお政と云ふのを賴んで來て臺どころをやつて貰つてゐる。
『おい、潔、田村を呼んで來い。』
『またお父アんは酒を飮みたいんでしよう。』斯う潔はよく答へたさうだ。

こんな風で義雄はこれまでにも老人のいい話し相手になつて來たのだ。が、今度義雄が甲州からの歸りを先づここへ行つて見ると、お鳥は何よりもさきにこのうちが面白くないことを告げた。女として人の目かけになんかなつてるのは不心得だと忠告するのは相ひ手にしなければそれでいいとしても、お政さんまでが人を馬鹿にして臺どころの手つだひをさせようとすると云ふのだ。

『まア、暫らく默つてなよ、おれにも考へがあるから』と云つて、義雄はまた自分としての何よりもさきに原田家の下の八疊座敷でみやげ物を開らいた。そして直ぐお鳥とお政さんとに小酒宴の用意をさせた。

主人の老人は酒さへあれば肴は何でもかまはないたちなので、あり合はせのするめに湯豆腐で澤山であつた。

『お父アんはお酒ばかりを頂戴おしなさいよ、わだし達はこれをやりますから』と、潔さんが先きに立つて葡萄に手を出した。

若いもの等が三人互ひに奪ひあつて、立派な粒から先きへうまさうに喰つてゐるのを見て、義雄は、『それだけになるまでの間の、おれの創作的努力と苦心をも知らないで』と思つた。この場合、苦心とはかはせを待つてたことなので これを老人へは、猪口を取りかはしながら、あり體に話した。すると、『それはそれで結構だが』と、老人は意味ありげの口調で、『君は今回餘りしやれたことをやり出し

た、な。』
『いや、そのことだけは――』義雄はお鳥と顏を見合せたが、再び老人の方へ決心のある目を向けて、『云つて貰ひたくないのです。惡いと云はれれば惡くないことはないのですが、止むを得ないと辯解すれば、また辯解出來ないこともないのです。』
『そりやア、君が細君を嫌つてゐるのは分つてゐるが、子供もあるのだから――』
『だから』と、手を持つて下に押さへ付ける眞似をして、『何も云つて貰ひたくないのです。』
『然し、少しひどくはないか、ね？』
『ひどいも、ひどく無いも、僕の決心一つでやつてゐることですから――』
『さう云つてしまへば、僕も別にそれ以上の忠告を與へる餘地もないが――君の細君に知られたら、僕が面目ないわけだから――』
『いや』と、義雄は言葉に詰つた。自分等の宿をするのを斷わる氣かと思つたのである。『そんな野暮なことは云はないで、續いて僕等を置いて貰ひたいですが――知らない家の間借りをするのも何だか不安心ですから、ねえ。』
『そりやア、君がたツてと云ふなら、僕もかまはないが、どうだ、お鳥さんにも女の道を充分仕込んでやつたら？』

『ふん』と、お鳥は鼻で返事をして橫を向いた。

『女の道と云ふと――』義雄には最初分らなかつたので、例の道學根性から目かけのやうなことなどよさせるやうにしろと云ふのかとも考へた。が、直ぐそれがお鳥の訴へた臺どころの手傳ひであると分つた。

『朝寢坊ばかりしてゐないで』と、老人は笑ひにまぎらせながら、『うちの用事も少し見習ふやうにしたら――?』

『ほ、ほ』と、お政さんはお鳥の顏を朋輩らしく見たが、お鳥がむツつりしてゐたので、その目を老人の方へ轉じた。

『それも惡いことではないでしようが』と、義雄は成るべく當りさはりのないやうに、お鳥のことを意味しながら、『これは然し別な目的の爲めに――たとへば、琴なり、またはほかの物なりに――專ら熱心にならせて見たいのです。』

『琴はあたひ嫌ひよ。』お鳥も老人の云はうとする言葉を邪魔するつもりでらしく、お政さんへ口を出した。

『さう』と、お政さんは答へた。この子がお鳥を朋輩にしようとするのも尤もで、丁度同年輩だ。

潔さんは別に何も云はなかつたが、葡萄の殘りをみんな喰べてしまつて、自分の筒袖の端で口のあ

たりを拭いてゐた。

『君の考へがさうきまつてをるなら、もう僕は云ふこともないが――』から云つて老人は話題を轉じた。お鳥が頻りに義雄を二階へ連れて行きたさうにするのを、

『まア、そんなに旦那さんばかり大切にしないでもいいぢやアないか』とからかひながら、義雄に猪口をさすのである。

お鳥は待ちかねてか獨りで二階へあがつてしまつた。その跡を義雄ももぢ〳〵し出したのを見て、老人は、

『もツと飮み給へ、君の新らしい夫婦のさいさきを祝ふのではないか』など云つた。

『然し、もう、お政さんがゐ眠りをし出したし、實際、夜も更けたのですから、あすまた飮み直しましよう』といつて、そこをはづした。

『………』老人は、こちらのおごつた酒にだが、何だかまだ物足りなさゝうにしてゐた。それは獨りになるのを寂しいのだらうと思へて、こちらに取つては氣の毒におぼえられた。

『まだ東京は暑い、ね』と云ひながら、二階へ行つて見ると、お鳥は獨りでとこへ這入つてゐた。眠つてゐるのかと思つて、義雄は靜かにそのそばへ行き、顏の向いてゐる方のかけ蒲團の端に坐わり、

酔つて苦しい息を吐いた。

『酒臭い、臭い！』から、突然叫んで、お鳥は反對の方へ顏を向けた。そして自烈たさうに、『人が一週間も待つたのに、平氣であんなおやぢと酒ばかり飮んでゐて――』

『そんなに待ち遠しかつたのかい』と、義雄はかの女が急いで歸つた時の冷淡を思ひ出しながら、意外に感じた。が、それが當り前であらう。鹽山でかの女に熱が俄かに出て晝間からとこへ這入つた時、こちらは書き物にいそがしい中を溫泉附近の醫者を呼びに行つてやつたり、氷を缺いてやつたり、一と晩中、よく介抱もしたりした。そして、その熱が取れてからも、溫泉へ二三日目に這入る時、女湯の方へ行つて、自分でかの女の弱つたからだ中を洗つてやつた。人は目を圓くして見たり、笑ひ合つたりしたが、それを心にもかけず、よく痛はつてやつた。

『さう、さ！』と、かの女もその聲を全身から出したのがこちらのからだにも傳はつた。

『ぢやア、おれの歸るまで一緒にゐて呉れたらよかつたのに。』

『…………』

『實際、寂しかつたよ――手紙もよこさないで、さ。』

『でも』と、こちらへ向き直り、『行き違ひになつたら詰らんぢやないか？』

『早く〳〵歸らうと思つたツて、金が來なかつたら仕方がない――おれの手紙は讀んだらう？』

『うん。』
『それで初めておれの心が分つたのか？』
『さうぢやない』と、恥かしさうに笑つて、肩をすくめた。
『本郷へは行きやアしまい、ね？』
『本郷ツて――？』
『黑ん坊、さ。』
『まだそんなこと疑つてるの？』
『さうだらう、さ。』
『馬鹿！』片手で起きあがつて、片手で義雄をつき飛ばし、自烈たさを顏のしがめ方に現はして『馬鹿！馬鹿！馬鹿！』と、こちらの崩れた膝を二三度つめつた。『そんなこと、誰れがした？』
『さうおこらなくてもいい、さ。』
『それより、自分こそ』と、かしらをまた枕に落とし、『何をしてたか分るもんか？』
『ぢやア、おれが受け取つた金と使つた高とを見るがいい、さ。』から云つて、義雄は紙入れから稿料の通知狀やら宿屋の受け取りやらを出した。
お鳥が腹這ひになつて、それを調べ合はせてゐるのを見て、こちらは女の信用を得るには、いつも、

この手に限ると思つた。
義雄もここに這入つてから、お鳥はこの家を早く立ち退きたいことを語つた。そして、渠はそれもよからうが、どこへ行つても、他人とは何か知らん悶着の起るものだと云つて聴かせた。
『でも、ここの奴等はみな氣に喰はん。』
『お政さんの手助けにしようと云ふだけのこと、さ。』
『それで自分の顔が立つか――あたいをここの下女にさせて置いて？』
『だから、おれもそれとなく斷わつたぢやアないか？』
『人間らしいのはまだしも潔さんだけだ。』
『若い男なら、いいのだらう？』
『またそんなこと！』から云つて、かの女はこちらの胸を突いた。が、これまでにない優しさと熱心との加はつてゐるのを知つて、渠はかの女も餘ほど寂しい目に會つてゐたのが分つた。
多少長くなつた夜も直ちに明けてしまつたが、二人の起きたのはずツと遲かつた。
そして、かれこれと二人が私かにもつれ合つてゐるうちに、早ゆふ方となつたので、義雄は昨夜の約束通り下の座敷でまた酒を初めさせた。酒で機嫌を取つて置く氣なのである。原田老人は多少醉ひ

がまはつて來てからも、もう、昨夜のやうな敎訓めいた、忠告めいたことは云はなかつた。その代り、渠は、義雄の困つたことには、例の待合へ附き合へと云ひ出した。

渠が、時々無聊を感ずると、獨りで行く待合が一つ新橋にある。別に藝者を呼んで騷ぐのでもなく、いつも、その帳場の長火鉢にくツ付いて、渠と殆ど同年輩の婆々アおかみを相手に、渠が盛んであつた時のむかし話をしながら、ただするめ酒を飮むのがおきまりだ。

義雄も一度連れて行かれて知つてるところだが、そこのおかみが一度年甲斐もないお化粧をして、細君が亡くなつたあとの考人の家へやつて來た。渠はただ昔の借金の催促かと思つたら、それは表面のてれ隱しに云ひ出しただけであつて、本意は自分があと釜に坐わつてもいいから、悲運つづきのその商賣を一緒になつて盛り返して呉れいと云ふのであつたさうだ。

『お前さんを女房にするまでまだ老いぼれてゐないよ』と、渠は憤慨してその婆々アを追ひ歸してから、暫く足を拔いてゐることも、義雄は渠から話されてよく知つてゐる。

そこへ附き合へと云ふのは、このおやぢ、今夜は餘ほど何うかしてゐると義雄は考へた。こちらの艶ツぽい事實を見せつけられて、渠も亦氣を若返らせたのだ、わいと考へられた。

で、義雄は迷惑さうな顏をして、

『お付き合してもいいのですが――』

『いやか』と、老人はさきまはりをして、珍らしく不機嫌さうに、『いやなら、僕獨りで行つて來る。』
『實は、これが』と、義雄はお鳥をちよツと返り見て、『反對するにきまつてますから。』
『君は君の樂みをし給へ、僕にはまた僕相應の話し相ひ手があるから』と、苦笑しながら、椰子の實の煙草入れと太い銀煙管とを取りまとめて腰にさした。
『あんなお婆アさんとこなどおよしなさいよ』と、お政さんがそばからとめた。
『お婆アさんが目的ではない、もツと、うまく酒を飮んで來るのだ。』
『お酒なら』と、お政さんはお鳥と顏を見合はせて冷笑し合ひながら、『わたし達がお酌をします。』
『お前では氣が利かんし、お鳥さんには氣の毒だから、なア』と、當てこすりのやうな態度を以つて立ちあがり、隣室で勉强してゐる息子に向ひ、『潔、下調べが濟んだら、獨りで寢てゐなよ。』
『はい』と、から紙越しの返事がした。
『待合と云やア結構なやうだが、婆アさん相ひ手のするめ酒は、もう二度とは眞ツ平だ』と、義雄は老人をあざ笑つたが、自分も一度はあんな年輩と狀態とになる時もあると思ふと、同情の念を禁ずることが出來なかつた。
『ぢぢイでも、色けがあるんだ』と云ふお鳥をたしなめながら、然し、その夜もそこに寢てしまつた。

翌朝、少し早く起きて食事を濟ませ、義雄は旅かばんを持つてそこを出た。毎日のやうにとほつた谷町から簞笥町の通りや、簞笥町と今井町との間を市兵衛町へあがるだら〳〵坂や、我善坊の細い通りも、何だか物珍らしい。自分の家へ歸つて行く氣持ちはしないで、長らく無沙汰をしてゐる人の敷居へ近づくやうな氣がする。そして家へ這入つてからは、直ぐあがつたところのはしご段やつき當りの庭が見えると、確かに自分の家だと云ふ强みは出たが、今度はまた、誰れも迎へに出ないのが物足りないと同時に、留守に何か大事件が起つたのではないか知らんと云ふ心配が胸をどき付かせた。

緣がはで、おもちやの學校かばんを肩にさげた知春と出くわしたが、この子はびツくり顚へあがつた樣子をして、伏し目に下を向いた。そして、義雄が默つて行き過ぎるのを待つて逃げるやうにばたばたと臺どころの方へ行つた。

『父ちやん、父ちやん』と云つてるのが聽えた。

『さう――お歸んなさつたの』と云ひながら、千代子が急いでやつて來るやうすだ。

『またあの顏を見なければならないのか？』義雄がいやな物を避けるやうに目を据ゑて、元のままになつてゐる机の前に坐わつたところへ、かの女は出て來た。

『お歸んなさい。』明いた障子のそとから少し腰を曲げたからだを右の手で壁の柱へささへながら、『大相御ゆツくりでした、ね。』

『……』渠はふり向きもせず、默つてにがり切つてゐた。
『今お茶を持つて來ますから、ね。』千代子がこちらの樣子を既に察してゐるやうなとぼけかたで引ツ込んで行つたあとまでも、義雄の心は落ち付けなかつた。
　お島の　が自分の衰弱した神經の微動にもまつはつてゐるやうで――まだ午前中であるこの可なり樹木の多い山下の空氣を吸ひながらも、呼吸が少し迫つて、机に肱を付いて見た手の指さきが顫つてゐる。
『奧さんがおありなら、暫らく遠ざけてゐなければなりませんぞ』と、甲府の病院で云はれた忠告を思ひ出し、自分の左りの耳は繃帶を取つては來たが、まだよく聽えないのに今更らの如く氣が付いた。
　右の耳を押さへて、庭の雀の啼き聲を幽かに聽いてゐると、いつの間にか知春が、二三の來狀とタムソンと書いた名刺とを机の上に置いて、
『父ちやん、おみ――あげ』と小さい手を重ねてゐる。
　それを見たこちらの心は、心からすすりあげるほどのもろい情に打たれた。が、あの千代子が無邪氣な子を使嗾してゐるのだと思ふと、つい、また憎くもなつた。且、千代子が茶の用意をして出て來たので、優しい返事も出來なかつた。
『そんな物アない。』

『ないツて』と、子はつらさうに又耻かしさうに母の坐わつた肩へもたれかかつた。

『ひどいのです、ね、おみやげ一つないのですか？』かう云つて、千代子も失望して、急須に湯をつぎかけた鐵瓶を持つたままこちらの顏を見た。

『それどころぢやアなかつたのだ。』渠は慳貪に答へて、自分の落ち度をいそがしい執筆と病氣との理由に押し消さうとするのであつた。

『誰れか連れてツてたのでしようから、ね』と、かの女は笑ひながらこちらの樣子をうかがつた。

『なんだ？』怒つたやうな、また、さうだと返事したやうな聲を出して、渠も口には笑みを漏らした。機先を制せられて、張り詰めてゐた反抗心は失つたが、再び慳貪に『連れて行かうが行くまいが、おれの勝手だ。』

『それはそれで構ひませんが』と、かの女の出方も案外におだやかで、『子供はお父アんがいつ歸るだらうツて、樂しみにして待つてゐたんです、わ。』

『みやげが欲しけりやア、これで買へ。』義雄は紙入れから五十錢銀貨を出してほうり投げた。

『これでも、氣はこころですから』と、千代子はそれを拾ひあげて、知春に向ひ、『ありがたうとお云ひ――坊やも段々利口になつて行かないと行けないよ。無理ばかり云つてちやア――』

『お歸んなさつたのですか？』繼母も出て來て坐わりかけたが、
『おみやげが無いんですツて』と、千代子が訴へるやうに云つたので、
『さう？――わたしのところに少しお菓子の殘りがあつたツけ。』から引き受けて、繼母はまた引ッ返して行つた。
『あなたのお留守に來た手紙はそのたんびに附け紙をして送つた筈ですが、きのふけふに來たのはそれだけです。それから、その名刺の西洋人が尋ねて來て、いつ頃になつたら歸ると聽いてました。』
『また飜譯でも賴みに來たの、さ。』
『歸つたら、直ぐハガキでも出すからと云つて置きましたから、あなたから知らせておやりなさいよ。』
『うん。』むツつり答へたが、渠はどうしてもうち解ける氣になれない。
そこへ繼母が五つばかり最中の這入つた菓子皿を持つて來て、
『もう、これツぽつちだけれど、壺屋のは久し振りでしよう――』
『菓子どころではなかつたのです』と、渠はつツかかるやうな口調だが、繼母には多少遠慮したつもりで語つた。その實、千代子に聽かせるつもりだ。『僅かの日限に二百枚以上の原稿を書いた爲め、耳を痛めて、今でも左りの方の聽えが遠いのです。これから直ぐ醫者へ見せて來ようと思つてます。』

『さうださうです、ね、耳が。』

『誰れが話しました？』義雄は何でも、もう分つてゐるのかと思つた。

『誰れが云ふにしろ』と、千代子が受け取つて、『何でもちやんと分つてますよ。耳のことも、それで却つてあの強情な男が人並みにおとなしくなれるだらうと、いつかの萬朝報に冷かしてありました。』

繼母は義雄の鋭い顏を見て笑ひながら、知春のせがむままに最中の一つを取つて渡してゐる。

『人並みになつてしまへば』と、渠も半ばほほ笑みながら、而も今のわが國の文學界に對する自分の今回の努力は決して無駄にならないと云ふ確信をふところ手させて、

『おれのやらうとする仕事が滿足出來るものか？』

十三

知り合ひの博士がやつてゐる耳科病院で診察と手術とを受け、當分は毎日かよつて來いと云はれてから、義雄は先づ笛村を訪ふと、留守であつた。

で、その近處に住んでゐる詩人で、前者と共に『耽溺』を持つて歩いて與れた友人に會ひ、それの出版は今のところ危險がられて、とても見込みないことを聽いた。雜誌にでもと思つて、笛村が現代小說社へ行つて見たが、そこではまた餘り長いからと云つて斷わつたさうだ。

『然し雜誌にならないこともなからう』と、渠は自分で日本橋通りへ行き、現代小說の主筆に相談して見た。初めは矢張りしぶつてゐたが、たツてと云ふなら、引き受けることにするが、稿料の半額だけを明日渡し、そのあとのは雜誌に出た時、渡さうと云ふことにきまつた。

先づ一と安心したので、その足で村松を訪ひ、出發前に借りた金を返し、久し振りの一杯を共にしてから、一緒に養精軒へ行つて玉突をやつた。

勝負にさんざん負けて、お鳥のもとへ歸つたのは九時過ぎであつた。かの女は、もう、とこに這入つてゐた。

『おい、あの原稿のかたをつけて來たぞ』と、義雄は嬉しさうに云つた。

『さう。』かの女は枕の上でちよツと微笑したが、直ぐそれが苦笑に落ちて、不斷、艶のいい顏が電燈の光りに青ざめてゐるやうに見えた。

『どうかしたのか？』

『痛いの、』

『どこが？』

『………』

『えツ？』渠はかの女の無言なのが萬事を語ると思つた。あれだけ、これまで用心してかかつてゐた

のに――!

渠はかの女の枕もとに坐わつたまま顔を反むけて、暫らく自分の三四ヶ月以前までの苦しみと不愉快とを考へた。そしてお鳥とも絶縁しなければならないことの餘りに早く初まつたのを後悔しないではゐられなかつた。

かの女の高まつた呼吸がひどい鼻息に聽える。でも、今夜から別々な眠りだと思ふと、元の他人だと云ふ氣もして、どう手をつけてやつていいのか分らなくなつた。

かの女はこちらの冷淡なのに激して、蒲團をはね飛ばして起き直つた。そして青い顔の青い目でこちらを睨みながら、

『どうして呉れる?』

『どうツて』と冷やかにかの女の方に向いて、『醫者に見て貰ふより仕かたがない。』

『いやだ、いやだ!』からだをゆすぶつて、『醫者なんぞに見て貰ふもんか!』

『ぢやア、手療治の道もないことはない、さ。』

『そんなことで直るもんか?』

『全體、いつから痛い?』

『けさから、さ。』

『ひどくか？』
『さうでもないけれど――』
『兎に角、醫者に見せて、早く直す方がいいよ――おれの經驗で見ても、つらいものだから。』
『ふん！』鼻ごゑで泣き出しさうな顏をして、お鳥はまた枕に就いた。そして、これが直らなかつたら打ち殺すぞとか、おこられてもいいから北海道の兄を呼び寄せて强談するとか、頻りにいろ／＼な恨み言を云つてゐた。
義雄はかの女が寢ながら獨りでもがいてゐるのを知つてゐたが、きのふからの疲勞が出て、眠くツて、眠くツて仕やうがなかつた。

とろ／＼と眠つたかと思ふと、渠はお鳥がにがり切つた顏をして、外出の衣物を着かへてゐるのが目に這入つた。
『どうするのだ？』渠は目がぱツちりしてしまつた。同時に、向ふがこちらを殺す氣ではないか知らんと云ふやうなことが浮んだ。次ぎに、寢床のまわりに刄物が出てはゐないかと見まわして見た。
『自分は醫者へ連れて行かうとしないぢやないか？』
『醫者へ行くつもりかい？』

『行かなくツて、どうする？一ときでも後れたら、それだけあたいの損だ。』

『そりやア、損どころぢやアない――行くなら、おれがついてツてやるよ。』

義雄も起きあがつて、衣物を着かへた。そして時計を見ると、もう、十二時を大分過ぎてゐる。

二人は外出の用意が出來ても、互ひに目を反むけて暫らく默つて突ツ立つてゐた。下では皆よく寢てゐるやうで、外を通り過ぎる夜車の音が聽えたばかりだ。

『どこへ行かう？』實は、義雄に當てがなかつた。

『どこまででも行く！』からお鳥はかた足で疊を踏み叩いて云つた。『醫者のあるところまで行く――醫者が無かつたら、警察へいて、お前の不埒を訴へてやる！』

『そりやア、それでもよからうよ。』

『……………』

『でも、ね』と、わざとうち解けた口調で、『そんなことをしたら、誰れがこれからの世話をするのだ？』

『世話するものなんぞ入らん！裁判所へ出てでも、お前から無理に治療代を取つてやる！』

『そんなことはしなくツても、おれが直してやる、さ。』

『分るもんか？』

『さう心配するな。』渠はお鳥の背中へ手をかけて、動悸の烈しくしてゐるのを衣物の上からさすつてやつた。

『ふん、つらい！つらい！』かの女は二三度からだをゆすつて、こちらの顏を憎々しさうに見詰めたが、ぽろ／＼涙がこぼれる目へ長い袖を燒けに持つて行つた。

　かう心がいら立つて來たら、かの女が外で何を仕出かすかも知れないと思つたので、分りきつてゐることだが、念の爲めに云つて聽かせた――餘り輕卒なことをすれば、渠自身の惡名が出るばかりでなく、同時にかの女も歌はれて、それこそ、かの女が常々最も心配する通り、その兄弟や友人に再び顏を合せることが出來なくなるかも知れないと。

　かの女はただ聲をあげて泣いた。

『今ごろ見ツともないから泣くのだけおよし、ね。一緒に醫者は見付けて上げるから。』斯うなだめすかして、渠はあす、また金が取れることを語つて、治療代には決して困らないことを示めした。

　夜が更けると、街道を吹く風が、もう本統の秋だ。寒けがすると云つて、お鳥がわざわざ袷せ羽織りを出して着たのは、利口であつた。

　宵なら隨分賑やかな通りではあるが、もうみな戸が締つてゐた。各店頭の軒燈もぽつり／＼消え殘つて、眠たさうにまたたいてゐる。そして、二人の無言で投げる影が四つにも五つ六つにも黑い地上

に寫つた。

無言で歩きながらも、義雄は、二三歩あとから附いて來るお鳥が、突然飛びかかつて來て、ナイフか何かの鋭利な刄物で自分の背中をつき刺しはしないかと云ふ疑ひも起つた。で、通りの暗い隅を行く時などは、向ふの後れを待つてやるやうな振りで、實はおづ〳〵ふり返つて見た。

ところが、ふり返つて見る度毎に、かの女の伏し目がちにしてゐる顏が、街燈のあかりのさし加減で、眞ツ靑に見えたり、眞ツ黑に見えたりする。眞ツ靑でもいい。また、眞ツ黑でもいい。が、その度毎に、かの女の顏からふツくらした肉附きが殺げて行くやうだ。

家を出た時も旣に筋肉の働らきがとまつたかのやうなこわい顏であつたが、一歩一歩、闇を拔けるに從つて、筋肉のうちに藏してゐた刄物のやうな骨が現はれて來たのだらうかと思はれた。そして、もツと行くうちに、かの女の骨ぐみが全く刄物その物になつて、こちらの身につき刺さるのではないかと云ふ心配まで起つた。

考へて見ると、かの女は鹽山にゐても、本統に愛されようとはしなかつた。まして自分から愛しよ

うとするなどとは恐らく夢にもなかつたらう。

『可愛いのよ』と、自分も口に出し、また實際全身にその意味の力を込めたと思はれるのは、この二日二晩のことだ。そしてそれが結局かの女には惡夢であつた。

『罰當り！もう、どうせ、おれに愛せられようといふ氣も出まい――おれを愛しようと云ふ氣はなほ更ら出まい。今までは五歩も十歩も讓つてゐたおれだが、もう、なアに、一歩なりとも假借しないぞ！』から義雄も殘忍な性質をあらはして見ると、後ろから附いて來るお鳥が腐れ緣といふ鎖りを引き摺つた痩せ犬であるやうに思はれた。

黑田邸の外壁にさしかかつた時、それに添ふて掘れてゐる大きなどぶがあつた。渠はこの中へこの附き物を突落して、暫らく身を隱してしまはうかとも思つた。が、そばの交番から巡査が出て來て、瓦斯燈のそこ光りを擴げたので、素直にそこを通り過ぎることが出來た。

『……』お鳥も物は云はなかつた。

『困つたものを引き受けなければならなくなつた』と思ふと、星だらけの夜ぞらを仰いでも、その暗い部分だけが目にも心にも殘つて、自分とかの女との見分けが附かなくなつた。

黑田のすぢかひに、西洋建ての藥局を持つてゐる大きな藥種屋がある。渠はそこでいろんな注入液を買つて來て、私かに不愉快な手療治をやつて見たことを思ひ出した。

『まだなほりませんか』と、そこの番頭がこいぎになつて云つたツけが――。
『この病氣に罹つた以上は、とても急になほりあやアしない』と、ますます燒けな冷酷を、押し詰つた自分の呼吸に引き入れた。
赤坂田町六丁目と福吉町とが挾んだ通りは、片かはが矢張り黑田邸につづいた一條邸で、繁つた樹木の影などで暗かつた。お鳥はそこで足をとどめた。ひやりとして、義雄はその方へふり返つた。
『どこへ行くのよ』と云ふ自烈たさうな聲が聽える。
『まア、附いてこい！』つい險しい返事をしたが、別に訂正もせずに、そのまま進んだ。實際、あてはないのだが、この先きへ行くと待ち合や藝者屋が多いから、そんな場所にはそんな醫者がゐないことはなからう位の考へはあつたのである。
田町三丁目のよく玉突きに來た赤坂亭のあたりへ來てから、ふと思ひ出したのだが、赤坂見附けのそばに梅毒、痳病、皮膚科專門といふ看板を出してあるところがあつた。
渠はそこへ行つて、そこを無理に叩き起した。

十四

原田の家から、毎日、義雄は本鄉の耳科病院へ、お鳥は赤坂見附けの醫者へかよつた。

お鳥は實際に顏いろも惡くなり、肉體も瘦せて來たほど、自分の病氣を氣にばかりして、琴の稽古を初めないのみならず、裁縫學校のことも殆ど全く云はなくなつた。

『まア、氣長に氣を落ちつけて養生してゐないと、この病氣は直るものでないから。』かう云つて、義雄が時々氣ちがひのやうに泣きわめくお鳥をなだめることもあると、

『では、もう一度どこかえい溫泉につれて行け』と、かの女は云ひ張つた。

が、渠は鹽山で苦しい目に會ひ、而もつれて行つたかの女には殆ど冷遇されどほしであつたことを思ふと、再び湯治などとしやれる氣にはなれなかつた。

且は、成るべく病人のぐずり泣きに接する機會を少くしやうとして、耳科醫通ひと學校を教へに行く時間の外でも、晝間は多く我善坊の家で勉強し、夜も遲くまで友人のところや玉突き場で暮した。

それでも、必ず谷町へとまりに行つた。そして、その理由が近ごろ段々自覺されて來た。渠は愛も結局獸慾だと斷定してゐるが、その獸慾が滿たされない今日、妻とは今年の初めから絕緣してゐる。それと同じ狀態を、何の必要があつてまたお鳥の元へ引きつけられるのか？

『おれには、觸覺が特別に發達してゐるのだらう――大理石の彫像のきめが細かいのを愛するやうに、おれはかの女の羽二重の肌を賞翫してゐるのだ。』渠はかう考へ込んでゐるが、その女の白い手あしの肌もこの頃は粟つぶのくツ付いたやうに粒立つて來た。

或朝、千代子は義雄の歸宅するを待ちかまへて、

『あなた、清水を原田さのんとこへ置いてあるんですか？』

『置からが、置くまいが、お前の知つたことかい！』渠はわざとそらぞらしく答へた。が、もう、感づかれてゐるだらうとは、お鳥がその友達に見付けられたと云つた時から覺悟してゐたのである。

『隱してゐても』と、睨むやうな目附きで、『ちやんと、人が知らせて呉れます、わ。』

『………』

『そこの駄菓子屋の娘が丁度あいつが這入るところへ出くわしたさうです――藥り瓶を提げて、いやな顏をしてイたさうだから、きツとあなたのが、案の定、移つたんでしよう――？』

『お前の身代りだと思やア、恨みツこはない筈だ。』

『あの罰當りが！』かの女は胸を少しそらして、さも氣持ちよささうに笑つた。『いい氣味だ！それでこツちの恨みが少しでも晴れたと云ふものだ。うちのものはどれだけ恨んでたことだか、云へたもんぢやアなかつた。』

『馬鹿を云ふな！』義雄はさう聽くとお鳥を辯護したくもなつて、『苟くも、暫らくの間だツて、おれの物にした以上は、おのれのからだも同樣なものだ。』

『あなたはあなた、さ。』かの女は横を向いたが、筋肉のぴく〳〵動く顏をまた直して、『それにして

も、あの宿料を早く取つて下さいよ。』
『宿料ツて――』
『あいつが喰ひつぶして行つた分です。』
『ああ、あれか？』義雄は今思ひ出したかのやうな風をした。
『そんなものア、もう、とツくに取つてしまつた。』
『そんなら、こツちへ渡して下さいな。』
『何も、お前に渡す必要はない――おれが直ぐ使つてしまつた。』
『いい加減なことをおツしやい！』千代子は躍起になつて、その充血して來た目を飛び出しさうに浮ばせて、『きツと、そのままにしてやつたんでしよう？あの女のことだから、きツと、男の膝にでも寄ツかかつて、あたい、もう、拂はんでもいい、わ、ね、とか何とか云つたのを、あなたはあなたで、鼻の下を長くして、うん、さうともさうとも！』
『よせ、馬鹿！』
『よせません！――お前のことだもの、うちの方へはどうとも胡麻化して置いてやるツ』と、かの女はまだ、こちらの云ひさうなことを、せりふか何かのやうに、顎に力を入れてしやべりつづけた。

『よせと云やアよせ！芝居に出る惡婆々アの稽古でもあるめいし。』
『惡婆々アでも、もとはお好きであつたのでしよう――？』
『………』義雄は横を向いた。相ひ手にするのもいやになつた程かの女を憎々しく思つた。然し、かの女は餘ほどいい考へでも出たやうに聲の調子を高め、
『どうです、わたしを一つ役者にしたら？』
『………』
『正直な役者になりますよ。』
『………』
『正直な――忠實な――あなたの思ふ通り働らく――さう云ふのがあなたの前から欲しがつてる女優でしよう？受け出して貰つたら、直ぐ逃げて行く薄情ものでもなければ、講習生に目見えに行つて、それツ切り歸らないしろ物でもありません、わ。』
義雄のあたまには、藝者吉彌の思ひ出やかの女優志願者周旋の失敗やが、自分の威厳があると思ふ歷史を恥かしめるやうにひし〳〵ときざみ込まれた。そして、渠はかの女がどんな皮肉な顏をしてゐるのかと盜み見ると、きよと〳〵した眞顏であつた。で、睨み付けて、
『氣ちがひ！』

『でも、あなたはまた清水をおしまひには女優にする氣でしよう?』
『そんなことが分るものか?』かう云つて除けたが、義雄にはその考へがないでもなかつた。が、まだ自分以外には、お鳥そのものにも云つてない。
『分りますとも――わたしにやア、ね、正直の神さまが附いてゐますから、どんなことでも、人が云つて呉れます。云つてくれなけりやア、また、このわたしの心の目に見えます。』
『それが既に氣ちがひの證據だ。』
『何の證據でも、わたしはあなたのやうなお人よしぢやア御座いませんから、ね。』
『……』義雄はぎツくりとして考へた、自分はこれまでに人の約束を信じて馬鹿を見たこともある。なけなしの金を無理に貸してやつて、その儘にせられてしまつたこともある。女にうち込んで、却つて向ふにもて遊ばれたやうなこともある。が、すべて身づからさう許して、別な覺悟の上に立つて來た。その覺悟は矢張りしツかりした自我主義で、この根本を侵されない以上は、毫も恥ることはなかつたと。そして自分を知らない妻の言葉を非常の侮蔑と見て、突ツかかるやうに奴鳴つた。『お人よしとア何だ?』
『お人よしぢやア御座いませんか?』千代子は態度の變つた所天から身を警戒しながら、早口に、『あな

たは何でも自分でやつて來たと思つてるんでしようが、ね、みんなわたしのお蔭ですよ。吉彌の時でも、わたしが日光に出かけて行かなけりやア、始末が付かなかつたんぢやアありませんか？そして、あなたがわたしに隱してしたことはみんな失敗です。——隱してゐても、知れるから不思議だ。——これはあなたに長年いじめられて來たお蔭かも知れませんが、ね、あの女優志願の女でも、いい女はいい女だが、わたしが蔭でちよツと見て、こりやア駄目だ、な、と思つたら、果してその通りでありました。——今度のことでも、その初めから分つてゐたんで、もう、ちやんと呪つてあるから』と、矢張りきよと〳〵した眞顏だが、どこかにその呪ひの場所が實際あるぞと云ふやうな青白い微笑を浮べて、『どうせ、いいことはありツこ無し、さ。』

『………』義雄はじツと妻の方を見た。そして、直ぐにでも得意の平手打ちを喰らはせやうと待ちかまへてゐた張り合ひがなくなつた。かの女の顏が馬鹿〳〵しいほど凄い——と云ふのは、こちらから手でも擧げれば、直ぐ飛びかからうと意地〳〵してゐる癖に、堅く横に引き結んだ口のぴく〳〵動く口びるから、いやに勝ち誇つた樣子が漏れてゐる。

鬼女の笑ひ——執念深い呪ひの女——深夜、髮を亂したあたまに蠟燭を三本立て、口に髮剃りを喰はへ、片手に藁人形、片手にかな槌を持つた丑滿參りを想像して、義雄はぞツとした。このやうにヒステリの高ぶつて來た女なら、それくらゐのことは田舍なら仕かねまいと。

同時に、かの女が近ごろ頻りに
『わたしには神さまが附いてゐますから、ね』と云ふのも、義雄は氣にならないではない。かの女はさう身づから信ずるやうになつてから、絶えず陰陽に關する書物を讀み出して――うらない師になりたいも、餘ほど何うかしてゐるのではないかと、こちらにも思はれた。
が、若し離婚を受けた後の生活準備にとして、そんな下らない陰陽學などを大事さうに讀んでゐながら、なほ且、誰れからか聽いた今の法律を楯に離婚を承知しないかの女のこころ根を思ふと、義雄は如何にもそれが憎くて溜らないのである。
『陰陽師、身の上を知らずが、もう、今かち始まつてるのだ――馬鹿！手めへのやうに執念深い鬼婆婆アこそは、な、どうせ碌なことアねいのだ。』
『どう致しまして』と、喰ひ付きさうに口を開らいたが、また堅く一文字に引いた口の兩端が、こちらにはかの女の耳までも届いたやうな氣がした。
『そのつらを見ろ！』
『あなたこそ自分の顏を御覽なさい――今に、あの女は――』
『手めへは、な、あの女、あの女とばかり云ふが、おれはお前の考へてるほど淸水に夢中ぢやアないのだ。』

『なアに、御遠慮なく夢中におなりなさいよ――今ぢやア、そのはうが早くかたが付いていいんですから』と、かの女は横を向いて、變に笑ひながら、庭を歩いてゐる雀を見た。

『馬鹿！呪ひが早く利くとでも思ふのだらう。』

『さうですとも――あの女の運命がきまつてしまうんです！』

『ふん、同時にまた手めへの死が來るのだぞ、そんな馬鹿な眞似をしちやア。』

『わたしには神さまが附いてゐて、守つて下さいます！』

『よし、それならそれでいいから、おれは意地にも清水をかばつて見せよう。呪ふなら、もツと、しツかり呪へ！丑滿どきに隣りの寺のあのおほ檜の木の天邊へでも登つて、ハイカラの藁人形を釘打ちにするがいい。さうしてその天邊からころがり落ちてくたばつて呉れりやア、あツちの女にもさぞ利き目が早からう。さうして二人とも同時に死んで呉れりやア、お前には離婚の手續きをしないで濟むし、清水からも手切れ金や療治代を取られないで方が付くし、おれにやア一擧兩得の策だ。』

『わたしにやアさうは行きませんよ！子供を育てあげるまでは、なか〳〵死にません。あいつこそ死んでも構はない腐れ女だ――あなたは』と、少し調子をおだやかにして、座を乘り出し、『知らないんでしようが、ね、あいつは前にも女房子もある炭屋の主人をだまさうとしたり――』

『もう、何度も聽いた！』

『ぢやア、馨さんを引ツかけようとしたのを知つてますか——あなたの弟御さまですよ？』

『そんなことがあるものか？』

『それだから、あなたは駄目だと云ふんです——馨さんが現在さう云ふんですもの。』

『そんなことア、あつたとしても、どうでもいいんだ！』から義雄はかの女を抑さへ附けてしまつた。が、實は、最も甚しく自分の威嚴をぶち毀わされた氣がした。

さういはれて見ると、中途から忘れてゐた疑ひが再び思ひ出されないでもない。

徴兵檢査を二年延ばされた年ごろではあるが、おやぢに末ツ子として可愛がられてばかりゐて、獨りでは汽車の切符の買ひ方さへ知らなかつた。あの卑怯な世間見ずの男に何が出來よう？田舍に行つてると云ふ、あの自分よりも年上の戀人だツて、本人が下宿屋のあと取りになれると思つたから、そのおかみさんになるのを狙らつて女の方から持ちかけたのに違ひないと、から義雄は今まで高をくくつてゐたのである。

お鳥がまだここにゐたうちは、かの女がよく馨の室へ行つて、夜おそくまで寢ころんで話し込んだことも知つてゐた。繼母が親類へ泊りに行つた時など、離れでは、若い男と女とが隣り合つて、各々一と間を占領した夜もあつて、義雄自身がそれを私かに妬ましく思つたことも覺えてゐる。が、その

時、まさか、事があつたとは信じてゐなかつた。
その後、お鳥が調子に乘つて、馨さんがこツそりやつて來たが、うまく云つて斷わつたといふ話をしたときも、かの女の浮氣からの面白半分な揑造だとばかり思つた。
然し疑つて見れば、お鳥が馨の來たといふのはおのれの行つたのを反對に語つたのかも知れない。また、馨がお鳥の來たことをしやべつたとすれば、それは同じくおのれの行つたのを反對にしやべつたとも考へられる。
孰れにしても、關係があつたことは、たとへ實際にあつても、云へないに相違ない。
『若しあれが弟のおふるであつたなら』と、義雄の胸には取り返しのつかない樣な恨みと怒りとのほのほがごッちやに燃えた。
『兎に角、あのお金だけはわたしの方へ渡して下さいよ、あなたから預かつたうちの會計が、そんなぢやアやり切れませんから』と云ひ置いて、いやな對照物なる千代子が立ち去つたあとでも、こちらのほのほはなか〳〵靜まらなかつた。そして、あのいやな千代子にだが、お人よしと云はれた自分をさまざまに考へて見ない譯に行かなかつた。

十五

耳科醫へ行つたついでに、義雄は小石川へまはり、秋夢のところで、お鳥との關係が詰らないことになつた不平をこぼしたり、この頃書いてゐる物の內容の一部を話したり、雜誌や新聞に出た問題を論じ合つたり、碁を打つたりして、晩餐を濟ませるまでゐた。

それから谷町へ歸つて見ると、意外にも迎へに出たのは我善坊の繼母であつた。繼母ばかりなら、丁度都合がいいから、ゆツくりわけの分るやうに自分のこころ持ちを聽かせられると思つた。

『まア、こツちへ入らツしやい』とみちびかれて、直ぐ奥の八疊へ行つて見ると、原田老人が爐ばたに坐わつてゐるこちらに、また意外にも、千代子が例の勝ち誇つたやうなつらがまへをしてゐる。それと少し隔つて、お政さんのそばに下を向いてゐたお鳥がにがい顏をしてこちらを見上げた。

渠はふら〳〵と癇癪を起こしたので、突ツ立たまま、

『また、氣ちがひじみたおしやべりをしたのだらう！』聲はなか〳〵慳貪であつた。

『いいえ、なにも』と、千代子も調子のはづれた甲聲だが、ぶたれはしないかと云ふ心配の爲めにか、爐の方へ少しにじり避けて身を固めた。『わたしは正當なことを云つて、今、原田さんに聽いて貰つたんです。』

『それが氣ちがひだ――貴樣のやうに軌道をはづれた人間が、落ち付いて正當なことを云へるものか？』

『ぢやア』と、目の色を變へて、いざと云へば引ツかきむしりに來さうな手がまへをして、『人の亭主を寢取つてもいいと云ふんですか？』

『何だ！』渠はいきなり右の手をあげて千代子の横ツ面を毆ぐらうとした。

『ぶつなら、おぶちなさい！』から頓狂に叫んで、千代子は立ちあがりざま、目をつぶつて義雄の兩手にしツかりしがみ付いた。そして、目を三角に明いて、涙をぽろぽろ落としながら、『さア、ぶつなら、おぶちなさい！ぶつなら、おぶちなさい！』

『……』義雄は默つて千代子の手をふりもぎつて、またなぐらうとした。

『およしなさいよ、そんなこと！』繼母はから叱りつけて、こちらをとめた。かの女はこんなことがありはしないかと心配してゐたやうにそばに立つてゐたのだ。

それで、立かけた老人も腰を据ゑたし、義雄も多少氣がすいたので、第一にお鳥を無言でなだめるつもりで、そのそばへ行つて坐わつた。そして渠は高まつた息を身づから靜めようとした。

『寢取つたのではない』と、お鳥は千代子の方へ目をぢツとあげて、然し皆に向つて云ふやうに云つた。これも怒つてゐるが、その聲は控へ目であつた。

『寢取つたんぢやアありませんか？』千代子は相變らず聲が高く、とがつてゐた。

『よせ、そんな卑俗な言葉は！』から義雄は一喝してしまつた。が、考へると、兎に角、自分の妻な

る者がこんなみだらなことを云ふやうになつたのは自分の罪だ。自分自身の行動に對しては、たとへ社會が同情しないでも、また社會から輕侮されても、それは自分の覺悟の前だから、僞はりの辯解などするつもりはない。が、自分の妻がまだ無垢なお政さんのやうな娘もゐる前でそんな、自分自身でさへ云つたことのないほどの卑しい物の云ひぶりをするのが、道德者的なここの主人の手前もあるから、如何にも不本意に思へた。で、『どうせ、妻はこの頃少し氣が違つてゐるやうですから、今のやうな失禮は、どうぞ惡からず』と、渠は老人の方へ向いて、ここの主人と交際し出してから初めての詫びごとをした。

『どう致しまして』と、老人も初めてつぐんでゐた口を開らき、一層まじめ腐つた顏になつた。

『わたくしも惡う御座いました、わ。』千代子も殆ど夢中にのぼせてゐたその勢ひをゆるめた。そしてきまりが惡さうに　人の顏を見ながら、『でも、わたくしが氣ちがひに見えるでしようか？』

『正氣で今のやうな失禮な言葉が人の前で云へるか？』から、また義雄はかの女をなじつた。

『いや、それは』と、老人は無理に微笑を浮べながら、義雄に向ひ、『君もおこつたやうに、細君も腹が立つてをつたからで——惡いと云へば、そりやア、君も少しのぼせてゐるよ。』

『ほ、ほ！』お政さんは笑つた。

『ねえ』と、繼母もおつき合ひにお政さんの顏を見て微笑した。それをお鳥はまた何を云やアがると云ふ風に睨んだ。

『まア、冗談は置いて――お鳥さんにも下りて來て貰つて、今まで二人の云ひ分を聽いてゐたのだが、ね、細君の話すすぢ道はよく立つてをる。何も、ほかの女を持つのが一概に行けないと云ふのではないし、細君が承諾の上で、家族の生活を困らない樣にしてから、やつて呉れと云ふのだ。』

『それも、この人が』と、千代子はお鳥の見向いたこはい顏をあごでそれとさして、『ねだつてるらしい無理や贅澤を――』

『贅澤などしやせん！』お鳥は憎々しさうにさへ切つた。が、千代子はそれに構はず、

『無理や贅澤を云ふんぢやアないんです。家族がやツと暮せるだけのことをして下さいと賴むんです、わ。』

『詰り』と、老人が受けて、『承諾を經ないで、隱れ遊びをしてくれるなと云ふんだから、これほどありがたいことは無い、さ。』

『なアに。』義雄はあざ笑ひながら、『話したツて、承諾する筈はなかつたのです。』

『そりやア』と、千代子も負けない氣で、お鳥をまたあごであしらひ、『この人なら承諾しないかも知れません、さ。』

『よせ！』義雄は、横を向いて聽かないふりをしてゐるお鳥をかばふつもりで、『今の問題は淸水が元だ。』

『でも、こんな女には限らないでしよう。』

『まア、奥さんは待つて入らツしやい。』老人はかの女を制して、『淸水さんも亦よく分つてゐます。かうなつた上は、どうせ、病氣だけは直して貰ふが、直つたら綺麗に手を切りますと云つてをる。』

『……』へい、人を出し拔いて、もう、そんなことを云つたのかと、義雄はお鳥に味方する心の張りが俄かにゆるんでしまつた。『僕にも僕の考へがあるのです。』かう云つて、お鳥と顏を見合はせた時、直ぐ別れたらどうだと云つてやりたかつた。が、冷やかに向き直つて、老人に、『然し別れる、別れないは、こちら二人の自由ですから、ね、何も、家族がここまで出しやばつて來て、干渉がましいことをするのは好ましくないです。』

『わたしはこの淸水さんの宿料を貰ひに來たんです。』

『まだそんな執念深いことをぬかすのか？』義雄の手はまたいら〳〵して來た。

『でも』と、千代子はそれを警戒しながら、『あれを貰はなけりやアあなたから預かつた家の會計が成り立ちません。』

『馬鹿を云ふな。たツた二圓や二圓五十錢のことでぶツつぶれるやうな商賣は、預けてない筈だ。』
『それはさうでしようけれど――』
『全體、お前とおれとは、な、お前の口調で云やア、同じ星のもとで生れてゐないのだ。迚くに離婚してゐた筈だが、ただ可哀さうだと思ひ〳〵して今までつゞいたのア、云つて見りやア、おれのお慈悲だ。』
『いいえ、違ひます――わたしが附いてゐなけりやア、あなたのやうな向ふ見ずは立つて行かれなかつたんです！』
『お前はよく向ふ見ず、向ふ見ずといふが、ね、おれの向ふ見ずは、いつもいつて聽かせる通り、一般人のやうな無自覺ではない。』
『自覺したものが下らない女などに夢中になれますか？』
『だから、人のやうな夢中ぢやアないのだ――身づから許して自己の光輝ある力を暗黑界のどん底までも擴張するので――』
『それがあなたの發展とかいふのでしようが、ね――いいえ、そんなことを云ふやうになつたのは、あなたはここ四五年前からですよ。わたしを茅ケ崎の海岸などへおツぽり出して置いて、さ、僅か十五圓や二十圓のお金で子供の二人や三人もの世話までさせ、御自分は鳴潮さんや大野さんと勝手な眞

似をしてイたぢやアありませんか？わたしが歸つて來てからでも、獨歩や秋夢のやうな惡友と交際して、隱し女を持つて見たり、濱町遊びを覺えたりしたんです。』

『そりやア、お前、觀察が足りないので――おれが「デカダン論」を書いた所以は、人間の光明界と暗黑界、云ひ換へれば、靈と肉とは自我實現に由つて合致されるものだと分つたのだ。さうしておれの行動と努力とが各方面に大膽勇猛になつて來ただけのことだ。』

『そんな六ケしいことア分りませんが、ね、待ち合へ行つたり、目かけを持つたりしてイるものが――』

『めかけぢやない！』聽き咎めたのはお鳥だ。

『何です』と、今にも飛びかかりさうにして、『めかけぢやアありませんか？』

『違ふ！』

『めかけです！』

『違ふ！女房が女房らしうせなんだから、人にまでこんな迷惑や病氣などをかけるやうになつたのだ！』お鳥のこらへてゐたらしい怒りが一時にその目にまで燃えて出ようとした。そして向ふが飛びかかつて來れば覺悟があるぞといはぬばかりに、かの女は親ゆびを中に他の四本の指で握り固めた兩手を、義雄がそれとなく見てゐると、いつでも自由に動かせるやうに構へた。

が、千代子はその手に乘るほど狂つてもゐなかつた。

『そりやアあなたの自業自得といふものです――めかけでなけりやア、圍ひ者が天道さまのお罰を受けたのでしよう』と、かの女はお鳥を睨み返してから、もとの言葉をこちらに向つて續けた。『そんな者を持つて敎育家になつてゐられますか？』

『また敎訓はよして貰ふ！それに、おれは英語の技術は受け持つてるが、敎育家のやうな安ツぽい――』と云ひかけて義雄は老人の聽いてゐるのを遠慮したが、そこまで云つてしまつたのだから思ひ切つて語を繼ぎ、『ものぢやアない。學校など眼中にないばかりでなく、廣い社會に對しても、おれ自身の發展擴張を抽象的な、從つて外形的な、淺薄な敎訓のかたちを以てしたくないのだ。』

餘り懸命にしやべり出してゐたので、義雄は卷き烟草の火が膝に落ちたのを知らなかつた。それをおが鳥氣附いて、その手を以つて急いでふり拂つてくれた。

『今、この場でさう云ふことはお互に云ひツこなしとしましよう』と云ひながら、老人はまたお政さんが獨りでねむさうにしてゐるのに呼びかけ、茶を改めるやうに命じた。

『兎に角、わたしは淸水さんの宿料を貰つて行きます。』

『まだぬかすか！』義雄は握りこぶしを固めて千代子をおどし付けた。

『でも、わたしの清水に對する氣が濟みませんから。』
『まア、そんなことアどうでもいいぢやアありませんか?』繼母はそばから意地張つてる千代子に口を出した。
『しみツたれ!おれの使つたものア斷じて返さない!』
『ぢやア、今度取れた分から先月の補助を出して下さいますか?』
『やるべき時アやる!』
『それが當てはづれになるから、毎月不足が嵩むんです。』
『何でもいいから、手めへは畜生のやうに子供を可愛がつて、おとなしく下宿屋のかみさんでゐりやいいんだ——もう、用はないから、歸れ!歸れ!』
『歸りますとも、あなたに云はれないでも、歸りますとも。』かうゆツくり云つて、にやり〳〵笑ひながら、千代子はこちらを一層いら〳〵させるつもりでか、わざと腰を落ち付けてゐる。
早く歸れと云はないばかりしてお鳥は立ちあがつた。そしてにがい〳〵顏をして、何の挨拶もしないでこちらの後ろから繼母の後ろを通り、千代子が飛びかかりでもしたらと云ふ警戒でもするやうにしながら、この室をはしご段の方へ出た。その後ろ姿を千代子と繼母とが相ひ對して同時に憎らしさうに見送つた。

『………』それを見た義雄がふと氣付くと、さつき、千代子に引ツかかれたと見え、爪の跡が自分の手の甲に赤くみみず張れになつてゐる。渠はそれを二人に見られまいとして、その手を急いで裏返した。

『田村君も、まア、よく考へて、早く適當な結末をつける方がいいです、な』と、老人は改まつた。

『勿論、その通りです。』

『どちらにもよくないから。』

『それやア實際です。』

『家を困らせないでなら、まだしもよう御座んすが、ねえ』と、繼母もこちらを見て云つた。

こんな話をしてゐるうちも、千代子は二階の方へぢツと氣を取られてゐるやうすであつた。そしてお鳥がはしご段をあがり切つた音を聽き澄ましてから、こちらを向き血の氣の少い顏を初めてにツこりさせて、

『苦しいツて』と、聲をひそめ、『毎日泣き續けてるさうぢやアありませんか？』

『………』お鳥が痛みに堪へないで泣きつづけてゐるなど、そんなことを誰れが云つた？老人にきまつてゐる。して見ると、渠の癖として、おほ袈裟に――このおほ袈裟と云ふことが義雄の最も嫌ひな

ことだのに――語つたに相違ないと思へた。で、義雄は渠に對してその法螺吹きの本性を暗に暴露してやる考へで、千代子に答へた『なアに、さうでもない、さ。』
『でも、泣いてるんだらう。』かう、かの女は、ぞんざいに問ひ返したが、だらうは他人もしくは亭主をまでも子供あつかひにした語調だといつも叱られてゐるのに氣が付いたらしく、直ぐ『でしよう』と云ひ換へた。
『……』義雄は然しまたかと云はないばかりにかの女のぞんざいを怒つて、再び返事をしてやらなかつた。そして、お鳥が二階できツと、今夜こそはくやし泣きに泣いてるのだらうと思ひ續けた。
『でも、可哀さう、ね。』繼母が笑ひながら口を出し、『まだ若いのに、義雄さんも罪なことをしたの、ね。』
『あいつは』と、千代子はお鳥のことを言つて、『自業自得だから、仕かたがない、さ――けれど、この人も、どうせ、碌な死にかたはしますまいよ――何度わたしに苦勞や心配をかけたか分らないんですもの。』
『お前さんが苦勞性に生まれて來たのだから、仕方がないと諦らめておいでなさいよ。また、何かの功德になることもありましようから、ね。』
『何も世の中です。』老人も二人の話に乘り、坊主くさい調子で、『さうくよくよしたものぢやアないで

す。田村君も、云つて見りやア狐につままれてゐるやうなもので、一旦迷ひが覺めりやア、また元の根に返ります。』

『これが迷ひと云ふものなら』と、義雄はいつも沈思瞑想する時のやうに目を半眼に開らき、『僕は迷ひから迷ひに渡つて行くのが生命です。』

『浮氣だからでしよう』と、千代子はさへ切つたが、こちらはそれには頓着せず、

『僕は考へと實際とを人のやうに別けて置くことが出來ないのです。この二つが僕といふ自我の氣分で合致してゐるのが僕の生活です。實は、迷ひもない、その代り悟りもない。』

『だから、君はいつもいら／＼してをる。』

『ほ、ほ』と、千代子は笑ひの合づちを打つた。自分の考へも老人のと同じだと思つたらしい。

『然し氣分のいら／＼するのは、たとへば陽炎が春の野のおもてにちら／＼のぼるのと同樣で——そのちら／＼よりほかにかげろふの實質がないやうに、このいら／＼を除いては、近代的な人間、即ち、宇宙の本體も現象もあつたものぢやアないのです。實質を攫み得ないものは空理に安んじてゐるのです。さうして空理は生命のない死物です。』

『君はただ佛教のいはゆる色即是空の理を大膽に實行してゐるに過ぎない。』

『いや、それだけのことぢやアまだ滿足な說明にはなりません。』

『なアに』と、千代子はまた確信ある口調で、『星が肝心ですよ。人間は何でも星を調べて見さへすりやア分らないことはないんです。』

『そんな下らない迷信はやめろ！』

『それでも、當るから不思議でしよう？』

『詰らないことアよせ！』

『さア、歸りましようよ、もう、こッちの用は濟んだのだから。』繼母はもぢもぢして千代子を促がした。

『まア、よろしいでしよう。』老人は歸りかけようとした二人をとめて、義雄に新らしい問題を持ち出した。『君の哲學は哲學として置いて、――一つ賴みがあるのだが――いよ〳〵――引き移つて貰ひたいが、な――』

『ああ、さうですか？』義雄は不意に水をあびせられたやうにひやりとした。そりやア、さう云はれないでも、どこかいいところがあれば引き移るつもりであつたが、既に度々立ち退きを命じてゐたかの如く、勿體振つて『いよ〳〵』など附け加へたのが氣に喰はないのみならず、餘りそらぞらしく聞えたのである。

心がいら〳〵してゐるから、さう惡く取れたのではないかとも考へて見たが、どうもさうではない。からなつては、千代子に對しても濟まないから、どうか立ち退いて貰ひたいと出たのならまだしももし

ほらしい。が、こちらからさう云はせない爲めの振舞ひは毎晩のやうに喜んで受け、その酒に醉へばまた勝手な法螺を吹いてゐながら、千代子の前だからツて、こちらを下すんだやうにそんな體裁のいいことを云ふのは許さない。餘り蟲がよ過ぎる！

と、かう、老友の表裏があり過ぎるのを含んだ様子を義雄が見せてゐるのを知つてか、知らないでか、老人はなほ癪に障るほど落ち付いた風で、

『こんなことがあつては、僕が君の細君に濟まないからと云ふことは、これまでにも、度々君に話してゐた通りだが――』

『いや、分りました。そんなお話しはこれまでにまだなかつたとしても――』

かう云ひかけて、義雄はなじるやうに老人を見詰めると、老人は、まア、そんな野暮は云ふなと云ふ目附きをした。

『然しさうあるべき筈です、わ、原田さんとしても。』千代子も亦斯ういやに皮肉なぶしつけを云つた。

それを聽くと、義雄はまたここの主人を辯護してやりたくもなつて、かの女に、

『ふん、どこへ行つたツて、貴さまなどをあばれ込ませないのはおんなじことだぞ！』

『わたしはここへもあばれ込みはしませんよ、人聽きの惡い！』

『あばれ込んだも同然だ。』

『いいえ、違ひます！』
『まア、そんなことは』と、老人は少し面倒臭さうに、『どちらでもいいではありませんか、なア御隠居さん？』
『さうですよ、もう、分つたものア分つたのですから』と、繼母はまたあとの方へすさつて、主人に歸る挨拶をした。それからこちらに向ひ、『ぢやア、歸りますから、ね、今夜の話はよく忘れないやうに、ね。』
『うん。』義雄はいや／＼ながらうなづいたばかりだ。
千代子も老人に挨拶した後、所天の方を見て、あざ笑ひながら、
『ぢやア、左様なら——今月はきツとお金を間違ひないやうに、ね。』
『くどい！』
『どこへ隠れたツて、分りますよ。』
『ふん、分らないところへ隠れてやらア。』
『どこへだツて』と、立あがつて、『追ツ驅けて行きます、わ、例の神星で、ね。』
『今度來るなら』と、義雄は坐わつたまま、『骨と皮になつて來い——直ぐ葬つてやらア。』
『そんなひどいことは云ひツこなしです。』老人は立ち上つて、お政さんと共に二人を送つて出た。

『…………』義雄は歸つて行くもののことや二階のことを一緒に考へながら、その場にただ坐わつてゐた。』

十六

義雄が原田老人に別れて、二階へあがつて見ると、お鳥は電燈のもとに身を投げ出したまま、ぶツ倒れてゐた。
『馬鹿な眞似をするなよ、風を引くぢやアないか？』
『引いてもかまん！』かの女は疊の音をさせて向ふ向きに半ば起きあがり、からだを支へた左りの手の角立つた肩越しにこちらをふり向いた。こちらの豫想通り泣いてたのかして、目に涙を一杯溜めてゐる。その涙がぽろ〳〵落ちて、たツぷりした目のうるほひが少し直つたらしい時、こちらを睨みながら、力の籠つた聲で、『畜生！馬鹿！』
『…………』
『野呂間！意久地なし！』
『…………』
『かかアの前ぢや、何とも云へんぢやないか？』

『あれでもかい？』
『さう、さ。——では、離縁の離の字でも云ふたか？』
『云つて、何の役に立つ？』
『役に立たんでかい？めかけ、めかけ云はれて、こツちは人聽きが惡いぢやないか？』
『惡くツたツて、仕やうがない、さ。』
『仕やうのないことがあるもんか？』
『仕やうがない。』
『ないことはない！』
『たとへあるとしても、ね』と、義雄はわざとおだやかに、『それが、もう、お前と何の關係もないよ。』
『どうして』と、お鳥はちよツと氣を折られた。そんて、投げ出してゐた兩の足を縮めてこちらの方へ膝を向け直して坐わつた。
『どうせ別れるのださうぢやアないか？』から、渠はさツきからさぐつて見たかつたのである。
『さう、さ。』かの女も意地になつて、息を大きく呼吸し出して、張つた胸の兩方の乳のあたりまでも衣物の上へ動悸を打たせながら、『別れたけりや今からでも別れてやる——直ぐ病氣を直せ、直せ！』
『ふん！それにやア、藥りを渡してある。醫者にも行かしてある。』

『それが少しも利かんぢやないか？』
『さうやき〳〵するから、さ。』
『やき〳〵せんでも、直りやせん――痛うて溜らないぢやないか？』自烈たさうにからだを振つた。
『それが惡いんだ。』
『あの醫者ツぽがよくないのだ！二週間で直るなどと嘘を云ふて、もう二十日になつても、ちツともよくならん。旦那さんと相撲を取つたら行けません』と、醫者のらしい口調を意地惡さうに眞似て、
『人を馬鹿にしてる！そんなことしやせんぢやないか？』
『さう、さ――お前が病氣になつてからと云ふものはな。』
『それに、何で直らん。――では、注入を日に二回に增して見ましようと云ふて、さうやつても、矢ツ張りもとの通りだ。も一度溫泉に行かんなら、もツとえい病院へやつて呉れ！』
『早く直つて、早く手を切りたいのか？』渠はなほ不平である。同じやうにいやな女だとは思ひながらも、千代子よりはずツと若くツて血があツたかいのがまだしもよかつた。
『手は切らんでも、早う直つた方がえいぢやないか？』かの女は往生したやうに氣が落ちついて來た。
『それもさうだ、ね』と答へたが、渠にはまだ早くよくなれと云ふ願ひもさう切實ではなかつた。もツといい女であつたらと云ふ希望に向つて行くと、必は段々現在からお留守になつて、こんな事情

のもとにあるお鳥のからだなどは、暗い物置きのやうな小部屋へほうり込んで置けばいいやうな氣にもなつた。

『痛い、痛い』とばかり、かの女はあまえるやうな關西口調でその夜も頻りに泣き訴へてゐた。

十七

原田の家族にも知らせないで、義雄がお鳥を引ツ越させたのは、赤阪の仲の町の裏通りで、丁度、氷川神社の森の後ろに當つてゐた。

谷町から福吉町と今井町との間をあがり、氷川町を勝伯の邸前から神社前の阪下に出で、その通りを直ぐ左りへ曲つて、二丁ほど行くと、一方は神社つゞきの森で、片側町になつてゐる。或琵琶彈きの家のさき隣りに小さい曖昧な料理やがあつて、そのさきが四五軒に渡つた二階建て長屋だ。とツ付きが貸し蒲團、その次ぎが大工の手間取り、その次ぎが或辯護士のおやぢで、息子の家に使つた下女に孕ませて出來た子とその母と共に佗び住まひをさせられてゐるもの。その次ぎは、職業の分らない夫婦だ。そのまた次ぎの角は辨當屋だが、そこだけは平家だ。

この四軒の二階の殆どすべては年中締め切られて、『明き間あり』の張り札の懸つてゐないことはない。義雄も、父が亡くなるまで赤阪臺町にゐた時、そこを通るたんびに陰氣臭いところだとは思はない

ことはなかつた。たまに珍らしくも戸がぽつりと明いたかと思つても、二三日してから通ると、もう、借り手はどこかへ行つたかして締つたまゝになつてゐる。

向ふ側が高い森で日光をさへぎるから、濕氣がちで行けないのだらうと、義雄は兼てさう思つてゐた。で、そとを歩く時はいつも明き間を心がけてゐるに拘らず、そこだけは知つてゐてもお鳥に知らせなかつた。

ところが、かの女は醫者からの歸りに一つ木から新町をさかのぼり、獨りでそこを見付け、大工の裏二階を月三圓で約束して來たのである。

たツた三疊の押し入れも何もない部屋だ。

『こんなところで辛抱する代り、大學病院か、どこか、もツとえい醫者に見て貰ふ。』からお鳥は引ツ越したてに云つた。

『さうするがいい、さ。』義雄も、かの女が遠慮勝ちになつて來たのを可哀さうだと思つて、つい、その氣になつた。が、どうせ自分との關係に碌な終りを告げる女ではなからうから、そのからだはどんなところにでもごろ付かせて置けばいいのだと云ふ下ごころがあつた。

谷町で借りてゐた蒲團はそこを引き拂ふ時蒲團屋へ返したので、改めて隣りから日に六錢の割りで三枚一組のを借り、角の辨當屋から三度の食事を持つて來させて萬事を間に合はせた。

そしてお鳥は今回、毎日山王下まで歩いて行つて、そこから電車で牛込の逢阪下なる某婦人科病院へ通ふことになつた。この病氣には歩いたり、電車に乘つたりするのが行けないから、入院しろと云はれたと云つて、かの女はさうしたさうに諷したが、義雄はそこまで贊成する氣にはなれなかつた。

それでなくとも、かの女の爲めに日に一圓足らずの金は、病院行きの爲めについえて行くのである。それを義雄は全く無駄な必要だと思ひながら、出した。

『自分がこんなけツたいな病氣を移しさへせんなら、立派な帶や衣物が買へるのに』と、お鳥も日々惜しさうにしてその金を持つて行つた。

學校を敎へてしやべり勞れた日など、義雄は直ぐその足でお鳥のところへころげ込むことがある。そして、まだ病院から歸つてゐないと、何だか置き去りをでも喰はせられた氣がして、落ち付くことが出來ない。

『あたいが逃げたら、どうする？』

『へん！丁度仕合はせ、さ――面倒がなくなつて。』

こんなことを云ひ合つたのも、義雄の本心から云へば、冗談ではなく、寧ろさうなるか、それとも亦くたばつて吳れるか、と云ふ風な願ひを絕えず持つてゐながら、向ふから自分を突ツ放すやうなこ

とはされたくないやうな氣もする。

もう、歸つてゐなければならないのにと思ふと、何をぐづ〳〵してゐるのか、不埒だとまで心が苛立つて來る。

下へおりて、薄暗い部屋で大工のかみさんと何氣なく話しをする振りで、お鳥がけさどんな風をして出たかと云ふやうなことを聽いて見た。また、二階へあがつて、その室の壁ぎはに、行李がその儘に置いてあるのに氣が付き、かの女の身代はこれだけで、これさへあれば、どこへもつッ走つたと云ふ心配はないと安心した。

が、また、かの女のきんからかんの手文庫を明けて、何か怪しい手紙でも藏てゐはしないかと調べて見た。然し、

『叔母さん』と呼かけて北海道からいつもよこす姪のハガキが一つふえただけで、それには、『うちのお父さんはどこへ行きましたのでしようか、東京で見當りませんか』と書いてあつた。これは義雄には耳新らしい事實で、紀州の兄、北海道の兄の外に、今一人行き方の知れない兄があることが分つた。が、お鳥はそれを隱してゐるので、こちらも亦そ知らぬ振りをして文庫の蓋を締めた。

そして、あのじツと沈んだ目附き、意地惡さうな目附きには、かの女自身の祕密ばかりでなく、いろんな事件が這入り込んでゐるのだらうと考へた。

疊んだ蒲團は、から紙の後ろのあかり取りがない中座敷へ押し出してあるから、から紙を締めて置けば見ないでも濟んでゐるが、この三疊だけは明るく開らいて秋の西日を受けてゐるので、障子の切り張りや壁がみのはがれがよく目に付いて穢い。

そこへ持つて來て、行李のあると反對の壁ぎはに、古道具屋で買つた古い〱ちやぶ臺を机がはりに据ゑて、その上に義雄が持つて來た雜誌現代小說や趣味や中央公論などが載せてあつて、レツテルに桃の繪を出した鑵詰のあき鑵が筆立てになつてゐる。また、ふちの焦げた箱火鉢に安ツぽい藤づるのおほ土瓶がかかつてゐるのを見ても、『よくこれで默つてる、な。』義雄は獨り冷やかにほほ笑んで、こちらからかの女を突ツ放してやる時機を考へて見た。『然し、どうしてるんだらう——遲い!』

かの女がゐればまだしもだが、かの女のゐない部屋は穢いばかりで、坐わつてゐる氣になれない。立つたり、しやがんだりして見たあげく、どうせ、お鳥が歸つて來たら、きツとまた、『早う直せ、直せ』の一天張りだらうと思はれて、そのにがい顏を見たくなくなつた。

玉突きにでも行つてやれと、思ひ切つて立ち歸らうとすると、隣の屋敷から艶ツぽい女の聲が聽えたので、ちよツと障子を明けて見た。

その屋敷の裏庭には、大きな柿の木があつて、枝々には澤山の實が赤く熟してゐて、その下にひよろ高いコスモスの花が白やうす紅に咲いてゐる。が、よく激烈な夫婦喧嘩をする金貸しの美しい細君の

聲であつたと確に思ふが――姿はその緣がはにも、どこにも見えなかつた。

無地の牡丹色メリンスの被布も、紀州にゐた時拵らへたのだらう、田舍者じみてをかしいのだが、お鳥がいい氣になつて着澄ましてゐるのを幸ひ、義雄はそツとそのまゝにさせてあつた。

すると、かの女はその姿でいつの間にか三枚四十五錢の寫眞を取つて來て、なかなか機嫌よく、『よう寫つただろ』と、自慢さうに義雄に見せた。『あすこは安うて、上手だ。』

『案げいにがい顏もしてゐねい、なア』と、渠は冷かし半分に答へた。

かの女の病氣は、何か少し事情の變るたんびに、その當座だけよくなる。毎日の小使ひを少しかためて前渡しした時がさうだ。赤坂見附けで注入を日に二度にするやうになつた時がさうだ。牛込へかはつて、さう注入ばかりしたツて、利くと云ふ譯のものではないと云はれた時がさうだ。病院でどこかの若い細君と知り合ひになつた時がさうだ。義雄と一緒にうなぎ飯でも喰べに行つた時がさうだ。そして暫らく立つと、また〳〵痛い〳〵と泣き出す。

義雄はそれを氣の加減だ、かの女の神經が獨りで病氣をよくもしたり、惡くもしたりしてゐるので、實際は決して直る方には向いてゐないのだと思つた。

『おれも經驗したから云ふのだが、痛みを忘れてゐるのが一番だよ。』かう云ふことを云つて聽かせても、かの女はなか〳〵承知しない。

『人のことだとおもて、ちツとも思ひやりがないんだ——このちく〳〵するのが、眠つてをつたツて、忘れられるものか？』

さう云ふものの、お鳥の餘りいやな顏、にがい顏をするのをこちらで避けるやうな樣子が段々に見えて來た爲めだらう、かの女もこちらが來た時は或るべく笑がほを見せてゐようと努めるやうになつた。

義雄も亦我善坊で寢ることは滅多になかつた。晝間のうちは、けふは出ないでゐよう、時々はお鳥を獨りで寢かして、寂しい目をさせてやるのも、男を一層熱心に思はせる藥りだと考へてゐながらも、夜になると直ぐ、習慣のやうに氣が變つて、ふら〳〵と出て行くのである。

『御馳走を拵らへて待つてたのに、早う來ないから癪に障つてみんな喰べてしもた。』こんな單純なお鳥の恨み言が却つてよくこちらの心を引いて、けふはまた何か出來てゐるか知らんと云ふやうな樂しみを抱かせた。

それも、然し初めの間は成るべく宵から出かけるやうにして見たが、段々圖々しくかまへるやうになつた。かの女の拵らへるしなびた茄子の鴫燒きや、丸切り大根のお汁にもろこし粉をこね丸めて入れたのやを添へにして、冷たい辨當飯も珍らしくなくなつた。

義雄はこの頃時間が惜しくて溜らないのである。家への補助は學校から取る分を割けばいいとしても、自分の書籍代や交際費や、お鳥の生活に病院費は、別に原稿を書いて儲けなければならない。

それに原稿生活を眞劍にするだけの努力があれば、それを以つて何か一つおほ儲けの出來る有形的な事業に發展して行つて見たいと云ふ考へがあつた。そしてこの頃ほどに斯うかねの欲しいことは今までに無かつた。

そんなことを考へると、勞力に報いるだけの報酬が取れないやうな原稿などは書くのもいやになることがあると同時に、お鳥のやうな女にかかり合つてゐるのも馬鹿馬鹿しい氣がする。それやこれやで氣が荒立つて來ると、燒け半分に筆も何もほうり出し、千代子を毆ぐりつけた時などと同じこころ持ちで家を飛び出し、半夜を全く玉突き屋で過ごしてしまうことも度々だ。

それでも、矢ツ張り、結局は、中の町へ車を驅けらし、寢てゐる大工の家をたたき起して、お鳥の二階へとほつた。

お鳥は然し義雄が蝙蝠か何ぞのやうに夜――而も遲く――來て、朝は直ぐ歸つてしまうのを不平がつた。

『もツと早うおいでよ、下は働らきどで、寢るのが早いから』と云つた。

『然し時間が惜しいのだ。』

『時間が惜しけりやア、ここで勉强したらえいぢやないか！』

『議論なんかになると、參考書がなければ書けない。』
『では、それも持つて來たらどう？』
『一々持つて來られるものか、こんな狹いところへ？』かう、ぶし付けに答へたが、義雄はかの女から妻子のゐるところだから離れたくないのだらうと云はれるのを先きまわりして、『我善坊には、ね、おれの讀破した書物が山澤あるのだ。その書物のあるところが、おれの家で、妻子など眼中にないのだから、これは前以つて斷わつて置くよ。』
『どうだか、へん、分るもんか？』
『それが分らないやうな女ぢやア、色をとこなど持つ資格はない。』
『色をとこぢやない。』
『さうか、ね？』こんなことを云ひながらも、渠はお鳥のそばでは氣がゆるんで、仕事が手につかないのを身づから知つてゐる。が、さう明らさまにうち明けることは自分の弱みを見せてかの女を勝ち誇らせでもするやうに思ふから、したくなかつた。
　この頃、義雄の心を頻りに競爭的に刺戟するのは、畫家大野正則の努力と成功とである。大野はもとから非常な飲酒家で放蕩家だ。それが前の妻君を虐待して、今の靜子を入れようとした時、義雄は隨分と意見もした。が、大野は少しも用ゐる樣子はなかつた。

丁度、靜子をモデルにして大きな油繪を書いたのが上野の展覽會で多少の評判になつた、時のことだ。靜子も畫家だが、その書風とお轉婆らしい氣質とは大野の大嫌ひであつたのを、義雄は無理に勸めて渠の適當なモデルにさせた。ところが、それから靜子の愛嬌が大野の心を占領して、二人はついに戀と名聲との爲めに有頂天になつてしまつた。

その頃、義雄は妻子を茅ケ崎の海岸へやつてあつたので、毎日のやうに大野の家へ遊びに行つてゐた。それが、ありはしない厭な噂を二重に立てられることになつた。と云ふのは、田村が自分で關係してゐた靜子を大野に取られたので、その恨みに報いる爲めに大野の細君を自分の物にしてゐると云ふのであつた。

そんな詰らない噂で馬鹿を見るのもいやな上に、友人としての大野の餘りちツぽけな慢心と餘り締りのない放縱とを反省させる爲め、激烈な絕交狀を送つて、一年半ばかり交際を絕つてゐた。

『あの、君の激文は大事に箱の中にしまつてあるが、時々思ひ出しては奮發してゐたのだよ』とは、再び行き來するやうになつてからの大野の白狀であつた。

靜子のモデル繪はただ一ときの評判で、それツ切り世の中から忘れられたが、大野と靜子との眞面目な共同仕事は、現今、新式の芝居の書き割りなどに現はれて、着々渠の素養と枝巧とを見せてゐる。

それに比べると、義雄の現在は大野の三四年前である。

『忠告した者が今度は忠告せられなければならないぢやアないか』と義雄が云はれたのを、大野一個の友情から出たのだとは思はないで、却つてこの第二の忠告者の概括的な、世間並みの、何も同情のない、ただの皮肉だと受け取つた。

そして義雄は自分を唇の取れた齒のやうに寒く觀じた。

放縱だと人に云はれるのは、寧ろ自分の意氣込みの一部面を指摘せられたやうで氣持ちがいいのだが、友人までに――ただに大野ばかりでなく、自分の屬してゐる龍土會の諸氏からも――いやな皮肉や冷笑などを當てつけられるのが、この頃、非常に氣になつて來た。

自分の精神的事業は、如何に親しいものにでも、見えないのだ。寧ろ實業のやうな見える事業をやつて見せるに限る――それにしても、さきに詩を以つてばかり立つてゐた頃の勢ひは、その半分もない樣に、義雄は自分ながら感づかれた。

そりやア、『デカダン論』も出版したし、小說『耽溺』も書いた。また、一昨年から段々發表した長短論文を集めて、現在『新自然主義』と云ふ書を印刷に附させてゐる。が、詩界から散文界に移つたゆるみがまだ直らないで、新らしい立ち場を社會的に樹立してゐないのが、如何にも義雄の苦痛だ。

そこへ持つて來て、生活費がずん〳〵高まつたので、もツと金を儲ける爲めにも、何等かの發展を

講じなければならない。自分を活かすと云ふことでは、詩に向ふのも、小說へも、同じ發展であつた如く、藝術から實業に向ふのも亦同じそれだと思はれた――尤も、それには自分として自分の實行的藝術論の根本原理を內觀してゐるからであるとしてだ。そして大野のところへ呼ばれて、贅澤な御馳走になる時など、義雄は却つて友人に馬鹿にされるやうな氣がした。そして、『おい、しツかりしろよ』と、脊中を一つ叩かれて來た日など、義雄は一日、家に於いてふさぎ込んでゐた。そしてお鳥におぼれる心は直ちにそれが新發展を求める心持ちであることを知つた。

『これからまた夜學のお勤めですか』と、千代子がこわい顏で冷かすのを、いつも聽き捨てにして出る。が、消し跡をつけてでも來ると面倒だと思つて、わざと反對の方向へ足を運ぶ。それでも、なほ且後ろを見い、見い、お鳥のゐる方へ足が向き出すと、結局、同じ近みちへ這入ることになる。

それは今井町から登つて、氷川神社の裏手を通る、晝でも薄暗い道で――神社の森には、昔、天狗が住んでゐたといはれてゐるが、今は、裏門のところに猿を二三匹飼つてある。その高臺から眞下に、樹木の間から、お鳥のゐる長屋が見える。

その高臺から降りる曲りくねつた坂の中途に、大野がもと借りてゐた家がある。今は何者が住んでゐるか知らないが、そこの通りを過ぎるたんびに義雄は、大野の盛んな現狀に自分を引き比べて、氣の

ゆるんだやうな、失意のやうな、嫉妬のやうな感じに打たれたり、また芝居の書き割りなんて金の取れるだけであつて、その仕事は何の價値もないと云ふやうな別な競爭心を起したりした。

それがいやで溜らないのだが、矢ツ張り、そのさきに引ツ張るものがあるので、毎夜のやうにこの近みちをとほつて行く。

……まだ父が健在の時だ、大野のもとの細君が今ひとり別な畫家の細君を連れて、三月の節句に、宵から、白酒を飲みに來た。……女だてらに、何ぼ何でも、四合瓶を明けてしまうとは驚くぢアないかと、父は蔭で不興な顏をした。……二人とも強いのだから仕方がないと云ふと、亭主がみんな飲んだくれだから、いい氣になつてゐるのだ。注意しろ、と、また父は云つた。……義雄は然し共々に笑ひ興じて遲くまで二人を持て爲して、家から送つて出た。……

『わたし、醉つてふら／＼する、わ。』

『わたしもよ。』

『倒れちやアあぶないです。』

こんなことを笑ひ合ひながら、氷川の森に來たが、夜中の道が殆んど眞ツ暗なので、女どもは眞面目になつて、聲も碌に出せなかつた。

神社の裏門のところで、義雄が、

『そら、猿が』と威かして見たら、二人は同時にきやツと叫んで、兩わきからこちらの手にすがり付いた。………

千代子などとは違つて、大野のもとのは優しい、いい細君であつたのに――然しまた今のもお鳥などとは違ひ、所天の片腕になつてゐる。

などと、友人の身の上を非常に妬ましく思ひながら、渠の近眼でそこの坂を闇に辿りながら下りた時は、もう、夜中の十二時に近かつた。

しんとして、――道に落ちた木の葉がゆるくさら〳〵と風にころがつてゐる音がするばかりだ。

俄かにお鳥の が戀しくなつて、貸蒲團屋の今にも消えさうにまたたく瓦斯燈の隣りへ急いだ。

飛び付くやうに戶口を目ざして進み、晝間ならきたならしい變色の水が流れてゐるのが見える太いどぶを、どぶ板をがた〳〵音させて渡つた。

戶は無論締つてると思ひながらも、ちよツと手をかけて見た。

果してさうであつたが、どうせ明けて貰ふのだから、ただ立て寄せて置いて吳れたらいいのに――下のもの等がわざとさうするやうにも考へられた。

癪に障るやうな氣の毒なやうな思ひとが一緖に湧き溢れて來て、渠は先づ輕く戶を叩いて見た。

『いツそのこと、これからどこかへ行つて、獨りで飲み明かさうか？　もう、二ケ月足らずと云ふもの、完全な　　　にも觸れたことがない。』

外に立つたまゝ、ふと思ひ浮べたのは、下の人々もまだ逞ましい男と女であることだ。而も既に丈夫な子が一人ある。

をすめすの獅子はどんなに暗いほら穴にでも一緒に住む、人間もさうだらう。こんなに周圍も穢い陰氣な濕つぽい家にゐて、而もなほ子供を産んで行く。

から考へると、この暗夜に、わざ〳〵渠等と同じ穴も同前な家に眠りに來る義雄自身も、人の形をした毛だ物で、たとへ獅子でないまでも、狼か山猫のやうだ。

隣りの瓦斯燈の光りも消えかかつてゐるだけ、夜と云ふ暗い獸的な氣分がみなぎつて、闇に覺める官能の力を誘ひ出したのだらう――犬が鼻先で物を嗅いだやうに、ぷんと格子さきのどぶのいやな臭ひが義雄の耳と共に一方より利かない鼻に聽えて來た。

『こりやア溜らない。』渠は思はずそのどぶを渡り返した。が、折角來たのが惜しいやうでもあつて、立ち去り兼ねた。

香水――渠はこの刺戟がなければ、強い性慾も起らないほど、疲れてゐた――のついたハンケチで鼻を押さへながら、また引ツ返して戸を叩いて見た。――返事もない。

小さいふし穴や戸の透き間から覗いて見ると、中もひツそりして暗いやうだ。が、何だか、あの彌吉と云はれる子供が今にも目を覺まして、母獸の寢てゐるところを四足で這ひ出し、わんとか、にやアとか啼きさうな氣がした。

思ひ切つて、どん〱、どんと大きく叩いて見た。

『誰れだ』と、奧の方から奴鳴つたのは、毎あさ鉋や手斧を持つて出て行く主人の大工だ。

義雄は直ぐ獅子の猛り狂ひの怖ろしさを想像した。が、毎晩、來るものはきまつてるのに、人を馬鹿にするも程があると思ひ返した。

『田村です。』『少し強い角立つた返事をすると。

『さうですか』と云ふ、前の權幕とはころりと違つた聲が聽えた。

それも大工の聲であつたが、それツ切りで——人の出て來るけはひはない。

渠は全身が總毛立つほど威嚴のない、見すぼらしい恥辱を感じて、秋の夜風をしみじみと心の底まで呼吸した。

あんな劣等な人間にまで馬鹿にされて、自分の社會に於ける立ち場は全くゼロになつたではないか？

一般社會には精神的なことは分らない。

大野は矢ツ張り利口だ――自己の生活を確かめる爲めに、同じ性質の仕事でも、成るべく世間に知られ易い芝居の書き割りのやうな物に向いて行つた。

文藝のやうな無形的な事業では、どうも滿足出來ない氣がする。

何をしたツて、自己の發展なら、おのれの主義と主張とはとほる筈だ――早く一つ書き割りなどよりもずツと有形的な事業をして、名譽と金錢とを自分の内容的實力と共に兩得して見たい。

金錢さへどツさりぶち撒ければ、こんな叩き大工のやうな――浪慢的なおほ法螺でとほつた耶蘇の前身のやうな――ものは、百人でも千人でもぺこ〲させてやる。

有形的にさしたる事業もしない恥辱――から云ふことを義雄はただ一瞬間にさまざまと考へて見た。

そして冬の霜が人の皮膚を燒きつけるやうな冷たさを帶びながら、今一度思ひ切つて、

『明けて下さい』と、戸をどん〲させた。

『清水さん、早く明けて下さい』と、下の大工が叫んだ時、お鳥は火をつけたランプを持つて、もう、二階から下りかけてゐた。

明い光りが戸の透間からこちらへ漏れた。

障子を明けて土間へ下りるもののけはひがする。

重い黑がねでもあつたやうな戸が、やがておとなしく明いた。

義雄は默つて這入り、默つて自分で戸を締め、格子を締めた。

あがり段のあげ蓋の上に置いたランプの光りに、お鳥がじツとこちらを見あげた不平さうな顏が、一きは色白く見えた。

渠が手ぶらでさきに立つてはしご段をのぼる時、ちよツと下の夫婦の樣子に目を放つたが、

『どうだ、下のあツたかさうなことは』と、義雄は上へあがつてからお鳥に初めて私やかに聲をかけた。

『いつもあれ、さ。』から、かの女は答へて冷笑した。『だから、明けて呉れんのだ——何で、もツと早う來ない？』

『仕事に興が乘つてゐたから——』

『こんなにいつも遲くなるんなら、いツそ來ん方がえい。けさも、下の人が迷惑だとおこつてゐた。』

『ぢやア、間貸しをしないがいい。』

『けれど、自分も惡いぢやないか』と小言らしく云ひながら、かの女はランプを置いた机の方と反對に蒲團をかぶつて木の枕に就いた。

義雄が机の前に横向きに坐わつたまま返り見ると、ランプのかさにまた半紙の切れを垂れてあるのがかの女の顏に特別な蔭を投げて、その白い色を却つて透き通るほどの薄化粧に見せてゐる。

渠はそれに見とれながら、

『でも、ね、借りた以上は、その部屋のぬしが遲く出ようが、歸らうが、明け閉てして呉れる義務がある。』

『淸水さんが見に來て貸したんで、田村さんに貸したんぢやないツて、めんどくさがつてるぢやないか？』

『そんなら、立て寄せて置いて呉れりやアいい。』

『それも無用心だ云ふてる。』

『何も取られるやうなものもないぢやアないか？』

『第一つでも惜しい、さ――それに、下のかみさんはあたいよりえい衣物を持つてる。こないだ、それを自慢さうに出して見せた。』

『美ましかつたのだらう？』

『そりやさう、さ――自分が買うて呉れんぢやないか？』

『まア、さう云ふな。おれも今考へることがあるから、それがきまつて一と儲けすりやア、何でも好

きな物を買つてやらア、ね。』

『本統?』から云つて、にこ付きながら、かの女がちよツと首をもたげた時、光りと蔭とがその顔の色をちら〳〵刺戟して、幻燈に寫つた美人のやうに奥ゆかしかつた。電燈使用の室で見ては氣が付かなかつたことだが、ランプになつてから、その薄暗い蔭の中に包まれたお鳥の寢顔は、疊間むき出しの、押しつぶしたやうな、田舍くさい顔立ちとは丸で違つて、物凄いほど奇麗だ。

『妖女！　閨中美人！』から云ふ考へが義雄の心に浮んだ。と同時に、また、顔の輪廓にどことなく人並みより締つてゐないところがあるのを、紀州には多いと云ふ穢多に生れた娘ではないかと思ひ付いた。さう思ふと、顔ばかりでなく、肉體の肌合ひがどこもすべ〳〵し過ぎて締りがないやうであつたのに氣が付いた。

前の男がどすであつたなどとは、或は、眞ツ赤なうそで――おのれにこの弱みがあるのを假りに人にこつけて、氣休めにしてゐるのかも知れない。

それで尻も輕く、素性を隱せる東京へ出て來て、人並みの出世を望むのだらう――?

から考へると、義雄はかの女が迷はしの術中に全く落ちた初めての犧牲である氣がして、興ざめた目を鋭く見開らき、眼がねをとほして、暫らくじツとかの女の妖相を見詰めてゐた。

十八

穢多だ、穢多に相違ないと云ふ考へが、どうしたものか、お鳥に對する義雄の心を占領するやうになつた。

かう考へ込むと、かの女がその親類や兄弟のことを成るべく云はないやうに避けるのも、意味があるやうだ。

おやぢは北海道へ行つて金貸しをしてゐたが、紀州へ歸つて死んだこと。紀州の兄は醫者であること。お鳥自身は北海道にゐた時柔術を習つたこと。東京へ來て矢板裁縫に學んだこと。國へ歸つて裁縫の代用教員になつたこと。こんなことは、かの女の言葉や義雄の繼母の二三年前實見した記憶で分つてゐるが、現に、叔母さんと云つてよこす實の姪が父の行くへを尋ねて來たそのハガキを、義雄に見られてゐながら、あれは兄のことではないと隱してしまう。では、姉の亭主かと聽くと、をんな兄弟はないと云ふ。きツと、その兄も素性の惡いのを看破せられたので、妻子を棄ててまでも、妹と同樣、もツと世間の廣いところへ飛び出したのだらう。今、北海道にゐると云ふ方の兄のことでも、何を職業にしてゐるか、いやがつて、うち明さない。これも、きツと、皮剝ぎか何かであらう。

かう考へ込みながらも、却つてます／＼お鳥の幻燈のやうな顏へ心が向つた。

或朝、そこから直ぐ學校へ出勤して、二階の教員室へあがると、義雄に最も多く同情を持つて呉れてゐる專任教諭が、

『田村君、ちよツと』と、渠をさし招いて、そとの廊下に出た。

そこから、廣い運動場を隔てて、同校の設立者兼校主の高い立派な邸宅がよく見える。義雄はそれを望む度毎に、なアに、おれのやつて來た事業は無形のものだが、若し有形的に見つもれば、決してあれには優るとも劣らないと云ふ奮發心が起るのである。

御用商人の校主は早くから望んでゐる男爵をまだ貰へない。然し若しおれであつたら、もう、迅くになつてゐた筈だらう。

見識が違ふ。素養が違ふ。品位が違ふ。眞劍の程度が違ふ。と、かう云ふ品定めをすることもゐる。

この邸宅に向ひながら、渠は專任教諭から豫期してゐたことを申し渡された。

『君のこの學校に於ける運命もいよいよきまつたやうだ。教授もうまく、生徒にも人望があるからと、どう辯護して見ても駄目であつた——君は校長並びに學監の男爵閣下に受けが惡い。』

『そりやア承知の上だが——すると、僕から辭表を出さうか？』

『まア、それは待ち給へ、僕が時機を見て、また君に注意するから。默つてそツとして置きやア、

來年の二三月頃まではいいだらう。』
　僕は、もう、どツちでもいいよ——今度また新しい論文集を出すから、前のと同じやうに惡く注意されるにきまつてるから。』
『それも君の主義から來るのだから、まア、いい、さ——兎に角、何か別な口を見付けて置き給へ、僕も心がけては置くが——』
『今度ア、もう、僕、教師なら大學程度のでなけりやアいやだ——うるさいから。私立のでもいいから、あつたら頼む——が、僕は、それに、全く別な事業をやるかも知れないので——然しこれも商業學校などを教へてゐたおかげだとも思つてゐるのだ。』
『何をだ』と、教諭は好奇心を起したが、丁度その時、教授開始の時間が過ぎてゐたので、生徒の一人が義雄を呼びに來た。
　渠は英語の教科書をより分けてから、引き締つた熱心の顔で、勢ひよく受け持ちの教室に這入ると、まだ物も云はないうちに、滿場の拍子喝采が起つた。そしていつもこれを樂しみにここへは來るのであつた。

十九

義雄はこの頃新出版書の校正やら、新事業の調査計畫やら、お鳥のまた痛みを訴へ出した面倒やら、いろんな惡口を云はれてゐるのを知つてるやらで、殆んど全く友人を訪問しない。秋夢の處へも、筲村の處へも、大野や村松の處へも珍らしいほど丸で無沙汰だ。向ふから亦滅多に來ない。と云ふのは、女のもとにばかり入り浸りになつて家には殆んどゐないだらうと云ふ間違つた推察を、すべての友人が持つてゐるからである。

度々やつて來るのは、ただ加集泰助と云ふ國の小學校時代からの友人で——いろんな社會へ首を突ッ込んで。口錢取りをしてゐる。殆ど全く英語が讀めないのに、ハガキなどへよく自分の姓名を羅馬字のかしら字だけで書いてよこすので、多少英語のやれる千代子などは馬鹿にして、『加集さん』と、おもてには尊敬しながら、かげでは『あのＴＫ』と呼び棄てにするのを常とした。

義雄はこの男を新事業の相談相ひ手にした。口さきばかり上手な男だと思つてるから、無論さう深いことは打ち明けない。が、いろんなことを實地に就いて調べて來て呉れるのが調法だし、また、第二流、三流の實業家なら大抵の人を知つてるから、いざと云ふ場合の橋渡しにはなりさうだ。

義雄の計畫とは、先づ蘭貢米の輸入である。この計畫は渠が數年前既に或老友の手したになつてやりかけたことだ。七八ケ月もかかつて、向ふと手紙の往復を數回したり、向ふの事情やこちらでの賣り捌き方を研究したあげく、大船一と船の註文を電報するいざと云ふ場合になつて、資本家の某は保

證金を入れるのも自分だから、註文も自分一手でやると云ひ出した。

『何のことはない、お膳立てをして、御馳走にあづからなかつたも同然だ、なア』と、人もがツかりした。

それを今度は義雄自身が主になつてやつて見たいのである。

今一つは九州の或炭鑛の無煙炭を、茨木無煙よりもずツと安く、東京並びにその附近までも持つて來られることが分つてゐるので、その賣り込み方を競爭して見ることだ。

そのどちらかに手を付けようとするのだが、義雄はまだどちらとも決心することが出來ない。

『そりやア、どんな大きな計畫でも、計畫だけは立ちます、さ。けれど、その資本はどうするんです?』から、千代子は加集もゐる室へ這入つて來て、ぶしつけに云つた。二人は物好きに買つて見た馬肉鍋を突ツつき合ひながら、晩酌をやつてゐた。

『まア、奥さん、一杯』と、加集は千代子に盃をさしてから、『資本と云ふのは、その今、僕が資本家を見付けて來ます。』

『うまくそんな人が見付かればいいですが、ね。』かの女は一向に信じない樣子だ。そして、こちらがこの家を賣つて資本を拵らへようとしてゐるのを感づいてゐたかして、『この家を賣るやうなことはわたしが不贊成ですから、ね、これだけは前以て斷わつて置きます——亡くなつたお父アんから、あと

はしツかりお前に賴む、義雄のやうにうか〳〵してゐても困るからと、わたしが重々賴まれたんですから。』

『生意氣なことはいふな――あツちへ行け！』義雄はから千代子を叱りつけて、加集に猪口を返した。

渠の胸には、實際、家を賣つてもと云ふ考へがあつた。それを知つて、また加集がつき纒つてゐるのであることも分つてゐた。

新出版物の校正のことで、築地の或印刷所の主任と云ひ合ひをした歸りだ。義雄は喧嘩のあとで意志が通じたと云ふいい氣持ちを味はひながら、電車を芝公園の御成門で下りると、向ふから海軍水路部の前を、弟の馨がいそ〳〵とやつて來た。不斷のやうなぼんやりツ子でない樣子も變だと思はれた。田舍の村長じみた洋服のおやぢが一緒に附いてゐる。

『どこへ行く？』

『一週間ばかり前橋へ行つて來ます。』

『さうか』と答へた切り、行き違つたが、あれが上州にゐると云ふお君のおやぢで、飲んだくれの警部だ、な、と分つた。

お君と云ふ女は今も小學校の教員ださうだが、我善坊に住んでゐた時、お鳥と共にお轉婆の仲間であつたのを繼母が知つてゐるので、馨との結婚に不賛成を唱へてゐる。然しそれは一方に、繼母が自分の姉の娘を入れようとしてゐるからなので――その目的は丁度、かの女が四十歳でこの家へ來立てに、義雄の千代子と出來た仲を裂いて、おのれの貰ひ娘を入れようとしたと同じだ。

『さうおツ母さんの都合いいやうには行かない。』と、義雄は明らさまに云つて、その代り、安心して隱居で澄まし込んでゐればいい。父がゐないからツて、父の後添ひを虐待するやうなことは、兄弟ともしないからと語つたこともある。

然し繼母に取つてはすべての目論見がはづれてしまつたのだ。貰ひ娘は、かの女がここへ這入る前に、自家へ下宿人を一人置いてたその人と一緒になつてしまつた。お君のある爲めに姪を入れることも出來なくなつた。比較的に子飼ひながら育てた馨にあとを繼がせようとしたのも、矢ツ張り戸籍の命ずる通り、義雄が取つてしまつた。その上、つれ添ひには死なれた。

今の戸主なる義雄に對しては、かの女は若し腹を洗へば合はせる顔がなからう。渠はこれをよく察してゐるから。成るべくそツとして置くのであるが、どちらかと云へば、腹を痛めさせない母によりも、骨肉のつながる馨の方へ加擔する傾きは自然であつた。

馨が前橋へ出かけて行くのは、繼母に取つて、優しい庭鳥の羽含み孵した家鴨の子が水の中へ逃げ

て行くやうな痛ましさがあるとは察しながらも、義雄はなほ弟の出來た戀には少しも反對が無かつた。

が、ただ一つ義雄があはれに思つたのは、自分も既に經驗して分つてゐる通り、その戀人が年上の女だから、やがては、きツと、飽きが來ると同時に、そのいづれ、兄の承認を經て形成する家庭も、第二の田村家たる悲慘を現出するだらうと云ふことだ。

が、また考へると、自分と違ひ、弟は最も卑怯だ。臆病だ。そして素直だ。年上の女をでも、神經質に叩を落してしまうやうな思ひ切りはないかも知れない。

『あれでお鳥とも關係したものとすれば、どツちがさきへ手を出したらう？』この問題は、もう、さして義雄の氣に懸らなくなつた。人摺れのしたお鳥が手を出しかけたかも知れないが、正直に一人を思つてゐるらしい馨は、きツと應じなかつたに相違ない。

こちらはお鳥に對する熱心が段々冷えて來たのに反し、お君に向ふ馨のあの嬉しさうなざまを見ろ。――丁度、十六七年前、千代子とおれが出來た時の年輩でもあるから。

から思つて、義雄は振り返つて見た。木綿着だが小さツ張りした姿の馨が、一心にかかへて行く布呂敷包みは、繼母に包んで貰つたのだらうが、その一週間に必要な自分の着更へか、寢卷きらしい。

義雄は獨りで吹き出して、斯う考へた。

『何だ、馬鹿々々しい、その日通ひの目かけぢやアあるめいし！』
馨が巴町の小學校へ移るまで行つてゐた代用小學が、海路部の前から愛宕山と芝公園との間を登つて西の久保廣町へ下りたところにあつた。

また、弟の餓鬼大將の手下どもであつた蠟燭屋や、葉茶屋や、或はまた藥り屋の息子連の店が神谷町、八幡町などにある。

かう云ふ道を通りながら、義雄はその弟と弟の溺愛者であつた父とのことを考へつゞけた。弟は餘りに溺愛された爲めに意久地なしの世間見ずに育つたし、繼母はまた父のこの愛を利用して弟の方に下宿屋を繼がせようとした。

そして家に行きつくと、玄關の廊下から裏緣へ出たところで、池を隔てた離れの繼母から聲をかけられた。

『馨が、ねえ』と、かの女は人よりも早く出した綿入れを着て、向ふの緣がはへ出て來て、寒さうに二つの袖を胸で合はせながら、『一週間ばかり、前橋へ行つて來るから兄さんによろしく云つといて呉れいツて云ひ置いて行きましたよ。』

『ああ、今、そこで會ひました。』

『さう――兄さんがおこりやアしないかツて、心配してイましたよ。』

『ふん！』緣がはの端を足で無意味にこすりながら、『あれがおやぢなのか――由合の村長臭い？』

『ええ、さうですよ。あの人が來いツて、つれてツたの。』

『嬉しさうに、いそ〳〵して、さ、丸で男めかけがお約束にでも出かけるやうなざまであつた。』

『ほ、ほ！可哀さうに――着たツ切りでも困るだらうと思つたから、寢卷きと不斷着を持たせてやつたのです、わ。』

『男めかけとは、さすが、あなたの思ひ付です、ね。』千代子も、突然から云つて、をかしさうに鼻に皺を寄せながら、勝手につゞいた子供室から緣がはへ出て來た。

その頓狂な聲に驚いたのだらう、脊の高い丸太を立てた上に載せた手洗鉢のわきの枯れ竹に、一羽とまつてゐた雀が、ちゆツと啼いて飛んだ。その拍子に南天の赤い實が一つ、二つ落ちた。

義雄はそれを見て、いやな物が自分のそばへ近づいたと思ひながら右の方へ少し避けた。そして、千代子には頓着しないと云ふ風で、目を伏して池を見詰めながら、

『もう、やがてこの金魚にもござか何かかぶせてやらなけりやア――』

『うちでは、それどころぢやアありません、わ』と、かの女は別な意味に突ッ込んだ。これも少し袷せを寒さうな風だ。それでもその義理の弟の噂に立ちまじる考へでか、『でも、わたしはあの子が一番

好き、さ——素直で、正直で、また兄弟思ひで。』
『素直ぢやア御坐んせんよ』と笑ひながらも、繼母は少し考へ込んだ樣子で、『隨分薄情になつて來ました、わ。』
『そりやア、段々とおとなじみて來たのだ。』から義雄は云つて、繼母にそれとなくあきらめさせるやうに、『親がいつまでも、いつまでも、子を思ふままに出來ると思ふのは間違ひだ。子は一人前になればなるだけ、その一人前の考へなり、精神なりが出て來る。それを、親と云ふものは自分を疎んじて來たと思ひ違へ易い。世間の舅や姑が嫁いぢめをするのも、みんな、わが子に對してそんな間違つた考へを持つてるからのことだ。』
『さうでしよう、ね。』繼母はただお愛相にらしく答へた。
『馨さんも、もう、元の五厘男ぢやアありません、ね』と、千代子は洒落のつもりらしい。
『五厘男』とは、馨が元五厘づつねだつて、通りの駄菓子屋へ行つたのを繼母か名づけた綽名で——その頃は意地が惡いかの女が無邪氣な渠を抱き込んで、義雄と千代子とに最もひどく當つてゐたのである。
『………』

執念深くついて來た千代子を見向きもせず、義雄は自分の書齋の座に就くと、『火を持つて來い』とはわざと云はないで、ただから火鉢の灰を火ばしでかきまはした。そして、まだ耳がよくならないのに、またむづがゆい痔の起る時節が來たのを考へた。

渠は殆ど年中病氣の絕えたことがない。比較的に腦力と消化機能とは丈夫だと思つてるが、敎師としてさきに滋賀縣へ行つたのは、肺病の保養を兼てゐた。それは然し米國の哲人エマソンの場合に倣らつて、藥りに由らず、自己の意志で直したと信じてゐる。然し、その後も每年仕事が續き、徹夜などが度かさなると、神經の疲勞に乘じていやな咳と肺尖加答兒が起るので、學校の長い休暇〳〵には、必ず海のしよツぱい空氣を吸ひに茅ケ崎の借家へ出かけた。それが遠のくと、また心臟だ――息切れだ。夜、近眼の爲めに橫丁の荷車にぶつかつた生傷だ。痔だ。鼻だ。痳病だ。人力車で引き落された腕の痛みだ。電車に飛び乘りかけてしくじつた足の傷だ。またこの耳だ。近眼と齒痛と淺い呼吸器病と心臟の人並みでない、皷動とは殆ど常のことだ。それでも每日、思索か、執筆か、勉强か、遊戲か、談話か、徹夜を絕やしたことはない。

『デカダン論』の如きは、ひどい痔で床の中にぶツ倒れながら書き終へた。商業學校でやつて有名になつた語學演說などは、どもりながらも、大聲で二時間半もしやべつたが爲め、他人の聲か何ぞのやうにしやがれてしまつた。

『然しそれでこそ人生は活きる價値があるのだ』と、意地にも渠は自分を古英雄の雄壯な形式に近代的な内容を加へたものに譬へ、自己の發展、渠のいはゆる獨存自我の發揮はこの努力一つにあると信じてゐる。

今回、計畫中の有形的事業と云ふのも、つまり、この努力に過ぎないと思つてるのだが、追ひ〳〵寒さに向ふので、ふと氣が付いたのは、日本の極北、樺太で、鑵詰技師をしてゐるいとこのことである。あれを使つて、外國貿易、殊に米國へ輸出貿易品中の一要素なる蟹の鑵詰をやらう。

『あ、蟹の鑵詰！』渠は思はず膝を打つて喜んだ。この事業のことは、いとこが去年歸つてゐた時も、義雄が父に勸めて資本を出したらどうだと云つた。が、父はそんな危險なことに手を出す必要はないとはね付けた。

それだ、それだ、多年わが國を最も子供扱ひにして來た、あの傲慢無禮な米國に對し、商賣的にわが利益の鬱憤を少しでも晴らすのもそれだと、渠は即坐にきめてしまつた。そして、厚い氷の張つた北極の氷野や氷山を探檢しに出かけるよりも以上の壯烈と愉快とを感じた。

『何を獨り笑ひしてイるのです』と、千代子がやつて來てゐた、『また清水のことでも考へたんでしよう？』

『下らないことアよせ――そんなことよりやア、もう、あの重吉が歸つて來さうなものだ、ね、樺太

から。』
『あんなものア歸つて來たツて、職工も同然ぢやア御座いませんか――事業の資本なんか持つてませんよ。』
『知れ切ツてらア。』
『あの子だツて、お父アんがゐなさつたからこそ尋ねても來たんでしようが、あなただけでは親類にも人望がありません。人に笑はれるやうな行ひをしたり、出來さうもない事業なんか計畫して見たり、さ。』
『手めへの知つたことぢやアない!』
『でも、ね、おツ母さんも赤越後の娘の方へ行くと云つてますよ。』
『行きたけりやア、勝手に行くがいい、さ。』斯う、ぶツきら棒に云つたが、義雄はひやりとして、母こそ薄情だ。父の四十五日をしほらしく蠟燭に線香を立ててゐたのも、ほんの、うはツつらの所業で、内心はその時から逃げ腰であつたかも知れない。いやににこ〳〵しながら、この頃のわさ〳〵してゐたことはどうだ?行くなら行け!かう思つて、『何物でも、この自分を遠ざかるものは、もう、無關係だ。そして無關係はその者の死だ。父と同樣、宇宙の存在を失ふのだ、』と心に叫んだ。
と、同時に、曾ては自分の妻にならうとまでしたあの女が。やがては雪も降らうと云ふ長岡へ、

老いて痩せた母を呼び寄せ、下女同樣にこき使つて、安官吏との仲に出來た多くの子の子守りをさせようとするのだらうと考へた。そして、あはれな母が今弱い立ち場にあるに乘じて、こちらは母を奪つて行かれるやうな氣がした。

『おッ母さんが出て行くと云ふのも、そりやア、元はと云やア』と、千代子は執念くこちらに忠告するつもりらしかつた。いやに落ち付かせたさよと〳〵がほを突き出し、『あなたを信じないからです。僅かの間でも馨さんが出て行くし、おッ母さんも近々ゐなくなるし、友人だッて、あなたを喰ひ物にしようとするTKのほかは、この頃ぢやア誰れも來やアしないぢやア御座いませんか?』

『來ないものア來ないでいい』とは反抗したが、義雄はこの頃よく感じもし、主張もしてゐる自我の絕對孤獨と云ふことが、つく〴〵自分の身に染み込んで來た。そしてそれが心のどん底に水晶の氷のやうな冷たい火を點じたかと思ふと、然し段段燃え出して來て、先づ健全な腸に移つた。腸から、また酒やアブサントや待ち合の料理や西洋料理を受けた胃ぶくろに移つた。胃ぶくろからまた、或時、健康狀態で脈搏を二百以上も打つて醫者を驚かした心臟に移つた。それから、また肺臟に移つた。肺から、また橫ッ廣がりではなく、體の前後にゆとりを持つた胸膈に移つた。父のを遺傳したと思ふ痔の箇所に移つた。のどぶえの飛び出た頸、骨ッぽい手足や毛脛にも移つた。

それがまた一ときにぱツと燃えあがると、おほ空一面、火の海のやうにくれなゐのほのほとなつた。

義雄はいつの間にか全身が熱鐵のやうに燒けて、いのちだけは取りとめようとしてゐるやうな最も悲痛な氣持ちで、自分の目を千代子に向けた。そしてこの目が物を云つてるのだぞと云はぬばかりにして、低い、重い、强い、且深い調子で、

『友人は來ない。醫は行つた。母も出て行く。これで淸水が自殺でもし、貴樣が姦通なり頓死なりして、餓鬼どもが揃つて燒け死んで吳れたら、おれの行動は最も自由だ。直ぐこの家を賣り飛ばして、おれが資本その物となつて、樺太へ行つてやる。』

『そんな馬鹿なことが出來ますか』と、千代子も意地になつたらしく、『お父さんの家です——先祖代代がここに、まア、云つて見りやア、結晶した家です。決してあなた一個の自由にはなりません。』

『先祖がおやぢになつたのだ——おやぢが乃ちおれだ！死んだものや死んで行くものに何等の權威も實力もない！』

『でも、わたしが活きてる間は』と、堅い決心のある色を見せて、『決して許しません！』

『だから、早くくたばつてしまへ！』

『ひどいの、ね！』かの女はあきれてしまつた。然し、少し調子をゆるめて、『あなたはよく死ぬことをおツしやいますが、ね、二人の子供が死んだのを豫言——まア、豫言でしよう——したのは、全體、

どう云ふところからですの？』
『產れた時の泣き聲を聽いてだ。』
『どう違ひます？』
『活きる奴のは悲痛だ——死ぬ奴のはぼけてる。』
『でも、富美子と諭鶴のは當らないぢやアありませんか？それに、里にやつてあつた赤ん坊だツて、取り返してからも丈夫に太つてますもの。』
『然しどうせ死ぬ、さ』義雄は斷定して、思ひ出したことには、繼母が生れ立ての子にあんな神經病らしい千代子の乳を飲ませるのはよくないからと勸めて、東京近在の里ツ子にやつたのを、この頃、千代子が取り返して毛だ物の乳で育ててゐる。
『そりやア、人間は誰れでもおしまひにやアどうせ死にます、わ。』
『ぼけて來りやア死ぬ。悲痛な間は活きる。』
『わたしはまた別な風に考へて見ました、わ、それが例の星ですの。』
『よせ、下らない。』
『では』と、冷かしの態度に變じて、『淸水のゐるところを當てて見ましようか？——何でも、斯う』と、かの女はうツとりとして、目を內部に向け、『森のある近所ですの。』

『……』義雄は思はずぎよツとした。

『芝公園でなけりやア、山王さんの森かと思つて、探してゐるが、どうも、それ以上はまだ心に感じて來ませんの。』

『もツと、呪へ、呪へ』と、輕蔑したつもりであつたが、義雄はかの女のヒステリ的に精神の異狀があると信じてゐるだけ、そこにまたちよつと一種の不思議な感じがして、自分が去年からわざ／＼覺めるやうに努めて來た夢ばかりのやうな神祕の世界を、再び思ひ浮べずにはゐられなかつた。そして、事業の樺太も、千代子のとは別種だが、性質は同じやうな熱心と專念とに浮んだ自己その物の示現だらうと考へて、かの女には內證で、今年はまだあちらにゐるのだらうと思ふいとこの重吉に、直ぐ歸れといふ電報を出した。重吉が歸つて來て、うまく相談が整へば、渠を技師としてわが北端の新占領地へ蟹の鑵詰事業を開始し、その資本はいよ／＼この家を抵當にして出すつもりである。

――（明治四十四年十二月）――

お島と亭主

一

お島(しま)は、不勉強な繼子の繁を學校へ出してから、臺どころの仕事を一渡りかたづけ、椽がはやら敷居、柱などに雜巾(ざうきん)を掛け、それから別な布巾を以つて長火鉢の周圍や椽を淸めた。銅壺には、釜土から殘火(おき)を取つた時、また別な布巾でその中をふき淸めた上、かの女が入れた新らしい水が煮え立つてゐた。

これがかの女の毎朝のおきまり仕事で、かうしなければ氣が濟まない。

一間幅の橫丁の兩がはに餘り奇麗(きれい)でもない平家長屋が向ひ合つてゐる、そのつき當りの一軒建ちを借りてゐて、玄關の二疊を除いては、僅か四疊半に三疊のふた間しかない家ではあるが、掃除が行きとどいてゐるので、薄ら寒い秋の朝日が、障子越しに、室内を照すと、隅の簞笥(たんす)を初めとして、すべてのものがてか〳〵光つて見える。

先づ一仕事濟んだといふ調子(てうし)で、お島は火鉢のそばに坐わり込み、鐵瓶をおろし炭取りを引寄せ、

その中から切り炭を一つ挾み出して消え殘るのろ火に加へ、始末よくそのまはりに灰をかけ、再び鐵瓶をその上に据ゑ、銅壺のまはりの灰をも灰ならしでその縦の線がつく様にならした。そしてその四疊半を一渡り見まはし、これで安心といふ風で長煙管を手に取つた時の心持ちと云つたら、持ち前のあくせくした氣質を忘れたのではないが、多少のんびりして、無人島の女王とでも云へよう。

かの女の氣質が小く整つてゐるだけ、隣り近處に對する義理立ては堅い、而も向うが九つのお萩を持つて來れば、それの十一に價ひする壽司を以て返しをするのだ。その代り、非常に世間のつき合ひを――いつも損だからと云つて――嫌つてゐる。世間もかの女の始末なのをよく知つてゐるから、成るべく遠慮して、止むを得ない時でなければ、御機嫌伺ひに行かない。そして、その癖、來べき時に來ず、貰ふべき時に物を貰はないと、かの女はその人を義理知らずと云つて惡しざまにしやべり立てるのである。

敬して遠ざけられてゐるのを知らず、

『この頃は人の出入りがないので、つき合ひ入費がかからなくていい、ねえ』と、今しがた、繁と膳に向つてゐた時、かう語つて喜んだくらゐだが、小言相手の繁も學校へ出て行つて、獨りぼツちの寂しさはふと昔のことを思ひ出させた。それがゆツくり吹かす煙草のけむりの奥から見えて來る様だ。

貞ちやんといふ、繁の姉に當る可愛い兒があつたが、十一二の時に虎列剌病で亡くなつてしまつた。

ほんとに可哀さうなことをした。また、馨といふ繁の妹に當る兒もあつたが、五つか六つの年でよそへ貰はれて行つた。それが小金貸しの家であつたから、今では蓄財して立派に暮してゐるだらうか？それとも、また、しくじつて、落ちぶれてゐるだらうか？約束がつき合をしないど云ふのであつたから、その後、向ふがわざと度々住所を變へ、どこにゐるか分らなくなつて、今では訪ねて行く手づるもない。ほんとに、貞ちやんも馨さんもいい兒であつた。そのお母さん――さうだ――そのお母さんは自分ではなかつた。

自分はその隣りに住んでゐて、小學教師の妻であつた。お隣りの奥さんは若づくりの、おほざツぱな人であつたから、暮しに無頓着な林さん――自分の今の所天――のかせぎ高では毎月不足であつた。ふたりで考へもなく、空體にお金を使つてゐたのだ。林はその時から土木の方の官吏であつたが、三十五六圓だつたかと思ふ。自分は毎日の様にあがり込み、姉さん振つて、だらしのない奥さんの世話を燒いてやつたが、また、他人だといふ氣になると、甘くおだてあげもして、御馳走をさせたり、貰ひ物をしたりした。實際それは自分のうちの入費を少しでも省くつもりでやつてゐたのであつた。林はそれを知つてから自分を嫌ひ出したので、自分も自然と、隣りでありながら、足遠くなつてしまつたが、貞ちやんの死んだ時などは、二日も三日も跡始末の手傳ひで急がしかつた。その時分の林の家の様子は手に取る様に分つてゐた。――

その後、林はどこか小石川邊に引ツ越すし、自分はまた、所天が亡くなつたので、大阪の里方へ歸つてゐた。ところが、ふと千日前の近處で林と出會した。

『あら、林さんでは――』

『おや、お島さんですか？』

ふたりはその意外に驚いて、暫く立ち話しの挨拶をしてゐたが、往來ではゆツくり話せないからと、何とかいふお蕎麥屋へ這入つた。そこで、ふたりの身の上の變化したことをうち明け、あの人もほんとに妻がなくなつたのだといふことが分つたので、どうせ、こツちも所天がなくなつたのを幸ひ、一緒になつてもいいがといふ考へが自分に起つて來た。向うもその氣があつたと云へばあつたのだらう、『今晩はもう遲いだらうから、私の宿にお出で』と、あの人も初めからずるかつたよと、お島はひとりで微笑した。

お島は、調子に乘つたやうな心持ちで、なほもその冥想をつづけた。吸ひさしの煙草をぽんとはたき落して、新らしいのをつぎながら、

『あの時は』と、再び微笑した。あの時は、林が前妻のなくなつた爲めに身を持ち崩した末、女の兒の馨を人にやつてしまひ、繁を兄の家へあづけて、土木工事の請け負ひで德島へ行く途中であつた。自分も親はなし、いつまでも兄弟の世話になつてゐることも出來ないので、一緒に行くことにした。

德島に小一年ゐてから、ふたりでまた東京へ出たが、二年、三年と、する事が思はしくないので、林獨りで臺灣へ土木の出かせぎに行き、自分は繁とふたりでここに留守番して、もう、家賃を幾度拂つたことか――十ケ月で六十五圓、一ケ年で七十八圓、二ケ年で百五十六圓――家主にばかり御奉公してゐるのは詰らない。

それも、初めのうちは、毎月、俸給の半分はきちんと送つて來たが、中頃からは來たり、來なかつたりで、段々こツちの手元が不足勝ちになつて來るので、自分が人仕事をして暮し向きの都合をつけてゐた。それも、馬鹿馬鹿しい！今では、殆ど自分のおぼつかない儲けだけが手頼り。

六七ケ月前に、臺灣を出發するからと云つて荷物を三四個送つてよこしながら、いまだにあの人は歸つて來ない。人の話しや新聞の記事によると、あちらに賄賂事件の疑獄が起つて、それに關係があるらしい。またあちらから歸つて來た下役の話し振りを推量すると、もう、牢にまで這入つてゐるのかも知れない。なぜそんな卑しい行ひをしたのだらう？おかねが欲しいのなら、欲しいだけ勉強してかせぐがいい。さうしても出來ないおかねなら、それを欲しがるのが間違ひで――何もそんなにしてまでも家族はかねを送つて貰ひたくない。女の腕でも、ひとりやふたりの家族は現在暮して行ける。――

如何に欲しいからと云つても、高が二百か三百だらうが、それが特別にこツちへ屆いたわけでもな

しまつてその爲めにこッちは苦しい目をしてゐる。

『ええツ、情けない人だ！』からお島は考へて、腹が立つと云はないばかりに兩肩をゆすつた。情けないとは、それはばかりでない。ふたりが一緒になつたのも、林の方は初めはほんの出來心であつたらしい。大阪にとまつてゐる時、自分を女郎か總嫁のつもりで、それもただ持て遊ばうとしたのだ。一旦手を出したものだから、止むを得ず徳島へもつれて行き、東京へもつれて出たのだらう。何のことはない、こッちが巾着の樣についてまはつてゐたのだ。そして贅澤でもしてゐればまだしも、こッちばかりが――詰らない――窮々して、成るたけ、成るたけ、なけなしのおかねを殘さうとしてゐるのに、向うは平氣の平左で、つまらない女などに入れあげてゐる。――

あッちから歸つて來た人からその話しを聽いたので、あんまりくさ〳〵した眞切れに、それまで大事に手もつけないでしまつて置いた行李をあけて見ると、あきれたことには、何にも價打ちのある物は這入つてゐない。破れた靴下だの、さる股だの、くだらない天狗うちわだの――そして色をんなの寫眞があつた。

『人を馬鹿にするも程があるだらう』と、お島は煙管のがん首を思はず強く火鉢のてか〳〵光る黒ぶちへはたきつけ、とんと云つた音に氣が付いた。その跡をそツとなでて見て、鳥渡へこんでゐるのを殘念さうにながめてゐたが、その殘念とこの殘念とが一時に胸元に込みあがつて來て、息づかひが荒

くなり、日は引きつり、目の玉は充血してふくれて來た樣になつた。からだはぶる〳〵と振へてゐる。また例のが起つた、な、と思ふのは思ふのだが、われながらとめ度がない。

さア、さうなると、すべての物が癪にさはる。自分の所天が癪にさはる。かねの不足が癪にさはる。世間の親は子供の爲めに樂をしてゐるのに、自分は樂をする實子のないのが癪にさはる。繼子の繁はあつても、年は十五でまだ小學校も卒業せず、人から餓鬼大將の鼻垂らしとあざけられてゐるのが癪にさはる。繁に勉强しなければいけないことを云つて聽かせても、何の手ごたへもないのが癪にさはる。よその子供が勉强家で、先生から賞められたと云ふのが癪にさはる。長屋のちいさい印刷屋が、ごと〳〵機械を動かしてゐるのが聽えると、自分の所天の不甲斐なさに引き比べて、癪にさはる。自分の身の女であるのが癪にさはる。こんな狹い借家に、ちツぽけな暮しを立ててゐるのが癪にさはる。自分が活きてゐるのさへがまた癪にさはる。

お島のあたまには、四方八方から血が込みあがつて來て、今にも引ツくり返らんばかりであつた。

そこへ、

『御免なさい』と、格子をあけて這入つたのは、仕事の催促だ。お島は急に氣を取り直し、玄關へ出て行つて、

『二三日取り込みがあつたので、つい遲くなりましたが、けふ中にはきツと仕あげて置きますから』

と、ことわりを云つて歸へしたが、それがまた癪にさはつてたまらない。これまで、人に指をさされたことがないと思つてゐると同樣、引き受けた仕事はきツと約束期日までには仕あげてしまつて、一度も催促などされたことはないのだ。それが、ここ二三日と云ふもの、殊に氣がくさ〳〵して、仕事が思ふ樣にはか取らないのが殘念でたまらない。

『これではいけないから』と、自分で自分を抑さへて針箱を出しては見たが、どうも手が自由に動かない。衣物の縫ひ目の間から、どう抑さへても、殘念の癪がさまざまの形をして現はれて來る。そこへ、また、

『叔母さん、とう〳〵出ましたよ』と云つて、自分の所天の兄の悴の敬一が這入つて來た。

『もう、生れたの？』から問ひ返して、お島は島渡氣が變はり、何となく嬉しさうな樣子になる。敬一は、それまでの樣子は知らないで、叔母のにこ〳〵してゐるのを無事だと思ひ、向ひ合つて火鉢の前に坐わり、

『もう生れたでしよう、私の家を出る時には、その最中であつたから。』

『女だらう？』

『さうかも知れません。』

敬一の若い妻が初めて子を產むのだ。亭主が、妻の子を產む時、一度でもその家にゐたら、それが

癖になつて、亭主がゐなければいつも子が生れないし、また生れても難產であるといふのが、迷信だらうが、叔母の與へた注意であるので、その注意通り、朝ツぱらだが、敬一は叔母の家へ逃げて來た。

敬一の家ではお島を嫌つて、體よく遠ざけてゐる樣子が見えるが、敬一だけは無頓着なのでお島は不斷からひいきにしてゐる。それの子が生れたのであるから、嬉しくない筈はない。あのお腹やら、樣子では、女の子であつたに相違ないとか、男の子でないとしても生れたのだから嬉しからうとか、無口な敬一の機嫌を取りながら、珍らしくも、戶棚から、しまつてあつた餅菓子の固くなつてるのなどを取り出して來て、新らしい茶を入れた。

菓子を無遠慮にむしや〳〵喰ふ敬一のうぶな樣子には、今更らながら、お島もつく〴〵惚れぼれした。火鉢を間にして、それとさし向つてゐるといふことが胸に泌みて來ると、自分の血が若返る樣な氣がして、けふに限つて、自分のうは氣老爺が厭になる。そして、このうぶな男が女に子を產ませたのとだ思ふと、何となくねたましくなつて、ぽうツとのぼせた樣な氣持ちだ。胸のくさ〳〵は全くなくなつた樣だ。

二度目の亭主が憎いと云ふ反動からだが、敬一が自分の最初の亭主であるかの樣な氣がして、廿歲時代に初めて小學校の敎員にかたづいた時のことがなつかしく浮ぶ。その結婚までは、自分も同じ學校に勤めてゐて、くツつき合つた仲であるから、ふたりとも追ひ出されかけたが自分が辭職をして、

正式の結婚を發表したので、新らしい花婿の方は無事であつた。そして、二人の間に子が出來ないままに、あれでも三四年間はふたりで仕たい放題なことをした。緣日などへ手を引き合つてひやかしに出たり、お汁粉屋や、お壽司屋や、お蕎麥屋などへは毎日の樣に喰べに行つた。そのうち、あの人が大病をわづらつて、隨分借金が出來たので、今更らの樣におかねは溜めとかなければならないものだと氣がついたが、もう、遲かつた。あの病氣は直るは直つたが、それからと云ふもの、年中わづらひつづけで、學校も缺勤勝ちで、とう〳〵亡くなつてしまつた。隨分あの人にも苦勞させられたが、それは病身であつたからで、今でも恨みなのは死んだことばかり——ほかに、身持ちなどのことで心配したことはない。

あの時——殊にあの結婚當時は實に樂しかつた。あの人も丁度敬ちやんの年格恰であつたと思ふと、今さし向ひの敬一に氣は飛びつきたい樣で——からだの節々がゆるむほどに、心置きなくなつて、自分の持つてゐるありとあらゆる不平と不滿の數々を憚りなくぶちまけたい。丁度、その時、敬一が『繁さんは少しは直りましたか?』と、口を開いたのが合圖でもあつた。

『あれも、親と同樣、馬鹿で仕やうがない』と云ふをきツかけに、繁が、いくら敬一からいましめられてからも、勉强をしないことや、お島自身が毎日の樣に道理を云つて聽かしても、一向性根が直らないことなどをこぼし、轉じて今の亭主の不始末なことになると、云はなければ腹いせが出來ないか

の如く、口を極めて罵詈讒謗を逞しくし、あんな亭主はないの、あんな薄情な男はないの、あんな意氣地なしの野呂助はないのと、さん〴〵に自分のつれ添ひを攻撃し、

『男が別な女を持つなら、女房だツても……』と云つた時などは、敬一を全く自分の亭主としてやり込めてゐる權幕であつた。

ふと氣がつくと、敬一は冷淡に笑つてゐる。お島は、拾數年來絕えておぼえない、娘の樣な恥かし味を感じた。そしてうぶな、惡氣のない敬ちやんだからよかつたが、若しこれが人の惡い男なら、自分はこんな時に甘く口說かれて、いい樣に抱き込まれてしまつたかも知れやアしないと、ぞツとして、口をつぐんだ。

敬一は面白くもない小言を長く聽いてゐたくもないやうだし、お島もまた興ざめて、暫く言葉がない。坐が白けてゐたところへ、敬一の家から安產であつたことを知らせに來た。お島は玄關へ飛び出し、

『男?女?――さうれ、女に違ひないと思つたのよ』と、跡から出て來た敬一の顏を見た。敬一は、家に出產があつてしまつた以上は、もう、ここへ逃げて來てゐる必要がないから、そのまま挨拶して歸つてしまつた。

敬一が歸つてから、お島はまた異樣な寂し味をおぼえた。渠のゐる間は、何だか斯うあツたかい物

に慣れてる様であつたが、ゐなくなると、かかへてゐた寶でも取られた様な氣持ちになり、自分の火鉢のそばで火に當りながら、急に身うちがどこからとなくひイやりとなつた。日足も高くなつて行つたので、部屋中が日かげになつて、けふに限り特別に薄暗く思はれる。お島は獨り思案の種も盡き、こんな時は、如何に馬鹿な粂でも、男だけに話し相手になるものを、今頃は學校で何を教はつてゐるか知らんなど考へながら、仕事の手を運んだ。

そのうち、ドンが鳴つて晝飯になり、御飯は簡單に火鉢の猫板の上で濟まし、よごれた茶碗などを洗つて順序よく納めた上、再び針仕事に向つたが、二時を過ぎても粂は學校から歸つて來ない。三時を過ぎても矢ツぱし歸つて來ない。また例の馬鹿遊びをしてゐるのかと思ふと、かりそめにも名義だけでも母たる資格を以つて、所天の留守にあづかつてゐる子の不勉強をおろそかにしてゐる様な氣がして、お島の心はまた落ちつくことが出來なくなつた。そのうち、三時半にもなつたので、家に誰れもゐなくなるのもかまはないで、そとへ飛び出し、例の癪にさはる印刷屋の勉強がごと／＼いふ機械の音に聽き取られる前を通つて、長屋のおもてへ出て見た。

すると、粂は、自分よりも年したの子供を相手に、棒ぎれを以ていくさ事をしてゐたらしい。その棒切れを棄たまゝ、大道の眞ン中で、一番年の少い子を組み伏せて、それをうん／＼いぢめてゐた。お島は之を見て、たださへ不斷世間體が惡いと思つてるのが一しほ定りが惡くなり、わが子の爲めに、

もう、穴へでも這入りたい樣であつた。繁は母を見るが早いか、組み伏せた子を離し、電信柱の根もとに走つて行つて、本を入れた革鞄をかかへた。お島はかツと怒つて、その場へ驅け寄り、

『繁、何をしてイる！早くうちへお歸り！』から云つて繁の横ツつらを食らはせ、手をぐん〳〵引ツ張つてつれて歸つた。その權幕を、近所のものは、またかと云はないばかりに、そ知らぬ振りをして見てゐた。然し、お島に取つては、さうしたことが、親として、子の馬鹿げたのをいい氣になつてはゐないぞといふことを世間に見せしめるつもりであつた。

家へ這入つてから、繁を火鉢の前に引き据え、お島は煙管を以つて疊を叩いての折檻だが、それが繁には『また初まつた、な』としか聽き取れず、締りのない口を傳つて來る涎を時々手の平で押しぬぐひながら、ただにこ〳〵笑つてゐる。お島は齒がゆくツて、齒がゆくツてたまらない。

『年は十五のよだれくりとはお前のことだ――世間體が惡いと思はないか？――親がこれほど心配してイるのを知らないか？――心を入れ換へて、勉强心を起し、分らないところは徹一さんに教へてお貰ひと、さん〳〵云つて聽かしたぢやアないか？――知るは一代の恥ぢ、知らざるは末代の恥ぢ――お母さんだツて、もとは教員をしてイたから、お前の讀んでることぐらゐはちやんと知つてるよ』と、口がすツぱくなるまで獨りで滔々と小言を云つた。然し繁には何の手ごたへもなかつたらしい。

『昔と今とは教へ方が違ふ。』

『なに、教へ方が違ふ？馬鹿をお云ひでない。昔のいろははは今のいろはだよ。昔の漢字は今の漢字だよ。昔の修身や算術も、今の修身や算術と違やアしないよ。――人を女と思つて、あなどつてると承知しない。これでも、お母さんは準教員なら今でも出來るよ。』

『ふん、またお箱が初まつた』と、繁は心であざ笑つたが、『女の先生とくツつき合ひは今でもかはりやアしない』と云ひながら、次ぎの二疊へ行つた。

『何だと？』から、お島は言葉で追ッかけた。が、思ひ浮んだのは、いつぞやの夫婦喧嘩で、所天がかの女に對してその最初の亭主と學校でくツつき合つた仲であつたことを侮蔑の種にしたが、それを繁も聽いてゐたことだ。こんな氣まづい夫婦仲では、とても子供の仕つけは出來る者ではない。因果な家庭だと、つく／″＼。

然し繁が次ぎの間で餘り靜なので、何をしてゐるのだらうと云ふことがまた氣になり、こツそり仕事の場を立ち、拔き足さし足して近づき、そツとのぞいて見た。渠は教科書の明き地へへのへのもへじだとか、男や女や、夫婦犬などを頻りに書いてゐたのだが、お島ののぞいた時は、筆記帳にお母さんの筋肉の引き釣つた細長い顏が――而もこわい婆アさんの樣な輪廓で――口をわざと大げさに一方へゆがめられて、はツきりと現はれてゐた。

『そりやア何を書いてゐるんだ？』と、から叫んだとん狂聲に繁は驚かされたが、びツくりしたのは

その瞬間だけで、次ぎの瞬間にはにイやり笑つて、帳面の鉛筆書をさし出し、
『お母さんのこわい顏です。』
『この馬鹿野郞！何を勉强してイるかと思へば、くだらない徒ら書きなどして！お父さんに代つてわたしが折檻する』と、思ふさまねぢ伏せて二三度繁の尻ツぺたを叩いた。尻ツぺたを叩くのはお島の不斷からの思ひつきで、顏やあたまを打ちのめすと、その時のはずみで若し打ちどころが惡かつたら、一生取り返しのつかないことになるかも知れないのを注意してゐたのだ。然し急にくわツとのぼせ過ぎたお島は、手が顫えて、それが思ふ樣に使へない。繁も亦、別に痛くはなく且却つて何となく感じがよかつた上、母が馬鹿ぢからを出した時は、いつも母のからだが柱の樣に强くなつてゐる氣がして、到底抵抗することが出來ないのを知つてゐるから、身をすくめて、そのまま無言で往生してゐた。

繁の無抵抗の無言がお島にはまた氣に喰はない。いツそのこと、この上にも何か口どたへをすれば、それをしほに胸一杯の鬱憤を一息に晴らしてしまひたいのであつた。然し繼子の無言が、その口は殊に一しほ男として意氣地なしの樣に見えて、それを産ませた父親の不甲斐なさが聯想され、こんなところへ後妻に來た自分の不了見なのが悔しくなつた。そして、印刷屋の主人が一生懸命に稼いでゐる機械の音が聽えると、自分をあざ笑ふ聲の如く響いて、自分はゐても立つてもゐられない。
『お前はどうせ見込みのない馬鹿だ。留守番でもしてイるがいい』と云ひ放つて、お島は家を出た。

敬一の子の生れたのを祝しに、しぶ〳〵自分の家を出たのであるが、今檠に見せつけられた自分の顏の畫が氣になつて、氣になつて——あの子にさへあんなに見えるのかと思へば、途中を歩きながら、この心配の多い自分の顏だけでも、世間の人々の明るいまなこに映つて呉れなければいいと念じてゐた。

二

お島の繼子檠の不勉强はいつ直るとも見込みが付かず、馬鹿げた惡いたづらばかりがます〳〵つのつて行つた。

美術家たる質素が多少あつたかして、畫を書かして置けば、いつまでも机に向つてゐて、外出などはしなくてもいい樣子だ。そして習はせもしないのに、物の形を割合ひによく畫を現はすことが出來るのは、いつか母のお島のヒステリ面が甘く出來てゐたのでも分つてゐて、その時はお島自身はむきになつておこつたはおこつたものの、跡で考へて見れば、せめてその畫才だけでも發達させて、所天の留守をあづかつてゐる間の申しわけにしようと思ひ付き、檠の爲めに、餘りかねの入らない畫の敎師を探した。

この家族の住まひは芝西の久保の神谷町だが、その山手に仙石屋敷がある。そこの貸家に、畫の上

手な先生があつて、近處の子供にそれを敎へてゐることを聽き、お島は繁をそこへ弟子入りさせた。一般から見ても、大した先生ではなかつただらうが、それでも、蘭とか、竹とか、猿の腰かけなどを覺えて來る樣になつた。その代り、學校のことには一層怠りが嵩じて來て、近處の子供の話しを聽いても、人聽きの惡いことばかりだ。

けふも林の繁さんは敎場で先生に叱られたとか、放課時間前に運動場へ出て辨當を喰べてゐたとか、某女敎師の便所へ行つたところをのぞいて見たとか、到底、お話しにならない。それに、時々、年下の子をそそのかして、菓子を買ふ錢を貰つて來させたり、相手の持つてゐる菓子を奪つて喰つたりするのだ。

學校からは、また注意があつて、繁が、この樣子で行けば、この學年も試驗がおぼつかないと云つて來る。その上、お島が、繁の留守に、敎科書や筆記帳を調べて見ると、殆どべた一面に、例のへのへのもへじは勿論、犬や、男女が書き散らしてあるので、子供だと思つてるうちに、もう、色氣が付いて來たのかとも察しられる。然し、もう、叱りつけるのにも、根氣負けがして來た。

どうせ、いつまでも落第するものなら、さう便々と月謝を出してやるだけが無駄だ。早く年期奉公にでも出してしまつた方がいいと思ふ。お島の心配はそればかりではない、一番先きに立つかねが――臺灣にゐる所天から、數月前まで飛び〳〵に送つて來たのを、少しづつ蓄貯して置いたかねが

――仕送りの途絶へてから、喰ひ込んだ爲めに――全くなくなつたので、自分獨りの女腕の人仕事ばかりが手頼りになつた。それも思ふ樣に仕事があればまだしもだが、實際毎月の最も始末した入費をさへ出しかねる。

さうなると、一厘でも無駄なかねは惜む氣になり、繁を學校へ通はして置くことがお島の一大問題である。――通學させて置けば無駄におかねを費ふ樣なもの、退學させれば留守の所天に濟まない。繁をその相談相手にすべきものではないと思つて、お島獨りが、毎日、ひそかに、どうしよう、かうしようと思案した末、

『繁の不勉强はさて置き、林が送金して來ないのが惡いのだから』といふ理窟をつけ、いツそのこと、繁の學校をやめさせ、どこかいい商家の丁稚にやつてしまはうと　決心して見た。然し、また一方から考へると、自分が後妻だから、繼子の世話を厭がつて、亭主の留守にも拘はらず、林の家の名よごしも同樣、丁稚の樣なものに追ツ拂つてしまつたと、世間からそしられるのは心よくない。然しそれも世間が家の事情を知らないからのことで、――勿論、この事情は人には云へないが、――林に向つては、自分としての充分な申しわけがつく筈だと、また考へが跡もどりする。

いツそ繁に相談して、繁の望む通りにしようかと思へば、繁はまた夜遊びに出て行つて、ただ歸らないのに氣がつく。

繁の『し』の字を思ひ出しても、お島の顏には心配と癇癪との青筋が現はれるのにわれながら氣が付く。その上、こんな時のおもな相談相手たるべき所天の不人情な無音信に思ひ至ると、かの女の心は引ツくり返るほど燃え立つて來る。

夢中になつて、長煙管をふりあげたかと思ふと、お島はわれ知らす火鉢の猫板の上の相馬燒きを打ち毀してしまつた。

碌々眠ることも出來ないままに、幾夜さかを過してゐるうち、繁が書を書くといふことを聞き込み、通り向ふの容鑵製造所から、鑵のおもてへ書く書を暇々に賴みたいと申し込んで來たので、お島は飛び立つ樣な喜びを以つて受け合ひ、それから儲ける僅かのかねから、繁の月謝と家の入費の一部とを出させることにした。繁も面白半分にその受け合ひを勵み、時々、母には內證で學校を休み、一日その工場で暮すこともある。お島はそれを知つてゐても、もう何とも云はないほどにその心が他の心配の爲めにしびれてゐた。

或日、お島が多忙であつたので、隣り町に往んでゐる繁の伯父のところへ口上書きを出した。繁がそれを書いたのだが、口上の書き方が粗末な上へ持つて來て、署名のところに、『お島馬鹿より』としてあつたので、伯父は大變怒つて、下女を以つてつツ歸して來た。見れば、わが子の度胸があり過ぎるにもあきれるが、兄の怒るのも尤もなので、お島が自分で出かけて行つて、

ひたあやまりにあやまつた。その餘憤を歸つて來てから直接に繁に漏らし、
『手前の樣なものは親の面よごしだ！出て行け！』かうどなつたが、繁は平氣でちツとも取り合はず、
『おれはおれのうちにゐるんだい。よそから來たものが出て行け！』
『なにイ、手前は假そめにも親たるものの恩を知らないか？』
『親なら、親らしくせい、このしみツたれめ！』
『繁！』と、かう、一言、お島は怒つて、聲が顫えたが、繁が柔術の眞似をして抵抗するのを引きづり、引んまはし、無理無體に戸外の闇につき出し、ぴツしやり戸をしめてしまつた。
　繁も燒けになつて、そとから戸をどん〳〵叩き散らしてゐたが、つひに往生したのか、通りの方へ歩いて行つた樣子だ。それを心で見定めてから、お島は玄關の板の間にあがり、そこに備へてある雜巾で足の裏の泥を拭き、障子を締めて、自分の居間へもどつたが、一生の不安が一時に迫めかけて來たかの樣に、氣がわく〳〵して落ちつきどころがない。そして、あの子が今自分を『しみツたれ』と呼んだのは近處の人々や空鑵工場のものらに云ひ聽かされたのだらうが、それが如何にも殘念で――殘念で――自分がしみツたれに見られるのも、みんなこの林の家を思ふからではないか？それを繁は勿論、つれ添ふ所天までがかう思ひやりがないとは――ええ、情けないと、泣き倒れた。
　その夜も、お島は碌々眠られない、悔しくツて悔しくツて。第一、わが眞の子とまで愛してゐるつ

もりの槃が、からも不孝で、母たる自分を愛撫して吳れないのが腹立ちだ。不勉强で、不孝で、小癪で、いたづらで、まだ涎を垂らしてゐながら色氣づいて來て――と、しツかり指を折りながら三の個條を數へあげて見たが、それでは全く馬鹿だらうかと考へて見ると、またさうでもないところがある。謡をかかせれば、いつぞやの樣ないたづら書きにも、母親のヒステリ顏をわれながら呆れるほどそツくり現はすことも出來たし、けふの『お島馬鹿より』の大膽もまんざら知慧のない子には出來よう筈がない。今から、なぜあんなに圖々しいのだらうかと思ふと、行く末が賴母しくない樣で、もう〳〵他人の子などはない方がいいといふ氣になる。そして、自分の腹を痛めない子などの爲めに心配するは、無駄骨折り、馬鹿馬鹿しいことだと考へた。

『ああ、眞身の子供があつたら』と、お島は、今更らの如く、產まず女なる自分の手賴りないのを感じて、その感じをさかのぼつて行くと、いつしか自分の若かつた時のことが浮んで來た。父や母が自分をその膝もとへ呼び寄せ、道修町のがらす屋の某さんがお前をお嫁に欲しいと云ふが、行つたらよからう――自分は赤い顏をして兩親の前を無言で引きさがつた。恥かしくもあつたし、厭でもあつたので。

するとと自分のからだが、いい氣持ちで、すうツとどこかへ引ツ張られて行く。ああツと云ふまに、自分は見知らないところへ來てゐる。ちやぶ臺が据わつてゐて、それを中にして、自分とさし向ひ合

つてゐるのは林だ――臺灣へ來たのだ。林はいい機嫌で都々一などを歌つてゐる。自分はいつのまにか酌婦になつてるのだ。三味線を執つて、林の歌ふのに調子を合せるかと思ふと、それは自分ではなく、見知らない女だ。

『この畜生！』自分は障子のかげから突然飛び出したと思ふと、その障子ががたんと音がして、そのまた音で、自分が大きな石を以つて押さへつけられる樣に胸苦しいのをおぼえた。

『おや、いつのまに眠つてたのだらう？』かう思つて目を覺ますと、臺どころの戶が締る音がして、何物かが這入つて來たけはひだ。お島はぞツと總毛立つと同時に、簞笥の中にしまつてある物をその場ですべて思ひ出した。そして身を忘れて寢床をはね起き、一生懸命で――一つにはまたあわて過ぎて――勝手へ通る障子を引き明けた。

『どろ棒！』

この懸命な一喝に驚いて薮の間へ尻餅をついたものがある。それに氣が付いた時は、お島もこちらで尻餅をついてゐた。よく見れば、繁だ。渠は今勝手口をこぢあけて這入つて來て、こツそり寢床の方の障子をあけようとするとたんに、母の一喝を喰つたのであつた。

ふたりは同時に吹き出したが、繁は何にも云はないで褥を取り、無言でそれにもぐり込んでしまつた。

『馬鹿だねえ、お前は』と、お島が云ひ得た時は、勝手の戸締りを調べてゐた。それから、繁のと並んだ床に這入つた。神經の興奮――胸の動悸――これがなか〳〵納まらないので、繁がぐう〳〵いびきをかいて熟睡してゐるのを羨みながら、夜を明してしまつた。

翌日から、ふたりは割合ひに仲がよくなつた。お島は餘り繼子を叱るのはよくないと思つたのだし、繁はまた、如何に因業な繼母でも、それを餘り馬鹿にするのは氣の毒だといふ考へが起つた。そして、お島は人仕事を、繁は又罐の畫を、精出してやる樣になつた。

『お母さん、けふは三十錢分書いたよ』とか、『三十五錢分働いたよ』とか、繁が夜おそく誇りがほで歸つて來ると、お島も惡い氣持ちはしない。節約じみた薄暗いランプのもとで、仕事をしてゐる手を置いて、

『わたしもけふは二枚出來たよ』とか、『三枚仕あげたよ』とか云ひながら、縫ひ物やら針箱やらを方づけ、茶を入れて繁に飲ませ、自分も亦飲んで一息つき、それから暫く世間ばなしをする。そんな時に限つて、長屋の印刷屋がおそくまでも機械をごと〳〵云はしてゐるのがお島の氣にさはらない。いつもなら、その音をやかましいと云つて癪にさはるばかりでなく、人の根氣よくかせいでゐるのが妬ましくつて堪へられないのに。

『あの印刷屋の市さんは、若いのに、よく勉強して感心だよ。うちでも、ふたアりでしッかりかせい

で、少しでもおかねを溜めて置いて、お父さんの歸つた時、世話にはならないでもふたアりで立派に暮してゐましたと、意張つてやりたいものだ、ねえ。』

『それも面白からうよ。』

『なんだ、ね、お前は――お前もよツぽど小癪なことが云へる樣になつたよ。』

ふたりはにツこり同時に笑つた。

『もう、寢ようか、ねえ。』

『寢ようよ。』

親子ふたりは、互ひに手傳ひながら、寢床を敷いて無事に休むやうになつてから、お島も多少氣が落ち付いた。そして半年も以前に歸ると云つてよこした所天のまだ歸らないで、而も何のたよりもないことに對する不平や心配も、餘り口やかましく言葉にのぼさなくなつた。

さうかうしてゐるうちに、その年も早や暮れに近づいて來て、お島はその支度やお歳暮のことでまた心配し初めた折も折、一人の若い女で臺灣から今着いたといふ者が飛び込んだ。お島の判定では、年は二十五六、顏かたちに云ふべきほどの美點はなく、寧ろ不の字のつく方で、からだばかりはでぶでぶ太つて巖丈だが、どこか鳥渡意氣なところがあるのを見ると、藝者までは行かないが、酌婦か料理屋の女中かをしてゐたらしい。

『林さんには大變お世話になりました』と稱して、林の添書を示めし、梁の歸るまで一緒に置いて貰ひたいと云ふのだ。お島はこの要求を聽いて、直ぐきりりと眉を逆立てたが、女のゐる前だと思つたから、それにつかみつきたいほどの怒りを靜めて、無理に禮儀を正すと、女も人の女房のところへ押しかけて來た割合ひには遠慮勝ちで、ただ

『林さんがさうお仰つたので、まゐつたばかりです』と申しわけをする。

『一體どうした譯なのですか』といふに初まつて、この紹介手紙ではよく分らないが、如何に林が關係のある女にしろ、女房の所へそれを同居させようといふ林の理由がない。お島自身に取つても、亭主に妾を持たれたと世間から云はれては、體裁がよくない。親類の人でもないものを家に置けば、世間はどうしてもさうよりほか思はない。よしんば、それに辛抱するとしても、第一、自分が面白くない。あなたも面白がられないところにゐるのは、やツぱし面白くないだらう。面白くない同士が一緒にゐても、お互ひの爲めにならない。それに、もう、暮れに近いから、忙しくつてお世話が出來ない。

と、かういふ風に臆面なく、つけ〴〵云ひ放つたするゑ、

『今晩、とまるところがないと困るだらうから、近處の下宿屋へ賴んであげましよう』と云ふ。女もこんな人には賴まないと決心したのだらう、

『それには及びません、――それでは、明日、早く、埼玉の國もとへ出發致しますから』と、暇乞ひ

をする。お島は、では安心だと思つたから、

『まア、いいぢやア御座いませんか！臺灣の様子でも承りましよう』と、暫く引きとめて、女の話しを聽いた。その話しに據れば、お島の推察してゐた通り、新聞でやかましい土木工事賄賂事件の爲めに、林は牢に這入つてゐるのだ。然しまだ豫審獄であつて、證據不充分らしいので、無罪放免になるかも知れないが、賄賂を取つたもののうちでは、實際、主謀者の一人であつたといふうわさだ。一時は、臺北中の料理屋などで大盡かぜを吹かせるものの一人であつた。

『不義の富貴は浮べる雲といふ唄があるぢやア御座いませんか？あなたはその不義の富貴に迷はされたのです、ねえ』と、お島が笑ひながら斯う云ふと、

『さういふわけでもないんです――林さんとは全く關係はないんです』など、曖昧な言葉を殘して、曖昧な暗闇へと女は出て行つた。

その跡で、お島の押さへてゐた癇癪が一時に頭をあげた。

『人を馬鹿にするも程があらうぢやアないか、ねえ、繁』と、そばで默つて坐わつてゐた繁にその父の不了見に對する不平を漏らす。『如何に亭主だツて、餘り女房を馬鹿にしてイらア、ね。いい氣になるも程があらう。何が月も、何が月も送るべきおかねは送つて來ないで、勝手な眞似をしてイたんだ。貰ふべきおかねはこツちのものだら、こツちから借してあるも同前だ。せめてその利子だけでも

屆けて來るがいい。こちとらの心配はどんなものだか、藥にしても飮ましてやりたい。さうすれば、少しやアあの野呂間の士根性が直るだらう。待つても、待つてもたよりがないと心配してイると、あんな頓馬なでぶ〳〵女を利子にして屆けてよこした。ほんとに馬鹿とも、頓馬とも、野呂間とも、助平とも、ほんとに犬だか畜生だか分らないおやぢだ。わたしは、もう、覺悟したよ。この家の身上を片ツぱしから喰ひつぶして出て行くから、さう思つてるがいい！』

『さうおこつたツて、お母さん』と、繁は笑ひながら、『ここにゐないものは仕樣がないではないか？歸つて來てから、しツかり云つてやるがいいさ。』

『あんな奴は歸つて來ないでもいいよ。――あの女も女だ、おほ飯食ひの樣な風つきをしやがツて、よくも平氣で來られたものだ。『林さんがさうおツ仰つた』と、お島は長い腭を突出して口びるの左右に力を入れたが、『どんな面をさげて、そんなことが云へるんだ！』

『ほんとに馬鹿な女だ、ねえ。』

『馬鹿も馬鹿もおほ馬鹿、さ！あいつ、呼び返して、とツちめてやらう』と、玄關の方へ目を向けた。

繁は氣がつくと、母の目は引き釣つてゐて、そのかほは血の氣が通つてゐないかの樣に眞ツさをだ。ぞツとして、急に眞面目な心を起し、こないだ、工場の夜なべに聽かされたお岩の幽靈を思ひ出

した。ランプの光に部屋中の薄暗いのが怖ろしくなり、長火鉢のふちに兩肱をつき、手を火の上にかざして肩をすくめる。お島はまた身を顫はし、兩手を固く握つて、その一方を繁と相對するがはのふちにかけ、また一方は煙管を持つたまま膝の上に置いて、今にも何かに飛びかからんばかりの身がまへだ。

目はやツぱし外の方を見つめてゐたが、

『來い、畜生！何と思つてやアがる？ここはわたしの家だ、わたしの城だ、――だまして取らうたツて、明け渡すものか？何と云つても、渡すものか？――畜生！おほ馬鹿！――二度と再び來るんぢやアないぞ！』

段々その聲が大きくなつて行くので、繁にはその聲が外の寒い、眞ツくらな闇に響く様に思はれ、その凄い響きがまた自分の家その物をも振ひ去つて、その跡に闇ばかりの深林が出來て、自分はどこか、かう、芝公園の山の奥の地べたにでも坐わつてゐる氣持ちだ。そして、母の顔つきを見ると、自分を化した狐または地獄から來た鬼と相對してゐる様で、おそろしくつてたまらなくなつた。然し、それは鳥渡の間だ。

『何と思つて來やアがつたんだ！』お島がまたつづけ出すので、繁は之を制し、

『お母さん、靜かにおしなさい、となり近處に聽えるぢやアないか？』

お島は鳥渡繁を見たが、

『あゝどうしてやらう』と、煙草を以つて思ふさま疊を叩き、坐わつたまゝ身をゆすつて、室内をずしずし云はせた。

やがてお島は立ちあがり、羽織をぬぎ捨て、がたツぴしと簞笥をあけて、別な羽織を着かへ、何にも云はないで出て行かうとする。繁は之を見て、たゞさへ淒い心持ちが一しほ物凄くなつた。

『どこへ行くんです』と、何物かにうなされた樣な聲が出たと思ふ時は、もう、立ちあがつて、母が玄關の障子をあけようとするそばに行つてゐた。そして、全身が總毛立つをおぼえた。

『徹ちやんのところへ行つて、相談して來る』と、お島は答へた。徹一とは繁の從兄弟、お島の好きな義理の甥で、その家は林の兄の家だ。

『何を相談するんです』と、繁は初めて勇氣を得て、母をさえぎり、『相談があるなら、あすでも出來ます。そんな顏をして、見ツともないから、およしなさい。』

お島は繁にかう云つてさえぎられた時、わが子にも自分の所天の樣なおとなじみた威嚴が出來て來たと、嬉しくもまた賴母しく思つた。そして、漸く正氣に反つて、

『これでは丸で氣違ひの樣だ』とは口で云はないが、ひそかに心でわが身を恥ぢ、わが子のおとなじみた態度に打たれたといふ樣子で、『ぢやア、あしたにしようか、ねえ』と、しほ〳〵もとの座に立ち

返る。

『あしたにするも、しないもない』と、繁も元に返つて、『つまんない相談なら、見ツともないから、しない方がいいぢやアないか？』

『それもさうさ、ね——相談して見たところで、直ぐ林が歸つて來るんぢやアないし。』

『知れてまさア、ね。あの馬鹿野郎はくたばつてもいい、さ。』

『ふふん。』お島は斯う、をかしいといふ様子を見せて、『お父さんを馬鹿野郎だの、くたばつて了へだのと云ふべきものぢやアないが』と、微笑を含みて、『實際さう云はれても止むを得ないことをしてゐるんだから、仕かたがない。實に困つたものだ、ねえ。』

『さう心配するにやア及ばないや。馬鹿なものア馬鹿なんだから。勝手にさせとくがいいや。』

『さう思つてりやアかまはない様なものだが、林の家を思ふと、お父さんの仕うちがわたしの胸に納まらないよ。迷つてゐるんだから、迷ひを醒まさせる爲めなら、一つお前も、お父さんが歸つて來たら、女でも拵らへて、仕たい放題の放蕩をして見せるがいい。さうすれば、いくら心の箍が拔けてるものでも、親なら、きツと自分が惡いといふことが分つて來るだらうよ。』

『そんなことは、おかねもないのに、出來ません、さ。』

『出來ないが、わざとして見せるの、さ。』

『それも面白いでしようよ——然し、まア、お母さんは心配しずに待つておいでなさいよ。お父さんが歸つたら、わたしがよくやツつけてあげますから。——もう、直き歸る見込みがあるんでしよう、さうでなけりやア、自分が歸るまでうちにゐろと云つて、色女をよこす筈はない。』
『まさか、歸つてまでも、そんな馬鹿はわたしがさせないつもりだが、ねえ——心配すりやア方圖がない。どうも、氣がくさ〳〵して來て。』お島はからだを反らせ、兩手の指さきであたまの兩側、米かみのあたりを押さへながら、『あたまの心が痛くツて、痛くツて——わたしはまたヒステリが起りかけたんだよ』と、顏をしがめる。
『この暮近くなつてから、こんなことぢやア豫算が取れやアしない。』
『なアに、お母さん、わたしもしツかりかせぎますから』とは勵まして見たが、繁はその時母の顏をつく〴〵ながめ、今初めて氣がついたかの樣に、『お婆アさんだ、なア』と思つた。實は、渠は、今まで、友人等の母親のいづれに比べても、自分の繼母の方が若いと思つてゐたので——渠には、然し、女といふものは、若くなければ婆アさんだ。そして婆アさんとさへ云へば、何でも自分よりは四倍も五倍も年上であると云ふ感じを持つてゐた。『けれどもお婆アさんにしちやア、どこか違つたところもある。』
繁がかういふ考へをいだいて母に向つたのは初めてである。お島はどうしても若い方の仲間ではな

い。不斷は、世間體が惡いと云つて、身なりを小ざツぱりしてゐたから、家の部屋々々にほこり一つ溜めてないと同樣、母の黑い、つや〳〵した丸髷は鬢にほつれ毛一すぢも垂れてゐない。が、然し、近處のさアちやん、きイちやん、みイちやんや初ちやん、すべて繁が學校や學校歸りの途中やで出會ふたんびに、親しく話をしたり、またからかつてやつたりする女の子などに比べては、母の顏は色つやが褪せてゐて、小皺だらけだ。

『全體、年を越えれば、この繼母はいくつになるんだらう？』から考へて、繁はひそかに來年になつて母の年から自分の年をさし引いて見ると、なほ殘るのは僅かに自分の年と二三歲とだけだ。

やツぱし友人等の母親よりは若い。けれども又今更ら不思議な樣に思はれて、――若いと云つても、また、繁は母をさアちやんみイちやんの仲間へ入れてしまへないことが分つた。そして、さアちやんやみイちやんの賑かな笑ひや、そのなつかしい聲を母からは取け取れないのだ。

母はさう輕々しくは笑つて呉れないし、さう浮き〳〵しては話かけて呉れない。現在、繁の目前にゐ坐わつて、どツしりとかまへ込み、敎師に見る樣な威嚴を持つてゐる。

『中婆アさんに負けてやらうか』と、繁は心で價踏みをした。つまり、若いのでもなく、婆アさんでもなく、その中間の女があるのを發見したのだ。そして、この中間に屬する女でも男を好きだとか、男に惚れるとかいふことがあるのだらうかと、繁は自分で問ふて、自分で答へて見た。――

悋氣とかい、燒き餅とかいふのは何かといふことは、こないだから、罐詰工場の職工の男や女が話してゐるので分つたが、その悋氣や燒き餅が母にも亦やツぱしあるのだらうか？今しがた、あんな見ツともない女が來た爲めに、氣違ひの樣になるのだもの。やツぱし、悋氣があるのだ、燒き餅を燒くのだ。

それにしても、何の爲めにそんなことがあるのかと、また考へて見た——

母がお父さんを大切に思ふからだ、お父さんを好きだからだ。お父さんと一緒にゐたいからだ。そして、お父さんは男で、お母さんは女だ。かう老へて來ると、急にお島の髮のびん付けのにほひが繁の鼻に付いた。そして、母がいつも身をつくろつてゐるのは、單に世間體ばかりではないと云ふ同情が出て、

『お父さんは馬鹿だ、ねえ』と、われ知らず顏を赤めた。

『お前にさへさう思へるだらう』と、かうお島も繁を見てにツこりした。『まして他人が知つて御覽な、お父さんが馬鹿だと云はれるばかりぢやアない、うちのものが意久地がないと云はれらア、ね。』簞笥の上に据てある姿見に、ランプの光で、自分の顏がななめに映るのをのぞきながら、『わたしはほんとに瘦せた樣だ、ねえ』と、片手で頰をなでてゐる。『お父さんが若し近々に歸つて來るんぢやア、こんなに病人じみてゐちやア濟まないが、ねえ——』

『何でも心配ごとはおよしなさいよ。』

『さう云つたツて、心配しずにゐられないぢやアないか、ね？』

『喰つて行けないんぢやアないし、のん氣にしてゐたつていいんです』と、から、繁は何氣ない様子を見せてゐるが、母のにほひが一しほなつかしくなり、そでない様に見せようとするだけ、そのませた物云ひ振りが顫えてゐた。

『然し、繁』と、お島は思ひ出し笑ひをして、『今の女が若しうちにゐることになつたとして見たら、毎日、さぞお米が入るだらう、ね。』

之を聽いて、繁も鳥渡微笑した。母の言葉で父の色女のでぶ〳〵太りを思ひ浮べたのだ。然し、之と同時に、また、世間のうわさ通り、悋嗇な母のさもしい心が見え透かされた様な氣がして、現に母に對して繁の持つてゐた若草の下萌えの様な、薄あツたかい同情心は、まのあたりに消えてしまつた。

三

無罪放免、いま門司に着いたといふ意味の電報が突然林の留守宅へ來た。臺灣からその時門司へ着いたのだ。時は、一月も、もう末に近づいて、その年に這入つてからの初めて會ふ人々に對する『先づ明けましてお目出たう』もどうやらお互ひにきまりが悪い時節であつた。

生活に忙がしい林の家族は、お島も繼子の繁も、人よりは早くお目出た熱は醒めて、日常の狀態で、その日をかせいでゐた。

電報の來た時は、丁度、林の兄の女房が話しに來てゐたので、お島はさん／＼に自分の所天の不了見と無音信との惡口を列べ立てて、もう二度と再び歸つて來ないものに對するかの樣に不平をこぼしてゐたところであつた。それも、兄嫁の歸りがけに電報を受け取つたのであるから。意外の嬉しさの餘り、兄嫁に托して、その歸り途で、空鑵工場にゐる繁を呼び返した。

『お父さんから電報が來たよ』と、お島は繁の足音を聽きつけるや否やさも嬉しさうに叫んだ。

『さうだつて、ねえ』と、繁は玄關をかけあがりながら、『おお、寒い寒い！見せて御覽。』

繁は母と向ひ合つて長火鉢のそばに坐わり、母が頻りに讀み返してゐた電報紙を奪ひ取り、その片假名をたどつたが、苦しさうに肩で息をしてゐる。

『どうしたんだ、ねえ、お前の息づかひは？』

『驅けて來たから、さ。』

『さうあわてないでもいいぢやアないか』と、お島も喜んでゐる。

『嬉しかつたから、さ』と、繁もにこ／＼しながら手に持つ電紙を離さないで、『ムザイホウメンとあるから、賄賂事件の疑獄から助かつたのだらうか？』

『さうだらうよ。――然し、さうして見りやア、六ヶ月なり八ヶ月なり牢に這入つてゐただけが馬鹿を見たんだ。――お負けに、こちとらまでが貧乏と心配とをしてさ。』
『ほんとにつまんなかつたんだ。』
『つまらないくらゐで濟むものか、ねえ、可哀さうに、本人はどれだけこちとらに恨まれてたか知れやアしない。』
『ほんとうにさうだ、ねえ。』
『さうさ、馬鹿だとか、畜生だとか、野呂間だとか云はれて、さ。』
お島と檠とは滑稽であつたと云はないばかりに吹き出した。ふたりは林に對するこれまでの恨みと不平と心配とを丸で忘れてしまつた樣だ。
『然し、君子は危きに近よらず、といふことがある』と、お島は眞面目になつて、『その危きに近よつたのはやツぱしお父さんが悪かつたのだ。お前もよくおぼへてゐて、お父さんの眞似などしてはいけないよ。』
『お父さんはお父さんさ、おれはおれだ。』
『そんな利いた風なことはお云でない。――然し、まア、今門司に着いたと云つて』と、お島は電紙を檠の手から取り、その時間附けを見て、『午前十一時半に出したのが、もう一時半だ。――けふ向ふを

何時に立つか知れないが、直ぐ出發したとすると、遲くもあしたの晩には東京へ着くだらう。――繁、うか〱してはゐられなくなつたよ。』

お島は夢から覺めた樣に異樣な氣の引き締りを覺えて、今一つ出來かけてゐる仕事を早く仕あげてしまうつもりで、再び針を持ち出すと、繁は、もう、何にもしなくてもいい樣になつたかの如く安心して、工場へ再び行つたは行つたものの、心がうわ〱して、碌な仕事は出來なかつた。

その晩、ふたりは首を集めていろんな相談をした。林は二年以上も留守にしてゐたうちにどんな風になつてるだらうとか、いくらかおかねは持つて來るだらうかとか、これから何をして家族を安心させるだらうとか、兎に角、お父さんが歸つて來るのだから、これまでのことは忘れたものとして、ふたりでよく持てなしてやらうとか、繁も正氣に心を入れかへて學校の勉強をしなければならないとか、――然し、お島の最も氣にかかるのは、わが子の不勉强を、その父の不人情に對する不滿と燒きもきとの勞れからだとは云ひながら、餘り注意もしないでなほざりにしてゐたことだ。

自分の所天はもう歸らないかの樣に思ひ込んでゐたので、繁を自分の心のままに左右していいものと信じ、苦しい生活の助けにもして、窑鑵の罐を書くことなどを受け合はしてゐた。が、お島が獨りで考へて見ると、所天が歸つて事情を知つた上、繁は確かにお前の繼子だ、お前の腹を痛めなかつた子なるがゆゑに、學校を休むのを見のがしてまでも、はした金の賃錢に目をくれて窑鑵工場などへ行か

せてゐたのだらうと責められては、如何にも心苦しい。
『ああ、自分ばかりの不平や心配の爲めに、一生の手ぬかりをした！』お島は、かう思つて、繁にもそのわけを聽かせ、『學校を休んでまでも工場へ行つてゐたと云へば、お父さんはきツとわたしの不注意を責めるだらうし、お前も亦その不心得を叱られるだらうから、そこはお母さんからよく云つて置く樣にするかはりには、あしたからちやんと學校へ行つて、よく勉強をしてお呉れよ。』
『はア』と、繁は氣のない返事をした。
　それでも、その翌朝は、繁も多少父の思はくを心配してだらう、久しぶりに辨當を拵へて貰つて、革鞄を引ツかけて、小學校へ行つた。
　お島はまた、不斷から磨きあげた家中を一層奇麗に片づけ、自分の身のまはりをも不斷よりは一層注意して、林の到着を待つてゐた。いつもは少しも呼ばない魚屋までを呼び入れて多少の歡迎準備を整へた。そして、その日に限つて、氣が愉快に浮はついてゐて、針仕事が手につかない。用事は早く片づいた手持ち無沙汰に、簞笥の前に立つて、その上の姿見に自分を映して見ると、けふばかりは少くとも嬉しさうであるべき筈のわが顏は、却つていつもよりは沈んでゐる樣子だ。おも長の輪廓に頰骨が目に立つのは、近頃の燒きもきしたせいであるとは承知してゐるが、少しも喜んでゐる樣子が見えない。われながら、

『寂しい顏になつてしまつた』と思ふ。人の云ふ通り、餘り慾が深いから、天道が段段自分をかうしたみじめに落して行くのだらうかと考へると、その天道にさからつても、自分は脊に腹はかへられない。どんなに慾張らうと、自分は林の樣な身分不相應なものをむさぼらうとはしない。慾張りとは、實際わが所天のことだ。身分不相應な贅澤や放蕩をしようとして、賄賂を取つたに違ひない。無罪放免とは、うはべだけのことで、その取つたかねはすべて放蕩費に使つてしまつたに相違ない。うちに殘つてゐるものこそいい面の皮であつた。何事も家の爲めの心配だ。人仕事をするのも、繁を工場にやるのも、決して贅澤をしようと云ふのではない。少しでもかねを殘して、家族が樂になりたいと思ふばかりだ。それが罪なら、罪でも、恥づべき所はないから、するゐは地獄へ落されてもかまやアしない。

かう思つて、わざとにツこり笑つて見ると、鏡の奥には般若の笑ふ顏が見えた樣な氣がしたので、ぞツとして、その前を離れる。

手をふところにして、室內につツ立つたまま、首をかしげて考へると、どうしたことか、悲しくなつて堪らない。男に長く離れてゐると、自分の樣な年になつても、ヒステリを起し易いと人は云ふが、自分はそれほど氣が弱いものではない。

『かうした心配病になつたのも暮しの爲めだ、繁の不勉强な爲めだ、いや、やツぱし林がゐない爲めだ』と、お島は考へて見た。それにしても男に惚れた、眼れたの時代ではない。何ごとも持ち寄りで、

甘く暮らして行けさへすればいいのだ。林は歸つて來て何をするつもりか知らん?繁をどうさせる考へだらう?自分を大事にして呉れようか?こんなことを考へ拔いて方圖がなくなつたが、ふと氣がついた樣に、『やツぱし可愛がつて貰ふに越したことはない』と、再び鏡が戀しくなつて、それに向ふ。鏡のがらすは、無愛嬌にも、また冷たさうにも、お島の心配さうな、いやアに痩せた顏をありのままに映してゐる。

お島は、けふは寒い日だと思つた。同時に、世に、親身の親しみを與へてくれるものはどこにもないのかと情けない。そこへ、

『お父さんは歸つたかい』と、繁が飛び込んで來た。けふばかりは、繁は引け時まで學校にゐたのだ。

『びツくらしたぢやアないか、ね?そんなにあたふたするにやア及ばないよ』と、お島はそ知らぬ樣子で火鉢のそばに坐わつた。

『何もあたふたするんぢやアないさ』と、繁はからかひ笑ひをして、『まだ歸らんのか?』

『まだそんな時間ぢやアないよ。』

『いつ着くんだらう?』

『今晩中には着くだらう。』

『ぢやア、遊んで來てやらう』と、繁が直ぐ出て行つたあとで、お島は動くのも物憂いと云ふ樣子で、

そのまま坐わつて考へ込んでゐた。そして、五時頃にはいつも濟ましてしまう晩飯を、まア、まア、成らうことなら一緒にと思つて、延ばしてゐる。

お島が待ちくたびれて午後十時の音を聽いた頃、林は

『今歸つたよ』と云つて、格子を明けた。待ち設けてゐた人が歸つて來たのではあるが、お島はその所天の聲を聽いて、いつか締が深夜に勝手口から這入つて來たのを泥棒と思つた時の樣に、びツくりした。そして、つもる恨みの數々はどこへやら行つてしまつたかの樣に、ただ胸をどきまぎさせて、飛んで出た。

『お歸んなさい』と、自分は物靜かに明けたつもりの障子が、日頃の行き屆いた注意で油すべりがよくなつてゐるのを、これ見よがしと云はないばかりにすべり明いて、明けた方の柱にぴしやりと當つた。『はツ！』と、きまりが惡い思ひを取りつくろつて、『汽車は寒かつたでしよう、ねえ。』

『あツたかい方から來たんだから、段々東京に近くなるほど寒くなるのは妙だ。』林は口から白い息を吹きながら、手さげ革鞄を一つ持つてのそり／＼とあがつて行く、その後ろについてお島も奥へ行きながら、

『憎らしいほど平氣ならはばみの樣だ』と、心でひそかに微笑した。

車夫が跡から行李を一つ持ち込んで來たので、『まだあつたのか？あんな若にまかせ切りで無用心な

こと』と思ひながら、お島はそれを受け取り、所天に聴き糺して車賃を渡し、車夫を返した。そして所天が御飯はまだ済まないと云ふので、直ぐ酒の燗をしながら、用意の馳走をちやぶ臺に列べた。その間にも、留守中のさま〴〵な恨みと心配とを一時に吐き出す様な言葉はないかと考へたが、それが思ひ當らないので、何だか胸がつまつた様な氣がして、その場に必要な言葉以外には、少しもしやべりたくない。しやべれば、また、とめ度もなく出るに違ひがないのを身づから知つてゐるから、歸り早々喧嘩づらでもないと、さし控へた。

お島は所天の歸りを待ち設けてゐた割合ひに、どうも、氣が進まない。お酌をしながらも、どうも、氣が面白くない様で沈み勝ちだ。

『どうかしたのか』と、林は猪口を置いて尋ねる。

『どうしたも、かうしたも御座いませんよ』と、お島は薄ら笑ひにまぎらして、『云ふべきことはいつでも云へますから、まア、一杯お飲みなさつて、さツぱりとお風呂にでも行つておいでなさいまし。』

『風呂にも行つてあつたまつてきたいが、もう遲いよ――そりやア、おいらも惡かつた、さ。かねは送らなくなるし、たよりもしなくなる、さぞ留守居は困つてるだらうとは思はないでもなかつたが、かう無罪放免になるまでは、牢から出されるかと思ふと、直ぐまたほうり込まれたので、どうしようもありやアしないのだ。』

『どうして、また、そんなへまなことをしたんでしよう?』
『それだけは云つてくれるな。もう、誰れにも聽かれたくはないし、おいらも云ひたくはない――實はおいらが慾張り過ぎたの、さ』と、林は案外眞面目なので、お島は一層つツかかる機會がない。
『久しぶりだ、お前も飲みな』と猪口をさされて見ると、お島も一方には
『ええツ、燒けツ腹だ』といふ反動もあり、また一方には、所天の前だからといふ安心も出て、珍らしくも三四杯所天のお相手をする。然し所天がするのろけ雜りの臺灣ばなしは少しも面白くない。林も家に歸つては、多少遠慮してだらう、昨年の暮れに、自分の手紙をつけてよこした色女のことには一言も云ひ及ばないのだ。お島も、わざと意地になつて、そのことは聽からうともしなかつた。
そして、所天の顏をよく見るに從つて、鼻がうは向きに反つて、笑ふたんびに顏の筋肉がくしやくしやとそれに集中する樣子が丸でお猿の樣なのは、初めからのことだが、大きな横皺が二三本刻まれてゐる額や、太つてはゐるが、たるんでる頰などの色が赤銅の樣に赤くなつたのは、全く臺灣の熱天にさらされてゐたからだ。土木工事の爲めには隨分野天で働いてゐたのだらうと推察出來るが、よくもこんなおやぢに惚れる女があつたと、お島はをかしくもなる。然しこの嚴丈な男がどこかやつれてゐる樣に見えるのは、やツぱし牢に這入つたせいであらうと――
林は大分醉つて來たが、ふと思ひ出した樣に、

『おみやげがあるんだが――』と、革鞄（かばん）を引きよせながら、『繁はどうしたんだ？』

『繁ですか？あの』と、お島は古痛（ふるきず）でも隱す樣にあわてて行き詰つたが、醉ひがまはつた頰ぺたに兩手をかけるにまぎらし、『近處のお友達のところへでも行つてるんでしよう、今呼んで來ますから』と席を立つ。

お島の考へでは、きツと工場で仕事をしてゐるのだらうと思ふから、そこへ行つて見ると、もう、戸がぴツしやり締つてゐて、誰れも起きてゐさうでもない。それで、ここか知らん、あすこか知らんと、思ひ當るところをうろ附いて見たが、どこもどこも戸が締つて、人聲（ひとごゑ）一つしない寒い夜だ。止むを得ず、

『事にならなければいいが』と、心配しながら、歸つて來た。お島は、所天が醉つて來ると、言葉が荒くなるのを知つてゐるのだ。

『どうだ、ゐたか』と、果して林の權幕（けんまく）が違つてゐる。

『どこにもゐませんが、もう直き歸つて來るでしようよ』と、お島は何氣（なにげ）ない樣に答へたが、からだがふら〳〵するのは、醉つてゐる爲めばかりではない樣だ。

『なんだと？直き歸る？馬鹿を云ふな！あいつの不勉強なことはおいらもよく知つてるから、出立（しゆつたつ）する時にも、あれだけ懇々お前に頼んで置いたぢやアないか？それを、何ぞや、相變はらずぺん〳〵と

遊ばして、ほうツたらかしてたんだらう?』

『いい加減な當てずツぽうをお云ひなさんな、わたしは口がすツぱくなるまでどれだけ云つて聽かしてゐたか知れやアしないのに。』

『ぢやア現在、ゐないのはどうだ? おいらが歸るといふのに、この時刻になつても、夜遊びに出て、まだ歸つて來やアがらない! もう、直き十二時だ。』

『あの繁にも、實は困つてるんですよ』と、お島ははらはらする心を押さへて、『いくら云つても、直らないんですもの。』

お島の聲が多少訴たへる樣な調子であるが、林はそれを受け取らない。且、臺灣滯在中の不始末を女房から手ひどく攻撃されることが、少くとも一度はあらうと期待してゐるので、成るべくそれを避ける爲めに機先を制してやらうといふ考へから、ふたりの間の厄介物なる繁のことを出しに、強硬な態度を取らうといふこともまじつてゐた。

『直らないのは子の罪ぢやアない、お前が惡いんだ。――お前は、全體、口やかまし過ぎるんだ。しんみりと云つて聽かせりやア、どんな子供だツて、一度で分つてしまうことを、ただがみがみどなり附けるから、いつも馬鹿にされてしまうんだ。』

『ふん、あなたの子供は』と、お島はじろり所天を見て、『さぞ利口なお生れでしようよ』と、わざと

らしく横を向く。

形勢は甚だ險惡になつた。林も、お島も醉つてゐる。林はじツとお島をにらみ付け、猪口を口へ持つて行つたが、それを飲み乾して下に置くと、

『繼ツ子だから、そんなことをぬかすんだらう？』

『さうでしようよ』と、お島は口早やに『繁がわたしの繼ツ子なら、わたしはあなたの繼ツ妻でしよう。勝手な眞似をしてイて、さ、こちとらを口乾しにするつもりだらう！』

から云つた言葉の末が、かな切り聲の特色として、しんとした戸外へも響き渡るやうなので、林は外聞が惡いといふ氣が先きに立ち、一層怒らずにはゐられなかつた。

『默れ！近處へ聽えらア！』

『聽えても、わたしが惡いんぢやアない！』と、一層聲が高い。

『なんだと！』から一喝して、林はお島の横鬢をなぐりつけた。

お島も、何だか、一度は所天になぐられて見たい樣な氣がしてゐたのであつたが、さて、なぐられるとなれば、夢中で一抵抗した。そして、から意外に強く思ひ切りなぐられて、あたまの心まで響いたのかと思へば、愛相もこそもなくなつてしまつて、抑さへてゐた恨みが一時にこみあがつて來た。

『さア、ぶつなら、もツとおぶちなさい！さア、もツとおぶちなさい！死んでもいいから、おぶちた

さい！』

お島は、かう叫んで、所天(をつと)の方へゐざり寄つたが、われながら、からだが顫えて、聲ばかり高いのをおぼえた。林は、また、わざと落ちつき澄まして、自分の妻の様子を見たが、妻の眞ツさをな顔の筋肉(きんにく)がすべて引き釣つて、かな切り聲と共に顫えてゐる　に見える。そしてじツと自分を見つめて、兩手をいら〳〵させて、今にも飛びかからんばかりの勢ひを見ては、先づこれが自分の妻であるかと一種の嚴肅(げんしゆく)な凄みを感じ、次にまた曾て自分の友人の細君が行つた巣鴨病院の想像が浮ぶ。自分が臺灣へ渡るまでは、いくら夫婦喧嘩をしても、かうした狂態(きやうたい)を演じなかつたが、いつのまにこんな氣遂ひじみた女になつたのか知らん。自分の留守と不了見との爲めに妻の心配性を高じさせたのではないかと思へば、今なぐりつけたのが氣の毒で、可愛さうな様にもなるが、全體、初めから、この女の口やかましく、苦勞性過ぎるのが面白くないのであるから、林は自分からあやまらうといふ氣には、どうしてもなれない。

『いよ〳〵本物(ほんもの)になるなら、なれ！』かう林は云はないばかりに平氣をよそほひ、猪口に手を持つて行かうとする時、手の甲がひり〳〵するのに氣がつくと、いつのまにかお島の引ツかいた爪の跡がついてゐた。

お島はさも悔しいといふ様子で、

『人を何だと思つてるんだ？總嫁や淫賣あがりの女と一緒にされちやア困ります！わたしはあなたの妻です。あなたに殺されるなら本望ですから、さア、殺すならお殺しなさい』と、所天をにらんでゐる。

『馬鹿！誰れが殺すと云つた？』

『ぢやア、なぜおなぐりになつたんです？』

『………』

『ななたの留守にどれだけ心配したか知りますまい？』

『………』

『病氣になるほど繁のことも心配したのは御存じありますまい？』

『………』

『十六にもなる子があるのに、勝手な眞似をして、さ——まさか、色氣違ひぢやアあるまいし——』

『手前こそ色氣違ひぢやアないか！口やかましい女だ！』

『口やかましいのも、みんなあなたが心配させたからですよ。繁は繁で、手に合はないし——若し、纖ツ子と思やア、こんなに苦勞もするにやア及ばない。獨りでやきもきしてイて、ほんとにつまりやアしない！』

林は不愉快さうに無言になつて、ちび／＼酒を飮んでゐる。お島はまだ云ひ足りないといふ樣子だが、所天が取り合はないので、その餘憤をどうして漏らさうと、暫く無言で考へてゐる。そこへ、おほいそぎに下駄の音をさせて、繁が歸つて來て、玄關をあがるが早いか、
『お母さん、お父さんは』と、寒さうに鼻を赤くして奧へ來たが、林がゐるのを見て、急にいぢけた樣にゐずくまつて『お歸んなさい』とお辭儀をする。
『今頃までどこへ行つてたんだ？』から林はにらみ付けた。
『友達のところにゐました』と、繁はおづ／＼して、父と母とを見くらべる。
『友達のところにしろ、どこにしろ、子供が今頃まで夜遊びをすることがあるか？お父さんがゐないのをいいしほに、いつも氣ままばかりしてイたんだらう？』
『繁！』と、お島は自分の餘憤を漏らす目あてが出來た『お前の爲めに早速お父さんに叱られてるぢやアないか？先づ第一にこのお母さんにおあやまりなさい！』
『何もあやまることアない！』
『ありますよ！日頃の苦勞や心配は、お前の爲めに、みんな水の泡ぢやアないか？』
『水の泡なら、水の泡の樣なことをするものが惡い。』
『なんだと！』からお島は叫んで、膝で疊を打ち、『お前も、お父さんが歸つたと思つて安心して、お

父さんと一緒にぐるになつて、わたしを苦しめようとするんだらう？』と、繁に飛びかからうとする勢ひだ。

『ふん』と、繁は馬鹿にした樣によこを向き、『丸で氣違ひだ！』

林は默つて二人の爭ひを聽いてゐた。そして、わが子の云ふ通り、お島は丸で氣違ひの樣だと思つたが、それも少なからず自分の仕うちが惡いのに出ることを知つてゐるし、また、お島を叱りつけたあげくに、わが子ばかりを可愛がる樣な態度を見せるのも、ます／＼お島の機嫌を損ずるだらうし、その上わが子の小癪な云ひ分を聽くと、ませて來たと思ふだけ、夜遊びなどをするのを責めずにはゐられない氣になる。

さうとも知らないで、繁は母をねめつけてゐると、お島は急に繁にしがみつき、

『繼ツ子あつかひをするさうだから、かう繼ツ子あつかひの樣にしてやるんだ！』と、さん／＼に繁を振りゆすつた。繁は、承知しないといふ意氣込みを示めして、お島の肩を打つ。

林はその中へ這入つて二人を分け、それから繁を引据えて、

『この不素者め！』と、打たうとする。繁はそれを避ける。林は一層怒つて、ところ構はず握りこぶしでうちのめす。

『もう、およしなさい』と、今度はお島が林をとめて、もとの座につかせ、『打ちどころが惡いと、醉

つてる勢ひだから、あぶない。』
『なアに、殺してしまうがいい！』と、林は息を切りながら繁をにらみつけ、『假そめにも親たる者に手向ふなどとは、不埒千萬だ！』
『みんなお前が惡いところから起るんです』と、お島も一緒になつて繁の方へ向いて見ると、繁がちいさくなつて下を向いてるので、可愛さうな氣にもなり、『お父さんにあやまつて、可にしてお貰ひなさい』と、二三度それを勸めた。
繁も、どうせかなはないと觀念して、
『御免なさい』と、しぶ〳〵あたまを父に向つてさげた。
『お前が惡いと思つたのなら』と、林は少しやさしくなつて、『今一回母さんにもあやまるがいい。以後さういふことをするんぢやアない。土産もあるが、けふはやらない、あすやる。』
『御免なさい』と、繁は厭々ながら思ひ切つて母へあたまをさげた。
『それでいいから』と、お島は所天に對しても胸が晴れたといふ樣に眉を開いた。そして、繁にその言葉をつづけて、『今晩はもうお休みなさい。』
から云つて、お島は所天の猪口に殘りの酒をつぎ加へ、飯を盛り與へてから、それから立つて行つて繁の寢床を二疊の間に取つてやつた。父が臺灣に出發するまでは、繁はこの二疊の間に寢るのが常

であつたのだが、父の留守中は母と室を同じくして奥の間に寢てゐたのだ。

『お休みなさい』と、しほらしく挨拶して、繁は母の取つて呉れた冷たい寢床へ引ツ込んだ。『けふから又獨りでここに寢るのか』と思ふと、もとは感じなかつた寂しみをおぼえて、何となく自分の兩親が非常にねたましい。そして床の中からじッと渠等の話に耳をかたむけてゐると、母は自分のことを賞めたり、くさしたりするのを、父は、飯をほう張つてゐるらしい口ぶりで、それに調子を合はしてうなづいてゐる。空鑵工場へ行くことは成るべく云つて呉れない方がいいが、若し母がしやべつたら、自分にも相應の云ひ分があるぞと注意してゐたが、この話はさすがに出さうでもない。

『十六にもなつて、まだ赤ん坊だから、仕やうがない』と、父が云ふと、

『いいえ、どうして、どうして――おそろしいほどませて來ましたよ』と、母が答へてゐる。

『まア、大丈夫だ』と、繁は心のうちで思つた。且、母がませて來たと云つたのが嬉しい樣に身にしみたので、床の中でわざと身をすくめて、舌をぺろりと出した。そのうちいつのまにか眠つてしまつた。

繁のおほいびきが聽える樣になつたので、お島は所天と顏を見合はせ、

『もうお休みなさいますか?』

『さうだ、ねえ――久しぶりで醉ふことが出來た。――監獄は實に厭なところだよ』と、林は顏をし

がめた。
『そりやアさうに違ひはありますまい。』お島は所天を見て冷かしじみた笑ひを向け、それから膳をかたづけ出した。『まだ〳〵云ひたいことやあやまりたいことが澤山御座いますが、お歸り早々喧嘩でもないから、あしたにもあさつてにも致しましようよ。』
『おいらもあすから勤め口を探さにやアならないが、今度定つたら、今度こそは立派に落ちついて見せるから――』
『わたし達も少しやア安心させて貰はなけりやア、ねぇ――』
『まア、まア、あとの話はあすのことだ。』
こんなことを話したり、話されたりしながら、お島が床を延べてゐると、遠くの方から半鐘の音が聽えて來た。
『あ！どこか火事ですよ』と、お島がきツとなつて耳をそば立ると、今まで多少やわらいでゐたかの女の顏に不安の影が再びきよと〳〵しくあらはれた。林は直ぐそれを認めたから、
『なアに、心配するにやア及ばない一番だ』と、なだめながらお島に續けて云つた、『東京は相變らず火事が多い、ねえ。』

四

林が第一の心當てにして歸つたのは、工學博士の某だ。土木事業に關係しては、古くから度々世話になつてゐて、その人の直接部下に使はれて、東京市の道路修繕をやつたこともあるし、またその人の紹介で或請負會社の役員になつたこともある。早速、同博士のもとへたづねて行つて、どこかいい口は御座いますまいか？今度は、もう、成るべく東京にゐ付きたいのだが、若しなければ止むを得ないから、地方でもまたよろしう御座いますと賴んで見た。同博士は、林の家では、もとからただ博士で通つてゐるくらゐ親しまれてゐるのだが、今回はどうも乘り氣になつて吳れない。

『そりやア、君のことだから、心がけては置くが、僕ばかりを手賴つて貰つては困るから』と云つて、博士はほかの人にも運動して見る樣にすすめたので、林は歸り早々から、毎日の樣に、隨分方々に奔走してゐるのだが、如何に無罪であつたとは云へ、かの臺灣賄賂事件の關係者であるから、人が薄氣味惡がつて、熱心な周旋もして吳れないし、また使つてやらうとも云つて吳れない。林はただ多少の手がかりにすがつて、どうか甘い返事が來ればいいがと、待つてゐるほかはなかつた。

そのうち、十日と立ち、二十日と立つが、林は毎日、朝から晩まで、多くは炬燵のなかにごろついてゐるといふ有り樣で、殆んど何にもしない、入獄中知人のもとに隱して置いた二百圓ばかりの金

も、持つて歸つて鳥渡女房お島をよろこばせただけで、近處の貯蓄銀行にあづけたは預けたが、五圓引き出し、十圓引き出し、段々居喰ひ同様に減じて行く。

子にまで『しみッたれ』と云はれたお島は、これが爲めに、氣が氣でならない。

『俸給はいくらでもいいから、早く口を定る様に奔走したらいいでしよう』と迫り、『つまり、あなた、どうするおつもりです、毎日、さうごろ〳〵寢てゐるばかりで、さ？』

『なんだ！』と、林は、これを聽いて、あふ向けに倒れてゐたからだを起し、片手の握りこぶしを炬燵の上にしッかりと掛け、お島がそばで人仕事をしてゐるのをにらみつけた。『誰れも好きでごろ〳〵してイるんぢやアない！定る口がないから、仕やうがないんぢやアないか？』

かうしたいさかひは始終絶えることがない。然し林は自分の勤めが出來るまでは、まアまア、と、お島に一歩を讓つてゐるので、お島は一家の女王の様にその勢力と權幕とが増長し、かせぐことも隨分かせぐかはりには、自分の所天をも、子供をも腭一つでこき使はうとする有り様だ。

『いい氣になつてゐやアがる』と、林が始終胸中で面白く感じない。

然し一つまだお島の方に秘密が殘つてゐた。それは繁を相變らず空罐工場の書を書きにやつてゐることで――これは、繁にも云ひ含めて、父には内證にしてあつたのだが、いつしか知れる時が來た。

林はわが子が學校から歸ると、直ぐゐなくなつて、晩飯も喰はないことが多いのに、お島はそれを何

とも云つたことがないのに氣が付き、これはてツきり自分の歸つたのを幸ひ、繁の身の上はすツかり自分にまかせ切りにして、お島は繼子に對するうるさい責任をのがれてゐるのだ、な、と考へた。
『果してさうなら、おいらが默つては置かれない』と思ひ、或夜、繁が遲く歸つたのを呼びつけ、
『お前は晩飯をどこで喰つたんだ』と尋ねる。
『よそで喰べました』と、繁はおづ／＼してゐる。
『よそには違ひない』と、林は嚴格に出て、『自分の家で喰はないなら、よそには違ひないが、どこで喰つたんだ？』
『………』
『どこで喰つたんだ？』
『………』
『どこか云へ』と、林の聲は段々高くなるに從つて、繁の首は段々低くなる。『云へないことアなからう、云へ！』
『お母さん、云つてもよう御座いますか』と、繁はそばに坐はつて仕事をしてゐる母に聽くと、お島も止むを得ないといふ目つきを見せて、
『かうなつては、もう、隱してゐることも出來ないから、お父さんに惡く思はれない樣に云つてしま

う方がいいよ。』

林は、自分の留守中から、ふたりでどんな內證事をしてゐたのだらうといふ疑念を以つて、熱心に繁の自狀を聽いて見ると、空罐の畫を書きに近處の工場へ每日行つてゐること、そこで多少の賃銀を貰つて生活の助けと小使とにしてゐること、飯もそこで喰へば、それだけその日の費用がはぶけることと、すべてかういふつもりであつたことが分つた。

そして、お島は繁のあとについて、

『それも決して惡い考へでやらせたのぢやア御座いません、あなたのお留守と音信不通の爲め、暮しに困つたあげくの相談づくでしたから。』

と說明した。そして、さすがは、學校を休ませてまでも工場に行つてゐたことは明さなかつた。

林はこれを聽いて先づその眼に淚を浮べ、

『さういふわけなら、仕かたがなかつたらうが』と、さきの權幕とはうつて代はつて、言葉がやわらぎ、自分の意氣地なしを恥ぢないではない。然し考へて見ると、繁は自分の獨り息子だ。ほかに女の子は二人もあつたが、一人は死んでしまうし、一人は養女にやつて、今ではその行くゑが分らない。老後の手賴りはこの繁ばかりだ。それを。何如に活計の爲めとは云へ、空罐工場などへ空に働かしにやつて、只さへ不勉强なものを一層不勉强にさせるのは、自分に取つて最も面白くない。何とか別な

方法もあつたらうにと思へば、お島が繼子と思つて繁の爲めをもツとよく考へて呉れなかつたのだらうと、林の胸は張りつめるほど不滿の情が湧いて來る。
『然し今それをかれこれ責めたとて、取り返しはつかない――また、自分の不行き屆きな點もあつたのだから』と、林はじツと不滿を押さへて、口には出さなかつたが、どうも默つてはゐられない樣な氣がして、
『繁、お前は何になるつもりだ？』
『畫かきになります。』
『畫かき？ 空鑵の畫などを書いたて、立派な畫かきになれると思ふか？』
『そんなことは思ひません。』
『それぢやア、しツかりしろ――小學校も出ないものが、何をしても、立派になれよう筈がない。』
『はい』
『來月は卒業試驗じやアないか？しツかり勉强して、立派に卒業證書を取つてしまはなけりやア行けない。二度も三度も落第して、さ、もういくつだと思ふんだ？』
繁は困つたといふ樣子を見せたし、お島はちいさくなつて默つてゐた。
その翌朝、お島は林に、催促がましく、

『いつまでもあなたが遊んでゐちやア心細いぢやア御座いませんか』と云つたのが初まりで、林は不愉快の餘り、

『おいらのことばかり云ふまい。手前はどうだ？繁をよく勉强させてゐるかと思つてゐたら、空罐工場などにやつて、下らないことをやらした』と奴鳴り出し、また激烈ないさかひが出來、お島は林の不人情な不行き屆を責め、林はお島の不注意不都合を攻擊し、夫婦のぶち合ひ、つかみ合ひとなつた。そして、『馬鹿』、『畜生』、『助平』、『色狂違ひ』などいふ賣り言葉に買ひ言葉が折り返して、投げかはされた。

繁は、丁度、しぶ〳〵學校へ出かけるところであつたが、兩親のこの有樣を見て、敎科書をすべてほうり出した。そして、

『どうせ、厭な學校へ行つて、自分よりもずツと年下な子供等と一緒に本を敎はるのは面白くない。いツそのこと、家を逃げ出してしまふ方がいい』と心の中で叫び、母の落した小使入りの財布を拾つて、どこかへ出て行つた。

夫婦のいさかひ熱が醒めた時、お島は自分の財布がなくなつたのに氣がついた、そして繁の部屋を見ると、學校の書物などは投げ飛ばしたままであるので、財布がなくなつたのも繁の仕わざだと感づき、自分の所天を恨む念が全くその子に移つたかの如き心持ちになり、繁のこれまでの不始末をあら

ひ浚ひ所天にぶちまけてしまつた。

わが子が不勉強な上に色氣づいて來たことや、母が出す手紙の代筆に大膽にも『お島馬鹿より』と書いたことや、追ひ出されたら、勝手口の戸をこぢ明けて這入つて來たことや。よその子供の持つてゐる菓子を奪つて喰べたり、母を何とも思はないでしみツたれと云つたりしたことや、林は意外なことばかり聽かされて、今まで手頼りにしてゐた實子ながら、その所業を全く憎まずにはゐられなくなつた。

繁は翌日になつても歸宅なしい。お島は心配して、

『警察へ屆けて、探して貰ひましようか』と云ふと、林は却つて平氣だ、

『なアに、あんな不屆き者は野たれ死にでもするがいい！』

夫婦は、日を經ても歸宅しない繁のことは段々云ひ出さない樣になつたが、忘れられないのは林の勸め口だ、どこそこへ行つて聽いて見ればいい、あの人に就て賴んで見ればどうでしようなどと、お島は、はたにゐて、林のごろ寢に堪へられなくなつて口添へする。長屋のかみさん等の氣樂連は、子供を負んぶしてまでも、梅見に出て行く時節になつても、自分はただ所天の持ち歸つた貯蓄が段々なくなつて行くのを胸算用するばかりだ。それを時々所天に注意しても、林は燒け酒ばかりあふつて、取り合はない。

『子も段々となくなつてしまつた。かねのなくなるなどア何でもない。今度ア手前とおれのなくなる

ばかしだ。』かういふ燒けッ腹の警句を云ひ出して、渠の口がほほ酒の爲めに眠れぼッたくなつてゐる。

林も心ではおほ心配に相違ないが、お島が話しかけると、『まだか』と云はないばかりに、赤筋立つた白目でにらみつける。お島はまた非常に氣がいら〳〵して來たが、所天に赤筋立つた白目でにらみつけられるのが如何にもおそろしい樣で、口さへ滅多に聽かれない。

『心細い、心細い』と、獨りでくよ〳〵するのが高じて、かの女のヒステリは內向的に暴威を振ひ出した。

林はまた時々繁のことを思ひ出して、その不埒を怒つて見るが、お島の年齡以上に痩せおとろへて、活氣の失せたその幽靈じみた姿が目の前に散らつくと、自分が三度の飯を喰はしてやらないかの如く世間に廣告してゐる樣な氣がして、非常に不愉快でたまらない。そして、自分もお島を置き去りにして、繁の樣にどこかへ逃出してしまはうかと考へることも度々だ。

偶々或夜、大屋から、お島が引張ッつてあつた、先月分の家賃を催促して來た。

『かしこまりました、いづれ明日』と云つて、お島は使ひを歸したらへ、恐る〳〵、所天が明るいうちから假り寢をしてゐるそばへ坐わつて、

『どう致しましょう』と尋ねると、林は直ぐ怒つて、

『どうするもないことだ　銀行のを出せ！』
『然しあれをもう出してゐちやア皆無くなつてしまうぢやア御座いませんか？』
『馬鹿野郎！出せと云やア出せ！なくなれば、饑え死ぬばかりだ。』
『そんなことを云つて——林の家はどうなります？』
『子もなけりやア、親もなくなる！絶やすがいい！』
『馬鹿をおツ仰い！』
『なに、馬鹿とはなんだ！』林は、かう云つて、假り寢の床から立ちあがつた。
お島も、もう、ぶたれるものかと思つて、立ちあがり、
『さア、ぶつならおぶちなさい』と、一生懸命に所天の手に武者振りついた。林はそれを振り拂つたかと思ふと、
『このしみツたれ婆々め！』かう云つて、そばの置きランプを取つてお島に投げつけた。
お島はこの上なくびツくりして、
『きやツ！』とばかり飛びのいたが、ランプは火鉢の角に當つて、こな微塵に碎け、疊の上に散らばつた石油全體が火となつた。
『火事だ！火事だ！』と、お島はそとの方を見て夢中にわめいたが、急に座蒲團をかぶせてもみ消さ

うとすると、火はかの女の兩手にのぼつて來る。それを拂ひ消さうとすると、また袖や襟に這ひあがつて來る。若し火の蛇があるとすれば、お島は丸でその熱した蛇を使ひそこねた蛇づかひの樣だ。

　林もわれながら自分の亂暴に呆きれて、臺どころへ馳せ行き、手桶の水をさげて來たが、お島はそれを見て、早口に聲の限りをしぼつて、

『水をかけちやアいけません！水をかけちやアいけません！』と泣き叫び、林のかけてゐた蒲團を取つて、火のうへにかぶせ、血まなこになつて、疊の火と自分のからだの火とを消しとめた。幸ひにも、大事に至らずに濟んだが、一時は、お島はまた針鼠の全身にあぶら火がついた樣であつた。

　長屋のものらは、もう、格子戸へがや／＼集つて來てゐたが、林が出て、息せき切つて、

『もう大丈夫だから、御安心なさい』と云ふと、安心して格子を離れて行くものもあるし、また二三人は見舞がてらあがり込んで來た。

　お島は兩手兩腕におほ燒けどをした上、胸や顔にも傷を受け、一つにはまたがツかりしたせいか、その場に氣絶してゐた。

『お島！お島！』と、林が呼び返してゐる間に、醫者をつれて來たものがある。その醫者の手によつて氣絶者は息を吹き返したので、傷の個處はすべて相應の手當てをほどこされて繃帶された。

いのちには別條なかつたが、病人は、それから四五日といふもの、非常な發熱で、いろんなうは言

を云つた。林は、そばで介抱しながら、そのうは言を聽き、取りとめのない間にも、お島が林の家を思ひまた繼子の爲めを心配してゐることが分り、自分がこれまで餘り女房につれなかつたのを殘念に思ひ。これからは以前と違つてもツと可愛がつてやらうといふ氣が出た。そして、やツぱし頼みになるのは自分の女房や子供だ、如何にえらい博士でも、他人は手頼りにならないと思ふ。

　お島が大分いい方に向つて來た頃を見計らつて、林はその枕もとで將來の方針に關する相談をした。

『おいらも。かう、いつまでも人のから受け合ひを頼みにして待つてるばかりでは、丸で居喰ひも同樣だ。博士も君が臺灣事件があるので世話がしにくいと、こないだ明言したくらゐだから、もう、こないだから考へてるが、ねえ――まだ百圓ばかり銀行に殘つてるのを元手にして、何か商賈を初めたらと、『それには、どうだい、ちいさい質屋の小がね貸しは？』

『そりやアいい考へです、ねえ』と、お島は嬉しさうに所天の顏を下から見あげて、

『わたしも、まだお話しなかつたんですが、さういふ風なことをしたいと思つたればこそ、元手になるべきおかねがなくなるのを心配したのです、わ。』

『それぢやア、願つたり、叶つたりで――お前さへよくなれば、直ぐにもその手筈にしよう、さ。それに、お前は多少品物の目利が出來るからね。』

『また、出來ないでも、やつてるうちにやア直き十分目が巧者になります、わ。』
『兎に角、さうと定めようよ。』
『それがいいですよ。』
かういふ話があつて間もなく、繁がひよツこり歸つて來た。林はわが子を責めるだけ責めたが、小僧がはりに、商賈の手助けになるものが入用だと思つてゐる場合だから、餘り極度までいじめ拔かないで、今度の計畫を話してやり、
『勘當するところだが、今回は許してやるかはりに、これから正氣になつて、小僧の仕事をするんだぞ』と、繁に命じた。
『それも』と、お島も病床から口を添へた、『末は誰れの爲めでもない、お前の爲めになるのだから。』
繁も、學校へ行けと云はれなくなつたのを幸ひだとして、おとなしく承知をして、兩親から逃亡中どうしてゐたと聞かれたに答へて、すべてのことを白狀したに據ると、渠はかたなを一本買つて、それを腰にさし、東海道筋を徒步して、鎌倉から江の島までもぶらつき、安宿にとまつたり、野宿をしたりした。そして、持つてゐた僅かのかねがなくなつてからは、面白半分に乞食の眞似をしたり、畑の物を盜んだりして喰つた。そして、畑どろ棒と見られて、追ツかけられたこともあるが、かたなを拔いて振りまはすと、誰れでもこわがつて、寄りつかなかつたさうだ。そして、多少景色の寫生を得

て歸つて來たのだ。
『畑どろ棒は罪が重いのを知つてるか』と、父に糺問され、繁はびツくりした目を丸くして、
『知つてませんでした。』
『まさか、かねは盗むまい、ね？』
『決してそんなことは致しません。』
兩親もそれは本統だらうと信用したが、兎に角、案外に大膽で亂暴である子の所業にはあツけに取られざるを得なかつた。
林は繁のおそろしい將來を戒めたが、繁の方ではまた父がランプを投げたと云ふ話しを母から聽かせられて、父の意外な氣質をおそろしく思つた。そして、ふたりは兎に角お島の枕もとの左右に侍して、お島を介抱した。
お島の神經が段々落ち付いて來るに從つて、その燒けどの痛みも直つて、もとの通り立ち働きが出來るからだになつたが、直らないのはその疵跡で――兩手はいづれも腕からさきが赤禿に禿げた上、腭から頰ツぺたにかけて、大きな引ツ釣りが出來たので、そのたださへ落ちつきがなくなり勝ちのきよと／＼づらに、一しほきよと／＼した樣子を添へた。世間では、もう、それが林の亂暴から出たことだと、輪に輪をかけて評判されてゐる。お島自身もさうとばかり思つてゐるのだが、所天の體面に

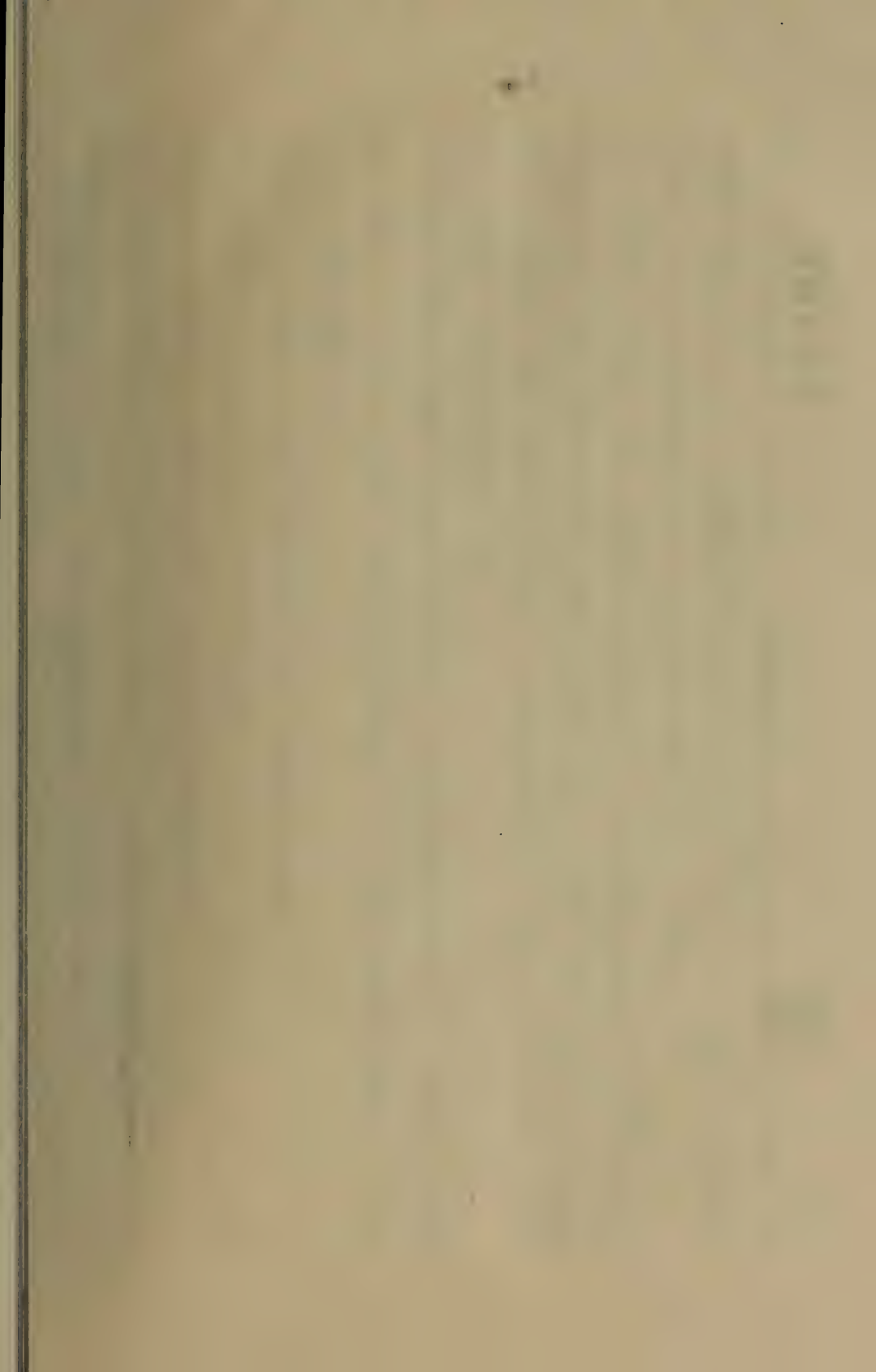
闘すると知つてゐるから、さうではなく、ただ家族の過失から起つたことだと辯解した。そして、お島は義理を忘れないつもりで、病氣恢復の禮に長屋中をまはつた。そのついでを以つて、今度質屋をするから、よろしく吹聽を頼むといふことを、嬉しさと誇り雜りで、云ひ布らした。
　すると長屋中のものは、丁度いい機會だと思つたのだらう、長屋全體の決議を以つて家主に迫り、林の家族をどこか餘所へ轉居させる樣に運動した。家主も止むことを得ず、林の家に來て、『どうか別な場所へ移轉して貰ひたいもんです、この家は親戚のものが這入ることになりましたから』と、體裁のいい立ち退き請求をした。
　林の家族は意外なのに驚き、その場では大變怒つて、不道理の請求をなじつたが、長屋全體の異議があると聞いて、おとなしく承知し、林新平の表札を撤去して、同じ區内の濱松町へ移轉して、いよいよ小さい質屋を開業した。
　そのあとで、長屋のかみさん共は林の家族をおほぴらに評判してゐた。
『あんな因業なおかみさんもない』と云ふものがあれば、
『あんなおほきな鼻たらし子息もありやアしない』とそしるものがある。
　然し長屋連の最も恐れたのは『ランプを投げた旦那』で、みんなが林をののしる言葉は一致してゐる。乃ちからうだ、

『あんな質屋へ持つて行く位なら、いツそ品物を火事場へうツちやつてしまう！』

――（明治四十五年）――

お島さ亭主

藝者になつた女

一

雷門からの電車が淺草橋の方へ一丁ばかり來た茶屋町の右がはに、鳥渡立派なけんさん屋がある。

間口三間の店さきには、鰹節やら、玉子やら、海苔やらを見場よくかざり付け、眞ン中にはおほきな鳥籠を据ゑてある。兩脇のがらす棚には、品物を入れる桐の箱、ボール箱、罐などを綺麗に並べ立ててある。

そこのおかみさんは年中樂に坐る暇もないと云はれる。と云ふのは、店が繁盛するばかりではない。眉を剃り落したおかみさんが出てゐなければ、その日のお客の數が少いのである。

名をお常と云ふが、客に對して愛嬌があり、なか／＼氣前がよく、その上、美人だ。仲店の紅梅焼店のおくめほどは評判がないが、――おくめは店の看板に貰はれてゐたのだ、――家つきの美人として、人々には大野屋の小町娘と歌はれてゐた。

町家のことだから、子供の時に、三味線や踊りの稽古にやられたが、性來好きであつたかして隨分上達した。そして獨り娘の器量自慢の兩親が世辭お上手の師匠におだてられ、娘を淺草の三社祭りに踊らせた時などには、若い衆どもにやんやと云はれたものである。十二三の頃からして、もう、評判になつてゐたのだ。

そこの事情を知らないものは、他に先んずるつもりで、早くから仲人を入れたり、直接に申し込みをしたりして、お常を嫁に貰はうとした。然しこの女は『家つきの獨り娘だから』と云ふ口實を以つて、いつも兩親はことわるのがお定り文句であつた。家には、實際、かの女より外に子はなかつたのである。

然しお常は大野屋の血統を受けてはゐなかつた。內狀を知つてゐる人々の話に據ると、觀音堂のそばに棄て兒であつたのを、先代の大野屋夫婦が拾つて來て、育てたと云ふうわさもある。それは兎も角、別に本當の親があるのは分つてゐる。實父は今も落語家の古株であるし、實母はまた大きな某酒屋の隱居の女房だ。

實父はもと道樂者で仕かたがなかつた。それが爲めに、一家の困窮がひどくなつて行くばかりであつた。餘り辛抱し切れないので、實母は自分から進んで離緣をして貰つた。すると、實父はどう云ふつてがあつたのか、道樂の結果にあり勝ちな落語家になつてしまつた。

落語家になつてから、直ぐ父は多少かねも儲かる様になつた。すると母の方ではまだ未練があつた上に、樂に暮せる様になつたらしいのを見たので、再び父と同棲することを申し込んだ。然し既に別な女が出來てゐて、その申し込みは退けられてしまつた。

その頃のことだらう、母は乳呑み兒をかかへては入仕事もしてゐられないし、また多少の燒け氣味もまじつて、その兒を棄てたか、遣つたかした。そのどちらであるとも、お常は子供の時には知らなかつた。養父母に當る先代夫婦はかの女に實際を語らなかつたばかりか、本當の獨り娘として可愛がつてゐた。

『あたい、棄て兒だツて、さう?』とは、お常が子供の時から不斷大野屋夫婦に根問ひした言葉だ。隣り近處のおばさん達がいつもさう云つて聽かせるからである。

その度毎に、養父母はお常を眞面目な顏つきで叱る樣な、なだめる樣な返事をした。殊に、かの女を可愛がつたのは養母の方であるから、養母はいつも同じ樣な云ひまぎらしを云つた――

『馬鹿をお云ひでないよ、つウちやん!棄て兒の樣なものなら、何でこんなに可愛がつてゐられます?』

『だツて、けふ、また隣りのおばさんもさう云つたもの。』

『隣り近處の人は、ね、お前さんが器量のいい兒であるんで、何か難癖をつけようとするのだよ。』

『だつて、ね、お母さん、あいた、幾度鏡を見てイても、どこもお母さんにも、お父さんにも似てゐるところがない、わ。』
『そりやア、お前さん、世間にはよく似ない兒があるものだアね。』
『そんな兒はきツと親不孝よ。』
お常はこんな心持ちで、暇さへあれば、鏡を見てばかり子供の時代を暮した。どこか兩親に似てゐるところが發見されないか知らんと思つてのことだが、兩親のおもかげはどこにも見付からなかつた。親はどちらも不の字付きの顏だが、自分はどの點に於ても缺點と云ふ缺點がない。
割合ひに色の白い顏は下ぶくれで、さう長い方ではなく、その全體を引き締める目は鈴の樣に圓く、ぱツちりとして、黑目勝ちの光があり、小鼻が開き氣味であるのも、鼻筋の格恰がいい高まり方で整へてゐる。その上、口は、笑つて見ると、どうしても、江戸ツ兒らしい愛嬌が兩方のゑくぼにまでよくあらはれる。また怒つた眞似をしても、どこかにぴんとした心意氣が出る。そして、『へん、何だ、べらんめえ！』から、われながらきやしやな腕を出して見て、笑つてる鏡の顏に見とれたことも稀れではない。
『つウちやん、つウちやん』と母に呼ばれたのが聽えてゐながら、わざと返事もしないで、二階に獨りで頸をすくめたこともある。

店には、お常より十四五才も年上の勝さんと云ふ番頭がゐた、勝次郎と云ふのだ。もとは醫者の子で、學問も可なり教へ込まれたのだが、父の醫者が失敗してから、この店に住み込むことになつた。商賣の道にかけても、なか／＼巧者であり、また男振りも十人並み以上であるから、大野屋夫婦は、お常の十二三才の頃から、勝次郎の叔父に證文を入れて、勝次郎を養子にして置いた。そして、お常も渠を

『兄さん、兄さん』と呼んでゐた。二人の間に最初の兒――女だ――が出來たのは、お常の十六才の時だ。それでも、『兄さん』の呼び名はやめない。

『なぜおれをあなたとか、何とか、亭主らしく呼ばないんだ』と、勝次郎がなじることもある。すると、

『あなたなんて云へるもんですか？呼び慣れて來たものを急に直すのは、何だかをかしいやうで。』

『何がをかしい？夫婦になつてしまつた以上は、さう直すのが本當だ。』

『さうお直しよ』と、養母もはたから口を出し、『勝さんの云ふのが尤もだから。』

『夫婦の關係が出來た上で、なほ兄さんなんて云ふのは、それこそ却つてをかしい。そら／＼しい。まさか、勤めの身ぢやアあるまいし。』

兄さんでもいいぢやアないか、藝者の樣で？』お常は微笑するばかりで、一向それを直さなかつ

た。

柳橋が近いので、かの女はその社會の流行などにはよく注意した。餘りお白粉などは付けないで、身なりを意氣に、意氣にとばかり苦心した。そして洗ひ髪のまま横縞のお召の單衣を素肌に着込んでゐるなどは、近處の人々の度々見たところだ。そして、また、勝次郎の前で、三味線の爪弾きをすることも度々ある。

『あのかみさんはきツと浮氣者だよ』と云ふ評判は廣まつてゐたから、近處の若い衆や出入りの鳶の者などが小當りに當つて見るが、振ひつきたい様な愛嬌にただ魅せられるばかりで、何等の手ごたへもなかつた。

二

勝次郎との間は至極圓滿で、いさかひ一つしたのを見たものがない。無論、勝次郎の方から、ぞツこん、まいつてゐたのは事實だ。兩親と亭主として、お常には仕たい放題にさせて置いたからでもあらう。芝居に行きたいと云へば芝居にやり、花見に行きたいと云へば花見にやり、衣物を買ひたいと云へば衣物を買つてやつた。衣物などは、流行を、流行をと追ふて行くので、いくら高い代價を拂つても、一年しか持たない。二年目には、それを賣り拂つて、また別なのに買ひ換へてしまう。

大野屋はさうおほきな金持ではなかつた。然し店の株とお常の評判と勝次郎の勉強とによつて、一家の女王を思ふまゝにさせるくらゐのことは出來た。かの女は實際貧乏といふことを知らない。然し人の貧乏くさいのを見ると、それが非常に嫌ひでならないのだ。そして、成るべくそんなところへは近づかない。

勝次郎には、その父が失敗した時、大變世話になつた須藤吉則といふ叔父がある。或小學校の校長で、いくら年を取つても、若いものに負けん氣の、極く磊落な男だ。この人だけには、お常も一歩ゆづつてゐて、餘り奇麗でもない家だが、そこへは度々遊びにも行き、叔父さん、叔母さんと云つて、よく親しんでゐる。

然しそれも、だ、自分の店や自分自身のことに就ては、いつもわれから愛嬌を振りまく樣に見えてゐるかの女が、一般の人には勿論、親類づき合をしてゐるものに對しても、お世辭と云ふものを云ひたくなかつた。たゞぺら／＼自分の云ひたいことを云ひ、自分の聽きたいことを聽いて、それでいつも話はおしまひになる。

『氣まま一方に育つた女だが、ひねくれないで面白い子だ』と云つて、叔父の吉則は自分の小い娘（芳子と云ふ）よりも多く可愛がつてゐる。渠にはお常が亭主持ち、また子持ちであると云ふことを思ひ浮べさせないほど、お常の言葉振りや態度に若々しい愛嬌があつた。かの女が度々須藤の家へ遊びに

行くのも、一つには、吉則が『お常、お常』と云つて、子の樣にもてなすからである。すると、或日のこと、かの女は吉則が校長會議があると云つて出かかつてゐるところへ行き合はした。渠は出來立ての七子(かいこ)の羽織を着てゐる。

『叔父(をぢ)さん、いい羽織が出來たの　ね』と、お常は直ぐそばへ寄つて見る。縫ひ方に變なところがあると思つたら、果して變なのだ。絹絲(きぬいと)が足りなかつたかして、足りないだけを木綿絲で縫つてある。

『このざまツたら、ない！なぜこんなしみツたれなことをしたんだらう？叔母さんも叔母さんだ、ねえ、こんないい物はうちで縫はないで、仕立屋へやつたらいいぢやアないか？』

『そんなおあしがないから、ね』と、叔母は和(やはら)かい返事で受けた。

『なけりやア、いツそ、羽織(はおり)も買はない方がいい。丸で臺なしだ。』

『それも尤もだ』と云つて、吉則はお常の來たのをほく／＼喜んでゐたが、時間が迫つたので、『ゆツくり遊んで行け』と命じて、出て行つた。その跡で、叔母が

『お常さん、お前の樣に何でもつけ／＼云ふものぢやないよ。うちだからいいものの、若し他人なら、直ぐおこつてしまう』とたしなめると、

『誰れだツていいぢやアありませんか、しみツたれはしみツたれだもの。』

叔母もこれには閉口して、ただ笑つてしまつた。お常の我を押し通すが、然し無邪氣な愛嬌には、

女でも魅せられてしまうのだ。然し叔母は、所天吉則がわが子よりもお常を愛するのだけは、いつも遺憾に思つてゐる。

『あなたはなぜわが子の芳子をもツと可愛がつてやりません？お常はよその家の子ではありませんか？よその子を可愛がるのもいいでしようが、それはもツと芳子を可愛がつた上のことになさいまし。』

『それが尤もだ』と、吉則は決して反對はしない。然し矢ツ張りお常の方が何となく可愛い樣だ。芳子はまだ小學校へ這入れない小娘だ。それから見ると、お常は、年の割りには若い意氣を持つてゐる吉則に取つて、まだしも話し相手になる。それがかの女の方を愛する一つの原因であらうとは、渠自身でも考へないことはない。

渠は然し自分の妻をも滿足させてやらなければならないと思ひ、丁度わが子が七つの祝ひに當つたのを幸ひ、芳子の母に芳子の新衣を拵へさせた。母はおほよろこびで、格子縞の八丈を見立てて來た。それが二枚重ねに仕立てあがると、直ぐ芳子にそれを着せて、母と共に大野屋へ行かせた。

『お母さん、二枚重ねだ、ねえ』と、芳子は嬉しがつた。

『ああ、これなら、お常さんもけちはつけまいよ』と、母は調子を合はせた。

然し大野屋へ行くと、襟つきの絹物を着たお常が出て來て、直ぐそのけちをつけたのである。

『けち臭い、ねえ――子供には、もツと派手ながらを着せたらいいでしよう？こんなじみな物ぢやア、

田舎ツ兒の樣だ、わ。』

それからと云ふもの、お常の叔母がお常に對する惡感はます／＼根がはびこる樣になつた。

三

お常と勝次郎との間に出來た女の子お竹が五歳になつた時、大野屋の主人が亡くなつた。おふくろと勝次郎とは歎くだけ歎いた。然しお常は左ほど悲しくもなかつたらしい。かの女は、物心がついて以來、泣くことが殆どなかつたのである。そして、そんな悲しい時でも、自分ばかりは『あれが本當のお父さんであつたのか知らん』と云ふ樣なことを考へた。若し違つてゐたら、跡に殘つてゐるお母さんも自分のお母さんではなくなる。そして、かう思ふと、何だか知らん、おふくろに對する感情も、以前とは違つて、うとましくなつて來た

然しそんなこともかの女には大したことではなかつた。勝次郎との間は、表面では、ます／＼親密になるばかりなのを見て、おふくろは蔭で獨り心細く思ひ出した。

『家名の儀は、常二十歳に相成候はば、前約の通り相讓り申すべく候』と云ふ約定を勝次郎の叔父須藤吉則に入れてあつたが、その二十歳の時、丁度養父が亡くなつたので、一言の苦情もなく、店は全くお常と勝次郎との思ふままにやつて行けるから、お常も一層張り合が出來たのである。

勝次郎は相場にも手を出してゐるが、幸ひにも、さう損をしたことがない。そして、渠の留守には、お常が獨りで店の小僧等をあつかひ、相變らず甲斐〴〵しく客に對してゐる。子供には乳母をつけてあり、臺どころには氣の利いた女中がゐて、おふくろが渠等を監督してゐるから、その方にも心配はない。

お常の胸の空には、暗い雲の一片だも浮かんだことは殆どないのである。かねが儲かるのが樂しみではない、儲かつたかねで仕たい放題が出來るのが樂しみなのだ。且、器量はよし、かねもあるし、一廉のかみさんになり澄ましてからは、近處隣りのものらも、お常が子供であつた時に云つた樣なけちも云はず、尊敬こそすれ、少しもおろそかにする樣な態度がない。男も女も、その店さきを通りすがつて、お常に苦勞の苦の字もない樣な聲を以つて言葉をかけられるのを名譽の樣に思つてゐる。

店の直ぐ奥は六疊敷きの茶の間で、店との間はがらす障子を以つて仕切つてある。それと並んで、椽がはを境に、臺どころがある。茶の間の奥に、鳥渡した庭をはさんで、土藏が建つてゐる。この土藏と兩隣りが建で込んでゐるとの爲めに、茶の間が薄暗いので、天井を四角に切り拔いて、あかり取りが出來てゐる。そこは、夜になれば、小僧等を寢かせるところで、おふくろと女中と乳母と子供とは土藏の二階が寢間になつてゐる。そして、主人夫婦は店の二階に寢るのである。

雨など降つて、店を早くしまはせた時などは、勝次郎はお常と二人、店の二階で、ひツそりと小酒

宴を開くことがある。そして、お常の爪弾きに乘つて、勝次郎の歌ふ聲がそとを通る人に聽える時もある。勝次郎もなか〳〵隅へは置けない人間で、藝者の出る席では、男振りがいいのと話上手なのとで隨分もてた。

柳橋に好きなのがあると云ふことも分つてゐるし、たまには、とまつて來ることもあるが、お常は平氣で、燒く樣なことはしない。男としては、當り前だぐらゐに思つてゐた。

『こんないいおかみさんがあるのに、ねえ、勝さんも浮氣な――』と云ふ樣なことをお世辭かた〴〵聽かせるものがあつても、勝次郎はただ笑つてゐるし、お常はまたよそごとの樣に聽き流す。二人の樣子をはたで見てゐるものが、却つて、この餘り淡白なのをもどかしく思つた。

『然しまた、云ふに云はれない樂みが二人の間にあるのだらう』と、かげでは云ひ合つてゐるものがある。然し、實際に於ては、そんな秘密な樂しみが特別に存在してゐる樣でもないと感づいたのは、さすがに、身づからも心細くなつてゐるおふくろである。かの女は自分がお常の餘り淡白な態度に飽き足らなく思ふ心持ちを勝次郎にも移して見たのだ。或日、お常が子供を連れて、上野の花見から須藤へまわつた留守に、勝次郎に向ひ、

『あの子は子供の時からあツさりし過ぎてゐたが、今でもその氣性はそのままの樣に見える。お前さん、少し立ち入つたことを聽く樣だが、夫婦の仲はよく行つてゐるのかい？』

『さア』と、勝次郎はあたまに手を乘せたが、わたしにも本當はよく分らないのです。よく行つてゐるとも申されますし、またよく行かないとも云へます。あの子は、第一、二人の仲に出來た子供を少しも可愛がりません。それから、わたしとの仲で御座いますが、わたしを本當に思つて呉れるのか、どうかそこが爲渡判然致しません。お母さんには申し兼ますが、實は、わたし、と、また兩手をあたまへ持つて行つたが、直ぐ膝の上におろして、『お母さんには濟みませんが、時々とまつて來ることも御座います。』

『そりやア男の働きだから、わたしも知つてゐるが、默つてゐます。』

『どうも濟みません』と、勝次郎はあたまを下げた。『それを、若し夫婦の情が充分あるとすりやア、お常はもツと燒くなり、何なりする筈ですが、一向そんな樣子が見えません。そりやア、商賣の方にはなかなか働いてくれます。また十露盤上のことなどもよく分つてゐます。利口で、はきはきして、愛嬌のある、いいおかみさんです。然し自分の子に對し、亭主に對して、本當の情愛があるか、どうか、どうも分らないところが御座います。』

『さう云はれると、こちらにも、思ひ當ることがあります。子供の時から、あの子は、こちらで可愛がつてやるばかりで、――それも可愛いのだから、いくら可愛がつても、こちらの損になるわけぢやアないが、――あの子の方から、親しんで來たことは、これまでにさうない。お父さんが死んだ時に

も、お前さんは却つてよく泣いて呉れたが、あの子は餘り悲しさうな風も見せなかつた。ただすらすらと育つて、ただすら〳〵と延びて行くばかりで。』

『お母さんもさう思はれましよう――ただ氣まま、と申しても惡い氣ままでは御座いませんが、それが增長して、自分ばかりのことしか思はない樣です。わたしもこちらからばかり可愛がつてゐて、向ふからは少しもその報酬が取れない氣が致してなりませんのです。』

『お互ひにさうか、ねえ――』

『現に、けふは子供を連れて、須藤さんへまわりました。然し子供が可愛いのではない――生きた人形を持て遊ぶてな心持ちで、いい衣物を着せたり、脫がせたりするのが面白いのです。』

この對話は茶の間でこツそりあつたことだ。その間、小僧は店で忙しさうに客の買つた海苔や玉子の鑵やら、桐箱に、家號を印刷した紙を張つて、客の出す風呂敷などに包んでやつてゐた。そとを往來する電車の上には、春だから、花見の客が多く乘つてゐた。

そこへ、お常は子供の手を引いて歸つて來た。博多に繻子の晝夜帶を締め、絲織の衣物の上には、縫ひ紋の黑縮緬の半纏を引ツかけ、紹縮緬の前掛けには甲斐絹の裏がついてゐる。

『ただ今』と云つてかの女があがつて來る後ろから、お竹は母をかけ拔けて先づ茶の間に這入り、

『おばアちやん、これ買つて貰つた』と、京人形に縮緬の衣物を着せたのをさし出す。

『おう、いいのだ、ねえ』と、おふくろが手に取つて見るのを子供は嬉しさうに見てゐる。
『人形にされてる子がまた人形をおもちやにするんだ』と、勝次郎は皮肉な顔を、然し笑ひながら、お常の方に向ける。
『また同じ樣なお箱が初まつた』と、お常は鳥渡亭主を見返つた切り、うるさいと云はないばかりで、紙入と煙草入れとをほうり出し、おふくろと勝次郎とがさし挿んでゐる長火鉢の脇へ坐わる。『竹ちやん、その人形を持つて、婆やの方へお行き。』
『もう、お前のおもちやは入らないんか』と、勝次郎はお常に云つた。
お常は、然し、それには返事もしない。
『須藤さんでは、皆達者か』と、おふくろに問はれ、
『ああ、皆達者だよ――だけど、相變らずくすんでゐて、ねえ――あれぢやア、叔父さんが可愛さうだ、わ、ね。』
『また、叔母さんの惡口か？』
『叔母さんはあたいを嫌ひなんだ。だから、あたい、わざと行つてやるんだ。叔父さんが面白い人だから――』
叔父の吉則も亦お常に引かれて大野屋へ度々やつて來る。そして、御馳走にでもなつて歸宅し、

『お常は貴物が上手だよ』と話すと、
『そりやア、おかねのあるにまかせて、出しを惜しまないからです』と、叔母は自分の所天の迂濶を冷笑したこともある。
『叔母さんは一向、近頃、來て呉れない、ね』と、おふくろが云ふ。未亡人になつたおふくろは、家では、近頃、何だか自分ばかり疎外されてゐる樣な氣になつて來て、そとの人を話相手に欲しいのである。ところが、お常はそんなことは少しも氣がつかない。
『なアに、いやな者ア來なくツていい、さ』と、鼻であしらふ樣にして、勝次郎の持つてゐる煙管をひツたくる樣に取つて、それに煙草をついで喫ふ。そこへ、
『おかみさん鳥渡顏を貸して貰ひたい』と、勝手口から臺どころへ這入つて來たものがある。先代から火事の時の用意に手なつけてある鳶仲間の一人だ。お常が出て行くと、少しかねを貸して貰ひたいと云ふのだ。
『また博打に負けたのだらう』と、あたまからけなしつけた。
『どうも、度々濟みませんが』と、もみ手をしてゐる。
『現金なんか、しみツたれに、とツとく樣なことアうちぢやアしないよ』と、少し考へてゐたが、板の間に羽織を脫ぎ、帶をしう〳〵云はせて解き出した。面倒臭いと云ふ樣に、手早く解いて、それをも

かたはらにうツちやり、また衣物を脱いで、白縮緬に墨繪を書いた長繻袢一つになつた。そして、脫いだ衣物をまるめて、鳶の者の鼻さきへほうり出し、『これでも曲げて、間に合はして置く、さ。』『どうも濟みません』と云つてそれを受け取り、歸つて行くものの後ろ姿を見送りながら、いまくしさうに、

『意久地なしだ、ねえ――さきのから返すんだよ』と、あびせかけた。それから、そのままで、もとの坐にもどり、わざとちやんと坐わつて、自分の身を見まわし、

『このざまツたら、ない、ね』と微笑する。そして、ほうり出してある紙入れを引き寄せ、それから懷中鏡を出して、じツとのぞき込んだ。

こんなことは珍らしくもないので、うちのものは何とも云はないのだ。然し、けふは、立ち入つた問題が起つてゐたところであるから、勝次郎はそれとなく子供にかこつけて聽いて見た、

『お前は、實際、可愛いと思ふことがあるか、たとへば、お竹に對してもだ？』

『可愛い時は可愛い、さ。可愛くない時は、厭だ。』かう答へた切り、つと立ちあがり、ぬぎ棄てた羽織と帶とを持つて來いと女中に命じて、自分は二階へあがつて行つた。

四

お常は東京に生れて、東京に育つた女だ。東京以外には、横濱へ鳥渡行つたことがある切り、どこも知らない。無論、郊外の菖蒲とか、桃とか、櫻とか、つつじとか云ふものを見に行つたことはある。然し人の姿や衣物などばかりに氣がついてしまつて、花や風景などの記憶な殘して來ない。

かの女は旅行などには全く趣味を持たない。よしんば持つてゐたとしても、店のことと芝居のこととが氣になつて、してゐることが出來ない性分だ。かの女が年々待ち受ける屋外の樂しみは、上野や向島の花見、隅田川の船遊びぐらゐだ。然しそれも、花を見ようが、月を見ようが、人が『いい、ね』と云へば、自分も『いい、ね』と云ふに過ぎない。

かの女の趣味もしくは生活の範圍は、不斷、淺草觀音、上野公園、三越、白木屋、伊豫紋、鴈清、歌舞伎座、明治座などに限られてゐる。そして、家にゐてはかねの儲かるのが樂しみだ。そして、また、人に『おかみさん、おかみさん』と云つて拜み倒され、泣き付かれると、また何でもそのものにしてやるのが、餘ほどえらい樣に思つてゐる。

かの女には、あたまを惱まして考へると云ふ樣なことは殆どなかつた。衣物を拵へるにしても、柳橋の意氣なのがちやんと流行の標準になつてゐるから、あれをああして、これをかうしてと云ふ樣な心配は入らないで出來る。盆、暮のおつかひ物も、つき合ひさきの格式に從つて、そこに相當な年々の家例があるので、それを行つて行けばいい。習慣と流行とを追ふのは、かの女には、特色のない摸倣

ではなく、寧ろそれが、かの女の樣なあかるい、故障のない性格をそのまゝに活躍させる生命であつた。かの女には、洗練された習慣と流行とがその性格にひツたりと添つてゐたのだ。
若しかの女をしてこと更らに考へさせる動機もしくは材料があつたとすれば、それは自分が棄て見か、本當の家つきかと云ふことだ。
『あたい、棄て兒だツて、さう？』この疑問に思ひ及ぶと、いつもかの女の心には、一片の暗雲が浮ばないではゐられなかつた。而も、自分に子供が出來たり、病氣をしたり、おやぢが死んだり、所天に愛情の如何を聽かれたりする每に、その暗雲が密になつて來た。つまり、年の進むに從つて、この疑問が根を張つて來たのだ。
『あたい、棄て兒だツて――』と、おふくろに尋ねても云つて呉れないので、段々勝次郞にばかり聽く樣になつた。それが丁度子供が母に物をねだる樣にうるさい時もあつた。そんな時には、勝次郞もたまり切れず、
『おれに聽いたツて、分るものか、うるさい』と云ひ放つのだ。すると、
『ぢやア、あたいにも、「お前はおれに本當の愛情があるか、どう」なんてお聽きでないよ』と、お常はさも憎らしさうに所天の口眞似までして云ひ返す。
『は、は、は』と、勝次郞は笑つてしまう。そして、大した衝突もなく濟んで來た。

ところが、或日、冬のことであつた。みぞれの降る寒い晝間、見すぼらしい婆アさんが獨り尋ねて來た。破れた傘を提げて、低い下駄をぺた〳〵引きずつてゐるが、衣物に羽織だけは、木綿は木綿だが、破れてもゐないのを着てゐる。

『いらツしやい』と、お常が丁度店に出てゐたので云つたが、お客さんではなかつたので、そんな貧乏臭い風を見るのはいやだと云はないばかりにして、引ツ込んでしまつた。

來た婆アさんはおふくろを呼び出し、何かこそ〳〵話をしてゐたが、やがて裏口へまわつて、茶の間へあがつた。

すると、茶の間に引ツ込んでゐたお常はまたそこを逃げ出し、二階へあがらうとするので、おふくろは

『鳥渡お待ち』と呼びとめ、お常を火鉢の前に坐わらせた、そして、『實は、是までお前さんにやア何も云はなかつたが、ね、これが』と、ずツと下座におづ〳〵控へてゐる婆アさんをゆび指し、『お前さんの實のお母さんだよ。』

『へい!』から、お常は云つて、驚いた樣にじろ〳〵その方を見てゐたが、『ぢやア、お前さんがあたいを觀音さんへ棄てたの?』と、こんな見すぼらしいお婆アさんでは、自分を棄てたのも當り前であつたらうと思ふ。かの女には、遠い過去と現在との區別がない。自分が一圖に棄て兒だと思へば、き

のふにも棄てられた樣な氣持ちになつた。
『飛んでもない』と、婆アさんが答へたのを受け取り、おふくろが實際これ〳〵だと說明した。それに據ると、お常の生れた年に、一生つき合はない約束で、お常を貰ひ受けた。その後、かの女の實母は、今うち明けた話によると、いろんな浮沈があつた。そして今は非常に困つてゐる。かうやつて來たのを、貧乏だから助けて貰ひたいと云ふ樣に取られては困るが、今一度娘に名のらせて貰ひたいのだ。
先代が死んだのを聽き知つて、もしまた未亡人に若しものことがあつたら、もう、自分から名のつて出ても、娘だけでは信じて吳れまいと思ふので、今のうちに會はして置いて吳れろと。
最初の約束とは違ふが、大きくなつた娘に會ひたいのは尤ものことだし、また大野屋のおふくろ自身も、この頃、特に自分の年相應の話相手がなく、寂しがつてゐるところだから、お常が却つて進まない樣な風があるにも拘らず、おふくろから進んで名乘り合はさせた。そしておふくろとお常とが一緖になつてお常の實母を火鉢のそばに來させる。そして、お常と實母との問答になつた。
『何て云ふの、名は？』
『時と云ひます。』
『お時さん？――そして、お父さんもゐるの？』

『話し家をしてるさうです。』
『さう、一緒にゐないの?』と、顔をしがめる。お常は芝居好きだが、落語は嫌ひだ。
『はい。お前さんを手離す鳥渡前に別れた切りです。』
『お前さんは今何をしてて?』
『人仕事をしたり、ボール箱を張つたりしてゐます。』
『ぢやア、うちのも張つて貰つたらいい』と、お常は養母の顔を見る。お時に對しては、まだ母だと云ふ感じが出なかつた。
『お母さんにそんなことが頼めるものか、ね』と、養母は遠慮した様子だ。』
『どう致しまして——何でも、御用をさせて下されば、致します。』
よく見ると、如何にも、お時の顔には、お常が自分で鏡に寫す顔と似たところがある。口つきや口もとや、品のあるところは全くそツくりだ。然しお時は顔の形が少し長い、そしてお常はどちらかと云ふと圓い方だ。そんな違つたところをお父さんの方に似てゐるのだ、な、と、お常は思ふ。
父にも會つて見たい様な氣が直ぐ起つたが、また一方には、この母でさへ二度と再び會ひたくない様な氣もする。話し家とか、貧乏人とか云ふことは、お常が思つて見ても、ぞツとするほどいやで溜らない。

然し、兎に角、夕飯時だから、御膳を喰べて歸れとお時を引きとめ、母と思ふ樣な、また思はない樣な、ただ曖昧なもて爲しをして歸してしまつた。その跡で、おふくろはお常に向ひ、
『つウちやん。お前さんの樣に考へもなく、ぺら〳〵おしやべりをしてしまうものはない、ね。たとへお母さんであらうが、つき合つてゐなかつたのだから、どんな素性の人間だか實は分りやアしないよ。うか〳〵と大事な店の用事を頼めたものか、ね?』
『あたいだツて』と、お常も冷淡に、『本氣で云つたんぢやアないさ。あんなお母さんなら、いやだアね。』
『いやでも、好きでも、お母さんはお母さんに違ひないのだから、つき合つて見た上で、段々うちのことをして貰ふ樣にすればいい。』
『それよりやア、もう、いツそ、來て貰はない方がいい、さ――棄て兒なら、その親がどこにゐるだらうと考へてたことだが、ああ、いやだ、いやだ!分つて見りやア、話し家や貧乏人だ。』
『どうせ自分の兒を呉れるくらゐだもの。』
『呉れたんぢやアないだらう――棄てたんだ!』
『いえ、呉れたのです。』
『いいえ、棄てたんに決まつてる!』

この時から、お常は全くおふくろの言葉を信用しなくなつた。そして實母だ、實母だと云ひ聽かされてゐたものが案の定さうでなかつたのが分ると同時に、自分の實母は自分を棄て兒にしたのに違ひないと云ふ信念、寧ろ迷信が、家の方角や日の吉凶を判じると同じ樣に、心の中に於てその威をたくましくする樣になつて來た。

五

お常は、それからと云ふもの、自分の心の持ち方が一變した。それまでの自分の方向は明るい方にばかり向いてゐた。ところが、それからは、自分の周圍が何となく薄暗い樣になつて來た。

晴天にそとへ出ても、太陽の光が僅か茶の間のあかり取りからさして來るほどにしか見えないで、自分の包まれてゐる衣物にも、暗い影がつき添つてゐる樣な氣持ちだ。

お時は時々やつて來るが、どうしても、それが自分のお母さんであるとは思へない。また、思ふことは思つても、お母さんとは呼びたくない。それと同時に、また、大野屋のおふくろをもこれまでお母さんと呼んでゐたのは、自分がだまされてゐたのだと思ふと、いよ〱以つてうとましくなる。

また、亭主の勝次郎を養子だと思つて、お常は家つき娘の權威を振つてゐた。然し自分も、亦捨はれた子であつたのだから、當り前だと思つてゐた權威の沽券が下つてしまつた樣な氣がして、自分が

殆ど支配してゐた大野屋の店なるものが急に他人の物であるかの樣に思はれる。

おふくろと勝次郎とお時とが親しげに話してゐるところなどを見ると、お常は三人が申し合はせて自分ばかり疎外してゐるのだと思ひ取つた。そして、『あの畜生め！あたいを棄てやがつて』と思ふと、お時が初めて尋ねて來た時、自分が『お前さんがあたいを棄てたの』と聽いたのに對して、『飛んでもない』と白ばツくれた言葉が思ひ出される。

『あの時のお時の樣子をもツとよく氣をつけて見て置けばよかつた。その口つきか顏つきかに、きツと變な胡麻化しがあつたらう――あたいも隨分うツかりしてイたんだ、ねえ』と獨り言に云つた。かう人が惡い筈ではなかつたがと、かの女は自分で自分を返り見るやうになつた。

然しそれだけ、また、われからじれツたいことも甚しくなつた。子供をしかることが多くなり、勝次郎と衝突する樣になり、またおふくろを泣かせることも出來た。

急にお常が變つたので、最も心配し出したのはおふくろだ。わが手のうちの玉とも思つてゐたお常には疎んぜられ、自分が充分愛してゐる孫にはその母がひどく當るし、勝次郎はお常の機嫌ばかり取つてゐるに忙しいので、その養母を返り見るひまがない。あれやこれやの氣苦勞で、おふくろは獨りでその身を思ひ痩せに痩せる樣になつた。

おふくろの話し相手はお時ばかりだ。然しお時を嫌つてゐるお常の意を憚つて、成るべくかの女に

は知らさないやうに遊びに來させた。そして、話し合ふのは奥の土藏の二階に決つてゐた。お常はそれを知つてはゐたが、知らない風をしてゐることが多い。

お時には野心があつた。娘を說き落して、多少の資本を出させ、自分も別に何かの店でも出して、樂な生活を送りたいのだ。然しお常が餘り冷淡なので、取りつく島がない。で、おふくろにそれをにほはせることもあるが、おふくろは初めから警戒してゐたのだから、

『娘の氣性が氣性ですから、ねえ』と云ふ樣な、いい加減の挨拶をして置くのだ。お時はただ御馳走にあづかつたり、多少の小使錢を貰つたりするばかりにとどまつてゐた。

お常の不愉快は常につのるばかりで、それを忘れようとして、外出することが多くなつた。それも、須藤の叔父さんところや、淺草公園ではなかなか滿足出來ず、以前よりも多く龜清や芝居見物に行く樣になつた。そして時々は、分獨りで店の二階に引ツ込んで三味線を彈いてゐる。

商賣に不熱心になつた爲め、店の評判が惡くなつた上、物入りがかさんで來たのであるから、勝次郎もなかなかうかうかしてゐられない。一つ、どか儲けをしなければと思つたのが冒險で、いつもより奮發して張つた相場が失敗した。それからどう云ふものか、その方も儲けよりも損の方が度かさなるのだ。渠はお常に對してそれを一々知らせない。それが爲めに、渠とかの女との間には、また、兩方から隔てが出來たのを、兩方でさとる樣になつた。

或日、お常は不愉快の餘り、また芝居にでも行かうと、二階を降りて來た。そして、四角に切つた天井のあかり取りを仰ぎ、

『暗い部屋だ、ねえ』と云ふ。

『何も不斷とは違つてやアしない茶の間だよ』と、そこにゐたおふくろが答へる。實際、不斷だけのあかりは通つてゐた。

『暗いから、暗いと云ふんです』と、お常は慳貪に云つて、そこにゐた子供――白ネルのしめしたのでくびを卷いてゐた――に向ひ、『さア、竹ちやん、お芝に居に行かう。』

『竹ちやんは風だよ』と、おふくろがとめる。

『風だツて、芝居に行きやア直らア、ね。』

『大したことぢやアない樣だが、けふは、およしよ。』

『なアに、心配はない、さ。』

『行きたけりやア、お前さんだけお行きな。』

『獨りぢやア、寂しいから。』

勝次郎も店から這入つて來て、お竹だけを引きとめようとしたが、お常は聽かないでつれて行つた。それが原因で、お竹は八歲で死んでしまつた。お常は初めて悲しいと云ふことを身にしみて經驗した

が、子その物に對してと云ふよりも、寧ろ一層自分を物晤ぐするこの感じを早く自分から取り除けたい悲しみであつた。

その通夜の時、お時も來てゐて、初めてお常と多少しんみりした話をかはした。大野屋のおふくろは勞れて寢部屋に行き、勝次郎も酒に醉つて假り寢をしてゐた時だ。眞の親子は、他に氣がねなしで、相向つた。父の話しも出た。そして、お時が、『向ふに女が出來てゐなけりやア、もう一度一緒になつてもいいが』と云ふ樣なことを語ると、

『ぢやア、お母さんはまだ未練があるの、ね』と、お常は冷かす。

『女獨りの暮しだから、隨分苦勞をして來たよ』と、少しは補助して呉れてもいいではないかと云ふことをほのめかすと、

『貧乏ぐらゐいやな物はない』と答へた切り、然し、助けてやらうとも、何とも受け合はない。

『つウちやん夫婦がどちらも器量がいいから、この子も』と、お時は亡兒の横たはつてゐる方に向き、『なか〳〵いい子であつた。どうせ死ぬくらゐなら一度柳橋あたりで藝者にでもしたら、なか〳〵賣れツ兒になつたらうに、ねえ、惜しいことをしたよ。』

『本當に藝者にやアよかつた、ねえ』と、お常も答へて、自分の器量に思ひ及んだ。

六

可愛がつてゐた孫が亡くなつたのに落膽してか、大野屋のお袋も間もなく跡を追つて行つた。お時は同じ年輩の話し相手がなくなつた上、お常夫婦には何となく遠慮があるので、大野屋の敷居は滅多に跨がない。然し一たび跨いで、お常に會へば、必らず藝者の面白い生活狀態を語つて、かの女の心を動かさうとした。どうせ大野屋へ入り込むことも、またそこから補助を仰ぐ見込みも、共にないとあきらめたので、わが實子の器量に口をつけ、藝者にでもして、一緒に樂な暮しをして見たいと巧み出した。

然し決してそれと明らかに云ふのではない。たとへ大野屋のおふくろも亡くなつたとは云へ、どうもお常が自分の娘である樣に自分をもてなして呉れないから、今度ははツきりと云つて見よう、云つて見ようとは思ひながら、お常の前に出ると、どうもおぢけがつく。さうかと云つて、娘の浮氣ツぽいところがあるのは、いつか物になりさうだと心ではねらつてゐた。

お常もお時の心を感づかないのではない。また、子供の時から、藝者といふものに一度はなつて見たいと云ふ氣が起らなかつたのではない。然しお時が自分を一度棄てた上に、また自分を喰ひ物にしようとするのを憎いと思ふ。

『あのお時は實にしどい女です。あたいを藝者にでも賣つたらと思つてるらしい。』かう云ふ話をお常は勝次郎にしたことがある。すると、勝次郎は寧ろ嬉しさうにして、

『それほどに見込まれる器量なら、お前も仕合せぢやアないか?』まさか、實際に起ることとは思はないから、『なつて見たら、どうか、ね』などとおだてた。

『なつて見ようか』と、お常はふとその氣になりかねないこともある。すると、勝次郎が

『さう、さ、ね――そして、おれが毎日會ひに行く旦那か?』

『兄さんの樣なおぢイさんぢやア、つまらない、さ。』

『へい、そんなことまで考へてゐるんか』と、勝次郎は自分の女房が、如何に無邪氣過ぎ、如何に意氣過ぎるとは云へ、實際に勤めなどさせてはたまるものかと思ふ。

『よしんば、あたい、藝者になつても、あんなお時なんかの喰ひ物になつてしまうのはいやだ、わ、ね。』

『おれはなほ更らお前を人の喰ひ物にしてしまうのはいやだ。』

『いやといやと掛けて、なアに』と、お常は死んだお竹がよく云つてゐた掛け算の口調を眞似て、にこにこした顏を勝次郎に向ける。勝次郎は、お竹は死んでも、その母親はお竹と同じ子供だと云ふ樣な氣がした。そして、

『矢ツ張り大野屋の娘、さ』と云ふ答案を出した。

『では、棄て見だ、わ、ね。』

『馬鹿ア云ふなと云ふに。』

勝次郎も自分の女房を棄て見とは思ひたくない、また女房にもさう思はせたくない。然しお常の迷信の根はなか〳〵抜けない。棄て見――大野屋――貧乏な母親。から考へて來ると、自分の周圍と今の自分とがどうしても不滿足になつて仕やうがない。近頃、かねまわりのよくないのは、無論、一つの大原因である。

かの女は『棄で見だツて、さう?』を餘り繰り返さなくなつた代りに、『藝者になつて見よう』をうるさく云ふ樣になつた、勝次郎は自分の女房が氣の落ち付かない原因はお時の來るのにあると見て、お時を非常に嫌ふ樣になつた。

渠は結婚當時とは違つて、段々年を取り、店も段々自分の思ふままになるに從つて、堅氣になつてゐたのだ。好きなものは女房ばかりで、女房の爲めなら、何でもしてやつた。そして、その何でもしてやつた女房の姿を、外にゐても、思ひ浮べて樂しみにしてゐた。

ところが、この頃では、女房を思ひ出すたんびに、お時をも思ひ出すのだ。お時のいやな影は家にゐても、そとを歩いても、また相場に出かけてゐても、自分につき添つてゐる。可愛い女房を見ると、

そこに嫉ひなお時がゐる。好きな女房を思ひ出すと、直ぐまたお時のいやな影が見える。それがまた夢にまで襲つて來て、しまひには苦しくなつて來た。

『お時は魔物だ』と、苦しまぎれに考へ出してからは、どうしても、その姿も影も見えないところへ大野屋の店を移してしまひたくなつた。そして近頃相場に損だらけなのも、きツと、この魔物のせいに違ひないと思つた。

お常にはまだ云つてないが、實は、勝次郎に大分借金が出來てゐるのである。それを取り返さうとして浅草觀音や聖天さまへは朝夕願をかけに行くし、家へは神主を招ぎ寄せて、いろんな厄拂ひをして貰つてゐる。そして方角や吉凶のことを一層注意する樣になつた。然し、それでも、一向追ツ付かないのである。

『どうしても、あの形をそなへた魔物がついてゐるからに違ひない』と見定めをつけ、何ほどかの金を與へて、お時の出入りをさしとめてしまつた。

それでも、なほ、お常の『藝者になつて見ようか』はやまない。そしてお時の出入りしてゐた時は、左ほどにも戀しくなかつたのが、出入りしなくなつてからは、お常の實母に對する戀しさが段々出て來たのである。それも、だ、母としてよりは、寧ろ陽氣で、意氣な話をすることが出來る話し相手が柳橋のそばにゐると思ふからである。

お常は、一度、亡くなつた子供をつれて、お時の家を音づれ、『これが竹ちやんのおばアさんだよ』と紹介してやつたことがある。その歸りに、お竹は母親に向ひ、

『おばアさんて、穢いところにゐるの、ね』と云つた。

『本當だ、ねえ』と、お常は笑つて、子供でもさう思ふのだもの、二度とあんなところへは行かないと決心した。

名ばかりは意氣な柳橋だが、お時の家は細い横丁の長屋住ひで、一間半の間口を、一間は臺どころに取られ、殘り半間が入り口になつてゐる。そして茶の間がすなはち寢屋の一間しかない家だ。而も疊は古びて破れたままだし、壁は張り紙がほぐれて、土が落ちてゐる。便所も穢くして置くのか、そのにほひが話してゐるお常の鼻について、それが最も氣になつてたまらなかつた。

お常はそれを思ひ出しても、ぞツとするのだ。然しそこへ、不思議にも、また行きたくなつた。勝次郎には須藤さんへ行くと云つて置いて、雷門から電車を反對の方向へ乘つた。そして丁度お時の在宅してゐるところへ行つて、

『お母さん』と、初めてなつかしい呼びかけをして、お常はあがつて行くと、

『珍らしい、ねえ、つウちやん』と、お時も嬉しさうに迎へる。

いろんな世間話があつた末、お常が

『あたい、一度藝者になつて見たい、わ』と云ひ出す。
『なつてお見よ、賣れツ子になるに決つてらア、ね』と、お時は待ち受けてゐたと云はないばかりにほほゑんだ。『けんざん屋なんかしてイたつて、左ほどの儲けもなからうから、ねえ。』
『もとはあつたが、ねえ、今ぢやア、つまらないの。』
『さうだらうよ。それに、勝さんがあんな年寄りぢやア、ねえ。』
『本當よ』と、聲に出して笑ひながら、『あたい、子供の時から、何だか自分の亭主だと思へないんだもの。』
『そりやア、もツともだよ。――藝者になるなら、お母さんが世話してあげてもいいが、ね、そんなことは近處だからよく知つてるから。』
『けども、ねえ、今は駄目よ、お中に子がゐるんだもの。』
『ぢやア、生れてからでもよからう。その子もまたお酌に仕立てあげる、さ。』
『それも面白からうが、ねえ、兄さんが渡すか、どうだか？』
『あんな、人の出入りをとめる樣なものア、とても、さ、碌なことアありやアしないよ。』
『可愛さうに。棄てられたり、恨まれたりすりやアわけアない、ね。』から、お常が云つた時には、自分が『棄て見だツて』は忘れてゐた。然しお時の方が却つて鳥渡胸にこたへた。お常にはわが子を手

離したのが棄てたのと同じ意味に思はれてゐると、お時は思つてゐるからである。

七

お常の二度目の子供――女でなく、男であつた――が口立て了つた時、いよ〳〵かの女の勤めに出る決心がついた。氣にしてゐたのは乳だが、成るべく吞まさない樣にして乾してしまつたから、その形もさう大きくならないで濟んだ。

『あたい、いよ〳〵藝者になつてよ』と、お常が嬉しさうに勝次郎に告げると、渠は今更らの如くびツくりして、ただ

『どうして』とばかり、暫くお常の顏を見守つてゐた。かの女には、近來屢々見せてゐた曇りのかげもない。年中剃り落して薄靑い跡ばかりであつた眉も濃く生えて、立派な地藏眉になつてゐる。そして、矢ツ張り顋ひつきたい樣に可愛い樣子だ。

『なつて見たいから、なるのよ。』

『お前、本氣でそんなことを云ふのかい？』

『ええ、本氣ですとも！』

『ぢやア、赤ん坊はどうする？』

『欲しけりやア、あげます、わ。』
『店はどうだ?』
『勝手におしなさいよ。』
『お前の物ぢやアないか?』
『あたいの物なら、それもあげます。』
『おれをも棄てて行くのか?』
『ええ、棄てて行きます。』
『仕やうのない女だ!拾年も一緒に添つてゐたおれが可愛くないか?』
『あたい、可愛いと思つたことはない、わ。』
『お前、本當に本氣か?』
『本當に本氣だから、云ふんぢやアないか』と、お常は少しじれた氣味だ。『分らない、ねえ!』
勝次郎は當惑してしまつた。これまでは、お常の云ふことを何でも直ぐ通してやつてゐたが、このことだけは然しどうしても通してやられない。
『馬鹿々々しいことは置くがいい』と云つて見たが、お常が餘り素直に、正直に、その云ひ分を通さうとするので、勝次郎は怒ることも出來ず、笑ふことも出來ない。

『ぢやア、おれが餘り年を取つてゐるのが厭になつたのだ、な？』
『さうよ。』
『それでも、これまで可愛がつてゐたのが不足でもあるまい？』
『けども、あたいを可愛がるのも、ほかの人を可愛がるのも、違ひはないぢやアないか？』
『そりやア、ないかも知れん、さ。然しお前とかうして一緒にゐたのぢやアないか？』
『これから一緒にゐなけりやアいい、さ。』
『困つた女だ、なア！ぢやア、おれはおれとして、子供が可愛さうぢやアないか？』
『何も生れて來なくツてもいいのに生れて來たんだから、別に可愛さうでもありません、わ。』
『何の爲めに藝者なんかになるんだ？』
『何の爲めでもない、なつて見たいからなるの、さ。』
餘り冷淡な而も明確な答案に接して、勝次郎はその麗はしい、肌白のお常を棄て兒でもなく、貰ひ兒でもなく、實は、大理石で出來た彫刻の女神であつたのではないかと思つた。そしてその女神をお時と云ふ魔神がとう〳〵奪つて行くのだ、な、と思つた。
そして須藤の叔父さんを呼んで來て、勝次郎はお常を說き伏せて貰はうとした。かの女は吉則の云ふことだけはよく用ゐてゐたことを知つてゐるからである。吉則は自分の小學校の生徒へ教へる樣な

口扮で、諄々とお常に說き聽かせた。別に家計が困つてゐると云ふわけでもないのに、そんな下等なものになる必要がないこと。そんな社會へは、それこそお常の嫌ひな貧乏人の娘が這入るのだと云ふこと。よしんば、這入らなければならないにしても、かの女は年が行き過ぎてゐること。二十五歳は、もう、そろ〱、藝者が泥足を洗ひかける時であること。こんなことを云つて聽かせても、その甲斐はなかつた。

『叔父さん』と、お常は相變らず明らかに、『これまではあなたのお言葉をよく聽いてゐましたが、今度だけは、初めて自分で自分の考へ通りやつて見たいのだから、もう、何も云はないで置いて下さい。』

大野屋を貰つてしまうのだから、勝次郎が赤ん坊も預つて置くことになり、お常はその所天と子供とに別れた。夫婦別れの夜は、喧嘩をしてゐた間柄でも、必らず二人とも一晩中泣き通すものだと云ふが、お常にはそんなことは少しもなかつた。そして考へ通り藝者になつた。然し年を取り過ぎてゐると云ふわけで、いい場所へ出られなかつた。お時が大輪車で奔走したのだが、柳橋も行けず、赤坂も行けず、芳町も行けず、四谷の鹽町から出た。

藝名はお常を小常と變へて附けた。

八

場所が場所だけに、年增藝者でもよく賣れた。顏立ちのいいのと、都會育ちで垢拔けがしてゐるのと、氣前がいいのとが呼び物になつた。

『小常さんは、新米(しんまい)だのに、あたい達の領分を攻め取つてゐる、わ――あれくらゐはやりやす、死んでも、亡念は殘らない、わ、ね』と、場ずゑ育ちの若い藝者などはうらやんでゐる。すると、また、古株(ふるかぶ)の姉さん連には、

『やツと藝者になれたと思つて、あの澄し込み方を御覽よ。見ツともない！あたいなんぞア見ただけで冷あせが出らア、ね』などと冷笑するものもある。

中には、また、うわべだけかの女(ちよ)の御機嫌を取るつもりで、誰さんはかう云つた、彼れさんはああ云つたと、云ひつけ口をするものもある。

『何を云つたツて、かまうもんかい』と、小常は聽き流す風ではあるか、同業者間の冷笑や惡口(あくこう)やおべんちやらに接することが多くなれば多くなるほど、かの女の單純な神經が段々過敏になつて行つた。

『大野屋のおかみさん』で通つてゐた時は、かの女をはたから拘束(こうそく)するものはなかつたので、かの女とその生活とはただすら〱と延びるばかりであつた。ただ思ひ通りに行なつてゐればよかつたの

だ。然し一たび勤めの身となつては、さうは行かない。

雇ひ主に氣がねをしなければならない。胸に針を持つた仲間同志に氣がねをしなければならない。お客にはその好き嫌ひに拘らず、或程度まで機嫌を取らなければならない。けんざん屋へ買ひ物に來るお客を持て爲す樣な呑氣なことでは、到底間に合はないことが分つて來る。その上に、こちらから好いたらしい客も、向ふからは左ほどでないので、自分が勤めに出さへすれば、どんな男でもあやつつてやることが出來ようと思つてゐた自負心がくぢかれてしまつた。また、實母のお時からは、金のむしんが意外に度かさなるのだ。かの女は、急に、自分の周圍と狀態とが變つた爲めに——實は、それほどには思つてゐなかつた——勢ひ、いら〳〵しないわけには行かなくなつた。

慣れない氣苦勞の爲めに、からだは瘦せ、以前はいい加減に太つてゐた頰の肉も少し落ちる樣になり、もとは年よりも三つ四つ若く見えてゐた顏が、鏡に向ふと、自分にも地がねを出して來た樣に思はれる。そしてそれだけ、爭はれない年齡といふものがうゐ〳〵しい心持ちを蠶食してしまつたのだと思つたが、それが身を賣つてから、僅かに三四ヶ月のうちにだから、かの女自身も驚いた。

『今晩は』と、化粧姿で裾を引きながら這入つて行くと、多少呼び慣れた客の口には、小常のあだ姿が、然し、一層あだツぽく見える樣になつた。ぱツちりした目に憂ひを帶びて、引き締つた口もとに微笑を漏らす樣子が、つぶし島田の髱の後れ毛に靡でられる靑白い顏に浮んで、客の心は品よくとろ

けさせられるのである。

　さうなつてから、勝次郎は一度鹽町に行き、或料理屋へ小常を呼んだ。もとの女房が見あげて凄い藝者になつたのには感心したが、もう、もとの樣にうゐ／＼しい大理石の女神に接することは出來なかつた。

『お前も變つたものだ、なア！』

『變つたでしよう』とばかり、二人は暫く言葉は出ない。渠には、赤ん坊同樣に物をねだつてゐたお常から、一足飛びにこの凄い女になつたのだと思へるから、どうも、不思議でたまらない。『あの魔物のお時が乘りうつツたのに違ひない』と思へば、お時の目がお常のに似てゐるのではなく、お常の目がお時のに似て來た樣だ。つまり、表情の無邪氣がどこかへ行つてしまつて、海の底の樣に沈んだ瞳には、悲しい樣な、恨めしい樣な、而も人ずれのした樣な底光が出てゐる。

　勝次郎は、忘れてゐたお時の生き靈がまた目の前に襲つて來た樣に思つて、小常の凄いところに充分打たれた時は、身の毛もよだつほどぞツとした。然し遠慮勝ちに酌をして貰ひながら、小常から、赤ん坊は達者でゐるかとか、須藤の叔父さんはどうしてゐるとか、自分の關係のあるものの話になると、矢ツ張り元の女房としか思はれない。

『瘦せたぢやアないか』と、通り一遍の藝者なら、手でも握つてやるところを、さうはしないで、い

たはる様に云ふと、
『苦勞があるから、ねえ』と、よく〳〵こんな勤めはいやになつたと云ふ様な吐息をつく。
『だから、よせと云つたぢやアないか』と、たしなめると、
『いくら云つたツて、兄さんの言葉ぢやア値うちがないよ。』
『なつて見てから、分つたと云ふのか？』
『まア、そんなことでしよう。』
『それで、何か得でもしたことがあるか？』
『そりやア、ありますとも！考へて御覧なさい。あたいが三味線をおぼえたのは、死んだお母さんのお蔭でしよう。あたいが氣隨氣儘にしてゐられたのは、兄さんの働きでしよう。あたいが藝者になつたのは、あの生きてゐるお母さんのさしがねもあつたでしよう。そんなことなんかみな別々にあたいの何の役にも立つてやアしない。』
『立つてないことはない、さ。芝居をみたり、うまい物を喰つたり、いい衣物を着たりしただけでも結構ぢやアないか？それに、三味線をおぼえてゐなかつたら、藝者も出來るわけぢやアなかつた。』
『そんなことなんか、何でもない、さ。死んだ物に、三味線も衣物も芝居もおいしい物も入らなかつた。』

『然し現在お前は生きてるぢやアないか？』

『生きてるのア生れ變つた人間です、わ。』

『どうして？』

『それがあたいの得したところ、さ。今度といふ今度、あたいはあたいと云ふものが分つた。苦勞したお蔭でしよう。棄て兒なら、あたいがあたいを棄てたんだ。貰ひツ子なら、あたいがあたいを貰つたんだ。今のあたいが男を持つなら、親や世間から抑しつけられたのはいやだ――あたいの心から惚れたのを取つてやる。』

『ぢやア、元のよしみで、おれに惚れて、もう一度歸つて來ないか、子供もあることだから？』

『いやなこツた！あたいを死んだ者として可愛がつたり、死んだ者のお腹から出た子供がゐたりするところへ歸るもんか？』

『何もお前は死人ぢやアなかつた。』

『死人も同樣ぢやアないか？苦勞といふいのちがなかつたから。』

『そりやア、苦勞などしないでもよかつたんだ。』

『よかつたのは、あたいを殺してゐたん、さ。と、かう、或お客に云はれたよ。』

『お前、そんなに苦勞がしたいのか？』

『したくはないけれど、したから、この得(とく)があつたのだらうぢやアないか？』
『おれだツて、そんなら、苦勞はある、さ。』
『あるなら、自分でするがいい、さ。』
勝次郎は手に持つた猪口の中に涙を二三滴落した。然しお常はそれを見て、
『兄さんはもとからのろい男であつたよ』とばかり、絶えず微笑(びせう)を漏らしてゐても、つんとして、勝次郎にそれ以上を云はせる餘地を與へない。
『お母さんは達者(たつしや)か？』
『あれにも困るから、もう、寄せつけない樣にしようと思つてるの。』
こんなことで相別(あひわか)れてしまつた。

九

お時は娘が藝者になつたので、兎に角、生活狀態が變つて、もとゐた横丁を出て、近處の通りへ移轉し、そこで鳥渡した小間物屋を開いた。然し急に衣食住に贅澤(ぜいたく)をし出したので、店のあがり高では立つて行かない。娘にむしんを云ふことが段々度かさなつて來た。それも、一圓が二圓になり、五圓が十圓になると云ふわけだ。

けふも亦娘の財布をしぼらうとして、その住み込んでゐる吾妻へ出かけた。然し度々のことであるから、われながら、御神燈の下をくぐるのが氣が引ける樣だ。

『鳥渡つウちやんを呼んで下さい』と云つて、上へはあがらうとしない。

午前のことで、お常は寢卷きに細帶をしめた姿で、玄關わきの小部屋に寢ころんで、小說を讀みながら、うつら〳〵してゐたが、お時の聲を聽いて、

『ちよツ』と舌うちをして、われ知らず眉根を引きつらせた。お白粉の剝げた素顏は、睡眠不足の爲めに靑く見えてゐる。

『まだ眠りが足りないから、けふは會ひたくない。歸つてお呉れ！』

『そんなことを云はないで、鳥渡顏を出してお呉れ、な。』

『動きたくもないんだ。』

『鳥渡だからよ。』

『いやだよ！』

『鳥渡だからよ。』

『いやだと云つたらいやだい』と、投げだしてゐる足で疊を蹴る音をさせる。姉さんの權幕に恐れて、ほかの子や女中もお時にあがれとは云はない。お時は困つたと云ふ樣子でつツ立つてゐる。餘り相手

にされないので、お時が自分で、
『それぢやア、お母さんにする挨拶として、餘りひどいぢやアないか』と云ふと、
『お母さん、お母さんて、よして貰はう！來てたんだから、あたいはお時さんの子ぢやアない！』
『ぢやア、誰れの子だい、まさか、木の股から生れやアしまいに？』
『あたいはあたいの子だい！』
『分らないにも程があらう？』
『分つてらい！また金を貰ひに來たんだらう？』
『僅か二三圓でいいのだから。』
『やらない、やらない。もう、一生やらないから、來ないでもいい！』
『お前さんが藝者になつたのも、わたしが世話したから出來たんぢやなアいか？』
『そのお禮は疾に濟んでしまつた。可愛さうだと思つて、持て爲してゐりやア、いい氣になつてつけあがつて來るんだ。あたいはあたいの苦勞で儲ける金だよ。あつても、もう、やらない！』
お常は、もと、自分の懷の現金や身のまはりの物をよく人に投げ出して、その心意氣を自分も誇りとし、人も亦讃めてゐた。然しそれは實際自分の物ではなかつた。また、自分の物であつたとしても、死んだも同樣の人間の物であつた。それを投げ出したのを誇つたり、讃めたりしたのが、今では、を

かしくツてならない。そして藝者になつても、『お時の喰ひ物にはならない』と云つた言葉を漸くこの頃になつて斷行することが出來る樣になつたのである。

お常は思ひ切つて、お時を會はないで歸してしまつた。

『ああ、せい／＼した』と聲に出した。そして、小說の開いてあるところを讀み返してゐたが、いつの間にかまた寢入つてしまつた。

一〇

お常は一度須藤の家を音づれたが、吉則に眞面目くさつたへぼ說法を聽かされたのがいやになつて、それッ切り顏を見せたことがない。

勝次郎は自分が棄てられた女に會ひに行つた馬鹿者だと人々から冷笑されたので、またとは會ひに行かない代り、燒けを起して放蕩に耽り、とう／＼大野屋をつぶしてしまつた。

お時は娘に寄せつけられない樣になつてから、その小間物店を閉ぢてしまひ、世話人があつたのを幸ひ、今の酒屋の隱居の女房になつたのだ。お常の母だけに、ちやんとしてゐれば、年寄りのかみさんとしては、人品もさう惡く見えない。

聽くところに據ると、お常は、その後、自分がうち込んでゐた男の爲めに、出來た金をみんな自由

にされてしまひ、自分も亦棄てられた。そして、今では、藝者をやめて、或博奕うちの親分と一緒になつてゐるさうだ。

叔父さんの吉則は、お常が最近に訪ねて來た時の、不斷着(ふだんぎ)に黒縮緬の羽織を引ッかけた姿を思ひ出しては、

『あの子もどうしてゐるか、なア』と云ひ暮してゐる。

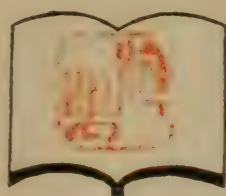
——(明治四十五年)——

泡鳴全集第二卷終

大正十年四月十五日印刷
大正十年四月二十日發行

泡鳴全集第二卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衛

發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社代表者
中塚榮次郎

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目三番地
井波修次郎

發行所
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）